沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第68集

首　里　城　跡

― 淑順門西地区・奉神門埋甕地区発掘調査報告書―

平成25(2013)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第68集

首　里　城　跡

―淑順門西地区・奉神門埋甕地区発掘調査報告書―

平成25（2013）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、沖縄県立埋蔵文化財センターが国営沖縄記念公園事務所より委託を受けて実施した、平成22年度首里城跡発掘調査の成果をまとめたものです。

調査地点は、正殿の北方でその裏門的な淑順門の西側に当たる淑順門西地区、正殿の前庭である御庭に至る奉神門前に据えられた埋甕に当たる奉神門埋甕地区の２ヶ所で行いました。

淑順門西地区においては、戦前まで存在していた内郭城壁、近代のトイレの可能性がある礎石建物跡、近世以前の石積・石敷などを確認しました。内郭城壁は15世紀後半以降に造られたこと、この内郭城壁の下層に古い石積が見つかり14世紀後半に遡ることなどが分かりました。特に注目すべきこととして、13世紀後半～14世紀前半の遺物包含層を確認し、現時点では首里城跡で最も古い人々の痕跡が見つかりました。この時期は、遠くは今帰仁城跡や島添大里城跡、近くは浦添城跡などの沖縄県内の各地で大型グスクが営まれており、首里城跡もその造営がこの時期に遡る可能性が出てきました。

奉神門埋甕地区では、既に過去の調査で確認されていた埋甕遺構を復元整備するために、より詳細な調査を行いました。それにより、この甕は高さ約85㎝の大型のもので、出土した銭貨などから18世紀中頃に石畳を整備する際に据えられたことが分かりました。文献史料を参考にすると、最も新しく奉神門を改修したとされる1754（尚穆３）年の可能性が高いと考えています。

この成果を元に、沖縄県の歴史・文化を理解する資料として活用されるとともに、地域における文化財の保存活用のために役立てば幸いです。

最後に、様々な御指導・御助言・御協力を戴きました諸機関及び関係各位に心から感謝申し上げます。

２０１３（平成２５）年３月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　　崎濱　文秀

例　言

1．本報告書は、沖縄県那覇市首里当蔵町に所在する「史跡　首里城跡」における国営沖縄記念公園首里城地区の整備に際して実施した、淑順門西地区及び奉神門埋甕地区の遺構確認発掘調査及び資料整理の成果をまとめたものである。

2．本発掘調査及び資料整理業務は、内閣府沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所が沖縄県と委託契約を交わし、沖縄県教育委員会の指導のもと、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。

3．調査期間は、発掘作業を平成22年9月1日より平成23年2月25日まで実施し、資料整理作業・発掘調査報告作成を平成24年度に実施した。

4．本書に掲載した遺構図の座標軸は国土座標軸（第ＸＶ座標系）を使用し、その座標値は日本測地系である。ちなみに、報告書抄録の緯度経度については世界測地系に変換して算出している。

5．現地調査及び資料整理に際して、下記の諸氏・機関に協力・指導・助言を戴いた（敬称略、団体五十音順）。

森達也（愛知県陶磁資料館）
福島正和（公財　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）
柴田圭子（財　愛媛県埋蔵文化財調査センター）
大橋康二（佐賀県立九州陶磁資料館）
亀井明徳（専修大学）
向井亙（東南アジア考古学会）
西銘　章（西原高校）
米延仁志（鳴門教育大学）
田中克子（福岡市教育委員会）
㈱真南風
樋泉岳二（早稲田大学）
具志堅亮（天城町教育委員会）
宮里信勇・佐伯信之（浦添市教育委員会）
木村幾太郎（九州考古学会）
高宮広土・千田寛之（札幌大学）
黒住耐二（千葉県立中央博物館）
島弘・玉城安明・仲宗根啓
（那覇市教育委員会）
石井龍太（日本学術振興会）
矢島律子（町田市立博物館）
沓名貴彦（山梨県立博物館）

6．本書の編集は、当センター職員の協力を得て、瀬戸哲也が行った。執筆は、下記以外は瀬戸が行った。

第3章第4節1～4　土器…具志堅清大　沖縄産陶器・本土産陶磁器…新垣力
タイ・ベトナム・韓半島産陶磁器…木下正樹　金属製品・銭貨…池原悠貴
第5章第2節…黒住耐二
第5章第3節…樋泉岳二
第5章第4節…高宮広土・千田寛之
第5章第5節…米延仁志

7．土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修「新版標準土色帖」2009年度版を使用している。土質は肉眼で粒径を観察し、地質学によるウエント・ワース法（那須・趙2003、文化庁2010）で表現している。

8．本書に掲載した写真は、発掘調査状況を瀬戸哲也、遺物を矢船章浩・伊佐えりなが撮影した。

9．発掘調査で得られた遺物及び実測図・写真等の記録は、全て沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

目　次

序
例言
第１章　経緯と経過 …… 1
　第１節　調査の経緯 …… 1
　第２節　調査体制 …… 1
　第３節　調査の経過 …… 2
第２章　位置と環境 …… 4
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 5
　第３節　調査区の概況 …… 7
第３章　淑順門西地区　調査の方法と成果 …… 11
　第１節　調査の方法 …… 11
　第２節　層序 …… 11
　第３節　遺構 …… 27
　　１.内郭城壁(石積み１・４・15・17) …… 29
　　２.内郭城壁下層石積み（石積み５・９・10・19、Ⅳ－４・５層) …… 38
　　３.内郭城壁関連遺構（石積み２・３・６～８・11～13・16、石敷１) …… 42
　　４.礎石建物跡遺構群（礎石、埋甕２、石組溝、石積み14) …… 50
　第４節　遺物 …… 51
　　１.遺物の概要・分類 …… 51
　　①中国産陶磁器 …… 51　⑨金属製品 …… 66
　　②タイ産陶磁器 …… 58　⑩銭貨 …… 69
　　③ベトナム産陶器 …… 60　⑪骨製品 …… 71
　　④韓半島産陶磁器 …… 60　⑫石器・石製品 …… 71
　　⑤本土産陶磁器 …… 60　⑬円盤状製品 …… 71
　　⑥産地不明陶器 …… 60　⑭玉類 …… 71
　　⑦土器・土製品 …… 60　⑮近代陶磁器 …… 71
　　⑧沖縄産陶器 …… 62
　　２.北区出土遺物 …… 72　４.地区不明出土遺物 …… 111
　　３.南区出土遺物 …… 94　５.瓦・塼・漆喰 …… 130
第４章　奉神門埋甕地区　調査の方法と成果 …… 176
　第１節　調査の方法 …… 176
　第２節　層序・遺構 …… 177
　第３節　遺物 …… 178
第５章　自然遺物の報告・分析 …… 185
　第１節　自然遺物のサンプリング方法 …… 185
　第２節　首里城跡淑順門西地区および奉神門埋甕地区の発掘調査で得られた貝類遺体 …… 186
　第３節　首里城跡淑順門西地区から出土した脊椎動物遺体 …… 201
　第４節　首里城跡淑順門西地区から出土した植物遺体について …… 236
　第５節　首里城跡淑順門西地区から出土した植物遺体の放射性炭素年代測定 …… 244
第６章　総括 …… 245
　第１節　淑順門西地区のまとめ …… 245
　第２節　奉神門埋甕地区のまとめ …… 251
付　章　淑順門東内郭城壁石積み工事立会 …… 252
参考・引用文献 …… 253
図版 …… 257
報告書抄録 …… 329

挿図目次

第1図 沖縄本島の位置 …… 4
第2図 首里城跡の位置及び周辺の遺跡 …… 6
第3図 横内家資料平面図 …… 8
第4図 平成22年度調査区域図（横内家資料平面図） …… 8
第5図 旧首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図（明治期） …… 9
第6図「旧首里城図」（昭和6年頃） …… 9
第7図「旧琉球大学校舎配置図」（1950～1984年） …… 10
第8図 首里城公園現状図（平成22年） …… 10
第9図 淑順門西地区グリッド設定図 …… 13
第10図 淑順門西地区土層堆積範囲図 …… 14
第11図 淑順門西地区層序対照図 …… 15
第12図 Fライン断面図 …… 16
第13図 Hライン断面図 …… 17
第14図 A～Eライン断面位置図 …… 20
第15図 A・B・Eライン断面図 …… 21
第16図 C・Dライン断面図 …… 23
第17図 淑順門西地区全体平面図 …… 25
第18図 J・K・Lライン断面図 …… 28
第19図 石積み1立面図（1） …… 30
第20図 石積み1立面図（2） …… 31
第21図 石積み1立面図（3） …… 32
第22図 石積み1立面図（4） …… 34
第23図 石積み15立面図・Iライン断面図 …… 35
第24図 石積み4立面、Gライン・石積み5断面図 …… 39
第25図 石積み2・3立面図 …… 43
第26図 石積み6～10立面図 …… 44
第27図 Mライン断面図 …… 45
第28図 礎石建物跡遺構群平面・断面図 …… 48
第29図 埋甕3平面・断面図 …… 49
第30図 北区Ⅰ層出土遺物（1） …… 73
第31図 北区Ⅰ層出土遺物（2） …… 74
第32図 北区Ⅳ－1層出土遺物（1） …… 75
第33図 北区Ⅳ－1層出土遺物（2） …… 76
第34図 北区Ⅳ－1層出土遺物（3） …… 77
第35図 北区Ⅳ－2層出土遺物（1） …… 79
第36図 北区Ⅳ－2層出土遺物（2） …… 80
第37図 北区Ⅳ－2層出土遺物（3） …… 81
第38図 北区Ⅳ－2層出土遺物（4） …… 82
第39図 北区Ⅳ－2層出土遺物（5） …… 83
第40図 北区Ⅳ－2層出土遺物（6） …… 84
第41図 北区Ⅳ－2層出土遺物（7） …… 85
第42図 北区Ⅳ－2層出土遺物（8） …… 86
第43図 北区Ⅳ－3層出土遺物（1） …… 88
第44図 北区Ⅳ－3層出土遺物（2） …… 89
第45図 北区Ⅳ－3’層出土遺物 …… 90
第46図 北区Ⅳ－4層出土遺物（1） …… 91
第47図 北区Ⅳ－4層出土遺物（2） …… 92
第48図 北区Ⅳ－5層出土遺物 …… 93
第49図 南区Ⅰ層出土遺物（1） …… 95
第50図 南区Ⅰ層出土遺物（2） …… 96
第51図 南区Ⅱ層出土遺物（1） …… 97
第52図 南区Ⅱ層出土遺物（2） …… 98
第53図 南区Ⅱ層出土遺物（3） …… 99
第54図 南区Ⅱ層出土遺物（4） …… 100
第55図 南区Ⅱ層出土遺物（5） …… 101
第56図 南区Ⅱ層出土遺物（6） …… 102
第57図 南区Ⅲ層出土遺物（1） …… 104
第58図 南区Ⅲ層出土遺物（2） …… 105
第59図 南区Ⅳ層出土遺物（1） …… 106
第60図 南区Ⅳ層出土遺物（2） …… 107
第61図 南区Ⅳ層出土遺物（3） …… 108
第62図 南区Ⅳ層出土遺物（4） …… 109
第63図 淑順門西地区出土地不明遺物 …… 111
第64図 瓦1（高麗系瓦） …… 133
第65図 瓦2（高麗系瓦） …… 134
第66図 瓦3（大和系瓦） …… 135
第67図 瓦4（大和系瓦） …… 136
第68図 瓦5（大和系瓦） …… 137
第69図 瓦6（大和系瓦） …… 138
第70図 瓦7（明朝系瓦） …… 148
第71図 瓦8（明朝系瓦） …… 149
第72図 瓦9（明朝系瓦） …… 150
第73図 瓦10（明朝系瓦） …… 151
第74図 瓦11（明朝系瓦） …… 152
第75図 瓦12（明朝系瓦） …… 153
第76図 瓦13（明朝系瓦） …… 154
第77図 瓦14（明朝系瓦） …… 155
第78図 瓦15（明朝系瓦） …… 156
第79図 瓦16（明朝系瓦） …… 157
第80図 瓦17（明朝系瓦） …… 158
第81図 瓦18（明朝系瓦） …… 159
第82図 瓦19（明朝系瓦、喜名窯系） …… 160
第83図 瓦20（明朝系瓦、喜名窯系） …… 161
第84図 瓦21（明朝系瓦、喜名窯系） …… 162
第85図 瓦22（明朝系瓦、喜名窯系） …… 163
第86図 塼1 …… 170
第87図 塼2 …… 171
第88図 塼3 …… 172
第89図 漆喰1 …… 173
第90図 漆喰2 …… 174
第91図 昭和63年度調査奉神門地区平面図 …… 176
第92図 今回調査対象埋甕昭和63年度調査平面図 …… 177
第93図 奉神門埋甕地区平面・断面図 …… 179
第94図 奉神門埋甕地区埋甕（1） …… 182
第95図 奉神門埋甕地区埋甕（2） …… 183
第96図 奉神門埋甕地区出土遺物 …… 184
第97図 淑順門西地区における食用貝類遺体の種組成変化 …… 190
第98図 淑順門西地区における食用貝類遺体の生息場所類型組成変化 …… 190
第99図 首里城跡淑順門西地区から採集された脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の層位別出土数（NISP） …… 203
第100図 首里城跡淑順門西地区から採集された脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の組成 …… 203
第101図 首里城跡淑順門西地区から採集された魚類遺体（ピックアップ資料）の組成（NISP比） …… 205
第102図 首里城跡淑順門西地区から採集された鳥獣類遺体（ピックアップ資料）の組成（NISP比） …… 205
第103図 首里城跡淑順門西地区から採集された魚類遺体（水洗選別2.5㎜資料）の組成（NISP比） …… 206
第104図 首里城跡淑順門西地区から採集された魚類遺体（水洗選別1㎜資料）の組成（NISP比） …… 206
第105図 首里城跡淑順門西地区から採集された魚類遺体（水洗選別2.5㎜・1㎜資料）の組成（各メッシュの分析率による補正値の合計．NISP比） …… 206

第 106 図首里城跡淑順門西地区から採集された魚類遺体（水洗選別 2.5㎜・1㎜資料）の組成（各メッシュの分析率による補正値から求めた MNI 比）……206
第 107 図首里城跡淑順門西地区出土の植物遺体 1……237
第 108 図首里城跡淑順門西地区出土の植物遺体 2……238
第 109 図 淑順門西地区遺構時期区分図……246
第 110 図 淑順門西地区周辺遺構合成図……248
第 111 図 横内家資料平面図との重ね図……249
第 112 図「旧首里城図（阪谷図）」との重ね図……250
第 113 図 淑順門東内郭城壁石積み工事立会採集遺物……252

写真目次

写真 1　H11F ライン断面……18
写真 2　H ライン断面……18
写真 3　A ライン北側断面……19
写真 4　B ライン西側断面……21
写真 5　F11 南　東壁断面……23
写真 6　C ライン断面……23
写真 7　B ライン東側断面……24
写真 8　石積み 1　E10 付近……30
写真 9　石積み 1　F11 北付近……30
写真 10 石積み 1　F11 南付近……33
写真 11 石積み 1　G11 北付近……33
写真 12 石積み 1　G11 南付近……33
写真 13 石積み 1　H10 北付近……33
写真 14 石積み 1 北側裏込……33
写真 15 石積み 1　I 10 付近……35
写真 16 石積み 1　H10 南付近……36
写真 17 石積み 1　H10 南・I 10 付近……36
写真 18 石積み 1 南側裏込……36
写真 19 石積み 4・5 切り合い……37
写真 20 石積み 4 南側……37
写真 21 石積み 4　H 9 付近……37
写真 22 石積み 4　G 9 南付近……37
写真 23 石積み 4　G 9 北側……37
写真 24 石積み 4 北側……37
写真 25 石積み 5……38
写真 26　G ライン北側断面……39
写真 27　G ライン南側断面……39
写真 28　石積み 1 北側……41
写真 29　石積み 3 南側……41
写真 30　石積み 3……41
写真 31　石積み 2・3……41
写真 32　石積み 2……41
写真 33　淑順門西地区北区……46
写真 34　石敷 1……46
写真 35　石積み 8……46
写真 36　石積み 16 下層断面……47
写真 37　石積み 16 付近遺物出土状況……47
写真 38　礎石建物跡遺構群……47
写真 39　明治期の奉神門前……178
写真 40　土壌水洗状況……185
写真 41　淑順門西地区貝類遺体 1　巻貝……197
写真 42　淑順門西地区貝類遺体 2　巻貝……198
写真 43　淑順門西地区貝類遺体 3　二枚貝……199
写真 44　奉神門埋甕地区出土貝類遺体……200
写真 45　脊椎動物遺体 1……231
写真 46　脊椎動物遺体 2……232
写真 47　脊椎動物遺体 3……233
写真 48　脊椎動物遺体 4……234
写真 49　脊椎動物遺体 5……235
写真 50　淑順門東内郭城壁石積み工事立会状況……252

表目次

第 1 表 淑順門西地区層序対照表……12
第 2 表 中国産青磁集計表……53
第 3 表 中国産白磁集計表……55
第 4 表 中国産青花集計表……57
第 5 表 中国産褐釉陶器集計表……57
第 6 表 中国産色絵磁器・瑠璃釉磁器・鉄絵陶器・黒釉陶器・施釉陶器集計表……57
第 7 表 タイ産・ベトナム産・韓半島産陶磁器集計表……59
第 8 表 本土産陶磁器集計表……60
第 9 表 産地不明陶器集計表……60
第 10 表 土器・土製品集計表……61
第 11 表 沖縄産施釉陶器集計表……63
第 12 表 沖縄産無釉陶器集計表……65
第 13 表 陶質土器集計表……65
第 14 表 瓦質土器集計表……65
第 15 表 金属製品集計表……66
第 16 表 鉄釘法量表……67
第 17 表 銭貨集計表……68
第 18 表 骨製品集計表……69
第 19 表 石製品集計表……69
第 20 表 円盤状製品集計表……69
第 21 表 近代陶磁器集計表……69
第 22 表 淑順門西地区出土遺物個体数表……70
第 23 表 淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（1）……112
第 24 表 淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（2）……113
第 25 表 淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（3）……114
第 26 表 淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（4）……115
第 27 表 淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（5）……116
第 28 表 淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（6）……117
第 29 表 淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（7）……118
第 30 表 淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（8）……119
第 31 表 淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（9）……120
第 32 表 淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（10）……121
第 33 表 淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（11）……122
第 34 表 淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（12）……123
第 35 表 淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（13）……124
第 36 表 淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（14）……125
第 37 表 淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（15）……126
第 38 表 淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（16）……127
第 39 表 淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（17）……128
第 40 表 淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（18）……129
第 41 表 高麗系平瓦集計表……130
第 42 表 高麗系平瓦厚さ集計表……130
第 43 表 大和系軒平瓦ほか集計表……131
第 44 表 大和系丸瓦集計表……131
第 45 表 大和系平瓦集計表……132
第 46 表 大和系平瓦厚さ集計表……132
第 47 表 高麗・大和系瓦観察表（1）……139

第48表 高麗・大和系瓦観察表（2）……140
第49表 明朝系軒平・軒丸瓦集計表……144
第50表 明朝系丸瓦集計表……145
第51表 明朝系丸瓦玉縁部長さ集計表……145
第52表 明朝系丸瓦ヘラ記号集計表……147
第53表 明朝系平瓦集計表……147
第54表 明朝系喜名窯系軒丸・軒平瓦集計表……147
第55表 明朝系軒丸・軒平瓦観察表（1）……164
第56表 明朝系軒丸・軒平瓦観察表（2）……165
第57表 明朝系喜名窯系瓦観察表……166
第58表 明朝系平・丸・役瓦観察表……167
第59表 塼観察表……168
第60表 漆喰観察表……168
第61表 塼集計表……169
第62表 塼ヘラ記号集計表……169
第63表 円盤状製品観察表……175
第64表 玉類観察表……175
第65表 奉神門埋甕地区出土遺物集計表……180
第66表 奉神門埋甕地区出土遺物観察表……181
第67表 淑順門西地区における土壌水洗を行ったサンプル量……185
第68表 淑順門西地区出土貝類遺体の最小個体数……188
第69表 淑順門西地区出土巻貝類等の出土詳細……191
第70表 淑順門西地区出土二枚貝の出土詳細……193
第71表 奉神門埋甕地区出土貝類遺体の組成……195
第72表 貝類の生息場所類型……196
第73表 首里城跡淑順門西地区から採取された水洗選別用堆積物試料の一覧……201
第74表 首里城跡淑順門西地区から採集された脊椎動物遺体の種名一覧……202
第75表 首里城跡淑順門西地区から採集された脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の同定結果……208～223
第76表 首里城跡淑順門西地区から採集されたイヌ下顎骨の詳細……224
第77表 首里城跡淑順門西地区から採集されたイノシシ／ブタの上顎骨・遊離歯の詳細……224
第78表 首里城跡淑順門西地区から採集されたブタおよびイノシシ／ブタの下顎骨・遊離歯の詳細……225
第79表 首里城跡淑順門西地区から採集されたウシの顎骨・遊離歯の詳細……225
第80表 首里城跡淑順門西地区から採集された脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の組成……226
第81表 首里城跡淑順門西地区における水洗選別試料（2.5㎜メッシュ）検出骨の同定結果……227
第82表 首里城跡淑順門西地区における水洗選別試料（1㎜メッシュ）検出骨の同定結果……228
第83表 首里城跡淑順門西地区における水洗選別試料検出骨の組成（NISP）……229
第84表 首里城跡淑順門西地区の水洗選別試料検出骨の組成（NISP．分析率による補正値）……230
第85表 首里城跡淑順門西地区の水洗選別試料検出魚骨の組成（MNI．分析率による補正値）……230
第86表 首里城跡淑順門西地区出土の植物遺体……240
第87表 イネのサイズ……242
第88表 コムギのサイズ……242
第89表 オオムギのサイズ……242
第90表 アワのサイズ……243
第91表 キビのサイズ……243
第92表 首里城跡淑順門西地区出土の穀類総量……243
第93表 主要穀類の割合……243
第94表 首里城跡淑順門西地区植物遺体の放射性炭素年代……244
第95表 淑順門東内郭城壁石積み工事立会採集遺物集計表……253
第96表 淑順門東内郭城壁石積み工事立会採集遺物観察表……253

図版目次

図版1 首里城跡周辺空中写真……257
図版2 淑順門西地区調査状況……258
1．現状　2．重機掘削状況　3．磁気探査状況
4．全体清掃状況　5．埋め戻し　6．埋め戻し後
7．全景　8．復元後
図版3 淑順門西地区全景……259
図版4 淑順門西地区　遺構（1）……260
1．F11北堆積状況（南壁）　2．F11北堆積状況（西壁）
図版5 淑順門西地区　遺構（2）……261
1．F11北Ⅳ－3層検出状況　2．北区全景
3．F11南Ⅳ－2層青磁出土状況
4．F11南Ⅳ－2層獣・魚骨・貝類出土状況
5．F11南Ⅳ－2層朱漆出土状況　6．F11南堆積状況
7．F11南Ⅳ－2層貝類・金属製品出土状況
図版6 淑順門西地区　遺構（3）……262
1．F11北Ⅳ－3層遺物出土状況
2．F11北Ⅳ－3’層コーラル面検出状況
3．F11北Ⅳ－4層陸生貝類集中状況
4・5．F11北Ⅳ－4層土器出土状況
6．E・F10Ⅳ－5層獣骨出土状況
7．E・F10岩盤検出状況
8．E・F10石積み1裏込め断ち割り状況
図版7 淑順門西地区　遺構（4）……263
1．石積み1全景　2．石積み1E10・F11付近
3．石積み1F11・G11付近　4．石積み1G11付近
5．石積み1H10付近
図版8 淑順門西地区　遺構（5）……264
1．石積み4・5切り合い状況
2．石積み4裏込め内遺物出土状況　3．石積み5
4．石積み4H9付近　5．石積み4G9付近
6．石積み4全景　7．石積み6・石敷1
8．石積み9・10
図版9 淑順門西地区　遺構（6）……265
1．石積み1南側　2．石積み13
3．石積み13南トレンチ堆積状況
4．H11Ⅲ層（瓦だまり）出土状況
5．石積み16周辺トレンチ堆積状況
6．石積み16周辺トレンチⅡ層瓦出土状況
7．石積み16周辺トレンチⅡ層堆積状況
図版10 淑順門西地区　遺構（7）……266
1．礎石建物跡遺構群　2．埋甕2周辺遺物出土状況
3．埋甕2検出状況　4．埋甕3完掘状況
5．埋甕1完掘状況
図版11 北区Ⅰ層出土遺物（1）……267
図版12 北区Ⅰ層出土遺物（2）……268
図版13 北区Ⅳ－1層出土遺物（1）……269
図版14 北区Ⅳ－1層出土遺物（2）……270
図版15 北区Ⅳ－1層出土遺物（3）……271
図版16 北区Ⅳ－2層出土遺物（1）……272
図版17 北区Ⅳ－2層出土遺物（2）……273
図版18 北区Ⅳ－2層出土遺物（3）……274

図版 19 北区Ⅳ－２層出土遺物（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・275
図版 20 北区Ⅳ－２層出土遺物（５）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・276
図版 21 北区Ⅳ－２層出土遺物（６）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・277
図版 22 北区Ⅳ－２層出土遺物（７）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・278
図版 23 北区Ⅳ－２層出土遺物（８）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・279
図版 24 北区Ⅳ－３層出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・280
図版 25 北区Ⅳ－３層出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・281
図版 26 北区Ⅳ－３’層出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・282
図版 27 北区Ⅳ－４層出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・283
図版 28 北区Ⅳ－４層出土遺物（２）・北区Ⅳ－５層出土遺物・・・・・・284
図版 29 南区Ⅰ層出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・285
図版 30 南区Ⅰ層出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・286
図版 31 南区Ⅱ層出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・287
図版 32 南区Ⅱ層出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・288
図版 33 南区Ⅱ層出十遺物（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・289
図版 34 南区Ⅱ層出土遺物（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・290
図版 35 南区Ⅱ層出土遺物（５）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・291
図版 36 南区Ⅱ層出土遺物（６）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・292
図版 37 南区Ⅲ層出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・293
図版 38 南区Ⅲ層出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・294
図版 39 南区Ⅳ層出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・295
図版 40 南区Ⅳ層出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・296
図版 41 南区Ⅳ層出土遺物（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・297
図版 42 南区Ⅳ層出土遺物（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・298
図版 43 淑順門西地区出土地不明遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・299
図版 44 瓦１（高麗系瓦）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・300
図版 45 瓦２（大和系瓦）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・301
図版 46 瓦３（大和系瓦）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・302
図版 47 瓦４（大和系瓦）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・303
図版 48 瓦５（明朝系瓦）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・304
図版 49 瓦６（明朝系瓦）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・305
図版 50 瓦７（明朝系瓦）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・306
図版 51 瓦８（明朝系瓦）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・307
図版 52 瓦９（明朝系瓦）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・308
図版 53 瓦 10（明朝系瓦）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・309
図版 54 瓦 11（明朝系瓦）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・310
図版 55 瓦 12（明朝系瓦）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・311
図版 56 瓦 13（明朝系瓦）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・312
図版 57 瓦 14（明朝系瓦）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・313
図版 58 瓦 15（明朝系瓦・喜名窯系）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・314
図版 59 瓦 16（明朝系瓦・喜名窯系）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・315
図版 60 塼１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・316
図版 61 塼２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・317
図版 62 漆喰 1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・318
図版 63 漆喰 2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・319
図版 64 円盤状製品１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・320
図版 65 円盤状製品２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・321
図版 66 ガラス玉 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・322
図版 67 奉神門埋甕地区　遺構（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・323
図版 68 奉神門埋甕地区　遺構（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・324
図版 69 奉神門埋甕地区　遺構（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・325
図版 70 奉神門埋甕地区　遺構（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・326
図版 71 奉神門埋甕地区出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・327
図版 72 奉神門埋甕地区出土遺物（２）・淑順門東内郭城壁 ・・・・・ 328
石積み立会工事採集遺物

←淑順門西区より西側

奉神門埋甕地区の
埋甕内の土を掘る→

↑甕を壊さないように取り上げる

↑淑順門西地区より南側

↑現場調査スタッフ

←淑順門西地区より北側（上半は円覚寺）

淑順門西地区より東側→

第１章　経緯と経過

第１節　調査の経緯

首里城跡内郭地区は、昭和 61（1986）年度に「国営沖縄記念公園首里城地区」として整備されることが閣議決定されたことにより、遺構確認のための発掘調査が沖縄県教育委員会（以下、県教委）により行われている。

本報告の対象となる平成 22 年度首里城跡発掘調査も、上記の整備の一環として実施されたもので、平成 22 年４月 15 日付、内閣府沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所長（以下、公園事務所）と沖縄県知事の間で交わされた「平成 22 年度首里城地区（北城郭エリア）発掘調査及び資料整理業務」委託契約によるものである。発掘調査は、沖縄県教育庁文化課（現、文化財課）が主管課として事務調整及び調査指導を行い、沖縄県立埋蔵文化財センター（以下、当センター）が担当した。

今回の調査範囲は、公園事務所首里出張所（以下、首里出張所）と文化課の調整により、平成 22 年度以降に計画している淑順門西側の城壁整備と、奉神門前の埋甕復元に伴う遺構確認が目的とすることになり、淑順門西地区と奉神門埋甕地区と呼称することとした。

首里城跡における発掘調査は、史跡範囲に該当するため、文化財保護法第 125 条第１項に基づく申請が必要となっている。今回の調査についても、平成 22 年６月 21 日付にて現状変更申請を県教委経由により文化庁長官へ提出し、県教委の指示を受けることを条件として、同年９月 17 日付にて許可された。

さて、当センターは９月より伐採・フェンス設置・公園造成土除去等のの調査準備を進めており、許可後に遺構調査に入ることになった。調査経過の詳細は後節に譲るが、調査区は公開地域に近接しているため、安全面及び一般客への配慮を首里出張所より求められ、仮囲いの設置や埋め戻しについては夜間作業による実施となった。

調査終了後の出土品は、遺物収納コンテナ 100 箱に昇り、当センターから文化課へ発見報告を行い、文化課は平成 23 年３月２日付にて那覇警察署へ埋蔵文化財発見通知を行い、遺失物法の手続きを経た。

第２節　調査体制

首里城跡淑順門西地区・奉神門埋甕地区の発掘調査は、当センターが県教委の指導の下に平成 22 年度に発掘作業、平成 24 年度に資料整理・報告書作成を実施した。実施体制は以下のとおりである。

平成 22 年度　発掘調査

事業主体　沖縄県教育委員会　金武正八郎（教育長）
調査所管　沖縄県立埋蔵文化財センター　守内泰三（所長）
　総務班　嘉手苅勉（班長）、恩河朝子・本永恵（主査）
　調査班　総括…金城亀信（班長）
　　調査担当…瀬戸哲也（主任）　調査補助…岸本竹美・大城歩（文化財調査嘱託員）
　発掘作業員　上江洲由昇・浦崎京子・大嶺愛子・比嘉洋子・樋口光子・安村重保・與儀良太・与那嶺節子
　磁気探査委託　株式会社シビルエンジニアリング
　写真測量委託　株式会社琉球サーベイ
　機械掘削・埋戻　有限会社丸清重機リース
　現場事務所用仮設ユニットハウスリース　株式会社三善建設
　仮囲いリース　株式会社交建企画
　高所作業車リース　有限会社金功重機

平成 24 年度　資料整理・報告書作成

事業主体　沖縄県教育委員会　大城浩（教育長）

事業主管　沖縄県教育庁文化課　長堂嘉一郎（課長）、島袋洋（副参事）、盛本勲（記念物班長）、上地博（主任専門員）、田場直樹（指導主事）

調査所管　沖縄県立埋蔵文化財センター　崎濱文秀（所長）

総務班　荻堂治邦（班長）、西島康二（主査）

調査班　総括…金城亀信（班長）

資料整理担当…瀬戸哲也・新垣力（主任）、具志堅清大（臨時的任用専門員）

資料整理補助…池原悠貴・木下正樹・平田拓也・山城勝（文化財調査嘱託員）

文化財調査資料整理嘱託員　赤嶺恵子・赤嶺雅子・新垣裕子・新垣利津代・池原直美・伊佐えりな・石嶺敏子・伊藤恵美利・殷兪平・上田麻紀子・上原作美・上原園子・上原留美・上原美穂子・大村由美子・荻堂さやか・小渡直子・翁長涼子・喜瀬リサ・喜屋武朋子・久貝祐子・國吉咲子・久保田有美・崎原美智子・後多田昌代・島袋久美子・城間千鶴子・瑞慶覧尚美・平良貴子・當山哲也・仲村朝美・野村知子・比嘉登美子・比嘉なおみ・譜久村泰子・又吉志麻子・又吉純子・松堂恵美・宮里絵里・宮良佐弥香・向井洋子・屋我尚子・矢船章浩・山口こずえ・山城由紀子・吉村綾子

資料整理協力　伊藝由希・津多恵

第３節　調査の経過

現地調査

現地調査は９月１日より伐採・仮囲い設置・重機搬入等の準備作業を開始した。その後、12 月までに掘削作業、１月までに実測等作業を終了させた後、埋め戻し及び法面保護のために種子吹き付けを行い、２月 25 日に現地調査を完了した。なお、奉神門埋甕地区は９月 21 日に調査を開始し、のべ 12 日間の作業を随時行い、10 月 29 日に終了した。以下、地区ごとに調査日誌抄の形で述べる。

淑順門西地区

９月 15 日　重機による公園造成土の除去し、グリッド設定のための測量を開始

９月 21 日　重機掘削後の人力による清掃作業を開始

９月 24 日　磁気探査で異常がないことを確認し、人力による掘削作業を開始し、既往調査で確認された内郭城壁や石積み、裏込と考えられる礫群などが検出されていく

９月 27 日　石積等が検出されないＦ 11 グリッド（以下、グリッド省略）において、堆積状況を確認するために適宜サブトレンチを設け掘り下げていく

10 月　６日　Ｆ 11 の掘り下げにおいて、16 世紀以前の堆積層が良好に残存していることを確認

10 月 13 日　Ｈ 11 では、石積み・裏込等が確認されない範囲で２ｍ以上の堆積が見られ、近世瓦が集中している範囲（後に瓦だまりと呼称）を確認し、17 世紀前後の造成土である可能性

10 月 14 日　Ｆ 11 南側の黒褐色土（上層）では 15 世紀代の陶磁器と共に金属製品や獣魚骨・貝類が多く出土

10 月 22 日　石積み１が淑順門西側の内郭城壁外面に続くことが判明し、正殿側に延びることを確認

11 月　５日　本日以後、Ｆ 11 の黒褐色土（上層）などにおいて、炭・獣魚骨などの微細遺物を抽出するために土壌水洗を実施

11 月 10 日　Ｆ 11 北側では、大和系瓦が多く出土する粉末状の炭が充満する黒褐色土下層の直下に造成土と考えられる礫層を確認し、14 世紀後半～ 15 世紀前半と推定

11 月 11 日　石積み１内側のＥ・Ｆ 10 の掘り下げにより、首里城跡で最も古い 13 世紀後半の遺物包含層を確認

11 月 17 日　既設物の撤去がなされた調査区南側を拡張し、重機による公園造成土の除去

11 月 18 日　重機掘削した範囲の磁気探査を行い、異常がないことを確認し、遺構検出を開始

11月24日　調査区南側であるH・Ｉ９～11では石積み等多くの遺構が見られ、東側では内郭城壁内面である石積み４を検出し、その下層より古い石積み５を確認
11月26日　Ｆ11の掘り下げが終了し、石積み１はその上層である褐色土の段階に積まれたと判断し、時期的には15世紀後半以降と推定
12月　３日　Ｈ11で礎石や埋甕等の遺構を確認
12月　９日　石積み１南側の外面の堆積状況を確認し、その下方は15世紀代に遡る可能性を確認
12月10日　ほぼ遺構の検出が終わり、全体写真のための清掃作業及び各図面の作成を以後実施
12月21日　高所作業車を利用した写真撮影、業者委託による写真測量の実施
12月28日　掘削作業は終了し、以後図面作成
１月　20日　図面作成を終了し、土壌サンプル採取を行い、現場作業を終了
２月　１日　夜間の埋め戻し作業を延べ４日間行い、２月８日で終了
２月　25日　法面保護のための種子吹きつけを終了させ、現場調査完了

奉神門埋甕地区

９月　21日　復元された石畳を人力で撤去
９月　24日　既往調査の保護砂を除去し、石畳と埋甕を検出
10月　５日　埋甕内の埋土を半裁し掘り下げ
10月　７日　埋甕外側の堆積土を半裁し掘り下げ、石畳の造成と共に甕が据えられたことを確認
10月13日　埋甕内の埋土を全て掘削し、廃絶後の堆積が大部分であることを確認
10月22日　実測作業終了
10月26日　甕を取り上げ、埋め戻し開始
10月29日　埋め戻しを終了し、石畳の復旧を行い調査完了

資料整理作業

発掘作業で出土した遺物は、現地調査中の雨天時に遺物洗浄作業を行うことで終了させた。また、Ｅ・Ｆ10、Ｆ11の堆積層の土壌を任意に土嚢袋に入れ、１・３・５㎜フルイを使った水洗作業により、獣魚骨・貝類・炭化種子などの微細遺物を抽出した。遺構図面・写真の整理、遺物のナンバリングについては、調査終了後速やかに実施するよう努めた。

遺物・記録類の本格的な資料整理作業は、平成24年度に埋蔵文化財センターにて実施した。淑順門西地区においては、グリッドや層序の時期差が見られることが想定されたため、その違いが分かるように陶磁器等の分類・集計作業に努めた。その結果、淑順門西地区の各グリッドを北区と南区にまとめて、層序については地山を含めて大きく６層に分けて整理した。また、北区としたＥ・Ｆ10、Ｆ11のグスク時代のⅣ層はさらに５つに分け、13世紀後半～15世紀代の中で時期差をつかむことが出来た。一方、奉神門埋甕地区は、その埋甕の復元に努め、高さ90㎝にも及ぶ非常に大型のものであることが確認できた。

整理作業を経て作成した実測図は当センターでパソコン上により作図ソフト（イラストレーター）を用いてデジタルトレース及びレイアウトを行い、写真や文字原稿も含めて編集ソフト（インデザイン）を用いて全て電子データ（ＰＤＦファイル）として指名競争入札で決定した有限会社ふたば印刷へ入稿した。

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

首里城跡は、那覇市首里当蔵町３丁目１番地に位置しており、平成元（1992）年度に開園した国営沖縄記念公園事務所首里城地区として、現在も観光客等で賑わっている。最高所は、東端の東のアザナにおいて現地表で標高 136 m、復原した城壁の天端では標高 141 mを測る。那覇市内では、標高 165.6 mを測る東端 1.5km にある弁ヶ岳に次ぐ高所に位置するかつての琉球国の王城である。

この首里城の基盤は、地質区分による琉球石灰岩（30 ～ 1 万年前）であるが、その北東に位置する円覚寺側では島尻層群（2300 万～ 500 万年前）であるクチャ（泥岩）、南側では同層群のニービ（砂岩）となっている。この島尻層群は不透水層であるので、琉球石灰岩との境界には井泉が多く見られ、今日もこんこんと水が湧き出ている。

これまでの発掘調査では、首里城跡の東側である正殿から御内原の標高 125 ～ 130 mにかけて、琉球石灰岩の岩盤及びその風化土である島尻マージ（赤土）が地山として確認されている。一方、島尻層群のクチャは、北側の久慶門とその東にある銭蔵付近の調査において、標高 110 m付近で確認されている（平成 18・20・23 年度当センター調査）。

首里城周辺は、往時には円覚寺等の寺院や、御細工所などの王府の関連施設、王族・士族の屋敷跡が林立し、城下町的な景観を誇っていたとされる。

昭和 20（1945）年の沖縄戦の戦禍により首里城を始め寺院等はほとんど消失してしまい、現在ではマンション等の高層建物も並ぶ景観となっている。

それでも往時の道・区画は残されており、平成 12（2000）年の世界文化遺産登録も契機となって、歴史的景観の保全にも配慮した町並み作りが求められている。

第１図　沖縄本島の位置

第２節　歴史的環境

首里城跡についての概況と、周辺遺跡の様相について概略する。

首里城

首里城の創建については明確に記載されている史料はないが、『中山世鑑（1650 年）』などに、洪武 25（1392）年に察度王が高ヨサウリ（高世層理殿）という数十丈の高楼を建てたとする記述があり、これを首里城内にあったと考える説である。一方より信頼性が高い史料としては、現存する最古の記年銘である宣徳２（1427）年に建立された石造物である「安国山樹花木樹碑」に、尚巴志王が首里城の北西側の安国山に龍潭と称する人工池を掘ったとするものである。つまり、周辺の整備がこのころ既に行われていることから、城内の建設は完成されていると推測されるのである。尚真・尚清王代（1477 ～ 1555 年）には外郭の拡張などが進み、往時の首里城になったものと考えられている。

そして、明治 12（1879）年の首里城明け渡しまで、琉球国の王城として栄華を誇ることになった。その後は、明治 29（1896）年までは熊本鎮台沖縄分遣隊が駐屯し、明治 41（1908）年に首里区立女子工芸学校が首里城内へ移転、明治 45（1912）年に首里尋常高等小学校（大正２（1923）年に首里第一尋常高等小学校に改称）の校舎落成移転などを経て、各所がそのつど改変された（那覇市教委 2002）。その間に、中心的な建造物群は大正 14（1925）年に特別保護建物に指定、昭和２（1927）年の解体修理を経て、昭和４（1929）年に正殿や主要な城門が国宝となった。

しかしながら、アジア・太平洋戦争に伴い日本軍第 32 軍司令部壕、師範学校の生徒による留魂壕が首里城地下に構築され、昭和 20（1945）年４月の艦砲射撃、５月以降の日本軍南部撤退に伴う米軍戦線の南下により、首里周辺も壊滅した。

終戦後は、昭和 25（1950）年の琉球大学の創設により、首里城には数々の校舎が建てられることで、その状況が様変わりする。昭和 47（1972）年の日本復帰と同時に国の史跡と指定され、平成 12（2000）年に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の構成遺産として世界文化遺産に登録された。また、日本復帰と同時に首里城の復元整備も進み、平成３（1992）年に国営沖縄念公園首里城地区として開園し、その入園者は平成 21（2009）年には１億人を突破、現在も年間約 210 万人（平成 23 年度）と、一大観光地となっている。

首里城跡の発掘調査

首里城の復元整備に伴う発掘調査が今も続けられているが、往時の首里城の遺構を確認するための調査でもあり、その創建についての情報は多くはない。これまでの調査で古いものとしては正殿第Ⅰ期遺構として 14 世紀の包含層が確認され、大和系瓦を葺いた建物が想定されている（当真・上原 1987、上原 2003）。また、京の内地区の土坑ＳＫ 03 で、青磁Ⅱ類、白磁Ｃ２群、天目などが出土しており、14 世紀前半ごろの可能性が指摘されるが、その性格は分かっていない（県埋文 2011）。明確な遺構としては、正殿Ⅱ期の石積基壇上の礎石建物で、その基盤の北殿地区の造成層より 14 世紀後半～ 15 世紀前半と考えられる（県教委 1995）。今回の淑順門西地区の調査で、13 世紀後半～ 14 世紀初頭の包含層が確認されたことにより、その歴史が更に遡る可能性が出てきた。

首里城跡周辺の遺跡

首里城跡では、下之御庭地区（県埋文 2001 ｃ）、外郭外側の南側下地区（県埋文 2004）で、縄文時代後期の面縄東洞式や嘉徳Ⅱ式などが出土しており、この丘陵一帯が当該期には生活域であったことが窺われる。また、今回の調査でも出土したが、弥生～平安並行時代（沖縄後期）の土器も見られている。

さて、グスク時代になると、首里城周辺でも多くの遺跡が見られるようになる。識名シーマ御嶽遺跡（那覇市教委 1997）や識名原遺跡（那覇市教委 2001）など、徳之島産カムィヤキ須恵器、長崎産石鍋、玉縁白磁碗などが出土し、11 ～ 12 世紀のグスク時代初期の遺跡と思われる。特に、前者では植栽痕とする列状ピット群が確認され、耕作地と考えられる。首里城跡に近接する崎山御嶽遺跡（那覇市教委 2005）では、13 世紀後半～ 14 世紀初頭の陶磁器・土器が出土し、後者は首里城跡と共通する大和系瓦が大量に出土する遺跡として著名である。

首里城跡の遺構が本格化する 14 世紀後半には、さらに多くの遺跡が見られ、特に天界寺跡（那覇市教委

第２図　首里城跡の位置及び周辺の遺跡

1999・2000、県埋文 2001 b・2002 a）では寺院造営前の大規模な集落跡が展開する。15 世紀中葉には、天界寺跡、円覚寺跡（県埋文 2002 b）で基壇造成が確認され、文献史研究では当該期には寺院が多くあったとする状況が裏付けられる。那覇港に位置する渡地村跡の調査では、14 世紀後半以降の護岸等の遺構、多くの陶磁器等が出土し、国際港市であった那覇の繁栄が明らかになりつつある（県埋文 2007・那覇市教委 2012）。

第３節　調査区の概況

本報告書の対象である淑順門西地区及び奉神門埋甕地区に関する歴史背景や変遷について略述する。なお、調査区の位置について、明治期以前とされる横内家資料平面図（以下「横内図」、第３・４図）、明治 12（1879）～明治 29（1896）年までに駐屯した熊本鎮台沖縄分遣隊配置図（第５図）、昭和６（1931）年頃とされる阪谷良之進作図の旧首里城図（以下「阪谷図」、第６図）、昭和 25（1950）年～昭和 59（1984）年までにあった旧琉球大学校舎配置図に、推定であるがプロットしている。現状図は平成 22 年時のものに位置を示している（第８図）。

淑順門西地区

今回の調査区は、淑順門から西へ伸びる城壁の正殿側に北へ曲がるコーナー部分に当たっており、淑順門周辺の様相について説明する。

淑順門については、平成 16（2004）年度に発掘調査が行われ、その成果を元に復元整備がなされ、平成 22（2010）年度に供用が開始されている。この門は、外郭の北側にある久慶門をくぐり、東側に向かうと右掖門を通り、王妃・女官たちの領域である御内原へ至る直前の門である。「みもの御門」や「うなか御門」と呼ばれることもある。門の構造は、木造平屋建・入母屋造・本瓦葺の櫓門とされる。創建は明確な史料はないが、発掘調査では外郭整備時に造られた可能性を指摘しており、外郭にある久慶門が尚真王代に整備されたとあるので、15 世紀後半～ 16 世紀前半の間と考えられる（県埋文 2006）。

今回の調査では、その南側に近代と考えられる礎石建物跡が城壁西側で確認されている。この位置は、熊本鎮台分遣隊配置図（第５図）では、城壁東側に「厠」という文字が記されており、微妙に位置がずれている。ただ、この図は模式図なので大まかな位置を示していたものかもしれないが、その確証は今回の調査では難しい。昭和６年頃の阪谷図では、長方形の建物がほぼ同位置で描かれており、この時期まで存在したものと思われる。ただ、昭和 10（1935）年頃とされる古写真では建物はなく、灌木が茂っている状況となっている。

奉神門埋甕地区

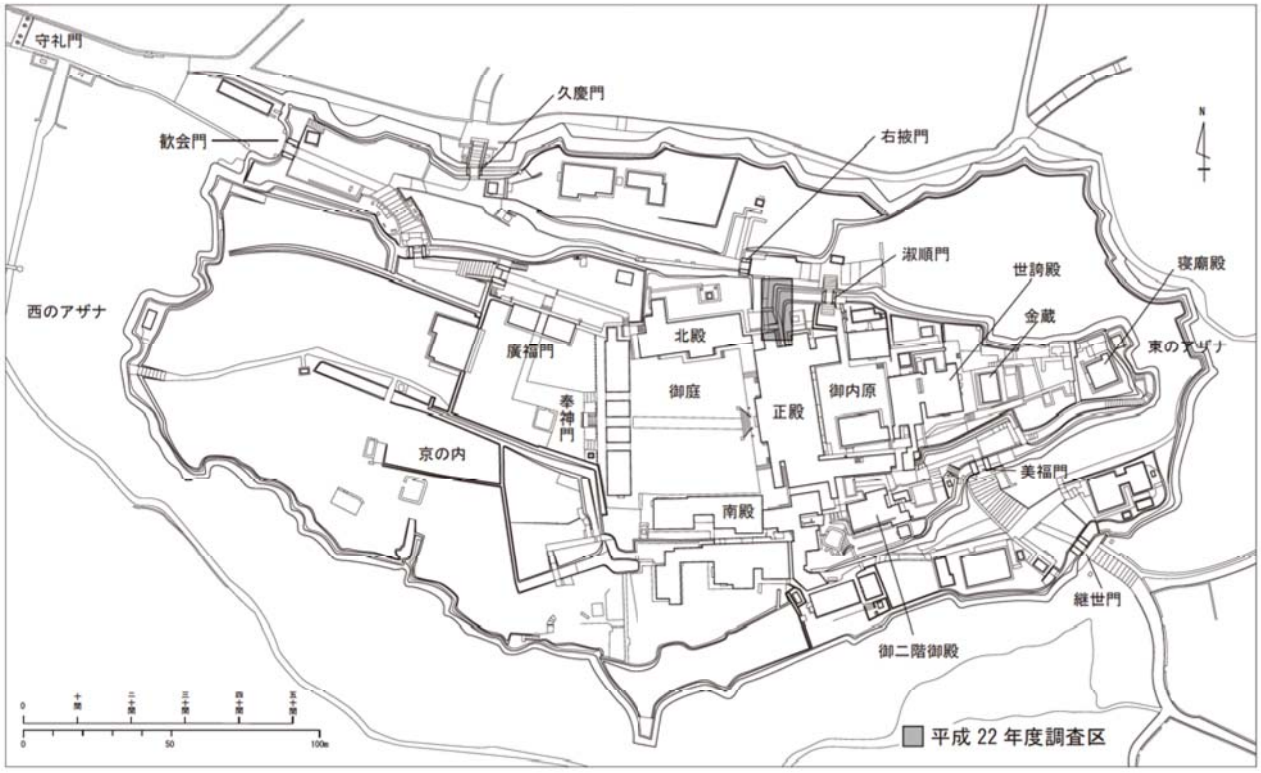
今回の調査区は、奉神門西側の基壇へ昇る一番南側階段の南側に当たる。

奉神門は、外郭北西に位置する歓会門をくぐり場内に入り、瑞泉門を通り内郭へ至り、さらに漏刻門・廣福門を通った先は下之御庭という広い空間の東方に位置する。この奉神門をくぐると、正殿の前庭部である御庭となり、王城の最重要部をつなぐ門である。往時の奉神門の規模は、建物の桁行は約 49 m、梁間は約７mで、入母屋造、本瓦葺である。下之御庭から約 1.8 mの高さの石積基壇に設けられた高欄は細粒砂岩（ニービヌフニ）で造られており、正殿の高欄とは寸法の違いはあるが、基本的な構造は類似している。この長大な建物に門が３つある構造となっており、それぞれに合わせた石階段があり、中央の階段のみに登り高欄が付けられていた。そして、明治期の古写真に見られるように、階段の両際に埋甕が置かれていた（写真 39）。ただ、その後先述したような変遷の中で、埋甕も削平されていったことが想定される。

門自体の創建は明確な史料はないが、1562 年にこの門の石造欄干が完成されたとするので、この以前にはあったものと思われる。その後、1709 年に焼失するが、1712 年頃には再建される。1754 年に改修がなされ、中国の様式に倣い３つの門を設け、中央を高くしたとされ、往時並びに復元された奉神門となったようである。

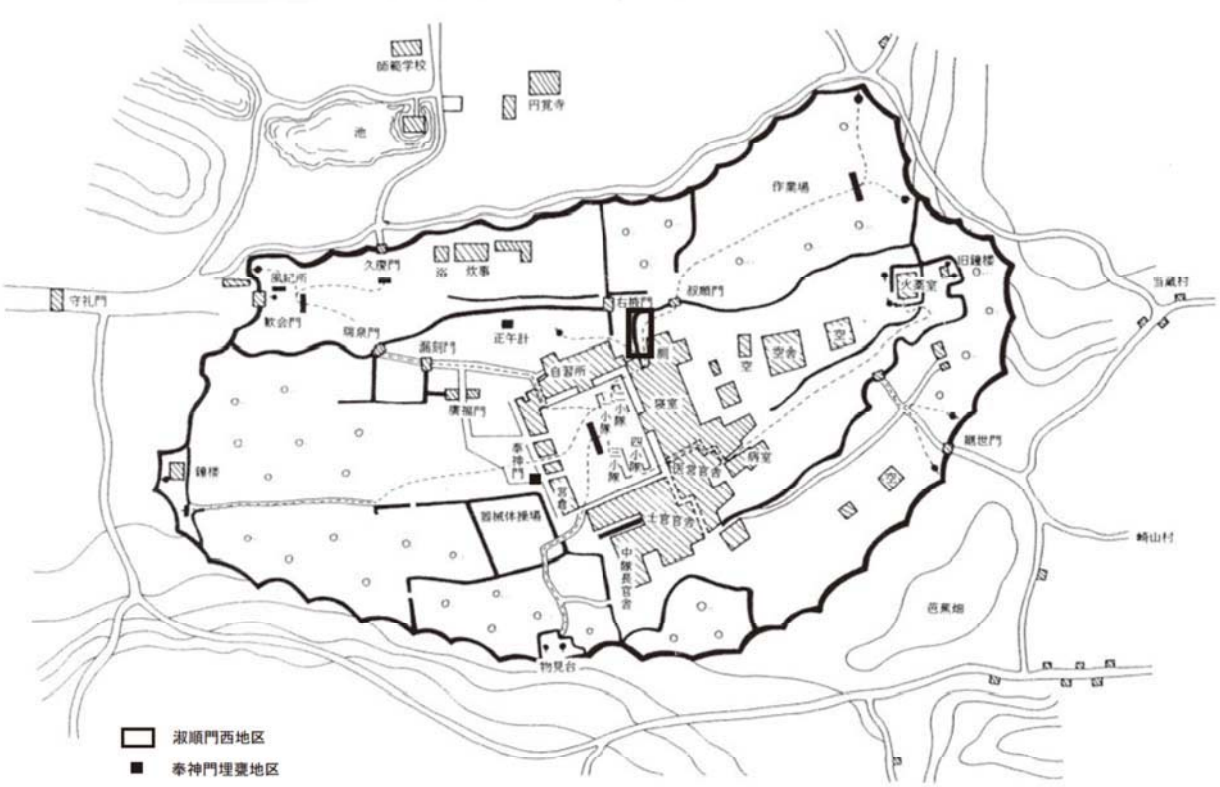
この奉神門周辺の発掘調査は、平成元（1989）年度に実施され、奉神門の石積基壇、階段、そして今回調査対象となった埋甕遺構４基などが確認された。この調査により、奉神門の基壇は第Ⅰ・Ⅱ期とした新旧が確認され、第Ⅱ期の化粧石が一部被熱していたとされる。それにより、この第Ⅱ期の基壇は 1709 年以前には存在したものと位置づけられている（県教委 1998 b）。

本章の内容については、（首里城研究グループ 1997・県教委 2010）を参考にした。

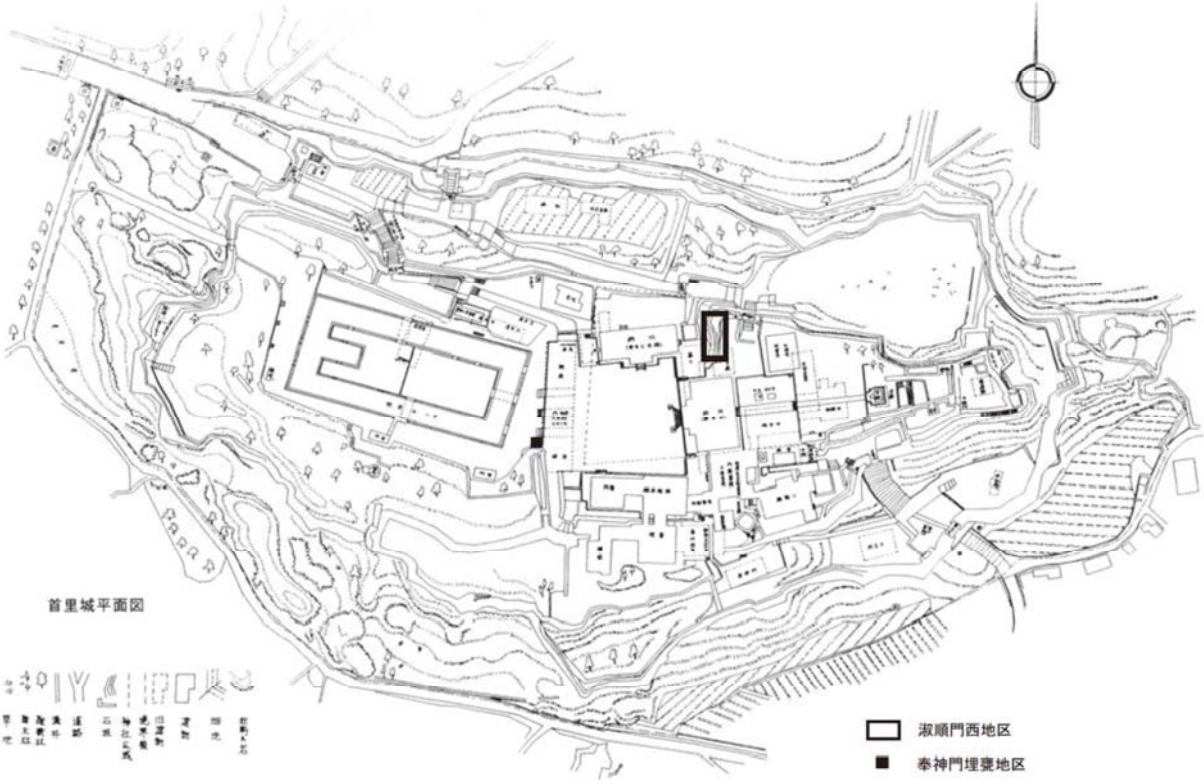


第３図　横内家資料平面図

第４図　平成 22 年度調査区域図（横内家資料平面図）

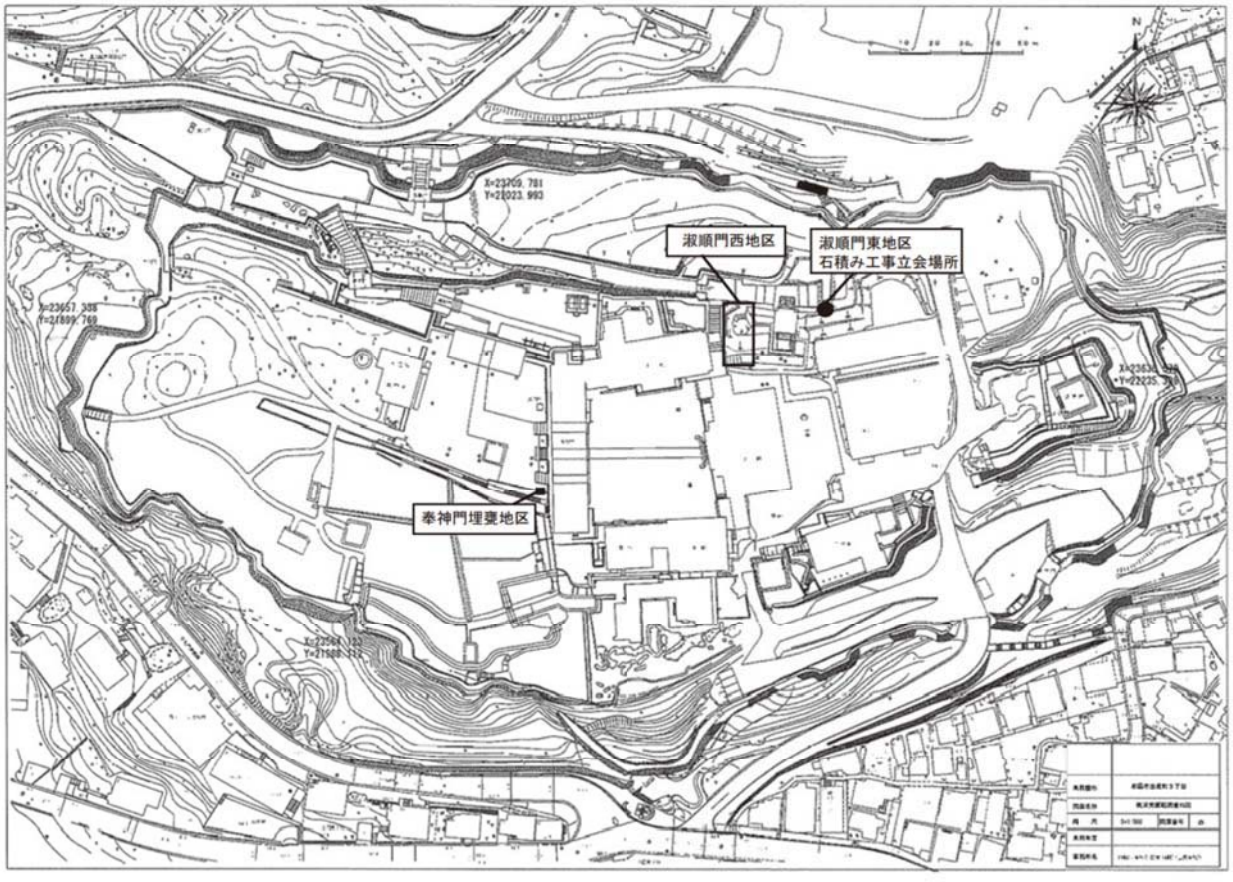


第５図　旧首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図（明治期　沖縄県史料編集室蔵）



第６図　「旧首里城図」（昭和６年頃　阪谷良之進原図　県立図書館所蔵）

第７図 「旧琉球大学校舎配置図」（1950 年～ 1984 年）



第８図　首里城公園現状図（平成 22 年）　国営沖縄記念公園事務所作成

第３章　　淑順門西地区　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

今回の調査は、公園整備計画に合わせて淑順門西側から正殿に向かう内郭城壁の確認を目的とし、その調査面積は 180 ㎡となった。

さて、このように首里城跡の発掘調査では、整備計画に合わせて地区を区切り、復元対象である戦前～近世の首里城を復元整備するために実施されている。そのため、一番新しい首里城の遺構が確認されると、その遺構を保護するため、下層つまり首里城の歴史を探る調査は制限される。また、首里城跡では基本的に石積み・石敷等の石による遺構のため、単純に土層が時期ごとに広範囲に堆積するという状況は少なく、遺構の切り合いがかなり複雑な状況となっている。近年は遺構を壊さない範囲で、サブトレンチを設定し、下層の調査を出来るだけ行うように努め各遺構の時期をできるだけ明らかにするように努めてきている。

本地区は、南側を昭和 60・61 年度の正殿地区（県教委 1992、當眞・上原 1987）、北側を平成２年度の右掖門地区（県埋文 2003）、南東側を平成 16 年度の淑順門地区（県埋文 2006）と各調査が行われ、戦後以降の造成土はほぼ除去されている状況で、今回検出した多くの遺構の表面には遺構保存のための砂が敷かれていた。つまり、今回の調査は既往調査時の埋め戻し土を重機で掘削することになったのである。そのため、他の地区よりも近世・近代の遺物が少なかった。

遺物取り上げ等に用いるグリッドは、過去の調査区において本地区に近接する平成 16 年度に行われた淑順門地区（県埋文 2006）で設定された５ｍグリッドとその記号を採用した（第９図）。遺物の取り上げはこの５ｍグリッドによったが、遺構下層の堆積状況はＦとＧラインで大きく異なっているため、ここを基準にＥ・Ｆ 10、11 グリッドを北区、G･H･I ９、10、11 を南区として分けて整理することとした。以下の記述においては、グリッドを省略している。

また、本地区でも石積み等の遺構がない範囲において、サブトレンチを設定する形で下層の堆積状況の確認に努めた（第 10 図）。また、E･F 10 トレンチとしたところで、石積み１の裏込を部分的に断ち割りも行った。このような中では、現場において共通する土層番号を与えて調査することは困難であった。そのため、グリッドごとで土層名を呼称し（「Ｆ 11 北　黒褐色土上層」など）、遺物の取り上げなどを行った。その後、資料整理作業によって、各土層の時期・性格などを検討して層序を整理することとした（第１表）。その詳細については、本章第２節で後述する。

遺構は、既往の調査で既に検出されていたものもあったが、これまでの調査と同様で、本地区のみの遺構番号を伏すことになっている。今回付した遺構名は、遺構の形状により、石積み、石敷、石組溝、埋甕とし、それぞれ１から番号を付していった。また、石積みは面を持っている石の列を指し、その裏込部分については、どの部分か示す必要がある場合は、適宜示した。

現地での写真は、35㎜のフィルムカメラ、または適宜６×７サイズの中判フィルムカメラを用いて白黒とリバーサルフィルムで撮影・現像した。なお、デジタルカメラ（ニコン D70 ｓ）でも撮影を行い、報告書時の写真はＤＴＰ印刷に対応するために、検討の結果この写真を使用することとした。

第２節　層序

前述したように、堆積土が露出する範囲において、層序を確認するためにサブトレンチを設定し、調査を進めた（第 10 図）。そのために、個別で遺物取り上げ時に土層名を付していたが、その後の資料整理において時期・性格等を検討することにより、大きく地山を含めて６つの層序にまとめて報告したほうが全体の傾向が分かると判断した。

以下、各層の概要を記す。各層の分布状況については第 10 図、これらの層序と遺物取り上げ時の各土層の

対応関係は第1表・第11図に記した。南区の土層図はF・Hラインとして第12・13図、北区の土層図はA～Eラインとして第14～16図に示してある。なお、土層名について、ローマ数字（Ⅰ～Ⅵ層）は報告時、土色などの名称（例．瓦混暗褐色土・黒褐色土上層）は現場調査時、第○図No○（○はアラビア数字）は各断面図の土色番号を指す。

Ⅰ層　戦後　前回調査時の埋め戻し土（撹乱層）・石積み裏込覆土

戦後以降の堆積土はその多くが前回調査時の埋め戻し土及び保護砂で、調査区全域において、厚さ1～2m堆積していた。そのため、他地区よりも本層の遺物は少ないものと思われる。石積み裏込覆土は、調査区の大半を埋め尽くす石積み1などの裏込を検出する際の覆土でありグスク時代の遺物も多かったが、石の隙間に入り込むからか近現代の遺物も含まれていたため、本層と捉えた。

Ⅱ層　近世～近代　遺物包含層・造成層

南区のG・H・Ⅰ9の石積み4東トレンチとH・Ⅰ10西側、G・H・Ⅰ11において主体的に分布する。北区においては、E・F10トレンチ、F11北・南トレンチ、E11石敷1上面に薄く堆積していたのみであった。

色調は褐色～暗褐色、土質は細砂～シルト、層厚は60～140cmと比較的厚い。出土遺物は、全体的に瓦・塼が多く、グスク時代～近世・近代の陶磁器等が見られる。ただ、近代陶磁器は多くはなく、近世の遺物が最も多いので、この土層の主体的な年代は近世と考えても良いと思われる。

このⅡ層は、H・Ⅰ10の石積み16周辺トレンチ、G・H・Ⅰ11においては、堆積の状況よりさらに3つに分けられる。

Ⅱ層上部…石積み16周辺トレンチ、G・H・Ⅰ11に分布する瓦混暗褐色土（第12図No2～4、第13図No1）。層厚20cmで水平に堆積しており、礎石建物群がこの層を切り込んで構築されている（第28図）。

Ⅱ層中部…下層の瓦混褐色土（第12図No5・6、第13図No2・3、図版9－5～7）。北東に向かって厚くなっており層厚60cmにも及んでおり、礫も多く混じっており、下部には瓦が集中するなど、比較的短期間に堆積した可能性も考えられる。石積み13は、この土を除去した段階で検出した。

Ⅱ層下部…さらに下層となるH11の石積み13南側トレンチで見られる瓦混礫（第12図No7～12、写真1、図版9－3）。層厚100cmにも及び、細～中礫や粘土ブロックや瓦・塼が多く混じり、西側上方から一度に流れ込むような堆積をとることから、短期間に形成された造成土と考えられる。また、近代の陶磁器はないため、時期的にやや古い可能性もある。

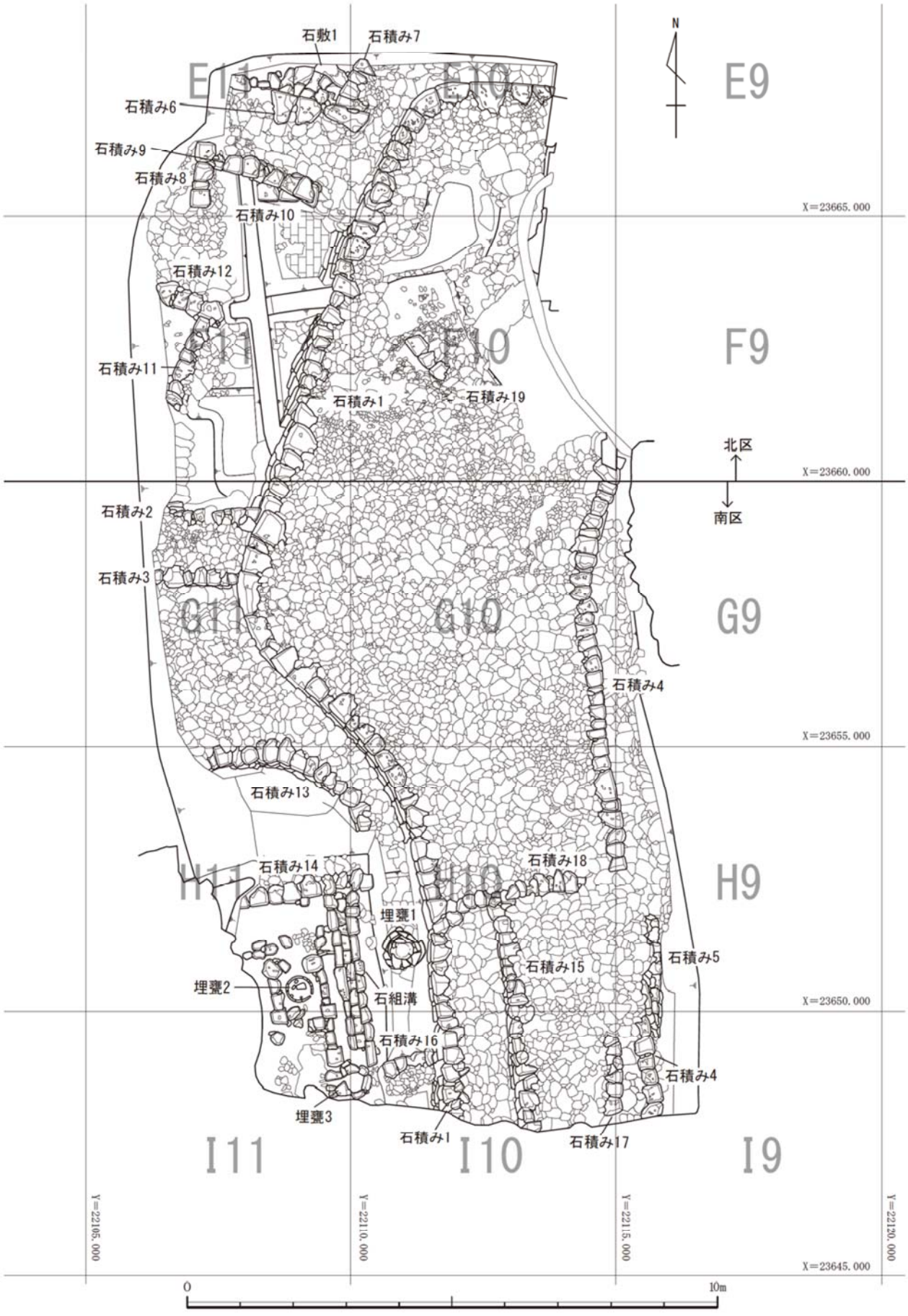
石積み4東トレンチに分布する暗褐色礫混土は、非常に礫が多く、石積み4の基礎を埋め殺しにした土層と考えられる（第24図）。近代の遺物は少なく、グスク時代～近世のものが多い。後述するが、本来的にはこの土層はⅣ層であったが、撹乱を受けた可能性もある。

Ⅲ層　近世　造成層

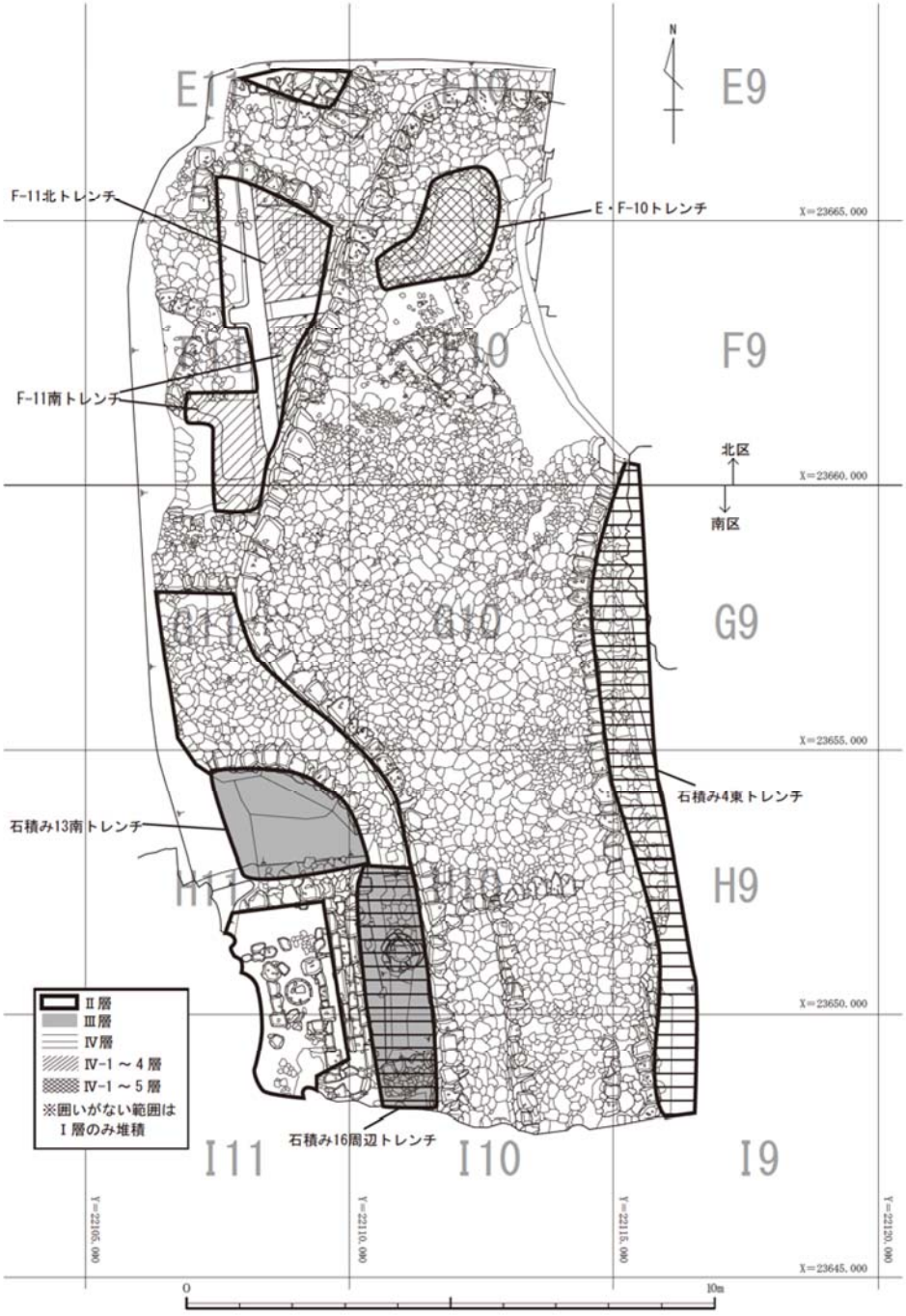
南区の石積み13南側トレンチ、石積み16周辺トレンチに分布し

第1表　淑順門西地区層序対照表

報告書層序	出土遺物による時期	現場調査時層名（カッコ内は、ナンバリング名）		
		北区（E・F－10・11）	南区（G・H・Ⅰ－9・10・11）	
Ⅰ層	現代	撹乱層（カクラン）・石積裏込層（ウラゴメ）		
Ⅱ層	近世～近代	石敷上上面覆土（石敷上）・純い黄褐色礫（取り上げなし）	Ⅱ層上部	暗褐色礫混土（暗レキ）・埋甕1（カメ1）・瓦混暗褐色土（瓦暗・暗瓦）
			Ⅱ層中部	瓦混褐色土（瓦褐）
			Ⅱ層下部	瓦混礫（瓦レキ）
Ⅲ層	近世	該当なし	オリーブ褐色土（オリーブ）・瓦だまり層（瓦溜）・黄褐色粘質土（黄粘）・暗灰黄色粘質土（暗粘）	
Ⅳ層	グスク時代（15世紀代か）	下記のとおり細分	黄褐色土（黄褐）・黒褐色土（黒褐）※遺物の様相はⅣ－1・2層に近い	
Ⅳ－1層	15世紀後半～16世紀前半	褐色土（褐）・黄褐色土（黄）	該当なし	
Ⅳ－2層	15世紀中葉	黒褐色土上層（黒上）・黒褐色土間層（黒間）		
Ⅳ－3層	14世紀末～15世紀前半	黒褐色土下層（黒下）		
Ⅳ－3´層	14世紀末～15世紀前半	黄褐色礫混土（取り上げなし）・暗褐色土（暗）・コーラル（取り上げなし）・暗褐色礫混土（暗レキ）・黒褐色土下層2（黒下2）		
Ⅳ－4層	14世紀後半	暗褐色土下層（暗下）・暗褐色土下層2（暗下2）・暗褐色土下層3（暗下3）・黄褐色ブロック混暗褐色土（黄混暗）		
Ⅳ－5層	13世紀後半～14世紀前半	褐色粘質土（褐粘）		
Ⅴ層	地山	明褐色シルト＜琉球石灰岩の風化土・島尻マージ＞		
Ⅵ層		琉球石灰岩		



第９図　淑順門西地区グリッド設定図



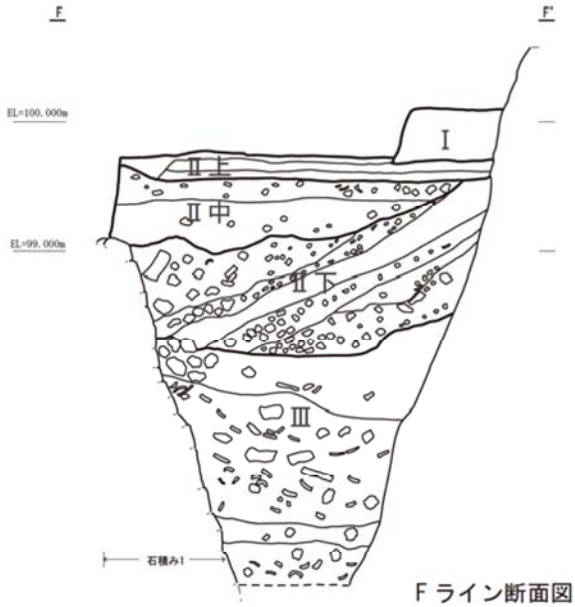
第 10 図　淑順門西地区土層堆積範囲図

ている。

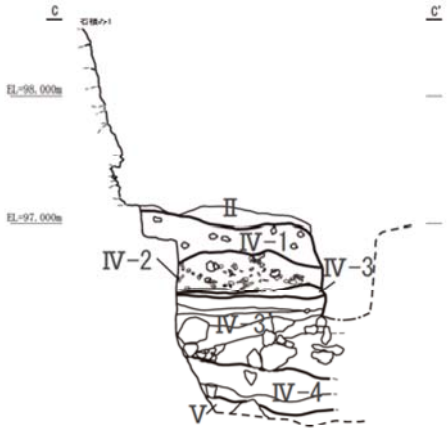
色調はオリーブ褐色～暗灰黄色、土質は粘土～シルト、中～巨礫・瓦を多く含み、層厚は 40cm ～ 200cm 以上で、下面まで掘り切れていない。南側上方から流れ込むような堆積をとっており、比較的短期間に形成された造成土であろう（第 12 図 No13 ～ 16、第 13 図 No ４・５）。また、その上部に当たるオリーブ褐色礫混土（第 12 図 No13・14）には瓦と漆喰が特に集中しているため、瓦だまり層と呼称した。この段階で一括廃棄を行った可能性が考えられる（図版９－４）。この下位は、黄褐色粘質土（第 12 図 No15）、暗灰黄色粘質土（第 12 図 No16）と下層に行くほど、地下水を多く含む傾向にあり、グライ化の影響のためか色調が暗くなり、粘性が強くなっている。

出土遺物は瓦が圧倒的に多く、Ⅱ層と異なるのは塼が少ない。陶磁器等はグスク時代～近世のものがあるが、量的には多くない。近世瓦や沖縄産無釉陶器の様相から 17 世紀代を下限として考えている。

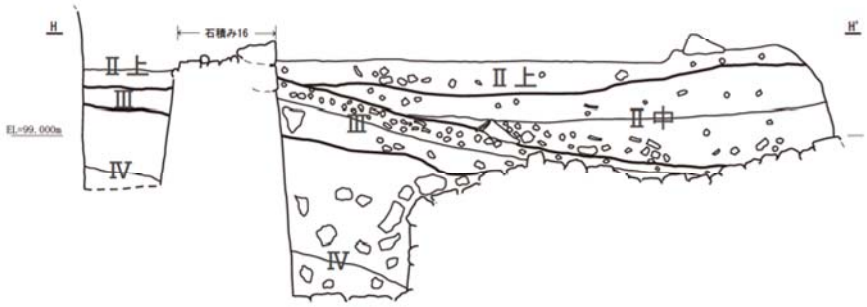
遺構としては、Ⅰ 10 西側では石積み 16 が比較的瓦が少ないオリーブ褐色土（第 13 図 No ４・５）を切り込



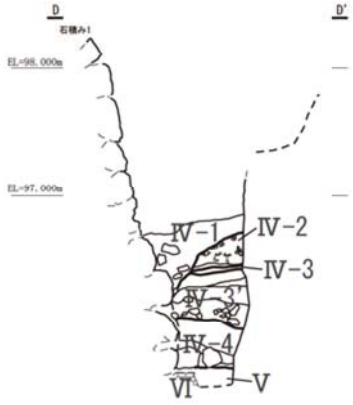
Fライン断面図



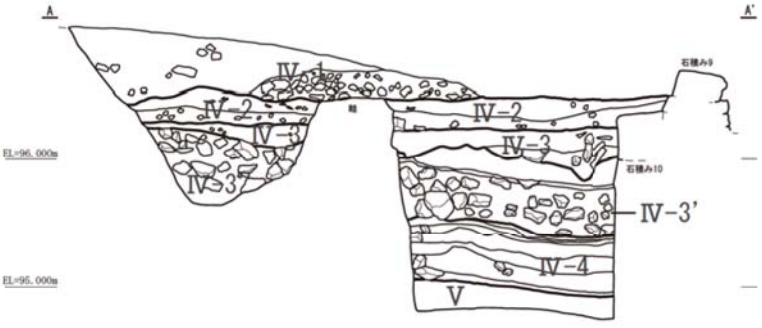
Cライン断面図



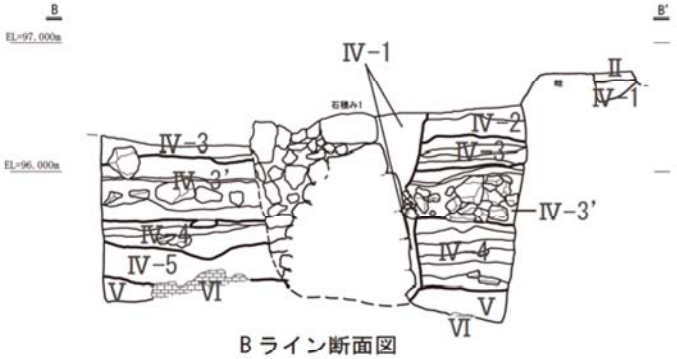
Hライン断面図



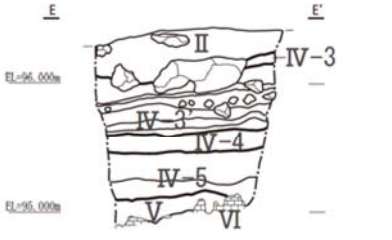
Dライン断面図



Aライン断面図



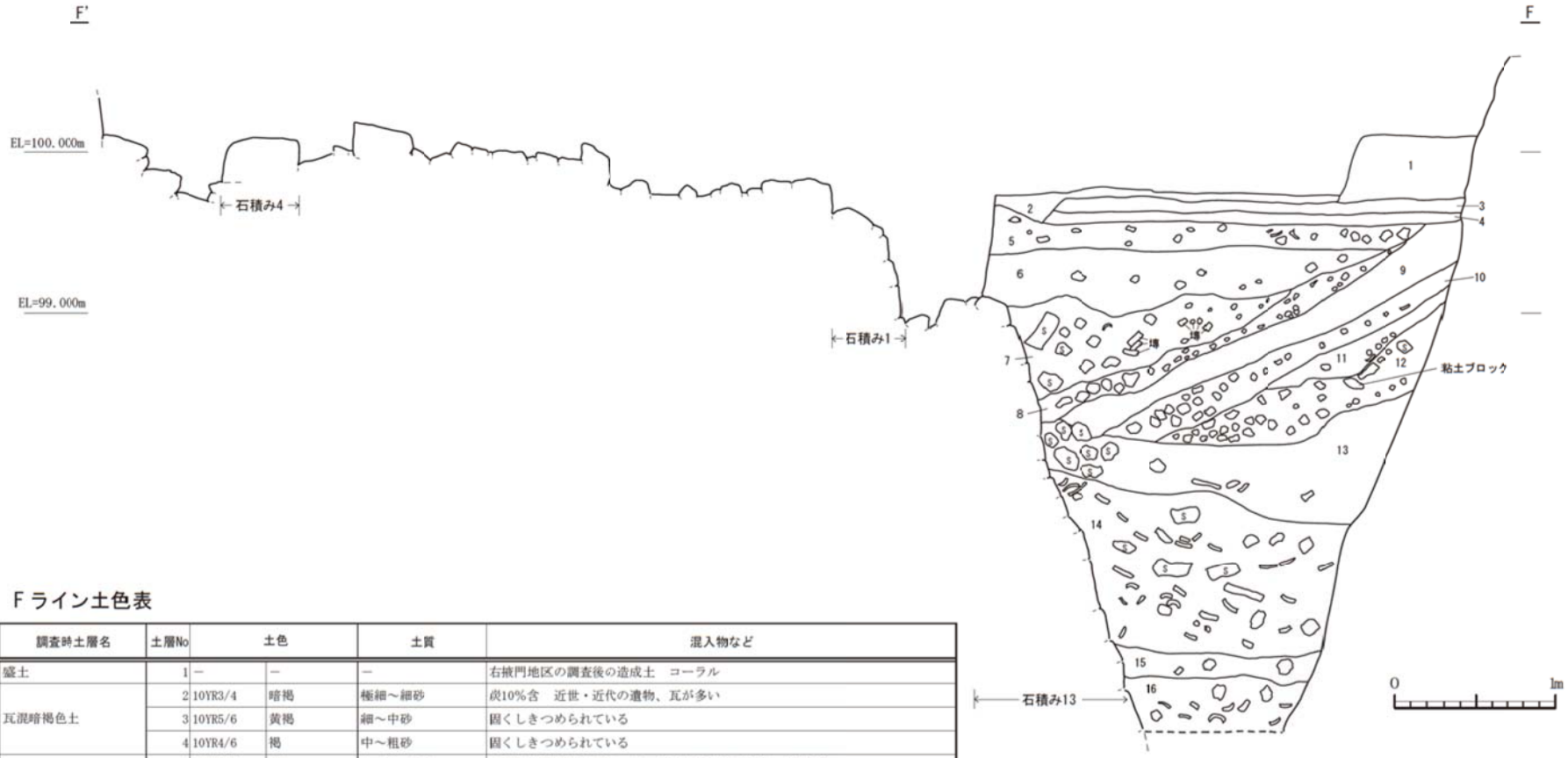
Bライン断面図



Eライン断面図

第 11 図　淑順門西地区層序対照図

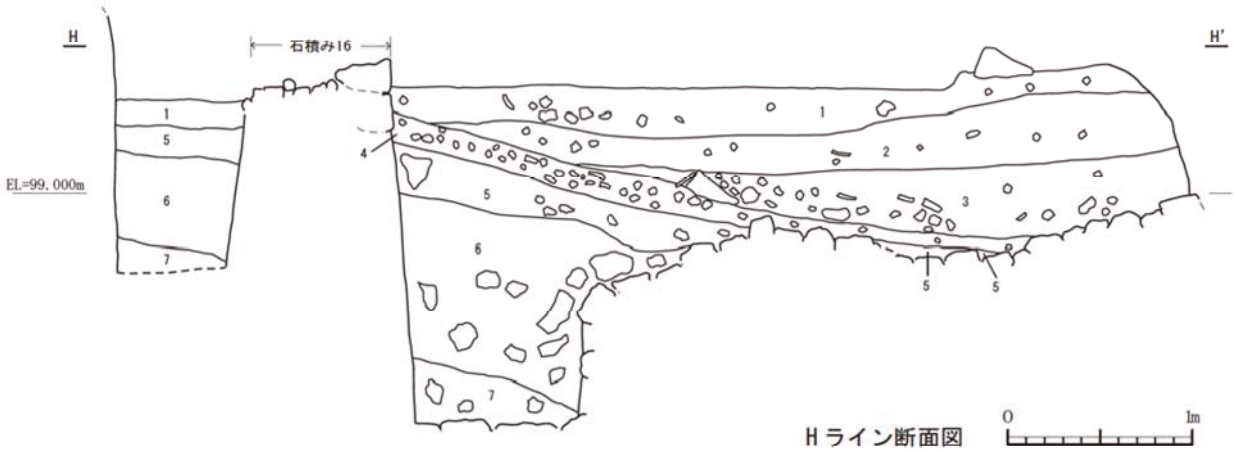
第12図　Fライン断面図



Fライン断面図

Fライン土色表

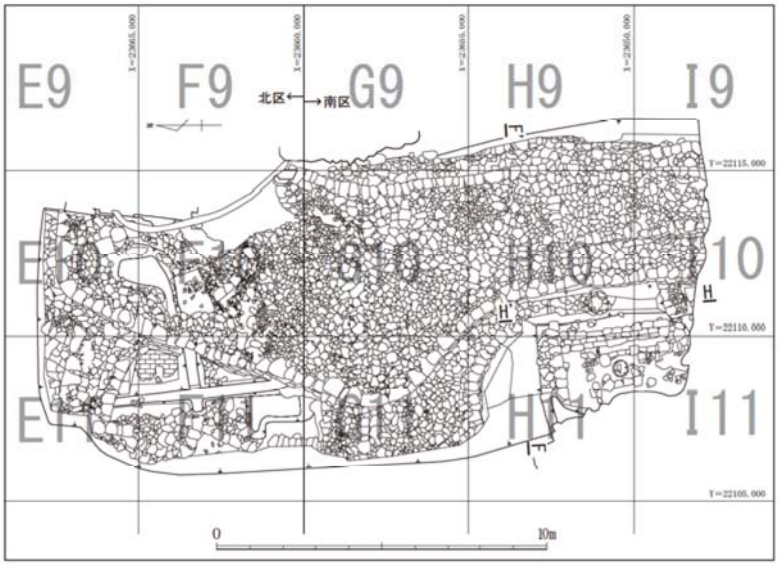
層序	調査時土層名	土層No	土色		土質	混入物など
Ⅰ	盛土	1	—	—	—	右城門地区の調査後の造成土　コーラル
Ⅱ上	瓦混暗褐色土	2	10YR3/4	暗褐	極細～細砂	炭10%含　近世・近代の遺物、瓦が多い
		3	10YR5/6	黄褐	細～中砂	固くしきつめられている
		4	10YR4/6	褐	中～粗砂	固くしきつめられている
Ⅱ中	瓦混褐色土	5	10YR4/4	褐	シルト～細砂	7.5YR5/8明褐粘土ブロック　石灰岩中レキ20%混　炭6%含
		6	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト～極細砂	明褐粘土ブロック　石灰岩細～中レキ10%混
Ⅱ下	瓦混レキ層	7	10YR5/4	にぶい黄褐	シルト～極細砂	石灰岩中～巨レキ40%　瓦多い
		8	10YR4/4	褐	シルト～極細砂	石灰岩細～中レキ50%混
		9	7.5YR5/8	明褐	粘土～シルト	石灰岩細～中レキ5%混(地山・マージの盛土)
		10	10YR5/6	黄褐	極細～細砂	石灰岩細～中レキ50%混
		11	10YR4/4	褐	極細砂～シルト	石灰岩細～中レキ20%混
		12	10YR5/6	黄褐	シルト	石灰岩中～巨レキ40%　瓦多い
Ⅲ	瓦だまり層（オリーブ褐礫混土）	13	2.5Y4/6	オリーブ褐	シルト	石灰岩細～巨レキ20%
		14	2.5Y4/4	オリーブ褐	粘土～シルト	10YR5/8黄褐粘土ブロック10%　石灰岩中～巨レキ40%混　瓦、漆喰が多い
	黄褐色粘質土	15	10YR5/8	黄褐	粘土～シルト	細砂5%混
	暗灰黄色粘質土	16	2.5Y4/2	暗灰黄	粘土～シルト	石灰岩中～巨レキ20%混　瓦、漆喰が多い



Hライン断面図

Hライン土色表

層序	調査時土層名	土層No	土色		土質	混入物など
Ⅱ上	瓦混暗褐色土	1	10YR3/4	暗褐	極細～細砂	炭10%含　近世・近代の遺物、瓦が多い
Ⅱ中	瓦混褐色土	2	10YR4/4	褐	シルト～細砂	7.5YR5/8明褐粘土ブロック　石灰岩中レキ20%混　炭6%含
		3	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト～極細砂	明褐粘土ブロック　石灰岩細～中レキ10%混
Ⅲ	オリーブ褐色土	4	2.5Y4/3	オリーブ褐	シルト～極細砂	石灰岩細～中レキ30%混　炭15%含
		5	2.5Y4/4	オリーブ褐	シルト	石灰岩細～中レキ10%混　炭5%含
Ⅳ	黄褐色土	6	10YR5/6	黄褐	シルト	石灰岩細レキ40%混　炭5%含
	黒褐色土	7	10YR3/2	黒褐	シルト～極細砂	石灰岩細～中レキ10%混　炭10%含



第 13 図　Hライン断面図

んで構築されている。また、石積み 13 の外面の下半はⅢ層で埋まっており、この層よりも古いのは確かだが、下面まで掘り切っていないので構築時期は現時点では限定できない。

Ⅳ層　グスク時代　遺物包含層・造成層

北区のＥ・Ｆ 10 トレンチとＦ 11 北・南トレンチ、南区の石積み４東トレンチと石積み 16 周辺トレンチに分布している。しかしながら、大きくグスク時代という年代観が共通しているだけで、北区と南区では全く様相が異なるため、別個に説明する。

北区　石積み等の遺構が見られない範囲において設定したＥ・Ｆ 10 トレンチとＦ 11 北・南トレンチで確認された土層が相当し、時期の違いにより５つの土層に分けた（第 11・15・16 図、写真３・４、図版４～６）。時期区分の根拠については、遺物の様相を本章第４節、更に首里城跡の他地区での状況や陶磁器研究の成果

写真１　H-11　Ｆライン断面

写真２　Ｈライン断面

なども考慮して第６章第１節で記述している。

Ⅳ－１層　　15 世紀後半～ 16 世紀前半　遺物包含層・石積み１構築時造成層

Ｆ 11 北・南トレンチの褐色土（第 15 図 No １、第 16 図 No2）・黄褐色土（第 15 図 No2）、Ｅ・Ｆ 10 の石積み１裏込（第 15 図参照）が相当する。褐色土は、層厚が 60cm で、Ⅳ－２～３´層を掘り込む形で、石積み１外面に接して１ｍ幅の溝状堆積している層と捉えた（第 14 図）。だが資料整理時に、石積み１最下面に沿っての拳大の礫がと共に５cm 程度の空隙が見られる部分も後述する理由により同層と捉えた（写真４～６、図版４－１）。黄褐色土は層厚が 20cm で、細～中礫を主体としており、前者の下層に潜り込むようにF11 北周辺に見られる。両層の出土遺物は、15 世紀後半以前の陶磁器を主体として、金属製品も比較的見られる。また、近世以降の陶磁器・瓦は本層の出土遺物の約１割は見られるので、単純には上層からの混入とするのには躊躇を覚えざるを得ない。しかし、調査者の現場での感触としては、あくまでも主体はグスク時代の遺物が中心であったため、Ⅰ層からの混入と考えておきたい。

さて、Ｅ・Ｆ 10 の石積み１裏込であるが、この一部を断ち割ったときにほとんど土が混じらず礫の間には空隙があることを確認した（図版６－８）。これは、先述した褐色土下層の空隙部と同様に、石積み１の構築がⅣ－２～５層が堆積した後、溝状に掘りこむいわゆる「布掘り」を行うことで根石を据えて、Ⅳ－１層で埋め殺しにしたためではないかと考えている。本章第３節でも後述するが、この部分の石積み１の石同士の間には空隙が大きく、地上に露出していたとは考えにくいことを挙げておく。

以上のことから、若干確証を欠く部分はあるが、本層に伴って石積み１が構築されたと考えている。ただその時期については、第６章第１節でも後述するが、昭和６年頃に阪谷良之進が作成した旧首里城図（以下「阪谷図」）と合致し、それ以前の姿を示すとされる横内家資料平面図（以下「横内図」）とは矛盾することから、本層がさらに新しいのではないかという見解も提示しておく。

他の遺構としては、石積み 11・12 とその周辺の裏込と考えられる礫群は黄褐色土を除去後に確認したものである。また、石積み２については、褐色土の直上に積まれており、Ⅳ－１層以降に造られたことは確

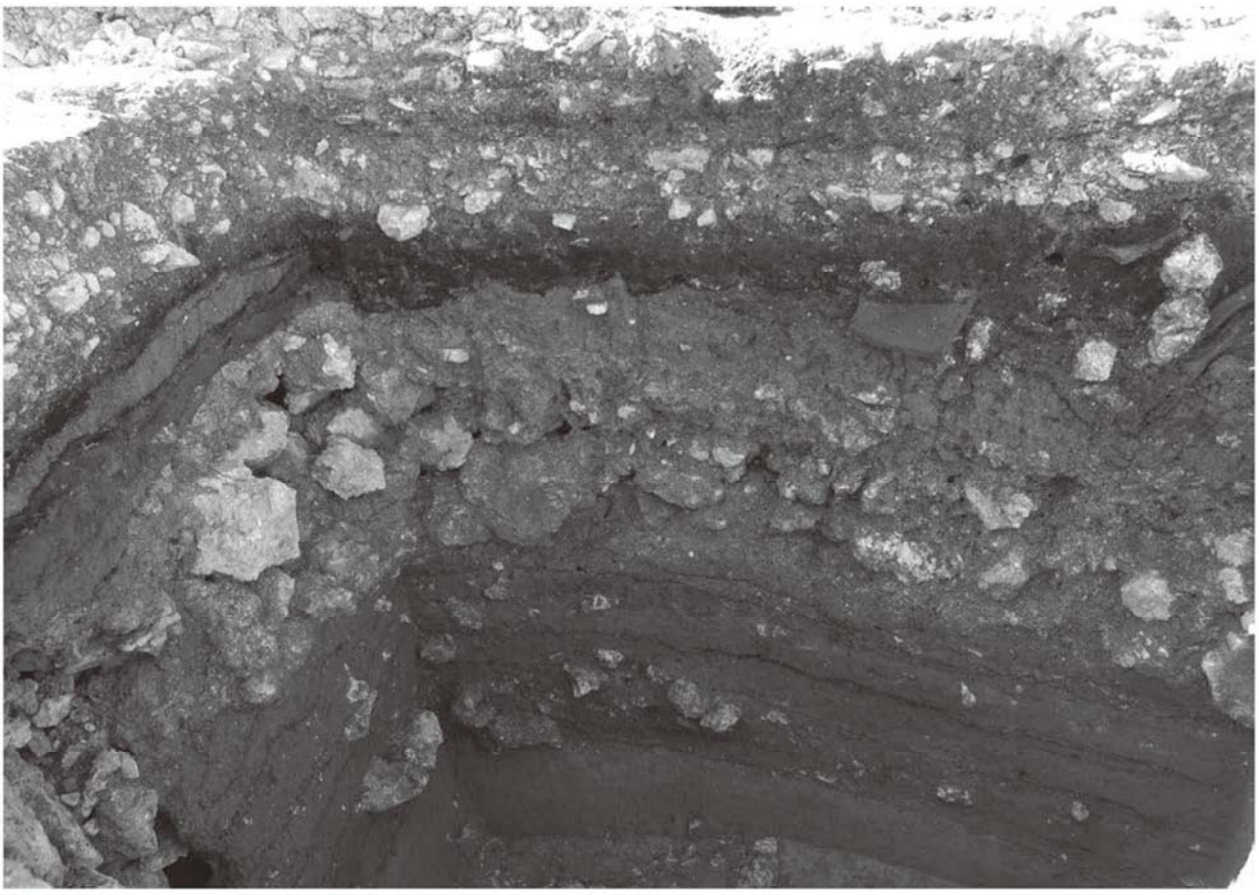
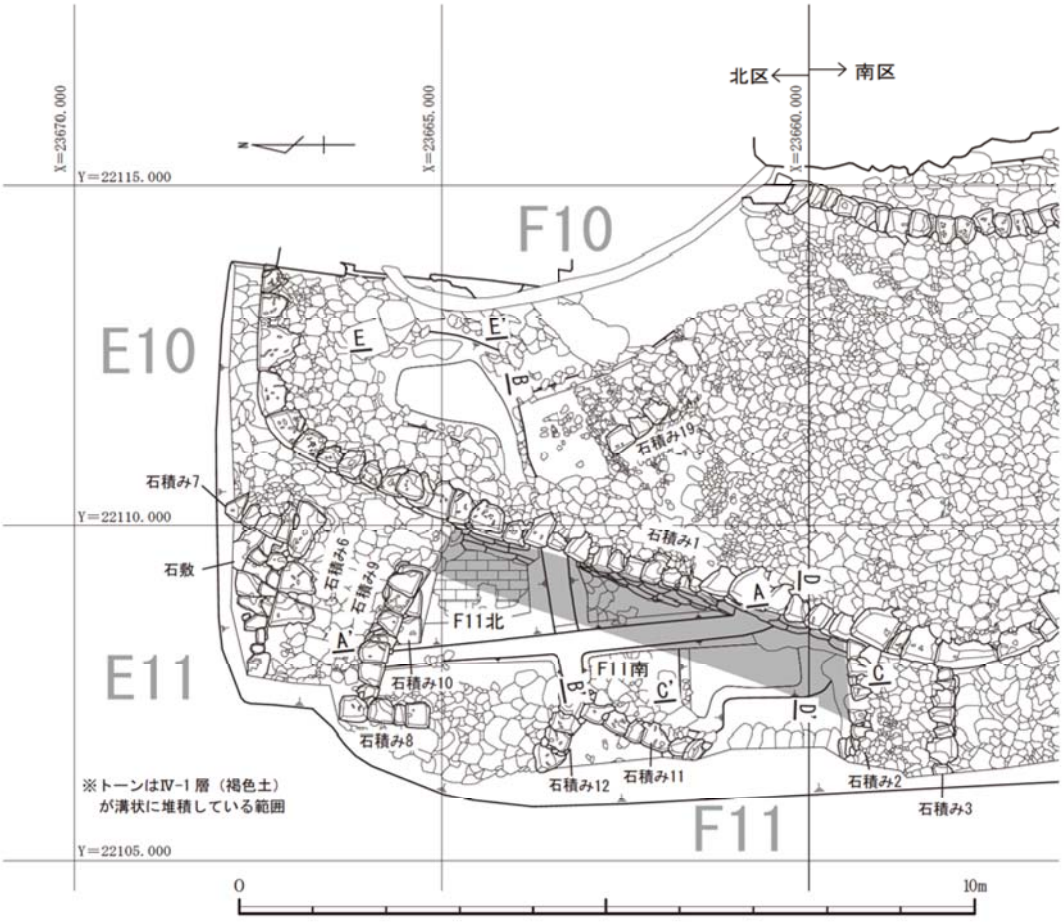


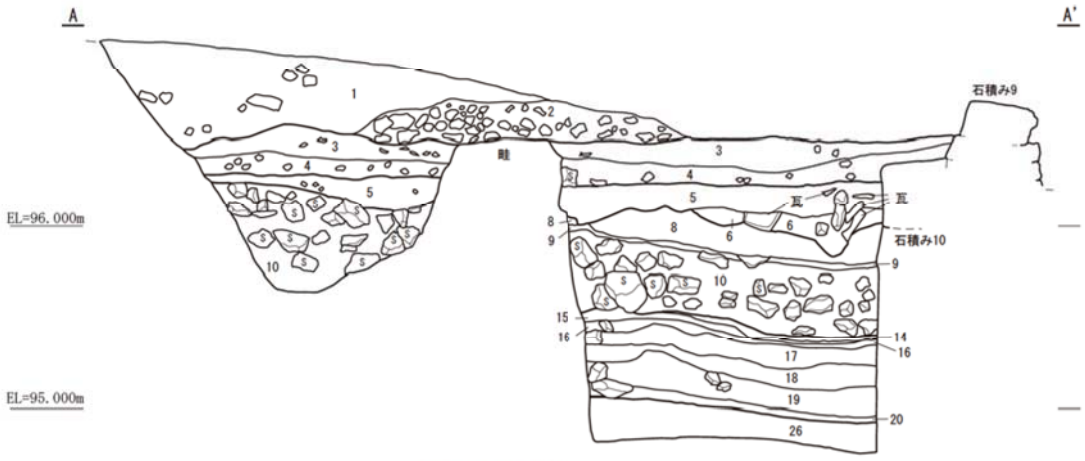
写真３　Ａライン北側断面



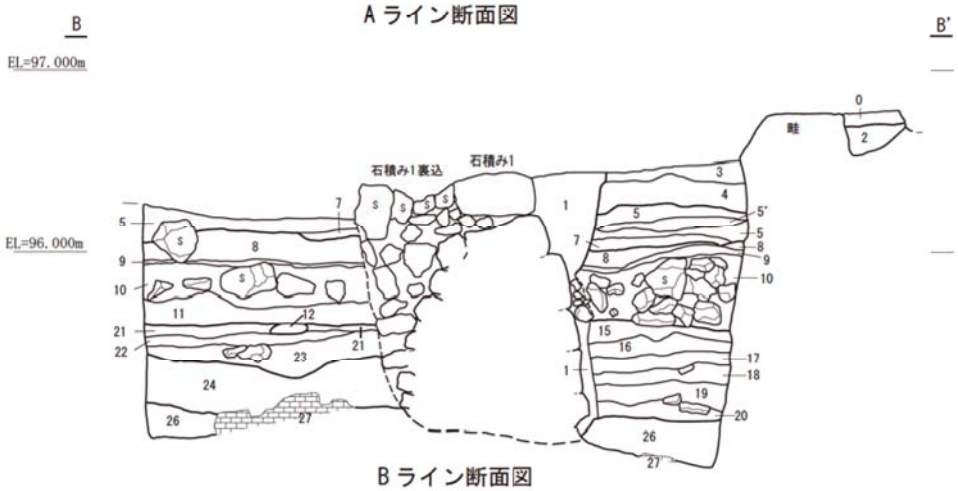
第 14 図　A ～ E ライン断面位置図

A・B・E ライン土色表

層序	調査時土層名	土層No	土色		土質	混入物など
Ⅱ	—	0	10YR5/4	にぶい黄褐	細～中砂	石灰岩細～中レキ20%混(コーラルのような土層)
Ⅳ-1	褐色土	1	10YR4/4	褐	シルト	7.5YR5/8明褐シルト(地山・マージ)ブロックが40%、石灰岩中～巨レキが5%混　炭、焼土5%含
	黄褐色土	2	10YR5/6	黄褐	石灰岩細～中レキ	細砂20%混
Ⅳ-2	黒褐色土(上層)	3	10YR2/2	黒褐	極細砂～シルト	石灰岩中レキ10%混　獣、魚骨　貝、炭が30%～40%含(貝類は、C,Dラインの3に比べやや少ない)
	黒褐色土(間層)	4	10YR5/4	にぶい黄褐	極細砂～シルト	石灰岩細レキ10%混
Ⅳ-3	黒褐色土(下層)	5	10YR2/1	黒色	極細砂～シルト	炭化物層
		5'	7.5Y5/8	明褐	シルト～粘土	粘土(地山、マージ)を部分的に入れている
		6	10YR3/1	黒褐	シルト	炭化物層　石灰岩中～巨レキ20%混
		7	5YR4/4	にぶい赤褐	シルト～極細砂	焼土層か？
Ⅳ-3'	暗褐色土	8	10YR4/2	灰黄褐	シルト～極細砂	炭5%含
	コーラル層	9	10YR7/6	明黄橙	極細砂	石灰岩細レキ20%混
	暗褐色レキ混土	10	10YR4/6	褐	シルト～細砂	石灰岩中～巨レキ50%混
	黒褐色土(下層2)	11	10YR2/2	黒褐	シルト	石灰岩細レキ5%混　明褐シルトブロック5%混　炭40%含
		12	10YR4/4	褐	シルト	明褐シルトブロック10%混　炭5%含
		13	10YR2/2	黒褐	シルト	炭50%含
Ⅳ-4	暗褐色土(下層)	14	10YR3/1	黒褐	シルト～極細砂	炭10%含
		15	10YR4/4	褐	シルト	7.5YR5/8明褐シルト(マージ)ブロック30%混　炭5%含
		16	10YR3/3	暗褐	シルト	炭5%含
	暗褐色土(下層2)	17	10YR3/3	暗褐	シルト～極細砂	明褐シルトブロック10%混　炭5%含
		18	10YR3/3	暗褐	シルト～極細砂	明褐シルトブロック5%混　炭5%含
	黄褐色土ブロック混暗褐色土	19	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト～極細砂	炭5%含　マイマイが部分的に集中する
		20	10YR4/4	黄褐	シルト	明褐シルトブロック5%混
	暗褐色土(下層３)	21	10YR3/3	暗褐	シルト～極細砂	明褐シルトブロック10%混　炭5%含
		22	10YR4/2	灰黄褐	粘土～シルト	明褐シルトブロック　石灰岩細～中レキ5%混　炭5%含
		23	10YR4/3	にぶい黄褐	粘土～シルト	明褐シルトブロック　石灰岩細レキ5%混　炭5%含
Ⅳ-5	褐色粘質土	24	10YR4/4	褐	粘土～シルト	石灰岩細～巨レキ5%混
		25	10YR4/6	褐	粘土～シルト	明褐シルトブロック5%混
Ⅴ	マージ	26	7.5YR5/8	明褐	粘土～シルト	—
Ⅵ	琉球石灰岩盤	27	—	—	—	—



Aライン断面図



Bライン断面図

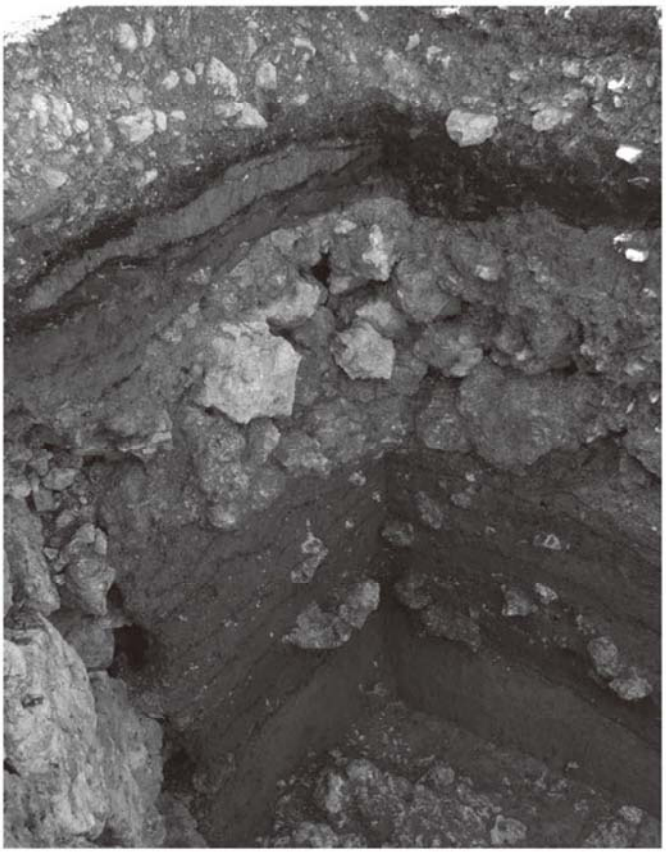
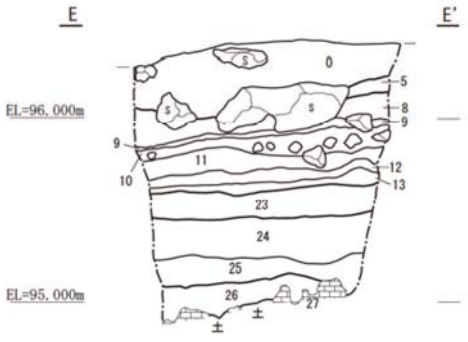
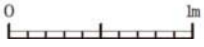


写真４　Bライン西側断面



Eライン断面図



第15図　A・B・Eライン断面図

かであろう（第16図Cライン断面図）。これと対になる石積み３も同様と考えられる。

Ⅳ－２層　　15世紀中葉　獣骨貝混遺物包含層

Ｆ11北・南トレンチに分布する黒褐色土上層（第15・16図No ３）と黒褐色土間層（第15・16図No ４）が相当する。前者は層厚10～30cmで、貝・骨・炭を多く含んだ遺物包含層で北に向かってやや傾斜している。より南側で標高がやや高いF11南の方が遺物量は多く、特に獣骨・貝類の集中が見られる（図版５－３～７）。石積み１の内側であるＥ・Ｆ10トレンチでは確認できていないが、検出レベルから考えると、削平を受けた可能性も考えられる。出土遺物は、15世紀中葉とされる京の内跡SK01で多く出土する陶磁器（県教委1998 ａ）が見られ、また金属製品が多い。また、図化等は困難であったが、赤漆皮膜片もＦ 11南で見られた（図版５－５）。

黒褐色土間層は層厚10cmで、色調は鈍い黄褐色と前者よりも淡く、炭等の混入物が少なく、砂質だが硬くしまっていた。直下のⅣ－３層は炭が主体で軟質であるため、その整地を行った層と考えられる。本層の出土遺物から見ると、下層のⅣ－３層との違いは明瞭であるため、黒褐色土上層と共に便宜的にⅣ－２層とまとめた。

遺構としては、Ｆ11北において後述する石積み10の直上に構築された石積み９には本層が伴っており、同時性があったものと思われる（図版８－８）。

Ⅳ－３層　　14世紀末～15世紀前半　炭化物層

Ｅ・Ｆ10トレンチとＦ11北・南トレンチに分布する黒褐色土下層である（第15図No ５～７、第16図No ５、図版５－１）。層全体がシルト質となった炭化物で形成されているように思われ、炭化物層と称した。この炭化物は、土の洗浄によりコメを中心とした炭化種子を多く含んでいた。層厚は５～20cmで、北側であるF11北に厚く堆積している（図版６－１）。また、Ｆ11北の一部において、本層の中位に層厚５cmのＶ層に起因すると思われる明褐色粘土～シルトブロックが敷かれたように堆積していた（図版４－１、図版６－１）。明褐色土を炭化物層に薄く部分的に敷かれたような状況は、京の内地区ＳＫ03の堆積状況でも確認されている（県埋文2011）。

本層は石積み１に切られているため、それより古い土層である。出土遺物には、大和系瓦が圧倒的に多く、陶磁器も青花が出土しないなど上層とは明確な時期差が窺われる。また、金属製品は多くないが、銭貨では大銭が多く見られた。

本層に覆われて石積み10が検出されており、同時性が考えられる。また、この石積み10の南に本層が幅20cm、長さ100cm、深さ20cmの不定形に落ち込んでいるが人為的なものかは不明である（第15図Ａライン断面図、No ６）。

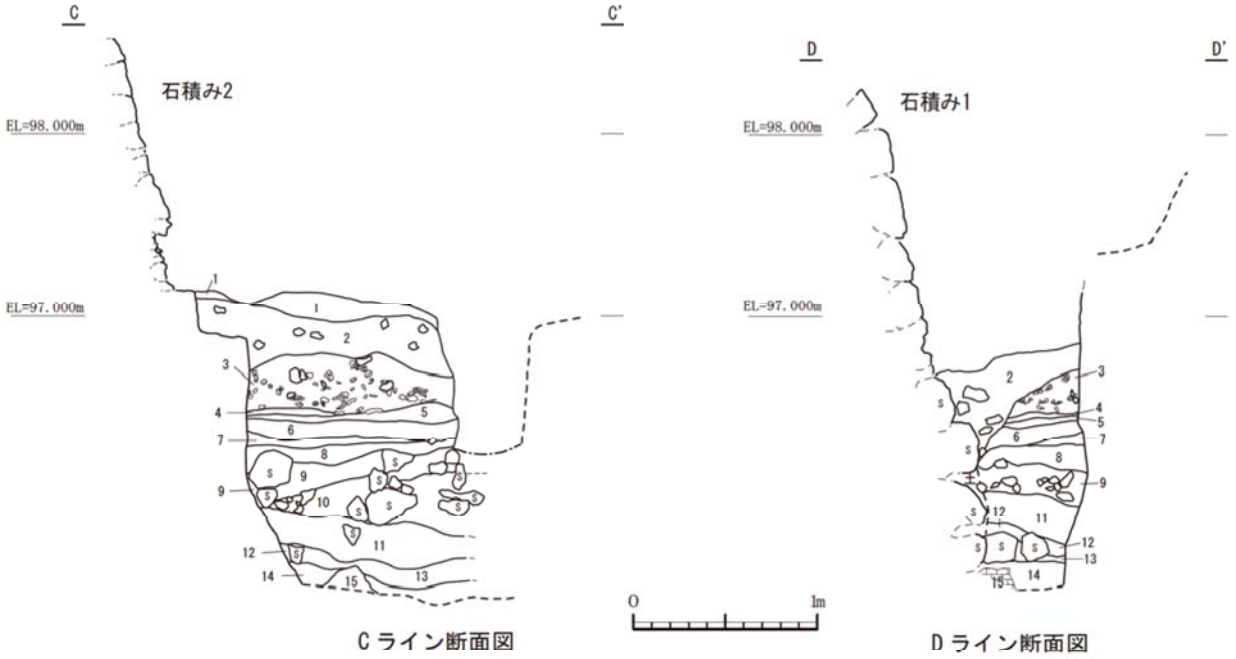
Ⅳ－３´層　　14世紀末～15世紀前半　造成層

後述するように、時期的にはⅣ－３層と大きく変わらないが、性格の違いにより、Ⅳ－３´層とした。

Ｅ・Ｆ10トレンチとＦ11北・南トレンチに分布する上位より黄褐色礫混土（第16図No ６・７）、暗褐色土（第15図No ８、第16図No ８・９）、コーラル層（第15図No ９）、暗褐色礫混土（第15・16図No10）、黒褐色土下層２（第15図No11～13）が相当する。このうち最下位の暗褐色礫混土は巨礫が主体で層厚50cmあり、その上層をF11南以外には分布する硬くしまった砂礫のコーラル層が薄く水平に堆積しており、遺物もほとんどないことから一連の造成土と考えられる。この上層には暗褐色土が堆積しており、Ⅳ－３´層の中では遺物が多い土層であるが、Ⅳ－３層とほぼ同様な出土遺物であり、明確な時期差は見出し難い。

この他にも一部に見られる土層として、黄褐色礫混土と黒褐色土下層２がある。前者はＦ11南で暗褐色土の上層に見られ、暗褐色礫混土とは別の造成土かであろうか。後者はＥ・Ｆ10で暗褐色礫混土の下層に見られるⅣ－３層と類似する炭化物層で、やはり炭化種子も多い。このことは、このような炭化物層が当該期には複数あった可能性が考えられる。このように、一部共通しない土層があるが、暗褐色礫混土は石積み１に切られておりそれより古い。

遺構としては、先述した石積み10は、断面観察においては本層の直上に見られるため、本層造成時に構築された可能性もあるが、確証は得られなかった。また、Ｆ11北ではコーラル層上面で暗褐色土が堆



C ライン断面図　　D ライン断面図

C・D ライン土色表

層序	調査時土層名	土層No	土色		土質	混入物など
Ⅱ	—	1	10YR5/4	にぶい黄褐	細～中砂	石灰岩細～中レキ20%混
Ⅳ-1	褐色土	2	10YR4/4	褐	シルト	7.5YR5/8明褐シルト(地山・マージ)ブロックが40%、石灰岩中～巨レキが5%混　炭、焼土5%含
Ⅳ-2	黒褐色土(上層)	3	10YR2/2	黒褐	極細砂～シルト	石灰岩中レキ10%混　獣、魚骨　貝、炭が30%～40%含
	黒褐色土(間層)	4	10YR5/4	にぶい黄褐	極細砂～シルト	石灰岩細レキ10%混
Ⅳ-3	黒褐色土(下層)	5	10YR2/1	黒色	極細砂～シルト	炭化物層
Ⅳ-3'	黄褐色レキ混土	6	10YR5/3	にぶい黄褐	極細～細砂	石灰岩細～中レキ30%混　炭10%含
		7	10YR5/8	黄褐	シルト～極細砂	石灰岩細レキ20%混
	暗褐色土	8	10YR3/3	暗褐	シルト	—
		9	10YR4/2	灰黄褐	シルト	石灰岩細～中レキ20%混
	暗褐色レキ混土	10	10YR4/6	褐	シルト～細砂	石灰岩中～巨レキ50%混
Ⅳ-4	黄褐色土ブロック混暗褐色土	11	10YR4/3	暗褐	シルト	7.5YR5/8明褐シルトブロック(マージ)が20%混　炭5%含
		12	7.5YR4/6	褐	シルト	10YR4/2灰黄褐シルト(13層)がブロック状で10%混　炭5%含
		13	10YR4/2	灰黄褐	シルト	石灰岩細レキ5%混
Ⅴ	マージ	14	7.5YR5/8	明褐	粘土～シルト	—
Ⅵ	琉球石灰岩盤	15	—	—	—	—

第 16 図　C・D ライン断面図

写真５　F-11 南　東壁断面

写真６　C ライン断面

積した幅20cm、長さ80cm、深さ15cmの不定形の落ち込みがあったが、人為的なものかは不明である（図版６－２）。

Ⅳ－４層　　14世紀後半　遺物包含層

Ｅ・Ｆ10トレンチとＦ11北・南トレンチに分布する上位より暗褐色土下層（第15図No14～16）・暗褐色土下層２（第15図No17・18）・黄褐色土ブロック混暗褐色土（第15図No19・20、第16図No11～13）・暗褐色土下層３（第15図No21～23）が相当する。層厚は60cmと厚く、全体的に上層と比べるとシルト質で、地山に起因する明褐色シルトブロックが多く見られるが、炭化物も比較的多い。先述したが、石積み１外面とは約５cmの空隙があり、上方から掘り込まれたときに生じたものと考えており、石積み１より古いことの根拠と考えている（写真４～６、図版４－１）。

この内暗褐色土下層及び同２・３については石積み内外に見られ、土質や混入物等において細分したものも北へ緩やかに傾斜する水平堆積をとっており、大きく同じ層と捉えられる。なお、Ｆ11北では、暗褐色土下層では陶磁器・獣魚骨が比較的出土し炭化物の広がりが見られた。その下層の暗褐色土２においてはオキナワヤマタニシなどの陸生貝類の集中（図版６－３）、その最下位においてグスク土器がまとまって出土していること（図版６－４・５、土器No301・303・304）が見られた。このような特徴と合わせて、一定量の陶磁器等が出土しているので、これらの土層堆積時には生活域が近接していたものと思われる。

また、黄褐色土ブロック混暗褐色土や暗褐色土下層３は石積み１外側のＦ11において分布するが、上部よりも地山ブロックを多く混入し、地山であるⅤ層直上に堆積しているがその下面は平滑であることから、削平等の人為的な行為があった可能性が高い。

出土遺物は、Ⅳ－３・３´層と同様の陶磁器も見られるが、青磁Ⅱ類（鎬連弁文）・白磁Ｃ２群（ビロースクタイプ）・グスク土器など古手の遺物があり、大和系瓦が出土しないことから、上層とは時期差が窺われる。

写真７　Ｂライン東側断面

第 17 図　淑順門西地区全体平面図

Ⅳ－５層　　13 世紀後半～ 14 世紀前半　遺物包含層

石積み１の内側に当たるＥ・Ｆ 10 トレンチのみに見られる褐色粘質土（第 15 図 No24・25、写真６・７、図版６－７）が相当する。層厚は 40cm と比較的厚いが、あまり細分できる特徴はなく土質は粘土質で非常に硬くしまっており、混入物も少ない。地山であるＶ層直上に堆積しており、下位には地山起因のシルトブロックが見られるため、人為的な作用が及んだ可能性もある。

出土遺物は少ないが、グスク土器を主体として青磁Ⅱ類が見られることから、県内の各グスクにも類例があり 13 世紀後半～ 14 世紀初頭とされるグスク形成期の最古段階と言える。また、ウシ等の大型の獣骨も出土している（図版６－６）。

本層に伴う明確な遺構はない。

南区　石積み４東トレンチ・石積み 16 周辺トレンチにおいて、出土遺物からⅣ層と考えられる土層を確認した。結論から言うと、出土陶磁器の年代観からはⅣ－１・２層に近いが、土層自体は異なるもので別個に説明する。

石積み４東トレンチの暗褐色礫混土下部（第 24 図、写真 26・27）は、トレンチが狭いこともあり近世以降の遺物も見られることと基本的に土質・色調の違いはなく、前述したⅡ層の暗褐色礫混土と捉えざるを得ない。しかしながら、この下部 30cm 前後、石積み５を覆うように堆積している土層が 15 世紀代の陶磁器・二枚貝が多く出土していることから、本来的にはⅣ層であったと考えたため、暗褐色礫混土下部と設定した。つまり、石積み５を埋め、石積み４の基礎を造成した土層と考えられる。本章第４節で後述するが、出土陶磁器の様相は、北区Ⅳ－１・２層に類似しており、15 世紀中葉～ 16 世紀前半の可能性が考えられる。

石積み 16 周辺トレンチでは礫を多く含む黄褐色土（第 13 図 No ６）、その下層に炭が多く含まれる黒褐色土（第 13 図 No ７）が堆積している。黒褐色土の下部は礫が集中しており、その下層は掘り下げなかった。石積み１の外面に堆積しており、本来的にはより西側に堆積が続いたものと思われる。前者は層厚が 100cm で礫も多いことから造成土の可能性もある。ただ、後者は層厚が 20cm で炭が多く陶磁器も一定量見られることから石積み際に廃棄された土層とも考えられる。しかしながら、出土陶磁器の違いは明確ではなく、両者とも暗褐色礫混土下部と同様でⅣ－１・２層に類する傾向である。

Ⅴ層　琉球石灰岩の風化土（島尻マージ）

Ｅ・Ｆ 10 トレンチとＦ 11 北・南トレンチで確認した明褐色シルト。いわゆる地山で、下層の琉球石灰岩のの風化土とされている。Ｆ 11 南で標高 95.6 ｍ、その７ｍ北側のＦ 11 北で 95.0 ｍとなり、緩やかに北側へ傾斜している。

石積み１の根石を確認した範囲は、本層の直上に載っており、その際に削平を行ったものと思われる。また先述したように、石積みがない範囲においてはⅣ－４・５層も本層の直上に不整合の状況で堆積しており、やはり人為的な削平があった可能性が窺われる。

Ⅵ層　琉球石灰岩

Ｅ・Ｆ 10 トレンチとＦ 11 北・南トレンチで確認した岩盤でⅤ層とほぼ同じレベルで部分的に確認されている。

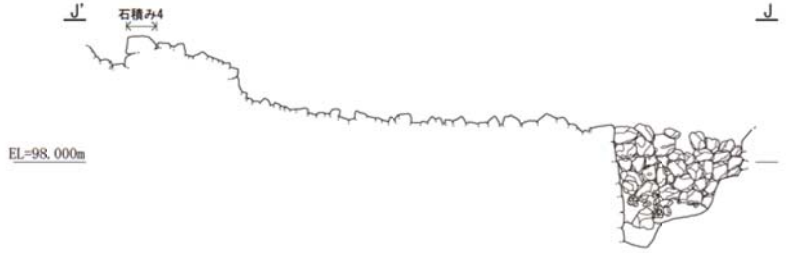
今回の調査では、さらに下層の島尻泥岩層いわゆるクチャは確認できなかった。

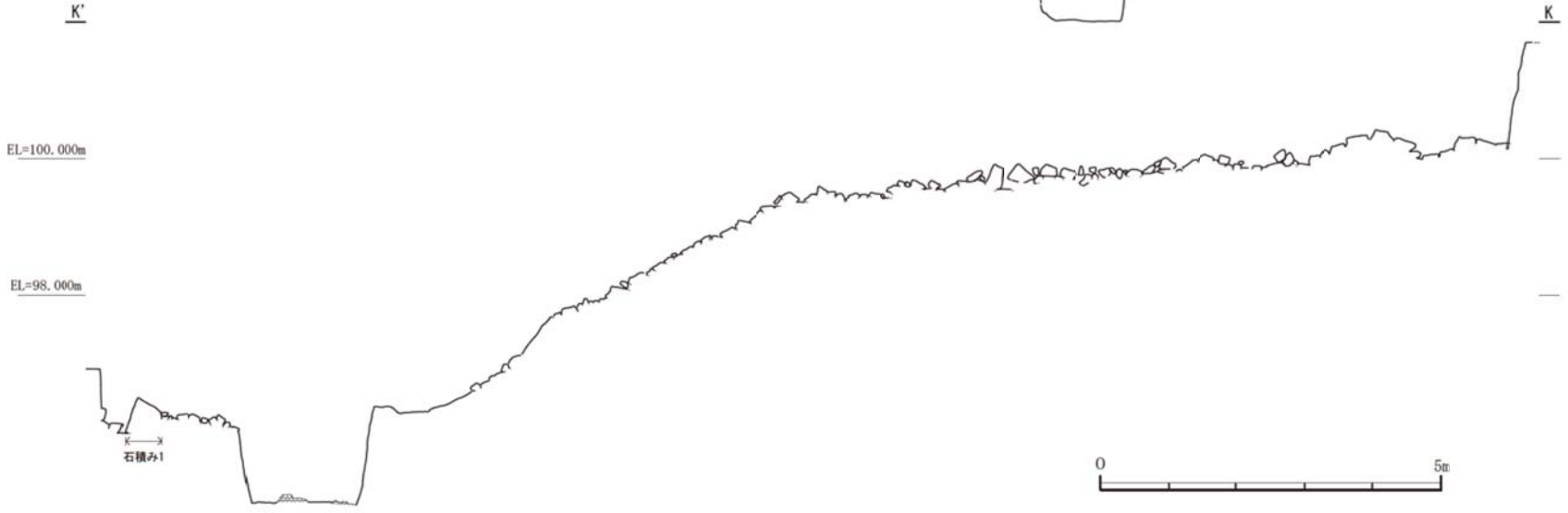
第３節　遺構

今回確認された遺構は、石積み 16 基、石敷１基、埋甕３基、礎石建物跡１基が確認された。

各遺構は単独で存在しているというよりも関連しているものが多いので、そのまとまりごとで説明していく。特に、石積みについては、面を持っている列状のまとまりに対して遺構番号を付しており、石嬬のように裏込めを介して両側に面を持つものに対しては、遺構番号が別となっているが、これらはセットとして捉えることとする。なお、遺構を構成している石は全て琉球石灰岩である。第 17 図は全体平面図、第 18 図は縦横断面図である。

第18図　J・K・Lライン断面図





１．内郭城壁（石積み１・４・15・17）

第６章第１節で後述するが昭和初期の阪谷図（第６図、第 112 図）に描かれ、戦前まで存在していた内郭城壁である。本調査区においては、現在、復元されている淑順門の西側から正殿側に伸びる部分を長さ 20 ｍに亘って確認している。石積み１が城郭の外側、裏込めを挟んで、石積み４が内側に向けた両面積みとなっている。城壁の幅は、北側では約 6.5 ｍ、Ｇ 11 で石積み１が大きく東側に屈曲し、その南側では約４ｍとなる。また、Ｈ 10 南からその南側にかけて、この城壁内に石積み 15 を外側、石積み 17 を内側とし、幅約２ｍのやはり両面積みの石積みとなっており、城壁の胸壁である可能性が考えられる。石積み 18 は内郭城壁の裏込内で確認され、先述の石積み 15 と接した東西方向の石積みで、関連性が強いものと考えたので、本項で説明する。

根石の構築方法　根石は前節で先述したＥ・Ｆ 10 トレンチとＦ 11 北・南トレンチにおいて、地山であるＶ層直上に直接置いていることを確認した（図版４－１、５－６）。ただ、前節でも述べたように、地山に単純に置いたのではなく、下記のような状況であった。石積み１外側にはⅣ－１層の褐色土（第 15 図 No １・第 16 図 No ２）が検出面で深さ 1.4 ｍ、石積み２より北側へ石積み９にかけて長さ６ｍ、幅約 0.5 ～１ｍの範囲に、平面形では溝状に堆積していた（第 14 図、第 15 図Ｂライン断面図）。ちなみに、図版５－１は、その褐色土を除去し、溝状になっている状況である。

また、E10 北・F10 南の石積み内側には、裏込めに相当する礫層が検出面で深さ約 1.2 ｍ、長さ約４ｍ、幅約 0.5 ｍで確認されている（写真 14、図版６－８）。さら、Ｆ 11 北トレンチで外面の積み方を見ると、被熱したと思われる赤変した石が部分的に入り込んでおり、また石と石の間の隙間が 10cm 以上開いていることが多い（写真９、図版４－１・７－１）。これらのことから、石積み１は、少なくともこの範囲においては、その当時の地表面を深さ１ｍ以上、幅１～ 1.5 ｍ程度を溝状に掘り込むいわゆる「布掘り」を行い、根石を埋め殺しにして据えたと考えている。

なお、根石のレベルは、Ｆ 11 南と５ｍ離れたＦ 11 北では、高さ 50cm の差があり、本来の地形は南から北に向かって傾斜していたことが分かる（第 20 図）。

構築時期　上記より城壁外面の石積み１は、Ⅳ－１層段階で構築したと考えているので上限は 15 世紀後半となる。城壁内面の石積み４は、Ｉ９においてはⅣ層上面に根石が置かれており（第 26 図）、先述したようにこの層は近世遺物の混入はあるが 15 世紀中葉と考えられるので、こちらが先に造られた可能性もある。ただ、この部分より南側はⅣ層は見られず、裏込め状の礫群の上に根石が載っているなど様相が異なるので、先の見解については保留にしておき、戦前まで存在した内郭城壁の上限は今のところ 15 世紀後半としておきたい。

一方、明らかな造成土であるⅣ－３´層の黄褐色・暗褐色礫混土（第 15 図 No10、第 16 図 No ６・７、写真３、図版４）、後述する石積み 10 などから、14 世紀後半以降には、石積み１以前の内郭城壁があった可能性については否定しない。一方下限については、Ⅳ－１層には１割ほど近世以降の遺物も含むこと、第５章で後述するが根石の部分においても昭和６年頃の阪谷図と合致することから、近代以降の構築という意見もある。ただ、明治以前とされる横内図の内郭城壁と合致する石積みについては、本調査区では判然としない。

以下、各石積みの様相について説明する。

石積み１（第 19 ～ 22 図、写真８～ 18、図版７）　淑順門より西へ伸びる内郭城壁外面（淑順門地区石積み２）に続くもので、総延長では23ｍを測る。調査区北東端より石積みが西側へ続き、Ｅ 10 では西 120° で南西に伸び、Ｇ 11 では東 45° で屈曲し、Ｈ 10 では西 30° で緩やかに南へ延び、調査区南端までに確認された。各変化点は、直線的ではなく、緩くコーナーとなっているのが特徴的である。

天端は残存しておらず、検出面より高さ 0.3 ～ 0.8 ｍ、１～４段ほどしか残存していないところが多い。ただ、根石を確認したＦ 11 南（写真 10）やＩ 10（写真 15）においては、高さ３ｍ、12 段以上見られる。しかし前述したように、この根石が確認された部分でも、その外面がⅣ層に埋もれており、１ｍ以上は埋め殺しになっていたものと思われる。同様に、Ｈ・Ｉ 10 では石積み１の外面がⅡ～Ⅳ層で約２ｍ埋もれており、かなりの部分が最終的に埋め殺しになったようである。なお、堆積層が確認できていない石積み１外側のＥ 10（写真８）やＧ 11（写真 11）では全て礫で充填されており、他の石積みの裏込めと考えられる。

勾配は、各地点や段数によって、75 ～ 85° と違いがある。Ｆ 11 北では、根石から４段目は 80° 、５段目は 75° 、６段目は 85° となり、４～６段目にかけて勾配がまちまちである（第 15 図Ｂライン断面図）。Ｆ 11 南

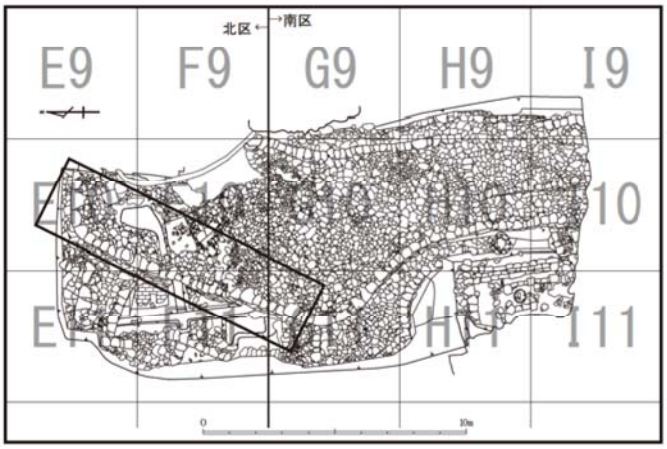
では、根石から３段目は85°、４～10段目は80°と４段目から急激に角度が緩くなっている（第16図Ｄライン断面図）。Ｇ11では、根石は石積み13の裏込に埋もれているが、５段目までの角度は80°である（第12図）。Ｉ10は根石を確認していないが、現状の最下段から８段目は83°、９～12段目は75°と上位に行くほど緩くなっている（第23図）。

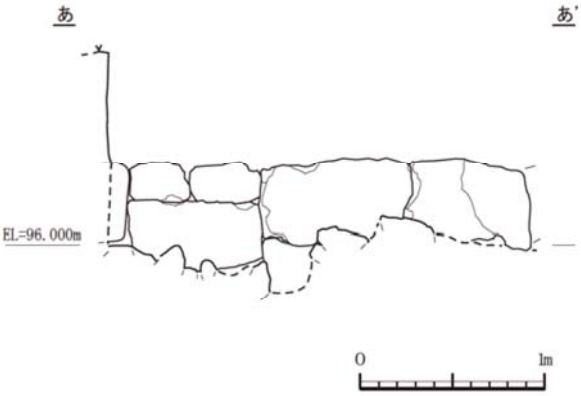
石の積み方についても、各地点や段数によってやや状況が異なる。Ｅ11北側では、長さ60～80cm、高さ20～40cmの大きな切石が外面の裏込に埋もれるように１～２段見られ、長方形の切石を横方向に積むいわゆる布積み風となっている（第19図、写真８）。Ｅ10南側からＦ11、石積み２・３にかけては、大きな切石はまばらとなり、加工が不整形な一辺20～40cmの石を目地よりも端を隙間なく積む「合端合せ（北垣1991）」とも言うべき状況であり、特に下方に行くほど隙間も多い（第20図、写真９・10、図版７－２・３）。Ｇ11、石積み２・３よりも南側からＨ10北側までは、また布積み風となっているが、先述の部分より切石の高さが20cm戦後のものが小振りのものが多い印象を受ける（第21図、写真12・13・16・17、図版７－４）。比較的横目地を通す意識は見られるが、石の大きさにはばらつきがあるので、やはり現場合せの印象が強い。Ｈ10南側から急減期に積み方が変わり、加工が不整形な一辺20～40cmの石を「合端合せ」、いわゆる「あいかた積み（當眞1988･1990･2012）」に近い方法で隙間なく積んでおり、目地を通す意識はまったく感じられない（第22図、写真15、図版７－５）。

石積み４（第24図、写真19～24、図版８－１～６）　内郭城壁の内面（淑順門地区石積み３）に続くもので、Ｇ･Ｈ･Ｉ９で検出されており、南北に13ｍにわたって確認されている。ただ、南側で４ｍほど周囲よりも50cmほど検出面が低い範囲で石積みが確認されておらず、撹乱を受けたものと思われる。勾配は、最も高く残存しているＧ９付近ではほぼ90°である（第18図Ｊライン断面図）。Ｇ９南側は長さ30～50cmの切石による横目地が

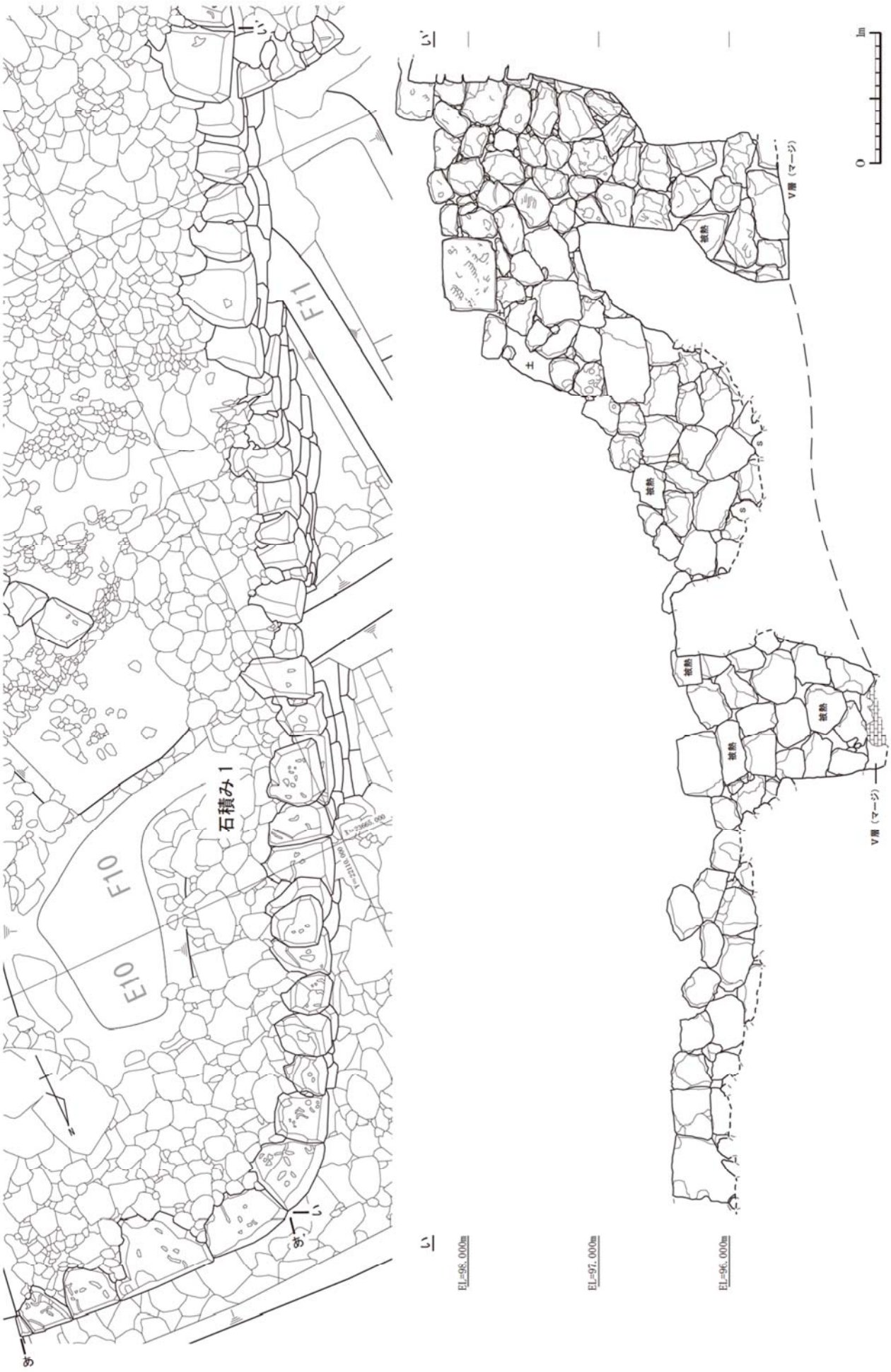
写真８　石積み１　E10付近

写真９　石積み１　F11北付近



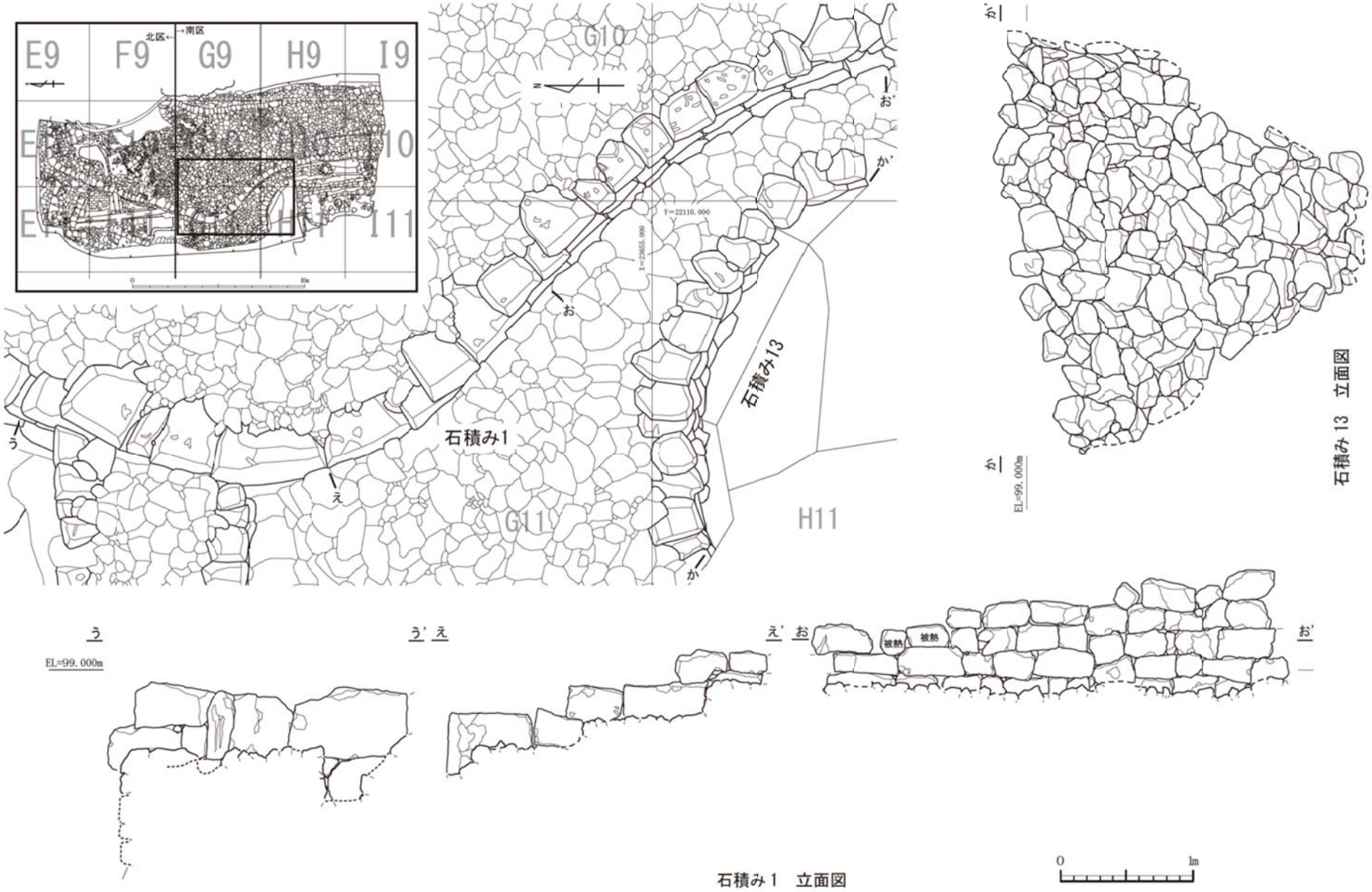


第19図　石積み１立面図（1）



第 20 図　石積み 1 立面図（2）

第21図　石積み1 立面図（3）



石積み13　立面図

石積み1　立面図

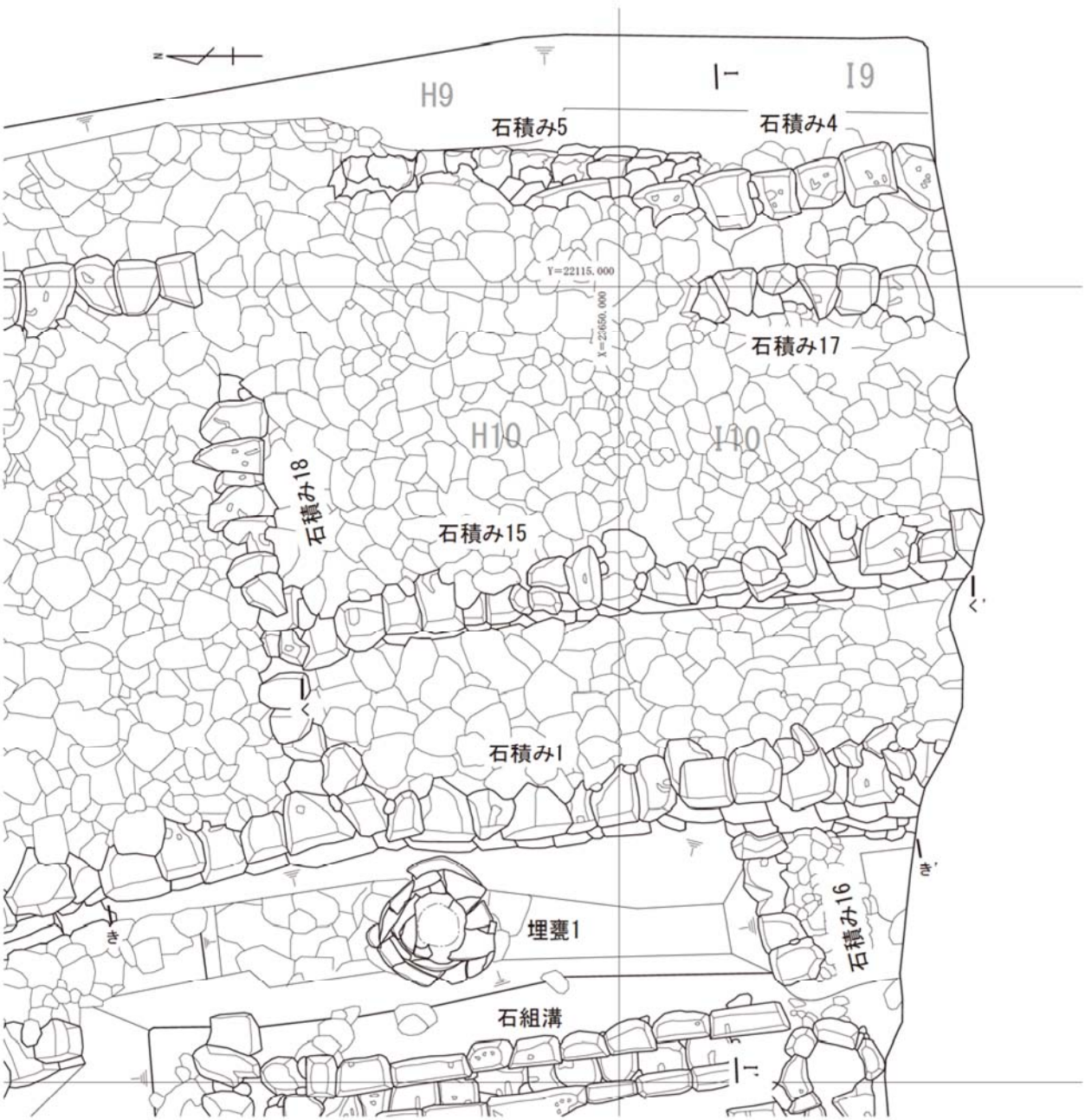
写真 10　石積み 1　F11 南付近

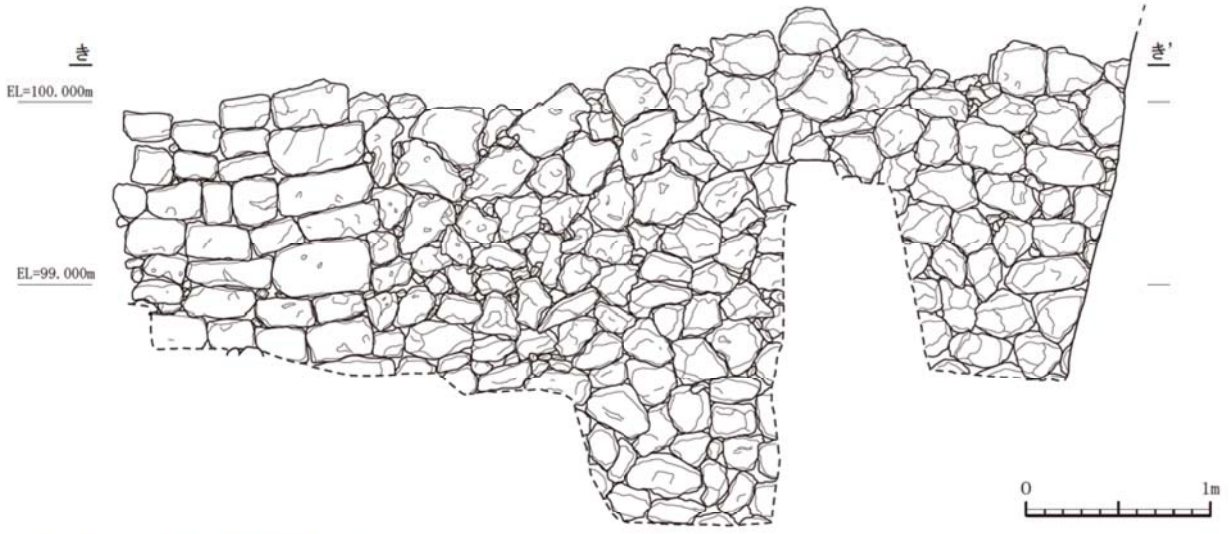
写真 11　石積み 1　G11 北付近

写真 12　石積み 1　G11 南付近

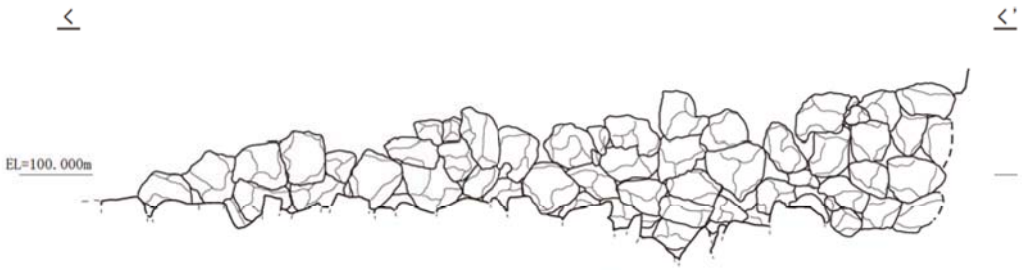
写真 13　石積み 1　H10 北付近

写真 14　石積み 1　北側裏込

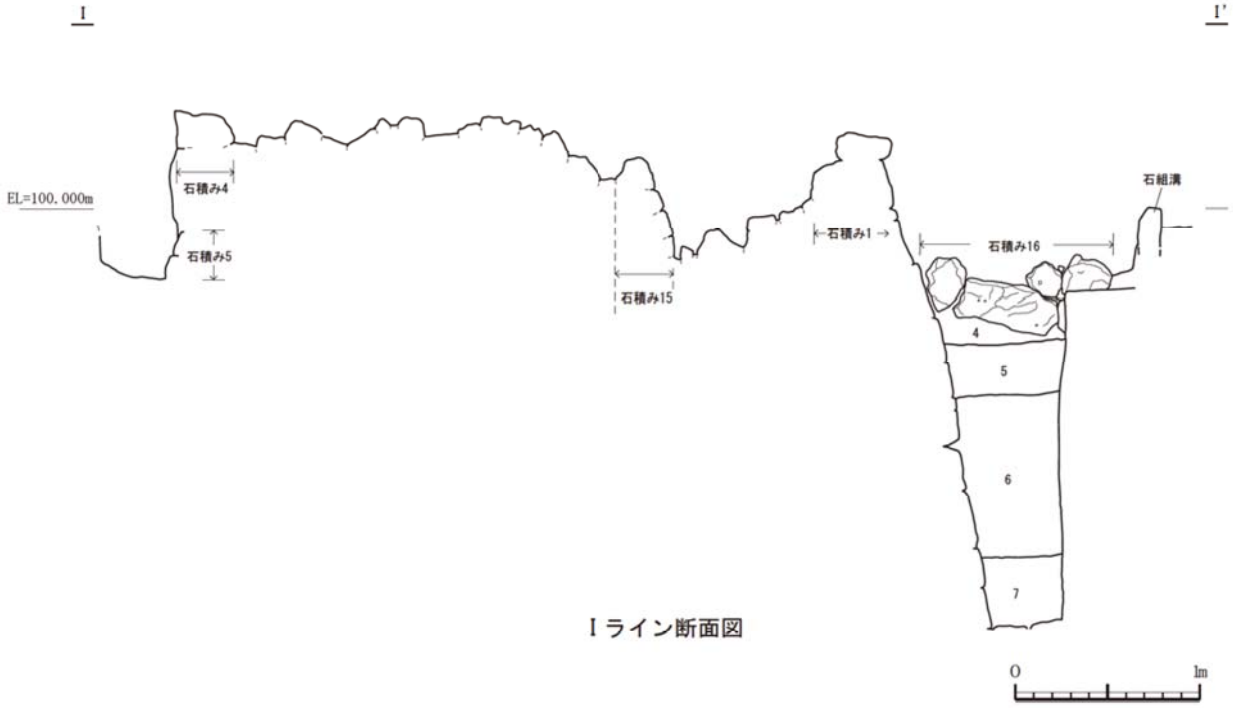




第 22 図　石積み 1 立面図（4）



石積み 15 立面図



Ⅰライン断面図

Ⅰライン土色表

層序	調査時土層名	土層No	土色		土質	混入物など
Ⅲ	オリーブ褐色土	4	2.5Y4/3	オリーブ褐	シルト～極細砂	石灰岩細～中レキ30%混　炭15%含
	オリーブ褐色土	5	2.5Y4/4	オリーブ褐	シルト	石灰岩細～中レキ10%混　炭5%含
Ⅳ	黄褐色土	6	10YR5/6	黄褐	シルト	石灰岩細レキ40%混　炭5%含
	黒褐色土	7	10YR3/2	黒褐	シルト～極細砂	石灰岩細～中レキ10%混　炭10%含

写真 15　石積み 1　Ⅰ10 付近

第 23 図　石積み 15 立面図・Ⅰライン断面図

写真 16　石積み 1　H10 南付近

写真 17　石積み 1　H10 南・I 10 付近

写真 18　石積み 1　南側裏込

比較的通る布積みだが、北側から荒加工した小ぶりの石で隙間を空けて積まれるようになる。石積み外側は 20 ㎝程度の礫を多く含んだⅡ層が堆積しており、淑順門地区石積み 4 の裏込め（第 110 図）に相当する可能性もある。このⅡ層を掘り下げた石積み 4 東トレンチにおいて、ほとんど土が混じらないまた異なる裏込め状の礫層の石の上に載せてこの石積み 4 を構築していることが確認できた。また、G 9・H 9 北側では石積み 4 の下層に石積み 5 が築かれており、より古い城壁であった可能性が考えられる。石積み 4 付近の裏込め内では青花・青磁等の出土も見られた（図版 8 － 2）。

石積み 15・17（第 22・23 図、写真 18）　H・I 10 で確認された内郭城壁内で確認された幅約 2 mの両面積と考えられる石積みである。正殿地区で確認された翼状石垣（第 110 図）に当たるものである（県教委 1992、當眞・上原 1987）。

写真 19　石積み 4・5 切り合い

写真 21　石積み 4　H9 付近

写真 22　石積み 4　G9 南付近

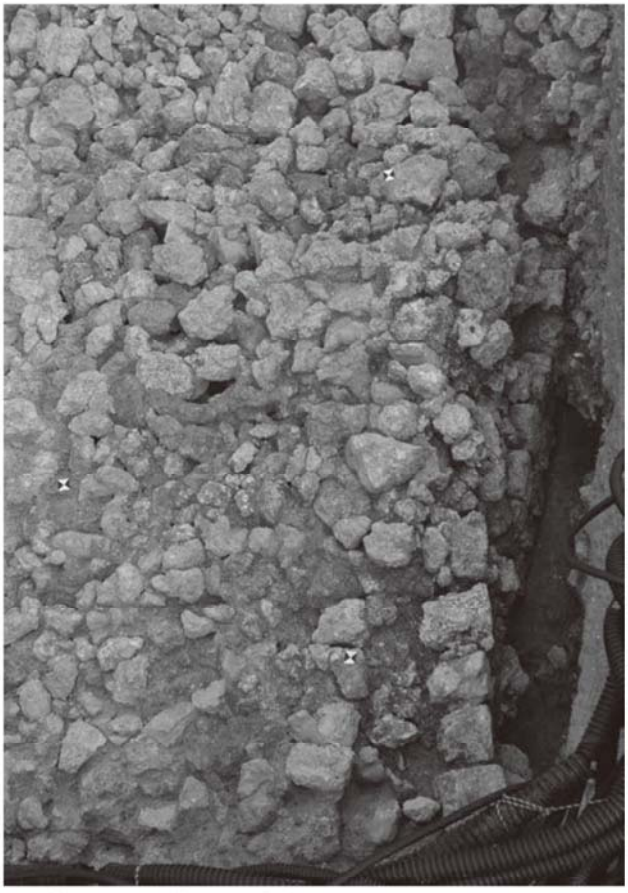


写真 20　石積み 4 南側

写真 23　石積み 4　G9 北側

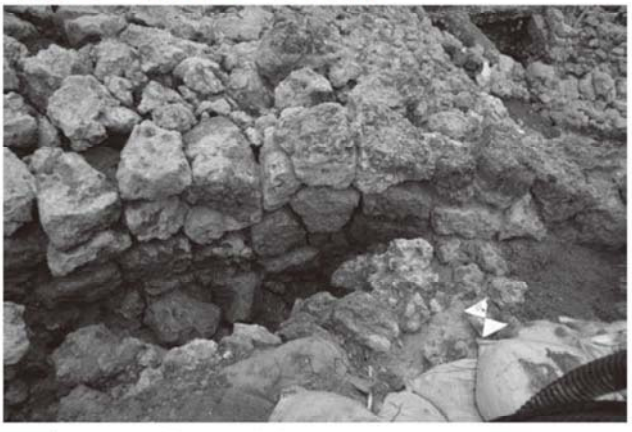


写真 24　石積み 4 北側

石積み 15 は長さ４ｍで、石積み１より約 1.2 ｍ東側に位置し、西側に面を持ち、検出面より現状で２～４段、最も高いところでは高さ 80cm 残存している（第 23 図）。石積みの勾配は、75° で、この地点の石積み１と類する角度である。現在検出された最下段の石は内郭城壁の裏込めに埋もれているので根石かどうかは判断つかない。一辺 20 ～ 30cm の不整形な礫を合端合せで積まれており、一応外面としての意識は感じられた。

石積み 17 は 1.4 ｍで、石積み４より約 0.6 ｍ西側に位置し、東側に面を持ち、検出面より１段、北側は攪乱のためか残存していない（第 22 図）。両石積みはほぼ平行関係にあり、これらを両面積みの南北方向の石積みとして、内郭城壁の胸壁の可能性があるものとした。

石積み 18（第 22 図、写真 18） 内郭城壁内で西端を石積み１に接して対向するように確認された東西方向の石積みで、現状では長さ３ｍを測る。石積みは南側に面を持つが、検出した段以下は裏込で埋もれておりその高さは不明である。先述した石積み 15 と面を接しているので、これらと関するものか、また内郭城壁を積んだ際の単位もしくは区画などと考えられるか、現時点ではその詳細は不明である。

２．内郭城壁下層石積み（石積み５・９・10・19、Ⅳ－４・５層）

内郭城壁より古い遺構として、石積み５・９・10 がある。一方、これまでも触れてきたが、内郭城壁の外面である石積み１の根石を確認した E・F － 10・11 サブトレンチの堆積状況より、Ⅳ－４・５層段階に何らかの遺構があったことを想定している。内郭城壁の裏込内で見られた石積み 19 もその可能性があるものとしてここで触れる。以下、各遺構について述べる。

石積み５（第 24 図、写真 25、図版８－１・３） Ｈ・Ｉ９で石積み４の下に堆積するⅣ層に埋もれる形で確認された石積みである。現状での長さは２ｍを測る。石積み４より東へ 10° 振っている。石積みは現状で、４段で高さ約 0.8 ｍ確認しているが、下面は掘りきっていないのでその状況は不明である。長さ 20 ～ 30cm、高さ 10 ～ 15cm の小振りであるが、切石を布積み風に積んでおり、その勾配は 70° である。

写真 25　石積み５（写真右下）

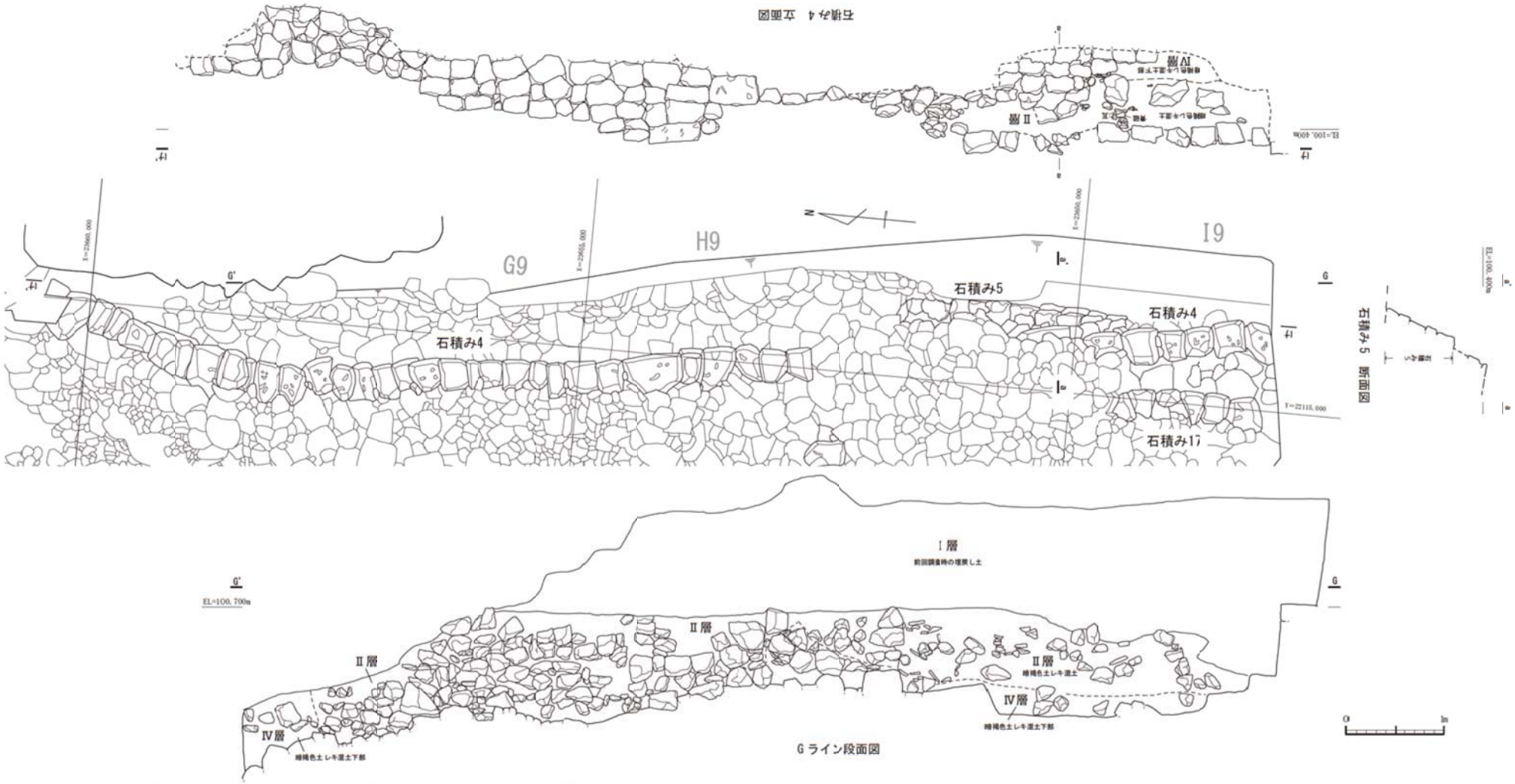
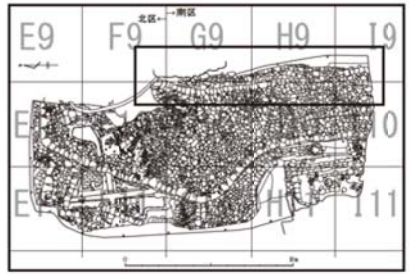


写真 26　Gライン北側断面

写真 27　Gライン南側断面



第 24 図　石積み 4 立面・Gライン、石積み 5 断面図

写真 28　石積み 1 北側

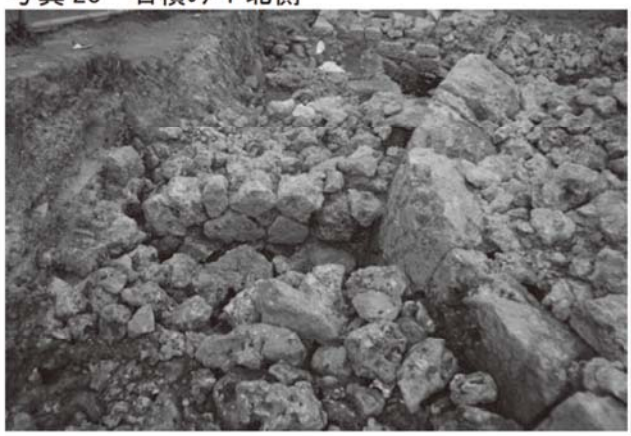


写真 29　石積み 3 南側

写真 30　石積み 3

写真 31　石積み 2（右）・3（左）

写真 32　石積み 2

石積み10（第26図、写真28、図版８－８）　F 10（北）で確認したⅣ－３´層と共に構築され、Ⅳ－３層に覆われており、表面が黒変している。現時点では一辺30～40cmの切石を２石確認しているのみで、東西方向に延びていたものと思われる。また、石積み10北側には、一辺10～20cmの礫が見られ、その上面レベルが一致し、Ⅳ－３層で覆われていることから、この石積みの裏込であった可能性が考えられる。

石積み９（第26図、写真28、図版８－８）　石積み10及びⅣ－３層上面に積まれたもので、Ⅳ－２層で埋もれている。現状の長さは２ｍを測り、長さ30～40cm、高さ10～20cmの切石を石積み10及びⅣ－３層直上に積んでおり、２段残存していた。後述する石積み６と両面積みの可能性もあるが、東端が南に若干反ることと、これに接する裏込めにもⅣ－１層が覆っている気配はなく、石積み９の裏込めよりも新しく積まれた様に見える。ただ、石積み９の２段目は全て残存しておらず、石積み６を積む際に積み替えにより両面積みにした可能性も考えられる。

Ⅳ－４・５層（第15図）　石積み１の内側ではⅣ－５層が見られるのに対し、外側では確認できないこと、またその上層のⅣ－４層も時期的には共通するが、同一の層ではないものと思われることなど、Ⅳ－４層段階ではこの石積み１の内外で異なった様相であったことが考えられる。つまり、現状での石積み１とは異なった石積みがⅣ－４層段階にあった可能性も想定されてくる。

石積み19（写真14）　F 10、内郭城壁の北側裏込めで確認された全く関連しない、南西に面を向け西40°の方向で続くと思われる石積みである（第９図）。これについては、石積み18のような内郭城壁を積む際の区画とも考えたが、軸方向に関連性を見出すことは難しく、内郭城壁よりも古い石積みが取り残された形になった可能性が考えられる。

３．内郭城壁関連遺構（石積み２・３・６～８・11～13・16、石敷１）

内郭城壁と接するもしくはその位置と軸方向などから関連する形で造られた遺構を総称した。遺構の関連性から６つに分けて、古いと考えられる順から、①石積み11・12、②石積み２・３、③石積み６・７・石敷１、④石積み13、⑤石積み16、⑥石積み８に分けて説明する。

石積み11・12（第９・27図、写真33）　F11で検出された直角に接続する石積みである。Ⅳ－１層除去後に確認しており、現状で１段ある。石積み11は検出された長さが1.5ｍで、長さ30～40cmの切石を西側に面を向けている。石積み12はそれに直角に接合する形で検出された長さが0.8ｍで、石積み11と同様な切石を南側に面をもつ。石積み11は石積み１に平行するように2.3ｍ西側に位置する。

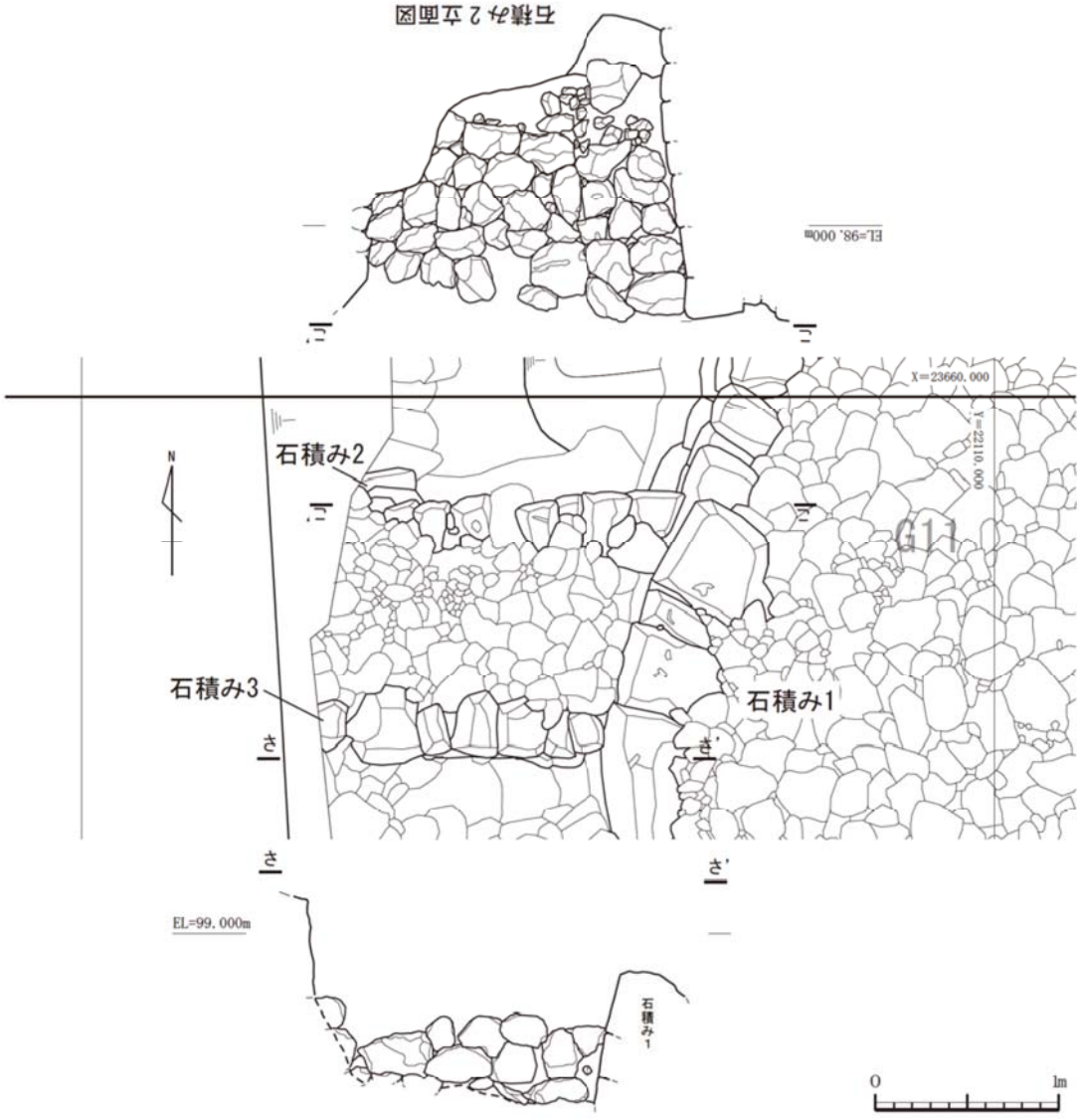
石積み２・３（第25図、写真29～32）　G 11で検出された石積み１に取り付く東西方向の石積み２を北面、石積み３を南面とする両面積の石積みである。幅1.4ｍを測り、長さは今回1.6ｍを検出したが、既往調査でも既に検出されており、正殿から右掖門へ至る階段状の石畳に取り付くことが分かっており、長さ3.8ｍを測ることが分かっている（県埋文2003）。

石積み２は、Ⅳ－１層より上に、20cm程の礫をやや乱雑に積み、現状では５段、高さ0.8ｍ残存している。石積み２は既往調査で検出されていたため、どの土層が覆っていたかは確証できないが、Ⅳ－１層直上にⅡ層がわずかだが堆積していたため、Ⅳ－１層より新しくⅡ層より古い、16世紀以降近世に造られたものと思われる。

石積み３は、やはり同様な礫を乱雑に２段ほど積んでおり、根石は裏込め内に埋もれている。

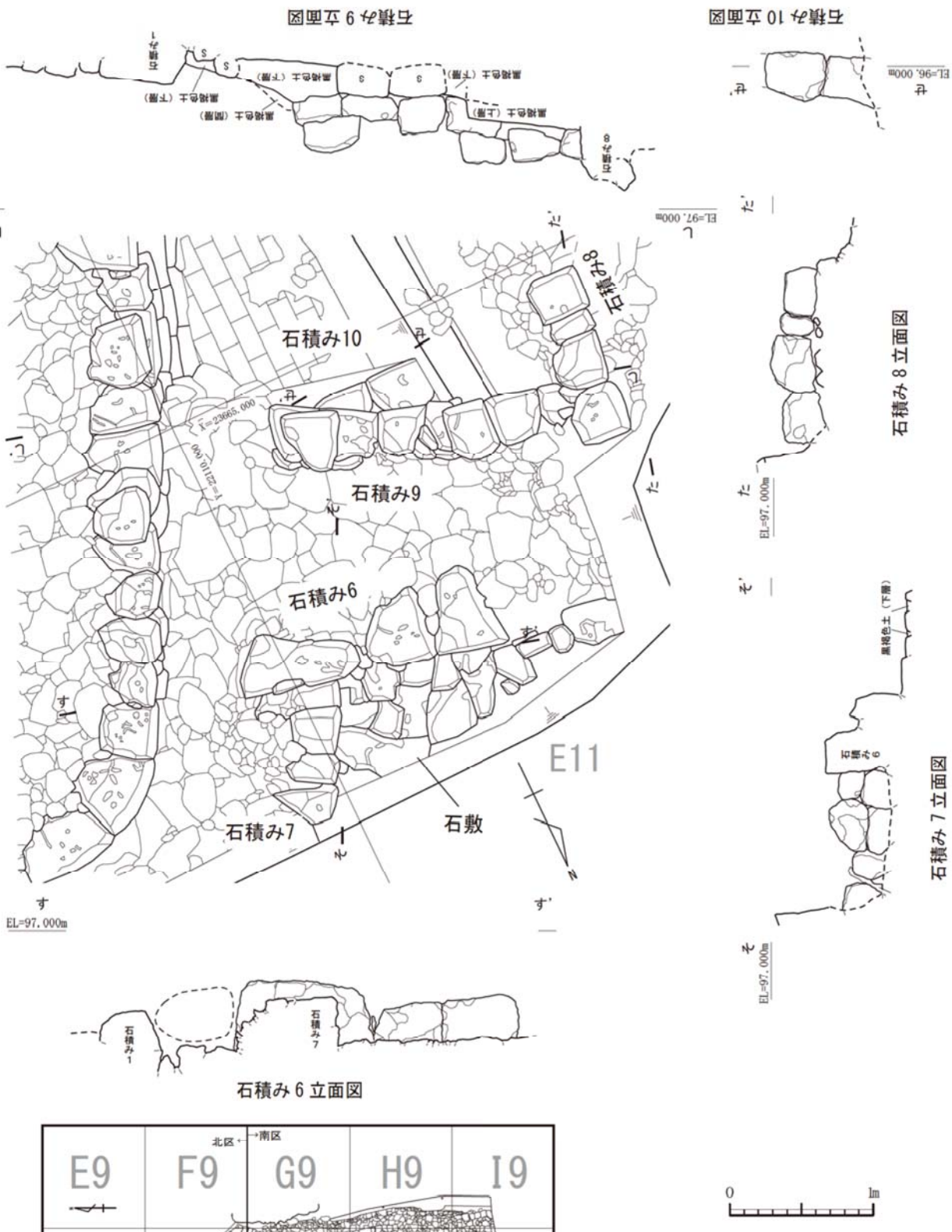
石積み６・７・石敷１（第26図、写真33・34、図版８－７）　E 11で確認された遺構群で、基本的には内郭城壁に取り付く石積みである。これらは既往調査時で検出されていた遺構であるので、堆積状況は不明であった。先述したように、石積み６は石積み９と両面積の可能性もあるが、石積み９はⅣ－２層に埋もれており、東端は南に若干反っており、両者は平行ではなくなっている。後述するように、古絵図にはないので近世以前の遺構であることは間違いない。

石積み６は、北面する東西方向の石積みで、長さ40～80cmの長方形の切石を布積み風に積んでいる。なお、調査開始時期の石積み１検出時に取り上げてしまったが、石積み６と石積み１に接する部分に長さ40～50㎝の石が見られた（第26図石積み６立面図左点線）。原位置であったかは確認できず、調査上のミスであるが、石積み６が石積み１に接していた可能性を指摘しておく。



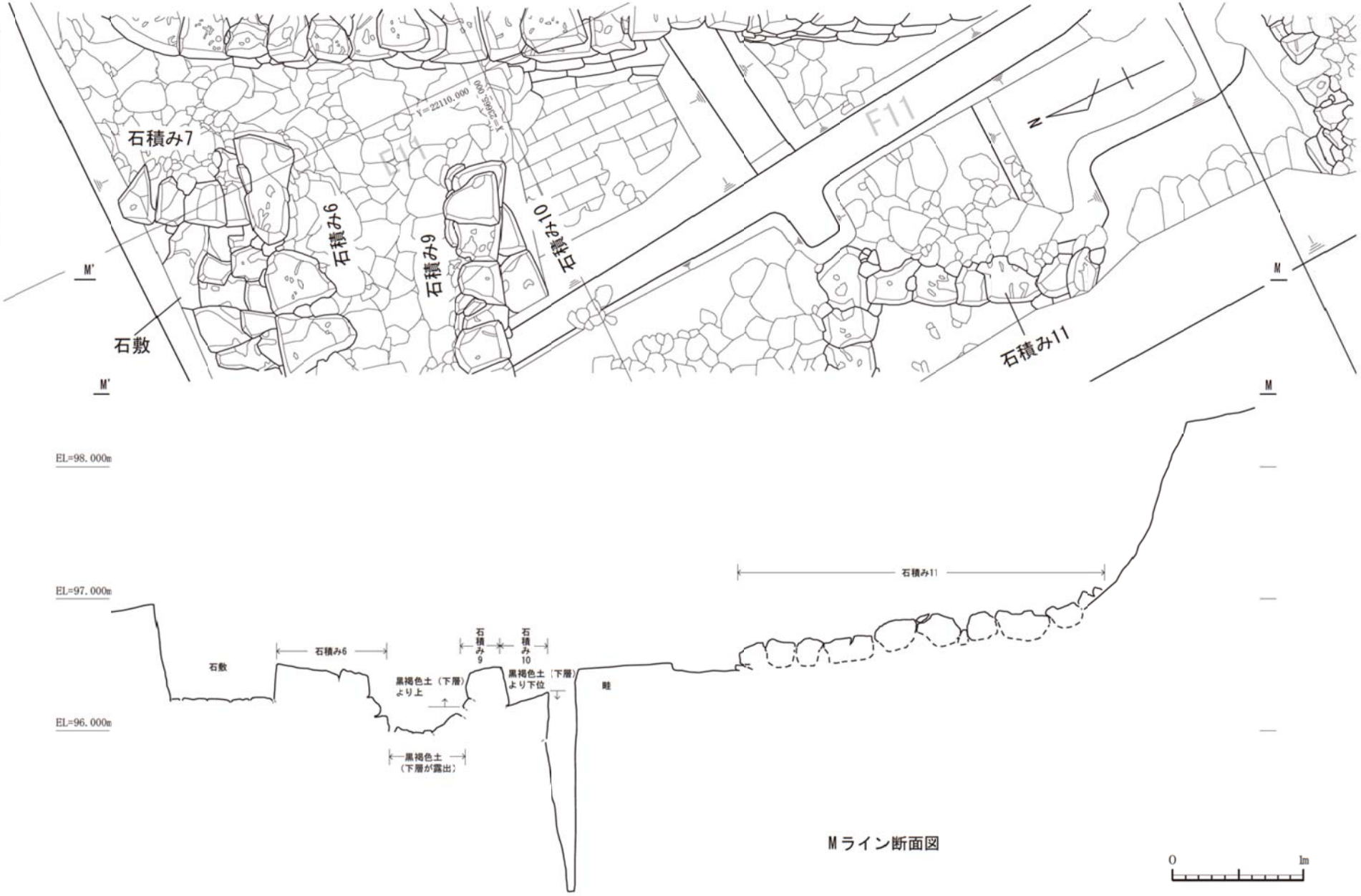
石積み 3 立面図

第 25 図　石積み 2・3 立面図



第 26 図　石積み 6～10 立面図

第27図　Mライン断面図



Mライン断面図

写真 33　淑順門西地区北区

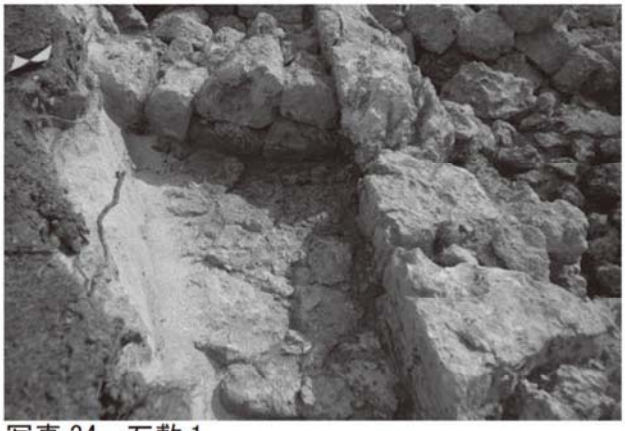


写真 34　石敷 1

写真 35　石積み 8

石積み 7 は、西面する南北方向の石積みで、20 ～ 30cm の礫を目地を合わせるように積んでいる。

石敷 1 は、石積み 6・7 で囲われた石敷である。長さ 20 ～ 40cm の扁平な石を形に合わせて敷き詰めている。

石積み 13（第 21 図、図版 9 － 1 ・ 2）　H 11 で検出された平面形が弧を描く石積みで、その裏込めは石積み 1 と石積み 3 と接した形となっている。検出時点ではⅡ層中部を除去した段階で検出され、造成土と考えられるⅡ層下部・Ⅲ層で石積み外面は埋まっており、その底面は検出できていない。石積みの高さは現状で 2.5 m 以上、勾配は 70° で、20 ～ 40cm の不定形な礫を乱雑に積み上げた形になっているが、面の意識は見られるが、その隙間は大きい。

これらのことと、石積み 1 が大きく西側に膨らむ部分に位置していることから、石積み 1 の補強のために造られた可能性が考えられる。また、面石が乱雑であることと造成土で埋まっていることから、この石積みが地上に露出していた段階はなく、造成時の一過程であった可能性も考えられる。また、西側が石積み 2 ・ 3 と平行しているようにも見えるので、これらの石積みも関連しているものと思われる。

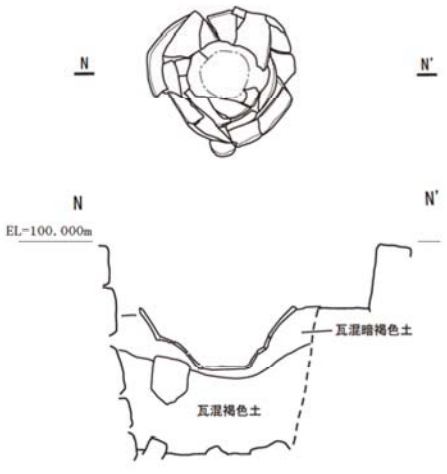
写真 36　石積み 16　下層断面

写真 37　石積み 16 付近遺物出土状況

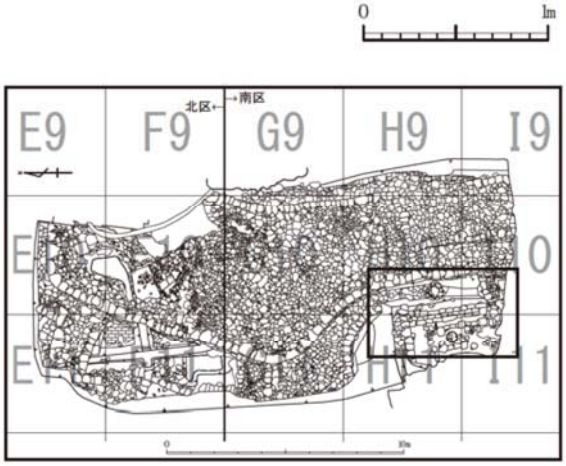
写真 38　礎石建物跡遺構群

石積み 16（第 22･23 図、写真 36）　I10 において、Ⅲ層上面で検出された２段の石積みである。北側に面を持ち、石積み１に接続する東西方向の現状長さ１ｍの石積みで、南側に約 50cm ほど、小礫の裏込がある。Ⅱ層の段階で完全に覆われてしまい、瓦等の遺物が多く出土している（写真 37）。具体的な性格は不明だが、Ⅲ層の段階で石積み１に接続する形で構築されたものと考えられる。

石積み８（第 26 図、写真 35）　既往の調査で確認されていたＥ 11 で検出された西面の石積みで、先述の石積み９の上に載るような形で造られている。40cm ほどの方形に近い石を比較的目地を合わせ積んでいる。今回の調査では構築された層序が不明であるが、周辺の石積みよりも高いレベルにあることから、最も新しいものと考えられる。また、第６章第１節で後述するが、阪谷図において、内郭城壁の外側ラインに一致しており、４石しか残存していないが、この見解を裏付ける。



埋甕1



第 28 図　礎石建物跡遺構群平面・断面図

第 29 図　埋甕 3 平面・断面図

４．礎石建物跡遺構群（礎石、埋甕２、石組溝、石積み 14）（第 28・29 図、写真 38、図版 10）

Ｈ・Ｉ－11 で確認された礎石５基、埋甕２基（埋甕２・３）、石組溝１基、石積み１基（石積み 14）は、既に正殿地区及び右掖門地区の調査（以下、既往調査）で検出されたものが多く、「かわや跡」（県教委 1992）と称された礎石建物跡を構成する遺構群である。また、石組溝のすぐ東に位置する埋甕１もこれらに関連する遺構として考えため、礎石建物跡遺構群として説明する。

規模　既往調査で確認された遺構と合わせると、礎石の中央間つまり心心間を想定すると、南北６間（約 5.4 m）×東西２間（約 1.8 m）、さらにその周囲にめぐる石組では南北約８m、東西約 3.5 m を測る（第６章第１節後述）。

構築時期　Ⅱ層の最上位である瓦混暗褐色土を基盤として各遺構の多くは既往調査時に検出されていた。今回は各遺構の埋土を掘削していないが、このⅡ層検出面の清掃では、近代陶磁器・ガラス片が得られたので、近代に機能したものと思われる。第２章で先述した古絵図の検討では、昭和６年頃には確実に存在しており、昭和 10（1935）年頃には既になかったようである。

主軸方向　礎石及び石組溝の主軸方向は、北より西へ約 10° 振っている。

礎石　残存している礎石は５基あり、掘り方の調査は行っていないが、おそらくそれほど深いものではないもの思われる。礎石は一辺約 30 ～ 40cm の略方形で概ね加工されているが、その仕上がりはまちまちである。このうち２つには、その中央部に一辺長さ・深さともに約５cm の略方形のほぞ孔が開けられている。現状から見ると、礎石の間は２つもしくは３つの石でつなぐ形になる。礎石間は心心間の距離で約 90cm を測る。

床面　既往の調査で検出されていたもので、埋甕３の西側周辺では瓦の上に漆喰を貼っている部分が残存していた。後述するが、床面は南北方向にへこみが見られ、水を北へ誘導するようになっている。その北側は礎石とともに火を受けた痕や三和土と思われる明褐色系の貼り土も部分的に見られた。遺物はこの床面を検出するときに、張り付くような形で出土している。

石積み 14　礎石群の北端から、約１mの間隔を空けて、東西方向に伸びる石積みで、現状では長さ 2.5 mを確認した。石は長さ 20 ～ 40cm、奥行 30 ～ 40cm の略長方形の石を並べ、面を持たない方には一辺約 20cm の礫がやや散在して見られるが、おそらくは裏込めと思われる。現時点では１段しか確認できておらず、上面の高さは礎石とほぼ同じ高さであり、建物の周囲を巡る区画であったと考えられる。ただ、石組溝と接する部分より東側がやや乱れており、この部分は本来地表に現れないものであった可能性も考えられる。長さであるが、既往調査の成果により長さ約４mを測るものと思われる。

石組溝　石積み 14 の西端より、南北方向には走るもので、現状では長さ 3.2 mを測り、南端は埋甕３の石囲いに接する。長さ 30 ～ 60cm、幅 20cm の長方形の石を東西に側壁として配し、幅 15cm の間隔を空け溝状とする。底面には、この側壁間の幅に合うような長さ 20 ～ 30cm の石を置き、そのレベルは南端から北端に向かって 10cm 低くなっている。既往調査では、この石組溝の西側面に相当する石列は確認されているが、溝状にはなっていない。また、既往調査では、この石組溝と対になるものが東側で確認されている。

埋甕１　既往調査で既に検出され、甕内の埋土が掘削された状況で今回再度確認した。今回は、石積み１の根石等を確認するために、この甕を取り外して調査を進めた。甕は前回調査時点でも胴部下半、40cm ほど埋まった状況で検出され、上半は確認されていない。Ⅱ層最上位の瓦混暗褐色土を掘り込んで埋めており、特に根石や掘り方などは見られなかった。甕の詳細は次節で述べるが、沖縄産無釉陶器で、推定高さ約 80 ～ 90cm の大甕である。検出面は標高 99.7 mと、埋甕２・３より 20cm ほど低い。

埋甕２　今回検出した遺構である。礎石内に囲まれるように、径 50cm の沖縄産無釉陶器甕が埋められていた。甕内は掘削していないので、その詳細は不明である。ただ、径から考えると、埋甕１よりは小さなもので、器高 40cm ぐらいのものが想定される。

埋甕３　既往調査で既に検出され、甕内の埋土が掘削された状況で今回再度確認した。底径約 25cm の沖縄産無釉陶器の甕の胴部下半を高さ 20cm ほどで切り取ったものを埋め、その上に径 20cm の礫を２段重ねで囲うが、地形的に高い西側は塞がずに、埋甕に至るスロープとして水が貯まるような構造となっている。石囲いの上面は径 40cm である。このスロープは、丸瓦の凹面を利用し、幅 10cm、長さ 30cm で、床面とつながった形で作られている。ちなみに、礫と瓦には漆喰が貼られ、水が漏れにくいようにしている。床面もスロープ幅のところが凹んでおり、先述した南北方向の凹みとつながるような形となっている。

第４節　遺物

遺物の種類としては、中国・タイ・ベトナム・韓半島、本土産の各陶磁器、沖縄産陶器、近代陶磁器、土器、瓦・塼・金属・骨・貝・石の各製品、玉類、貝類遺体・脊椎動物遺体・炭化種子が出土している。最も出土数が多いのは瓦・塼、陶磁器では中国産が最も多い。

これまで首里城跡の調査では、層序・遺構ごとで捉えられる良好な資料は少なかった。今回は近世のⅢ層、グスク時代であるⅣ層はさらに５つに細分することができ、各遺物の様相も時期差が表れているものと考えられる。そのため、遺物の種類ではなく、各層ごとに報告することにした。そこで、まず各遺物の分類と概略を述べてから、各層序の様相を説明していくものとした。なお、異なる層序で接合した遺物は、より下位の出土層位の項で説明している。

なお、全体の出土個体数は第 22 表にまとめているが、遺物の種類によって集計方法が異なっているので凡例に留意していただきたい。

１．遺物の概要・分類

本項では、瓦・塼・漆喰・ガラス玉・円盤状製品を除いた出土品について、その概要と分類について説明する。これらは図・観察表などを一括にしたほうが効率的と考えたため、後項で種類ごとに説明している。

陶磁器の出土点数については、各陶磁器の器形・分類ごとに、口縁から底部まで接合する破片と、口縁片もしくは底部片の多い方を足した点数を最低個体数とし、胴部片しか出土しないものは１個体と数えた。陶磁器においては、最低個体数の場合は個体、破片点数は点と称する。その他の遺物は、そのまま出土数を点数とした。

①中国産陶磁器

中国産陶磁器には、主体的なものとして青磁・白磁・青花・褐釉陶器、少数なものとして黒釉陶器・色絵磁器・瑠璃釉磁器・鉄絵陶器、緑釉・紫釉などの施釉陶器も見られた。以下、種類ごとでその概要・分類を説明する。

１）青磁

総破片 595 点、268 個体を数える（第２表）。碗・皿については、分類記号を瀬戸・仁王・玉城・宮城・安座間・松原による沖縄出土分類（2007、以下 2007 分類）に基づいている。盤については、本資料で便宜的に分類を設けた。それ以外の器形については、個別に説明する。

碗　135 個体出土しており、Ⅱ・Ⅳ～Ⅶ類が出土している。なお、碗か皿か判別できないものも７個体あった。

Ⅱ類　いわゆる鎬蓮弁文碗（277・278・310）。出土数は破片４点と少ないが、Ⅳ－５層ではグスク土器との共伴が確認できたため、時期を決定する上で重要である。

Ⅳ類　大宰府新分類Ⅳ類のうち、外底無釉のもので、高台が台形状、素地が軟質、釉が薄いことが特徴である。外面の文様により、０類（無文）、１類（蓮弁）、２類（横帯文）で分けているが、２類は出土していない。

Ⅳ－０類　口縁が外反し腰が張る器形で、内面の見込みが広く、外面のロクロ目が目立つものが多い。外反の度合いで見ると、端部が外にわずかに折れるもの（１）、緩やかに外反するもの（209）もある。高台では端部を水平に切るもの（220）が多いが、やや斜めに切るもの（218）もある。見込みの印花文は、やや小ぶりのもの（１）、大きめのもの（209）がある。口縁から胴部の器壁はＶ類と比べると薄いものが多いが、１のように厚いものでも器形等の特徴から本類に含めたものもある。

Ⅳ－１類　叉状工具で描かれた蓮弁文（102）があるが、これのみである。

Ⅳ´類　外底無釉の一群で、釉は薄く素地が軟質であることはⅣ類の特徴に近いが、腰部がやや窄まる器形でＶ類に近い傾向もあるので、中間的なタイプと考えている。今回は、０類（無文）のみの出土である。

口縁は端部をわずかに外反させ肥厚するものが多く、短く丸めるもの（217）、全体的に厚いもの（215）、長方形のもの（348）などがある。底部は見込み全体を釉剥ぎするもの（219・221）が多い。高台では、逆三角形に近く、斜めのケズリも深いもの（221）もある。

Ⅴ類　底部が釉剥ぎするものが主体で、底部は全体的に重厚で、釉が厚いことが特徴である。釉は緑色が強く、素地も白色で硬質である。外面文様で、０類（無文）、１類（蓮弁）、２類（横帯文）、３類（その他の文様）があり、Ⅳ類よりは有文が増えている。破片のため、細分類が判別できないものや、２類か３類かどち

らかの可能性があるものもあった。

Ⅴ－０類　今回は、口縁では外反するもの（255・349）、底部ではおそらく見込みに印花文のみが見られるもの（98・551）がある。

Ⅴ－１類　外面に蓮弁文を描くもの。花弁が細く弁先が尖る剣先蓮弁文と思われるもの（49・99・100・497）、花弁の幅が２～３㎝の広いもの（101・208）、それより狭く幅１㎝ほどのもの（207）がある。見込みは、圏線内の印花文が多く、線彫り（49）と型押し（46・491）がある。また、49は内面胴部には草花文が描かれる。

Ⅴ－２類　外面に横帯文を施すもの。多いのは雷文で、幅が広く下半が蓮弁文のもの（93・94）、幅が狭く下半が草花文のもの（95）があり、共に線刻で描かれる。97は両面に横帯には略化された唐草文、胴部下半に葉のようなものが描かれるが、あまり類例は見られない。

Ⅴ－３類　外面全体に、ラマ式蓮弁文を描き、かなり略化されたもの（211）、内面おそらく草花文のもの（492）がある。489は、文様不明だが、蓮弁や雷文ではないので本類に含めた。

２類か３類か判別できないものとして、外面下半の細かな表現がなされよく分からないもの（316）、半の文様がラマ式蓮弁で見込みに八宝風の文様が描かれるもの（96）がある。

Ⅵ類　底部は小型化する一方厚みが増すもので、高台の抉りが深いものである。釉はⅤ類よりも薄く、蛇の目釉剥ぎも見られるが、高台途中まで掛からないものなどが多くなる。外面文様は、０類（無文）、１類（蓮弁文）、２類（横帯文）で、２類は今回は見られなかった。

Ⅵ－０類　外面が無文のもの。口縁が直口（351・352）と外反がある。底部では見込みが渦巻状の圏線となるもの（48）。

Ⅵ－１類　いわゆる細蓮弁文を施すもので、弁先と花弁が揃っているもの（457・458）、若干ずれているもの（353）、全く合わないもの（490）がある。底部では、見込みが無文のもの（47・459）、花文のもの（318）がある。

Ⅶ類　釉調は白磁に近くガラス質で、おそらく龍泉窯系以外で生産されたものと考えられる。口縁端部に刻み目をもつものが出土している（495）。

なお、青磁碗の分類別において多いものは、Ⅴ類（破片148点、最低46個体）、Ⅵ類（破片104点、最低43個体）、Ⅳ類（破片106点、最低26個体）、Ⅳ´類（破片18点、最低13個体）があげられる。

磁灶窯系　254は黒色・白色粒が多く含むもので、龍泉窯系よりも器厚は薄く、端部が外反する。泉州窯系磁器と言われてきたが、泉州の中でも磁灶窯を中心として生産されていることが判明している。

皿　60個体を数え、Ⅲ´・Ⅳ～Ⅵ類が出土しており、後者については釉・素地などは碗と同様の特徴を示しており、説明を略する。以下、分類ごとに器形や文様について説明する。

Ⅲ´類　砧系青磁とされるであるⅢ類と釉が厚く器形は類するが、器壁がやや厚く釉も鈍い発色であり粗雑な一群である。出土しているものは、外面に鎬蓮弁文を描くⅢ´－１類である（２）。

Ⅳ類　外底無釉、高台は角型のもので、器形はⅢ類より残る口折皿と、直口皿も見られるようになる。

Ⅳ－０類　外面無文の直口皿で、わずかに口縁が外反するもの（222・260）、やや深めのもの（285）がある。

Ⅳ－１類　外面に蓮弁文を施したもので、口折のもの（259）、緩やかに外反するもの（465）がある。

Ⅳ´類　外底無釉だが、器形はⅤ類に近いものとする。外面無文であるⅣ´－０類が出土しており、腰折皿（283・284・360）、見込みが釉剥ぎされた底部（223・361）が該当する。

Ⅴ類　Ⅳ類に比べると全体的に厚めで、高台が大振りとなっているもので、腰部から大きく外に開く腰折皿が増える。

Ⅴ－０類　外面無文で、Ⅳ・Ⅳ´類のものと比べると大きく外に開く腰折皿（261）、内湾する口折皿（498）が出土している。

Ⅴ－１類　外面に蓮弁文を片彫りで描くものである（３・494）。

Ⅵ類　Ⅴ類より底径が小さく、器高が低いもので稜花皿が多く見られるようになる。外面無文のⅥ－１類が出土しており、稜花皿（356～358）、直口皿（359）がある。

なお、青磁皿のタイプ別では、Ⅴ類（破片35、29個体）、Ⅵ類（破片16点、12個体）、Ⅳ類（破片９点、８

第２表　中国産青磁集計表

合計 / 点数			地区 / 層															小計	個体数	器形個体数
			北区									南区				不明				
器形	分類	部位	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ-1	Ⅳ-2	Ⅳ-3	Ⅳ-3'	Ⅳ-4	Ⅳ-5	不明	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	不明			
碗	Ⅱ	口							2									2	2	135
		胴							1	1								2		
	Ⅱ？	口					1											1	1	
	Ⅳ	口							1									1	1	
		底										1						1		
		胴			1				2									3		
	Ⅳ-０	口～底	1				1											2	22	
		口	3		2			10	3				2					20		
		底			1		1	2	1					1				6		
		胴	4		1	4	30	12	4		1	1	8	2				67		
	Ⅳ-１	口				1								2				3	3	
		胴										2	1					3		
	Ⅳ'-０	口～底											1					1	13	
		口					10	1					1					12		
		底					3	1										4		
		胴							1									1		
	Ⅴ	口						1				1	1		1			4	13	
		底										1	2	9	1			13		
		胴	6	2	2	1						4	19	3	1		1	39		
	Ⅴ-０	口						1				1	6					8	8	
		底				1							2		1	1		5		
		胴			6	3	2						8		1			20		
	Ⅴ-１	口				2	2						1					5	5	
		底			2	1									2			5		
		胴			1	4	1					2	4		1		1	14		
	Ⅴ-２	口			1	6						1	2		1	1		12	12	
	Ⅴ-２・３	口											2					2	2	
		底				1						1						2		
		胴			2	1	1						4	1	4			13		
	Ⅴ-３	口					1					2			3			6	6	
	Ⅴ・Ⅵ	胴															1	1	1	
	Ⅵ	口											2		6			8	10	
		底										1		3			1	5		
		胴	1		1							11	10	10	8		3	44		
	Ⅵ-０	口	1									1	13	5				20	20	
		底			1								2			1		4		
		胴													1			1		
	Ⅵ-１	口			2								2	5	3		1	13	13	
		底			1							1		1				3		
		胴			3								2	1				6		
	Ⅶ	口													1			1	1	
	磁灶窯	口						1										1	1	
	不明	胴				1												1	1	
碗か皿	Ⅴ	底											3					3	3	7
		胴											11					11		
	Ⅴ・Ⅵ	胴												2				2	1	
	Ⅵ	口														1		1	1	
	不明	底											2					2	2	
皿	Ⅲ	胴											1			1		2	1	60
	Ⅲ'-１	胴	1															1	1	
	Ⅳ	口													1			1	1	
	Ⅳ・Ⅴ	胴			1													1	1	
	Ⅳ'	底					1						1					2	2	
	Ⅳ-０	口					2	1	1									4	4	
		底										1						1		
	Ⅳ-１	口						1				1		1				3	3	
	Ⅳ'-０	口							2				1					3	3	
		底											1					1		
	Ⅴ	口	2										1	2		1		6	6	
		底											1	1			1	3		
	Ⅴ？	胴			1													1	1	
	Ⅴ-０	口			3		1					2	9	1	3			19	19	
		底						1										1		
		胴												1				1		
	Ⅴ-１	底	1												1			2	2	
		胴											1					1		
	Ⅴ-３	胴											1					1	1	
	Ⅵ	底											1	1				2	2	
	Ⅵ-０	口～底											1					1	12	
		口	1		1							1	7	1				11		
		胴											1					1		
	Ⅳ-２	口～底													1			1	1	
鉢	—	口	1					1					1					3	3	3
盤	—	口～底												1				1	42	42
		口	5		2	8	11		2			4	2	6	1			41		
		底	1		2	1	3	1					3	1	3		1	16		
		胴			4	3	8	1	1		1	4	7	4	1	1		35		
擂鉢	—	口				1												1	1	1
香炉	—	口							1					1				2	2	2
		底													1			1		
小瓶	—	胴											2					2	1	1
袋物	—	胴						1										1	1	1
大鉢	—	口					1											1	1	1
大瓶	—	胴	1										1					2	1	1
大碗	—	口				1												1	1	1
		底												1				1		
その他壷	—	底												1				1	1	1
酒海壺	—	胴													1			1	1	1
酒海壺蓋	—	蓋				1	2					1	1	1	2			8	8	8
瓶	—	胴													1			1	1	1
瓶か壷	—	胴										1						1	1	1
不明	—	不明										1						1	1	1
総計			29	2	41	41	82	36	22	1	2	47	155	69	51	8	9	595	268	268

個体）が多い順となる。

盤　今回出土している盤は、釉調や釉剥ぎからは、碗皿で分類したⅣ・Ⅴ類の範疇と考えられるが、明確に対応することは提示できておらず、今回は便宜的に口縁形態によりＡ～Ｅ類、底部形態により碁笥底と高台に分けた。42 個体を数える。

Ａ類　鍔縁口縁で端部が上方に長く伸びるもの（224 ～ 227･287･320）。文様は内面に蓮弁状の凹みが見られ、幅１cm のもの（224・226）、幅５mm のもの（320）、幅２～３mm の櫛描状のもの（227・287）、幅３mm のものが 1.5cm の間隔で描かれるもの（225）がある。

Ｂ類　鍔縁口縁で端部が肥厚するもの（53・103・363・500）。Ａ類と同様に蓮弁状の凹み（53）、櫛描き状の細線（103・363）、口縁は稜花でその内面に複線による波状文を描き、胴部内面には幅５mm の蓮弁状の凹みを施すもの（500）である。

Ｃ類　鍔縁口縁で肥厚せずに水平のもの（106・466・467）。106 は底部は高台をもつもので、内外面には片彫りの草花文を描く。466 は内外面に抽象化した唐草文が描かれ、見込みも丸く深めの器形である。467 は、口縁が厚めで浅めの器形で、内面に幅太の連弁状の凹みが刻む。

また、355 は口縁がないが、内面に劃花文風の草花文、外面が浮き彫りの蓮弁文といった特徴より、Ｃ類の口縁で高台が三角形となる首里城跡二階殿地区の盤Ⅱ類に類するものと思われる（県埋文 2005 ｂ）。

Ｄ類　鍔縁口縁で、端部をわずかに上方に向け、稜花状となったもので口縁形態の共通性は高い（104・107・468）。104 は外面が鏑蓮弁文風の刻みの上に草花文を描く。

Ｅ類　直口口縁のもの（105・229・286）。105 は外面に凹線１条のみで、229・286 は内面に幅５mm の蓮弁状の櫛描文を施している。

底部は、碁笥底（228・469・501）、高台をもつもの（５・52・262・364）がある。

酒海壺（108･230･502･503）　身は 503 で外面に貼り付けによる文様がある。その他は蓋で 108 は外面には「禄」の字が描かれ、内面見込みに大ぶりの花弁を表現した印花文が施されている。摘みは、粘土紐を螺旋状に巻いた形となっている。

その他　鏑蓮弁文を描く大瓶（４）、擂鉢（109）、おそらく何らかを象った袋物（263）、青緑色で厚い釉よりⅣ類と考えられる香炉（288）、球型の胴部をもつ瓶（504）がある。また、青磁の破片を研磨した碁石形のものも出土している（441）。

２）白磁

総破片 85 点、46 個体を数える（第３表）。景徳鎮窯系･福建産のものは、森田（森田 1982）、田中克子（2003）･新垣力（2005）の各研究を参考に分類を行った。また、産地がわからないものは１点あった。以下、産地ごとに分類し、分類 2007 の分類記号があるものはこれを付した。

景徳鎮窯系　碗・皿が出土しており、可能性があるものとしては瓶もある。破片 19 点、12 個体を数える。

磁器質で器胎には小さな間隙が見られ、釉調は青白色・乳白色のものが多い。

Ｂ・Ｂ´群　釉は光沢があり、口縁・胴部は薄いが、底部は肉厚で、外底は露胎になるものである。いわゆる「枢府磁」とされるものに近い良質の製品である。

296 は、碗の胴部で、内面は線刻で弁先状の表現がされているもので、森田分類で提示されているＢ群のものと考えた。507 は、わずかに抉り高台となっているもので、胴部は直線的に伸び中位に段を有するもので、あまり例を知らない。釉・胎土は本類に含まれるので、便宜的にＢ´群とした。

Ｅ０群　透明釉だが、Ｂ・Ｂ´群の影響が強いものとしている。506 は大きく外に開く腰折皿で、首里城跡二階殿地区で一定量出土している皿Ⅰ類が相当する。

Ｅ群　磁器質であるが主に乳白色を呈した失透釉が掛けられるものである。畳付を釉剥ぎした端反皿が出土しており、口径が 10 ｃｍ前後と想定される小型（322・471）、口径 20cm 前後の大型（368）がある。

その他　胎土・釉調から景徳鎮窯系と考えられるものがある。365 は外反碗で、青白色の釉調はＥ０群に近いが類例が少ない。367 は、毛彫りによる鱗のような文様が見られるが、全形は不明である。505 は口縁小片で碗と思われるが詳細不明。372 はおそらく球形の胴部をもつと思われる小型瓶の口縁で、硬質な胎

第３表　中国産白磁集計表

合計 / 点数				地区 / 層												小計	個体数
				北区						南区				不明			
産地	器種	分類	部位	I	IV-1	IV-2	IV-3	IV-3'	IV-4	I	II	III	IV	I			
景徳鎮	碗	—	口								1		1			2	2
			胴								1					1	
		B	胴						1							1	1
		B´	底										1			1	1
		E0？	胴							1						1	1
	皿	E	口								2	1				3	3
			底							1		1				2	
			胴		1						2					3	
		E0	口										1			1	1
			胴							1						1	
	壷	—	胴										1			1	1
	瓶	—	胴											1		1	1
		—	口								1					1	1
徳化	小碗	—	口	1	1						4					6	6
			底								1					1	
			胴	1	1					1	6					9	
	皿	—	底								2					2	2
	袋物	—	胴								1					1	1
	不明	—	底							1						1	1
福建	碗	C2	底						1							1	1
		C3	口～底						1							1	13
			口		1	1	2	3	4		1					12	
			底				1	1	2							4	
			胴	1	1		3	4	1		1	2				13	
		D	胴										1			1	1
		D´	底	1												1	1
	小碗	D	口							1						1	1
			胴							1						1	
	皿	D	口～底										3			3	5
			口									1	1			2	
			底			1						1				2	
			胴		1					1						2	
	壷	—	底								1					1	1
不明	不明	不明	底								1					1	1
総計				4	6	2	6	8	10	8	25	6	9	1		85	46

土より景徳鎮窯系と考えたが、類例は見つけられていない。

福建産　碗・皿、可能性があるものとしては瓶もある。破片45点、23個体を数える。

福建省各地で生産されたもので、田中の研究により各類の窯が明らかになっている。

C群　胎土は灰色で軟質のものが大半で、高台抉りが浅く厚手の内碗する一群で、福建省閩江流域の閩清窯や南平茶洋窯などが産地とされている。碗・皿があるが、今回は碗のみの出土である。３つに細分されているが、そのうちのC－２・３群が出土している。

C－２群　内底が丸みのあるもので、見込みが無文のものが出土している（295）。金武正紀が最初に報告したビロースクタイプⅡ類である（金武1988）。

C－３群　内底が平坦で、口縁を外反させるものである。今回の資料では、器壁がやや厚く外反が弱いもの（54など）、薄く外反がやや強いもの（231など）がある。金武正紀により、無文外反碗（金武1990）とされていたものだが、生産地の判明によりビロースクタイプⅢ類とされた（金武2010）。

D群　陶器質だが胎土のきめが細かく失透釉が掛けられ、底部は厚いが高台は低く全体的に小型の一群で、福建省閩江上流域の邵武四都窯が生産地とされる。

短く外反する小碗（321）、腰折皿（508）、抉り高台をもつ八角皿（509）及び直口皿（510）がある。

D´群　胎土・釉調がD群と類似している一群だが、釉が全体に掛けられず露胎しているのが特徴である。器形には幾つかのタイプがあるが、今回出土したもの（６）は浅めの内湾碗の底部、見込みの印花文で「亞」と思われる字が見られる。

その他　374は長胴形の壺で、胎土・釉調では景徳鎮窯系や徳化窯系ではないため、福建産ではないかと考えた。

徳化窯系

釉は白く精良な胎土をもつもので、清代に福建省徳化窯周辺で生産と考えられるものである。皿（369）、小碗（370・371）、袋物（373）がある。破片20点、10個体を数える。

３）青花

総破片200点、83個体を数える（第４表）。元様式、明代、清代に分け、更に細分した。

元様式　文様・器形は、亀井明徳らの研究（2009・2010）を参考にした。盤（７・375）、壺（514）が出土している。これらは小片で、全て二次被熱した可能性がある。

明代　碗・皿・瓶・盤が出土しており、39個体を数える。産地は大半が景徳鎮窯だが、漳州窯系もある。

景徳鎮窯系　碗・皿について、小野正敏（小野1982）や柴田圭子（柴田2011）や森毅（森1995・2005）の研究を参考にして、時期的にⅠ～Ⅲ類の３つにまず分けた。その際、Ⅰ類については、小野分類と該当させるには検討が必要と考えたので、個別には対照させていない。Ⅱ・Ⅲ類については、小野・森分類に該当するものについてはその記号を示した。該当しがたいものは、個別に特徴を示した。

碗・小碗　碗が破片数53点、22個体、小碗が４点、３個体を数える。

Ⅰ類　首里城跡京の内 SK01 や二階殿地区で出土した青花の一群で、小野分類ではＢ１群やそれに文様構成が類したもの、柴田により明代早～中期に位置づけられたものとした。

Ⅰ－１類　端反碗で、小野Ｂ１群に含まれるものもある。器形は、見込みが広く腰が張るもの（511・512）、非常に薄手のもの（114）、胴部が窄まり深めのもの（55）などがある。文様では、外面に唐草文（511・512）、波濤文（60）、内面に四方襷文（55）などがある。

Ⅰ－２類　直口碗で、見込みはやや丸みを帯びているが平坦に近いものである（116・117）。また、文様は雷文帯が多く（113・323・553）、Ⅰ－１類と類した外面の牡丹唐草文（115）、見込みの梅樹文（330・377）など、蓮子碗つまり小野Ｃ群とは異なっている。116 は、見込みの圏線内に水草文を描き、「坯」と書かれたあまり見られない資料である。

その他　324 は端反する小碗で、内面に雷文が描かれ、Ⅰ類の範疇で考えた。383 は、直口の小碗と思われ、呉須の色調からⅠ類とした。

Ⅱ類　小野分類でＣ・Ｄ群とされた明代中期の青花の一群で、本州地域で通例見られるものである。一方、これらの分類には含まれないが、文様等で類似している資料も含めた。

Ｃ群　直口碗で、口が広く浅めの器形で見込みが凹み、いわゆる蓮子碗とされるものである。文様は、外面に蕉葉文（380）などがある。

Ｄ群　直口碗で、見込みが平坦で広く大きな高台をもち、胴は直線的に少し開くもので、腰折碗とも言われる（今帰仁村教委 1991）。文様は、外面にアラベスク文（56）、それが抽象化したもの（379・381）などがある。

その他　326 は唐草文が描かれる端反碗で、Ⅱ類の範疇と考えた。378 は、見込みに小野Ｃ群の特徴である法螺貝文が描かれるが、器形は腰折れで小野Ｄ群に類する。これは、今帰仁城跡出土資料で、口縁端部が折れるものにおそらく同様のものと思われる（柴田 2011、p189 － 67）。

Ⅲ類　いわゆるペンシルドローイング（細線描き）や細線内をダミ塗りする技法が用いられ、器壁は非常に薄いものである（329・388・554）。また、小碗も見られる（382）。328・385 は内湾皿で、小野分類のＥ群と思われる。これらは、森の研究などで 16 世紀後半～ 17 世紀前半と考えられるものである。

皿　破片数５点、３個体を数える。Ⅰ類に相当する皿は出土していない。

Ⅱ類　384 は碁笥底皿で、小野Ｃ群に相当する。

Ⅲ類　328・385 は、内湾皿で、小野Ｅ群とされるものである。

鉢　118 は底部で、見込みに放射状に６区画が配されその内に宝文を描くもので、文様からⅠ・Ⅱ類に相当するものか。472 は底部で、見込みに蓮池文を描き、Ⅰ類に相当する。513 は口縁で、直口するもので、外面に梵字文を描く。

その他　61 は碁笥底の盤である。386 は瓶で、呉須がやや滲んでいる。

漳州窯系

福建省漳州窯周辺で生産されたと考えられる資料で、軟質で釉・呉須が鈍いものが多い（福建博物館 1997）。時期的には、明末清初とされ、16 世紀後半～ 17 世紀代とされている。破片で 10 点、6 個体を数える。碗が確認され、外反するもの（325）も見られたが、直口するもの（327・391・555）が多い。また、393 は、文様の類例はなかったが、口縁形態が後者に類似している。底部では、395 は見込みを蛇の目釉剥ぎし、圏線が見られる。

清代　徳化窯系と、窯は限定できないが福建・広東産のものがあり（新垣 2003）、42 個体を数える。

徳化窯系　胎土は白磁と同様で白く精良で、透明釉で光沢が強いことが特徴である。碗には、大きく外反するもの（389）、外面に花芯文を描くもの（398）、凡字文を描くもの（11）などがある。皿には凡字文を描いた内湾皿（399）などがある。

福建・広東産　胴部下半や底部が露胎する一群で、破片 40 点、20 個体を数える。碗は基本的に直口碗で、円文が描かれ下半が露胎するもの（390）や、アラベスク風の文様を描くもの（515）などがある。底部では見込みが広く蛇の目釉剥ぎがされたものがある（394）。

第４表　中国産青花集計表

合計 / 点数					地区 / 層									小計	個体数
					北区				南区				不明		
時代	産地	器形	分類	部位	Ⅰ	Ⅱ？	Ⅳ-1	Ⅳ-2	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ		
元様式	景徳鎮	壷	—	胴								1		1	1
		盤	—	胴	1					1				2	1
明代	景徳鎮	碗	Ⅰ	胴			1		1					2	1
			Ⅰ・Ⅱ？	胴						1	2			3	1
			Ⅰ①	口～底								2		2	9
				口			2	3				2		7	
				胴			3	1		1	1			6	
			Ⅰ①？	口				1						1	1
			Ⅰ②	口	1				1					2	3
				底				1	1	1				3	
				胴				1		1			1	3	
			Ⅱ	底						1				1	1
				胴	1		1		2				1	5	
			Ⅱ？	口					1					1	1
			ⅡC	胴						2				2	1
			ⅡD	口				1						1	1
				底						1				1	
				胴			1			3				4	
			ⅡかⅢ	胴						2				2	1
			Ⅲ	口						1			1	2	2
				底					1					1	
				胴					1	3				4	
		小碗	Ⅰ？	口					1					1	1
				胴						1				1	
			Ⅰ②	底				1						1	1
			Ⅲ	口						1				1	1
		Ⅲ	ⅡC	口						1				1	1
				胴						1				1	
			ⅢE	口					1					1	2
				底						1			1	2	
		鉢	Ⅰ	胴							1			1	1
			Ⅰ・Ⅱ？	底				1						1	1
			—	口								1		1	1
		盤	—	底			1							1	1
		瓶	—	胴						1				1	1
	漳州	碗	—	口					3	1			1	5	5
				底					1	1				2	
				胴					1		1			2	
	漳州？	碗	—	口						1				1	1
清代	景徳鎮	碗	—	口			1							1	1
		壷	—	胴					1					1	1
		瓶	—	胴	1									1	1
	徳化	碗	—	口	3				2	8			1	14	14
				底	1	2			1	1			1	6	
				胴	14		2		6	22	2	2	1	49	
		小碗	—	口						1				1	1
		Ⅲ	—	口	2				1	1				4	4
				底			1			1	1			3	
	福建・広東	碗	—	口	4				3	10		2	1	20	20
				底						1			1	2	
				胴	2	1	2		2	8	1		2	18	
総計					30	3	15	10	31	80	9	10	12	200	83

第５表　中国産褐釉陶器集計表

合計 / 点数		地区 / 層													小計	個体数
		北区							南区				不明			
器形	部位	Ⅰ	Ⅳ-1	Ⅳ-2	Ⅳ-3	Ⅳ-3'	Ⅳ-4	Ⅳ-5	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	不明		
壷	口	6	16	2	1				10	27	8	2	1	1	74	74
	底	1	1	3			1		1	4	2	3	2		18	
	耳										1				1	
	胴		1	1	1	1		1		3					8	
総計		7	18	6	2	1	1	1	11	34	11	5	3	1	101	74

第６表　中国産色絵磁器・瑠璃釉磁器・鉄絵陶器・黒釉陶器・施釉陶器集計表

合計 / 点数			地区 / 層											個体数
			北区						南区				小計	
種類	器形	部位	Ⅰ	Ⅳ-1	Ⅳ-2	Ⅳ-3	Ⅳ-3'	Ⅳ-4	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ		
色絵磁器	碗	口	1										1	1
	小碗	胴								1			1	1
	瓶	口			1								1	1
瑠璃釉磁器	小碗	口							2	1			3	3
	瓶？	胴								1			1	1
鉄絵陶器	壷	胴										1	1	1
黒釉陶器	天目碗	口		1			4				2		7	7
		底				1						1	2	
		胴					2	1	2	2	1		8	
その他施釉陶器	水注か瓶か	胴							1				1	1
	瓶	胴							1				1	1
総計			1	1	1	1	6	1	6	5	3	2	27	17

4）褐釉陶器

壺が 74 個体出土している（第５表）。なお、胴部片は実測したもののみの集計である。胴部片については、個々にその特徴を示した。

３類　玉縁状の口縁をもつ横耳の大型壺で、口縁部が出土している（520）。

５類　断面方形状の口縁部をもち、大きく肩部が張り、下半は窄まり上げ底状の底部をもち、無耳の大型壺である。ロクロ目が顕著であること、胎土は精良であることも大きな特徴である。今回出土したものは口径が 15 ～ 18cm、底径 14 ～ 16cm のものが大半で、器高は 40 ～ 50cm 前後と推察される。474 は、口縁が外側に若干伸び、６類の口縁にやや近い点もあったが、頚部が開く点は５類の範疇である。

その他　上記の分類に該当しないものを個別に述べる。

64 は、胴部中位に波状突帯文を付すもので、胎土は５類に類している。

123 は、肩部に「関○」の刻印がある。235･266･406 は、胎土が赤褐色、白色粒が少量、器厚は５㎜と薄く、ロクロ目が顕著でない点で共通している。

266 は横耳であるが、３類とは断定できなかった。

311 は、黒色・白色粒を多く含み、磁灶窯と思われる胎土の特徴である。

332 は、胎土は橙色、白色・赤色粒が含み、口縁がわずかに玉縁状となり、肩部に向かって少し開く形態である。

407 は、白色粒を多く含み、内面に粗いハケメがある。

408 は、外面に平行タタキがあるのが特徴である。

5）その他の陶磁器

以上のほか、少数なものとして色絵磁器、瑠璃釉磁器、鉄絵陶器、黒釉陶器、その他の施釉陶器がある（第６表）。

色絵磁器　碗、小碗、瓶の破片３点（個体も同数）が出土している。10 は赤･緑色で描かれた徳化窯系の碗である。

瑠璃釉磁器　小碗３点、瓶１点（個体も同数）が出土している。401 は外面が瑠璃釉のわずかに端反の小碗である。

鉄絵陶器　１点・個体のみの出土である。518 は磁州窯系の短頚壺の胴部と思われる。

黒釉陶器　天目が破片 17 点、７個体が出土している。今回出土しているものは、口縁の屈曲がやや弱く（62・267）、底部は中央がわずかに凹む（233・517）。

その他の施釉陶器　小片のため図化していないが、近世以降と思われる緑釉（壺）のものと薄い紫の透明釉（瓶）の胴部片が出土している。

②タイ産陶磁器

黒褐釉陶器 14 個体、無釉陶器２個体、黒釉陶器１個体、土器 19 個体が出土している（第７表）。なお、黒褐釉陶器の胴部片は実測したもののみの集計である。

黒褐釉陶器　器形はいずれも四耳壺と考えられる。産地・分類を向井分類（向井 2003・2012）に基づいて行い、これに当てはまらないものは類例や特徴からタイ産と判断した。

シーサッチャナライ窯　口縁端部は上下に肥厚し、頸部基部に最小径をもちラッパ状に大きく外反する長頸壺（65 ～ 67・126・127・334・412・414）が主体である。411 は口縁の肥厚はなく直線的に窄まる形態で、頸部中部に最小径をもち口縁部下で水平･斜め上方に外反する短頸壺と考えられる。底部には、小型（476）、大型（522・523）がある。胎土は共通しており、やや粗く、断面が灰赤色、混入物には微細な白色粒と暗赤褐色粒が主で、大きめの褐色粒・赤褐色粒・白い帯状の物質も混じる。釉は黒色～オリーブ黒色。

メナムノイ窯　頸部中部に最小径をもち口縁部下で水平・斜め上方に外反する短頸壺と、頸部基部から内傾する短い頸部をもつ無頸壺が存在する。今回、無頸壺は確認されていない。短頸壺は胎土・混入物の特徴によって、２タイプに分類される。

Ⅰ類（71・521）　胎土は精良。断面は赤灰色。赤褐色粒を少量含む。釉はオリーブ黒色。

Ⅱ類（68・70・410・413）　胎土は粗い。断面は灰白色から灰赤色まで様々である。褐色粒・赤褐色粒・白色粒を多量に含む。釉はオリーブ黒色。

産地不明　上記産地の分類には当てはめられないが、形態や胎土などからタイ産と考えた。以下、個別に説明する。69は、土器に近い焼成で、玉縁状の口縁をもつ。128・129は同一個体で、肩部外面に4条の圏線を巡らし、肩部内面に横ナデ、胴下部内面に回転ヘラ削りを施す。298はにぶい赤褐色の胎土で、内面に泥釉もしくは自然釉がかかる。

無釉陶器　125・475は内湾する器形で、口縁内側に肥厚するタイプである。まったく同一ではないが、首里城書院・鎖之間地区赤褐色土（県埋文 2005 a、pp. 75-76）や大城グスク（吉岡 2011、p. 52）などで出土している中国産無釉陶器平鉢に形態が類する。大橋康二の意見を受け、胎土の特徴が類することからタイ産と考えた。

黒釉陶器　269はロクロ目が顕著に残り内面は無釉のもので、シーサチャナライもしくはスワンカローク窯系の長胴形の小壷もしくは小瓶と考えた。類例としては、悪石島保有例（亀井 1993）や首里城管理用道路地区4トレンチⅡ層（県埋文 2001 a、pp. 71-76）がある。

土器（72・130・131・524）　18個体見られ、全て半練土器の蓋である。

小結　北区Ⅳ－4層・Ⅳ－3’層においてタイ産陶器・土器は数点出土しているが、一定量出土するようになるのは、北区Ⅳ－2層・南区Ⅳ層より上層である。以下、向井の研究（向井 2003・2012）に基づき、主に黒褐釉陶器四耳壷の出土傾向から年代観を整理してみる。南区Ⅳ層では、シーサッチャナライ窯、メナムノイ窯Ⅰ類が出土することから、15世紀中葉の年代があてられる。これは1453・1459年の失火資料とされる首里城跡京の内地区SK01（県教委 1998 a）と同様の傾向である。北区Ⅳ－2層では、15世紀前半以降の移入とされるシーサッチャナライ窯に加え、産地不明の黒褐釉陶器四耳壷128・129が出土している。共伴する陶磁器は京の内地区SK01で多く出土するものが見られ、南区Ⅳ層と同様に15世紀中葉と比定される。北区Ⅳ－1層では、15世紀後半以降の移入とされるメナムノイ窯Ⅱ類が出土しており、共伴する陶磁器から16世紀前半までの年代が考えられる。

注目すべきこととして、北区Ⅳ－2層で確認された128・129は、調整や文様からタイ産黒褐釉陶器四耳壷と考えられるが、釉・胎土ともに向井分類には当てはまらない。15世紀中葉における別産地の存在を示唆しているものと言える。

第7表　タイ産・ベトナム産・韓半島産陶磁器集計表

合計 / 点数				地区 / 層										小計	個体数
				北区					南区						
種類	器形	分類	部位	Ⅰ	Ⅳ-1	Ⅳ-2	Ⅳ-3’	Ⅳ-4	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ			
タイ産黒褐釉陶器	四耳壷	シーサッチャナライ窯	口		2	2			1	2				7	7
			底								1	2		3	
			胴		1					1				2	
		メナム・ノイ窯	口		1					1				2	2
			耳		1					1				2	
			胴		1							1		2	
		産地不明	口		1									1	2
			底			1		1						2	
			胴			1								1	
	壷	シーサッチャナライ窯	口							2				2	2
			底			1						1		2	
			肩							1				1	
			耳		2					1				3	
		メナム・ノイ窯	底							1				1	1
			耳							1				1	
			胴									1		1	
タイ産黒釉陶器	小壷か小瓶	シーサッチャナライかスワンカローク	胴				1							1	1
タイ産土器	蓋	半練	撮～底		1									1	19
			底	2	1	9		1		1	2	2		18	
			撮									1		1	
タイ産無釉陶器	平鉢	–	口			1					1			2	2
ベトナム産青花	小碗	–	口～底									1		1	2
			口			1								1	
	瓶	–	胴						1					1	1
ベトナム産色絵	碗	–	胴							1				1	1
ベトナム産白磁	碗	–	口							2				2	2
			胴						1					1	
韓半島産象嵌青磁	碗	博多Ⅴ類	胴								1			1	1
総計				2	11	16	1	2	3	15	5	9		64	26

③ベトナム産陶磁器

青花３個体、色絵１個体、白磁２個体が出土している（第７表）。

青花 小碗２点、瓶が１点（個体も同数）出土している。

小碗（124・525）はいずれも文様を青色、圏線を灰オリーブ色と、異なる顔料を用いて描く。後者は底部が残存しており、ベタ底で外底面に鉄錆を施す。同様の特徴をもつ小碗は、首里城二階殿地区落ち込み（県埋文 2005 b、p. 75）や、淑順門の南端にあたる御内原北地区Ａ－３・４裏込内（県埋文 2010、pp. 184-203）などで類例が見られる。これらは森本編年 第Ⅰ期（森本 1993）・矢島分類 第一群（矢島 1998）に該当し、14 世紀中頃から 15 世紀初頭のものと考えられる。

瓶（333）は小片だが、内面に薄釉がかかることややや膨らむ胴部であることから、水注ではなく瓶と判断した。同様の波濤文風の同心半円を描いた瓶は二階殿地区落ち込み（県埋文 2005 b、p. 79）でも確認されている。

色絵 碗胴部１点・個体が出土している。小片のため図化は行っていない。軟質の胎土に失透釉がかかり、内面に圏線、外面にも文様が見られる。

白磁 外反碗（409）が確認されている。精良な胎土に透明釉を施す。

④韓半島産陶磁器

象嵌青磁を１点確認している。473 は、碗胴部で内面に白黒象嵌で蓮華文を描く。博多分類Ⅴ類に当たり（森本 2005）、14 世紀中頃～ 15 世紀前半の間に収まるものと考えられる。

⑤本土産陶磁器

出土点数は 30 点と少ないが、産地別にみると肥前・薩摩・関西系・瀬戸などの製品が確認されている（第８表）。ここでは肥前産の染付を３点図化した。個々の所見は観察表に示す。

⑥産地不明陶器

産地不明陶器は、軟質焼成の蓋で、これまで瓦質土器として報告されることが多いものである。ただ、現状では産地の特定が難しいことから、産地不明陶器と称した。破片 50 点、６個体を数える（第９表）。

今回は、これまで出土していた平面形は円形のもの（132・335）の他、方形のもの（133）が出土している。

第８表　本土産陶磁器集計表

合計 / 点数				地区 / 層						小計	個体数
				北区		南区			不明		
産地	種類	器形	部位	Ⅰ	Ⅳ-4	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ	Ⅰ		
肥前	染付	碗	底				1			1	1
		皿	口	1			2			3	3
		蓋					1			1	1
		不明	口				1		1	2	2
			胴			1				1	
			不明				5			5	
	陶器	碗	胴				2			2	1
		皿	口				2			2	2
			胴					2		2	
	白磁	小碗	胴				1			1	1
九州？	天目	碗	不明		1					1	1
薩摩	陶器	土瓶	胴				3			3	1
		不明	不明				1			1	1
関西	陶器	不明	口				1			1	1
瀬戸	染付	不明	不明				2			2	1
不明	三彩	不明	不明	1						1	1
	不明	小杯	胴	1						1	1
総計				3	1	1	22	2	1	30	18

第９表　産地不明陶器集計表

合計 / 点数		地区 / 層						小計	個体数
		北区		南区					
器種	部位	Ⅳ-1	Ⅳ-2	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ		
蓋	口		3	1		1	1	6	6
	胴	6	33	2	1		2	44	
総計		6	36	3	1	1	3	50	6

⑦土器・土製品

土器は 14 個体、土製品３個体出土している（第 10 表）。出土した土器の大半はグスク土器である。他には少量であるが貝塚時代の先史土器や宮古式土器も得られている。まず出土土器を大きく貝塚時代土器、グスク土器、宮古式土器の三つに大別し、それぞれⅠ～Ⅲ群とした。以下、Ⅰ～Ⅲ群の概要について述べていく。個体数は口縁部及び底部の出土数の多いものを数え、胴部のみの場合は１個体としている。

Ⅰ群：貝塚時代土器

貝塚時代の土器に分類される資料をまとめた。２個体出土している。出土資料は全て小破片で数量も少ない。グスク期における混入と思われる。

299は、貝塚時代後期系の口縁部片である。泥質で器面に指頭痕がみられる。

Ⅱ群：グスク土器

グスク時代に位置づけられる土器群で北側地区Ⅳ－4・5層を中心に出土している。Ⅱ群土器は胎土・混入物からａ～ｃの三つに細分した。この中で主体となるのはⅡ－ａ類である。

Ⅱ－ａ類　グスク土器（74・270・300・301・306・312・314・315）

沖縄諸島在地産のグスク土器である。6個体分得られている。口縁部～胴部の残りが良い資料が1点得られているが、殆どが小破片である。

器形は壺形のみ確認されており、短頸壺（74）と長頸壺（301・312）の2タイプがある。短頸壺は頸部が短く口縁部が肥厚するもので、長頸壺は頸部で立ち上がり直口する。これらは、胎土や混入物の様相から以下の3つのタイプに分けられる。

①砂泥質で赤色粒や黒色鉱物を多量に含むもの
②泥質で混入物に白色細粒が多量にみられるもので器面があばた状を呈するもの
③泥質で黒色鉱物や雲母がみられるもの

この中で、②としたものが多く得られており、短頸壺タイプは胎土①、長頸壺タイプは胎土②に対応する。

器面調整は幅0.8～1.4cmの篦状・板状工具によるケズリ・ナデ作業により形を整えた後にナデ消し作業を行う。篦状の工具痕がナデ消されずに明瞭に残るものや、指ナデによる指頭痕が残存するものなど、仕上げが全体的に雑なものが殆どである。一部丁寧なナデ・ミガキが施されるものもある。

このように全体的にナデ調整が徹底されておらず粗造なつくりとなる特徴や、共伴して出土した陶磁器の様相から、宮城弘樹・具志堅亮によるグスク土器編年の第3様式（宮城・具志堅2007）の範疇と考えられる。

Ⅱ－ｂ類　産地不明の土器（300～304）

従来のグスク土器の定義から外れる産地不明の資料である。3個体分得られている。胴部や頸部の形態から器形は壺形と考えられる。胎土は泥質で細かく、混入物には赤色粒や石灰質砂粒、雲母などが含まれるが量は少ない。全体的に薄手であり、焼き締められたように堅緻で陶質に近い印象を受ける。器面調整は全体的に粗雑なものが多い。板状工具（幅0.8～1.5cm）による調整痕がナデ消されずに明瞭に残存している。横位方向に調整するもの、縦・斜め方向に調整するものもある。赤色土粒が混入することから宮古地域の土器の可能性もあるが詳細は不明である。

Ⅱ－ｃ類　外面朱塗りの土器（313）

外面に朱塗りが施される資料で1個体分得られている。全て小片かつ胴部片で、器形が窺える資料は得られていない。胎土は黄橙色の泥質で細かく、混入物は雲母や黒色鉱物を少量含む。朱塗りが施される外面は丁寧な器面調整により平滑となるが、内面は工具によるナデ調整痕が明瞭に残る。阿波根古島遺跡等に類例がある。

Ⅲ群：宮古式土器（478・479）

宮古式土器は南区Ⅲ層において2個体出土している。器形は壺形で、口縁部は外反し肩部の張りも強い。胎土は砂泥質で白色細粒や赤色粒を多量に含む。宮古第一型式の範疇と思われる。478・479は同一個体の資料と思われる。

土製品（236・237・307）

土製玉が北区Ⅳ－3・4層において3点出土している。外面に側面及び両面から穿孔するもの（236・307）があるが、ともに未貫通で未成品の可能性もある。類似する資料が越来城において出土しており、羽子板の玉とする見解もある（上原2004）。また外面に成形時の痕跡が残るもの（237）もある。

第10表　土器・土製品集計表

合計 / 点数			地区 / 層										小計	個体数
			北区								南区			
器形	分類	部位	Ⅰ	Ⅳ-1	Ⅳ-2	Ⅳ-3	Ⅳ-3'	Ⅳ-4	Ⅳ-5	不明	Ⅱ	Ⅲ		
甕	Ⅰ	口						2					2	2
		胴		1			1		1				3	
壺	Ⅱa	口		1			1	2	2				6	6
		底						2	1			1	4	
		胴	4	14	4	5	15	91	16	5	4		158	
	Ⅱb	口		2				1					3	3
		底						2					2	
		胴		3			1	23	4				31	
	Ⅲ	口										2	2	2
		底										1	1	
		胴									4	42	46	
不明	Ⅱc	胴					2	2	2				6	1
土器総計			4	21	4	7	20	126	26	5	8	46	267	14
土製玉						2		1					3	3

⑧沖縄産陶器

沖縄産陶器には、その焼成や施釉方法により、施釉陶器・無釉陶器・陶質土器・瓦質土器に分けられる。

1）沖縄産施釉陶器

方言で「ジョウヤチ(上焼)」と称される一群で、器の表面に釉薬を塗布する製品を指す。釉薬には灰釉・鉄釉(黒釉や褐釉を含む)・透明釉（素地に白化粧を施すものを含む）などがみられ、それに呉須や緑釉で文様を描く例もある。破片では合計 923 点、最低 381 個体出土している（第 11 表)。

以下に図化された器種別の分類概念を記し、詳細は観察表に示す。

碗（15 ～ 19・417 ～ 419)

A類：底部から斜め上方に口縁を開くもので、灰釉または鉄釉の単掛け（15・419)。

B類－１：腰部に丸みを持たせ端反口縁を呈する。鉄釉単掛けで内底に鉄絵の文様を施す（16)。

２：器形は１と同様だが、外面鉄釉と内面灰釉（または白化粧＋透明釉）で掛け分ける。前者の場合は内面に鉄絵で施文する（17)。

C類：器形はB類に似るが端反口縁が強調される。白化粧＋透明釉単掛けで、呉須で施文するもの（417）と無文のもの（418）がある。

D類：腰折の筒形碗で蓋付きと想定される。白化粧＋透明釉単掛けで有文（18・19)。

小碗（23・420 ～ 422・558)

A類：直口口縁の丸碗で、灰釉単掛け（421)。

B類－１：腰部に丸みを持たせ口縁部が端反または直口する。前者は外面を面取りするもの（23）もある。白化粧＋透明釉単掛けで、呉須で施文するもの（422）と無文のもの（23・420）がある。

２：器形は１の端反口縁と同様だが、外面鉄釉と内面灰釉（または白化粧＋透明釉）で掛け分ける。呉須で施文するもの（558）と無文のものがある。

火取（22)

A類：屈曲した腰部から直線的に立ち上がるもの（22）や、内湾口縁のものがある。前者は白化粧＋透明釉の単掛けで、口唇部に呉須や緑釉を塗布する。後者は鉄釉と別種の釉薬を掛け分け、胴部中位に飛鉋を施す。

火炉（423・557)

A類：屈曲した腰部から直線的に立ち上がるものや、内湾口縁のもの（557）がある。いずれも鉄釉単掛け。

蓋（25・26・425)

A類：急須の蓋で、饅頭形の撮を貼付した庇と袴を持つ。鉄釉または瑠璃釉単掛け（425)。

B類：鍋の蓋で、高台付きの皿を伏せた器形を呈する。鉄釉単掛け（25)。

C類：碗の蓋で、庇端部を削って袴を設ける。灰釉単掛け（26)。

急須（424)

A類：最大径を胴部下位に持ち、肩部に板状把手を１対貼付するもの。鉄釉・瑠璃釉・白化粧＋透明釉などを単掛けし、線彫り等で施文するもの（424）と無文のものがある。

皿（20・21)

A類－１：端反口縁を呈するもの。白化粧＋透明釉単掛けで、呉須などで施文するものと無文のもの（20）がある。

２:直口口縁で口唇部を波状に成形するもの。白化粧＋透明釉単掛けで、内底に陰圏線を巡らす（21)。

酒注（24）

A類：最大径を有する胴部中位に稜を持つものと、胴部を湾曲させるものがある。白化粧＋透明釉単掛けで、線彫り等により施文する。

鍋（336）

A類：胴部が球形を呈し口縁部を外側に折り曲げるもの。鉄釉単掛け。

第 11 表　沖縄産施釉陶器集計表

合計 / 点数			地区 / 層											小計	個体数
			北区					南区				不明			
器形	分類	部位	I	IV-1	IV-2	IV-3	IV-4	I	II	III	IV	I			
碗	A	口～底	1						1					2	26
		口	6					7	11					24	
		底	1						1			1		3	
		胴	8					2	5					15	
	B-1	底	1									1		2	2
	B-2	口	3						1					4	4
		底	1						1			1		3	
		胴	1											1	
	C	口～底							1					1	14
		口	6						5			1		12	
		底	10						3					13	
		胴	7					1	4		1	1		14	
	D	口	1											1	1
		底	1											1	
	不明	口	1						1					2	2
小碗	A	口		1		1		1	5			2		10	10
		底							2					2	
		胴							2					2	
	B-1	口	12	1				2	6			1		22	22
		底	6					1	2					9	
		胴	10					1	2			1		14	
	B-2	口～底										1		1	7
		口	2						4					6	
		胴	2						2			1		5	
火取	A	口	1											1	1
		胴							1					1	
	B	口								1				1	1
火炉	A	口	1					1	1			3		6	6
		底							1					1	
		胴	2					1	1					4	
蓋	A	庇～袴	1					1	1					3	7
		撮										1		1	
		庇	2					1	1					4	
	B	撮	2											2	2
		庇							1					1	
	C	庇～袴	1											1	1
急須	A	口	3					1	4			2		10	15
		底	2					3	7			3		15	
		胴	28	1				3	7			2		41	
皿	A-1	口～底	4						1					5	232
		口	156	3		1		30	22			15		227	
		底	45	2				2	3			6		58	
		胴	82					9	19			17		127	
	A-2	口							1					1	1
		底	1											1	
		胴							2			1		3	
酒器	酒注A	胴							2					2	1
酒注	酒注A	口	1						1					2	3
		底	2									1		3	
		胴	10					1	2			4		17	
大皿	A	口						1						1	1
壷	A	口			1									1	1
鍋	A	口	1						3			1		5	5
		底	2						1					3	
		胴	5					1	3					9	
鉢	A	口	5					1						6	6
		胴	4					1	2			1		8	
瓶	A	胴							1					1	1
不明	A	底										1		1	1
	不明	口							1					1	8
		底	4				1		2			1		8	
		注口	1											1	
		胴	104	2	2	3		17	32			11		171	
総計			550	10	3	5	1	92	179	1	1	81		923	381

2）沖縄産無釉陶器

方言で「アラヤチ（荒焼）」と称されるもので、高火度で焼成された焼き締め陶器の一群を指す。基本的には無釉を主体とするが、泥釉やマンガン釉が施釉されるものもある。様々な器種が確認されているが、特定の器種に「初期無釉陶器（県埋文 2010）」の範疇に含まれる製品がみられる。破片では合計 302 点、最低 83 個体出土している（第 12 表）。

以下の各器種の分類概念を記し、個々の所見は観察表に示す。

碗（27・337・338・426 ～ 429）

A類：底部から斜め上方に開く器形で、口縁部は端反または直口を呈する。胎土・焼成・成形等の特徴から初期無釉陶器と考えられる（337・426・427・429）。

B類：器形はA類に似るが高台内刳りが浅く、焼成温度も低い（27・338・428）。

鉢（29・430・431）

A類：口縁部を内側に折り返して鍔縁状に成形するもの。初期無釉陶器と考えられる（431）。

B類：器形はA類と同様に鍔縁口縁を呈するもの（29）や、口縁部が内湾するもの（430）などがある。前者は鍔上面、後者は口縁部外面に文様を施す。

擂鉢（432・477・559・560）

A類：底部から斜め上方に立ち上がるもので、口縁部は外側に折り曲げて肥厚させ、その上に突帯を巡らす。擂目の間隔は広い。初期無釉陶器と考えられる。（432・477）。

B類：器形はA類に似るが、口縁部は肥厚せず直下に抉りを入れ稜を形成する。擂目の間隔は狭く、重複する部分も多い（559）。

C類：張りの強い胴部を持ち、口縁部が鍔縁状を呈するもの。擂目は内面全体に施される（560）。

壺（28・434・435・526）

A類：玉縁口縁を呈する大形の有耳壺。初期無釉陶器と考えられる（434・435）。

B類：中形の無耳壺で、口縁部は鍔縁状のもの（28）と玉縁状のもの（526）がある。後者は外面に櫛描きで施文する。

甕（440）

A類：最大径を肩部に持ち、口縁部が鍔縁状を呈するもの。外面に線彫りと貼り付けで文様を描く。

火取（436）

A類：筒形に立ち上がり、口縁部は内側に折り曲げて肥厚させる。初期無釉陶器と考えられる。

火炉（437）

A類：肩部で内側に屈曲し口縁の上面観が三葉形をなすもの。初期無釉陶器と考えられる。

急須（433）

A類：球形の胴部から口縁部を直立させ、口唇部を板状に成形する。初期無釉陶器と考えられる。

蓋（30・438）

紐状の把手を貼付する円盤形のもの（438）と、浅鉢を伏せた形態を呈する厨子の蓋（30）がある。前者は初期無釉陶器と考えられ、筒形の容器に対応する可能性が高い。後者の内面には墨書が残る。

第 12 表　沖縄産無釉陶器集計表

合計 / 点数			地区 / 層									小計	個体数
			北区				南区				不明		
器形	分類	部位	Ⅰ	Ⅳ-1	Ⅳ-2	Ⅳ-3	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ		
碗	A	口～底					1	2				3	
		口					1	10	1			12	15
		底	1					6	1			8	
		胴					11	8				19	
	B	口					2	5		1		8	
		底	1				1		1			3	8
		胴						2				2	
鉢	A	口						3				3	3
	B	口	6	1			2	5			1	15	15
		胴						1				1	
	不明	底						2				2	2
		胴									4	4	
擂鉢	A	口						2	1			3	3
		底						1				1	
		胴						5				5	
	B	口						1			2	3	3
		底	1									1	
		胴	6					5			1	12	
	C	口	1					2			1	4	4
		底	2									2	
		胴	3								1	4	
	不明	底									1	1	1
壷	A	口						2				2	2
		胴	2				5	16	3	2	2	30	
	B	口	4				3			1		8	8
		底						1				1	
		胴	27				13	17			3	60	
	不明	口									1	1	1
		底									1	1	
甕	A	口	1					1				2	2
		底	2									2	
		胴	7				1	12				20	
	B	底	1									1	1
	不明	胴									2	2	1
火取	A	口						1				1	1
火入	A	口						2				2	2
火炉	A	口						1				1	1
		胴						1				1	
	B	口	1				1					2	2
		胴	1									1	
急須	A	口						2				2	2
		胴						1		1		2	
蓋	不明	摘						1				1	1
		不明	1									1	
不明	不明	口				1		4				5	5
		底						1				1	
		胴	3	1	1		5	16	4	1	5	36	
総計			71	2	1	1	46	139	11	6	25	302	83

第 13 表　陶質土器集計表

合計 / 点数			地区 / 層									小計	個体数
			北区				南区				不明		
器形	分類	部位	Ⅰ	Ⅳ-1	Ⅳ-3	Ⅳ-3'	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ		
鉢	A	口	1								1	2	2
		胴	2									2	
鍋	A	口	6				3	2				11	11
		耳	2									2	
		胴	23	1			7	16		2	5	54	
火炉	A	口	5				1	1		1		8	8
		底	1									1	
		胴	6				1	3			2	12	
	不明	底	2									2	2
蓋	A	摘	1									1	1
		底		1								1	
		一	5		1			1				7	
	B	摘								1		1	1
		一	1									1	
土瓶	A	口						1				1	1
		胴	2					3				5	
鍋か土瓶	A	底	2				1	10		1	1	15	計上なし
	不明	底	28			1						29	計上なし
不明	不明	口					1	3				4	4
		底	1									1	
		胴	16	6			10	13	3		2	50	
総計			104	8	1	1	24	53	3	5	11	210	30

第 14 表　瓦質土器集計表

合計 / 点数		地区 / 層				個体数
		南			小計	
器種	部位	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ		
擂鉢	胴		1		1	1
器種不明	底	1	1		2	2
	胴		2	1	3	
総計		1	4	1	6	3

3）陶質土器

方言で「アカムヌー」又は「カマグァーヤチ」などと称される軟質の土器群である。直接火にかける道具が主体のため一般に焼成不良であり、触ると粉末が付着するものが多い。器種は鍋・火炉・土瓶・鉢やそれに対応する蓋などが得られている。破片は合計 210 点、最低 30 個体出土している（第 13 表）。

以下に器種ごとの分類概念を記し、詳細は観察表に示す。

鍋（36）

A類：胴部が球形を呈し口縁部を外側に折り曲げ、口縁部の外面に紐状の把手を 1 対貼付する。

火炉（34・35・37）

A類：頸部がややすぼまり口縁部を玉縁状に肥厚させ、内面に受部を貼付するもの（35）や、筒状に立ち上がり口縁部を三角形に肥厚させるもの（37）、胴部が球形で口縁部が舌状を呈し、内面に受部を貼付するもの（34）などがある。

土瓶（33）

A類：腰部に稜を持ち全形が算玉形をなすもので、注口は基部から斜め上方に直立する。

鉢（38）

A類：口縁部が内湾する平底の鉢で、外面に櫛描きで文様を施す。

蓋（31・32・73）

A類：鍋に対応すると考えられるもの（32・73）。高台付きの皿を伏せた器形を呈する。

B類：土瓶に対応すると考えられるもの（31）。蓋甲が底端部に向かって下がる器形を呈する。

4）瓦質土器

出土点数は 6 点で（第 14 表）、図化できた資料は擂鉢の胴部（439）のみである。

⑨金属製品

本遺跡からは総数で 1107 点出土し、鉄製品 999 点、青銅及び合金製品 107 点、出土した（第 15 表）。その内 69 点を図化した。出土した金属製品の種類は、甲冑類・武器類が多く、鍋・錠前等が出土した。以下に各分類の特徴を記した。

第 15 表　金属製品集計表

合計 / 点数			地区 / 層													総計
			北区							南区				不明		
種類	器形・分類		I	Ⅳ-1	Ⅳ-2	Ⅳ-3	Ⅳ-3'	Ⅳ-4	不明	I	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	I	不明	
青銅製品	甲冑類	鍬形			2						2					4
		中央飾	1										1			2
		篠垂		1												1
		覆輪	1	1	3					1		2				8
		責鞅									1					1
		鐙			3						1					4
		金物（切子頭）									1					1
	刀装具	鍔			1											1
		大切羽			8											8
		切羽			2											2
		目釘			1											1
		目貫？			1											1
		柄			1											1
	飾金具	鍵座金具			1											1
		八双金具			2											2
		不明	1		1						2		1			5
	ジーファー		1													1
	銅鏡？				2											2
	銅製弾											1				1
	銅釘			1							1					2
	鋲			1	3	1										5
	近現代	砲弾片	1								1					2
		薬鉄									1					1
		鉛筆ホルダー									1					1
	不明製品		3		18	1				5	11	3	1	1		43
青銅製品（鍍金）	甲冑類	八双金物		1												1
		八双鋲			1											1
		三鍬形台	1													1
		笠印付鐙										1				1
		覆輪										1				1
		金物？			1											1
合金製品	不明製品											1				1
鉄製品	甲冑類	小札		4	7						1		1			13
		鎮帷子		3	1	2						1				7
		鎮片			29							1				30
		不明		2												2
	鉄鏃				1						1	1	1			4
	刀子				3		1			1			2			7
	鉄釘		51	38	208	22	3	1		41	205	32	60	9		670
	錠前				2											2
	鍵類				2											2
	鉄鍋			4									7			11
	把手状				1						1					2
	くさび状									1	3					4
	針状				32		1									33
	釣針状				5				1							6
	不明		45	13	22	4			2	25	69	10	8	6	2	206
総計			105	69	364	30	5	1	3	74	302	54	82	16	2	1107

甲冑類　青銅製品では立物・金物、鉄製品では小札と３つに大別した。名称については、（山岸・宮崎 1997）を参考にした。

立物　立物は眉庇や鉢に立て、兜を装飾するとともに、威容を示し、着用者の存在を顕示するものの総称で、鍬形（134･135）、中央飾（527）、三鍬形台（40）が出土している。鍬形は 135 が 134 よりひと回り大きい。三鍬形台にソケット状に差し込んで、固定するものと思われる。中央飾（527）は、首里城跡で多く見られるタイプである。三鍬形台（40）は中央のみで、左右は欠損している。魚々子が粗く打たれていることから琉球製と考えられる（久保　2010）。

金物　金物とは、実用と装飾を兼ねて甲冑に使用される金具をいい、飾金具と区別するため金物という名称を用いた。今回出土したものは、篠垂、笠印付鐶、覆輪、八双金物、八双鋲、鞢に分類した。

篠垂（75）　星を打ち花先形の形状より、鎌倉時代後期～南北朝の頃のものと考えられる（山岸・宮崎 1997）。天界寺跡（那覇市教委　2000）より、同種のものが出土している。

笠印付鐶（480）　兜鉢の後正中に打つ金物で、横長の楕円鐶より室町時代以降のものと考えられる（山岸・宮崎　1997）。

覆輪（39・80・139・481）　481 は鍍金され、鼻に鋲が残り、丁寧な作りである。

八双金物（76）　鍍金され、唐草文に魚々子は規則的に打たれる。

八双鋲（136）　鍍金され、錆が覆い装飾の全体をうかがえない。

鞢　責鞢（442）が出土している。

不明（154）　鍍金された青銅製品で、鋲で留める部分があることから、甲冑の金物の可能性がある。

小札　本遺跡から出土した小札は、本小札と伊予札の二種類に大別できる。さらに本小札は平小札（78・137）と四目（77・138）の二つに分類できる。伊予札は、碁石頭（528）の一点のみである。

不明（81・82）　細長い鉄板を小札のように重ねることから甲冑の一部の可能性がある。

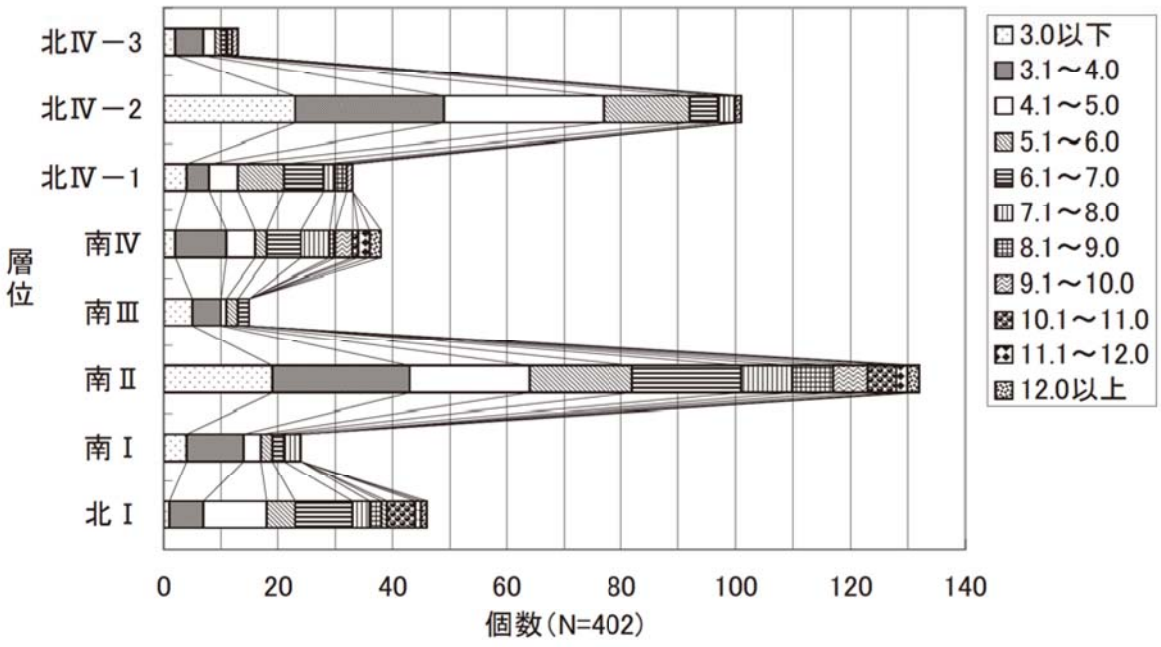
鉄鏃　矢頭の平面形より２型式に分類した。

Ⅰ類（140・443・482）　矢頭の平面形が直刃ないし弧状の刃を呈するもの。上原分類（上原・宮城 2007）Ⅰ－Ａに類する。

Ⅱ類（529）　矢頭の平面形が剣先状を呈するもの。管見のかぎり沖縄では類例が見られない。

刀子（155・156・275・531・530）　刀子は全て鉄製品である。全体的に背がほぼ直線的だが、155 は切っ先でやや弓なりになる。156 の茎はソケット状で孔はみられない。275 は小刀か？

第 16 表　鉄釘法量表（単位はcm）



刀装具　鍔、切羽、縁金物、柄、目釘、その他が出土している。

鍔（141）　木瓜形で切込み部分に猪の目の透かしを入れる。

大切羽（142 ～ 148）鍔の上下にある金具である。木瓜形であるが、その形態には若干の違いがある。142 ～ 144 は、厚さが 2 ㎜ で、四方全て丸く仕上げたものである。145 ～ 147 は前者よりも大振りで厚さも 1㎜ と薄く、四方の仕上げは緩やかな弧状である。148 は上端に透かしと思われる孔があり、端は折り曲げる。

切羽（149・150）　大切羽の上下にある金具で切羽よりも厚い。

小柄（151）　小柄の柄にあたる部分である。

目釘（152）　円筒状の小金具で目釘とされるもので、県内では今帰仁城跡などで出土している（今帰仁村教委 1991）。

目貫？（153）　花菱形の飾りに突起部があるため、目貫ではないかと考えた。

飾金具（161 ～ 163・167・444・532）　全て青銅製品である。

161・162 は八双金具で 708 は出八双形、718 が入八双形である。163 は鍵座金具で下部の折り曲げた部分を引掛けて閉めるものと思われる。532 は鐶座金具で箱などの引き出し把手とおもわれるが、通常のものより小型である。

鍋（84・533・534）　全て鉄製品である。84 は厚手のタイプで、口縁が舌状になる。533・534 は薄手のタイプで、前者は胴部が直線的にのび、後者は口縁が外反する。

錠前（157・166）　157 は筒状の鉄製品で、現状では下端が開いているが本来は溶接されていたものと考えられる。小口であるが、一端は開口しているが、もう一端はその上半だけ別の鉄板で溶接させ塞いだ形となっている。現時点では、この形状と同一のものは探せていないが、このような鉄板で整形された小型の筒状製品としては錠前が考えられる。仮に錠前ならその形状より牝金具と考えられ、下半を塞いだ小口は鍵穴の可能性もある。

166 も鉄板で薄い箱形にし、上端一方は水平に延びる。小口であるが一端は開口しているが、もう一端は上半が塞がれている。先の 157 とは形状は異なるが、やはり錠前の牝金具の可能性が考えられる。

鍵（158・159）　158 は鍵の柄部、159 は先端つまり開錠部、その質・厚さより同一個体と思われる。鉄製品。

第 17 表　銭貨集計表

出土地区			北					南				不明	合計
銭種		初鋳年	Ⅰ層	Ⅳ－１層	Ⅳ－２層	Ⅳ－３層	Ⅳ－３’層	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層		
唐	開元通寶	621			1		1				1		3
北宋	祥符通寶	1008			1								1
	景祐元寶	1034	1										1
	皇宋通寶	1038							1			1	2
	至和通寶	1054			1					1			2
	熙寧元寶	1068		1					1		1		3
	元豊通寶	1078			1						1		2
	元豊通寶(大銭)	1078									1		1
	元祐通寶	1086		1	3						1		5
	元符通寶	1098									1		1
	聖宋元寶	1101									1		1
	政和通寶	1111			1								1
南宋	淳熙元寶(大銭)	1127							1				1
	開禧通寶(大銭)	1205						1					1
明	洪武通寶	1368	2		1	1	1	1	2		2		10
	洪武通寶(大銭)	1368				2							2
	永楽通寶	1408			3				2	3	2		10
日本	寛永通寶（新寛永）	1697	1					1					2
その他	無文銭		2	3	24	2	1	2	6	1	7	2	50
	輪銭							1					1
	銭種不明			6	14	5	1	1	13	2	10	2	54
合計			6	11	50	10	4	7	26	7	28	5	154
変形				4	10	1	1		6	3	13		38
残存率1/4（有文銭のみ）				1	8	3		2	9		4	1	28

銅鏡？（164・165） 164・165は三角縁であること、厚みが２㎜であることから同一個体と考えた。共にこの縁が稜花状となっていることから、復原案として、径22㎝前後の素文八稜鏡ではないかと考えた。ただ、現時点では類例はなく、あくまでも一案としておきたい。

鋲（169・170） 丸頭で、足が二又に分かれる。青銅製品。

鉄釘 鉄釘は頭の形状より、３つの型式に分類した。

Ⅰ類（83・171・239・308）：頭が折れ曲がるタイプ。今回最も多く出土している。

Ⅱ類（238）：頭と胴の区別がないタイプ。少数みられる。

Ⅲ類（168）：頭を輪状にするタイプ。ほとんどみられない。

なお、木片の付着は、83・171・238・239に見られた。

完形の鉄釘の全長を計測し、１㎝ごとに分類し、各地区の層序ごとの出土量をグラフにした（第16表）。南地区のⅡ層がもっとも出土量が多く、ほぼすべての長さが出土している。全体としては、3.0～4.0㎝がすべての層序で出土している。10.0cm以上は北地区のⅠ・Ⅳ－２層、南地区のⅡ・Ⅳ層のみである。

不明鉄製品（160） 十字状の薄い鉄板であるが、用途・形状は不明である。

合金（483） 金と銀の合金と思われる（山梨県立博物館沓名貴彦教示）。顕微鏡で観察すると３本／１㎜の線条痕が曲線や直線で見られるが、人為的なものか整理時のクリーニングによるのかは不明。

⑩銭貨

銭貨は中国銭45点、日本銭２点、無文銭50点、輪銭１点、不明52点の合計150点出土している（第17表）。中国銭は開元通寶（初鋳年621年）を最も古いものとして永楽通寶（初鋳年　1408年）まで15種確認でき、唐銭３点、北宋銭19点、南宋銭２点、明銭21点が認められる。

通常銭より大型であるいわゆる大銭は５点を数える。その内訳は、北宋銭では元豊通寶の折二銭、南宋銭では淳熙元寶、開禧通寶の折二銭、明銭では洪武通寶の折二銭、当三銭である。また、洪武通寶では「一銭」の背文字銭もある。

日本銭は寛永通寶で、新寛永である。

無文銭は最大25.3㎜、最少13.2㎜で、19㎜台と21㎜台が多い。

被熱等により変形を受けたと思われるものは38点、四分の一以下の小破片は28点と多い。

出土地点では北区81点、南区68点、不明が５点である。層序で見ると、北区Ⅳ－２層が50点と最も多く、南区Ⅳ層が28点、南区Ⅱ層が26点と続く。

第18表　骨製品集計表

合計／点数		地区／層								総計
		北区					南区			
種類	器形	Ⅰ	Ⅳ-1	Ⅳ-2	Ⅳ-3	Ⅳ-3'	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	
骨製品	ソケット状						1			1
	ボタン						1			1
	弧状		1							1
	歯ブラシ	1								1
	尖頭器							1		1
	突起状				1					1
	箸状						1			1
	半円状								1	1
	板状			1						1
	不明		1							1
	笄？					1				1
	柄状？				1					1
総計		1	2	1	2	1	3	1	1	12

第19表　石製品集計表

合計／点数		地区／層						総計
		北区		南区			不明	
種類	分類	Ⅰ	Ⅳ-4	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	不明	
石製品	碁石			1			1	2
	石球	1				1		2
	石碑				1			1
	硯				1			1
	不明				1			1
石器	たたき石					1		1
	石斧		1					1
青磁製品	碁石				1			1
総計		1	1	1	4	2	1	10

第20表　円盤状製品集計表

合計／点数		地区／層										総計
		北区				南区				不明		
種類	素材	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ-1	Ⅳ-3	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ		
円盤状製品	中国産褐釉陶器	1	1	2		2	2	3		1		12
	中国産褐釉陶器？			1								1
	タイ産褐釉陶器					2	2	1	1			6
	沖縄産施釉陶器	1										1
	沖縄産無釉陶器	3				1	3					7
	近世瓦（灰色）						1					1
	近世瓦（赤色）						1					1
	近世丸瓦（褐色）	1										1
	大和系平瓦（灰色）				1							1
総計		6	1	3	1	5	9	4	1	1		31

第21表　近代陶磁器集計表

合計／点数	地区／層						小計	個体数
	北			南		不明		
部位	Ⅰ	Ⅳ-1	Ⅳ-3	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ		
口～底	5						5	132
口	77	1		11	26	12	127	
底	25		1	3	8	8	45	
総計	107	1	1	14	34	20	177	132

第 22 表　淑順門西地区出土遺物個体数表

種類	地区/層															合計	重量（kg）
	北区									南区					不明		
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ-1	Ⅳ-2	Ⅳ-3	Ⅳ-3'	Ⅳ-4	Ⅳ-5	不明	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	不明			
中国産青磁	17	■	13	19	33	17	12	■	■	18	66	41	25	5	2	268	11.628
中国産白磁	2		2	1	2	3	7			3	14	2	9		1	46	0.961
中国産青花	11	■	4	8						14	32	1	8		5	83	1.446
中国産褐釉陶器	6		16	2	1	■	■	■		10	27	8	2	1	1	74	58.213
中国産天目			1		■	4	■			■	■	2	■			7	
中国産色絵磁器	1			1							1					3	
中国産瑠璃釉磁器										2	2					4	0.398
中国産鉄絵陶器													1			1	
中国産その他施釉陶器										2						2	
タイ産黒褐釉陶器			3	3			1			1	6	■	■			14	
タイ産黒釉陶器						1										1	
タイ産土器	2		2	9			1				1	2	2			19	12.510
タイ産無釉陶器				1								1				2	
ベトナム産青花				1						1			1			3	
ベトナム産色絵										1						1	0.033
ベトナム産白磁											2					2	
韓半島産象嵌青磁												1				1	0.002
本土産陶磁器	3						1			■	13		■		1	18	0.233
沖縄産施釉陶器	219		5	1	2		1			51	70	1	■		31	381	7.912
沖縄産無釉陶器	14		1	■	1					11	45	2	2		7	83	39.570
陶質土器	15		■		■	■				5	7	■	2		1	30	1.272
瓦質土器										1	2		■			3	0.458
土器	■		3		■	1	6	2	■		■	2				14	4.003
土製品					2		1									3	
産地不明陶器			■	3						1	■	1	1			6	0.279
近代陶磁器	82		1		■					11	26				12	132	1.700
陶磁器小計	**372**		**51**	**49**	**41**	**26**	**30**	**2**		**132**	**314**	**64**	**53**	**6**	**61**	**1201**	**140.620**
ガラス玉				21		1	1			1	11		4		1	40	0.001
骨製品	1		2	1	2	1				3	1	1				12	0.051
碁石										1	1				1	3	0.009
石（重量のみ）	■		■	■			■			■	■	■					31.800
石器・石製品	1						1				3	2				7	1.983
銭貨	6		8	49	10	4			1	7	27	6	29	1	2	150	0.299
青銅製品（鍍金・合金込み）	9		5	51	2					6	22	9	3		1	108	12.349
鉄製品	96		64	313	28	5	1		3	68	280	45	79		17	999	
明朝系瓦（軒丸・軒平）	29	1	8	1						62	103	57	4		8	273	355.280
明朝系瓦（平・丸・他）	187	5	14	2						166	635	345	13		94	1461	
高麗系瓦	2		1	1	6	■					■	■	■		■	10	4.400
大和系瓦	4		1	8	54	6	■			3	16	4	23		3	122	59.940
せん	344	2	7		3	1				104	474	52	2		69	1058	430.080
漆喰										2	27	114			12	155	47.570
総計	**1051**	**8**	**161**	**496**	**146**	**44**	**33**	**2**	**4**	**555**	**1914**	**699**	**210**	**7**	**269**	**5599**	**1085.068**

※本表の個体数は、各種類ごとで算出した個体数に合致させるように計算しており、そのため、胴部しか出土していないものは破片が何点あっても１個体と数えている。２ヶ所の層序で出ているものに関しては、便宜的に量が多い層序に入れることとした。

※陶磁器以外は瓦を除き、全ての点数。

※瓦の点数は、筒部以外の集計。なお、近世瓦の軒丸・軒平瓦は別に集計。

※■…破片出土あり

⑪骨製品

骨製品は 12 点出土している（第 18 表）。各層より出土している層ごとに説明する。

Ⅰ層からは、歯ブラシ（43）、箸状製品（340）、棒状のものを差し込むためか鹿角によるソケット状製品（341）、５つ孔のボタン（342）が出土している。歯ブラシ・ボタンは近代以降の遺跡で多く出土するものである。

Ⅱ層からは、茎部を有する尖頭器（456）が出土している。八重山諸島の遺跡で多く見られるものに類している。

Ⅲ層からは、表裏に３条ずつの線刻がある半円状製品（488）が出土している。

Ⅳ－１層からは、厚みのある弧状製品（91）、ウシの中手骨か中足骨を研磨し擦痕が見られるもの（92）が出土している。

Ⅳ－２層からは、長方形の板状製品（206）が出土している。

Ⅳ－３層からは、一端を細くし何らかの柄状と思われるもの（241）、突起状に加工したもの（242）が出土している。

Ⅳ－３´層からは、笄状製品（276）が出土している。骨密度が高いものを丁寧に薄く加工し、一端が水平、もう一端を尖らせている。この形状は、県内では糸数城跡（玉城村教委 1991 所収第 50 図１・２・４）の笄とされているものに類似している。笄は本州の中世遺跡、例えば広島県草戸千軒町遺跡（広島県草戸研 1993・広島県歴博 2005）や神奈川県千葉地東遺跡（神奈川県埋文 1986）などで出土しており、全長や薄さ、先端の形状は類似しているが、中央部に溝をもつものが多い点では県内の事例と異なる。

Ⅳ－１～３´層は時期幅を広くとっても 14 世紀後半～ 16 世紀前半であるので、首里城跡では当該期に笄状製品等を含む様々な骨製品が使用されていたことが明らかになったと言える。

⑫石器・石製品

石器は２点、石製品は７点出土している（第 19 表）。

石器は、砂岩製の石斧片（309）、図化していないが敲石がある。

石製品には、石球・碁石・石碑・硯・不明製品がある。硯は小片のため図化していない。

石球は２点で、44 は砂岩（ニービヌフニ）、487 はサンゴ石灰岩で作られている。

碁石は、339 が白色で頁岩か、562 は黒色で粘板岩製である。なお、先述したが青磁片を加工したもの（441）も、形態・大きさの点からはこれら石製のものと類似する。

石碑（455）は、おそらく長方形で上部の縁帯に半円状の凹みを有する。

454 はあまり例を見ない褐色で緻密な石材を丁寧に研磨した不明製品だが、徽？の字が書かれている。

⑬円盤状製品（図版 64・65）

円盤状製品は、31 点出土している（第 20 表）。素材で見ると、中国産褐釉陶器 13 点、沖縄産無釉陶器７点、タイ産褐釉陶器６点、近世瓦３点、大和系平瓦１点、沖縄産施釉陶器１点である（第 63 表）。

⑭玉類（図版 66）

玉類はガラス玉で、溶着したものも入れて 40 点出土している（第 64 表）。水色のものが多い。

⑮近代陶磁器

破片 177 点、132 個体が出土している。これまでの首里城跡の調査区に比べると量が少ないが、Ⅰ層の大半が前回調査時の埋め戻し土であるため、当該期の遺物は前回調査時に採取された可能性も考えられる。小破片であり今回は図・写真を割愛している。Ⅰ・Ⅱ層より主に出土しており、Ⅳ層でもわずかに見られるが混入の可能性を考えたい。種類としては、型紙摺り・銅版転写などがあり、明治～昭和初期のものである。

２．北区出土遺物

北区においては、前節までに述べてきたように、既に前回調査において石積等の遺構は検出されており、Ⅱ層はごくわずかのみの検出、Ⅲ層は検出されなかった。Ⅱ層は近世瓦６点、塼２点と極少量出土しているのみで、説明は割愛する。Ⅳ層は、石積等の遺構が確認できなかった範囲においてトレンチとして掘削した部分に堆積していた土である。Ⅳ層は、調査時に取り上げた土層を整理時の検討により遺物の種類等の傾向が共通している土層ごとをまとめて、報告する。以下、中国産陶磁器の各種類について、中国産を省略している。

①Ⅰ層・層序不明出土遺物（１～44・90）（第 30・31・34 図、第 23・24 表、図版 11・12）

グスク時代～近代の遺物が出土しており、陶磁器 372 個体、骨製品１点、石製品１点、銭貨９点、青銅製品９点、鉄製品 96 点、明朝系瓦 216 点、高麗系瓦２点、大和系瓦４点、塼 344 点、合計 1051 点出土している。

青磁（１～５）　１はやや器壁が厚く口縁も玉縁に近いが、腰が張った器形であることから、碗Ⅳ－０類とした。２は皿Ⅲ´－１類、３は皿Ⅴ－１類、４は鎬蓮弁文を有する大瓶の胴部、５は盤底部で高台をもつ。

白磁（６）　６は、見込みが露胎しており、印花文が見られるＤ´類の碗である。

青花（７～９・11～14）　７は元様式の盤で、宝相華もしくは牡丹唐草文が描かれる。８は明代Ⅰ②類の碗で、比較的大ぶりのものである。９・11～14 は清代のもので、福建・広東産碗（９・12）、徳化窯系碗（11・14）、徳化窯系皿（13）がある。

色絵磁器（10）　10 は清代の徳化窯系碗で寿の字が描かれるものと思われる。

沖縄産施釉陶器（15～26）　15～19 は碗、20･21 は皿、22 は火取、23 は小碗、24 は酒注、25･26 は蓋である。

沖縄産無釉陶器（27～30）　27 は碗Ｂ、28 は壺Ｂ、29 は鉢Ｂ、30 は蓋である。

陶質土器（31～38）　31・32 は蓋、33 は土瓶、34・35・37 は火炉、36 は鍋、38 は鉢である。

金属製品（39・40）　39 は覆輪、40 は鍍金されている三鍬形台である。

銭貨（41・42・90）　１は景祐「元」「寶」。２は新寛永通寶。90 は中国銭だが銭文不明である。

骨製品（43）　43 は歯ブラシである。

石製品（44）　44 は砂岩（ニービヌフニ）製の石球である。

②Ⅳ－１層出土遺物（45～89・91・92）（第 32～34 図、第 24・25 表、図版 13～15）

グスク時代の遺物が中心で、陶磁器類 51 個体、骨製品２点、銭貨８点、青銅製品５点、鉄製品 64 点、明朝系瓦 22 点、高麗系瓦１点、大和系瓦１点、塼７点、合計 161 点出土している。

陶磁器では近世以降の遺物である沖縄産施釉陶器５個体、同無釉陶器１個体、近代陶磁器５個体、陶質土器破片８点出土しており、個体数の割合では 13%となっている。さらに近世瓦も 22 点見られることから、数字上では単純に混入とするには躊躇せざるを得ない。しかしながら、本章第２節で述べたように、本層の直上にはⅠ層が覆っており、調査者としての感触としては、主体としてはグスク時代の遺物が中心として考えたい。

上記の前提で、陶磁器の時期幅を見ると、上限が青磁Ⅳ類、白磁Ｃ３群で 14 世紀後半、下限が青磁Ⅵ類、青花明Ⅱ類Ｄ群、タイ産メナムノイⅡ類で 15 世紀後半～16 世紀前半のものである。また、個体数の割合を主なもので見ると、褐釉陶器（16 個体、31%）、青磁（13 個体、25%）、青花（４個体、８%）となっている。褐釉陶器は壺で多く出土しているため、この時期には例えば貯蔵的な場が近接していたなどの機能・性格が反映されている可能性も考えられる。

青磁（45～53）　碗は、Ⅳ－０類（50・51）、Ⅴ－１類（46・49）、Ⅴ－２類（45）、Ⅵ－０類（48）、Ⅵ－１類（47）がある。特徴的なものとして、49 は剣先蓮弁文が描かれるⅤ－１類、50 は逆三角形の高台をもつⅣ－０類である。盤は、底部が高台のもの（52）、口縁ではＢ類（53）がある。

白磁（54）　54 は碗Ｃ３群である。

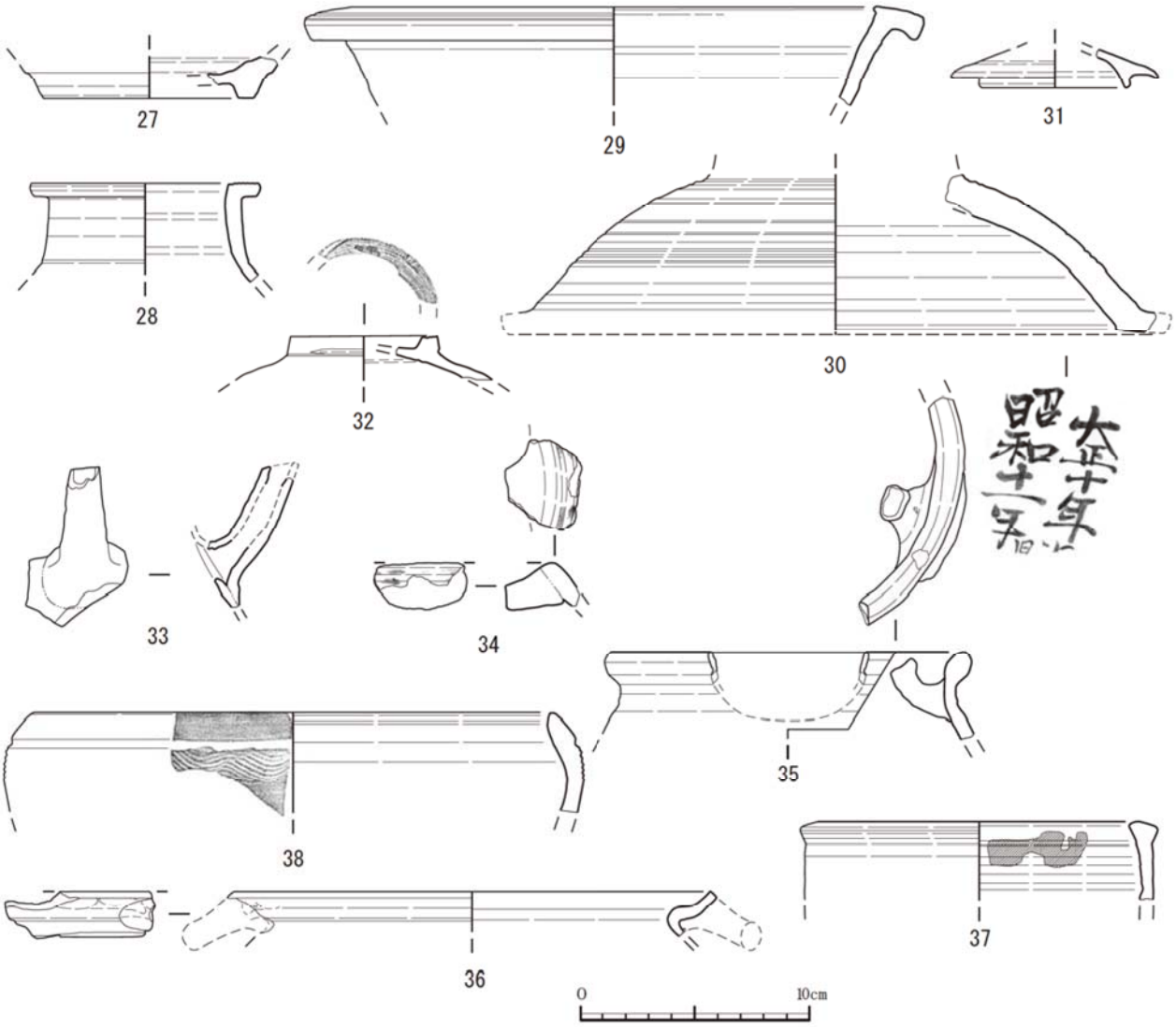
青花（55～61）　碗は 55～60 で、明Ⅰ－１類（55・57～60）、明Ⅱ類Ｄ群（56）がある。60 は波濤文が描かれるもので、今帰仁城跡（今帰仁村 1992）で見られるものである。61 は碁笥底の盤である。

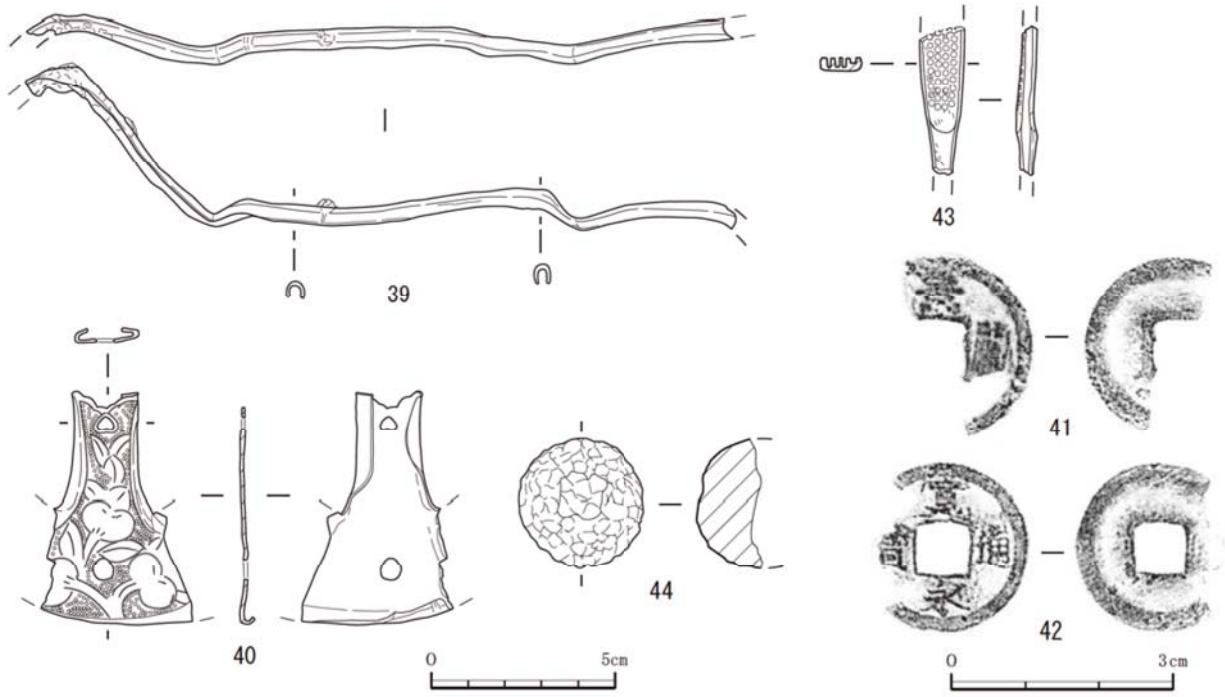
黒釉陶器（62）　62 は天目の口縁である。

褐釉陶器（63・64）　63 は壺５類、64 は波状突帯を有する胴部片である。

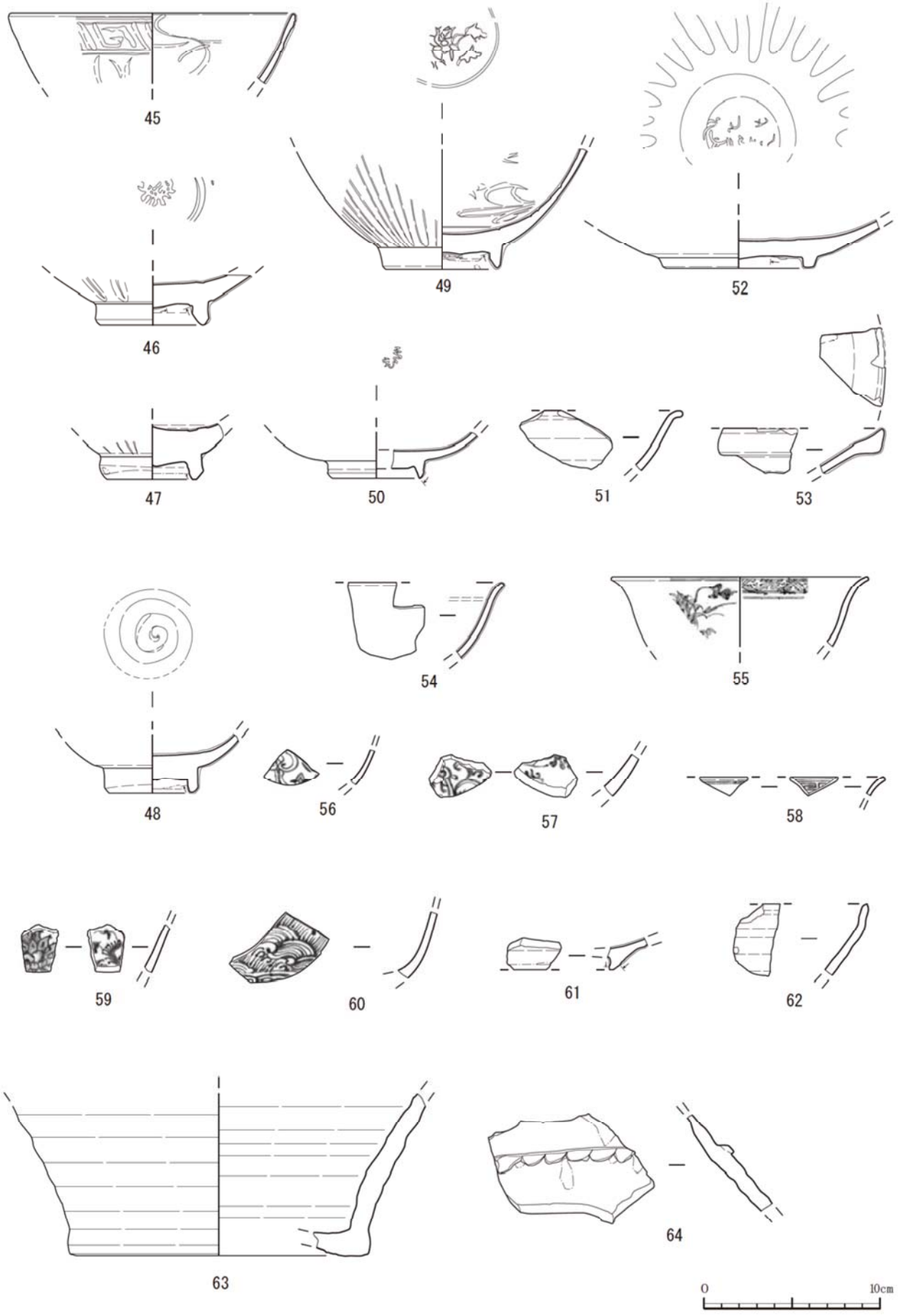
タイ産陶磁器（65～72）　黒褐釉四耳壺が多い。これらには、シーサッチャナライ窯（65～67）、メナムノイ

第30図　北区　Ⅰ層出土遺物（1）

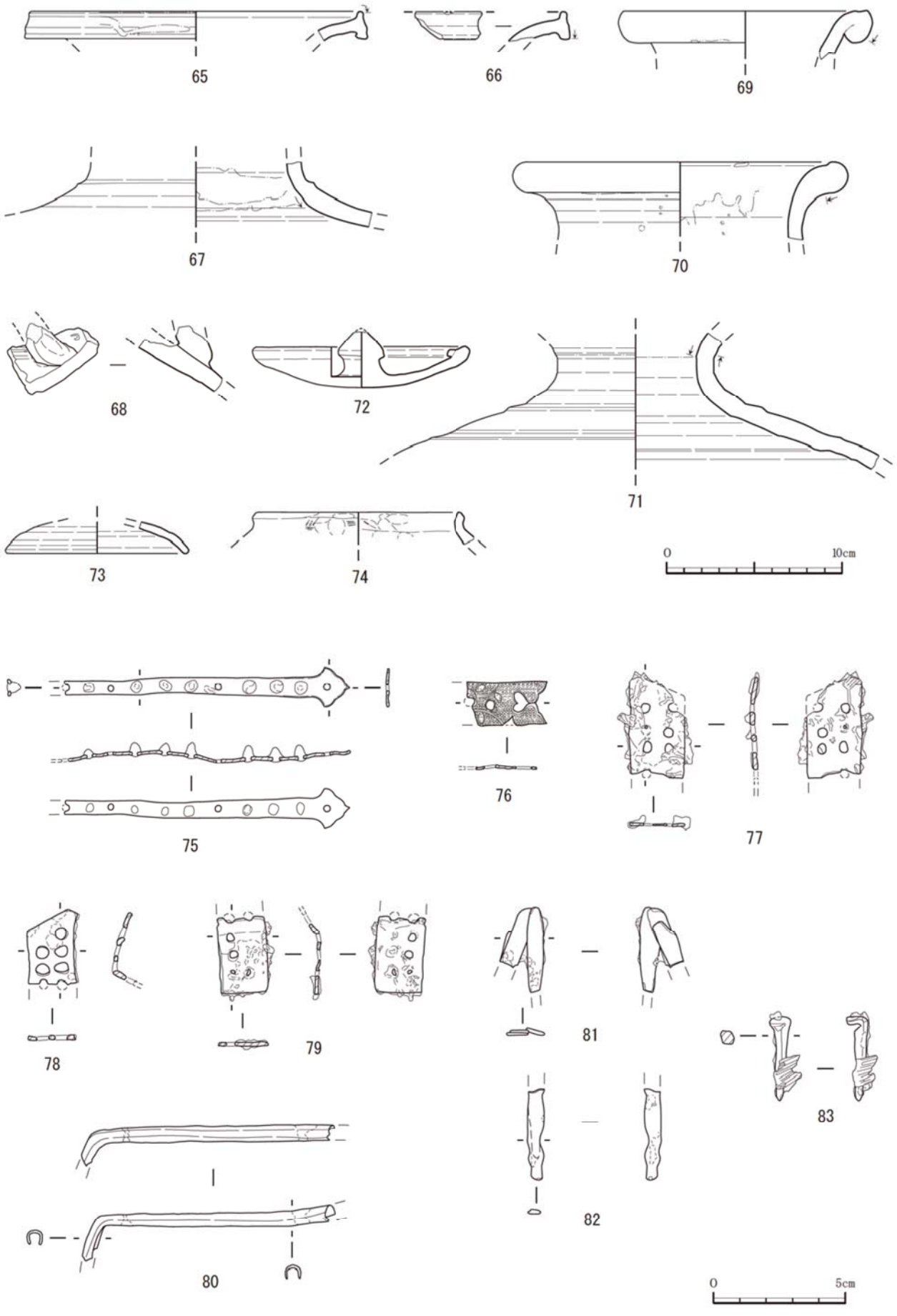




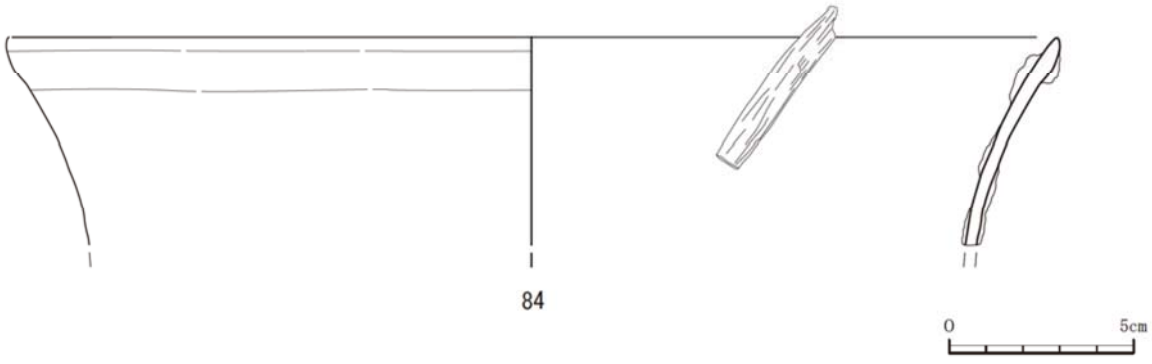
第31図　北区　Ⅰ層出土遺物（2）

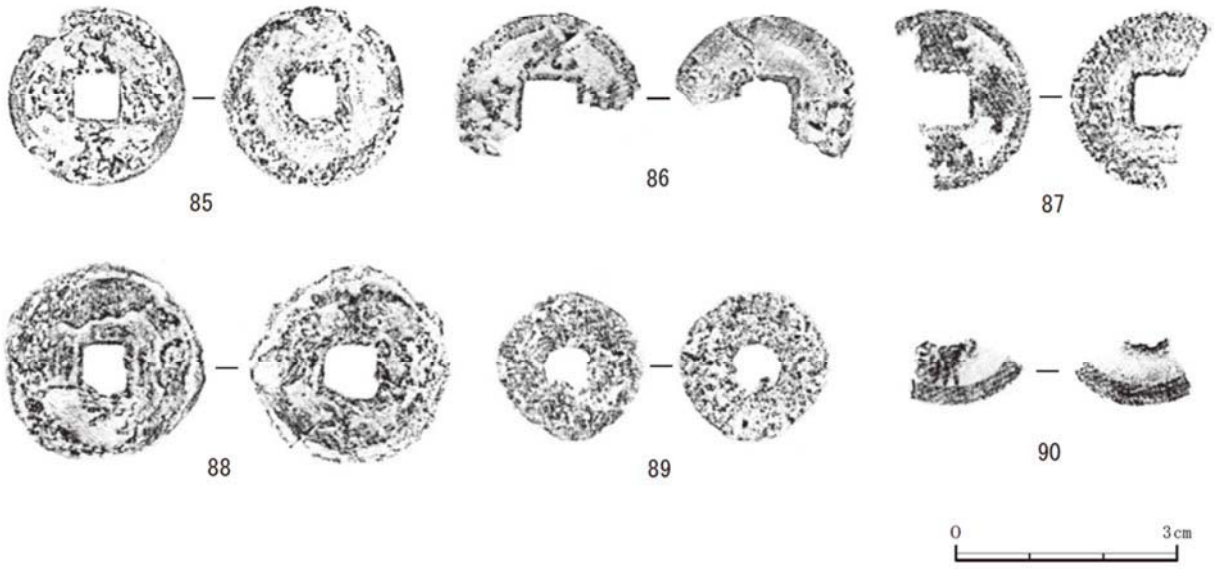


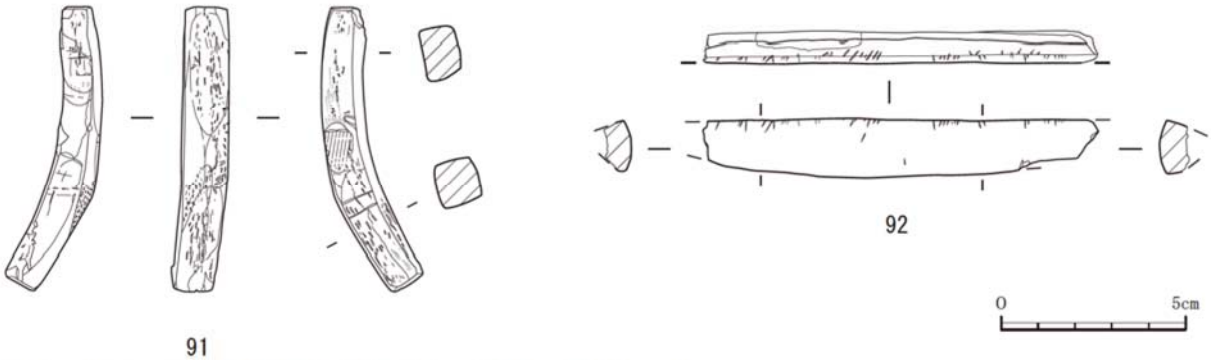
第32図　北区　Ⅳ-1層出土遺物（1）



第33図　北区　Ⅳ-1層出土遺物（2）







第 34 図　北区　Ⅳ -1 層出土遺物（3）　※ 90 は層序不明

窯Ⅰ類（71）、同Ⅱ類（68・70）、産地不明（69）がある。72は半練土器の蓋である。

土器（74） 74はグスク土器壺Ⅱ－a類である。

陶質土器（73） 73は蓋である。

金属製品（75～84） 篠垂（75）、鍍金された八双金物（76）、小札（77～79）、覆輪（80）、甲冑の一部と思われる板状製品（81・82）、釘（83）、鍋（84）がある。

銭貨（85～89） 85～87は北宋銭、88は4枚溶着しておりおそらく北宋銭、89は無文銭である。

骨製品（91・92） 91は全面研磨した弧状を呈するもの、92はウシ？の中手骨か中足骨を研磨したものである。

③Ⅳ－2層出土遺物（93～206）（第35～42図、第26～29表、図版16～23）

グスク時代の遺物が大半で、陶磁器類49個体、ガラス玉21点、骨製品1点、銭貨49点、青銅製品51点、鉄製品313点、近世瓦3点、高麗系瓦1点、大和系瓦8点、合計496点出土している。陶磁器では沖縄産施釉陶器1個体、同無釉陶器破片1点が出土しているが、少量であるため混入と考えたい。

陶磁器の時期幅を見ると、上限は白磁C3群、下限は青花Ⅱ類D群であるので、14世紀後半～16世紀前半の幅となるが、これらは1個体ずつしか出土していない。青磁Ⅴ－2類、青花明Ⅰ－1・2類などが主体的に見られ、白磁D群、タイ産シーサッチャナライ窯壺・土器などもあることから、首里城跡京の内地区ＳＫ01と類似した構成であり、15世紀中葉を中心とする土層と考えられる。下層では見られない青磁盤Ｂ～Ｄ類が出土しているのも注目される。また、多くの金属製品が出土しているのが特徴で、特にF 11南での出土が突出していた。陶磁器の割合は、青磁（19個体、39%）、タイ産土器（9個体、18%）、青花（8個体、16%）となり、タイ産土器が個体数では目立つ。

青磁（93～109） 93～102は碗である。93～95はⅤ－2類で線刻の雷文帯をもつもので、93・94は幅広のもので下半に蓮弁文をもち、95は幅狭のもので下半と内面に草花文をもつ。96は下半にラマ式蓮弁文を描くが、口縁がないためⅤ－2・3類とした。97はⅤ－2類としたが、口縁帯は略化された唐草文が両面に描かれ、下半も葉脈を表現したような草花文で、典型的なものではない。98はⅤ－0類、99・100はⅤ－1類で剣先蓮弁文をもつもの、101は幅広の蓮弁文、102は叉状工具による蓮弁文を描くⅣ－1類である。

103～107は盤で、様々なタイプが見られる。特徴的なものは、106で水平な鍔縁口縁をもつC類で、高台があり、片彫りの草花文が描かれる。104・105は、稜花口縁のD類であるが、サイズが異なる。その他、103はB類、105はC類である。

108は酒海壺の蓋で、外面に菊花文の間に「禄」が刻銘され、渦巻状の摘みを持ち、内面には菊花の型押し文がされる。109は、擂鉢で、露胎した内面に擂目が施される。

白磁（110・111） 110は碗C－3群、111はD群の内湾皿である。

青花（112～118） 112～117は碗で、明Ⅰ－1類（114）、明Ⅰ－2類（113・115～117）、明Ⅱ類D群（112）である。116は、見込みに水草文の外側に「坯」の字が書かれ、さらに2字ある可能性もあり、珍しい資料と思われる。117は胴部が直線的に伸びるタイプである。118は鉢で明Ⅰ・Ⅱ類と思われ、見込みを区画し宝文を描く。

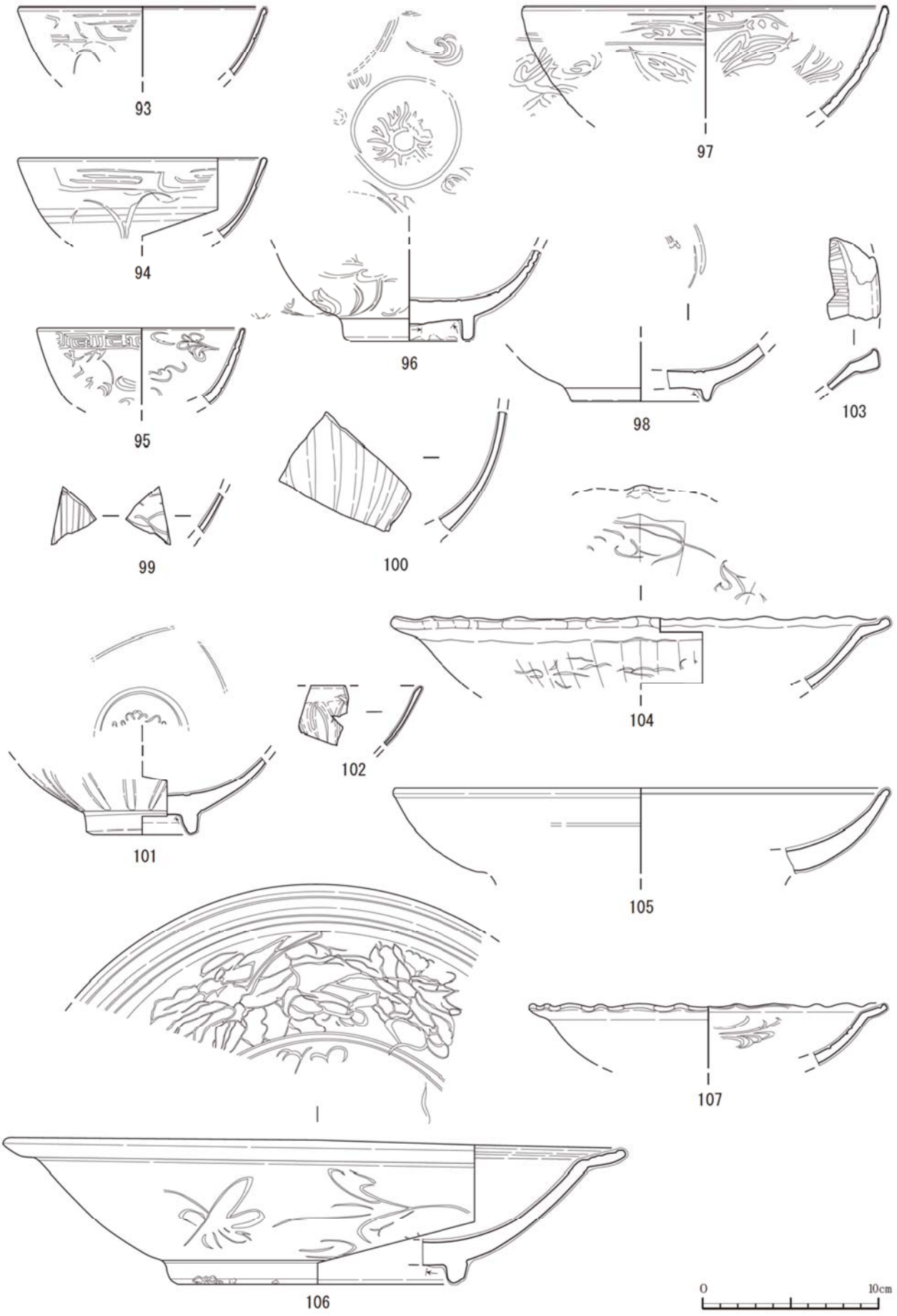
褐釉陶器（119～123） 壺が出土しており、119～122は5類、123は肩部に「関○」のスタンプをもつ。

ベトナム産陶磁器（124） 124は青花小碗で、外面に簡略化した草花文を描く。

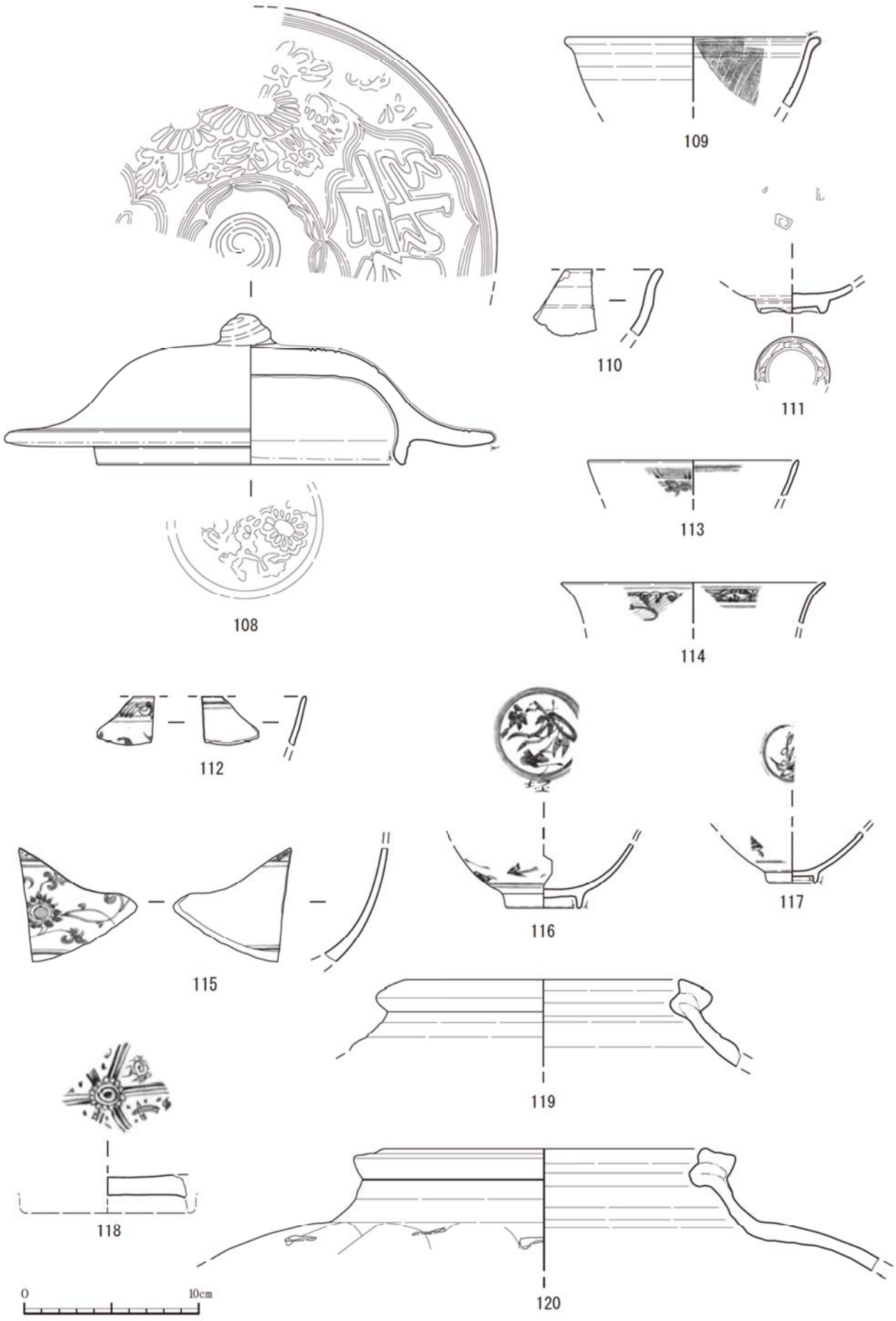
タイ産陶磁器（125～131） 125は無釉平鉢であまり類例を見ない。126・127はシーサッチャナライ黒褐釉四耳壺、128は産地不明のものである。

産地不明陶器（132・133） 132は円形、133は方形の蓋である。

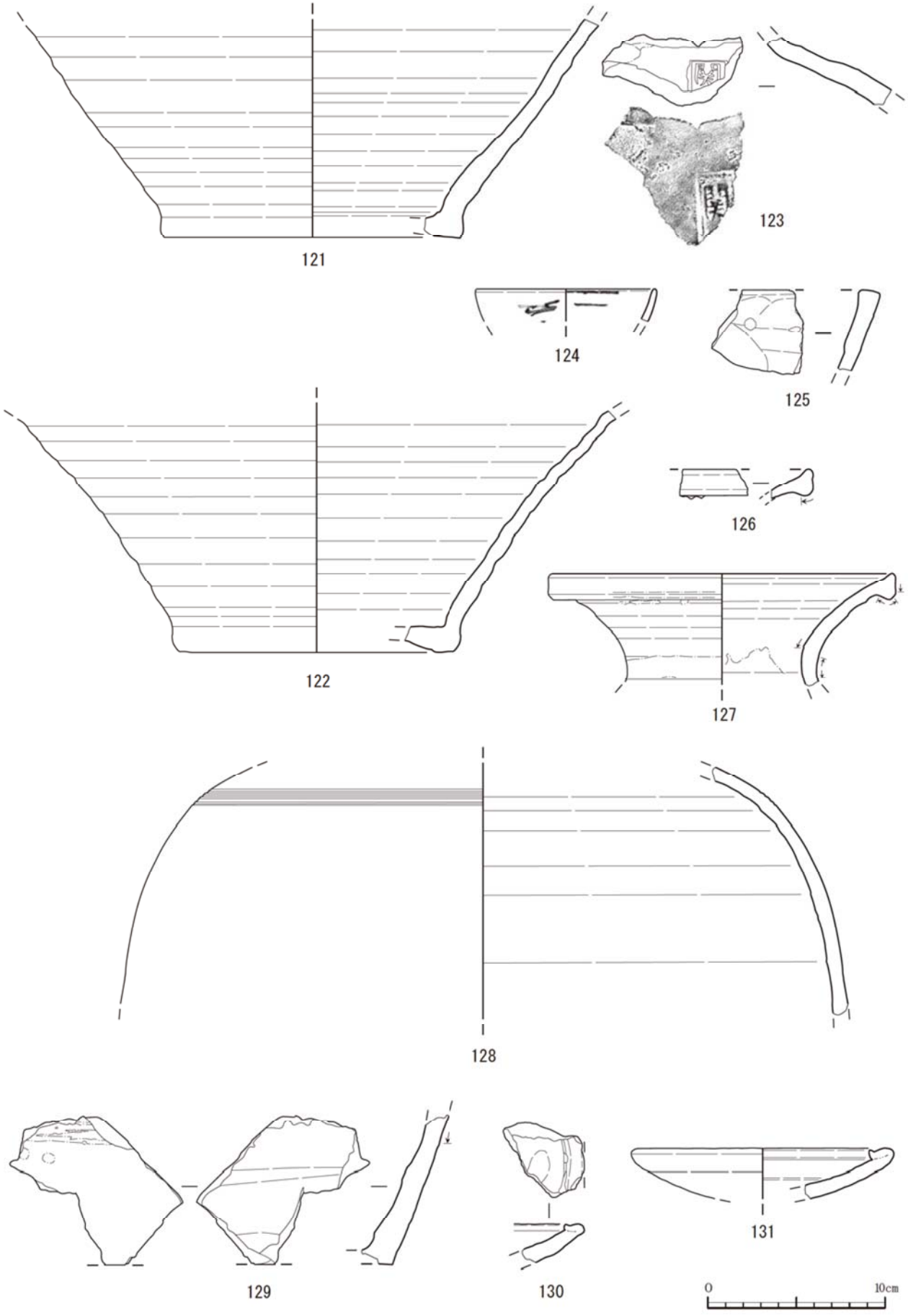
金属製品（134～171） 青銅製品51点、鉄製品313点と本層が最も多く出土している。青銅製品には、鍬形（134・135）、鍍金された八双鋲（136）、覆輪（139）、八双金具（161・162）、鋲（169・170）、鍔（141）、大切羽（142～148）、切羽（149・150）、柄（151）、目釘（152）、鍵座金具（163）、目貫と思われるもの（153）、鍍金されており甲冑の金物と思われるもの（154）、八稜鏡と想定しているもの（164・165）、不明の飾金具（167）、がある。鉄製品には、小札（137・138）、鉄鏃（140）、刀子（155・156）、錠前（157）、その可能性があるもの（166）、鍵（158・159）、細長い十字型の板状製品（160）、釘（168・171）がある。



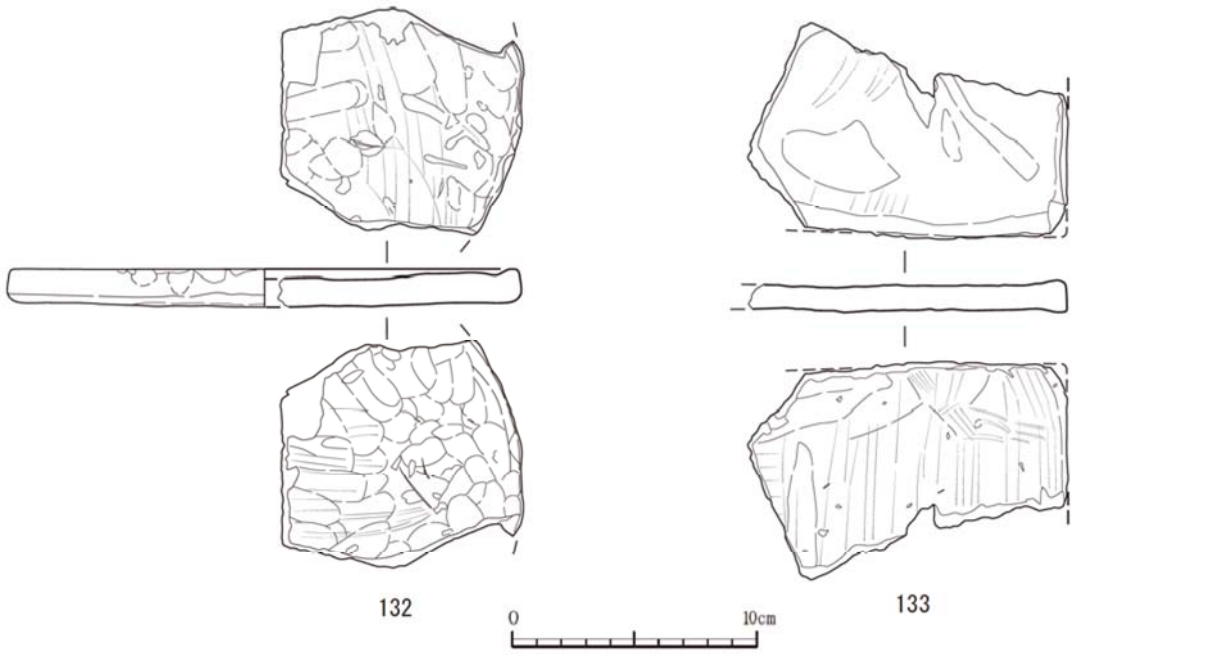
第35図　北区　Ⅳ-2層出土遺物（1）

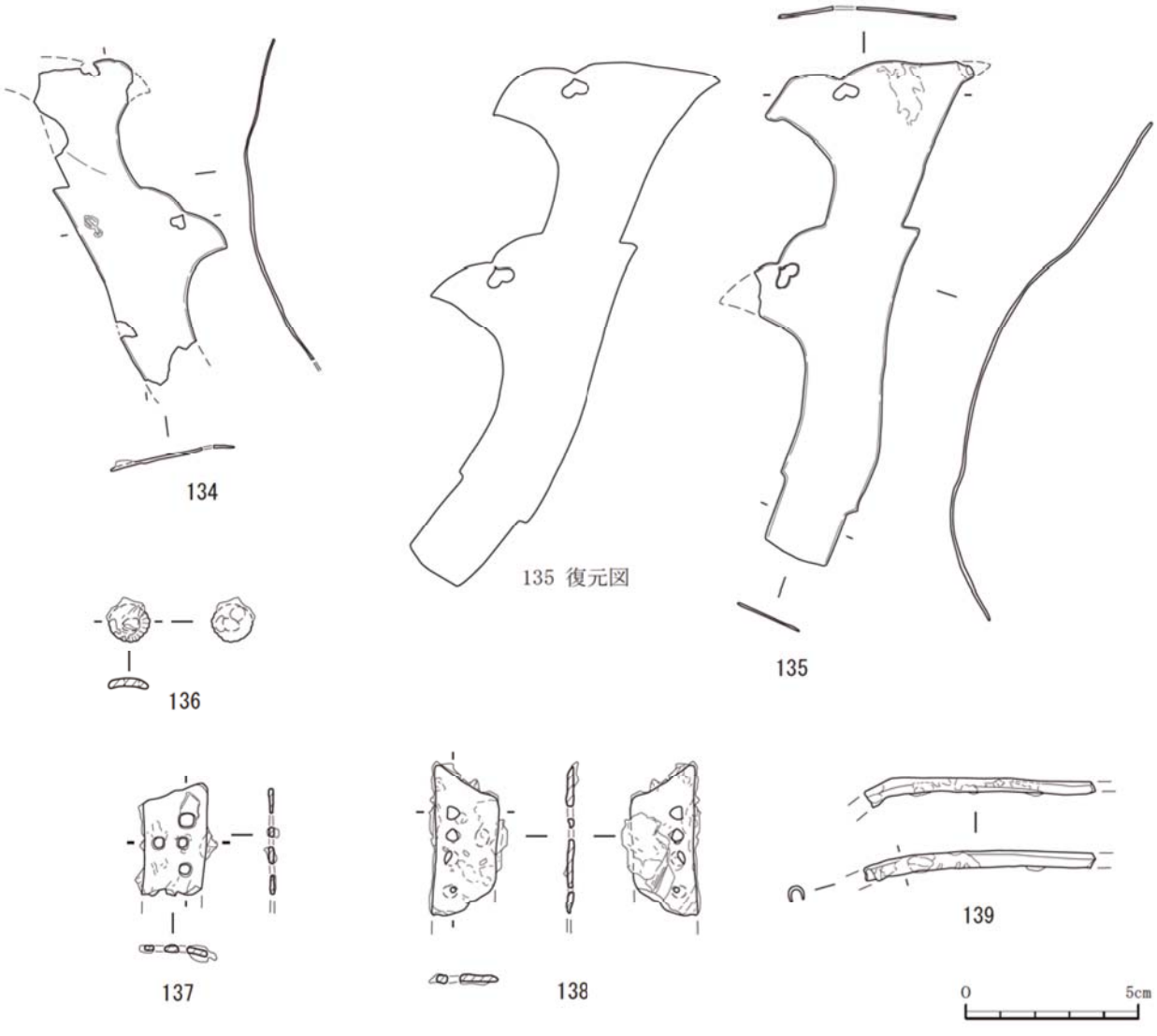


第36図　北区　Ⅳ-2層出土遺物（2）

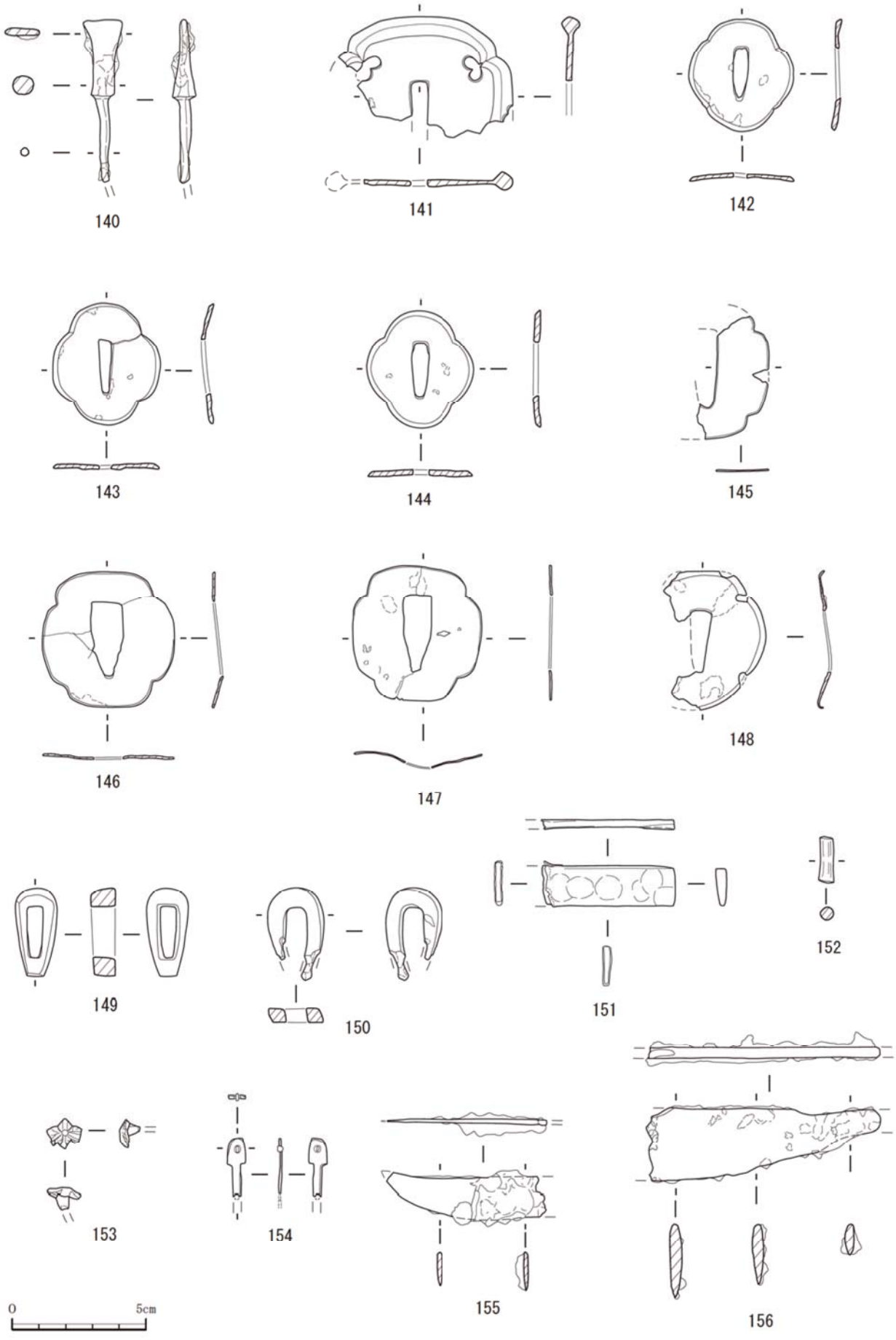


第37図　北区　Ⅳ-2層出土遺物（3）

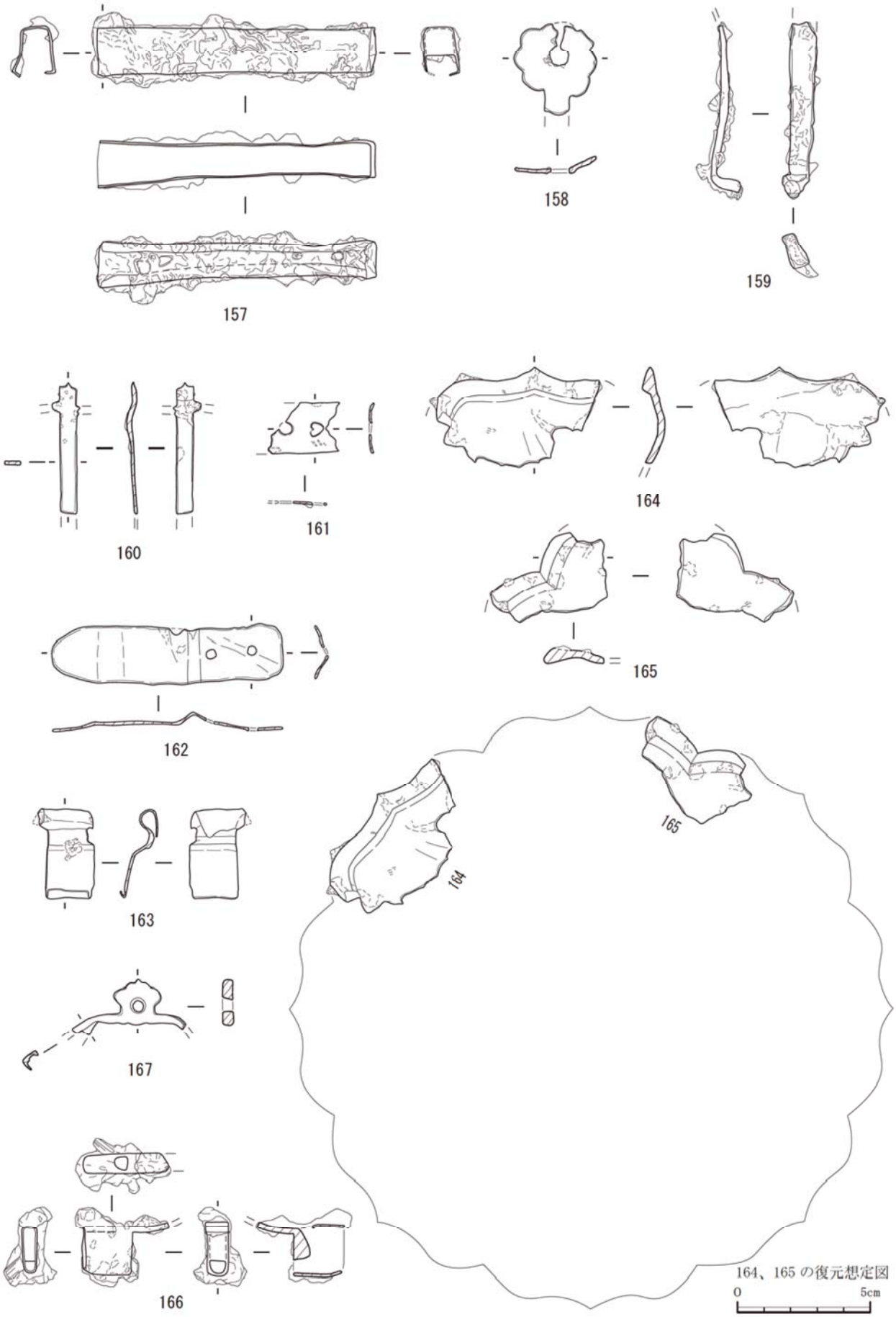




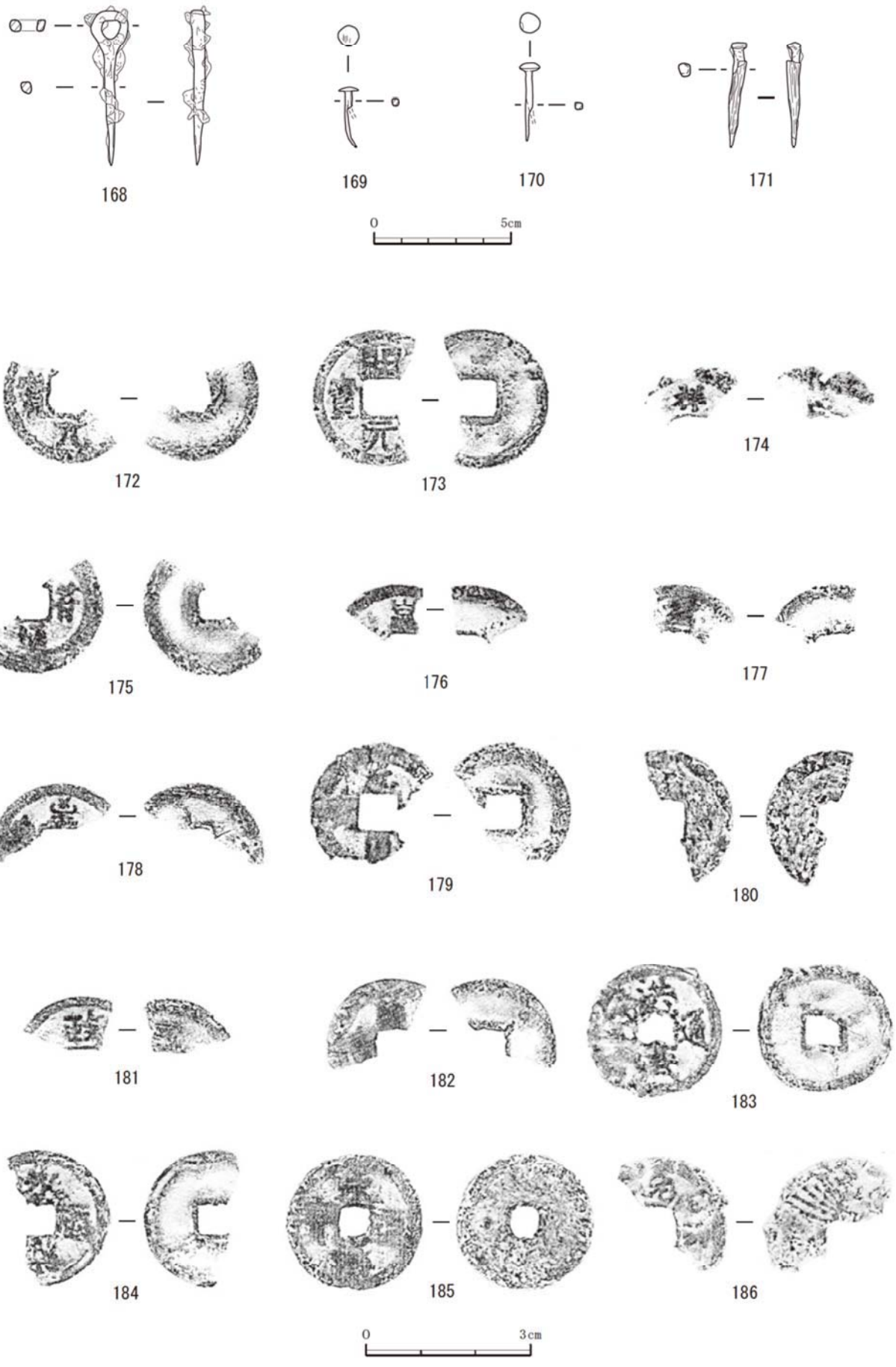
第38図　北区　Ⅳ-2層出土遺物（4）



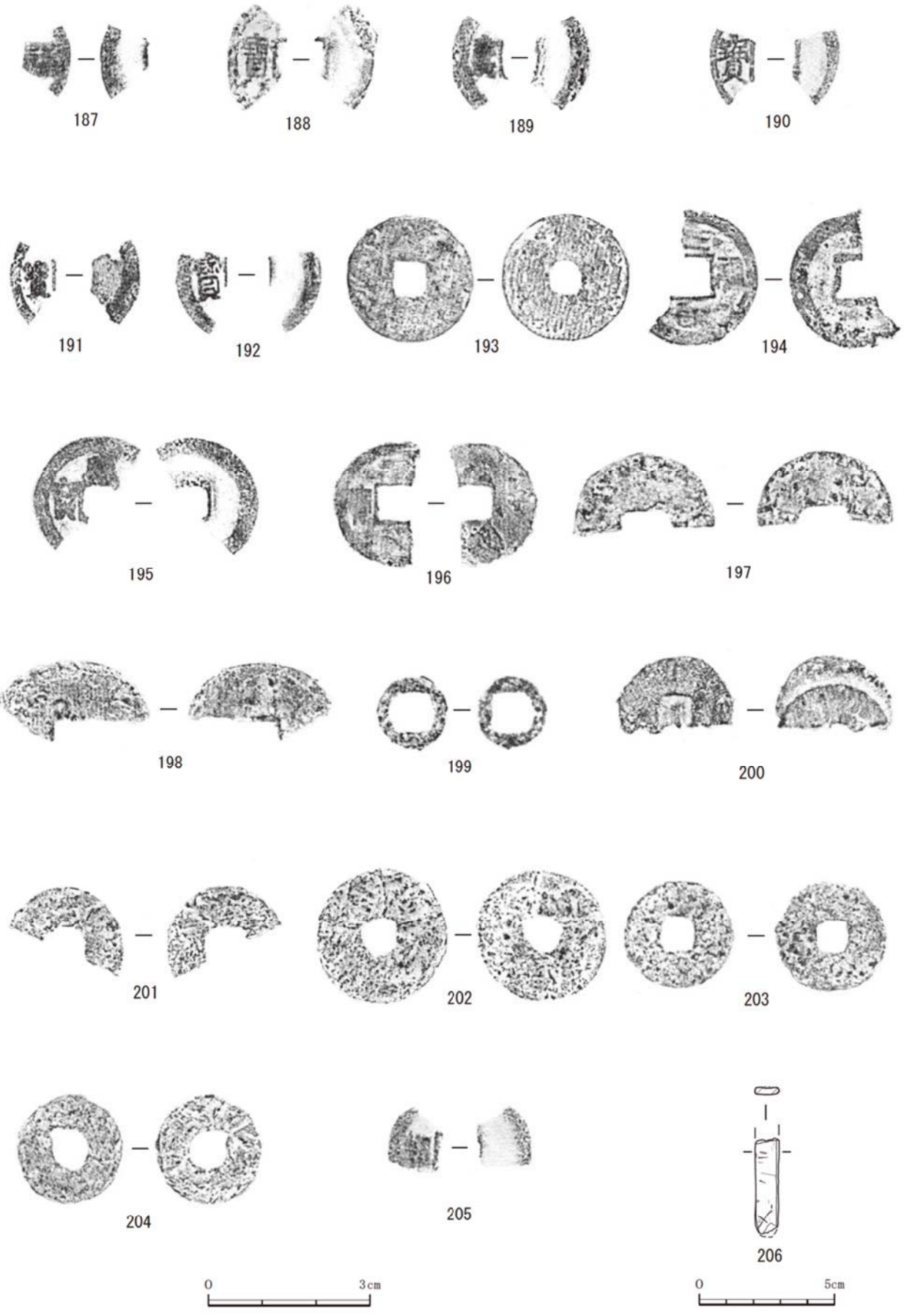
第39図　北区　Ⅳ-2層出土遺物（5）



第40図　北区　Ⅳ-2層出土遺物（6）



第41図　北区　Ⅳ-2層出土遺物（7）



第42図　北区　Ⅳ-2層出土遺物（8）

銭貨（172 ～ 205） 172 ～ 182・186・194・196 は北宋銭、183 ～ 185 は明銭、193・197 ～ 204 は無文銭、その他は判読不明である。

骨製品（206） 一端の角を丸めた板状製品である。

④Ⅳ－３層出土遺物（207 ～ 251）（第 43・44 図、第 29・30 表、図版 24・25）

グスク時代の遺物が大半で、陶磁器類 41 個体、骨製品２点、銭貨 10 点、青銅製品２点、鉄製品 28 点、高麗瓦６点、大和系瓦 54 点、塼３点、合計 146 点出土している。陶磁器では、沖縄産施釉陶器２個体、沖縄産無釉陶器１個体、陶質土器破片１点、近代陶磁器破片１点と見られるが、これも少数として、混入と考えたい。

陶磁器の時期幅を見ると、青花と青磁Ⅴ－２類がないことから考えると 15 世紀中葉よりは古く、古手では白磁Ｃ３群があることからすると、ひとまず 14 世紀後半～ 15 世紀初頭の間で考えることになる。ただ、青磁の主体はⅣ´類であるので、上限を 14 世紀末と考えたい。なお、青磁盤では上層で少なかったＡ類が見られるようになる。本層は、大和系瓦が最も多く出土している層であり、先述したように多くの炭が土層に見られるので、周辺にあった瓦葺建物が焼失し、瓦を廃棄した可能性が考えられよう。

青磁（207 ～ 230） 碗は、Ⅴ－１類（207・208）、Ⅴ－３類（211）、Ⅳ－０類（209・220）、Ⅳ´類（210・212 ～ 219･221）がある。皿はⅣ－０類の見込みが広い直口皿（222）､内底釉剥ぎしたⅣ´類（222）がある。盤は、Ａ類（224 ～ 227）、Ｅ類（229）、碁笥底（228）がある。230 は酒海壺の蓋である。

白磁（231・232） 共に碗Ｃ３群である。

黒釉陶器（233） 天目の底部で外底中央の凹みがわずかである。

褐釉陶器（234・235） 壺５類（234）、胎土が赤褐色の壺胴部片（235）がある。

土製品（236・237） 共に土製玉である。

金属製品（238 ～ 240） 鉄製品は釘（238・239）、銅製品は鋲（240）がある。

骨製品（241・242） 柄状のもの（241）、突起状のもの（242）がある。

銭貨（243 ～ 251） 243 ～ 245 は明銭で洪武通寶の大銭、246 ～ 249 は中国銭だが銭種不明、250・251 は無文銭である。

⑤Ⅳ－３´層出土遺物（252 ～ 276）（第 45 図、第 30・31 表、図版 26）

グスク時代の遺物が大半で、陶磁器類 26 個体、ガラス玉１点、骨製品１点、銭貨４点、鉄製品５点、大和系瓦６点、塼１点、合計 44 点出土している。なお、全体の個体数には反映されていないが（第 22 表）、高麗系瓦は筒部が４点出土している（第 41 表）。陶磁器では、陶質土器が破片１点出土しているが、量的には混入と考えてよいであろう。

陶磁器の時期幅では、青磁Ⅴ－０類がわずかに見られるが、主体は青磁Ⅳ類と、白磁白Ｃ３群となることからⅣ－３層と大きな差はないと思われる。ただ、青磁Ⅳ´類や瓦が少ないことからすると、やや古い可能性はあるが、下層のⅣ－４層との違いほどと明確な時期差はないものと考えておきたい。

青磁（252 ～ 263） 碗は、Ⅴ－０類（255）、Ⅳ－０類（252・253・256・258）、Ⅳ´－０類（257）、磁灶窯系（254）がある。皿は、Ⅴ－０類（261）、Ⅳ－０類（260）、Ⅳ－１類（259）がある。その他、盤の高台（262）、何らかの型物である袋物（263）が出土している。

白磁（264・265） 共にＣ３群である。

褐釉陶器（266） 横耳の壺である。

黒釉陶器（267・268） 天目で、口縁の屈曲がやや弱いタイプである。

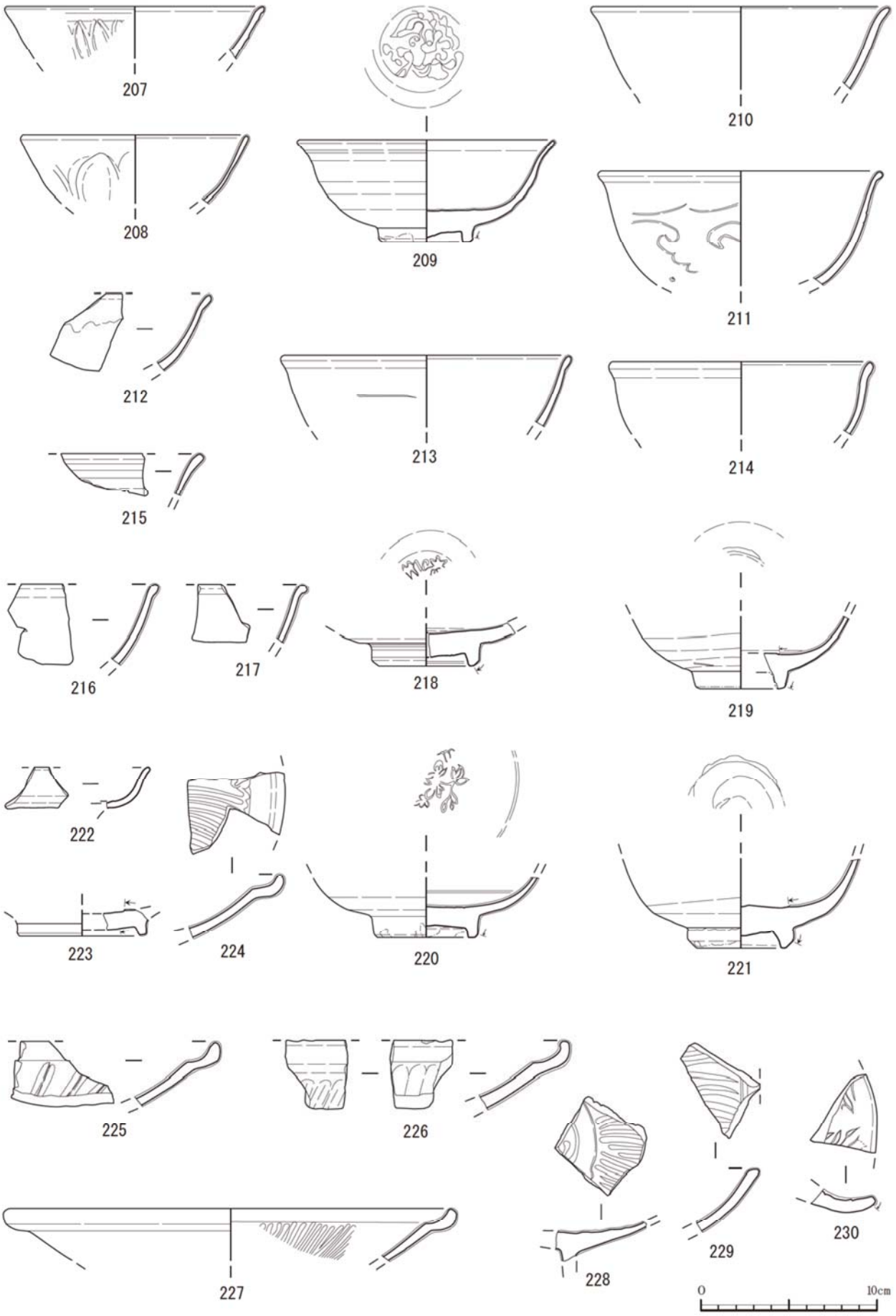
タイ産陶磁器（269） シーサッチャナライもしくはスワンカローク窯系の長胴形の小壺もしくは小瓶の胴部と考えられる。

グスク土器（270） 壺Ⅱ－ａ類が出土している。

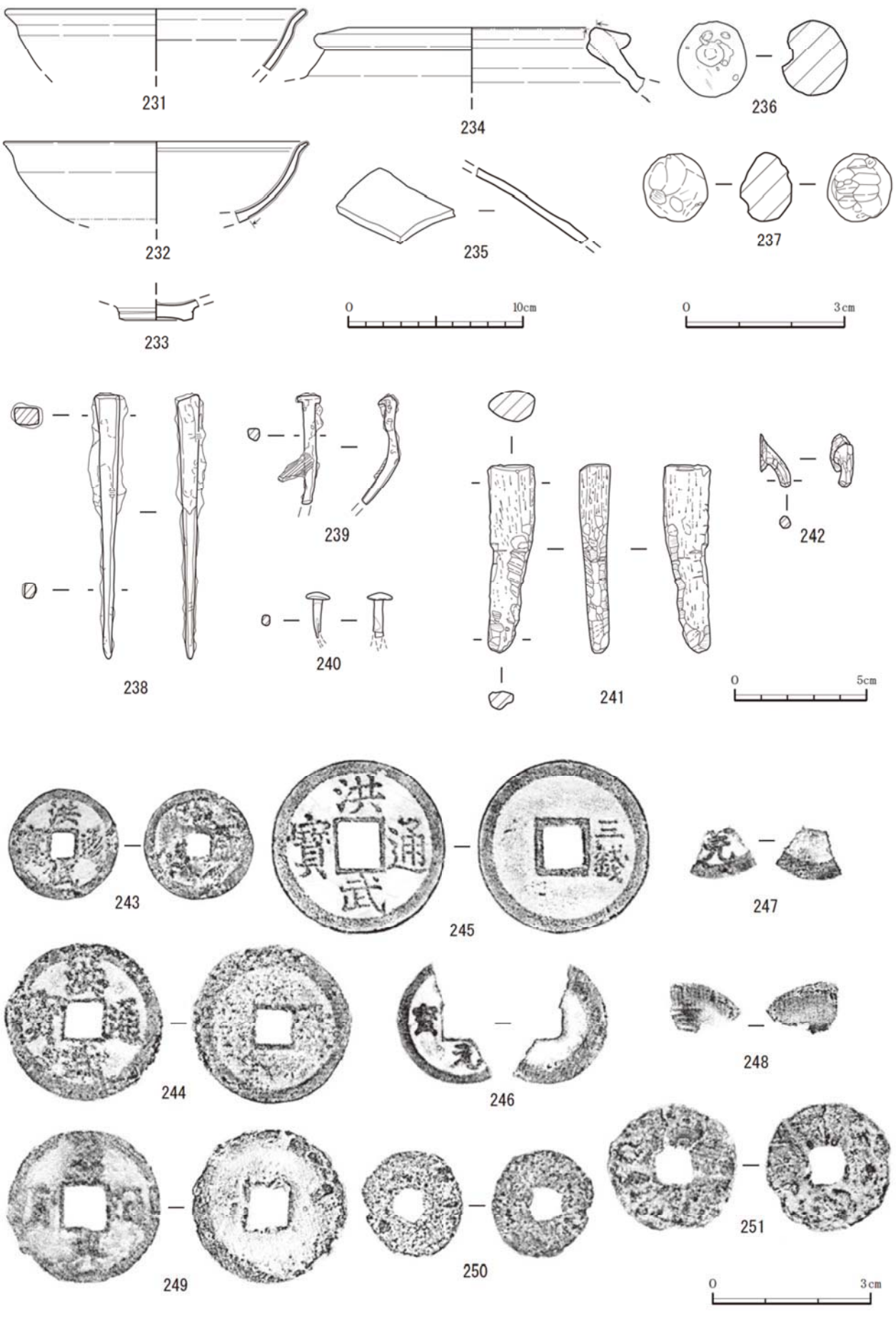
金属製品（275） 刀子が出土している。

銭貨（271 ～ 274） 271 は唐銭、272 は北宋銭、273 は無文銭、274 は明銭の洪武通寶である。

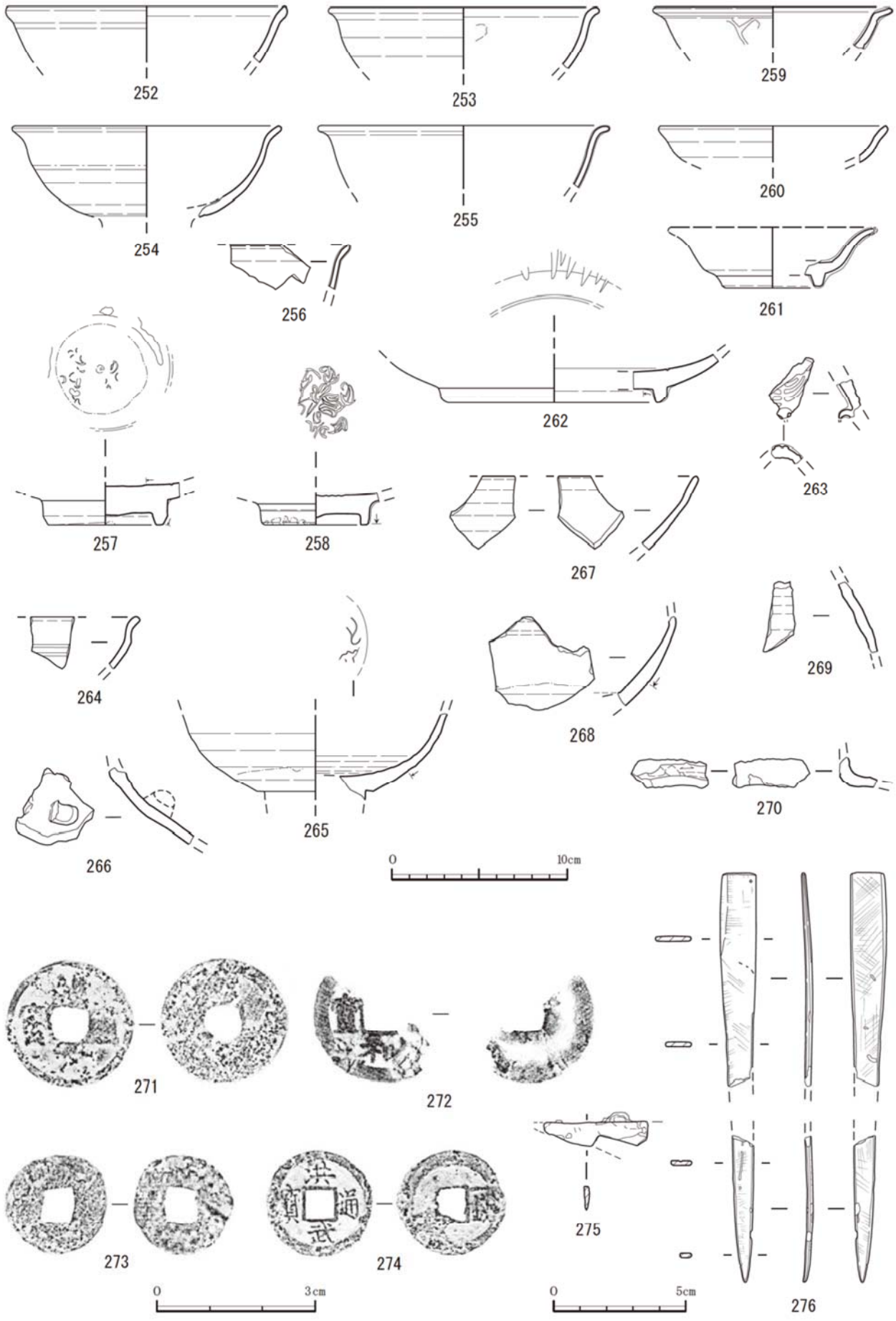
骨製品（276） 笄と思われるものが出土しており、時期が分かる重要な資料と言える。



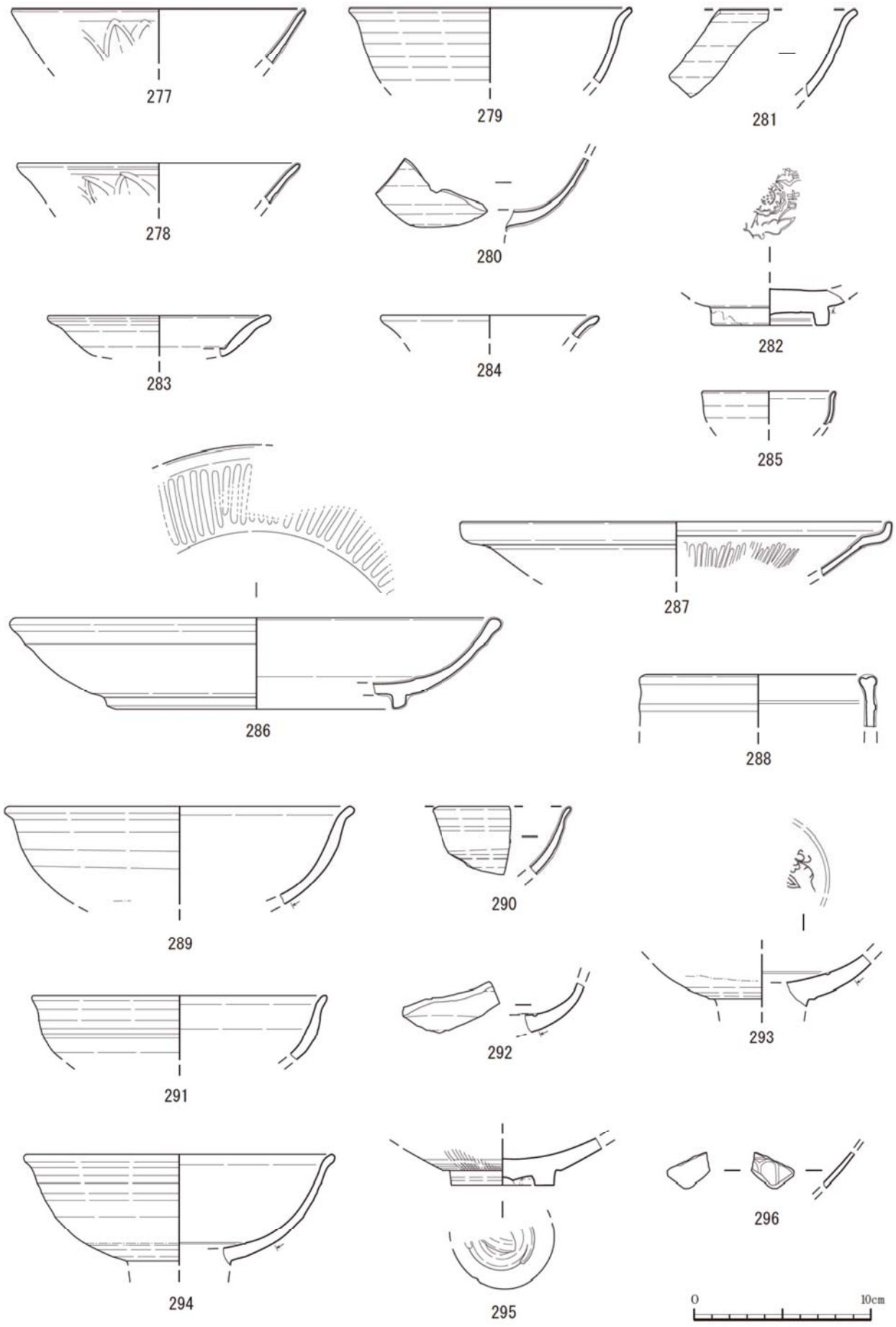
第43図　北区　Ⅳ-3層出土遺物（1）



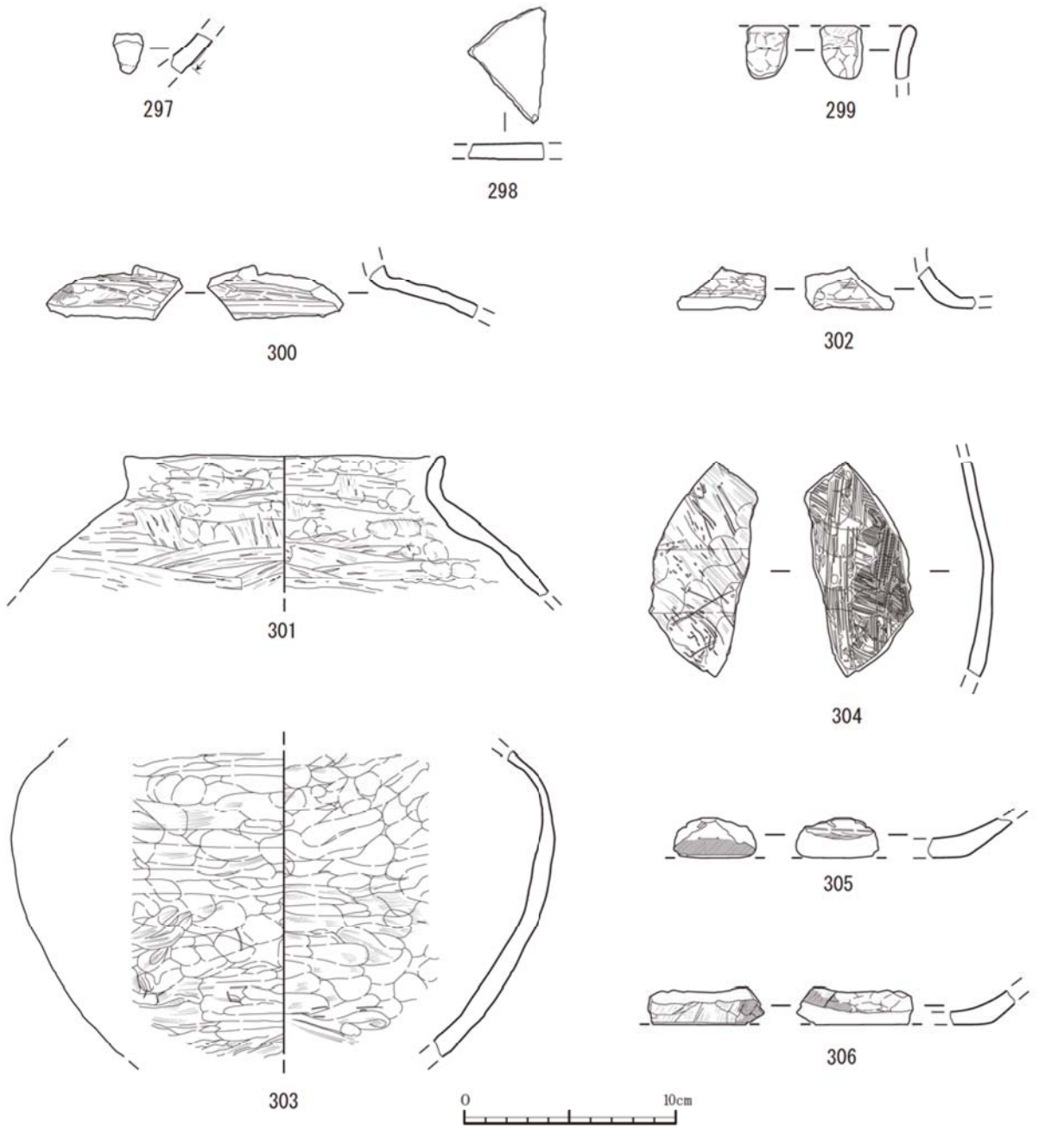
第44図　北区　Ⅳ-3層出土遺物（2）



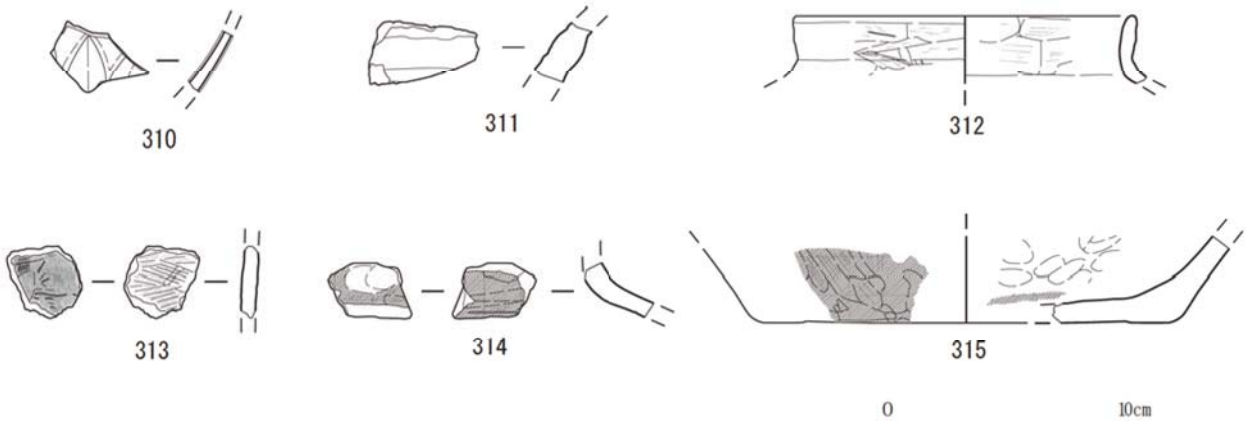
第45図　北区　Ⅳ-3’層出土遺物



第46図　北区　Ⅳ-4層出土遺物（1）



第47図　北区　Ⅳ-4層出土遺物（2）



第48図　北区　Ⅳ-5層出土遺物

⑥Ⅳ－４層出土遺物（277 ～ 309）（第 46・47 図、第 31・32 表、図版 27・28）

グスク時代の遺物が大半で、陶磁器類 30 個体、ガラス玉１点、石器１点、鉄製品１点、合計 33 点出土している。なお、全体の個体数には反映されていないが（第 22 表）、大和系瓦が筒部１点出土している（第 45 表）。陶磁器では、沖縄産施釉陶器１個体と、胎土が軟質なため本土産の可能性がある天目が１点出土しているが、共に小片のため具体的には不明である。大勢には影響がないと思われ、上層よりの混入とみたい。

青磁は、Ⅴ類の出土がなくなり、Ⅳ類が主体で、Ⅱ類も見られる。白磁はＣ３群に加え、Ｂ・Ｃ２群も出土している。土器は６個体であるが、破片では 126 点と最も多く出土している。主な遺物を比率で見ると、青磁（12 個体、40%）、白磁（７個体、23%）、土器（６個体、20%）と、他の層に比べると、白磁の割合が高い。青磁Ⅳ類と白磁Ｃ３群が主体であるため、下限は 14 世紀後半にせざるを得ないが、それらより古い白磁Ｂ・Ｃ２群、青磁Ⅱ類の出土から考えると、時期幅がより遡る可能性があり、他事例を考慮した厳密な検討が必要であろう。

青磁（277 ～ 288）　碗は、Ⅱ類（277・278）、Ⅳ－０類（279 ～ 282）である。皿は、Ⅳ´－０類（283・284）、Ⅳ－０類（285）である。盤は、Ａ類（268）、直口であるが口縁が幅広く肥厚するＥ類（286）である。香炉は 288 で、釉調からⅣ類の特徴をもち、良品のものと考えられる。

白磁（289 ～ 296）　Ｃ３群（289 ～ 292）が主体で口縁端部が厚めのタイプが多いが、290 は薄手である。295 はＣ２群で、今回の調査では１点のみの出土である。296 は、Ｂ群碗の胴部片である。

黒釉陶器（297）　天目の胴部片が出土している。

タイ産陶磁器（298）　黒褐釉四耳壺の底部片である。

土器（299 ～ 306）　299 は貝塚後期土器の口縁片である。他はグスク土器で、壺Ⅱ－ａ類（300・301）、壺Ⅱ－ｂ類（302 ～ 305）である。

土製品（307）　土製玉である。

金属製品（308）　鉄釘である。

石器（309）　石斧である。

⑦Ⅳ－５層出土遺物（310 ～ 315）（第 48 図、第 32 表、図版 28）

グスク時代の遺物のみで、陶磁器類が２個体、その内訳を破片数で見ると青磁Ⅱ類１点、褐釉陶器１点、土器 26 点である。この組成は、今帰仁城跡Ⅸ層（今帰仁村教委 1991）、シイナグスク（今帰仁村教委 2004）などで見られ、13 世紀後半～ 14 世紀初頭と考えられている。

青磁（310）碗Ⅱ類が出土している。

褐釉陶器（311）　白色・黒色粒を多く含み磁灶窯と考えられる胴部片がある。

土器（312 ～ 315）　壺Ⅱ－ａ類（312・314・315）、外面朱塗りされた器形不明の土器Ⅱ－ｃ類が出土している。

３．南区出土遺物

南区においても、Ⅰ層除去後遺構を確認しているが、北区では確認されなかったⅡ・Ⅲ層の堆積も認められた。また、後述するがⅣ層については北区のものと同一のものではなく、また近世の遺物が若干出土するが、上層とは異なり、グスク時代の遺物が大半である。

①Ⅰ層出土遺物（316 ～ 347）（第 49・50 図、第 32・33 表、図版 29・30）

グスク時代～近代の遺物が出土しており、陶磁器類 132 個体、ガラス玉１点、骨製品３点、漆喰２点、碁石１点、銭貨７点、青銅製品６点、鉄製品 68 点、明朝系瓦 228 点、大和系瓦３点、塼 104 点、合計 555 点を数える。

青磁（316 ～ 320） 碗は、Ⅴ－２・３類（316）、Ⅴ類（317）、Ⅵ－１類（318）、Ⅵ類（319）がある。盤（320）はＡ類である。

白磁（321・322） 321 はＤ群の小碗、322 はＥ群の端反皿である。

青花（323 ～ 331） 碗は、明Ⅰ－２類（323・330）、明Ⅲ類（329）、漳州窯系（325・327）、明Ⅱと思われる口折碗（326）がある。小碗（324）は、文様より明Ⅰ類と思われる。皿は、明Ⅲ類Ｅ群（328）、徳化窯系のもの（331）がある。

褐釉陶器（332） 口縁がわすかに玉縁状となっているものである。

ベトナム産陶器（333） 波涛文が描かれる青花瓶胴部片である。

タイ産陶磁器（334） 黒褐釉四耳壺のシーサッチャナライ窯のものである。

産地不明陶器（335） 円形の蓋である。

沖縄産陶器（336 ～ 338） 337 は碗Ａ、338 は碗Ｂ，336 は鍋Ａである。

石製品（339） 碁石である。

骨製品（340 ～ 342） 340 は箸状、341 はソケット状、342 はボタンである。

銭貨（343 ～ 347） 南宋銭（343）、明銭（344）、寛永通寶（345）、おそらく北宋銭（346）、輪銭（347）がある。

②Ⅱ層出土遺物（348 ～ 456）（第 51 ～ 56 図、第 33 ～ 37 表、図版 31 ～ 36）

グスク時代～近代の遺物が出土しており、陶磁器類 314 点、ガラス玉 11 点、骨製品１点、漆喰 27 点、碁石１点、石製品４点、銭貨 27 点、青銅製品 22 点、鉄製品 280 点、明朝系瓦 738 点、大和系瓦 16 点、塼 474 点、合計 1914 点を数える。なお、全体の個体数には反映されていないが（第 22 表）、高麗系瓦の筒部が２点出土している（第 41 表）。最も多く出土している層序であり、特に明朝系瓦の出土が膨大である。

青磁（348 ～ 364） 碗はⅣ´－０類（348）、Ⅴ－０類（349）、Ⅴ－２類（354）、Ⅵ－０類（350 ～ 352）、Ⅵ－１類（353）がある。皿は、Ⅳ´－０類（360）、Ⅳ´類（361）、Ⅵ－０類の内、稜花皿（356 ～ 358）、直口皿（359）がある。盤は、古手と考えられるもの（355）、Ｂ類（363）、高台（364）がある。362 は鉢の口縁である。

白磁（365 ～ 374） 碗は、景徳鎮窯系で、端反碗（365）、毛彫りの文様があるもの（367）がある。小碗は、徳化窯系のもの（371･372）である。皿は、景徳鎮窯系のＥ群の端反のもの（366･368）、徳化窯系のもの（369）が ある。その他、景徳鎮窯系と思われる小瓶（372）、徳化窯系の肩が直線的に張る袋物（373）、福建産と思われる長胴壺（374）がある。

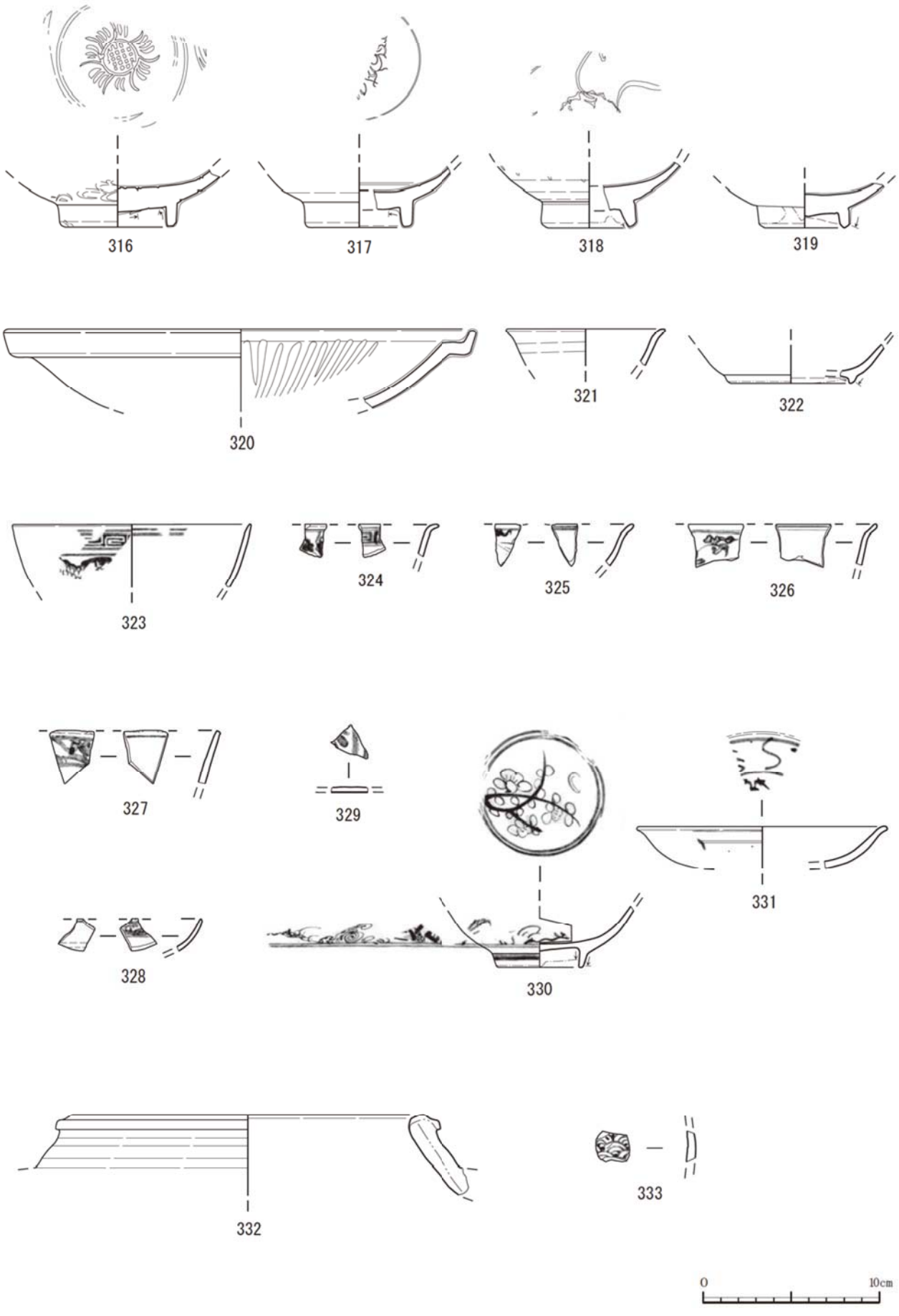
青花（375 ～ 400） 元様式は盤（375）がある。明代のものは、碗（376 ～ 381･388）、小碗（382･383）、皿（384･385）、瓶（386）があり、様々なタイプが出土している。また、漳州窯系の碗（396・393・395）も見られる。清代のものは、福建・広東産の碗（390・392・394）、徳化窯系の碗（396 ～ 398）・皿（399 ～ 400）がある。

瑠璃釉磁器（401） 小碗が出土している。

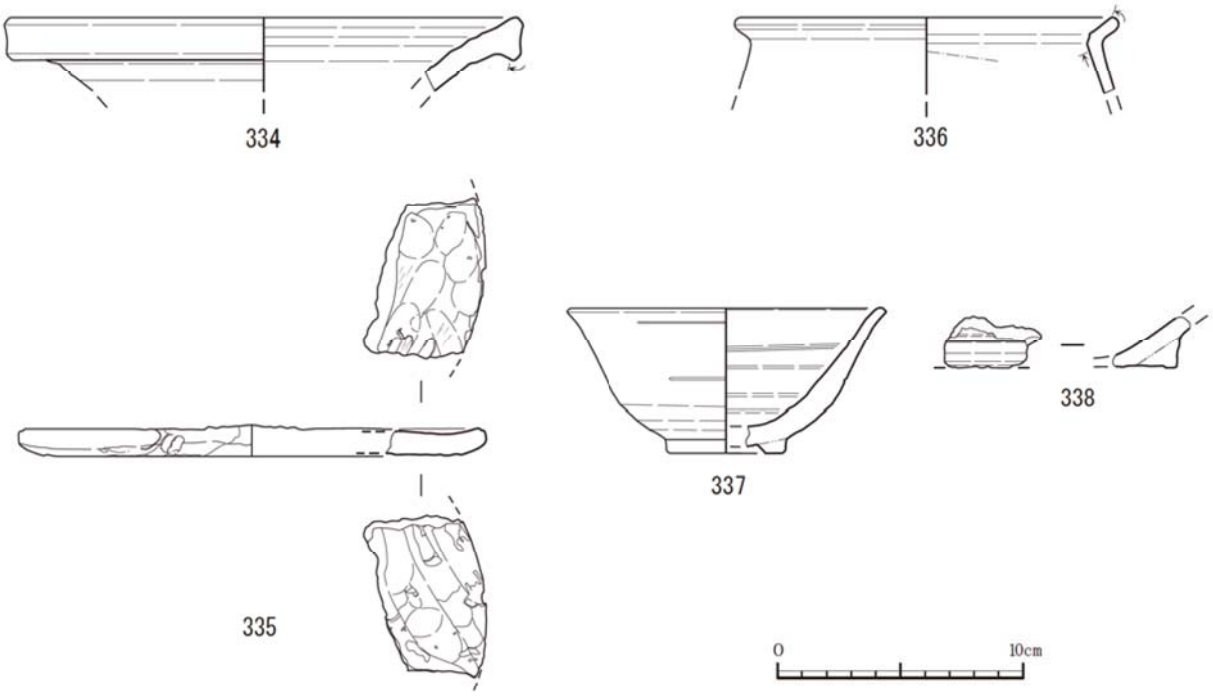
褐釉陶器（402 ～ 408） 壺５類（402 ～ 405）、その他の壺胴部（406 ～ 408）がある。

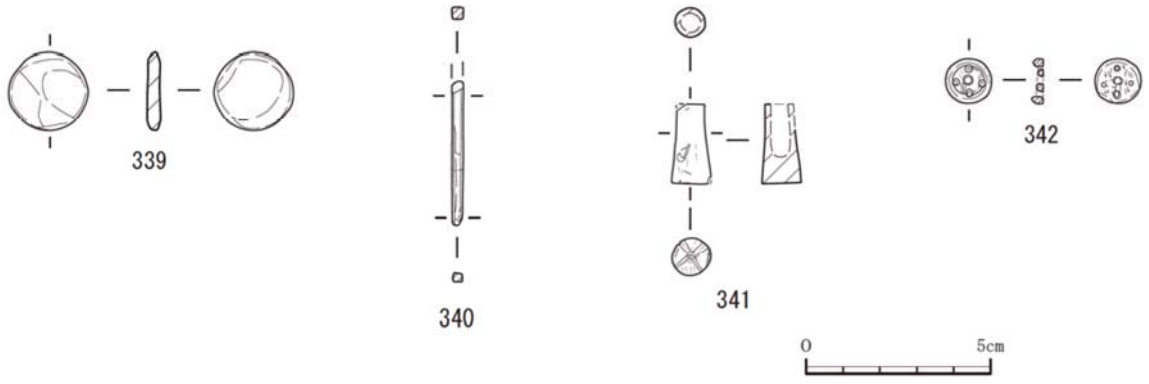
ベトナム産陶器（409） 白磁が出土しており、大きく外に開くタイプである。

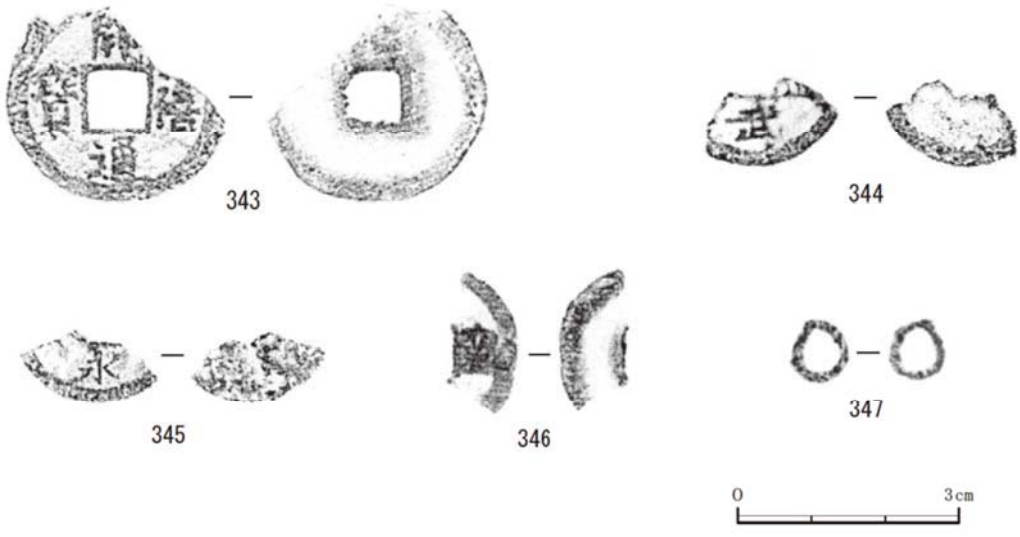
タイ産陶器（410 ～ 414） 黒褐釉四耳壺で、シーサッチャナライ窯系（411・412・414）、メナムノイ窯系Ⅱ類（410・413）が出土している。



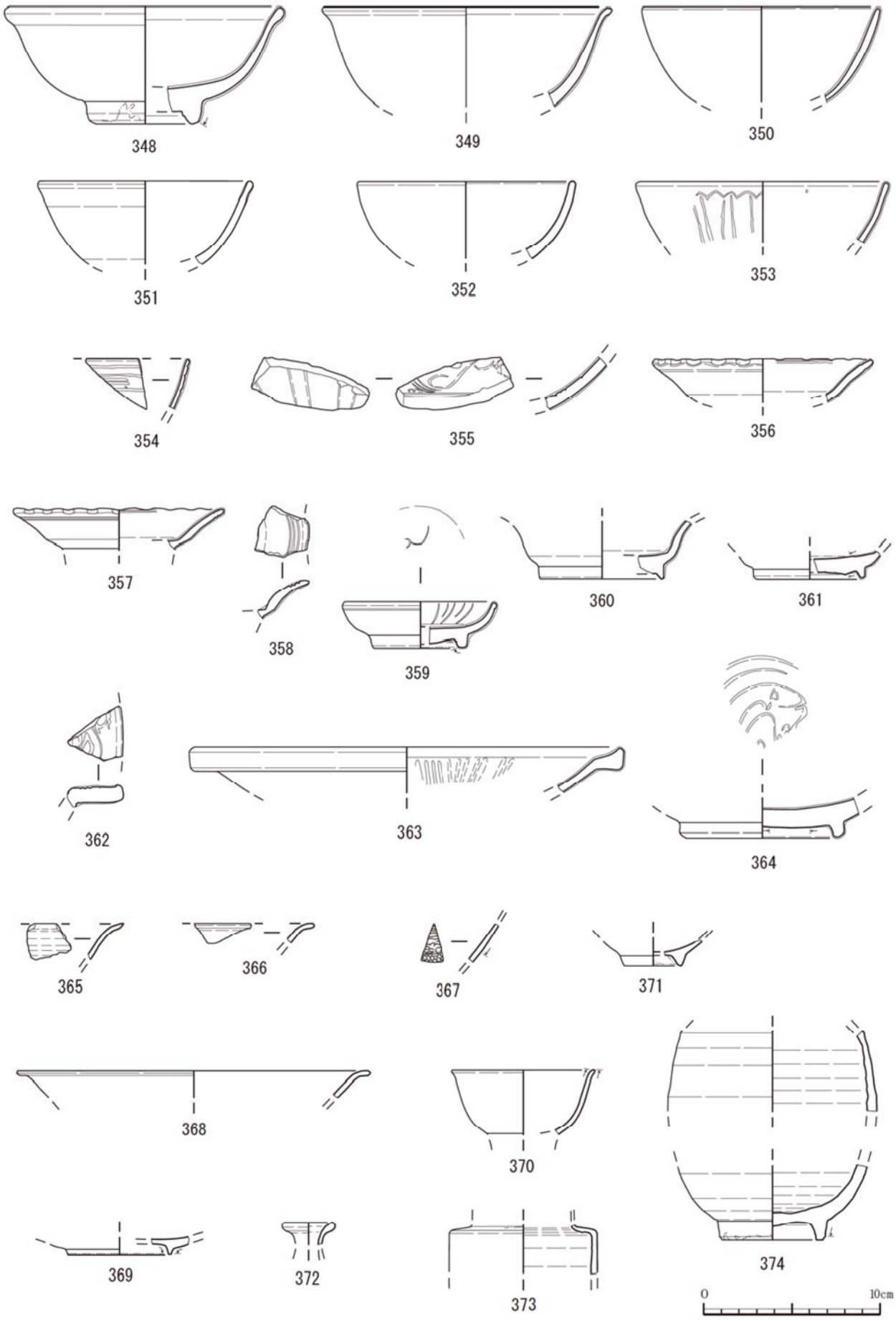
第49図　南区　Ⅰ層出土遺物（1）



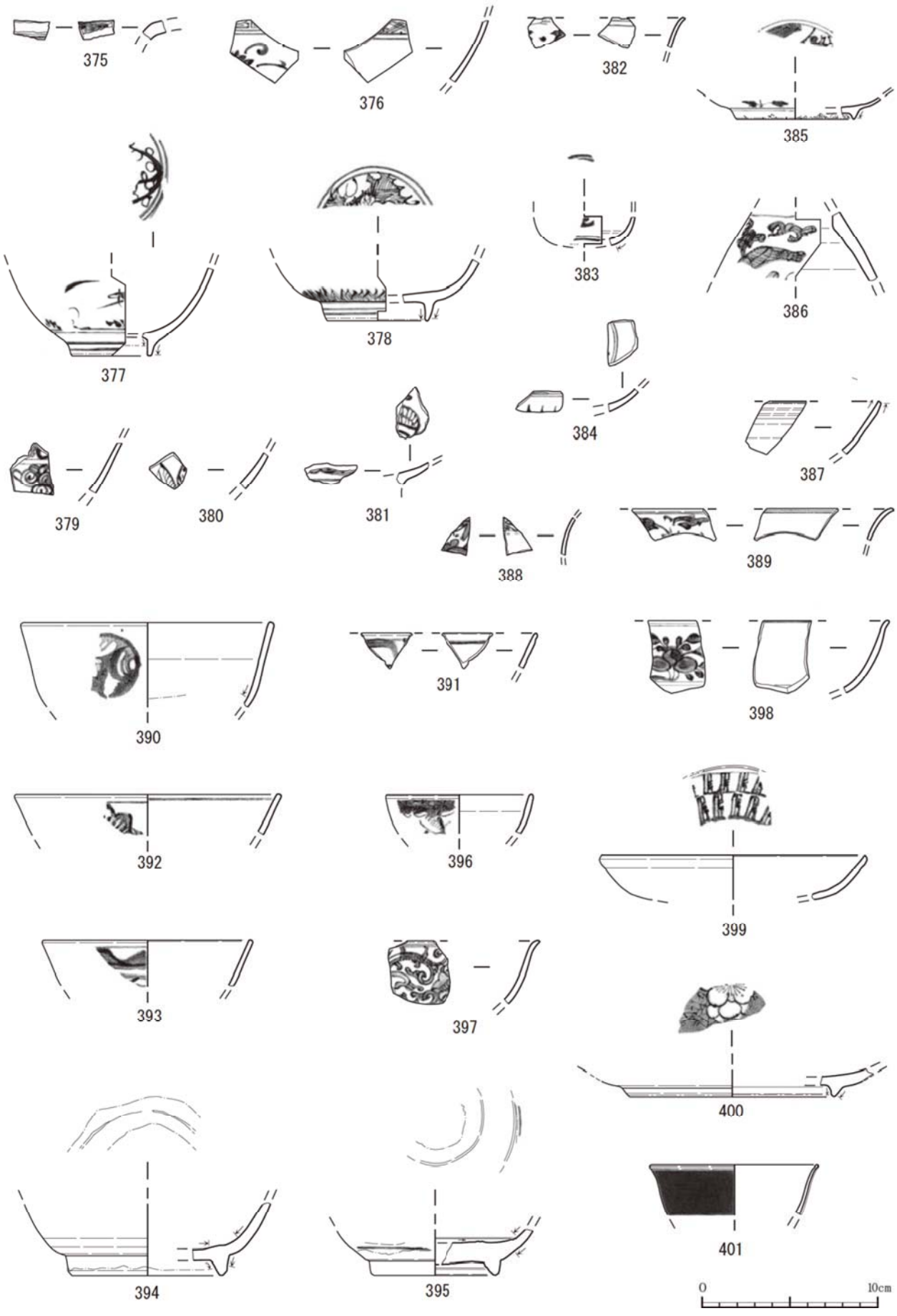




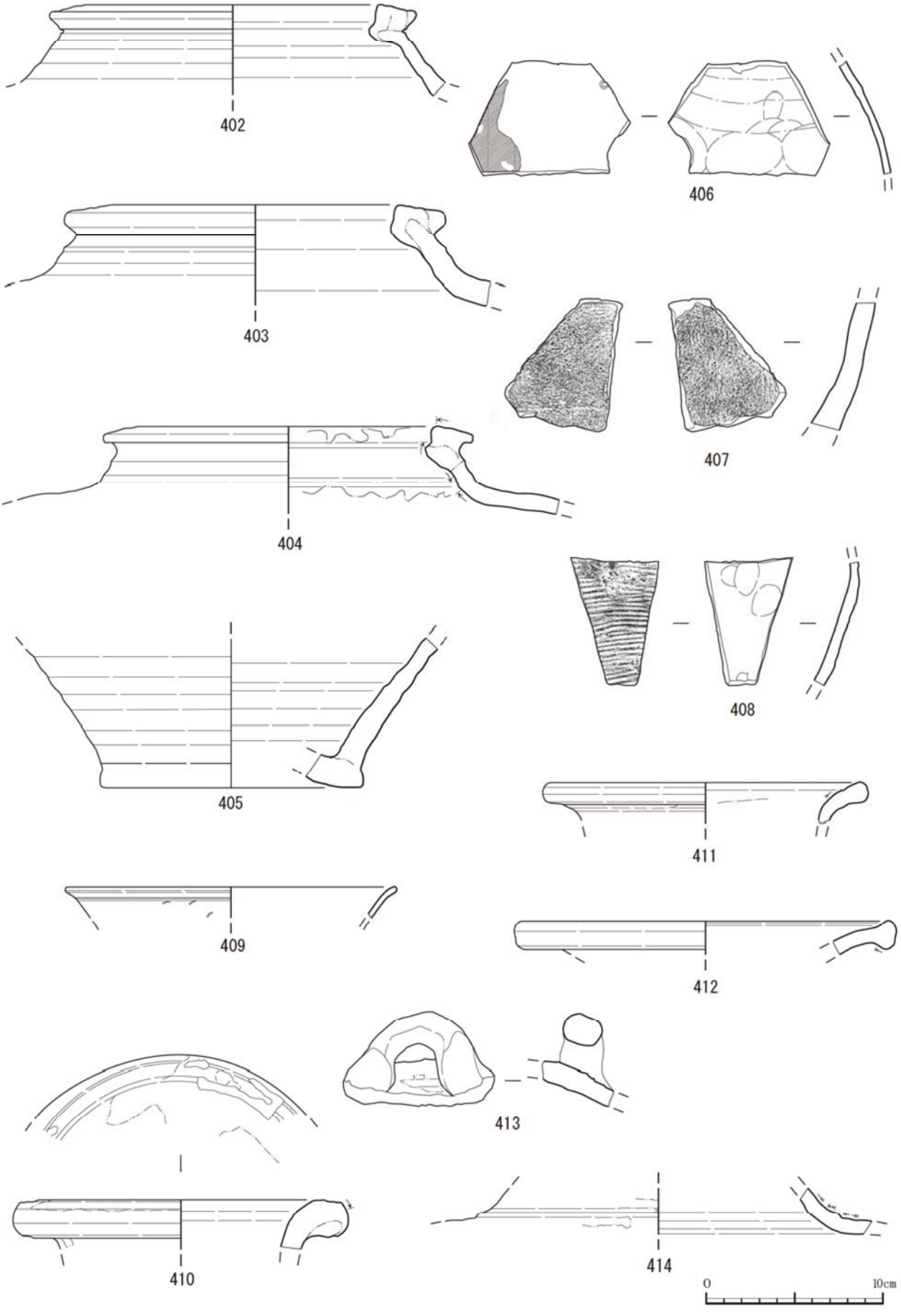
第50図　南区　Ⅰ層出土遺物（2）



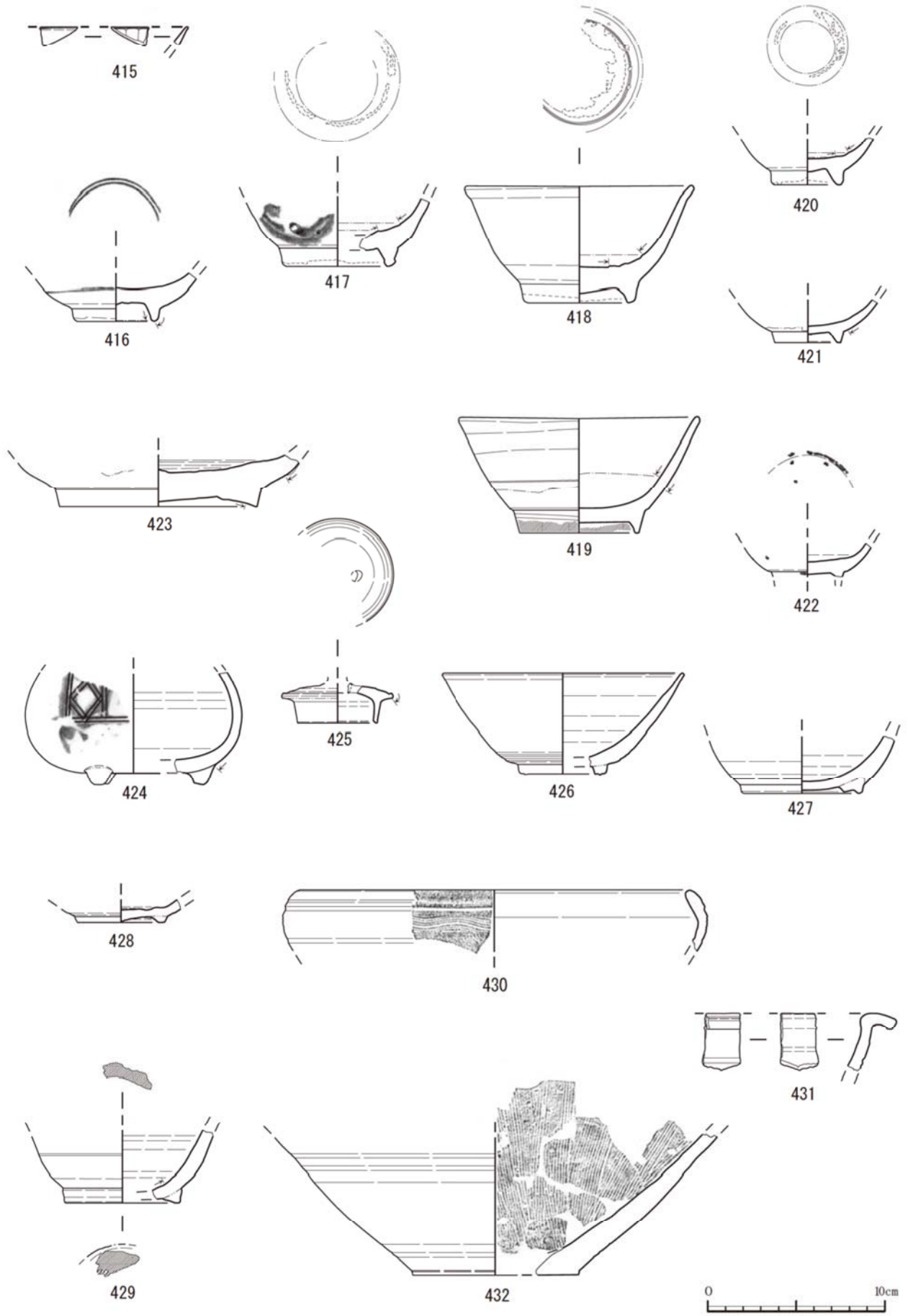
第51図　南区　Ⅱ層出土遺物（1）



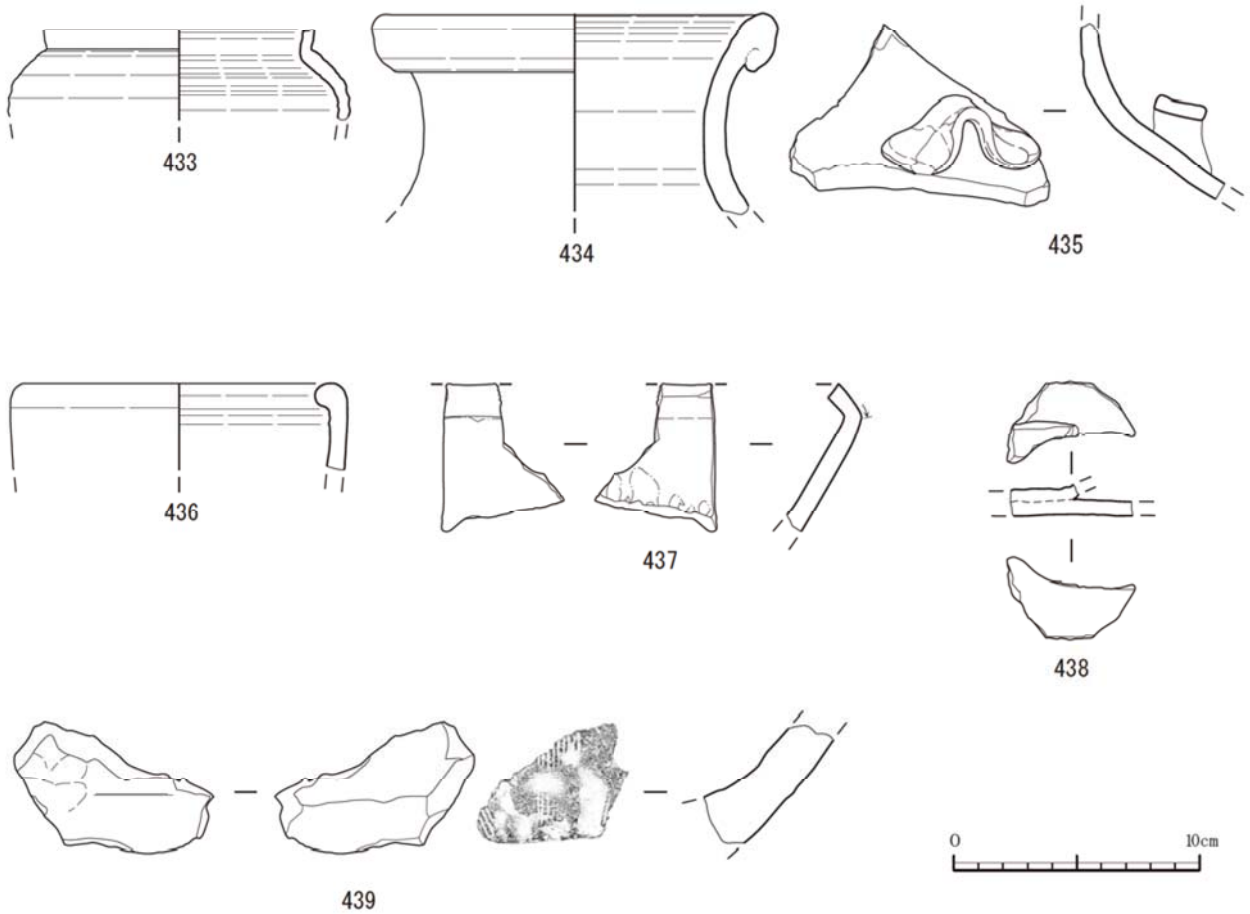
第52図　南区　Ⅱ層出土遺物（2）

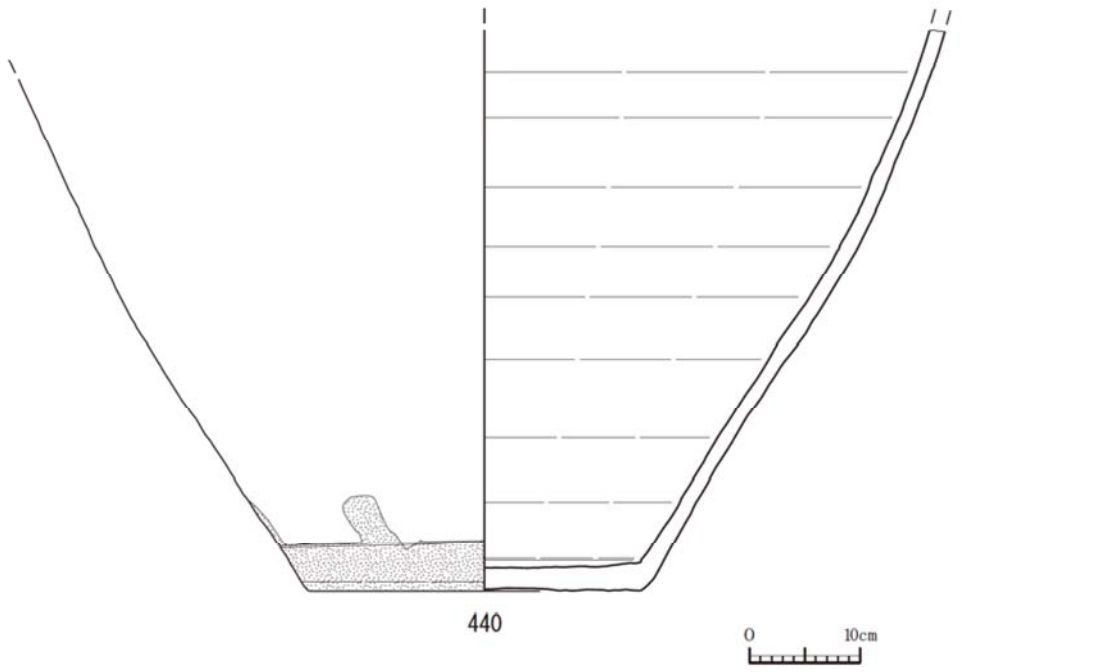


第53図　南区　Ⅱ層出土遺物（3）

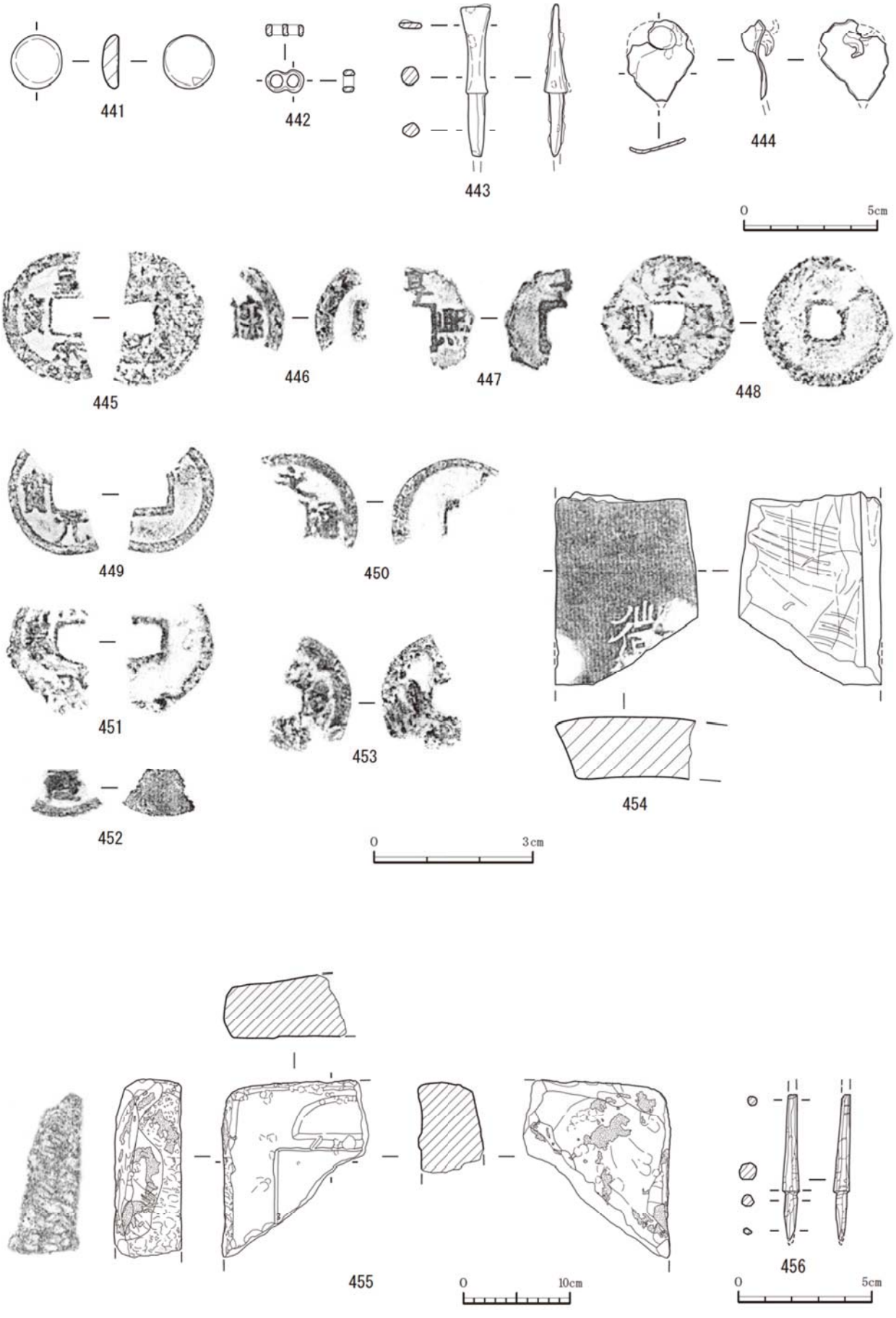


第54図　南区　Ⅱ層出土遺物（4）





第55図　南区　Ⅱ層出土遺物（5）



第56図　南区　Ⅱ層出土遺物（6）

本土産陶磁器（415・416） 肥前系の染付は、碗（416）・皿（415）が出土している。

沖縄産陶器（417 ～ 440） 施釉陶器は、碗Ａ（419）、碗Ｃ（417・418）、小碗Ａ（421）、小碗Ｂ－１（420）、呉須を施した小碗Ｂ－１（422）、火炉Ａ（423）、急須Ａ（424）、蓋Ａ（425）がある。無釉陶器は、碗Ａ（426・427・429）、見込みが凹む碗Ｂ（428）、鉢Ａ（431）、鉢Ｂ（430）、擂鉢Ａ（432）、壺Ａ（434・435・440）、急須Ａ（433）、火取（436）、火炉Ａ（437）、蓋（439）がある。440 は、Ｈ 10 で検出された埋甕１とした遺構の甕である。瓦質土器は、擂鉢（439）がある。

石製品（441・454・455） 441 は片面が青緑色で、青磁片を再加工したものと碁石である。454 は、褐色の緻密な石材を丁寧に加工したもので、線刻により「徹？」の字が書かれる。455 は、長方形の石碑と思われるものである。

金属製品（442 ～ 444） 442 は責鞆、443 は鉄鏃Ⅰ類、444 は鋲が付く版状の青銅製品である。

銭貨（445 ～ 453） 北宋銭（445）、南宋銭（447）、明銭（448・450）、他は銭種が確定できないが中国銭と思われる。

骨製品（456） 茎部をもった尖頭器である。

③Ⅲ層出土遺物（457 ～ 488）（第 57・58 図、第 37・38 表、図版 37・38）

グスク時代～近世の遺物が出土しており、陶磁器類 64 個体、骨製品１点、石器・石製品２点、銭貨６点、青銅製品（合金１点含む）９点、鉄製品 45 点、明朝系瓦 402 点、大和系瓦４点、塼 52 点、漆喰 114 点、合計 699 点を数える。なお、全体の個体数には反映されていないが（第 22 表）、高麗系瓦の筒部が２点出土している（第 41 表）。陶磁器類は、清代青花４点、沖縄産施釉陶器１個体、同無釉陶器２個体、陶質土器破片３点と近世のものは少なく、グスク時代の青磁が多い。ただ、詳細は後述するように、明朝系瓦が大量に出土しており、そのタイプも限定されており、ある程度時期的にまとまった資料である。

青磁（457 ～ 469） 碗では、Ⅵ－１類（457 ～ 459）、Ⅵ類（461 ～ 463）、Ⅴ類（460）、Ⅳ－０類（464）がある。皿では、Ⅳ－１類（465）がある。盤は、Ｃ類（464・467）、Ｄ類（468）、碁笥底で小型のもの（469）がある。

白磁（470・471） Ｅ群の端反皿の口縁（470）、底部（471）である。

青花（472） 見込みが蓮池文が描かれる鉢で、明Ⅰ類の範疇と考えた。

褐釉陶器（474） 壺５類の範疇と思われるが、口縁が外側へやや伸びており、６類に近い印象もある。

高麗青磁（473） 白黒象嵌で蓮華文が描かれた碗胴部である。

タイ産陶磁器（475・476） 475 は無釉陶器の平鉢で、476 はシーサッチャナライ窯系の小型壺の底部である。

沖縄産陶器（477） 擂鉢Ａで、焼成の特徴より初期無釉陶器と考えられる。

土器（478・479） 共に宮古式土器の壺である。

金属製品（480 ～ 483） 480 は鍍金された笠印付鐶、481 は鍍金された覆輪、482 は鉄鏃Ⅰ、483 は金と銀の合金製品と考えられる資料である。

銭貨（484 ～ 486） 北宋銭（484）、明銭（486）、銭種が確定できないもの（485）がある。

石製品（487） サンゴ石灰岩を研磨して整形された石球である。

骨製品（488） 表裏面に刻みを有した半円状製品である。

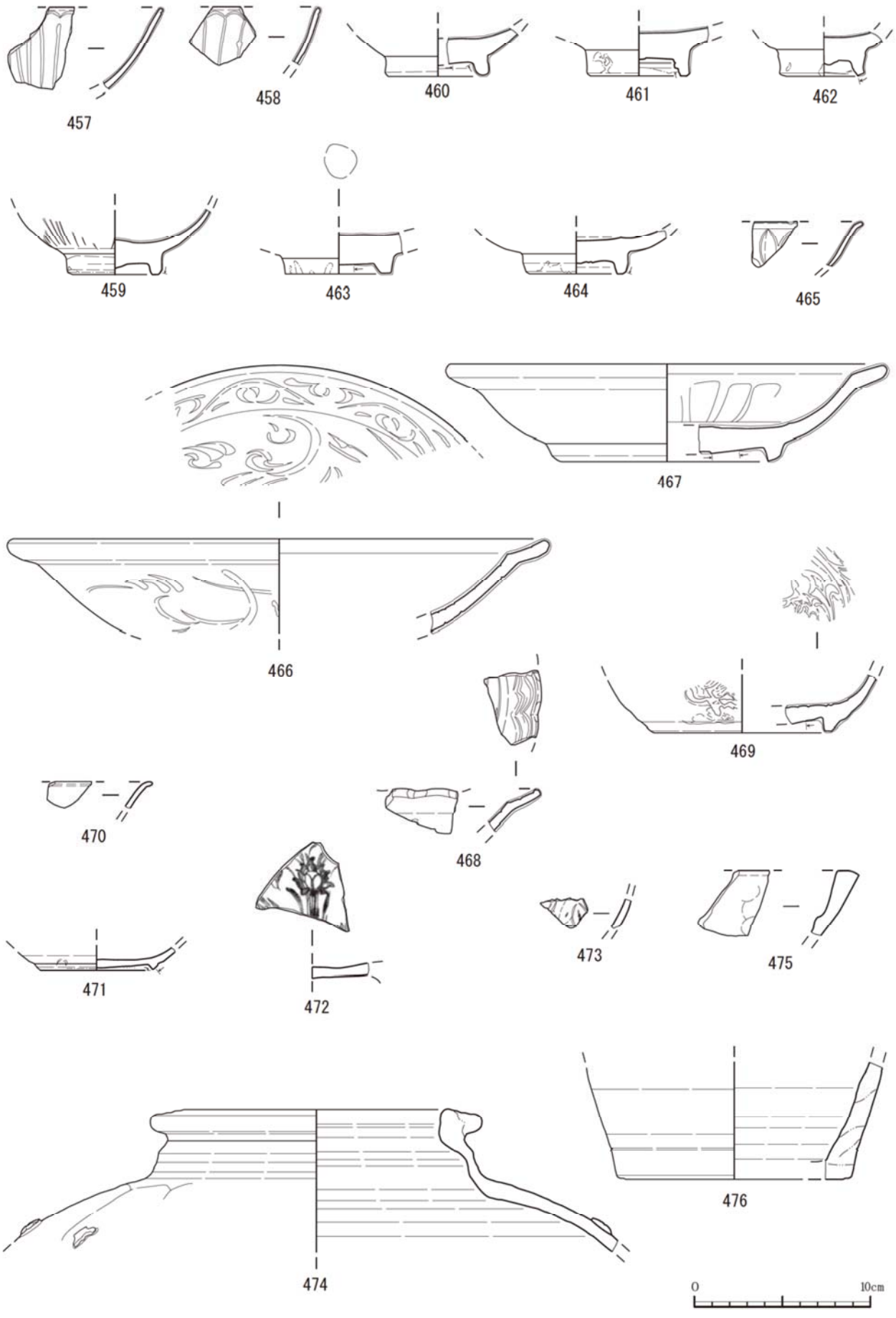
④Ⅳ層出土遺物（489 ～ 550）（第 59 ～ 62 図、第 38 ～ 40 表、図版 39 ～ 42）

グスク時代の遺物が大半で、陶磁器類 53 個体、ガラス玉４点、銭貨 29 点、青銅製品３点、鉄製品 79 点、明朝系瓦 17 点、大和系瓦 23 点、塼２点、合計 210 点を数える。陶磁器類は、本土産の肥前陶器皿の破片２点が出土しており、近世のものがわずかに見られる。

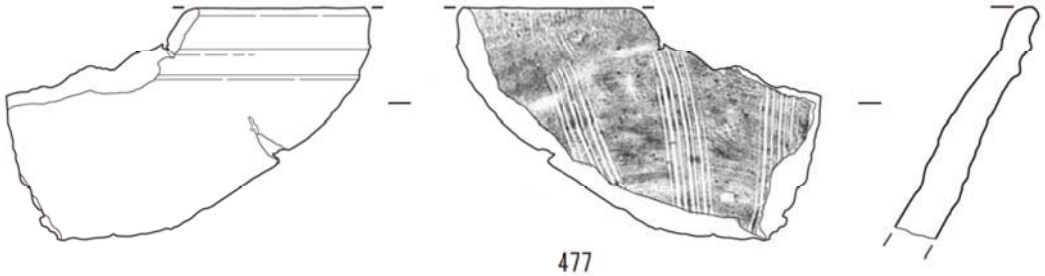
近世の遺物も混ざるが、その主体はグスク時代の遺物で、より時期を絞るなら、北区Ⅳ－１・２層に近い組成であるので、15 世紀中葉～ 16 世紀前半の年代幅をもっているものと考えられる。

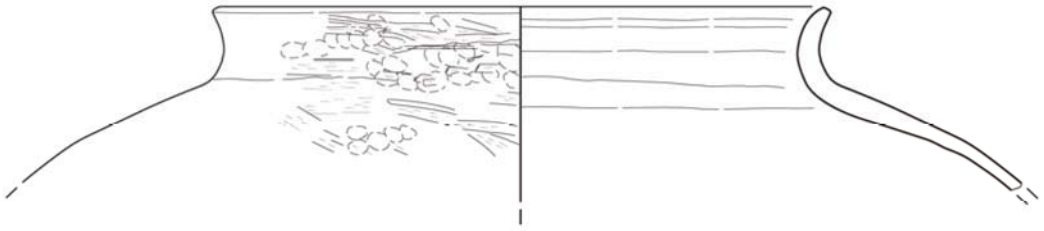
青磁（489 ～ 504） 碗は、Ⅳ´－０類（493）、Ⅴ類（496）、Ⅴ－１類（491・497）、Ⅴ－３類（489・492）、Ⅵ－１類（490）、Ⅶ類（495）がある。皿は、Ⅳ－２類（499）、Ⅴ類（498）がある。盤は、Ｂ類（500）、碁笥底（501）がある。その他、酒海壺蓋（502）、酒海壺身（503）、瓶（504）がある。

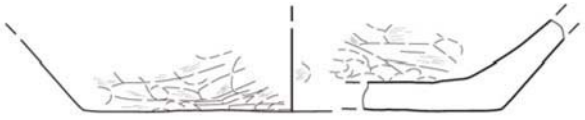
白磁（505 ～ 510） 景徳鎮窯系は、口縁が直線的な碗（505）、胴部中位に段が付くあまり例を見ない碗Ｂ´

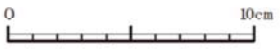


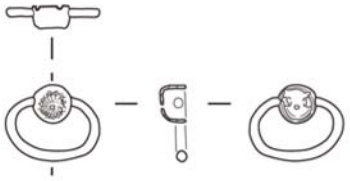
第57図　南区　Ⅲ層出土遺物（1）

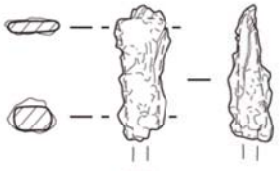


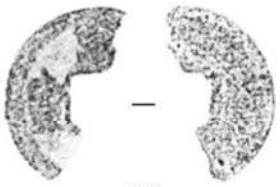


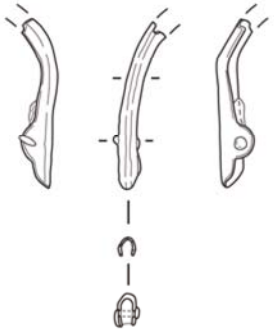


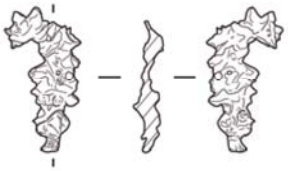


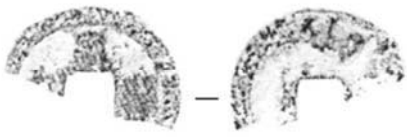


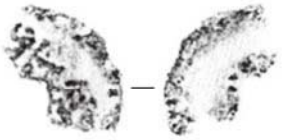


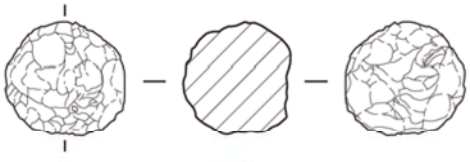


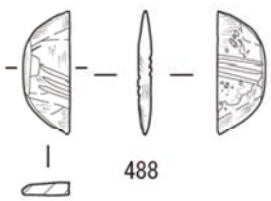




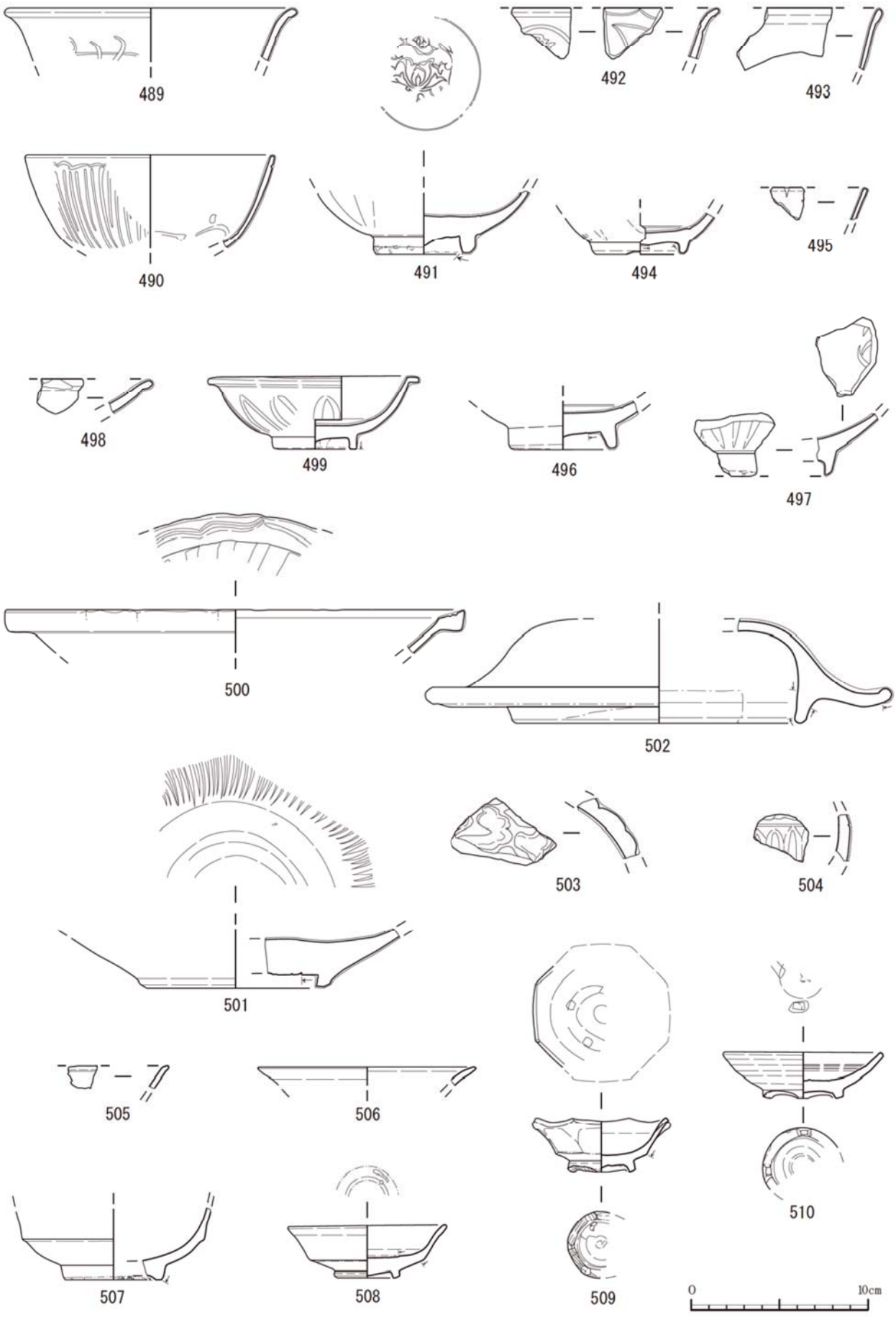




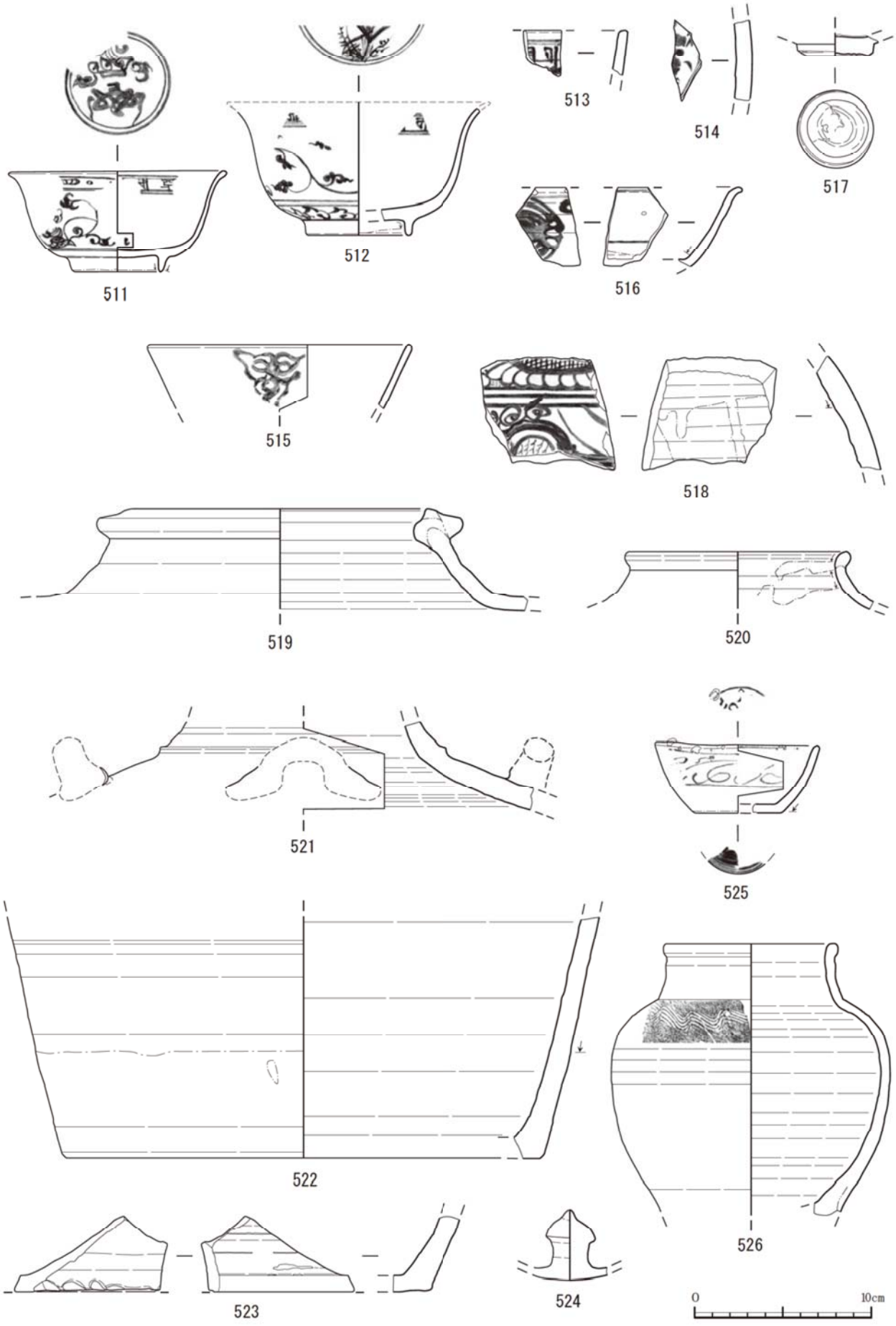




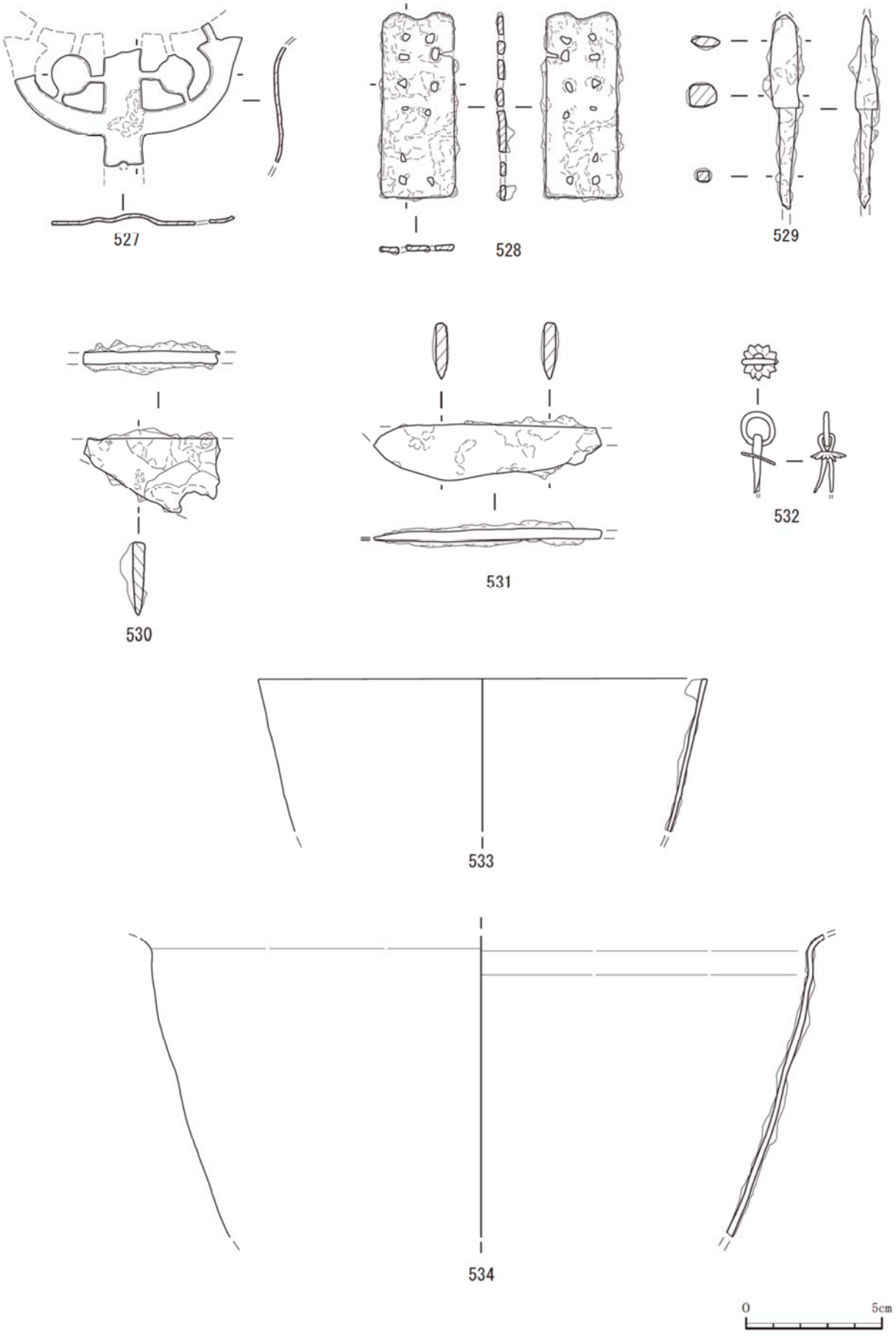
第58図　南区　Ⅲ層出土遺物（2）



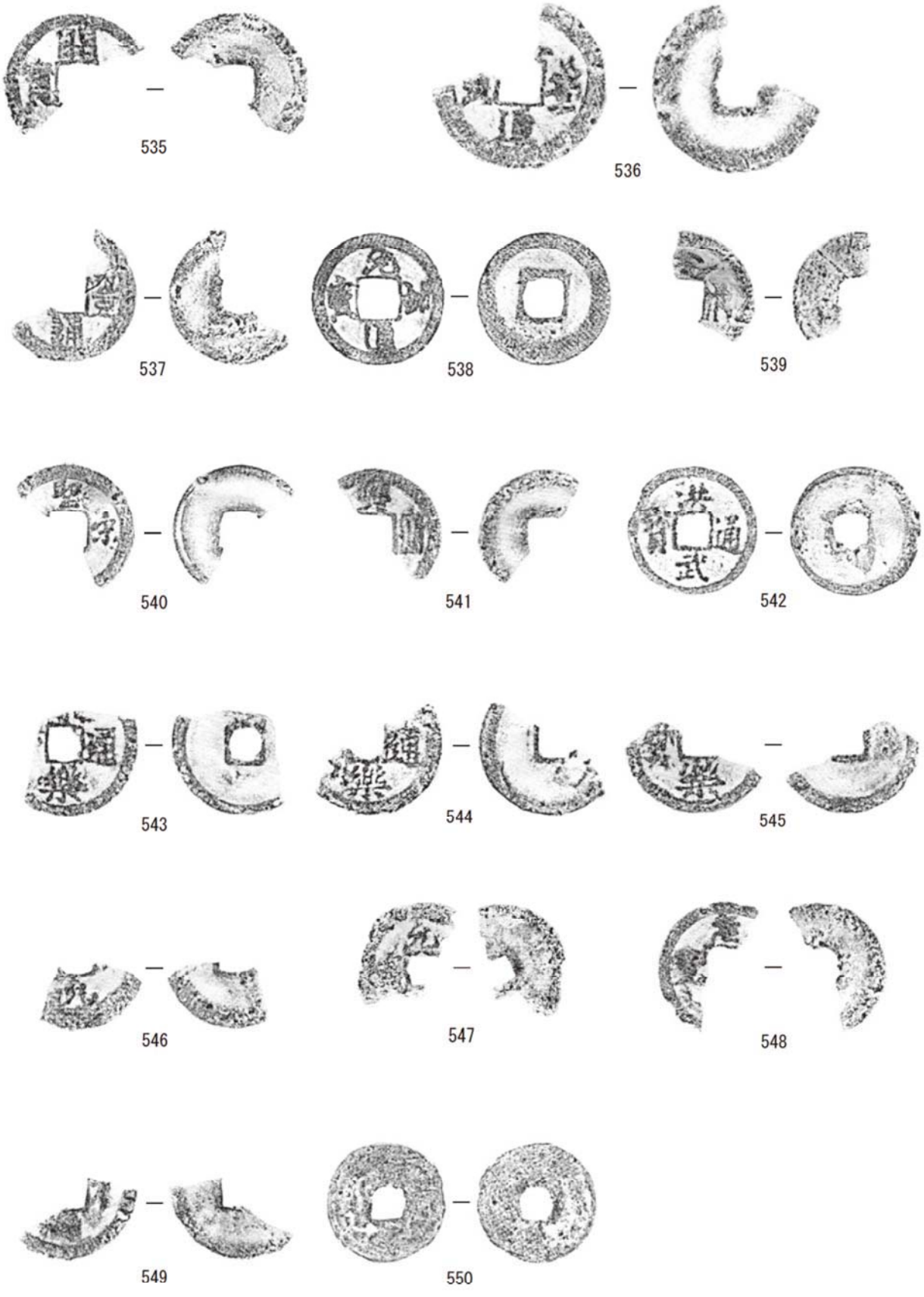
第59図　南区　Ⅳ層出土遺物（1）



第60図　南区　Ⅳ層出土遺物（2）



第61図　南区　Ⅳ層出土遺物（3）



第62図　南区　Ⅳ層出土遺物（4）

群（507）、腰折皿Ｅ０群（506）がある。福建産は、Ｄ群皿の中で腰折（508）、八角（509）、内湾（510）のものがある。

青花（511 ～ 516）　元様式は、壺胴部（514）がある。明代では、碗Ⅰ－１類（511・512）、鉢（513）がある。清代では、福建・広東産の碗で直口（515）、外反（516）がある。

黒釉陶器（517）　天目で、底部が小さめで外底はわずかに凹むものである。

鉄絵陶器（518）　白色釉を掛け、その上から黒色顔料で花弁や唐草文などが描かれた壺胴部で、磁州窯系のものと考えられる。

褐釉陶器（519・520）　壺５類（519）、壺３類（520）がある。

タイ産陶磁器（521 ～ 524）　黒褐釉四耳壺は、シーサッチャナライ窯系（522・523）、メナムノイ窯系（521）がある。ハンネラ土器の蓋（524）も出土している。

ベトナム産陶磁器（525）　チョコレートボトムでベタ底の青花小碗で、胴部外面には略化された草花文が描かれる。

沖縄産陶器（526）　頸がやや長く球胴形の波状文を描いた壺Ｂである。

金属製品（527 ～ 534）　立物の中央飾（527）、碁石頭伊予札とされる小札（528）、鉄鏃Ⅱ（529）、刀子（530・531）、菊形の座金具に鐶を通した割りピンが付けられた飾金具（532）、鉄鍋（533・534）がある。

銭貨（535 ～ 550）　唐銭（535）、北宋銭（536 ～ 541）、明銭（542 ～ 545）、銭種が確定できないもの（546 ～ 549）、無文銭（550）がある。

４．地区不明出土遺物（551 ～ 563）（第 63 図、第 40 表、図版 43）

北区か南区か限定できない遺物で多くはⅠ層より出土したもので、層序不明のものも含めた。

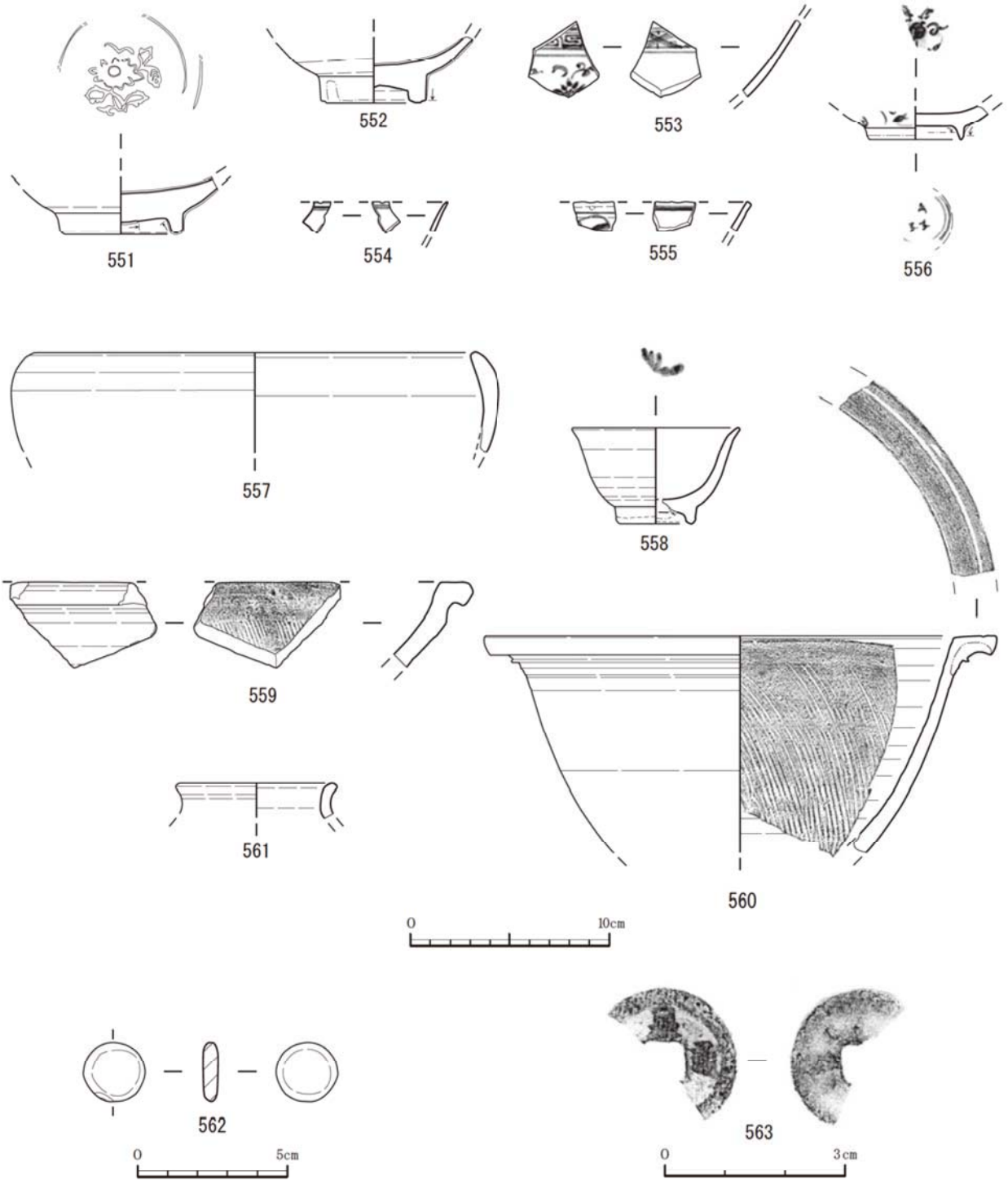
青磁（551・552） 碗Ⅴ－０類（551）、碗Ⅵ－０類（552）がある。

青花（553 ～ 556） 碗は、明代ではⅠ－②類（553）、Ⅲ類（554）、漳州窯系（555）、清代では徳化窯系（556）がある。

沖縄産陶器（557 ～ 561） 施釉陶器では、火炉Ａ（557）、小碗Ｂ－２（558）がある。無釉陶器では、擂鉢Ｂ（559）、擂鉢Ｃ（560）、小ぶりの壺（561）がある。

石製品（562） 粘板岩製で黒色の碁石（562）がある。

銭貨（563） 北宋銭（563）がある。



第 63 図　淑順門西地区出土地不明遺物

第 23 表　淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（１）

遺物No.	種類	器形・大分類	分類	口径（長軸）	底径（短軸）	器高（厚さ）	観察事項	地区	グリッド	層	調査時土層
1	中国産青磁	碗	Ⅳ-0	15.2	5.4	6.1	高台外面まで釉かかり、畳付水平、中央やや突出。釉は薄く、胎土は灰色。見込みは小ぶりの型押の花文。	北	E10	I	石積裏込
2	中国産青磁	皿	Ⅲ´-1	-	-	-	釉は厚く、色調は濃緑色。外面は厚みのある鎬連弁文。	北	F10	I	撹乱
3	中国産青磁	皿	V-1	-	5.4	-	外底おそらく蛇の目。外面は片彫りの連弁文。	北	F10	I	撹乱
4	中国産青磁	大瓶	-	-	-	-	釉は内外に掛り、厚く本来は良好だと思われるが、風化もしくは被熱のため色調が鈍い。大瓶胴部。外面は鎬連弁文。	北	F10	I	撹乱
5	中国産青磁	盤	高台	-	-	-	外底蛇の目。釉厚く、胎土共に精良。見込みは片彫りによる枝状の文様。	北	F10	I	撹乱
6	中国産白磁	碗	福建D´	-	4.55	-	黄灰色。軟質。外面下半露胎、見込み釉はぎ・「亞？」字印花文・重ね焼き痕。外底切り離し痕あり。	北	E11	I	撹乱
7	中国産青花	盤	元様式	-	-	-	器面の釉が荒れており被熱の可能性。外面宝相華唐草文？内面牡丹唐草文。	北	E11	I	撹乱
8	中国産青花	碗	明（I-2）	-	-	-	外面雷文、牡丹唐草文。内面四方襷文。	北	F11	I	撹乱
9	中国産青花	碗	清(福建)	13.0	-	-	釉灰色。呉須発色不良。	北	E10	I	撹乱
10	中国産色絵	碗	清（徳化）	-	-	-	外面に緑・赤色で着色。円文におそらく「寿」字を描く。	北	F10	I	撹乱
11	中国産青花	碗	清（徳化）	9.7	-	-	釉青白色、光沢有。外面梵字文。	北	F10	I	撹乱
12	中国産青花	碗	清(福建)	14.4	-	-	釉青白色、口縁端部褐色（鉄錆）。外面文様ダミるが不明。	北	F10	I	撹乱
13	中国産青花	皿	清（徳化）	-	-	-	釉青白色。呉須淡い。	北	F10	I	撹乱
14	中国産青花	碗	清（徳化）	-	7.0	-	釉青白色、光沢有。外面下縦格子文。	北	F11	I	撹乱
15	沖縄産施釉陶器	碗	A	13.8	-	-	外面胴部～内面胴部に鉄釉を施釉。胎土は鈍赤褐色。高台際を水平に削る。	北	F11	I	撹乱
16	沖縄産施釉陶器	碗	B-1	-	6.2	-	外面腰部～内面胴部に鉄釉を施釉。畳付にアルミナを塗布。内底に溶着痕（器物か）あり。胎土は浅黄橙色。内底に鉄絵で圏線＋丸文。	北	F10	I	撹乱
17	沖縄産施釉陶器	碗	B-2	-	5.9	-	外面鉄釉・内面灰釉を掛け分け後、内底を蛇の目状に釉剥ぎし、畳付にアルミナを塗布。胎土は鈍黄橙色。	北	F10	I	撹乱
18	沖縄産施釉陶器	碗	D	10.0	-	-	全体に白化粧＋透明釉を施釉後、口唇部～内面口縁部を釉剥ぎ。外面に線彫り＋呉須で施文。胎土は褐灰色。	北	F10	I	撹乱
19	沖縄産施釉陶器	碗	D	-	6.2	-	全面に白化粧＋透明釉を施釉後、畳付を釉剥ぎ。胎土は橙色。外面に線彫り＋呉須＋飴釉で施文。	北	F10	I	撹乱
20	沖縄産施釉陶器	皿	A-1	12.3	5.5	4.1	全面に白化粧＋透明釉を施釉後、内底は蛇の目状、外底は畳付成形時に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗布。内底にアルミナが付着。胎土は鈍黄橙色。	北	F11	I	撹乱
21	沖縄産施釉陶器	皿	A-2	-	5.8	-	全面に白化粧＋透明釉を施釉後、内底は蛇の目状、外底は畳付成形時に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗布。内底にアルミナが付着。内底に陰圏線数条。胎土は浅黄色。	北	F10	I	撹乱
22	沖縄産施釉陶器	火取	A	9.1	-	-	全面に白化粧を施した後、透明釉を外面に、緑釉を口唇部に施釉。胎土は鈍黄橙色。	北	F10	I	撹乱
23	沖縄産施釉陶器	小碗	B-1	-	3.5	-	全面に白化粧＋透明釉を施釉後、内底は蛇の目状、外底は畳付成形時に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗布。内底にアルミナがわずかに付着。外面全体に亀甲繋状の面取りを施す。胎土は浅黄橙色。	北	F10	I	撹乱
24	沖縄産施釉陶器	酒注	A	-	6.6	-	外面に白化粧を施した後、透明釉を高台外面まで施釉。畳付にアルミナがわずかに付着。胎土は鈍黄橙色。	北	F11	I	表土
25	沖縄産施釉陶器	蓋	B	-	5.6	-	外面に鉄釉を施釉。撥上面（畳付）にアルミナを塗布。胎土は鈍黄橙色。	北	F10	I	撹乱
26	沖縄産施釉陶器	蓋	C	15.0	13.1	-	全面に灰釉を施釉後、庇端部～袴外面を釉剥ぎ。胎土は灰白色。	北	F11	I	撹乱
27	沖縄産無釉陶器	碗	B	-	9.2	-	器面は橙色。胎土は橙色で白色粒・赤褐色粒・雲母を少量含む。高台は貼付後に削り出し。陶質土器の可能性あり。	北	F11	I	撹乱
28	沖縄産無釉陶器	壷	B	9.8	-	-	焼成良好で両面に自然釉か（器面は灰褐色）。素地は褐色で白色粒を含む。口縁部は内側折り返しか。	北	F10	I	撹乱
29	沖縄産無釉陶器	鉢	B	23.0	-	-	焼成良好で器面は外面灰褐色・内面明赤褐色。胎土は明赤褐色で白色粒を少量含む。口縁部は外側折り曲げ後に内側折り返し。鍔上面に陰圏線１条。	北	F10	I	撹乱

第 24 表　淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（２）

遺物No.	種類	器形・大分類	分類	口径（長軸）	底径（短軸）	器高（厚さ）	観察事項	地区	グリッド	層	調査時土層
30	沖縄産無釉陶器	蓋	－	－	内径24.3	－	外面に泥釉か（器面は外面灰褐色・内面明赤褐色）。胎土は明赤褐色で白色粒・赤褐色粒・黒色粒を含む。内面に「大正十年…、昭和十一年旧…」の墨書。	北	F11	I	撹乱
31	陶質土器	蓋	B	9.0	6.2	－	器面は橙色。胎土は橙色で雲母・白色粒・赤褐色粒を多く含む。蓋甲に陰圏線？を１条巡らすが不明瞭。	北	F10	I	撹乱
32	陶質土器	蓋	A	－	摑み径6.4	－	器色は橙色。胎土は橙色で雲母や赤褐色粒を含む。高台は貼付後に内刳りを削り畳付を水平に切る。	北	F11	I	撹乱
33	陶質土器	土瓶	A	－	－	－	器色は橙色。胎土は橙色で白色粒や赤褐色粒を少量含む。注口に煤が付着。	北	F10	I	撹乱
34	陶質土器	火炉	A	－	－	－	器色は鈍橙色。胎土は鈍橙色で白色粒・赤褐色粒・雲母を含む。外面に白土で圏線を数条巡らすが剥落が著しい。内面口縁部に受部を貼付。	北	F10	I	撹乱
35	陶質土器	火炉	A	(15.4)	－	－	器面は鈍黄橙色。胎土は鈍黄橙色で雲母・白色粒・赤褐色粒を多く含む。外面全体に煤が付着。口縁部は外側に折り曲げて肥厚させ、内面に受部を貼付。	北	F11	I	撹乱
36	陶質土器	鍋	A	10.7	－	－	器面は鈍橙色。胎土は鈍橙色で雲母・白色粒・赤褐色粒を含む。両面に煤が薄く付着。	北	F11	I	撹乱
37	陶質土器	火炉	A	14.0	－	－	器面は鈍橙色。胎土は橙色で雲母・白色粒・赤褐色粒を多く含む。口縁部は外側に折り曲げて肥厚か。内面に煤が付着。	北	F10	I	撹乱
38	陶質土器	鉢	A	22.6	－	－	器色は橙色。胎土は橙色で雲母・白色粒・赤褐色粒を含む。外面に陰圏線１条＋７本櫛の波状文。無釉陶器の可能性あり。	北	F11	I	撹乱
39	青銅製品	金物	覆輪	21.6	0.5	0.1	上部の長さが長く切込みがやや深いことから、眉庇の覆輪とかんがえられる。17.1ｇ	北	F11	I	撹乱
40	青銅製品（鍍金）	立物	三鍬形台	6.4	4.1	0.1	橘樹文が施文され、魚々子(1㎜以下)は粗く打たれ切り合いが多い。15.1ｇ	北	E10	I	撹乱
41	銭貨	景祐「元」「寶」		－	－	0.14	孔径0.92cm。篆書と思われる。背の外縁はやや不明瞭。2.0ｇ	北	F10	I	撹乱
42	銭貨	寛永通寶		外2.32	内1.91	0.11	孔径0.78cm。新寛永。背の外縁はやや不明瞭。1.9ｇ	北	F10	I	撹乱
43	骨製品	歯ブラシ	－	4.05+	1.2	0.6	重量1.8ｇ。破片。全面研磨。ブラシ部の小孔４列。	北	F10	I	撹乱
44	石製品	石球	－	3.5	3.4	1.6+	重量26.4ｇ。径3㎜の敲打痕が全面に残る。一端に敲打痕より新しい割れがあり。砂岩（ニービヌフニ）。	北	E11	I	撹乱
45	中国産青磁	碗	V－2	16.1	－	－	釉は貫入多い。外面は片彫りによる雷文、連弁文。内面草花文。	北	F11北	Ⅳ－1	黄褐色土
46	中国産青磁	碗	V－1	－	6.0	－	外底蛇の目。釉はガラス質、貫入多い。見込みは型押の花芯文。	北	F11	Ⅳ－1	黄褐色土
47	中国産青磁	碗	Ⅵ－1	－	5.1	－	高台内途中まで施釉。外底は赤色顔料付着。内面から剥離し、円盤状にした可能性。	北	F11	Ⅳ－1	黄褐色土
48	中国産青磁	碗	Ⅵ－0	－	4.8	－	釉は高台途中まで掛るが、風化のためか色調失くす。	北	F11	Ⅳ－1	褐色土
49	中国産青磁	碗	V－1	－	6.4	－	外底蛇の目。釉はガラス質だが、胎土共に精良。外面はおそらく剣先連弁文。	北	F11北	Ⅳ－1	褐色土
50	中国産青磁	碗	Ⅳ－0	－	5.0	－	外底無釉、畳付外傾。釉は薄く、ガラス質。	北	F11北	Ⅳ－1	褐色土
51	中国産青磁	碗	Ⅳ－0	－	－	－	釉は薄く、胎土は灰白色。外面はロクロ目顕著。	北	F11南	Ⅳ－1	褐色土
52	中国産青磁	盤	高台	－	8.2	－	釉は外底途中まで掛り、重ね焼き痕あり。内面は幅1.5cmの連弁状の凹み。見込みは型押でおそらく花芯文。	北	F11北	Ⅳ－1	黄褐色土
53	中国産青磁	盤	B	－	－	－	釉はガラス質、胎土は灰白色。内面は連弁状の凹み。	北	F11南	Ⅳ－1	褐色土
54	中国産白磁	碗	福建Ｃ３	－	－	－	灰色。硬質。口縁端部やや太めで外反が弱い。	北	F11北	Ⅳ－1	褐色土
55	中国産青花	碗	明（Ⅰ－1）	14.3	－	－	呉須にじむ。外面やや簡略化した牡丹唐草文、内面四方襷文。大きく外反。	北	F11	Ⅳ－1	黄褐色土
56	中国産青花	碗	明（ⅡD）	－	－	－	光沢有。外面如意頭文。	北	F11	Ⅳ－1	黄褐色土
57	中国産青花	碗	明（Ⅰ－1）	－	－	－	貫入あり。外面唐草文、内面牡丹唐草文？	北	F11南	Ⅳ－1	褐色土
58	中国産青花	碗	明（Ⅰ－1）	－	－	－	呉須やや発色不良。内面雷文。大きく外反する。	北	F11北	Ⅳ－1	褐色土
59	中国産青花	碗	明（Ⅰ－1）	－	－	－	内外面宝相華唐草文。おそらく外販する。	北	F11	Ⅳ－1	0-20
60	中国産青花	碗	明（Ⅰ－1）	－	－	－	光沢有。外面波涛文、ラマ式蓮弁文。おそらく外反する。	北	F11北	Ⅳ－1	黄褐色土
61	中国産青花	盤	明（景徳鎮）	－	－	－	碁笥底。畳付釉はぎ。	北	F11	Ⅳ－1	0-20

第 25 表　淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（３）

遺物No.	種類	器形・大分類	分類	口径（長軸）	底径（短軸）	器高（厚さ）	観察事項	地区	グリッド	層	調査時土層
62	中国産黒釉陶器	天目	－	－	－	－	胎土灰白色。釉は黒色と褐色。	北	F11南	Ⅳ－1	褐色土
63	中国産褐釉陶器	壷	5	－	16.1	－	胎土褐灰色。白色粒少量含む。釉は暗オリーブ色。底部、耐火土２ヶ所。	北	F11	Ⅳ－1	褐色土+黄褐色土+0-20
64	中国産褐釉陶器	壷	－	－	－	－	胎土灰白色。白色粒少量含む。釉灰オリーブ色。内面部分的に露胎。胴部上位に波状突帯文を貼り付け。	北	F11南	Ⅳ－1	褐色土
65	タイ産黒褐釉陶器	四耳壷	ｼｰｻﾁｬﾅﾗｲ窯	18.6	－	－	胎土：精良。焼成：良好。色調：〔断面〕灰赤色、〔内面〕灰赤色。混入物：微細な褐色粒とやや大きめの褐色粒が主、白色粒はわずかに見られる。釉：黒褐色。	北	F11北	Ⅳ－1	褐色土
66	タイ産黒褐釉陶器	四耳壷	ｼｰｻﾁｬﾅﾗｲ窯	－	－	－	胎土：精良。焼成：良好。色調：〔断面〕灰赤色、〔内面〕灰赤色。混入物：微細な褐色粒とやや大きめの赤褐色粒。釉：黒褐色。	北	F11	Ⅳ－1	黄褐色土
67	タイ産黒褐釉陶器	四耳壷	ｼｰｻﾁｬﾅﾗｲ窯	－	－	－	胎土：精良。焼成：良好。色調：〔断面〕灰赤色、〔内面〕灰赤色。混入物：褐色粒・赤褐色粒が主、他に微細な白色粒・白い帯状のもの。〔釉〕オリーブ黒色。	北	F11北	Ⅳ－1	黄褐色土
68	タイ産黒褐釉陶器	四耳壷	ﾒﾅﾑﾉｲ窯Ⅱ類	－	－	－	胎土：粗い。焼成：ムラがある。色調：〔断面〕外面より黄灰色、内面より浅黄橙色。〔内面〕浅黄橙色。混入物：赤褐色粒・白色粒・白い帯状の物質。釉：オリーブ黒。	北	F11	Ⅳ－1	黄褐色土
69	タイ産黒褐釉陶器	四耳壷	産地不明	13.8	－	－	胎土：土器質。焼成：良好。色調：〔断面〕灰白色〔内外面〕灰白色。混入物：赤褐色粒が主、他に赤色粒・白色粒。釉：にぶい黄褐色。	北	F11	Ⅳ－1	0-20
70	タイ産黒褐釉陶器	四耳壷	ﾒﾅﾑﾉｲ窯Ⅱ類	17.8	－	－	胎土：やや精良。焼成：ムラがある。色調：〔断面〕外面より褐灰色、内面より浅黄橙色。〔内面〕浅黄橙色。混入物：赤色粒・黒色粒・微細な白色粒。釉：二重に塗布。〔口縁付近〕暗オリーブ褐色〔外面口縁下〕黄褐色。	北	F11	Ⅳ－1	褐色土
71	タイ産黒褐釉陶器	四耳壷	ﾒﾅﾑﾉｲ窯Ⅰ類	－	－	－	胎土：精良。焼成：良好。色調：〔断面〕赤灰色、〔内面〕灰褐色。混入物：暗赤褐色粒が主、他に白い帯状のもの・微細な赤色粒。釉：オリーブ黒色。	北	F11南	Ⅳ－1	褐色土
72	タイ産土器	蓋	－	12.4	－	推定3.35	胎土：粗い。焼成：良好。色調：〔断面芯部〕灰色、〔内外面・断面壁面付近〕にぶい橙色。混入物：赤色粒・黒色粒・微細な褐色粒。	北	F11	Ⅳ－1	黄褐色土+褐色土
73	陶質土器	蓋	A	10.2	－	－	器色は鈍黄橙色。胎土は鈍黄橙色で雲母や白色粒を含む。	北	F11	Ⅳ－1	黄褐色土
74	グスク土器	壺	ⅡA	11.5	－	－	短頸壺。胎土：砂泥質①。混入物：多量。色調：[内外面]鈍黄橙色。調整：横ナデで指頭痕残存。	北	F11	Ⅳ－1	褐色土
75	青銅製品	金物	篠垂	10.8	0.8	0.1	花先形。星(径5mm長さ6～5mm) は8つ残存し、裏はつぶしてかしめる。8.5ｇ	北	F11南	Ⅳ－1	黄褐色土
76	青銅製品（鍍金）	金物	八双金物	3.0	1.7	0.1	唐草文。猪の目(長6mm幅8ミリ) が大きく、規則的に魚々子(1mm) を打ち、切り合いも少ない。端の孔は後に穿孔されたものと思われる。2.1ｇ	北	F11	Ⅳ－1	黄褐色土
77	鉄製品	小札	四目？	4.0	2.2	0.15～0.1	孔径3mm　3.6ｇ	北	F11南	Ⅳ－1	黄褐色土
78	鉄製品	小札	平小札	3.0	1.8	0.15	上から5つは孔径4mm他は3mm。3.6ｇ	北	F11北	Ⅳ－1	黄褐色土
79	鉄製品	小札	－	3.1	1.9	0.15	S字状に変形。孔径4mm。3.9ｇ	北	F11北	Ⅳ－1	黄褐色土
80	青銅製品	金物	覆輪	10.8	0.6	0.1	鼻は欠損。やや大きく、丁寧なつくり。8.3ｇ	北	F11南	Ⅳ－1	黄褐色土
81	鉄製品	甲冑類？	不明	3.2	1.4	0.1	薄く細長い板状のものが、3枚重なる。82と同一個体と思われる。2.9ｇ	北	F11	Ⅳ－1	黄褐色土
82	鉄製品	甲冑類？	不明	3.5	0.6	0.1	薄く細長い板状のものが、2枚重なるか。81と同一個体と思われる。1.0ｇ	北	F11	Ⅳ－1	黄褐色土
83	鉄製品	釘	Ⅰ類	3.2	0.8	0.5	頭が広がり、やや直角に折れ曲がる。ややナナメ方向の木目の木片が付着。2.9ｇ	北	F11	Ⅳ－1	黄褐色土
84	鉄製品	鍋	－	28.6	－	5.8	胴部が外反し、口縁が肥厚する。99.0ｇ	北	F11北	Ⅳ－1	黄褐色土
85	銭貨	「」「」元寶？		外2.45	内1.96	0.15	孔径0.75cm。「元」の字以外、不明瞭。4.1ｇ	北	F11北	Ⅳ－1	褐色土
86	銭貨	元「祐？」「通」寶		外2.51	内2.08	0.12	孔径0.87cm。青の外縁がやや太い。2.0ｇ	北	F11	Ⅳ－1	黄褐色土
87	銭貨	「熙」寧元「寶」		外2.45	内2.09	0.17	孔径0.86cm。青の外縁は太いが、不明瞭。2.8ｇ	北	F11	Ⅳ－1	黄褐色土
88	銭貨	中国銭		外2.45	－	0.11(1枚) 0.63(4枚)	孔径0.81cm。4枚溶着。元などの文字も見える。全体的に変形し、被熱の可能性あり。12.1g(4枚)	北	F11	Ⅳ－1	褐色土
89	銭貨	無文銭		外2.00	－	0.08	孔径0.6cm。孔形はやや円形。1.2ｇ	北	F11南	Ⅳ－1	褐色土
90	銭貨	「」「」通「」		－	－	0.13	篆書の「通」と思われる。0.8ｇ	北	F11南	不明	不明

第 26 表　淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（４）

遺物No.	種類	器形・大分類	分類	口径（長軸）	底径（短軸）	器高（厚さ）	観察事項	地区	グリッド	層	調査時土層
91	骨製品	弧状	－	7.7	1.6	1.1	13.5ｇ。弧状。全面丁寧な研磨。	北	F11南	Ⅳ-1	褐色土
92	骨製品	不明	－	10.7+	1.6	－	13.5ｇ。1面欠損、他面は研磨。端部に短い擦痕。ウシ？中手骨か中足骨。	北	F11南	Ⅳ-1	褐色土
93	中国産青磁	碗	V-2	14.0	－	－	釉はガラス質。外面は線刻の簡略化した雷文。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
94	中国産青磁	碗	V-2	14.0	－	－	釉はガラス質、胎土灰色。外面は線刻の簡略化した雷文、下に連弁文。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
95	中国産青磁	碗	V-2	11.6	－	－	釉は厚く、ガラス質。外面は線刻の丁寧な雷文と草花文。内面は草文。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
96	中国産青磁	碗	V-2・3	－	6.8	－	外底蛇の目。釉良好。内外面線刻の草花文。見込み八宝文風の印花文。	北	F11南	Ⅳ-2+1	黒褐色土（上層）+褐色土
97	中国産青磁	大碗	V-2	20.4	－	－	釉良好。外面は唐草文風の横帯文、下方に草花文。内面も草花文。片彫りは深め。	北	F11北	Ⅳ-2+1	黒褐色土（上層）+黄褐色土+褐色土
98	中国産青磁	碗	V-0	－	7.8	－	おそらく外底蛇の目。釉は厚く良好。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
99	中国産青磁	碗	V-1	－	－	－	釉は厚く良好。外面は中央に凹みをもつ剣先連弁文。内面は草花文？	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
100	中国産青磁	碗	V-1	－	－	－	釉は厚く、胎土共に良好。外面はおそらく線刻剣先連弁文。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
101	中国産青磁	碗	V-1	－	5.5	－	外底おそらく蛇の目。釉は薄く、貫入多い。幅２cmの連弁文。	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
102	中国産青磁	碗	Ⅳ-1	－	－	－	釉は薄くガラス質、緑白色。複線による幅１cmの連弁文。	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（間層）
103	中国産青磁	盤	B	－	－	－	釉は厚く不透明。内面幅３mmの連弁状の櫛描文。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
104	中国産青磁	盤	D	28.0	－	－	釉は厚く、胎土共に精良。外面は鎬連弁文風に刻みをいれた上に草花文？内面は２cm幅の連弁風の凹みを作り、草花文。	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
105	中国産青磁	盤	E	28.0	－	－	釉は厚く良好。ロクロ目はほとんどない。	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
106	中国産青磁	盤	C	34.7	16.0	8	外底おそらく蛇の目、高台畳付に砂付着。内外面片彫りの草花文。	北	F11北	Ⅳ-2+1	黒褐色土（上層）+黄褐色土
107	中国産青磁	盤	D	20.0	－	－	釉は不透明。内面は不鮮明な草花文？	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
108	中国産青磁	酒海壺（蓋）	－	袴17.5	庇28.2	8.6	釉は厚く、胎土共に精良。外面は菊花文と「禄」刻銘。見込みの菊花文は型押？摘みは粘土紐を渦巻き状に巻いたもの。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
109	中国産青磁	擂鉢	－	14.3	－	－	釉は薄く、内面露胎。擂目８本/１cm。	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
110	中国産白磁	碗	福建Ｃ３	－	－	－	灰色。硬質。口縁端部やや太め。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
111	中国産白磁	皿	福建D	－	3.6	－	乳白色。外面下半露胎。硬質。抉り高台、見込み目跡３ヶ所。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
112	中国産青花	碗	明（ⅡD）	－	－	－	外面波涛文、アラベスク文？光沢有。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
113	中国産青花	碗	明（I-2？）	11.9	－	－	呉須がにじむ。光沢有。外面簡略化した雷文、唐草文。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
114	中国産青花	碗	明（I-1）	14.8	－	－	呉須にじむ、光沢有。外面波涛文、内面四方襷文。	北	F11	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
115	中国産青花	碗	明（I-2）	－	－	－	外面雷文、牡丹唐草文。子房を格子で表現。内面四方襷文。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
116	中国産青花	碗	明（I-2）	－	4.1	－	光沢有、呉須淡い。外面唐草文？見込み圏船２条ない水草文？「坯」の上に２字ある可能性。小ぶりの底部。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
117	中国産青花	小碗	明（I-2）	－	2.6	－	外面牡丹唐草文？見込み圏線２条内枝文？	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
118	中国産青花	鉢	明（I・Ⅱ？）	－	－	－	見込み花文より６区画配し、宝珠・剣などの宝文を描く。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
119	中国産褐釉陶器	壷	5	15.6	－	－	胎土赤灰色。白色粒少量含む。釉は暗オリーブ色。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
120	中国産褐釉陶器	壷	5	18.4	－	－	胎土赤灰色。白色粒少量含む。釉は灰オリーブ色。肩部耐火土３ヶ所。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
121	中国産褐釉陶器	壷	5	－	16.8	－	胎土褐灰色。白色粒少量含む。釉は暗オリーブ色。底部、耐火土１ヶ所。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
122	中国産褐釉陶器	壷	5	－	14.2	－	胎土褐灰色。白色粒少量含む。釉は暗オリーブ色。底部、耐火土２ヶ所。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
123	中国産褐釉陶器	壷	－	－	－	－	胎土灰色。白色粒多く含む。釉は外面緑灰色、内面オリーブ色。肩部に凸線で囲い「関○」スタンプあり。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）

第 27 表　淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（５）

遺物No.	種類	器形・大分類	分類	口径（長軸）	底径（短軸）	器高（厚さ）	観察事項	地区	グリッド	層	調査時土層
124	ベトナム産青花	小碗	－	10.0	－	－	胎土：軟質。焼成：良好。色調：〔断面〕灰白色。混入物：微細な黒色粒。釉：透明釉。文様：〔内面〕圏線（オリーブ灰色）〔外面〕圏線（オリーブ灰色）、草花文（青色）	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
125	タイ産無釉陶器	平鉢	－	－	－	－	胎土：精良。焼成：良好。色調：〔断面・内外面〕灰色。混入物：褐色粒・白色粒・白い帯状のもの。	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
126	タイ産黒褐釉陶器	四耳壷	ｼｰｻﾁｬﾅﾗｲ窯	－	－	－	胎土：粗い。焼成：良好。色調：〔断面〕褐灰色。〔内面〕赤灰色。混入物：微細な白色粒と褐色粒が主、他に黒褐色粒。釉：黒色。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
127	タイ産黒褐釉陶器	四耳壷	ｼｰｻﾁｬﾅﾗｲ窯	19.2	－	－	胎土：やや精良。焼成：良好。色調：〔断面〕灰赤色。〔内面〕赤灰色。混入物：微細な白色粒と褐色粒。釉：オリーブ黒色。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
128	タイ産黒褐釉陶器	四耳壷	産地不明	－	－	－	胎土：粗い。焼成：良好。色調：〔断面〕灰色。〔内面〕にぶい赤褐色。混入物：多量の白色粒・淡赤褐色粒、やや少な目の黒褐色粒。釉：オリーブ灰色。調整：内面に横ナデ。備考：129と同一個体。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
129	タイ産黒褐釉陶器	四耳壷	産地不明	－	－	－	胎土：粗い。焼成：ムラがある。色調：〔断面〕灰色、淡赤橙色。〔内面・外面〕赤褐色。混入物：多量の白色粒・淡赤褐色粒、やや少な目の黒褐色粒。釉：オリーブ灰色。釉：淡黄色。調整：内面に回転ヘラ削り。備考：128と同一個体。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
130	タイ産土器	蓋	－	－	－	－	胎土：粗い。焼成：良好。色調：〔断面芯部〕黄灰色〔内外面・断面壁面付近〕淡赤褐色。混入物：赤褐色粒・褐色粒が主、他に白色粒。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
131	タイ産土器	蓋	－	13.8	－	－	胎土：やや粗い。焼成：良好。色調：〔断面芯部〕灰色〔内外面〕浅黄橙色～橙色。混入物：白色粒・褐色粒。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
132	産地不明陶器	蓋	円形	21.0	－	－	胎土灰色、層状に見える。白色粒等少量含む。器面にはモミガラのような圧痕？端部のヨコナデは丁寧。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
133	産地不明陶器	蓋	方形	－	－	－	胎土灰色、層状に見える。白色粒等少量含む。端部のヨコナデは丁寧。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
134	青銅製品	立物	鍬形	9.9	3.8	0.1	全体的に湾曲、猪の目も小さく不明瞭。15.3ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
135	青銅製品	立物	鍬形	16.1	6.3	0.1	706よりひと回り大きい。猪の目も大きく明瞭。茎孔はなくソケット状に差し込む。24.8g	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
136	青銅製品（鍍金）	金物	八双鋲	1.2	－	0.3	縁に刻みを入れるが、意匠は不明。真ん中に孔があるとおもわれ、鋲で固定するものか　0.7ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
137	鉄製品	小札	平小札	3.2	2.0	0.1	一番上の孔は4㎜と大きく、他は3㎜。3.5ｇ	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
138	鉄製品	小札	四目	4.5	1.9	0.2	孔は3㎜、木片が付着。6.7g	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
139	青銅製品	金物	覆輪	6.7	0.4	0.1	幅の広いほうの端部は打たれてか頭がつぶれている。3.3ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
140	鉄製品	鉄鏃	Ⅰ類	6.1	1.5	0.4	羽縁が扇状に広くなる。基部が明瞭に分かれる。9.2ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
141	青銅製品	刀装具	鍔	4.5	6.5	0.6	木瓜形。耳は玉縁状で抉れた箇所に猪の目の透かしを入れる。42.6ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
142	青銅製品	刀装具	大切羽	4.2	4.0	0.25	木瓜形。凹面は凹凸が激しい。13.8ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
143	青銅製品	刀装具	大切羽	4.55	4.0	0.25	木瓜形。凹面はやや凹凸している。19.1ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
144	青銅製品	刀装具	大切羽	4.4	4.0	0.2	木瓜形。全体的に丁寧な仕上げ。20.5ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
145	青銅製品	刀装具	大切羽	4.7	2.6	0.1	木瓜形。全体的に丁寧な仕上げ。4.3ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
146	青銅製品	刀装具	大切羽	5.1	4.9	0.1	木瓜形。全体的に湾曲している。6.8ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
147	青銅製品	刀装具	大切羽	5.1	4.9	0.1	木瓜形。全体的に湾曲している。5.8ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
148	青銅製品	刀装具	大切羽	5.2	2.2	0.1	木瓜形。端部を折り曲げる。抉れた箇所に猪の目の透かしとおもわれるが、不明瞭。6.8ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
149	青銅製品	刀装具	切羽	3.25	1.6	0.9	全体的に丁寧な仕上げ。19.2ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
150	青銅製品	刀装具	切羽	3.4	2.1	0.5	全体的に作りが粗い。12.5ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
151	青銅製品	刀装具	柄	4.9	1.5	0.1	小柄の柄。打たれて成形されたため、表面が凹凸している。7.1ｇ	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
152	青銅製品	刀装具	目釘	1.7	0.6	0.6	一方の頭は打たれたことによりつぶれている。2.7ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
153	青銅製品	刀装具？	目貫？	1.1	1.3	0.15	桐文。彫が浅く、不明瞭。目貫の可能性あり。0.9ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
154	青銅製品（鍍金）	金物？	不明	2.15	0.7	0.1	端部に孔が確認できる。三角状の頭に孔があり、鋲が残るのか？0.7ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）

第 28 表　淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（６）

遺物No.	種類	器形・大分類	分類	口径（長軸）	底径（短軸）	器高（厚さ）	観察事項	地区	グリッド	層	調査時土層
155	鉄製品	刀子	－	6.0	1.8	0.2	背が直線的で、切っ先でやや弓なりになる。細身のタイプ。6.0ｇ	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
156	鉄製品	刀子	－	8.7	3.0	0.4	茎孔はみられず、ソケット状に着装されるものとおもわれる。32.0ｇ	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
157	鉄製品	錠前	牝金具	10.7	1.9	0.1	筒状、上端が開いているが本来は溶接されていたものと考えられる。小口の一端は開口、もう一端はその下半だけ別の鉄板で溶接させ塞いだ形となっている。46.6ｇ	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
158	鉄製品	鍵類	柄部	3.5	3.1	0.1	７弁の花形の頭で、紐通し穴（0.7cm）があく。5.3ｇ	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
159	鉄製品	鍵類	解錠部	6.7	1.0	0.2	爪部の両端をたたいているが、一方を強くたたいて幅を広げるため、回して解錠するタイプか7.2ｇ	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
160	鉄製品	不明	不明	5.0	0.6	0.2～0.1	細長い板状で、頭の突起はいきていると思われる。上部よりやや下に突起が両方につくが、欠損のため不明。3.0ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
161	青銅製品	飾金具	八双金具	2.7	1.9	0.1	入八双形。猪の目は小さく不明瞭。1.5ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
162	青銅製品	飾金具	八双金具	8.7	2.2	0.1	出八双形。2孔あり、鋲などで留めるものとおもわれる。8.1ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
163	青銅製品	飾金具	鍵座金具	3.4	2.1	0.1	上部は折り曲げて丸くぎを通して、蓋に取り付ける。下部は欠損か。6.3ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
164	青銅製品	銅鏡？	素文八稜鏡？	3.4	4.4	0.2	端部は三角縁で、突起とコーナー部分があり、165と同一個体で、その形状・厚さより素文八稜と考えている。23.3ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
165	青銅製品	銅鏡？	素文八稜鏡？	3.8	6.1	0.2	端部は三角縁で、鈍角の凹みがあり、164と同一個体で、その形状・厚さより素文八稜と考えている。14.2ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
166	鉄製品	錠前？	牝金具？	2.3	0.8	0.1	四角い筒状で、細長い板状の突起がつき、欠損している。上面と側面に半円状の孔が空く。9.7ｇ	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
167	青銅製品	飾金具	不明	2.1	4.3	0.4	花頭形の頭に紐通しの穴があく。縁金具とおもわれる。11.0ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
168	鉄製品	釘	Ⅲ類	5.6	1.4	0.4	頭を輪状にする。継ぎ目は錆のため確認できない。6.4ｇ	北	F11	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
169	青銅製品	鋲	－	2.2	0.25	0.1	722同様、足が二又にわかれる。一方は欠損。1.1ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
170	青銅製品	鋲	－	2.8	0.3	0.1	足が二又に分かれ、折り曲げて固定する。一方は欠損。1.5ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
171	鉄製品	釘	Ⅰ類	3.8	0.5	0.3	角釘。頭を直角に折り曲げる。タテ方向の木目の木片が付着する。1.4ｇ	北	F11	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
172	銭貨	「」元「通」寶		－	－	0.13	孔径0.81cm。背がやや不明瞭。1.5ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
173	銭貨	開元「通」寶		外2.51	内2.12	0.15	孔径0.83cm。背がやや不明瞭。2.4ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
174	銭貨	祥「」「」「」		－	－	0.12	付着物が溶着する。0.7ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
175	銭貨	「祥」符通「寶」		－	－	0.13	孔径0.57cm。「符」の字が大きく、長い。2.1ｇ	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
176	銭貨	皇？「」「」「」		－	－	0.14	篆書の「皇」とおもわれる。0.7ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
177	銭貨	皇「」「」「」		－	－	0.15	孔径0.54cm。背がやや不明瞭。1.0ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
178	銭貨	至「和」「通？」寶		－	－	0.14	孔径0.55cm。篆書と思われる。1.5ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
179	銭貨	元「」通寶		－	－	0.15	孔径0.69cm。背の外縁は不明瞭。2.0ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色十（間層）
180	銭貨	元豊「通」「寶」		－	－	0.16	背の内郭はやや不明瞭。1.9ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
181	銭貨	政「和」「通」「寶」		－	－	0.10	サビにより不明瞭。0.7ｇ付着物が溶着する。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
182	銭貨	紹「」「」寶		－	－	0.11	背の外縁は不明瞭。字体は篆書と思われる。1.3ｇ	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
183	銭貨	洪「武？」通「寶」		外2.38	内19.5	0.15	孔径0.44cm。やや変形し、付着物が溶着する。4.4ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
184	銭貨	永楽通「寶」		－	－	0.12	孔径0.48cm。字はやや不明瞭。1.7ｇ	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
185	銭貨	永楽通寶		外2.54	内20.5	0.12	孔径0.50cm。「楽」「寶」はやや不明瞭。孔が隅丸方形となり、背に外縁・内郭が不明瞭。3.4ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
186	銭貨	元「」「通」「寶」		－	－	0.19	孔径0.53cm。サビにより不明瞭。2.6ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
187	銭貨	「」「」通「寶」		－	－	0.08	字・背ともに不明瞭。0.4ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
188	銭貨	「」「」「」寶		－	－	0.13	面の外縁にやや高さがあり、明瞭。1.0ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）

第 29 表　淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（７）

遺物No.	種類	器形・大分類	分類	口径（長軸）	底径（短軸）	器高（厚さ）	観察事項	地区	グリッド	層	調査時土層
189	銭貨	「」「」「」寶		－	－	0.16	孔径0.53cm。「寶」の下に穿孔か？。1.2ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
190	銭貨	「」「」「」寶		－	－	0.13	孔径0.52cm。面の外縁はやや高さがある。0.7ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
191	銭貨	「」「」「」寶		－	－	0.16	孔径0.52cm。「寶」の上に穿孔か？0.9ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
192	銭貨	「」「」「」寶		－	－	0.12	背がやや不明瞭。0.8ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
193	銭貨	無文銭		2.38	－	0.10	孔径0.61cm。面・背共にケズル。2.4ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
194	銭貨	元祐通「寶」		外2.51	内1.93	0.14	孔径0.85cm。篆書と思われるが、字が不明瞭。2.1ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
195	銭貨	「」「」「」寶		－	－	0.14	孔径0.81cm。「寶」以外、不明瞭。1.8ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
196	銭貨	元「」「」寶		外2.27	内18.8	0.10	孔径0.77cm。背に外縁・内郭がなく、字も不鮮明。1.6ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
197	銭貨	無文銭		2.44	－	0.05	孔径0.85cm。外縁の端部が立ち上がる。やや変形する。1.1ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
198	銭貨	無文銭		－	－	0.18	孔径0.83cm。やや厚い。端部がナナメになる。2.7ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
199	銭貨	無文銭		1.33	－	0.08	孔径0.73cm。孔形が隅丸方形。0.5ｇ	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
200	銭貨	無文銭		2.11	－	0.08(1枚) 0.18(2枚)	孔径0.59cm。1枚溶着。2枚とも無文銭と思われる。1.2g(2枚)	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
201	銭貨	無文銭		2.23	－	0.12	孔径0.75cm。孔形が隅丸方形。0.8ｇ	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
202	銭貨	無文銭		2.52	－	0.18	孔径0.62cm。孔形が不整形。3.0g	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
203	銭貨	無文銭		2.03	－	0.11	孔径0.66cm。孔形が隅丸方形。1.5ｇ	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
204	銭貨	無文銭		1.98	－	0.09	孔径0.72cm。孔形がやや円形。0.9ｇ	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
205	銭貨	判読不明		－	－	0.17	字・背ともに不明瞭。0.8ｇ	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
206	骨製品	板状	－	3.6+	0.9	0.3	重量0.8ｇ。一端の角を丸める。1面のみ整形が雑。	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
207	中国産青磁	碗	V-1	14.5	－	－	釉は厚く良好。外面は幅８㎜の細い片彫り連弁文。	北	F10	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
208	中国産青磁	碗	V-1	12.8	－	－	口縁。外面片彫りの無鎬連弁文。	北	F11北	Ⅳ-3+1	黒褐色土（下層）+黄褐色土
209	中国産青磁	碗	Ⅳ-0	14.4	5.0	5.8	外底無釉だが所々掛り、中央やや突出、畳付水平。釉は薄く不透明。胎土灰色。見込み不鮮明な型押の草花文。外面ロクロ目顕著。残存６割。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
210	中国産青磁	碗	Ⅳ´-0	16.7	－	－	胎土は灰色。外反が弱く、釉・胎土は玉縁口縁に近い。	北	F11南	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
211	中国産青磁	碗	V-3	15.8	－	－	釉は厚くガラス質。外面は不鮮明なラマ式連弁文。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
212	中国産青磁	碗	Ⅳ´-0	－	－	－	釉は薄く、胎土灰色。端部が丸い玉縁口縁。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
213	中国産青磁	碗	Ⅳ´-0	16.2	－	－	釉は薄く、胎土灰色で黒色粒含む。端部が丸い玉縁口縁。	北	F11	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
214	中国産青磁	碗	Ⅳ´-0	14.6	－	－	釉は薄く、胎土灰色。端部が丸い玉縁口縁。	北	F11	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
215	中国産青磁	碗	Ⅳ´-0	－	－	－	釉は薄く不透明。胎土灰色。外面が肥厚する玉縁口縁。	北	F11南	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
216	中国産青磁	碗	Ⅳ´-0	－	－	－	釉は薄く、胎土灰色。端部が丸い玉縁口縁。	北	F11南	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
217	中国産青磁	碗	Ⅳ´-0	－	－	－	釉は薄く不透明。端部が丸い玉縁口縁。	北	F11南	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
218	中国産青磁	碗	Ⅳ´-0	－	5.5	－	外底無釉、畳付やや外傾。釉は薄い。	北	F11南	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
219	中国産青磁	碗	Ⅳ´-0	－	4.6	－	おそらく外底無釉、畳付外傾。見込み釉はぎ。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
220	中国産青磁	碗	Ⅳ-0	－	5.6	－	外底無釉、一部高台外面も。畳付水平。見込み小ぶりの型押し花文。	北	F10	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
221	中国産青磁	碗	Ⅳ´-0	－	5.0	－	釉は気泡多い。外底無釉、中央やや突出、畳付外傾、重ね焼き痕あり。見込み釉はぎ。共に露胎部は赤褐色。	北	F10	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
222	中国産青磁	皿	Ⅳ-0	－	－	－	釉は薄く、胎土灰色。器壁薄い。見込みは凸状圏線。	北	F10	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）

第30表　淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（８）

遺物No.	種類	器形・大分類	分類	口径（長軸）	底径（短軸）	器高（厚さ）	観察事項	地区	グリッド	層	調査時土層
223	中国産青磁	皿	Ⅳ´	－	7.2	－	外底は釉かかる。見込み釉はぎ。	北	F10	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
224	中国産青磁	盤	A	－	－	－	胎土は橙色。内面１cm幅の連弁状の凹み。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
225	中国産青磁	盤	A	－	－	－	胎土は灰白色。内面は幅３mmの回線が1.5cm間隔で施す。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
226	中国産青磁	盤	A	－	－	－	胎土灰色。内面１cm幅の連弁状の凹み。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
227	中国産青磁	盤	A	25.1	－	－	胎土灰色。内面３mm幅の連弁状の櫛描文。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
228	中国産青磁	盤	碁笥底	－	－	－	釉は薄く鈍い。内面５mm幅の連弁状の櫛描文。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
229	中国産青磁	盤	E	－	－	－	釉は貫入多い。内面５mm幅の連弁状の櫛描文。	北	F10	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
230	中国産青磁	酒海壺（蓋）	－	－	－	－	釉は２mmと厚い。外面に文様がある酒海壺の蓋。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
231	中国産白磁	碗	福建Ｃ３	16.8	－	－	灰色。硬質。口縁端部やや太め。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
232	中国産白磁	碗	福建Ｃ３	17.2	－	－	灰色。外面下半露胎。硬質。口縁端部細め。	北	F11	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
233	中国産黒釉陶器	天目	－	－	3.4	－	胎土暗灰色。釉は黒色と褐色。外底中央の凹みわずか。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
234	中国産褐釉陶器	壷	5	14.2	－	－	胎土灰黄色。白色粒少量含む。釉は暗オリーブ色。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
235	中国産褐釉陶器	壷	－	－	－	－	胎土赤褐色。白色粒少量含む。釉はオリーブ褐色。	北	F11	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
236	土製品	玉	－	1.45	1.3	1.2	玉。胎土：泥質。混入物：少量。色調：褐色。重量2.3g。側面から穿孔（6×5mm）。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
237	土製品	玉	－	1.3	1.2	0.95	玉。胎土：泥質。混入物：少量。色調：褐色。重量：1.4g。外面に成形時の痕跡。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
238	鉄製品	釘	Ⅱ類	10.1	1.3	0.5	角釘。頭と胴部の区別がない。胴部にヨコ方向の木目の木片が付着する。21.5ｇ	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
239	鉄製品	釘	Ⅰ類	4.7	0.5	0.4	角釘。頭が広がり、やや直角に折れ曲がる。中ほどにヨコ方向の木目の木片が付着。4.3ｇ	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
240	青銅製品	鋲	－	1.6	0.4	0.3	いびつな頭の丸くぎ。足が二又に分かれるとおもわれるが、二つとも欠損。1.8g	北	F11	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
241	骨製品	柄状？	－	7.2	1.75	1.2	重量11.7ｇ。一端を切断し、その反対側を細くする。粗めの研磨。横位の切り傷多い。	北	F10	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
242	骨製品	突起状	－	19.5	－	－	重量0.89g。全面研磨。	北	F11南	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
243	銭貨	洪武通寶(一銭)		外2.12	内16.9	0.18	孔径0.62cm。背の「一銭」はやや不明瞭。3.4ｇ	北	F11	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
244	銭貨	洪武通寶(二銭)		外3.04	内24.0	0.20	孔径0.89cm。折二銭。面・背共に字は不明瞭。7.8ｇ	北	F10	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
245	銭貨	洪武通寶(三銭)		外3.34	内27.4	0.28	孔径1.07cm。当三銭。面は高彫で明瞭、背はやや低く不明瞭。12.0ｇ	北	F11南	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
246	銭貨	「」「」元寶？「」元「」寶？		－	－	0.11	孔径0.58cm。背がやや不明瞭。1.7ｇ	北	F11南	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
247	銭貨	「」「」元「」		－	－	0.13	字はやや不明瞭。0.6ｇ	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
248	銭貨	元「」「」「」		－	－	0.12	篆書の「元」と思われる。0.7ｇ	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
249	銭貨	「」「」通寶		外2.97	内24.9	0.17	孔径1.04cm。銭文不鮮明。6.0ｇ	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
250	銭貨	無文銭		2.02	－	0.08	孔径0.60cm。孔形が中心よりややずれてい。0.9ｇ	北	F11南	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
251	銭貨	無文銭		2.35	－	0.11	孔径0.69cm。孔形が隅丸方形。大きく変形し、付着物が溶着する。2.0ｇ	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
252	中国産青磁	碗	Ⅳ-0	15.8	－	－	釉は薄く不透明。胎土は灰色、黒色粒少し含む。	北	E10	Ⅳ-3'	暗褐色土
253	中国産青磁	碗	Ⅳ-0	15.2	－	－	釉は薄い。胎土は灰色。口縁外面に不鮮明な圏線２条。	北	E10	Ⅳ-3'	暗褐色土
254	中国産青磁	碗	磁壮窯	15.0	－	－	釉は暗黄緑色で薄く外面上半より内面に掛る。胎土は灰色で黒色粒を多く含む。いわゆる泉州窯系磁器。	北	E10	Ⅳ-3'	黒褐色土（下層2）
255	中国産青磁	碗	V-0	16.4	－	－	釉は厚くガラス質、良好。外反口縁。	北	F10	Ⅳ-3'	黒褐色土（下層2）
256	中国産青磁	碗	Ⅳ-0	－	－	－	釉は薄く不透明。胎土は灰色。	北	E10	Ⅳ-3'	黒褐色土（下層2）
257	中国産青磁	碗	Ⅳ´-0	－	6.4	－	外底無釉、畳付水平。見込み釉はぎ、重ね焼き痕あり。共に露胎部赤褐色。	北	F11南	Ⅳ-3'	暗褐色土

第 31 表　淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（９）

遺物No.	種類	器形・大分類	分類	口径（長軸）	底径（短軸）	器高（厚さ）	観察事項	地区	グリッド	層	調査時土層
258	中国産青磁	碗	Ⅳ-０	－	5.8	－	外底無釉、中央やや突出、畳付水平。見込み大きめの型押による花文。	北	Ｆ11南	Ⅳ-３'	暗褐色土
259	中国産青磁	皿	Ⅳ-１	13.3	－	－	釉は青緑色、厚くガラス質。外面線彫り連弁文。	北	Ｆ11北	Ⅳ-３'	暗褐色土
260	中国産青磁	皿	Ⅳ-０	12.8	－	－	釉は薄く、胎土灰色。外反口縁。	北	Ｅ10	Ⅳ-３'	暗褐色土
261	中国産青磁	皿	Ⅴ-０	11.6	5.4	3.5	おそらく外底蛇の目。釉は厚く、ガラス質で良好。	北	Ｆ11南	Ⅳ-３'	暗褐色土
262	中国産青磁	盤	高台	－	12.0	－	おそらく外底蛇の目。釉はガラス質で光沢有。内面幅１cm程度の連弁状の櫛描文。	北	Ｆ10	Ⅳ-３'	暗褐色土
263	中国産青磁	袋物	－	－	－	－	釉厚２㎜で良好。外面算木状の文様。	北	Ｆ11北	Ⅳ-３'+３	暗褐色土+黒褐色土（下層）
264	中国産白磁	碗	福建Ｃ３	－	－	－	灰白色。硬質。光沢強い。口縁の外反が強い。	北	Ｆ10	Ⅳ-３'	黒褐色土（下層2）
265	中国産白磁	碗	福建Ｃ３	－	－	－	灰白色。外面下半露胎。硬質。見込み細線の草花文か。	北	Ｆ10	Ⅳ-３'	黒褐色土（下層2）
266	中国産褐釉陶器	壷	－	－	－	－	胎土赤褐色。白色粒少量含む。釉オリーブ褐色。横耳。	北	Ｆ11南	Ⅳ-３'	暗褐色土
267	中国産黒釉陶器	天目	－	－	－	－	胎土暗灰色。釉は黒色と褐色。口縁端部褐色（鉄錆？）。	北	Ｆ10	Ⅳ-３'	黒褐色土（下層2）
268	中国産黒釉陶器	天目	－	－	－	－	胎土浅黄色。釉は褐色、外面下半露胎。	北	Ｆ11南	Ⅳ-３'	暗褐色土
269	タイ産黒釉陶器	小壷か小瓶	シーサチャナライ窯かスワンカローク窯	－	－	－	胎土：精良。焼成：良好。色調：〔断面・内面〕灰褐色。混入物：白色粒・黒色粒・微細な褐色粒。釉：黒色。釉：淡黄色。調整：内面にロクロ目。備考：外面に明瞭な稜をもつ。	北	Ｆ10	Ⅳ-３'	暗褐色土
270	グスク土器	壺	ⅡＡ	－	－	－	頸部片。胎土：泥質②。混入物：少量。色調：[外面]鈍橙色[内面]橙色。調整：[外面]丁寧な横ナデ[内面]横ナデ・ミガキ。	北	Ｅ10	Ⅳ-３'	暗褐色土
271	銭貨	「開？」元通寶		外2.41	内2.14	0.13	孔径0.86cm。字・背の外縁が不明瞭。やや変形する。2.9ｇ	北	Ｅ10	Ⅳ-３'	暗褐色土
272	銭貨	「」和「通」寶		－	－	0.14	サビのため字は不明瞭。付着物が溶着する。1.7ｇ	北	Ｆ10	Ⅳ-３'	暗褐色土
273	銭貨	無文銭		1.90	－	0.13	孔径0.65cm。孔形が隅丸方形。0.7ｇ	北	Ｆ11南	Ⅳ-３'	暗褐色土
274	銭貨	洪武通寶(一銭)		外20.6	内1.65	0.19	孔径0.68cm。「通」の右上がマではなく口のように見える。3.5ｇ	北	Ｆ10	Ⅳ-３'	黒褐色土（下層2）
275	鉄製品	刀子	－	3.9	0.9	0.2	小刀のタイプか。2.4ｇ	北	Ｆ10	Ⅳ-３'	暗褐色土
276	骨製品	笄？	－	推定15.5	1.35	0.2	4.51ｇ。褐色。非常に丁寧な全面研磨。わずかに弓なり。横・斜位の擦痕。骨密度が高い。	北	Ｆ10	Ⅳ-３'	暗褐色土
277	中国産青磁	碗	Ⅱ	16.5	－	－	釉はガラス質。外面鎬連弁文。	北	Ｅ10	Ⅳ-４	暗褐色土（下層3）
278	中国産青磁	碗	Ⅱ	15.9	－	－	釉はガラス質で比較的良好。外面鎬連弁文。	北	Ｆ11北	Ⅳ-４	暗褐色土（下層）
279	中国産青磁	碗	Ⅳ-０	15.8	－	－	釉は薄くガラス質でかなり光沢がある。外面のロクロ目が顕著。	北	Ｆ11北	Ⅳ-４	暗褐色土（下層）
280	中国産青磁	碗	Ⅳ-０	－	－	－	釉はガラス質で貫入多い。外面ロクロ目顕著。	北	Ｆ11	Ⅳ-４+３'	暗褐色土（下層）+暗褐色礫混土
281	中国産青磁	碗	Ⅳ-０	－	－	－	釉は薄くガラス質、口縁端部はやや厚い。外面のロクロ目が顕著。	北	Ｆ11北	Ⅳ-４	暗褐色土（下層）
282	中国産青磁	碗	Ⅳ-０	－	6.3	－	外底無釉で畳付水平。釉は薄い。見込みは型押しの花文で「吉」の刻印あり。	北	Ｆ11北	Ⅳ-４	暗褐色土（下層2）
283	中国産青磁	皿	Ⅳ'-０	12.4	－	－	釉はガラス質、良好。外面はロクロ目顕著。	北	Ｆ11南	Ⅳ-４	黄褐色ブロック混じり暗褐色土
284	中国産青磁	皿	Ⅳ'-０	12.1	－	－	釉は厚くガラス質、良好。	北	Ｆ11北	Ⅳ-４	暗褐色土（下層）
285	中国産青磁	皿	Ⅳ-０	7.4	－	－	釉は薄くガラス質。やや深めの杯形と思われる。	北	Ｅ10	Ⅳ-４	暗褐色土（下層3）
286	中国産青磁	盤	Ｅ	27.4	16	5.15	口縁外面は段状に肥厚。おそらく外底蛇の目。内面５㎜幅の連弁状の櫛描文。	北	Ｆ11北+Ｆ11	Ⅳ-４+３'	暗褐色土（下層）+暗褐色礫混土
287	中国産青磁	盤	Ａ	24.2	－	－	釉は鈍く不透明、胎土は褐色でやや軟質。内面は幅２㎜の連弁状の櫛描文、先端不揃い。	北	Ｆ11北	Ⅳ-４	暗褐色土（下層）
288	中国産青磁	香炉	Ⅳ	12.8	－	－	釉は青緑色で厚く、ガラス質で光沢あり。胎土共に精良。	北	Ｆ11北	Ⅳ-４	暗褐色土（下層）
289	中国産白磁	碗	福建Ｃ３	19.3	－	－	黄橙色。外面下半露胎。軟質。貫入多い。口縁の外反短い。	北	Ｆ11北	Ⅳ-４	暗褐色土（下層）
290	中国産白磁	碗	福建Ｃ３	－	－	－	緑白色。硬質。光沢強い。口縁の外反短い。	北	Ｆ11北	Ⅳ-４	暗褐色土（下層）

第 32 表　淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（10）

遺物No.	種類	器形・大分類	分類	口径（長軸）	底径（短軸）	器高（厚さ）	観察事項	地区	グリッド	層	調査時土層
291	中国産白磁	碗	福建Ｃ３	16.6	－	－	青白色。光沢強い。硬質。外面の凹線明瞭。	北	Ｅ10	Ⅳ－4	暗褐色土（下層3）
292	中国産白磁	碗	福建Ｃ３	－	－	－	青白色。外面下半露胎。硬質。内面圏線太い。	北	Ｅ10	Ⅳ－4	暗褐色土（下層3）
293	中国産白磁	碗	福建Ｃ３	－	－	－	灰白色。外面下半露胎。硬質。見込み圏線内細線の草花文。	北	Ｆ11北	Ⅳ－4	暗褐色土（下層）
294	中国産白磁	碗	福建Ｃ３	17.3	－	－	黄白色。外面下半露胎。軟質。貫入多い。口縁の外反短い。見込み圏線やや太い。	北	Ｆ11北	Ⅳ－4	暗褐色土（下層）
295	中国産白磁	碗	福建Ｃ２	－	5.8	－	灰白色。硬質。外面下半露胎。かんな削り痕明瞭。輪高台、畳付及び外際水平。外底ヘラケズリ明瞭。	北	Ｆ11北	Ⅳ－4	暗褐色土（下層2）
296	中国産白磁	碗	景徳鎮Ｂ	－	－	－	乳白色。硬質。光沢強い。内面圏線の下に蓮弁状の凹み。	北	Ｅ10	Ⅳ－4	暗褐色土（下層3）
297	中国産黒釉陶器	天目	－	－	－	－	胎土灰色。釉は黒色。	北	Ｆ10	Ⅳ－4	暗褐色土（下層3）
298	タイ産黒褐釉陶器	四耳壷	産地不明	－	－	－	胎土：精良。焼成：良好。色調：〔断面〕にぶい赤褐色・灰白色〔内底面〕灰褐色。〔外底面〕黒褐色。混入物：暗赤褐色・白色粒。釉：〔内底面〕泥釉か自然釉。極暗赤褐色。調整：外底面に回転ナデ。	北	Ｅ10	Ⅳ－4	暗褐色土（下層3）
299	貝塚後期土器	甕	Ⅰ	－	－	－	甕。胎土：泥質。混入物：少量。色調：[外面]鈍褐色[内面]鈍橙色。調整：横ナデで指頭痕残存。	北	Ｆ11北	Ⅳ－4	暗褐色土（下層2）
300	グスク土器	壷	ⅡＡ	－	－	－	頸部片。胎土：泥質②。混入物：多量。色調：[外面]鈍黄色[内面]鈍橙色。調整：工具による横・斜めナデ（幅0.8ｃｍ）[外面]粗く指頭痕残存[内面]丁寧。外面に煤。	北	Ｆ11南	Ⅳ－4	黄褐色ブロック混じり暗褐色土
301	グスク土器	壷	ⅡＡ	15.0	－	－	長頸壷。胎土：泥質②。混入物：多量。色調：[外面]橙色[内面]鈍黄橙色。調整：[外面]工具による縦・横ケズリ（幅1.4cm）後、ナデ消し[内面]上半は丁寧は横ナデ、下半は粗い横ナデで指頭痕残存。	北	Ｆ11北	Ⅳ－4	暗褐色土（下層2）
302	グスク土器	壷	ⅡＢ	－	－	－	頸部片。胎土：泥質。混入物：少量。色調：[外面]鈍橙色[内面]鈍黄橙色。調整：内外面横ナデ。	北	Ｆ11	Ⅳ－4	暗褐色土（下層）
303	グスク土器	壷	ⅡＢ	胴径25.7	－	－	胴部片。胎土：泥質。混入物：少量。色調：[外面]鈍橙色[内面]鈍黄橙色。調整：[外面]上半は工具による横ナデ、下半は横ケズリ（幅0.8～1.2cm）[内面]上半は横ナデ、下半は工具による横ケズリ（幅0.8cm）。外面は一部変色。	北	Ｆ11北	Ⅳ－4	暗褐色土（下層2）
304	グスク土器	壷	ⅡＢ	－	－	－	胴部片。胎土：泥質。混入物：少量。色調：[外面]鈍橙色[内面]鈍黄橙色。調整：[外面]工具による縦・斜めナデ[内面]工具による横ケズリ後に縦ケズリ（幅1.5cm）。外面一部変色。内面に煤。	北	Ｆ11北	Ⅳ－4	暗褐色土（下層2）
305	グスク土器	壷	ⅡＢ	－	－	－	底部片。胎土：泥質。混入物：少量。色調：[外面]灰黄色[内面]鈍黄橙色。調整：内外面ともに丁寧なナデ。外面煤付着。	北	Ｆ11	Ⅳ－4	暗褐色土（下層）
306	グスク土器	壷	ⅡＡ	－	－	－	底部片。胎土：泥質②。混入物：多量。色調：[外面]橙色[内面]鈍橙色。調整：[外面]縦ナデ[内面・底面]ナデ。煤付着。	北	Ｅ10	Ⅳ－4	暗褐色土（下層3）
307	土製品	玉	－	1.2	1.1	1.25	玉。胎土：泥質。混入物：少量。色調：褐色。重量1.6g。両面から穿孔（2×3mm）。煤付着。	北	Ｆ10	Ⅳ－4	暗褐色土（下層3）
308	鉄製品	釘	Ⅰ類	5.3	0.8	0.3	角釘。頭が広がり、丸く折れ曲がる。4.8ｇ	北	Ｆ11北	Ⅳ－4	暗褐色土（下層）
309	石器	石斧	－	5.3+	5.2+	－	重量50ｇ。石斧片。研磨は側面が丁寧。砂岩。	北	Ｆ11北	Ⅳ－4	暗褐色土（下層）
310	中国産青磁	碗	Ⅱ	－	－	－	釉は淡くガラス質。外面鎬連弁文。	北	Ｅ10	Ⅳ－5	褐色粘質土
311	中国産褐釉陶器	壷	－	－	－	－	胎土灰色。黒色・白色粒多く含む。釉黒色。磁灶窯の胎土と思われる。	北	Ｅ10	Ⅳ－5	褐色粘質土
312	グスク土器	壷	ⅡＡ	13.7	－	－	長頸壷。胎土：泥質②。混入物：多量。色調：[外面]鈍黄色[内面]鈍黄橙色。調整：[外面]横ケズリ[内面]工具による横ナデ後、ナデ消し。	北	Ｆ10	Ⅳ－5	褐色粘質土
313	グスク土器	不明	ⅡＣ	－	－	－	胴部片。胎土：泥質。混入物：少量。色調：[外面]橙色[内面]鈍黄橙色。調整：[外面]工具によるナデ後、ナデ消し？[内面]工具によるナデ。外面に朱塗り。	北	Ｆ10	Ⅳ－5	褐色粘質土
314	グスク土器	壷	ⅡＡ	－	－	－	頸部片。胎土：泥質③。混入物：少量。色調：[内外面]褐灰色[断面]鈍赤褐色。調整：内外面ともに丁寧なナデ・ミガキ。煤付着。	北	Ｆ10	Ⅳ－5	褐色粘質土
315	グスク土器	壷	ⅡＡ	－	16.8	－	底部片。胎土：泥質③。混入物：少量。色調：[外面]暗灰黄色[内面]鈍黄橙色。調整：[外面]工具による縦ナデ[外底]工具ナデ[内面・内底]丁寧なナデ。煤付着。	北	Ｆ10	Ⅳ－5	褐色粘質土
316	中国産青磁	碗	Ⅴ－２・３	－	6.1	－	外底蛇の目。釉は厚く、胎土共に精良。見込みは型押の格子状の花芯文。	南	Ｉ９	Ⅰ	石積裏込

第 33 表　淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（11）

遺物No.	種類	器形・大分類	分類	口径（長軸）	底径（短軸）	器高（厚さ）	観察事項	地区	グリッド	層	調査時土層
317	中国産青磁	碗	V	－	5.8	－	外底おそらく蛇の目。胎土灰白色。見込みは小ぶりの型押文。	南	G11	I	石積裏込
318	中国産青磁	碗	VI-1	－	4.6	－	高台内一部まで釉掛る。釉は薄く不透明。外面は線刻細連弁文、見込みは型押文。	南	H11	I	撹乱
319	中国産青磁	碗	VI	－	4.5	－	釉は高台外面途中まで掛る。釉は風化のため色調を失っている。	南	H11	I	撹乱
320	中国産青磁	盤	A	26.7	－	－	釉は厚く、不透明。内面は幅５㎜の連弁状の凹線。	南	I 9	I	石積裏込
321	中国産白磁	小碗	福建D	8.8	－	－	乳白色。貫入多い。軟質。風化のためか光沢なし。	南	H11	I	石積裏込
322	中国産白磁	皿	景徳鎮E	－	6.8	－	黄白色。畳付釉はぎ。硬質。端反皿。	南	H11	I	撹乱
323	中国産青花	碗	明（I-2）	13.4	－	－	外面雷文、雲文。内面圏船２条。	南	I 9	I	石積裏込
324	中国産青花	小碗	明（I？）	－	－	－	外面唐草文？、内面雷文。口折。	南	I 11	I	撹乱
325	中国産青花	碗	明（漳州）	－	－	－	釉灰白色、呉須発色鈍い。外面文様不明。	南	H11	I	撹乱
326	中国産青花	碗	明（II？）	－	－	－	釉青白色、呉須発色やや不良。外面やや表現が甘い唐草文。端反口縁。	南	G11	I	撹乱
327	中国産青花	碗	明（漳州）	－	－	－	釉灰色。口縁端部やや禿げ重ね焼き痕。外面簡略化した唐草文。	南	G11	I	撹乱
328	中国産青花	皿	明（IIIE）	－	－	－	器面が荒れ被熱か？内面四方樽文。内湾皿。	南	H11	I	撹乱
329	中国産青花	碗	明（III）	－	－	－	見込み線描き、ダミる。芙蓉手。底部。	南	I 11	I	撹乱
330	中国産青花	碗	明（I-2）	－	4.8	－	外面草木文？、見込み圏線２条、梅枝文。内底やや凹む。	南	I 9	I	石積裏込
331	中国産青花	皿	清（徳化）	14	－	－	釉青白色、光沢有。内面仙芝祝寿文？	南	H10	I	撹乱
332	中国産褐釉陶器	壷	－	20.0	－	－	胎土橙色。白色・赤色粒含む。釉は褐色。口縁端部がわずかに肥厚し、上方に向かって窄まる。	南	H10	I	撹乱
333	ベトナム産青花	瓶	－	－	－	－	胎土：軟質。焼成：良好。色調：〔断面・内面〕灰白色。釉：〔外面〕半透明釉〔内面〕薄い透明釉が一部かかる。文様：〔外面〕波濤文風の同心半円。青色。	南	H10	I	撹乱
334	タイ産黒褐釉陶器	四耳壷	シーサチャナライ窯	20.6	－	－	胎土：やや粗い。焼成：ムラがある。色調：〔断面〕赤灰色・淡赤橙色。混入物：白色粒・褐色粒が主、他に黒褐色粒・白い帯状のもの。釉：オリーブ黒色。	南	H11	I	撹乱
335	産地不明陶器	蓋	円形	19.0	－	1.3	胎土橙色、灰白色がマーブル状。赤色粒少量含む。	南	G9	I	石積裏込
336	沖縄産施釉陶器	鍋	A	15.2	－	－	外面及び内面胴部に鉄釉を施釉。内面口縁部（蓋受部）に溶着痕あり。胎土は鈍黄橙色。	南	G10	I	石積裏込
337	沖縄産無釉陶器	碗	A	12.6	4.6	6.0	焼成良好で器面は灰褐色。胎土は明褐色で白土が層状に混ざり、白色粒や赤褐色粒を含む。高台は貼付後に削り出し。	南	H11	I	撹乱
338	沖縄産無釉陶器	碗	B	－	－	－	器面は明褐色。胎土は明褐色で白色粒や赤褐色粒をわずかに含む。高台は貼付後に削り出し。	南	H11	I	石積裏込
339	石製品	碁石	－	2.1	2.1	0.4	2.7ｇ。白色でわずかに褐色。平坦面とわずかに一方に傾く面。頁岩？	南	H10	I	撹乱
340	骨製品	箸状	－	3.9	0.3	－	0.4ｇ。先端部錐状。全面研磨。	南	H10	I	石積裏込
341	骨製品	ソケット状	－	2.2	1.1	－	1.4ｇ。一部欠損。全面研磨。穿孔部長1.4、径0.4cm。底面きり傷あり。鹿骨製。	南	I 9	I	石積裏込
342	骨製品	ボタン	－	1.2	1.2	0.3	0.3ｇ。全面研磨。５つ孔。	南	H10	I	石積裏込
343	銭貨	開禧通寶		外3.00	内2.39	0.22	孔径1.01cm。折二銭。背元？孔がきれいに抜かれていない。6.8ｇ	南	H10	I	石積裏込
344	銭貨	「洪」武「通」「寶」		－	－	0.18	孔径0.44cm。外縁は高さもあり、明瞭。背はやや不明瞭。1.1ｇ	南	H11	I	撹乱
345	銭貨	「寛」永「通」「寶」		－	－	0.14	背がやや不明瞭。0.7ｇ	南	G9	I	石積裏込
346	銭貨	「」寧「」「」		－	－	0.12	篆書の「寧」と思われる。0.8ｇ	南	H11	I	撹乱
347	銭貨	輪銭		0.78	－	0.07	孔径0.51cm。ややいびつな円形。0.07g	南	G11	I	石積裏込
348	中国産青磁	碗	IV´-0	15.4	5.6	6.7	外底露胎、畳付外傾。釉は剥離が見られ、胎土は白色、軟質。大きめの玉縁口縁碗。	南	I 9	II	暗褐色礫混土
349	中国産青磁	碗	V-0	16.2	－	－	釉は厚く、胎土共に精良。外反口縁。	南	H9	II	暗褐色礫混土
350	中国産青磁	碗	VI-0	13.2	－	－	胎土は灰白でやや軟質。内外面は無文。	南	G11	II+I	乳混褐色土+裏込

第 34 表　淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（12）

遺物No.	種類	器形・大分類	分類	口径（長軸）	底径（短軸）	器高（厚さ）	観察事項	地区	グリッド	層	調査時土層
351	中国産青磁	碗	Ⅵ-0	12.0	－	－	釉は薄く、鈍い。貫入も多い。直口口縁。	南	I 10	Ⅱ	瓦混暗褐色土
352	中国産青磁	碗	Ⅵ-0	12.1	－	－	釉は薄く、胎土は灰色、白色粒含む。	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
353	中国産青磁	碗	Ⅵ-1	13.8	－	－	釉薄く、ガラス質、光沢あり。胎土は灰白色、軟質。外面は線刻細連弁文で、花弁と弁先が一致しない。	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
354	中国産青磁	碗	Ⅴ-2	－	－	－	胎土は灰白色、軟質。外面は線刻雷文。	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
355	中国産青磁	盤	C？	－	－	－	釉は薄く、ガラス質。外面幅２cmの浮き彫りの連弁文。内面、劃花文風の草花文。	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
356	中国産青磁	皿	Ⅵ-0	－	12.2	－	湯薄く、胎土は灰白色、軟質。稜花皿。	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
357	中国産青磁	皿	Ⅵ-0	12.0	－	－	湯薄く、胎土は灰白色、軟質。稜花皿。	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
358	中国産青磁	皿	Ⅵ-0	－	－	－	釉は薄く、貫入多い。胎土は灰白色、軟質。稜花皿。	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
359	中国産青磁	皿	Ⅵ-0	8.5	5.3	2.7	釉は畳付まで掛る。釉は厚く、不透明。直口皿。	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
360	中国産青磁	皿	Ⅳ´-0	－	7.0	－	外底無釉、高台の抉りが弱く、碁笥底状となる。表面が荒れており、被熱の可能性。腰折皿。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
361	中国産青磁	皿	Ⅳ´	－	6.0	－	外底は部分的に釉掛る。見込み釉はぎ。釉薄い。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
362	中国産青磁	鉢	－	－	－	－	釉は薄く、青白色。内面口縁おそらく唐草文。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
363	中国産青磁	盤	B	24.2	－	－	胎土は灰白色、軟質。内面は幅３mmの連弁状の櫛描き文。	南	H11	Ⅱ	瓦混礫層
364	中国産青磁	盤	高台	－	8.6	－	外底にも部分的に釉掛る。見込みは稜が渦巻状に見える。	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
365	中国産白磁	碗	景徳鎮	－	－	－	青白色。口縁端部尖る。大きく外反。	南	I 10	Ⅱ	瓦混暗褐色土
366	中国産白磁	皿	景徳鎮E	－	－	－	乳白色。硬質。口縁端部大きく外反。端反碗。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
367	中国産白磁	碗	景徳鎮	－	－	－	乳白色。外面一部路胎。硬質。線彫りによりうろこ状の表現。	南	H10	Ⅱ	暗褐色礫混土
368	中国産白磁	皿	景徳鎮E	20.0	－	－	乳白色。硬質。口縁部外反。端反皿。	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
369	中国産白磁	皿	徳化	－	5.8	－	乳白色。畳付釉はぎ。ガラス質。硬質。	南	H11	Ⅱ	瓦混暗褐色土
370	中国産白磁	小碗	徳化	8.1	－	－	乳白色。ガラス質。硬質。口縁端反。	南	H11	Ⅱ	瓦混暗褐色土
371	中国産白磁	小碗	徳化	－	3.2	－	乳白色。外底わずかに露胎。ガラス質。硬質。	南	H11	Ⅱ	瓦混暗褐色土
372	中国産白磁	瓶	景徳鎮？	2.8	－	－	青白色。硬質。小型と思われる。	南	H9	Ⅱ	暗褐色礫混土
373	中国産白磁	袋物	徳化	－	－	－	乳白色。ガラス質。硬質。外面ざらつく。肩部が直角に張る。	南	H10	Ⅱ	瓦混暗褐色土
374	中国産白磁	壷	福建？	－	5.7	－	緑白色で透明釉。外底露胎、褐色。肩部が屈曲する器形。内面ロクロ目顕著。	南	H9	Ⅱ	暗褐色礫混土
375	中国産青花	盤	元様式	－	－	－	盤の口縁の屈曲部。内面胴部側が呉須で塗られているので、白抜きによる牡丹唐草文などの可能性がある。表面が荒れており、被熱の可能性。	南	I 10	Ⅱ	瓦混暗褐色土
376	中国産青花	碗	明（I-2）	－	－	－	外面雷文、牡丹唐草文。内面四方襷文。	南	I 9	Ⅱ	暗褐色礫混土
377	中国産青花	碗	明（I-2）	－	4.6	－	胎土灰白色。高台内面途中まで釉はぎ。外面草花文？見込み梅枝文。	南	H10	Ⅱ	暗褐色礫混土
378	中国産青花	碗	明（Ⅱ）	－	6.0	－	外面下端蓮弁文、見込み法螺貝文。高台内傾。	南	G10	Ⅱ	暗褐色礫混土
379	中国産青花	碗	明（ⅡD）	－	－	－	呉須は不鮮明。外面は上位横帯、下位が渦紋、簡略化したアラベスク文か。	南	I 10	Ⅱ	瓦混褐色土
380	中国産青花	碗	明（ⅡC）	－	－	－	外面蕉葉文。	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
381	中国産青花	碗	明（ⅡD）	－	－	－	呉須はやや鈍い。外面下位が渦文で簡略化したアラベスク文か。見込みは十字文か。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
382	中国産青花	小碗	明（Ⅲ）	－	－	－	器厚２mm。端反口縁。呉須の発色は良い。	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
383	中国産青花	小碗	明（I？）	－	－	－	呉須の発色良好。外面が唐草文か。	南	H10	Ⅱ	瓦混暗褐色土
384	中国産青花	皿	明（ⅡC）	－	－	－	外面圏線２条、蕉葉文。見込み圏線２条。	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
385	中国産青花	皿	明（ⅢE）	－	6.7	－	畳付釉はぎ、砂付着。外面草花文、内面折枝文？内湾皿。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土

第 35 表　淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（13）

遺物No.	種類	器形・大分類	分類	口径（長軸）	底径（短軸）	器高（厚さ）	観察事項	地区	グリッド	層	調査時土層
386	中国産青花	瓶	明（景徳鎮）	－	－	－	呉須はにじむ。内外ともに施釉。外面は花鳥文？	南	H11	Ⅱ	瓦混礫層
387	中国産青花	碗	清（福建）	－	－	－	釉は青白色で鈍い。端部は鉄錆か褐色を呈す。現状では文様無。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
388	中国産青花	碗	明（Ⅲ）	－	－	－	器厚２㎜。外面線描き・ダミの草花文、内面四方襷文。	南	G10	Ⅱ	暗褐色礫混土
389	中国産青花	碗	清（徳化）	－	－	－	器厚２㎜。光沢あり。外面草花文か？端反口縁。	南	H10	Ⅱ	暗褐色礫混土
390	中国産青花	碗	清（福建）	14.2	－	－	見込み露胎。釉は青白色。外面円文、内部ダミる。	南	H9	Ⅱ	暗褐色礫混土
391	中国産青花	碗	明（漳州）	－	－	－	釉オリーブ灰色。呉須発色不良。	南	H10	Ⅱ	暗褐色礫混土
392	中国産青花	碗	清（福建）	15.0	－	－	釉青白色。呉須淡い。外面文様不明。	南	H10	Ⅱ	暗褐色礫混土
393	中国産青花	碗	明（漳州？）	11.8	－	－	釉は灰白色で鈍く、呉須もやや鈍い。口縁端部方形。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
394	中国産青花	碗	清（福建）	－	8.6	－	畳付釉はぎ・砂少量付着、見込み蛇の目。胎土黄白色。	南	I9	Ⅱ	暗褐色礫混土
395	中国産青花	碗	明（漳州）	－	6.9	－	外面下半露胎、見込み蛇の目釉はぎ。呉須発色不良。	南	H10	Ⅱ	暗褐色礫混土
396	中国産青花	小碗	清（徳化）	8.3	－	－	外面上端ダミるが文様不明。光沢無し。破片断面全てに褐色付着物（鉄分？）	南	H10	Ⅱ	暗褐色礫混土
397	中国産青花	碗	清（徳化）	－	－	－	外面蔓草文。	南	H10	Ⅱ	暗褐色礫混土
398	中国産青花	碗	清（徳化）	－	－	－	外面花芯文。光沢有。	南	H10	Ⅱ	暗褐色礫混土
399	中国産青花	皿	清（徳化）	15.0	－	－	内面梵字文か。破片断面全てに褐色付着物（鉄分？）	南	H10	Ⅱ	瓦混暗褐色土
400	中国産青花	皿	清（徳化）	－	11.6	－	見込みをダミり、空白部に花芯文。	南	H10	Ⅱ	瓦混暗褐色土
401	中国産瑠璃釉磁器	小碗	－	9.4	－	－	外面瑠璃釉。口縁端部丸い。	南	H10	Ⅱ	暗褐色礫混土
402	中国産褐釉陶器	壷	5	16.6	－	－	胎土褐灰色。白色粒少量含む。釉は暗オリーブ色。口縁上面に石灰（漆喰？）付着。	南	I9	Ⅱ	暗褐色礫混土
403	中国産褐釉陶器	壷	5	16.2	－	－	胎土褐灰色。白色粒少量含む。釉は暗オリーブ色。石灰（漆喰？）が断面に付着。	南	H9+I9	Ⅱ+Ⅰ	暗褐色礫混土+裏込
404	中国産褐釉陶器	壷	5	16.7	－	－	胎土灰白色。白色粒少量含む。釉は暗オリーブ色。肩部耐火土３ヶ所。	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
405	中国産褐釉陶器	壷	5	－	14.4	－	胎土褐灰色。白色粒少量含む。釉は暗オリーブ色。底部、耐火土２ヶ所。	南	H10	Ⅱ	暗褐色礫混土
406	中国産褐釉陶器	壷	－	－	－	－	胎土赤褐色。白色粒少量含む。釉浅黄色。内面露胎。外面一部黒変、被熱か＞	南	G10	Ⅱ	瓦混褐色土
407	中国産褐釉陶器	壷	－	－	－	－	胎土灰色。白色粒多く含む。釉オリーブ黒色。内面粗いハケメ（２本/１cm）。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
408	中国産褐釉陶器	壷	－	－	－	－	胎土灰白色。混入物微量。釉はオリーブ褐色。外面平行タタキ（４本/１cm）。	南	G10	Ⅱ	暗褐色礫混土
409	ベトナム産白磁	碗	－	21.6	－	－	胎土：軟質。焼成：良好。色調：〔断面〕灰白色。釉：〔内外面〕透明釉。文様：〔外面〕口縁下に三条の沈線。胴部の文様は不明。	南	G10	Ⅱ	暗褐色礫混土
410	タイ産黒褐釉陶器	四耳壷	ﾒﾅﾑﾉｲ窯Ⅱ類	18.4	－	－	胎土：粗い。焼成：良好。色調：〔断面〕灰白色。〔内面〕にぶい赤褐色。混入物：褐色粒・赤褐色粒・白色粒。釉：オリーブ黒色。備考：口縁上部に長さ5cm幅1.5cmの溶着痕が残る。	南	H11	Ⅱ	瓦混褐色土
411	タイ産黒褐釉陶器	四耳壷	ｼｰｻﾁｬﾅﾗｲ窯	17.6	－	－	胎土：やや粗い。焼成：良好。色調：〔断面〕灰赤色。混入物：微細な褐色粒・白色粒。釉：黒褐色・浅黄色。調整：口縁直近の内外面に回転ヘラ削りで段を形成。	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
412	タイ産黒褐釉陶器	四耳壷	ｼｰｻﾁｬﾅﾗｲ窯	20.8	－	－	胎土：やや粗い。焼成：良好。色調：〔断面〕灰赤色。〔内面〕暗赤灰色。混入物：微細な白色粒・褐色粒。釉：黒色。	南	H11	Ⅱ	瓦混礫層
413	タイ産黒褐釉陶器	四耳壷	ﾒﾅﾑﾉｲ窯Ⅱ類	－	－	－	胎土：粗い。焼成：良好。色調：〔断面〕灰赤色。〔内面〕明褐灰色。混入物：褐色粒・赤褐色粒・白色粒。釉：オリーブ黒色。調整：胴部内面に耳部貼り付け時の指頭圧痕。	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
414	タイ産黒褐釉陶器	四耳壷	ｼｰｻﾁｬﾅﾗｲ窯	－	－	－	胎土：やや粗い。焼成：良好。色調：〔断面〕灰赤色。〔内外面〕灰色。混入物：褐色粒・白色粒。釉：灰オリーブ色。備考：被熱の可能性。	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
415	本土産陶磁器	皿	染付	－	－	－	直口口縁で内面を花弁状に成形（型成形か）。口唇部に口紅。17世紀後半。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
416	本土産陶磁器	碗	染付	－	4.4	－	丸碗で総釉後畳付を釉剥ぎ。畳付に砂が少量付着。外面胴部に圏線１条、内底に二重圏線も呉須の発色不良。17世紀後半。	南	I9	Ⅱ	暗褐色礫混土

第 36 表　淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（14）

遺物No.	種類	器形・大分類	分類	口径（長軸）	底径（短軸）	器高（厚さ）	観察事項	地区	グリッド	層	調査時土層
417	沖縄産施釉陶器	碗	C	－	5.8	－	全面に白化粧＋透明釉を施釉後、内底は蛇の目状、外底は畳付成形時に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗布。内底にアルミナがわずかに付着。外面に呉須で巴文と鉄班か。胎土は鈍黄橙色。	南	I 10	II	瓦混暗褐色土
418	沖縄産施釉陶器	碗	C	12.7	5.6	6.6	全面に白化粧＋透明釉を施釉後、内底は蛇の目状、外底は畳付成形時に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗布。内底にアルミナが付着。胎土は鈍黄橙色。	南	H11	II	瓦混暗褐色土
419	沖縄産施釉陶器	碗	A	13.4	6.8	6.6	内面胴部～外面胴部に灰釉を施釉。胎土は浅黄橙色。高台に煤が付着。高台際を水平に削る。	南	H10	II	瓦混暗褐色土
420	沖縄産施釉陶器	小碗	B－1	－	3.8	－	全面に白化粧＋透明釉を施釉後、内底は蛇の目状、外底は畳付成形時に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗布。内底にアルミナがわずかに付着。胎土は淡黄色。	南	H11	II	瓦混暗褐色土
421	沖縄産施釉陶器	小碗	A	－	3.7	－	内底～外面腰部に灰釉を施釉。両面に石灰が付着。胎土は灰色。本土産陶器の可能性あり。	南	H10	II	暗褐色礫混土
422	沖縄産施釉陶器	小碗	B－1	－	－	－	全面に灰釉を施釉後、呉須？で文様を両面に描くが剥落が著しい。胎土は灰白色。	南	H10	II	瓦混暗褐色土
423	沖縄産施釉陶器	火炉	A	－	11.2	－	外面に鉄釉を施釉（施釉範囲は不明だが高台内にも塗布）。素地は鈍黄橙色。	南	I 10	II	瓦混暗褐色土
424	沖縄産施釉陶器	急須	A	－	－	(6.0)	全面に白化粧を施した後、透明釉を内底～外面腰部まで施釉。外面に線彫り＋呉須で文様を描く。胎土は灰黄色。	南	H11	II	瓦混暗褐色土
425	沖縄産施釉陶器	蓋	A	6.3	4.5	－	蓋甲に鉄釉を施釉。蓋甲端部に陰圏線１条。裏面に煤がわずかに付着。胎土は浅黄橙色。	南	H10	II	瓦混暗褐色土
426	沖縄産無釉陶器	碗	A	13.5	4.8	5.7	焼成良好で器面は灰褐色。胎土は灰褐色で白土が層状に混ざり、白色粒や赤褐色粒を含む。高台は貼付後に削り出し。	南	H10	II	瓦混褐色土
427	沖縄産無釉陶器	碗	A	－	6.6	－	焼成良好で外面に泥釉（器面は外面黒褐色、内面灰褐色）。胎土は褐色で白土が層状に少量混ざり、白色粒や赤褐色粒を多く含む。高台は貼付後に削り出し、畳付に目跡？が残る。	南	H10	II	瓦混褐色土
428	沖縄産無釉陶器	碗	B	－	5.0	－	焼成良好で両面に自然釉か（器面は褐灰色）。胎土は褐色で白色粒を多く含む。高台は貼付後に削り出し。	南	I 10	II	瓦混褐色土
429	沖縄産無釉陶器	碗	A	－	6.4	－	焼成良好で器面は外面明褐色・内面橙色。胎土は橙色で白土が層状に混ざり、白色粒や赤褐色粒を含む。高台は貼付後に削り出し。	南	H10	II	瓦混褐色土
430	沖縄産無釉陶器	鉢	B	22.0	－	－	器面は明赤褐色。胎土は明赤褐色で白色粒や赤褐色粒をわずかに含む。外面に陰圏線１条＋６本櫛の波状文。	南	H10	II	暗褐色礫混土
431	沖縄産無釉陶器	鉢	A	－	－	－	焼成良好で器面は灰褐色。胎土は黒褐色で白土が層状に少量混ざり、白色粒や赤褐色粒を少量含む。外面に陰圏線１条。	南	I 10	II	瓦混暗褐色土
432	沖縄産無釉陶器	擂鉢	A	－	9.4	－	焼成良好で外面に泥釉（器面は外面黒褐色・内面褐灰色）。胎土は暗褐色で白土が層状に混ざり、白色粒や赤褐色粒を含む。外面腰部にサンゴ目が残り、外底際を垂直に削り出す。内面に15本単位の擂目。	南	I 9	II	暗褐色礫混土
433	沖縄産無釉陶器	急須	A	11.0	－	－	焼成良好で両面に泥釉（器面は黒褐色）。胎土は褐色で白色粒を少量含む。	南	I 9	II	暗褐色礫混土
434	沖縄産無釉陶器	壷	A	16.6	－	－	焼成良好で両面に泥釉（器面は黒褐色）。胎土は褐色で白土が層状に少量混ざり、白色粒や赤褐色粒を多く含む。口縁部は外側折り曲げ後に内側折り返し。口唇部にサンゴ目？が残る。	南	I 9	II	暗褐色礫混土
435	沖縄産無釉陶器	壷	A	－	－	－	焼成良好で外面に泥釉（器面は灰褐色）。胎土は褐色で白土が層状に少量混ざり、白色粒や赤褐色粒を多く含む。内面に成形痕（タタキ？）が残る。	南	H10	II	瓦混褐色土
436	沖縄産無釉陶器	火取	A	12.6	－	－	焼成良好で両面に泥釉（器面は黒褐色）。胎土は褐色。口縁部は内側折り返しで玉縁状に肥厚。外面に陰圏線を１条巡らす。	南	I 9	II	暗褐色礫混土
437	沖縄産無釉陶器	火炉	A	－	－	－	焼成良好で両面に泥釉（器面は黒褐色）。胎土は暗褐色で白土が層状に混ざり、白色粒を少量含む。	南	H10	II	瓦混暗褐色土
438	沖縄産無釉陶器	蓋	－	－	－	－	焼成良好で外面に泥釉（器面は黒褐色）。胎土は褐灰色で白土が層状に混ざり、白色粒を少量含む。内面に成形痕（タタキ？）が残る。	南	H10	II	瓦混褐色土
439	瓦質土器	擂鉢	－	－	－	－	器色は両面とも灰色を呈し、胎土は灰白色で黒色鉱物・白色鉱物・ガラス質鉱物を少量含む。外面に指頭跡及び回転調整痕が残り、内面に９本単位の櫛目を施す。	南	G11	II	瓦混褐色土
440	沖縄産無釉陶器	甕	A	－	30.1	－	器面は外面橙色・内面鈍褐色。胎土は橙色で白色粒を少量含む。外面底部付近や腰部に石灰が付着。	南	H10	II	埋甕1
441	青磁製品	碁石	－	2.1	1.9	0.6	3.5ｇ平坦面（青緑色、施釉面）と大きく盛り上がる面（灰白色）あり。	南	H11	II	瓦混暗褐色土
442	青銅製品	金物	責鞆	1.4	1.8	0.4	やや小振りで薄手のつくり。たたいて成形か。2.0ｇ	南	H10	II	瓦混褐色土
443	鉄製品	鉄鏃	I 類	5.8	1.1	0.6	羽縁が扇状に広くなる。鏃身が茎より短い。9.1ｇ	南	G11	II	瓦混褐色土

第 37 表　淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（15）

遺物No.	種類	器形・大分類	分類	口径（長軸）	底径（短軸）	器高（厚さ）	観察事項	地区	グリッド	層	調査時土層
444	青銅製品	飾金具	不明	3.1	2.5	－	逆涙形の青銅版に、足が二又に分かれる銅鋲がつく。4.2ｇ	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
445	銭貨	皇宋「通」寶		外2.49	内1.85	0.16	孔径0.72cm。字・背はやや不明瞭。2.2ｇ	南	G10	Ⅱ	暗褐色礫混土
446	銭貨	「」寧「」「」		－	－	0.15	孔径0.50cm。篆書の「寧」の字と思われる。1.0ｇ	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
447	銭貨	淳熙「元」「寶」		－	－	0.12	孔径0.72cm。折二銭。背に「十？」の字と思われる。0.9ｇ	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
448	銭貨	洪武通寶		外2.41	内2.07	0.19	孔径0.73cm。サビが覆って不明瞭。変形して、折れている。面に付着物が溶着する。4.1ｇ	南	G10	Ⅱ	暗褐色礫混土
449	銭貨	「」「」元寶？「」元「」寶？		－	－	0.14	孔径0.83cm。字は不明瞭だが、つくりは丁寧。やや変形する。1.5ｇ	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
450	銭貨	永「楽」通「寶」		－	－	0.14	孔径0.41cm。字はやや不明瞭。やや変形する。1.5ｇ	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
451	銭貨	「」和「通」寶		－	－	0.20	孔径0.52cm。篆書とおもわれる。付着物が溶着する。1.7ｇ	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
452	銭貨	「」「」元「」		－	－	0.09	字は不明瞭。篆書の「元」か？0.5ｇ	南	H11	Ⅱ	瓦混暗褐色土
453	銭貨	判読不明		－	－	0.14	孔径0.55cm。字はやや不明瞭。1.5ｇ	南	I 10	Ⅱ	瓦混暗褐色土
454	石製品	不明	－			1.1	全面丁寧な研磨がされている。凸面には「徽？」の線刻あり。凹面には線条あり。褐色の緻密な石材。	南	I 9	Ⅱ	暗褐色礫混土
455	石製品	石碑	－	16.9+	13.8＋	6.3	重量1670ｇ。段彫りにより区画を設け、上方に半円形の窪みを作る。裏面は不整形だが、側面はノミ痕顕著。裏・側面に石灰（漆喰？）付着。砂岩（ニーピヌフニ）。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
456	骨製品	尖頭器	－	5.6+	0.6	－	1.2ｇ。先端欠損。基部1.9ｃｍ。全面研磨。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
457	中国産青磁	碗	Ⅵ-1	－	－	－	釉はガラス質、胎土は灰白色で、白色粒含む。外面は線刻細連弁文で、弁先との間隔を空ける。	南	I 10	Ⅲ	オリーブ褐色土
458	中国産青磁	碗	Ⅵ-1	－	－	－	釉は薄く、ガラス質。外面幅１cmの弁先が一致する線刻細連弁文。	南	H10	Ⅲ	オリーブ褐色土
459	中国産青磁	碗	Ⅵ-1	－	4.7	－	釉は薄く、高台途中まで、中央わずかに凹む。胎土は橙色。	南	H10	Ⅲ	オリーブ褐色土
460	中国産青磁	碗	Ⅴ	－	5.6	－	外底蛇の目。釉は風化のためか色調失くす。	南	H10	Ⅲ	オリーブ褐色土
461	中国産青磁	碗	Ⅵ	－	5.4	－	釉は薄く、高台内途中まで掛る。胎土は灰白色で軟質。	南	H10	Ⅲ	オリーブ褐色土
462	中国産青磁	碗	Ⅵ	－	4.1	－	釉は高台外面途中まで掛る。釉は風化のためか、色調を失う。胎土は灰白色、白色粒を含む。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
463	中国産青磁	碗	Ⅵ	－	6.1	－	外底まで薄く釉が掛る。畳付水平。内面から打ち欠き、円盤状とする。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
464	中国産青磁	碗	Ⅳ-0	－	5.3	－	釉は薄く、高台途中まで、中央わずかに凹む。胎土は灰色。	南	H10	Ⅲ	オリーブ褐色土
465	中国産青磁	皿	Ⅳ-1	－	－	－	釉は厚く、ガラス質で、青緑色。外面は幅１cmの鎬連弁文。口縁端部を短く外反させる。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
466	中国産青磁	盤	C	30.2	－	－	釉は厚く、胎土も精良。内外面共に片彫りによる簡略化した草花文。	南	H10	Ⅲ	オリーブ褐色土
467	中国産青磁	盤	C	24.6	11.4	5.6	外底蛇の目。釉良好だが全体的に摩滅。内面1.5cm幅の連弁状の凹み。	南	I 10+H 10+H11	Ⅲ+Ⅱ+I	ｵﾘｰﾌﾞ褐色土+瓦混褐色土+裏込
468	中国産青磁	盤	D	－	－	－	釉はガラス質。胎土は灰白色。表面が荒れ、被熱のためか、	南	I 10	Ⅲ	オリーブ褐色土
469	中国産青磁	盤	碁笥底	－	10.0	－	外底おそらく蛇の目。釉は厚い。内外面の文様は片彫りによる。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
470	中国産白磁	皿	景徳鎮E	－	－	－	乳白色。硬質。口縁端部肥厚。端反皿。	南	I 10	Ⅲ	オリーブ褐色土
471	中国産白磁	皿	景徳鎮E	－	6.4	－	黄白色。畳付釉はぎ。硬質。端反皿。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
472	中国産青花	鉢	明（I）	－	－	－	貫入多い。呉須はにじむ。見込み蓮池文。	南	I 10	Ⅲ	オリーブ褐色土
473	韓半島産象嵌青磁	碗	博多Ⅴ類	－	－	－	胎土：粗い。焼成：良好。色調：〔断面〕灰色。混入物：褐色粒・黒色粒。釉：灰オリーブ色。文様：外面に白象嵌で輪郭、白象嵌で内筋を描く蓮華文。	南	I 10	Ⅲ	オリーブ褐色土
474	中国産褐釉陶器	壷	5	15.0	－	－	胎土灰白色。白色粒少量含む。釉は暗オリーブ色。肩部耐火土３ヶ所。	南	I 10	Ⅲ	オリーブ褐色土
475	タイ産無釉陶器	平鉢	－	－	－	－	胎土：やや粗い。焼成：良好。色調：〔断面〕灰色。〔内外面〕灰赤色・赤灰色・にぶい橙色まで変化。混入物：微細な白色粒・黒色粒。調整：〔内面〕回転ナデ。〔外面〕丁寧に調整痕を消している。	南	H10	Ⅲ	オリーブ褐色土

第 38 表　淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（16）

遺物No.	種類	器形・大分類	分類	口径（長軸）	底径（短軸）	器高（厚さ）	観察事項	地区	グリッド	層	調査時土層
476	タイ産黒褐釉陶器	四耳壺	ｼｰｻﾁｬﾅﾗｲ窯	－	13.4	－	胎土：比較的精良。焼成：良好。色調：〔断面〕灰赤色。〔内面〕灰白色。〔外面〕黄灰色。混入物：褐色粒・白い帯状のもの。釉：オリーブ黒色。備考：外底面に砂が付着。	南	I 10	Ⅲ	オリーブ褐色土
477	沖縄産無釉陶器	擂鉢	A	－	－	－	焼成良好だが火ぶくれが著しい（器面は外面灰褐色・内面灰色）。胎土は灰色で白土が層状に混ざり、白色粒や黒色粒を含む。口縁部は外側折り曲げ。内面に７本単位の櫛目。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
478	宮古式土器	壺	Ⅲ	24.6	－	－	壺。胎土：砂泥質。混入物：多量。色調：[内外面]橙色。調整：[外面]横・斜めケズリ（幅0.5cm）後、ナデ消し・一部ミガキ？[内面]横ナデ。	南	H11	Ⅲ	暗灰黄色粘質土
479	宮古式土器	壺	Ⅲ	－	17.0	－	底部片。胎土：砂泥質。混入物：多量。色調：[外面]灰黄褐色[内面]橙色。調整：[内外面]横ナデ[外底]ナデ。	南	H11	Ⅲ	暗灰黄色粘質土
480	青銅製品（鍍金）	金物	笠印付鑷	2.0	2.5	0.25	八重菊頭で固定のための切込みが二つみられる。横長の楕円形の鑷。中央の孔は鋲による固定のためか。3.8ｇ	南	H11	Ⅲ	暗灰黄色粘質土
481	青銅製品（鍍金）	金物	覆輪	5.0	0.6	0.1	鼻に小鋲が残り、根を裏で折り曲げて留める。そこに金具廻りの一部1が残る。5.1ｇ	南	I 10	Ⅲ	オリーブ褐色土
482	鉄製品	鉄鏃	Ⅰ類	4.6	1.5	0.4	羽縁が扇状に広くなる。鏃身は欠損。8.7ｇ	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
483	合金	不明	不明	3.95	2.1	0.6	金と銀の合金と思われる。顕微鏡写真では、３本/１㎜の線条痕がある。7.5ｇ	南	I 10	Ⅲ	オリーブ褐色土
484	銭貨	「至？」「和」「」寶		－	－	0.12	孔径0.92。篆書とおもわれる。字・背の外縁が不明瞭。やや変形する。1.6ｇ	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
485	銭貨	「東？」「」「通」寶		外2.45	内1.97	0.14	孔径0.74。篆書とおもわれるが、不明瞭。付着物が溶着する。2.2ｇ	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
486	銭貨	永「楽」通「寶」		－	－	0.17	字・背ともに不明瞭。やや変形する。1.1ｇ	南	H10	Ⅲ	オリーブ褐色土
487	石製品	石球	－	3.2	3.0	3.02	19.4ｇ。一辺0.5～1.0ｃｍの不明瞭な面で構成。研磨によるか？サンゴ石灰岩。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
488	骨製品	半円状	－	3.4	1.3	1.3	1.5ｇ。半円状。全面研磨。表裏面に３条ずつ線刻あり。	南	I 10	Ⅲ	オリーブ褐色土
489	中国産青磁	碗	V－3	16.2	－	－	釉は厚く、胎土も精良だが、表面が荒れており被熱の可能性。外面は縦方向の弧状の表現が見られるが文様不明。	南	H9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
490	中国産青磁	碗	Ⅵ－1	14.0	－	－	外面は幅５㎜の線刻細連弁文、弁先は凡そ連弁２本に一つ。	南	I 10	Ⅳ+Ⅱ	黒褐色土+瓦混褐色土
491	中国産青磁	碗	V－1	－	5.4	－	外底は高台畳付まで施釉、中央部は突出。内面は型押しの小さめの花文。	南	H9+ I 9+ I 9	Ⅳ+Ⅱ+ I	暗褐色礫混土下部+裏込+暗褐色礫混土
492	中国産青磁	碗	V－3	－	－	－	釉は厚く、胎土共に精良。外面はおそらくラマ式連弁文、内面は草花文。	南	H9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
493	中国産青磁	碗	Ⅳ´－0	－	－	－	胎土は灰白色。端部が丸い玉縁口縁。	南	I 10	Ⅳ	黒褐色土
494	中国産青磁	皿	V－1	－	5.0	－	外底蛇の目。見込みには不鮮明の凹凸があり、文様がある可能性。	南	I 10	Ⅳ	黒褐色土
495	中国産青磁	碗	Ⅶ	－	－	－	釉はガラス質で、青白色で白磁に近い。口縁端部を刻み、輪花状とする。	南	H9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
496	中国産青磁	碗	V	－	5.7	－	釉は高台内まで掛り、二重掛けか、厚い。	南	H9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
497	中国産青磁	碗	V－1	－	－	－	外底おそらく蛇の目。釉は厚く胎土共に精良。外面は剣先連弁文か。	南	I 10	Ⅳ	黒褐色土
498	中国産青磁	皿	V－0	－	－	－	釉は厚いが、表面が荒れており被熱の可能性。口縁端部が少し折れる内湾皿。	南	I 10	Ⅳ	黒褐色土
499	中国産青磁	皿	Ⅳ－2	11.0	4.4	4.1	外底無釉、中央がやや突出。畳付水平。釉は鈍く、胎土は灰色。外面は外郭が広めの片彫り連弁文。	南	H9+H10	Ⅳ+Ⅱ	暗褐色礫混土下部+暗褐色礫混土
500	中国産青磁	盤	B	25.9	－	－	釉はガラス質で、光沢あり。口縁は稜花、内面は幅５㎜の凹みを１cm間隔で配する。	南	I 9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
501	中国産青磁	盤	碁笥底	－	10.0	－	釉は外底途中まで掛る。内面幅２㎜の連弁状の櫛描き文。	南	I 10	Ⅳ	黄褐色土
502	中国産青磁	酒海壺（蓋）	V	26.5	16.0	－	釉は口縁内面周辺以外掛り、内面は薄く外面は２㎜と厚い。	南	I 9+H9	Ⅳ+Ⅱ	暗褐色礫混土下部+暗褐色礫混土
503	中国産青磁	酒海壺（身）	V	－	－	－	釉は２㎜と厚い。酒海壺の胴部。外面は貼り付けによる文様。	南	I 10	Ⅳ	黒褐色土
504	中国産青磁	瓶	V	－	－	－	外面の釉が厚く、胎土共に精良。球型の瓶胴部。外面は５㎜幅の狭い連弁文。	南	I 10	Ⅳ	黒褐色土
505	中国産白磁	碗	景徳鎮	－	－	－	青白色。硬質。口縁端部丸く、内面は面取り。	南	H9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部

第 39 表　淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（17）

遺物No.	種類	器形・大分類	分類	口径（長軸）	底径（短軸）	器高（厚さ）	観察事項	地区	グリッド	層	調査時土層
506	中国産白磁	皿	景徳鎮ＥＯ	12.2	－	－	灰白色。硬質。腰折皿と思われる。	南	H9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
507	中国産白磁	碗	景徳鎮Ｂ´	－	5.5	－	乳白色。外底無釉。硬質。外面中位に段あり。畳付水平。	南	Ｉ10	Ⅳ	黒褐色土
508	中国産白磁	皿	福建Ｄ	8.9	3.3	2.95	黄白色。外面下半露胎、見込み蛇の目。軟質。腰折皿。	南	Ｉ10	Ⅳ	黒褐色土
509	中国産白磁	皿	福建Ｄ	7.4	3.1	3	黄白色。外面下半露胎。貫入多い。軟質。八角皿。抉り高台。	南	Ｉ10	Ⅳ	黒褐色土
510	中国産白磁	皿	福建Ｄ	8.7	3.9	2.6	黄白色。全釉。軟質。内湾皿。抉り高台。	南	H9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
511	中国産青花	碗	明（Ｉ－1）	12.2	4.8	5.75	外面やや簡略化した草花文、内面梵字文、見込み抽象的で不明。端反で端部丸い。	北	H9+Ｉ9+H10	Ⅳ+Ⅱ	暗褐色混礫土下部+暗褐色礫混土
512	中国産青花	碗	明（Ｉ－1）	（推定）15.0	6.0	（推定）8.5	外面雷文、唐草文、蕙弁文？内面簡略化した梵字文、見込み草文？	南	Ｉ10	Ⅳ	黒褐色土
513	中国産青花	鉢	明（景徳鎮）	－	－	－	外面簡略化した梵字文。直線的な器形。	南	Ｉ10	Ⅳ	黒褐色土
514	中国産青花	壷	元様式	－	－	－	器面が赤変泡立ち被熱。外面唐草文。	南	Ｉ10	Ⅳ	黒褐色土
515	中国産青花	碗	清（福建）	14.6	－	－	釉黄白色、貫入有。外面簡略化した草花・アラベスク文？	南	H9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
516	中国産青花	碗	清（福建）	－	－	－	釉黄白色。見込み露胎。外面円文。端反口縁。	南	H9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
517	中国産黒釉陶器	天目	－	－	3.5	－	胎土浅黄色。釉は黒色、外面下半露胎。外底中央凹み、端部外傾。見込みわずかに膨らむ。	南	H9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
518	中国産鉄絵陶器	壷	磁州窯系	－	－	－	胎土黄橙色。外面白釉を描け鉄絵で花文等を描く。内面上半に黒釉。	南	Ｉ10	Ⅳ	黒褐色土
519	中国産褐釉陶器	壷	5	16.6	－	－	胎土褐灰色。白色粒少量含む。釉は暗オリーブ色。	南	H9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
520	中国産褐釉陶器	壷	3	12.4	－	－	胎土灰白色。白色粒少量含む。釉は暗オリーブ色。	南	H10	Ⅳ	黄褐色土
521	タイ産黒褐釉陶器	四耳壷	ﾒﾅﾑﾉｲ窯Ⅰ類	－	－	－	胎土：精良。焼成：ムラがある。色調：〔断面〕明褐灰色・赤灰色。〔内面〕赤灰色・灰赤色。混入物：微細な明赤灰色粒が主、他に暗赤褐色・白色粒。釉：オリーブ黒色。備考：外面で混入物を中心に釉が爆ぜている。	南	Ｉ10	Ⅳ	黒褐色土
522	タイ産黒褐釉陶器	四耳壷	ｼｰｻﾁｬﾅﾗｲ窯	－	27.0	－	胎土：粗い。焼成：ムラがある。色調：〔断面〕灰赤色・橙色・灰色。〔内外面〕暗赤灰色。混入物：白色粒・暗赤褐色粒が主、他に赤褐色粒。釉：黒色。調整：内面にﾍﾗ削り。素地がｹﾊﾞ立つ。	南	Ｉ10	Ⅳ	黒褐色土
523	タイ産黒褐釉陶器	四耳壷	ｼｰｻﾁｬﾅﾗｲ窯	－	－	－	胎土：精良。焼成：良好。色調：〔断面〕灰赤色。〔断面芯部〕暗赤灰色。〔内外面〕にぶい赤褐色。混入物：暗赤褐色・褐色粒が主、他に白色粒・白い帯状のもの。釉：黒褐色。備考：胴最下部に指あと。外底面に砂が付着。内底面に釉が数滴落ちる。	南	H10	Ⅳ	黄褐色土
524	タイ産土器	蓋	－	－	－	4.0	胎土：粗い。焼成：良好。色調：〔断面芯部〕にぶい黄橙色。〔内外面・断面壁面付近〕浅黄褐色。混入物：赤褐色粒・暗赤褐色粒・黒色粒・白色粒。調整：天井部裏面に擦痕。	南	Ｉ10	Ⅳ	黒褐色土
525	ベトナム産青花	小碗	－	9.1	4.8	4.0	胎土：軟質。焼成：良好。色調：〔断面〕灰白色。混入物：明赤褐色粒・褐色粒。釉：透明釉。文様：〔内面〕圏線（オリーブ灰色）〔外面〕圏線（灰オリーブ色）、草花文（青色）備考：チョコレートボトム。	南	H9+G10	Ⅳ+Ⅱ	暗褐色混礫土下部+暗褐礫混合
526	沖縄産無釉陶器	壷	B	9.6	－		焼成良好で外面に泥釉か（器面は外面灰褐色・内面明赤褐色）。胎土は明赤褐色で白色粒をわずかに含む。口縁部は外側折り曲げで玉縁状に肥厚。外面に６本櫛の波状文。	南	H9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
527	青銅製品	立物	中央飾	5.4	8.4	0.1	祓立台に入る中央の立物。下部に固定する際の孔が残る。12.5ｇ	南	Ｉ10	Ⅳ	黄褐色土
528	鉄製品	小札	恭石頭伊予札	7.0	2.7	1.5	2列14孔とし、上6孔は約3㎜、下8孔は約2㎜。15.3ｇ	南	Ｉ10	Ⅳ	黒褐色土
529	鉄製品	鉄鏃	Ⅱ類	7.2	1.3	0.5	刃縁は直線的で矢頭が剣先状になる。基部はやや不明瞭。11.4ｇ	南	H10	Ⅳ	黄褐色土
530	鉄製品	刀子	－	5.0	3.1	1	背が直線的で、やや大き目か。22.5ｇ	南	Ｉ9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
531	鉄製品	刀子	－	8.4	2.0	0.6	細身のタイプ。23.6ｇ	南	Ｉ10	Ⅳ	黄褐色土
532	青銅製品	飾金具	不明	2.2	1.3	0.2	平面的な菊形の座金具に割ピンと鐶がつながる。2.0ｇ	南	Ｉ9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
533	鉄製品	鍋	－	16.6	－	5.6	胴部から口縁までやや直線的にのびる。25.7ｇ	南	Ｉ10	Ⅳ	黒褐色土
534	鉄製品	鍋	－	25.2	－	10.6	胴部がやや直線的にのび、頸部が内湾し口縁が外反する。81.1ｇ	南	Ｉ10	Ⅳ	黒褐色土

第 40 表　淑順門西地区陶磁器・各種製品等観察表（18）

遺物No.	種類	器形・大分類	分類	口径（長軸）	底径（短軸）	器高（厚さ）	観察事項	地区	グリッド	層	調査時土層
535	銭貨	開「元」「通」寶		－	－	0.17	背はやや不明瞭。2.2ｇ	南	H10	Ⅳ	黄褐色土
536	銭貨	「元」豊通寶		外3.01	内2.13	0.17	孔径0.69cm。折二銭。やや変形する。5.7ｇ	南	H10	Ⅳ	黄褐色土
537	銭貨	「元」豊通「寶」		外2.40	－	0.15	孔径0.73cm。背の外縁はやや不明瞭。やや変形する。2.5ｇ	南	I 10	Ⅳ	黒褐色土
538	銭貨	元祐通寶		外2.41	内1.94	0.14	孔径0.84cm。背の内郭・外縁が太い。3.9ｇ	南	I 10	Ⅳ	黒褐色土
539	銭貨	元符「通」「寶」		－	－	0.14	孔径0.65cm。内郭が細く、背の外縁が不明瞭。やや変形する。1.1ｇ	南	I 10	Ⅳ	黒褐色土
540	銭貨	聖宋「元」「寶」		－	－	0.09	背の外縁は不明瞭。1.7ｇ	南	H10	Ⅳ	黄褐色土
541	銭貨	熙？寧「元」「寶」		－	－	0.17	孔径0.77cm。篆書と思われるが、不明瞭。1.9ｇ	南	I 10	Ⅳ	黒褐色土
542	銭貨	洪武通寶		外2.35	内1.98	0.15	孔径0.79cm。面の外縁がやや高い。背に付着物が溶着する。3.1ｇ	南	I 10	Ⅳ	黒褐色土
543	銭貨	「永」楽通「寶」		－	－	0.12	孔径0.54cm。面・背ともに明瞭。1.7ｇ	南	I 10	Ⅳ	黒褐色土
544	銭貨	「永」楽通「寶」		－	－	0.15	孔径0.47cm。面・背ともに明瞭。やや変形する。2.3ｇ	南	I 10	Ⅳ	黒褐色土
545	銭貨	「永」楽「通」寶		－	－	0.15	孔径0.52cm。字はやや不明瞭。1.9ｇ	南	I 10	Ⅳ	黒褐色土
546	銭貨	「」「」元「」		－	－	0.13	孔径0.50cm。字はやや不明瞭。1.2ｇ	南	I 10	Ⅳ	黒褐色土
547	銭貨	元「」「通」「寶」		－	－	0.13	孔径0.42cm。サビのため字はやや不明瞭。変形する。1.2ｇ	南	I 10	Ⅳ	黒褐色土
548	銭貨	元「」「」寶		－	－	0.14	孔径0.45cm。字・背ともに不明瞭。1.7ｇ	南	I 10	Ⅳ	黒褐色土
549	銭貨	「」元？通「寶」		－	－	0.13	字はやや不明瞭。1.1ｇ	南	I 10	Ⅳ	黒褐色土
550	銭貨	無文銭		外2.15	－	0.08	孔径0.58cm。孔形がやや楕円。被熱のため、破損か。1.2ｇ	南	I 10	Ⅳ	黒褐色土
551	中国産青磁	碗	V－0	－	5.5	－	外艇蛇の目。見込みは型押の花文。	不明	不明	I	表土
552	中国産青磁	碗	Ⅵ-0	－	4.7	－	釉は高台外面途中まで掛り、中央は抉れる。釉は薄く、胎土は灰色。	不明	不明	I	表土
553	中国産青花	碗	明（Ⅰ－2）	－	－	－	外面雷文、牡丹唐草文。内面四方襷文。表現が丁寧。	不明	不明	I	表土
554	中国産青花	碗	明（Ⅲ）	－	－	－	器厚１mm。端反口縁。内外圏線２条。	不明	不明	I	表土
555	中国産青花	碗	明（漳州）	－	－	－	釉は色、呉須不良。	不明	不明	I	表土
556	中国産青花	碗	清（徳化）	－	4.6	－	釉青白色、光沢有。外底不明字款、内外文様不明。	不明	不明	I	表土
557	沖縄産施釉陶器	火炉	A	22.0	－	－	全面に鉄釉を施釉。胎土は灰黄色。	不明	不明	I	表土
558	沖縄産施釉陶器	小碗	B－2	8.2	3.6	4.8	内面白化粧後、外面鉄釉・内面透明釉を掛け分け。畳付は釉剥ぎ後にアルミナを塗布。内底に呉須で花文。胎土は鈍黄橙色。	不明	不明	I	表土
559	沖縄産無釉陶器	擂鉢	B	－	－	－	焼成良好で両面に自然釉（器色は鈍黄橙色）。胎土は鈍赤褐色で白色粒や赤褐色粒を多く含む。口縁部は外側折り曲げか。内面に擂目。	不明	不明	I	表土
560	沖縄産無釉陶器	擂鉢	C	25.6	－	－	器面は明赤褐色。胎土は明赤褐色で白色粒を少量含む。口縁部は外側折り曲げか。鍔上面に陰圏線を１条、内面に密な擂目。	不明	不明	I	表土
561	沖縄産無釉陶器	壷	－	7.6	－	－	焼成良好で両面に泥釉（器面は暗赤褐色）。胎土は黒褐色で白色粒を多く含む。口縁部は外側折り曲げか。	不明	不明	I	表土
562	石製品	碁石	－	2.1	2.0	0.5	3.3ｇ。黒色。両面とも平坦。粘板岩。	不明	不明	不明	不明
563	銭貨	皇「宋」通「寶」		－	－	0.12	孔径0.61cm。字・背ともに不明瞭。1.8ｇ	不明	不明	I	表土

凡例

1．－は分類では該当なしのもの、法量では計測個所がないもしくはしていないものを指す。

2．銭貨の銭文は「」は欠損を指し、その中に字が書かれている場合は推定のものである。

3．法量は別に示していない場合は、cm単位である。

4．器高（厚さ）の欄は、陶磁器が器高、その他の製品は厚さを示している。

5．グリッド・層・調査時土層の＋は、接合関係を示す。

５．瓦・塼・漆喰

瓦は、グスク時代の「高麗系瓦」、「大和系瓦」、近世の「明朝系瓦」がある。

高麗系瓦と大和系瓦は、大川清、上原静の分類概念・用語に原則的に基づくものとする（大川 1962、上原 1996・2000）。両瓦を再検討した山崎信二の研究（山崎 2000）、高麗系瓦については浦添ようどれ（浦添市教委 2005）、大和系瓦については崎山御嶽遺跡（那覇市教委 2005）の両報告も適宜参考にした。なお、両瓦の凹凸両面に見られる細い筋状の痕跡は、粘土を切り出す際に付いた道具の痕跡とされ、瓦の学術用語である「コビキ痕」を使用した（石井 2010）。

なお、出土点数は、高麗系・大和系は全ての破片を数えているが、明朝系瓦は筒部のみのものは数えていない。ただ、全体の出土個体数（第 22 表）は近世瓦と合わせて、筒部以外の点数としているので注意されたい。

①高麗系瓦（564 ～ 579）（第 64・65 図、第 41・42・47 表、図版 44）

平瓦 34 点と有段式平瓦１点が出土しており、丸瓦等は見られない。以下、既往の研究を参考に、特徴を述べる。

平瓦（565 ～ 579） 端部が分割破面のもの、凹面に布目痕を有するつまり桶巻造りの痕跡をもつものである。従来、指摘されているどおり、凸面の羽状文叩きが指標となる。羽状文の枠幅には、差があり 3.5、4.0、5.5cm 前後に集中しており、その叩き板の幅が推定できるものとして７cm（566）と８cm（567）が考えられた。凹面は、コビキ痕が顕著であり、筋の幅が 0.1 ～ 0.2cm のものが多いが、0.5cm と太目のもの（572・574）もある。色調で分けると、灰色系 33 点、褐色系２点である。厚さは、2.0 cm前後が多い（第 42 表）。

これらの平瓦について、分類が可能なものは浦添ようどれの分類に従い、説明する（浦添市教委 2005）。

打捺文１類（566・573・575）「癸酉年高麗瓦匠造」銘をもち、斜線状の叩き目いわゆる羽状文の端部の上方に２条の横線があり、また部分的に横線と方向が逆向きになり鋸歯文状となっているものである。羽状文の斜線の間隔が２mm 前後のものが多い。

打捺文３類（576）「大天」銘をもち、羽状文の下端が逆向きの斜線となっているものである。

有段式平瓦（564） 平瓦に玉縁がつくもので、筒部と玉縁部との境部分が１点出土した。色調は褐色系。

②大和系瓦（580 ～ 618）（第 65 ～ 69 図、第 43 ～ 48 表、図版 45 ～ 47）

軒平瓦１点、丸瓦 38 点、平瓦 426 点、雁振瓦３点、鬼瓦１点である。以下、既往の研究を参考に、特徴を述べる。

第 41 表　高麗系平瓦集計表

合計 / 点数				地区 / 層									合計
				北区					南区			不明	
色調	種類	部位	角	I	Ⅳ-1	Ⅳ-2	Ⅳ-3	Ⅳ-3'	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	I	
灰色	平瓦	広端部	角１つ	1	1		2						4
			角なし			1	1						2
		狭端部	角１つ				1						1
			角なし	1			1						2
		筒部	角なし	4	2	6	4	3	1	1	1	1	23
褐色	平瓦	狭端部	角１つ				1						1
		筒部	角なし							1			1
	有段式平瓦	狭端部	角なし					1					1
合計				6	3	7	10	4	1	2	1	1	35
筒部以外の点数				2	1	1	6	1					11

第 42 表　高麗系平瓦厚さ集計表

合計 / 点数				地区 / 層									合計
				北区					南区			不明	
色調	種類	部位	厚さ	I	Ⅳ-1	Ⅳ-2	Ⅳ-3	Ⅳ-3'	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	I	
灰色	平瓦	広端部	(2)1.7～2.0	1		1	3						5
			(3)2.1～2.3		1								1
		狭端部	(1) ～1.6	1			1						2
			(2)1.7～2.0				1						1
		筒部	(1)～1.6		1	1	1			1			4
			(2)1.7～2.0	1	1	4	2	3			1		12
			(3)2.1～2.3	3		1	1					1	6
			(4)2.4～						1				1
褐色	平瓦	狭端部	(2)1.7～2.0				1						1
		筒部	(3)2.1～2.3							1			1
	有段式平瓦	狭端部	(3)2.1～2.3					1					1
合計				6	3	7	10	4	1	2	1	1	35

軒平瓦（580） 瓦当は完存、平瓦部は約８割残存している。瓦当の文様は、全て細い凸線で表現され、中心に５花弁を配し、唐草文は左に６回、右に６回反転しており、大川分類崎山２類（大川 1962）、山崎分類崎山Ⅱ類（山崎 2000）に該当する。瓦当の外区上縁は面取りされ、顎裏面はタテケズリである。平瓦部は、両面に離れ砂が顕著に見られ、凹面にコビキ痕は残る点は、後述する平瓦と同様の特徴をもつが、側面を始め整形は丁寧である。

丸瓦（581 ～ 594） 側面はケズリにより整形がなされるもので、凸面の叩き目が縄目文もしくは羽状文のものである。また、平瓦ほど顕著ではないが離れ砂も見られる。以下、羽状文と縄目文に分けて説明する。色調で分けると、灰色系 341 点、褐色系 85 点である。

縄目文（581・582・585・586） 凸面は縦位の縄目文で、凹面は山崎が指摘する九州タイプの横方向の吊り紐が見られる崎山Ⅰ群と考えられる。ただ、585・586 は小片でもあり格子状の吊り紐にも思われる。また、581・582 は離れ砂が両面に顕著に見られる。

羽状文（583・584・587 ～ 594） 凸面は羽状文で、凹面は格子状の吊り紐が見られるもので、山崎分類の崎山Ⅱ群と考えられる。羽状文はナデ消されるところも多い。縄目文のものと比べると、離れ砂の付着は少量である。588・590・592・594 は、羽状文の中央に四角形を重ねた文様、端部に三角形の文様があるもので、浦添ようどれ分類の羽状文１類となる（浦添市教委 2005）。また、591 は吊り紐が縦方向のものも見られるが、横方向のものが目立つ点で他のものとやや異なった印象もある。

平瓦（595 ～ 614） 離れ砂が顕著で、側面はナナメケズリの後、ナデを施したもので、一枚造りによるものとされる。両面にコビキ痕が顕著に見られるものが多く、側面にもナデ消されずに残されるものもある（599・604・608）。コビキ痕は 0.3cm と 0.5cm のものが多く、方向の変化点が見られるものもある（598）。

また、厚さで次のように分けて集計したところ、（１）～ 1.6cm が 95 点、（２）1.7 ～ 1.9cm が 213 点、（３）2.0 ～ 2.2cm が 106 点、（４）2.3cm ～が 19 点となった。どこでラインを分けるかは難しいが、1.5cm 前後の薄いものと、2.0cm 前後の厚いものという意識はあったものと思われる（第 46 表）。

側面形態は上原分類を参考に次のように分けた（上原 1996）。

ａ）ナデ整形時に余った粘土を凹面側に押し上げたもの（605・612）。31 点。

ｂ）側面下方が強く削り取られ二面の様になるもの（596・598・600・601・604・606・608・610）。70 点。

ｃ）側面全体が斜めに削り取られるもの（595・597・599・603・607・609）。34 点。

以上のように、側面形態はｂ類が多い。また、605 は側面のナデが丁寧にされ、端部が鋭角に仕上げられ水平面をなしている。

614 は、膨らんだで変形しており、おそらく被熱によるものと思われる。

雁振瓦（615 ～ 617） 中央部が丸く盛り上がり、正面から見ると凸状を呈するものである。丁寧にナデ整形される。小片であるので断定できないが、615・616 は中央部、617 は中央部と側部の境のところである。

鬼瓦（618） アーチ部を持つことから、崎山御嶽遺跡の大和系とされたもの（那覇市教委 2005）と形態的には似ていると考え、鬼瓦の一部と考えた。ただ、離れ砂はほとんど見られず、大和系としてよいかは不安が残る。コビキ痕が残る面を鬼面と考えると、裏面は凹凸が激しく、突起部が剥がれたものであろうか。

第 43 表　大和系軒平瓦ほか集計表

合計 / 点数		地区 / 層			合計
		北区	南区		
色調	種類	Ⅳ-3	Ⅲ	Ⅳ	
灰色	軒平	1			1
	雁振瓦	1		1	2
	鬼瓦		1		1
褐色	雁振瓦			1	1
合計		2	1	2	5

第 44 表　大和系丸瓦集計表

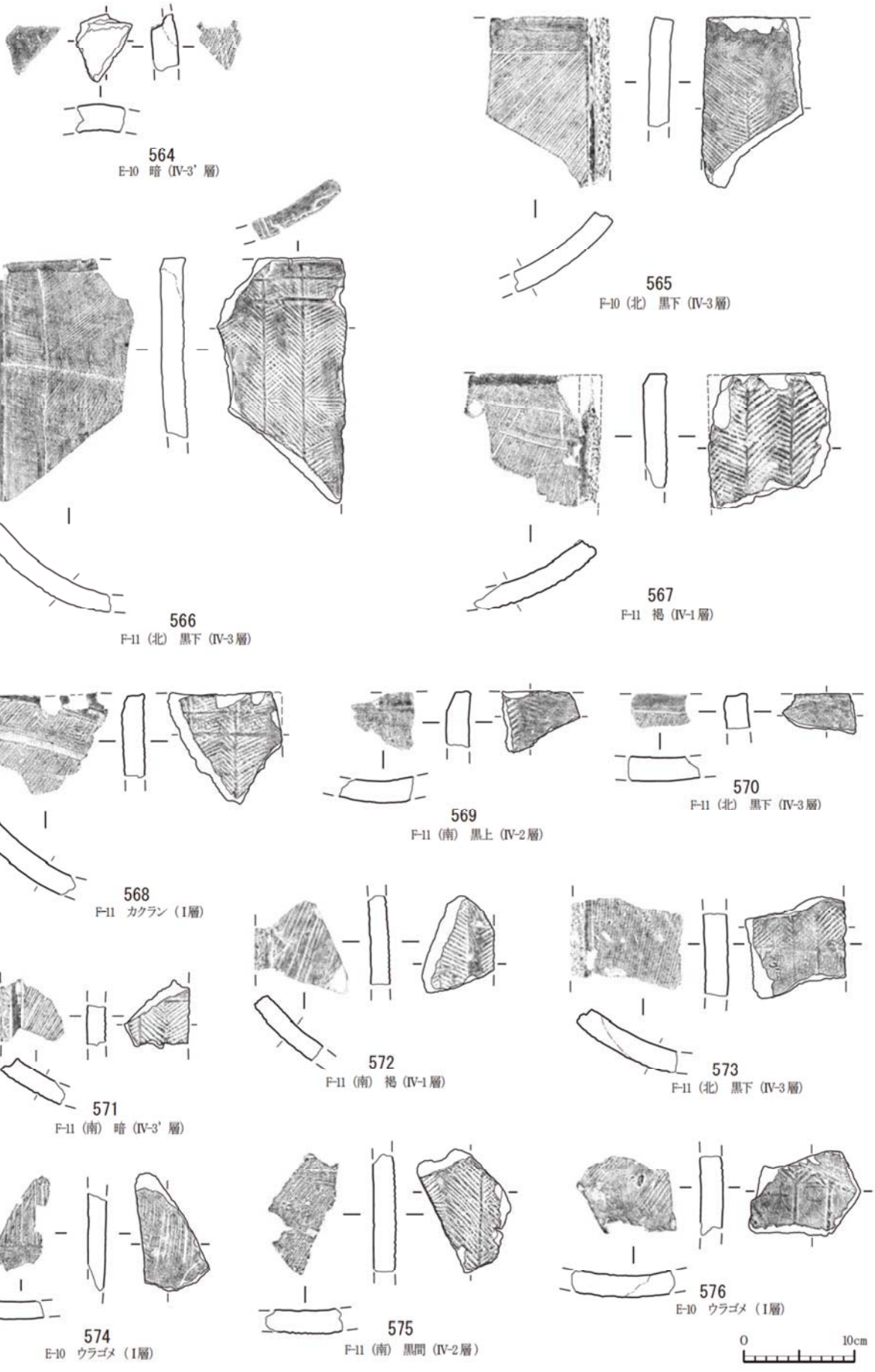
合計 / 点数			地区 / 層						合計
			北区		南区				
色調	部位	角	Ⅳ-3	Ⅳ-3'	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	
灰色	玉縁部	角１つ				1		2	3
		角なし	5		1	1			7
	端部	角なし		1		1			2
	筒部	角なし		1		2	2	12	17
褐色	玉縁部	角１つ	1					1	2
		角２つ						1	1
		角なし				1			1
	筒部	角なし				2	1	2	5
合計			6	2	1	8	3	18	38
筒部以外の点数			6	1	1	4	0	4	16

第 45 表　大和系平瓦集計表

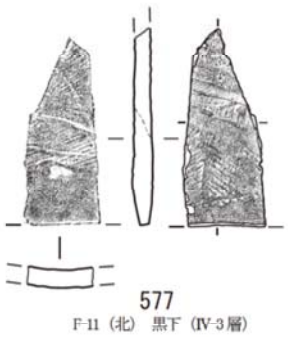
合計 / 点数			地区 / 層													個体計算	最低個体数
			北区						南区				不明		合計		
色調	部位	角	I	IV-1	IV-2	IV-3	IV-3'	IV-4	I	II	III	IV	I	不明			
灰色	広端部	角１つ		1		9	1			2	1	3	1		18	9	
		角なし	1		5	18			2	2	1	5		1	35	—	
	狭端部	角１つ			1	9					2	4			16	8	9
		角なし	1		1	5	2			2		5	1		17	—	
	筒部	角なし	13	9	23	81	10	1	3	27	14	74			255	—	
褐色	広端部	角１つ					1								1	0	
		角なし				2				2		2			6	—	
	狭端部	角１つ			1	2	1			2					6	3	3
		角なし	2		2	3				2					9	—	
	筒部	角なし	3	3	3	6	9		1	24	5	9			63	—	
合計			20	13	36	135	24	1	6	63	23	102	2	1	426	20	12
筒部以外の点数			4	1	10	48	5	0	2	12	4	19	2	1	108		

第 46 表　大和系平瓦厚さ集計表

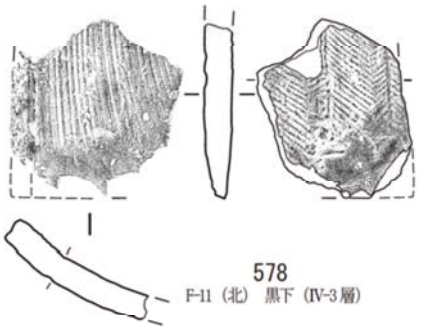
合計 / 点数				地区 / 層												合計	厚さ別合計
				北区						南区				不明			
色調	部位	厚さ	側面形態	I	IV-1	IV-2	IV-3	IV-3'	IV-4	I	II	III	IV	I	不明		
灰色	広端部	(1)～1.6	a(粘土押し上げ)				1									1	12
			b（二面）				1									1	
			c（一面）				1									1	
			不明			1	6						1		1	9	
		(2)1.7～1.9	a(粘土押し上げ)				2									2	24
			b（二面）				5						3			8	
			c（一面）				1				2					3	
			不明	1		3	3			1			3			11	
		(3)2.0～2.2	a(粘土押し上げ)					1				1				2	17
			b（二面）		1		1							1		3	
			c（一面）				1									1	
			不明			1	5			1	2	1	1			11	
	狭端部	(1)～1.6	c（一面）			1	1									2	6
			不明			1		1					2			4	
		(2)1.7～1.9	a(粘土押し上げ)				2									2	17
			b（二面）									1	3			4	
			c（一面）				2					1				3	
			不明				4				1		2	1		8	
		(3)2.0～2.2	a(粘土押し上げ)				2									2	9
			b（二面）				2						1			3	
			c（一面）								1					1	
			不明	1			1						1			3	
		(4)2.3～	不明					1								1	1
	筒部	(1)～1.6	a(粘土押し上げ)	2		1	4						2			7	62
			b（二面）				2						2			4	
			c（一面）	1			3				2		1			7	
			不明	3	3	7	10	4			4	7	6			44	
		(2)1.7～1.9	a(粘土押し上げ)			1	4						1			6	119
			b（二面）	2	1	1	5				2	2	8			21	
			c（一面）		1	2	2	1				1				7	
			不明	3	1	8	36	1	1		7	1	27			85	
		(3)2.0～2.2	a(粘土押し上げ)										3			3	61
			b（二面）			1		1			2	1	3			8	
			c（一面）	1			1				1					3	
			不明		3	2	12	3		2	8	2	15			47	
		(4)2.3～	b（二面）							1	1		1			3	13
			c（一面）				1									1	
			不明	1			1						7			9	
褐色	広端部	(1)～1.6	b（二面）					1								1	2
			不明				1									1	
		(2)1.7～1.9	不明								2					2	2
		(3)2.0～2.2	不明										2			2	2
		(4)2.3～	不明				1									1	1
	狭端部	(1)～1.6	a(粘土押し上げ)					1								1	1
		(2)1.7～1.9	b（二面）			1	1									2	6
			不明			2	1				1					4	
		(3)2.0～2.2	a(粘土押し上げ)				1									1	7
			b（二面）				1				2					3	
			不明	1			1				1					3	
		(4)2.3～	不明	1												1	1
	筒部	(1)～1.6	a(粘土押し上げ)					1								1	12
			b（二面）	2												2	
			c（一面）									1	1			2	
			不明			1	2	2		1	1					7	
		(2)1.7～1.9	a(粘土押し上げ)					1								1	35
			b（二面）					1				1	1			3	
			c（一面）			1		1			1					3	
			不明			3	1	1		1	15	2	5			28	
		(3)2.0～2.2	b（二面）				1	1			1					3	12
			不明				2				4	1	2			9	
		(4)2.3～	a(粘土押し上げ)	1				1								2	4
			不明								2					2	
合計				20	13	36	135	24	1	6	63	23	102	2	1	426	426


564
E-10 暗（IV-3' 層）
565
F-10（北） 黒下（IV-3層）
566
F-11（北） 黒下（IV-3層）
567
F-11 褐（IV-1層）
568
F-11 カクラン（I層）
569
F-11（南） 黒上（IV-2層）
570
F-11（北） 黒下（IV-3層）
571
F-11（南） 暗（IV-3' 層）
572
F-11（南） 褐（IV-1層）
573
F-11（北） 黒下（IV-3層）
574
E-10 ウラゴメ（I層）
575
F-11（南） 黒間（IV-2層）
576
E-10 ウラゴメ（I層）
0
10cm

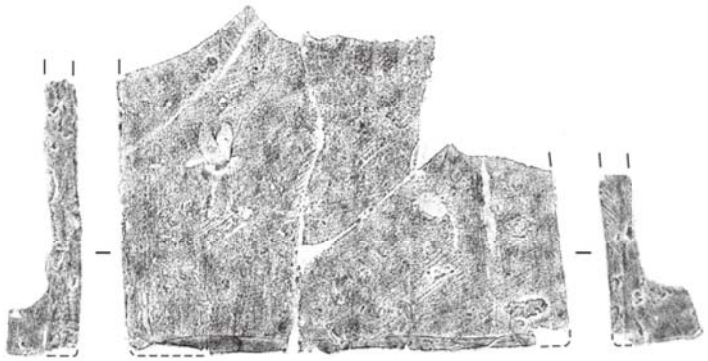
第64図　瓦1（高麗系瓦）

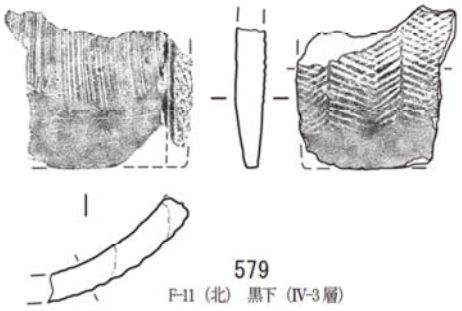


577
F-11（北） 黒下（Ⅳ-3層）

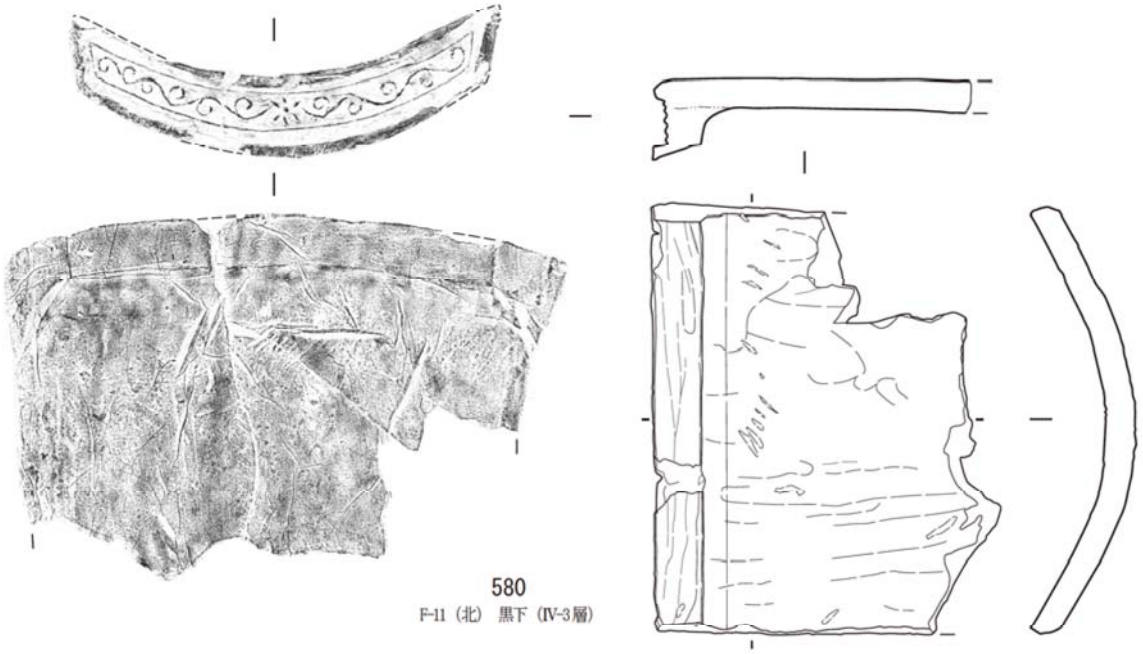


578
F-11（北） 黒下（Ⅳ-3層）

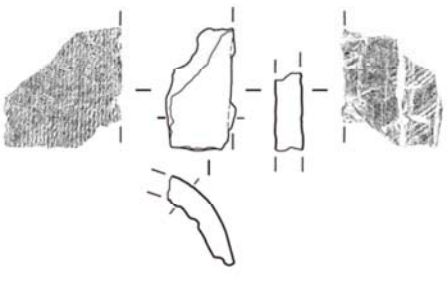




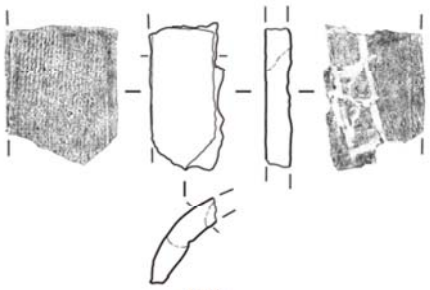
579
F-11（北） 黒下（Ⅳ-3層）



580
F-11（北） 黒下（Ⅳ-3層）

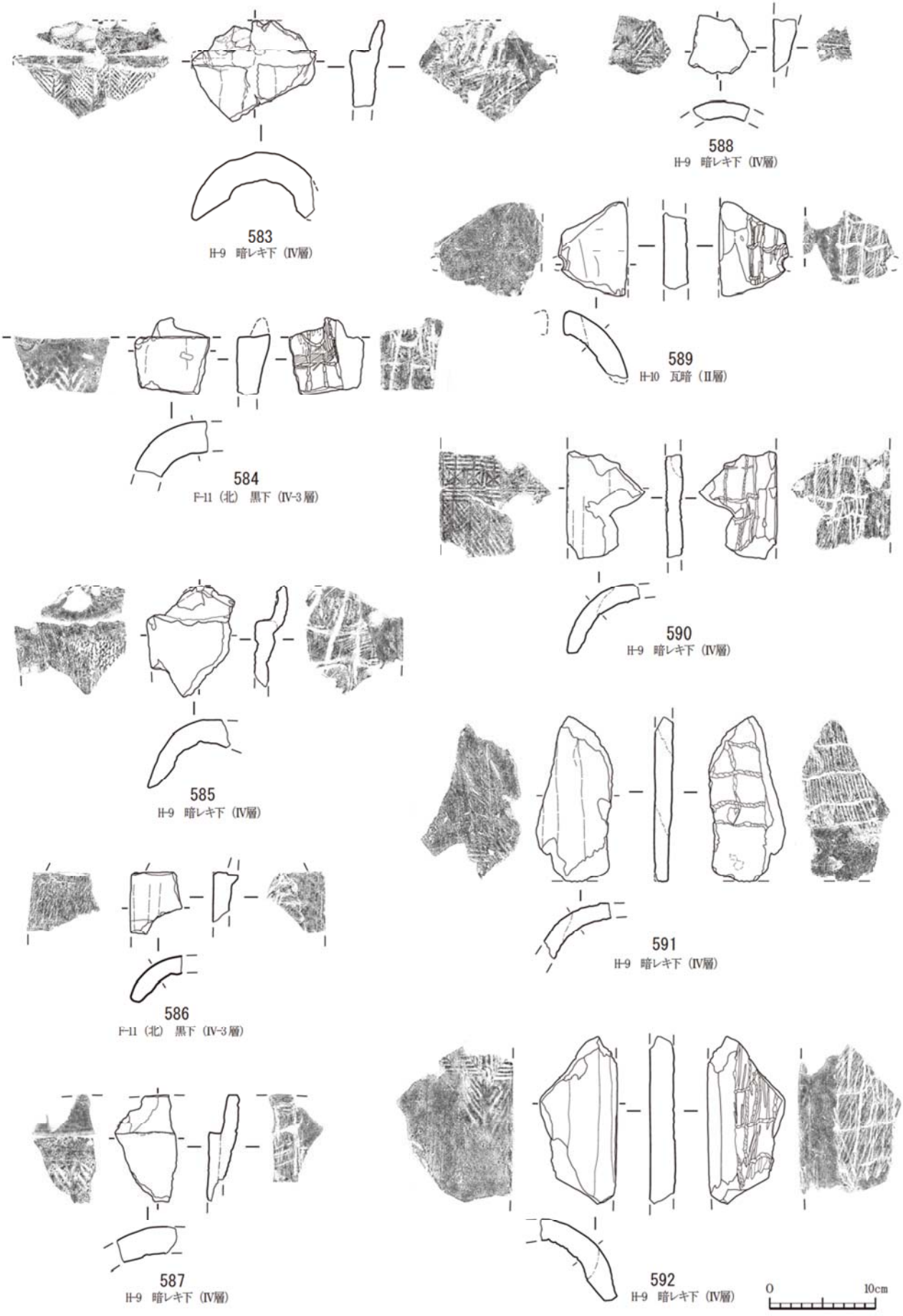


581
E-10 暗（Ⅳ-3’層）

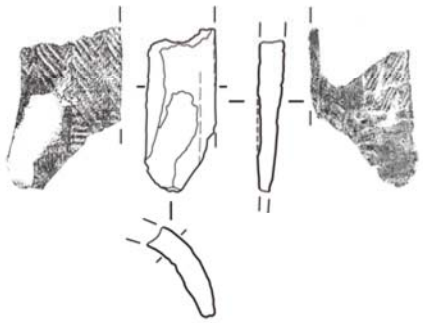


582
F-10 暗（Ⅳ-3’層）

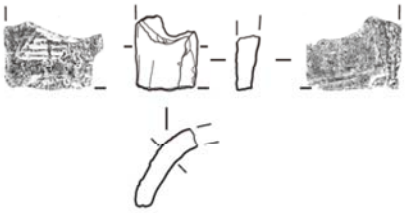
第65図　瓦2（高麗系瓦、大和系瓦）


583
H-9 暗レキ下（IV層）
588
H-9 暗レキ下（IV層）
589
H-10 瓦暗（II層）
584
F-11（北） 黒下（IV-3層）
590
H-9 暗レキ下（IV層）
585
H-9 暗レキ下（IV層）
591
H-9 暗レキ下（IV層）
586
F-11（北） 黒下（IV-3層）
587
H-9 暗レキ下（IV層）
592
H-9 暗レキ下（IV層）
0
10cm

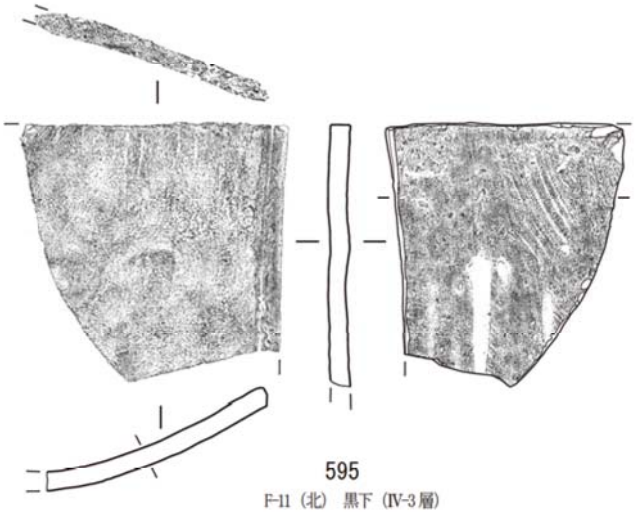
第66図　瓦3（大和系瓦）



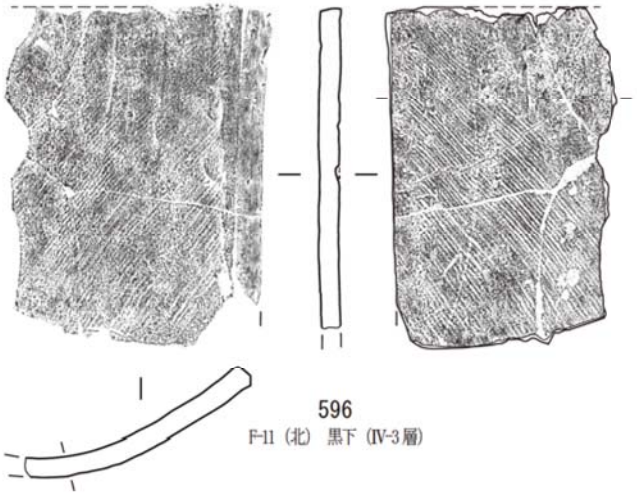
593
I-9　暗レキ（II層）



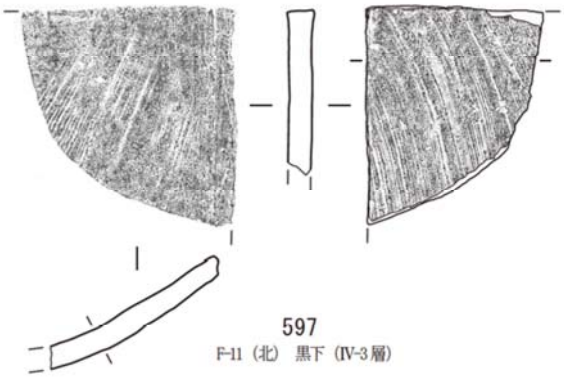
594
H-9　暗レキ下（IV層）



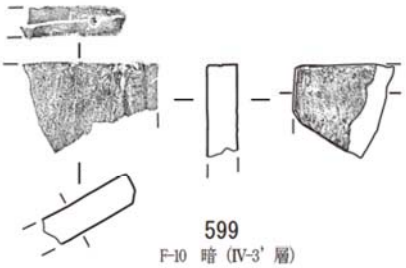
595
F-11（北）　黒下（IV-3層）



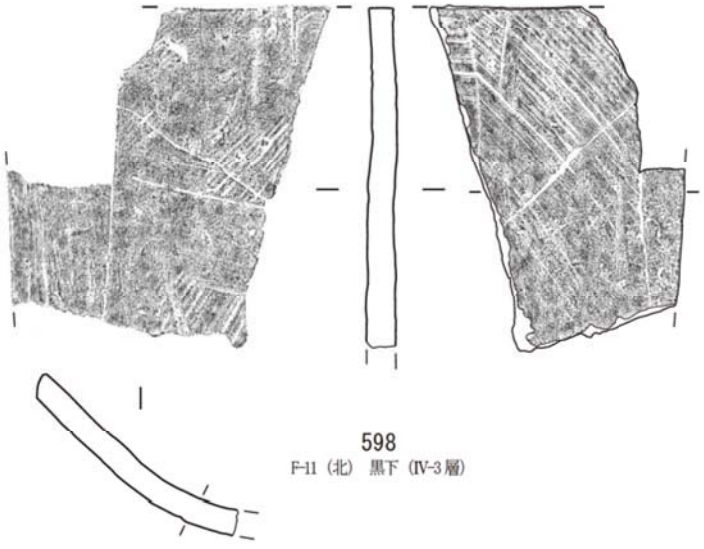
596
F-11（北）　黒下（IV-3層）



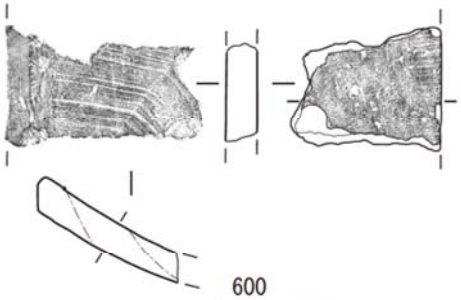
597
F-11（北）　黒下（IV-3層）



599
F-10　暗（IV-3'層）

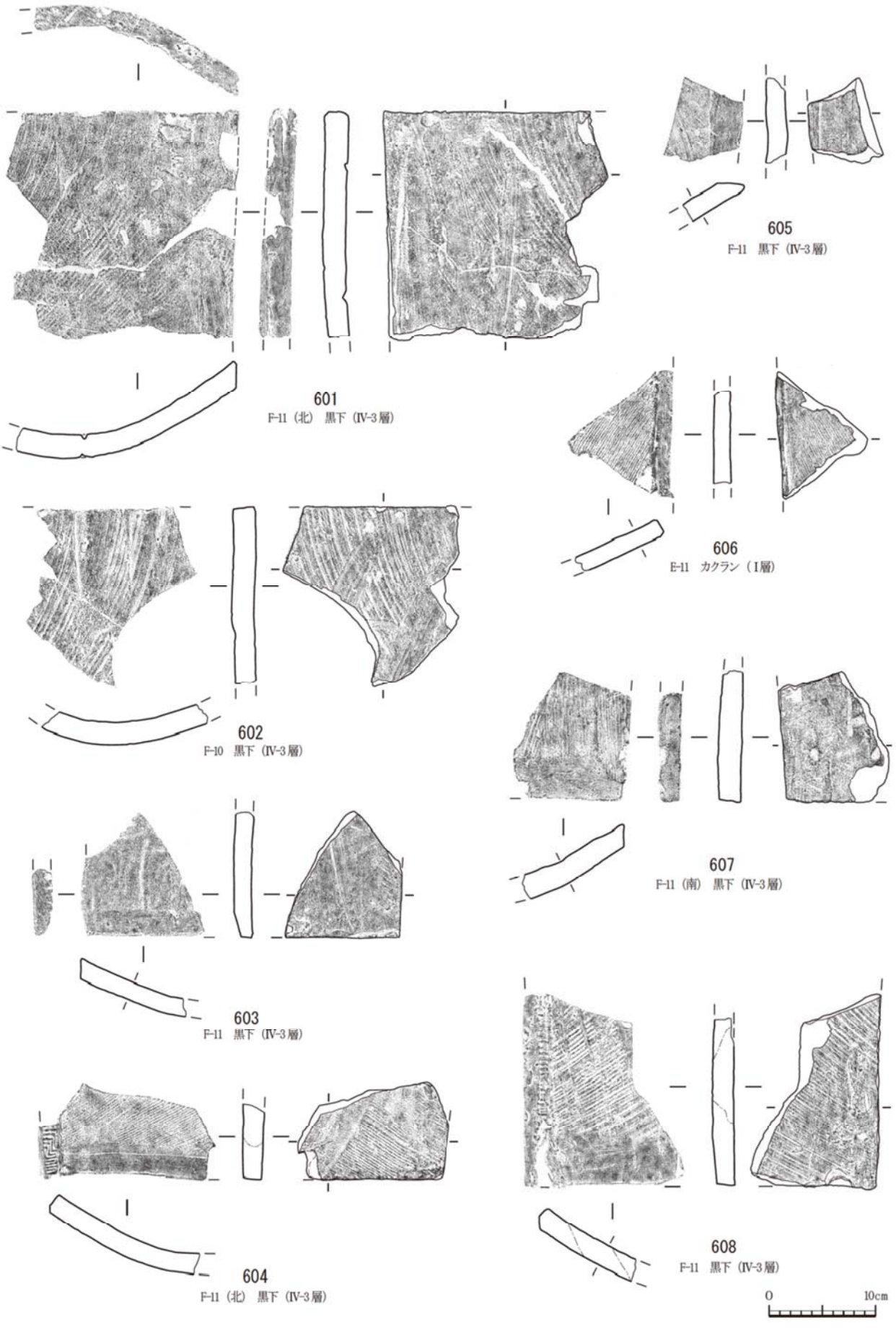


598
F-11（北）　黒下（IV-3層）

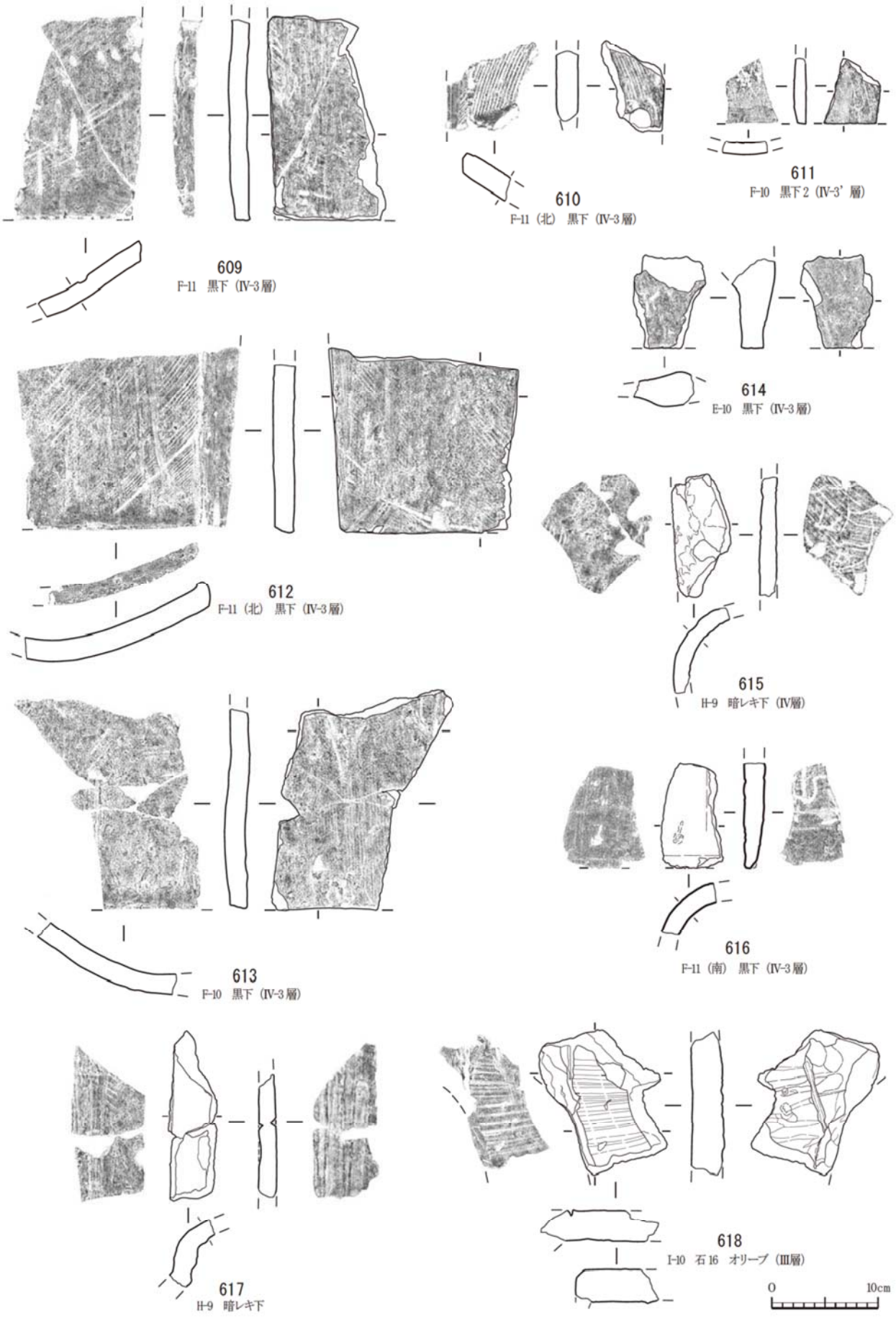


600
F-11（南）　黒上（IV-2層）

第67図　瓦4（大和系瓦）


601
F-11（北） 黒下（IV-3層）
602
F-10 黒下（IV-3層）
603
F-11 黒下（IV-3層）
604
F-11（北） 黒下（IV-3層）
605
F-11 黒下（IV-3層）
606
E-11 カクラン（I層）
607
F-11（南） 黒下（IV-3層）
608
F-11 黒下（IV-3層）
0
10cm

第68図　瓦5（大和系瓦）


609
F-11 黒下 (IV-3層)
610
F-11 (北) 黒下 (IV-3層)
611
F-10 黒下2 (IV-3' 層)
612
F-11 (北) 黒下 (IV-3層)
613
F-10 黒下 (IV-3層)
614
E-10 黒下 (IV-3層)
615
H-9 暗レキ下 (IV層)
616
F-11 (南) 黒下 (IV-3層)
617
H-9 暗レキ下
618
I-10 石16 オリーブ (III層)
0
10cm

第69図　瓦6（大和系瓦）

第47表　高麗・大和系瓦観察表（1）

遺物No.	種類		部位	色調	観察事項（数字はcm）	地区	グリッド	層	調査時土層
564	高麗系瓦	有段式平瓦	筒部	褐色	厚み有段部1.0、筒部2.2。凸面ﾅﾃﾞ、凹面布目痕、コビキ痕（幅0.2）。	北	E10	Ⅳ-3'	暗褐色土
565	高麗系瓦	平瓦	広端部	灰色	厚み1.8。凸面羽状文（枠幅5.5）、広端ﾅﾃﾞｹｼ5.0。凹面布目痕不明瞭、コビキ痕（幅0.1）、狭端面取り1.0、ﾅﾃﾞｹｼ2.5．側面切り込み0.6。	北	F10	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
566	高麗系瓦	平瓦	広端部	灰色	厚み2.0．凸面羽状文（枠幅3.5、叩き板推定7.0）、横線あり、打捺文1類。凹面布目痕（幅0.1）、コビキ痕（幅0.3）不明瞭、広端10.0上に細紐圧痕。布継ぎ目あり。広端面取り1.0。広端面圧痕（幅0.7）あり。側面切り込み0.7.	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
567	高麗系瓦	平瓦	広端部	灰色	厚み1.9。凸面羽状文（枠幅4.5、叩き板推定8.0）、広端まで。凹面布目痕、コビキ痕（幅0.2）、広端面取り0.8、ﾅﾅﾒﾅﾃﾞ（幅0.8）部分的あり。	北	F11	Ⅳ-1	褐色土
568	高麗系瓦	平瓦	広端部	灰色	厚み2.0。凸面羽状文（枠幅4.5）、打捺文1類か。凹面布目痕、コビキ痕（幅0.1）。ﾅﾅﾒﾅﾃﾞ（幅0.8）部分的あり。側面切り込み0.5。	北	F11	Ⅰ	撹乱
569	高麗系瓦	平瓦	広端部	灰色	厚み2.0．凸面羽状文、広端まで見られるがﾅﾃﾞｹｼされる。凹面布目痕、コビキ痕（幅0.1）、広端面取り1.8。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
570	高麗系瓦	平瓦	広端部	灰色	厚み2.1。凸面コビキ痕？凹面コビキ痕（幅0.1）。広端面取り幅1.0。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
571	高麗系瓦	平瓦	筒部	灰色	厚み1.7．凸面羽状文。凹面布目痕、コビキ痕（幅0.2）。側面切り込み0.9。	北	F11南	Ⅳ-3'	暗褐色土
572	高麗系瓦	平瓦	筒部	灰色	厚み1.7。凸面羽状文（枠幅3.5）、凹面布目痕、コビキ痕（幅0.5）。側面切り込み0.5.	北	F11南	Ⅳ-1	褐色土
573	高麗系瓦	平瓦	筒部	灰色	厚み2.2。凸面羽状文（枠幅4.5）、「麗瓦」、打捺文1類。凹面布目痕（間隔0.1）顕著。側面切り込み0.5。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
574	高麗系瓦	平瓦	狭端部	灰色	厚み1.6。凸面コビキ痕ﾅﾃﾞｹｼ。凹面布目痕、コビキ痕（幅0.5）、狭端ﾅﾃﾞｹｼ4.5.	北	E10	Ⅰ	石積裏込
575	高麗系瓦	平瓦	筒部	灰色	厚み2.0．凸面羽状文、横線あり、打捺文1類。凹面布目痕、コビキ痕（幅0.2）。ﾅﾅﾒﾅﾃﾞ（幅0.8）あり。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（間層）
576	高麗系瓦	平瓦	筒部	灰色	厚み2.0．凸面羽状文（枠幅3.3）、「大天」（連続するか？）、打捺文3類。凹面布目痕、コビキ痕（幅0.3）、ﾅﾃﾞｹｼあり。	北	E10	Ⅰ	石積裏込
577	高麗系瓦	平瓦	狭端部	灰色	厚み1.3。凸面羽状文、上側ﾖｺﾅﾃﾞｹｼ。凹面布目痕、コビキ痕ﾅﾃﾞｹｼ。狭端面取り3.0。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
578	高麗系瓦	平瓦	狭端部	灰色	厚み1.8。凸面羽状文（枠幅5.0）、狭端ﾅﾃﾞｹｼ4.0。凹面布目痕、コビキ痕（幅0.5）、狭端面取り3.5。側面切り込み0.3。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
579	高麗系瓦	平瓦	狭端部	褐色	厚み1.9。凸面羽状文（枠幅5.3）、狭端ﾅﾃﾞｹｼ2.7。凹面布目痕、コビキ痕（幅0.5）、狭端面取り4.5。側面切り込み0.9。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
580	大和系瓦	軒平	広端部	灰色	全高10.5、瓦当（幅28.2、高5.2）、内区（幅26.0・高3.2）、顎幅3.3。平瓦厚み2.0、残存長さ23.5。重量2275g。外区上縁面取り。顎裏面タテケズリ。平瓦側面b、凹面側コビキ痕残る。両面離れ砂。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
581	大和系瓦	丸瓦	筒部	灰色	厚み1.8。凸面縄目文（紐幅0.2、撚り目長0.5）。凹面横吊り紐（幅0.5）、離れ砂明瞭。	北	E10	Ⅳ-3'	暗褐色土
582	大和系瓦	丸瓦	端部	灰色	厚み1.7。凸面縄目文（紐幅0.2、撚り目長0.5）。凹面横吊り紐（幅0.3）、離れ砂明瞭。	北	F10	Ⅳ-3'	暗褐色土
583	大和系瓦	丸瓦	玉縁部	褐色	厚み玉縁部1.0、筒部2.2。凸面羽状文（枠幅3.7）、横線あり、羽状文1類。凹面離れ砂少量、コビキ痕（幅0.5）。	南	H9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
584	大和系瓦	丸瓦	玉縁部	灰色	厚み玉縁部1.1、筒部1.8．凸面羽状文、ﾅﾃﾞｹｼ。凹面格子吊り紐（間隔2.5、紐幅0.3、撚り目長0.6）、離れ砂不明瞭。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
585	大和系瓦	丸瓦	玉縁部	褐色	厚み玉縁部1.0、筒部1.7。凸面縄目文（紐幅0.2、撚り目長0.6）、凹面格子吊り紐？（間隔2.5、紐幅0.5）、離れ砂顕著。	南	H9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
586	大和系瓦	丸瓦	玉縁部	褐色	厚み玉縁部1.0、筒部1.6。凸面縄目文？ﾅﾃﾞｹｼか。凹面吊り紐？離れ砂少量。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
587	大和系瓦	丸瓦	玉縁部	灰色	厚み玉縁部1.1、筒部1.7．凸面羽状文、ﾅﾃﾞｹｼ。格子吊り紐（間隔2.5、紐幅0.4、撚り目長0.6）、離れ砂不明瞭。	南	H9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
588	大和系瓦	丸瓦	筒部	灰色	厚み2.0。凸面羽状文、横線あり、羽状文1類、離れ砂少量。凹面ﾅﾃﾞｹｼ。	南	H9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
589	大和系瓦	丸瓦	筒部	灰色	厚み2.2。凸面ﾅﾃﾞｹｼ。凹面格子吊り紐（間隔2.0～3.0、紐幅0.2、撚り目長0.6）。釘孔（径1.3）。離れ砂極少量。	南	H10	Ⅱ	瓦混暗褐色土
590	大和系瓦	丸瓦	筒部	灰色	厚み1.6。凸面羽状文、横線あり、羽状文1類。凹面格子吊り紐（間隔2.0～3.0、紐幅0.2、撚り目長0.3）。離れ砂少量。	南	H9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
591	大和系瓦	丸瓦	筒部	灰色	厚み1.6．凸面羽状文、ﾅﾃﾞｹｼ。凹面コビキ痕（幅0.5）、横吊り紐（間隔2.0～3.0、紐幅0.3、撚り目長0.5）、上方ﾅﾃﾞｹｼ、離れ砂少量。	南	H9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
592	大和系瓦	丸瓦	筒部	灰色	厚み2.2。凸面羽状文、格子あり、羽状文1類、ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞｹｼ。凹面格子吊り紐（間隔3.5、横紐幅0.2、縦紐幅0.3、撚り目長0.5）。離れ砂不明瞭。	南	H9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
593	大和系瓦	丸瓦	端部	灰色	厚み1.6．凸面羽状文、ﾅﾃﾞｹｼ。凹面コビキ痕（幅0.5）、格子吊り紐（間隔2.0～3.0、紐幅0.3、撚り目長0.5）、上方ﾅﾃﾞｹｼ、離れ砂極少量。	南	I9	Ⅱ	暗褐色礫混土
594	大和系瓦	丸瓦	玉縁部	灰色	厚み1.4．凸面羽状文、横線あり、羽状文1類。凹面ﾅﾃﾞｹｼ、離れ砂少量。	南	H9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
595	大和系瓦	平瓦	広端部	灰色	側面c。厚み1.3．凸面コビキ痕不明瞭、ﾀﾃﾅﾃﾞ、ﾕﾋﾞﾅﾃﾞ。凹面コビキ痕不明瞭、ﾅﾃﾞｹｼ。離れ砂凹面、狭端面顕著。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
596	大和系瓦	平瓦	広端部	灰色	側面b、丁寧なﾅﾃﾞ。厚み1.4．凸面コビキ痕（幅0.3）。凹面コビキ痕不明瞭、ﾅﾃﾞｹｼ。離れ砂凹面顕著。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
597	大和系瓦	平瓦	広端部	灰色	側面c。厚み1.5．凸面コビキ痕（幅0.5）比較的顕著。凹面コビキ痕（幅0.3）、広端不徹底のﾅﾃﾞ。離れ砂凹面少量。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
598	大和系瓦	平瓦	広端部	灰色	厚み1.8．側面b。凸面コビキ痕（幅0.5）継目残る。狭端側ﾅﾃﾞｹｼ。凹面コビキ痕若干あり、ﾖｺﾅﾃﾞ、側面側ﾀﾃﾅﾃﾞ。離れ砂凹面顕著、凸面・広端面少量。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
599	大和系瓦	平瓦	広端部	灰色	側面c、上方コビキ痕。厚み2.0．凸面粗いﾅﾃﾞ、凹面丁寧なﾅﾃﾞ。広端面にヘラ記号「—」。離れ砂両面あり。	北	F10	Ⅳ-3'	暗褐色土

第 48 表　高麗・大和系瓦観察表（２）

遺物No.	種類		部位	色調	観察事項（数字はcm）	地区	グリッド	層	調査時土層
600	大和系瓦	平瓦	筒部	灰色	側面ｂ。厚み2.1．凹面、側面コビキ痕顕著。離れ砂両面顕著。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
601	大和系瓦	平瓦	広端部	灰色	側面ｂ。厚み2.1．凸面コビキ痕（幅0.1）、ﾀﾃｭﾋﾞﾅﾃﾞ。凹面コビキ痕不明瞭、ﾀﾃﾅﾃﾞ。離れ砂両面顕著。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
602	大和系瓦	平瓦	広端部	灰色	厚み2.1。コビキ痕・離れ砂両面あり。凹面タテ方向の板状圧痕（幅5.0）。	北	F10	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
603	大和系瓦	平瓦	狭端部	灰色	側面ｃ。厚み1.6。凸面コビキ痕不明瞭、ﾀﾃﾅﾃﾞ。凹面丁寧なﾃﾃﾅﾃﾞ、狭端面取り幅2.4。離れ砂両面少量。	北	F11	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
604	大和系瓦	平瓦	狭端部	灰色	側面ｂ。厚み2.1。両面コビキ痕（幅0.3）、離れ砂共に顕著。凹面狭端面取り3.0。側面上方糸切？	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
605	大和系瓦	平瓦	筒部	灰色	側面ａ、削りが鋭角。厚み1.9、凸面コビキ痕ﾅﾃﾞｹｼ、ﾀﾃｭﾋﾞﾅﾃﾞ。凹面ﾅﾃﾞｹｼ。離れ砂両面顕著。	北	F11	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
606	大和系瓦	平瓦	筒部	灰色	側面ｂ、コビキ痕ありか。厚み1.6。両面コビキ痕明瞭（幅0.2）。離れ砂両面あり。	北	E11	Ⅰ	撹乱
607	大和系瓦	平瓦	狭端部	灰色	側面ｃ。厚み2.3。凸面コビキ痕ナデ消し。凹面狭端面取り幅4.0、丁寧なタテナデ幅3.0。離れ砂凸面少量。	北	F11南	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
608	大和系瓦	平瓦	狭端部	褐色	側面ｂ。厚み2.0。両面、側面上方コビキ痕（幅0.3）顕著。離れ砂も顕著。凹面狭端面取り4.5。	北	F11	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
609	大和系瓦	平瓦	狭端部	灰色	側面ｃ。厚み2.3。凸面コビキ痕（幅0.5）ﾀﾃﾅﾃﾞｹｼ。凹面コビキ痕（幅0.6）、筒端部ﾅﾃﾞ（幅1.5）、狭端面取り幅3.7、狭端面不整形。離れ砂両面顕著。	北	F11	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
610	大和系瓦	平瓦	狭端部	褐色	側面ｂ。厚み2.1．両面、側面上方コビキ痕（幅0.3）顕著。離れ砂も顕著。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
611	大和系瓦	平瓦	狭端部	灰色	厚み1.1。両面コビキ痕・離れ砂あり。狭端面取り幅1.3.	北	F10	Ⅳ-3'	黒褐色土（下層2）
612	大和系瓦	平瓦	狭端部	灰色	側面ａ。厚み2.0．凸面コビキ痕ﾅﾃﾞｹｼ。凹面コビキ痕（幅0.2）、広端面取り幅2.5。離れ砂顕著。	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
613	大和系瓦	平瓦	狭端部	灰色	厚み1.7．凸面ﾀﾃﾅﾃﾞ。凹面ﾀﾃﾅﾃﾞ、狭端面取り幅2.3．離れ砂両面あり。	北	F10	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
614	大和系瓦	平瓦	広端部	灰色	広端厚み2.1。被熱のためか大きく変形。	北	E10	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
615	大和系瓦	雁振瓦	筒部	灰色	厚み1.5。凸面ﾅﾃﾞ、凹面コビキ痕（幅0.5）。離れ砂少量。被熱のためか一部黒変。	南	H9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
616	大和系瓦	雁振瓦	端部	灰色	厚み1.6．凸面縄目文かコビキ痕？丁寧なﾅﾃﾞ。凹面縄目？端部面取り5.0、離れ砂顕著。	北	F11南	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
617	大和系瓦	雁振瓦	筒部	褐色	厚み1.8。凸面羽状文？、両面ﾀﾃﾅﾃﾞ。	南	H9	Ⅳ	暗褐色混礫土下部
618	大和系瓦	鬼瓦	下端部右側	灰色	厚み2.7。鬼面にはコビキ痕（幅0.5）、左上部に円弧状の回線（幅0.8）あり。アーチ部は丁寧に面取り。裏面は突起物がはがれた痕、また未整形なのか凹凸が激しい。離れ砂不明。	南	I10	Ⅲ	オリーブ褐色土

③明朝系瓦

明朝系は、まず色調により大きく灰色系、赤色系に分けられ、おおまかに前者から後者に移行するものとされており、その分類については後述する。一方、瓦当の分類は、上原静（1994･2008）と石井龍太（2006 a・b）の研究を参考にして分類したところ、その多くは該当するタイプであったので、両分類を併記してその特徴を述べる。また、今回、近年の喜名窯産の瓦が報告されたことにより（上原ほか2011）、該当するものを一定量抽出することができた。そこで、喜名窯系瓦についてはまとめて述べることとして、その他主体的なものについて説明していく。なお、筒部のみの破片は集計していない。

色調・焼成　色調で見ると灰色系、褐色系、赤色系の３つに分けられる。それに、焼成の違いとして前３者よりは硬質で、後述する喜名系とは異なるものを陶器質として、計４つに分けた。

灰色系　灰色のものである。ただ、本来なら陶器質に入れるべきものも含まれている可能性がある。

褐色系　灰色と赤色の中間的なもので、鈍いものは黄褐色、明るいものは黄橙色のものまでを含む。

赤色系　赤色、橙色のものとした。なお、マンガン釉と呼ばれる黒色の薄い釉が掛けられるものもある。

陶器質　焼成が堅緻で沖縄産無釉陶器に近くなっており、表裏面の色調とは異なって、断面が赤色であるのが特徴である。

軒丸瓦（619 ～ 655）（第 70 ～ 73 図、第 49・55・56 表、図版 48 ～ 51）

瓦当は、石井分類では大別５タイプ、上原分類では大別３タイプとなるが、それぞれ細分類により対応できるものである。ただ、一部、該当しないもの、完全に同一とは言えないものや区別できないものもある。以下、分類及び細分類ごとに特徴を説明する。なお、石井は生産地の一つである湧田古窯跡で出土した軒丸瓦を明確にしているので、該当するものは「湧田古窯跡出土」と記しておきたい（石井 2007）。

Ａ－１－Ⅰ（石井）・側視１型ＩＡ式（上原）

石井分類では、（Ａ）瓦当接合角度が直角で灰褐色、（１）陶笵で裏面側縁の笵バリが未整形、（Ⅰ）花芯が丸く花弁の先端がやや屈曲する表現でデザイン化された牡丹文様Ⅰのグループである。また、牡丹文様ではないが、（Ａ）と（１）の特徴を有するもの（650）も本グループに相当するものと考えられる。上原分類では、牡丹の茎・子葉・花の側面観が表現された側視１型の内、上段の花弁が兎の耳状に大きく長いＩＡ式とする。

天界寺Ｃ（石井）・首城下ＩＡｂ01式（上原）（624）　花芯は丸く格子目が入り、花弁は輪郭を強調し、茎は直線的に伸び蔓が一対表現されたものである。湧田古窯跡出土。

浦添城Ａ（石井）・首西ＩＡｅ03式（上原）（619）　花芯は上向きの３本の太線、花弁は細線で左右を挟むように描かれるが左上端と両下端は閉じず、蔓と茎の区別は不明瞭で珠文と接するような線状の表現となるものである。湧田古窯跡出土。

西のアザナⅠ（石井）・首西ＩＡｅ04式（上原）（620・621・623）　花芯は１本の長い線、花弁は本来花芯であった線と融合し左右の先端がアーチ状に接し、蔓・茎の表現は分からなくなる。石井によると、浦添城Ａのものと笵傷が一致するので、その彫り直しとされる。湧田古窯跡出土。

仮称＜御内原北Ａ＞（石井）・＜首御北ＩＡｄ01式＞（上原）（622）　花芯は西のアザナⅠと同様だが、花弁の先端が開いていることは浦添城Ａと類しており、両者の中間的なタイプであり、まさに彫り直しであることが裏付けられる。本資料は、既に上原により首里城跡御内原北地区の報告で、オウチＩＡｄ01とされているものに該当すると思われる（上原2010）。石井分類では報告されていなかったので、その用語法に基づき最初に発見された遺跡名をとり「御内原北Ａ」とし、上原分類でも「首御北ＩＡｄ01」と仮称しておきたい。

天界寺Ａ（石井）・湧田ⅡＡ01式（上原）（650）　牡丹文様ではなくかなりデザイン化された花文で、楕円形の花芯に、その上方に複線による蔓状、花弁と葉は先が尖った表現がなされる。先述したように、文様以外は本グループと共通している。湧田古窯跡出土。

Ａ－２－Ⅱ（石井）・側視１型ＩＢ式（上原）

石井分類では、（Ａ）瓦当接合角度が直角で灰褐色、（２）木笵で裏面側縁の笵バリを整形、（Ⅱ）花を斜め上から見た表現の牡丹文様Ⅱのグループである。上原分類では、側視１型の内、花柱を備え花弁が瓦当面全体に広がるＩＢ式とする。

浦添城Ｄ（石井）・湧田ＩＢａ01式（上原）（625～627）　最も写実的な牡丹の表現と言え、花芯は上部がやや突出し横に長く、細かな格子目で雌しべが表現され、花弁は上に４枚、下に３枚配され、茎は下へ直線的に伸び一対の葉が付され、その葉脈が凸線細かく表現され、縁辺の鋸歯も細かい。全体的に焼成が良好、胎土も精良であり、外縁や裏面のナデ調整も丁寧である。湧田古窯跡出土。

天界寺Ｄ（石井）・湧田ＩＢａ02式（上原）（628～630）　浦添城Ｄとほぼ同様であるが、花弁が２枚増え、葉も大振りとなり、全体的に不鮮明である。また、浦添城Ｄに比べると、裏面のナデ調整はやや粗い。湧田古窯跡出土。

浦添城Ｃ（石井）・浦城ＩＢａ01式（上原）（631・632）　花芯は小さく逆三角形となり、上方の花弁は細長く、下方は小振りのものとなる。裏面のナデ調整は粗く、指オサエの痕が顕著である。631は、文様は鮮明だが、中央付近に水平方向の笵傷が見られる。湧田古窯跡出土。

天界寺Ｅ（石井）・湧田ＩＢａ03式（上原）（633～635）　花芯は上縁が水平となった半円形のもので下方には萼（がく）の表現がなされ、花弁は４対となり、その下方は茎と葉が融合したのか、かぎ状の文様となる。文様はやや不鮮明で、裏面のナデ調整は粗く、指オサエの痕が顕著である。湧田古窯跡出土。

Ｂ－２－Ⅱ（石井）・側視１型ＩＢ式（上原）

石井分類では、（Ｂ）瓦当接合角度が鈍角で灰褐色、（２）木笵で裏面側縁の笵バリを整形、（Ⅱ）先の牡丹文様Ⅱより花弁が長い表現のグループである。上原分類では、側視１型ＩＢ式の中でもやはり花弁が長いものとする。

湧田古窯Ｒ（石井）・首木ＩＢｂ01式（上原）（636～638）　花芯は天界寺Ｅと同様で、萼（がく）の上方の花弁は左５枚、右４枚、下方は小振りの葉もしくは花弁のような文様が３枚見られる。裏面はタテナデが顕著なものも

多い。全体的に文様は鮮明であるが、636は、文様がやや不鮮明で、上半に水平方向の笵傷が２ヶ所ある。湧田古窯跡出土。

旧中城御殿Ａ（石井）・（近似）湧田ＩＢａ04式？（上原）（641・642）　花芯と花弁は天界寺Ｅと同様であるが、萼の下方の花弁状の文様が２枚となる。文様は鮮明だが、右側の花弁の間に粘土がたまったような盛り上がりがある。上原分類では、湧田ＩＢａ04式に近いものと思われる。

湧田古窯Ｕ（石井）・湧田ＩＢａ04式（上原）（639・640）　花芯は天界寺Ｅと同様で、花弁は萼より上方は幅太のものが４対、下方には花弁なのか菱形状の文様が３つ配される。裏面はタテナデも見られ、文様は不鮮明である。湧田古窯跡出土。

内間御殿Ｂ（石井）・円覚ＩＢｂ02式（上原）（644 ～ 646）　花芯は半円形であるが格子目が施され、これまでよりも下方に位置する。花弁は長細く表現され、左が５枚、右が６枚で、萼は横線となり、その下に１点の突起が見られる。下半右側に水平方向の笵傷が顕著に見られるが、645は若干だが短い。

天界寺Ｆ（石井）・（近似）円覚ＩＢｂ01式（上原）（647）　花芯は内間御殿Ｂに比べると上縁が丸みを帯び、花弁は５対となり、萼の横線が若干長い。上原分類では、円覚ＩＢｂ01式に近いものと思われる。

Ｃ－２－Ⅱ（石井）・側視１型Ｂ式（上原）

石井分類では、（Ｃ）瓦当接合角度が鈍角で赤色である点以外は、（２）・（Ⅱ）は共通している。上原分類でも、先の側視１型ＩＢ式の花弁の長く赤色系であるとする。

北殿①（石井）・（近似）御茶ＩＢｂ01式（上原）（643）　花芯は格子目が見られず、花弁は全体的に小振りで、萼は「へ」字状となっている。上原分類では、赤色系である御茶ＩＢｂ01式に近いものと思われる。

Ｃ－２－Ⅳ（石井）・側視２型Ⅲ式（上原）

石井分類では、（Ｃ）瓦当接合角度が鈍角で赤色、（２）木笵で裏面側縁の笵バリを整形、（Ⅳ）花を上から見下ろした表現の牡丹文様Ⅳのグループである。上原分類では、花のみ大きく描く側視２型式の内、隅丸方形状の花芯をもつⅢ式とする。

内間御殿Ｄ（石井）・円覚Ⅲａ01式（上原）（651）　花芯は隅丸方形状でその中央には凹線が３本である。

内間御殿Ｅ（石井）・内間Ⅲａ01式（上原）（652・653）　花芯は隅丸方形状でその中央には凹線が４本である。

巴文＜新資料＞（649）　胎土・色調等は琉球近世瓦（明朝系）の褐色系で、いわゆるグスク時代の大和系瓦または近世大和瓦とは異なる。珠文は推定13個、巴文の頭部は丸めやや尖った形で、それぞれの頭部は若干接する。外縁の笵バリは丁寧に整形され、一方裏面は粗いナデがなされる。今のところ、この巴文の類例は探せていないため、新資料として捉えておきたい。

654・655は、瓦当は欠損しているが、側面端部が丁寧に整形されていることから、軒丸瓦の瓦当部とした。また、655は焼成前に筒部に釘孔とされるものが開けられており、先述した瓦当を有する645にも見られた。

軒平瓦（656 ～ 677）（第74 ～ 76図、第49・56表、図版52 ～ 54）

瓦当は、石井分類では大別４タイプ、上原分類では大別４タイプとなっているがその対応関係は一部整合していないが、細分類では対応している。なお、先述したように、湧田古窯跡出土軒平瓦（石井2008）はその旨を記した。

ａ－１－Ⅰ（石井）・側視１型ＩＡ・Ⅱ式（上原）

石井分類では、（ａ）瓦当裏面接合粘土が厚く、灰褐色、（１）陶笵で笵バリ未整形、瓦当裏面のナナメナデ、（Ⅰ）花芯が丸く花弁が上中下の３段に配された牡丹文様Ⅰのグループである。また、牡丹文様ではないが、（ａ）（１）が共通している666も本グループに相当する。上原分類では、牡丹の茎・子葉・花の側面観が表現された側視１型の内、花芯を中心に花弁が３段に配されたＩＡ式と、花が上下に展開するⅡ式が相当する。

西のアザナＢ（石井）・首西ＩＡａ02（上原）（656）　花弁の裂け目が全体的に小さく、葉は細長く伸び、葉脈が中心に１本のみ見られるものである。湧田古窯跡出土。

湧田古窯Ⅰ（石井）（657 ～ 659）　花芯は円形で表現され、葉は葉脈が中心だけでなく縁辺にも向けており、茎は右側へ伸びる。現在知られている瓦当文様の中で一番近い本タイプとしたが、小片で、文様も全体的に不鮮明なため、今後の検証が必要である。なお、上原分類では同一のものは提示されていない。湧田古窯跡出土。

湧田古窯Ｐ（石井）・首西Ⅱ01（上原）（666・669）　花芯が横長の楕円形で上方の花弁が扇状に表現され、葉は幅広のものである。拓本では文様が比較的鮮明に見えるものもあるが、全体的に摩滅が激しい。湧田古窯跡出土。

ａ－２－Ⅱ（石井）・側視１型ＩＢ・ⅢＡ・ⅢＢ式（上原）

石井分類では、（ａ）瓦当裏面接合粘土が厚く、灰褐色、（２）木笵で笵バリ整形が不徹底、瓦当裏面のナナメナデ、（Ⅱ）花を斜め上から見た表現の牡丹文様Ⅱのグループである。上原分類では、側視１型のうち立体的な花芯をもつＩＢ式、写実的な花文のⅢＡ式、抽象的な花文のⅢＢ式に含まれる。

右掖門①（石井）・首右ＩＢ01（上原）（660）　花芯は横長の楕円形で細かな凹線で表現され、横方向には細い蔓が緩いカーブを描きながら伸びる。文様は鮮明で肉厚的な表現で、全体の調整は丁寧である。

浦添城Ａ（石井）・首西ⅢＡ01（上原）（661～665・667・668）　花芯はやや小振りの楕円形で、それを中心として５枚の花弁が配され、葉は縁辺の鋸歯が大きく表現されている。文様は比較的鮮明なものが多い。湧田古窯跡出土。

湧田古窯Ｒ（石井）・天界ⅢＢａ03式（上原）（670～673）　花芯は円形に近くなり格子目で表現され、花弁は不整な円形のものを５枚配し、葉の内部は平坦で縁辺の鋸歯が先端を向き、下方にはＶ字状の文様となる。全体的に整形は丁寧である。670や672は水平方向の笵傷が数ヶ所見られ、長く使用された瓦当笵であることが分かる。670～672など瓦当裏がヨコナデされているものもあること、色調が明るいことから、ａ－２－Ⅱとｂ－３－Ⅱの移行的な瓦当文様であることも考えられるのではないか。湧田古窯跡出土。

湧田古窯Ｓ（石井）・首木ⅢＢａ01式（上原）（674）　文様の大半は湧田古窯Ｒと共通するが、中央下方の花弁の下端が尖っている点が異なる。湧田古窯跡出土。

ｂ－３－Ⅱ（石井）・側視１型ⅢＢ式（上原）

石井分類では、（ｂ）瓦当裏面接合粘土が薄く、灰褐色、（３）木笵で笵バリ整形が不徹底、瓦当裏面の横ナデ、（Ⅱ）花を斜め上から見た表現の牡丹文様Ⅱのうち花弁が小さくなったグループである。ただ、本資料はあまり明瞭な横ナデではなかった。上原分類では、抽象的な花文のⅢＢ式に含まれる。

木曳門Ｃ（石井）（676）　花芯は隅丸方形で、左右の花弁は横方向、下のものはアーモンド形で縦方向にそれぞれ５本の線が入る。葉の鋸歯は葉脈から伸び輪郭を飛び出して表現されている。

仮称１＜淑順門西Ａ＞（石井）（677）　文様は木曳門Ｃに類するが、葉の鋸歯は線となり外縁際まで伸びるように描かれる点が異なっている。本資料は、石井によりこれまで出土遺跡が不明なものとして「仮称１」とされていたが、本人の用語法に基づき、今回初めて出土した資料として「淑順門西Ａ」として報告しておきたい。上原分類では、同一のものは提示されていない。

ｃ－３－Ⅱ（石井）・側視１型ⅢＢ式（上原）

石井分類では、（ｃ）瓦当裏面接合粘土が薄く、赤色、（３）木笵で笵バリ整形が不徹底、瓦当裏面の横ナデ、（Ⅱ）花を斜め上から見た表現の牡丹文様Ⅱのうち花弁が小さくなったグループである。上原分類では、抽象的な花文のⅢＢ式の赤色系が相当する。

天界寺Ｃ（石井）（675）　花芯は隅丸方形で、左右の花弁はそれぞれ横方向に４本、下のものはアーモンド形で縦方向に弧状の線が入る。裏面は明瞭な横ナデがなされている。色調は赤色で、本資料はマンガン釉が掛けられる。上原分類では、同一のものは提示されていない。

なお、軒平瓦の平瓦部の調整については、残存状況がよい672で見ると、接合部の長さ4cmは丁寧なヨコナデを行い、側縁は上縁１cmの所も含めて丁寧なユビナデを行っている。

丸瓦（678～686）（第77～79図、第50・51・52・58表、図版55・56）

端部が確認できない筒部は除外して集計し553点を数える。色調で見ると、灰色系228点（内マンガン施釉１点）、褐色系202点、赤色系118点（内43点はマンガン施釉）、陶器質５点となる。

整形・調整　砲弾形の模骨（カーラバコ）に粘土を巻きつけて整形し、乾燥させた後２つに割って作られたとされる（上原1994・石井2010）。凹面には粘土が張り付かないために模骨にまいた布（瓦衣・カーラチン）の布目痕が残り、布目側端が縦方向で交差状に見られるものもある（678・681・684）。模骨の構造に由来

第 49 表　明朝系軒平・軒丸瓦集計表

合計 / 点数					地区 / 層										合計
					北区				南区				不明		
種類	石井分類		上原分類	色調	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ-1	Ⅳ-2	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	不明	
軒丸	A-1-Ⅰ	天界寺C	首城下ⅠAb01	灰色						1					1
		浦添城A	首西ⅠAe03	灰色							2				2
		＜御内原北A＞	＜首御北ⅠAD01＞	灰色							1				1
		西のアザナⅠ	首西ⅠAe04	灰色							1				1
				褐色			2				2				4
		天界寺A	湧田ⅡA01	灰色						1					1
	A-2-Ⅱ	浦添城D	湧田ⅠBa01	灰色							2				2
				褐色							1				1
		天界寺D	湧田ⅠBa02	褐色							3				3
		浦添城C	湧田ⅠBa03	褐色	1					1	1			1	4
		天界寺E	湧田ⅠBa03	灰色							1				1
				褐色						1	1				2
	B-2-Ⅱ	旧中城御殿A	(近似)湧田ⅠBa04	灰色						1					1
				褐色						1					1
		湧田古窯R	湧田ⅠBa04	褐色					2						2
			首木ⅠBb01	赤色							1				1
		湧田古窯U	湧田ⅠBa04	褐色					1	1					2
		天界寺F	(近似)円覚ⅠBb01	褐色						1					1
		内間御殿B	円覚ⅠBb02	灰色						2					2
				褐色						1					1
	C-2-Ⅱ		円覚ⅠBb03	赤色	1										1
		北殿①	(近似)御茶ⅠBb01	赤色						1					1
	C-2-Ⅳ	内間御殿D	円覚Ⅲb01	赤色	2										2
		内間御殿E	内間Ⅲa01	赤色	4					1					5
		木曳門B	首管ⅢBb03	赤色	1										1
		巴文＜新資料＞	巴文＜新資料＞	褐色							1				1
		牡丹Ⅱ	不明	赤色						1					1
		不明	不明	灰色						1					1
				褐色					1	1					2
				赤色	2				1						3
		瓦当なし	瓦当なし	灰色			2		8	12	6	1			29
				褐色		1	4		32	10	9			5	61
				赤色	2					12		2			16
軒平	a-1-Ⅰ	湧田古窯A	首西ⅠAa02	灰色	1										1
		西のアザナB	首西ⅠAa02	灰色							1				1
		湧田古窯P	首西ⅠAa02	褐色							1				1
		湧田古窯Ⅰ	-	灰色						1					1
				褐色						1					1
		湧田古窯Ⅰ？	-	褐色							1				1
	a-2-Ⅱ	右掖門①	首右ⅠB01	褐色							1				1
		浦添城A	首西ⅢA01	灰色						1	3				4
				褐色					1	1	2				4
		湧田古窯R	天界ⅢBa03	赤色							1				1
				褐色					2	1	1	1			5
		湧田古窯S	首木ⅢBa01	褐色					1						1
		浦添城C	首西Ⅲ02	灰色						1					1
	b-3-Ⅱ	木曳門B	首管ⅢBa02	灰色						1					1
				褐色	1										1
		仮称1＜淑順門西A＞	ⅢB式	灰色						1					1
	c-3-Ⅱ	木曳門C	-	灰色					1						1
		天界寺C	-	赤色 (ﾏﾝｶﾞﾝ釉)	1										1
		不明	不明	灰色						3	1		1	1	6
				褐色	1										1
				赤色	5					1					6
		瓦当なし	瓦当なし	灰色	2					12	2				16
				褐色				1	6	16	7				30
				陶器質	1										1
				赤色	4				2	1	1				8
合計					22	1	8	0	50	62	44	4	1	7	199

されると思われる横方向の幅・深さ 5 ㎜ の凹みが、主に玉縁側に見られる（679・680・682）。凹面下端は、ナデによる面取りがなされる。

凸面の調整は、縦方向のナデの後、玉縁側と端部側に横ナデを行うものが多い。ただ、680 のように玉縁側の横ナデが見られないものもある。側縁は分割したままで調整しないのが基本であるが、先述したように軒丸瓦の丸瓦部は丁寧にナデ調整されるものと考える（654・658）。

玉縁　その形態を上原の分類に基づき、以下のように分類し、集計した（第 51 表）。

a 類）玉縁端部が平坦に整形され、平面形が台形状のもの（684・685）。19 点。

b類）縦断面が玉縁頂部に平面が残りやや斜めになり、平面形が湾曲するもの（678～683・686）。97点。

c類）玉縁頂部と側面の境界が不明瞭で平面形が丸みを帯びるもの。6点。

一方、玉縁の長さは4cm以下（44点）、4～5cm（61点）、5cm以上（40点）となっている（第51表）。

ヘラ記号　94点確認できた（第52表）。玉縁に横線を1本引くもの（678）、斜線1本引くもの（685）が多かった。他に、×印のもの（681）、縦に3本線（683）があった。

全長では、約30cm（679・682・684・686）、約32cm（678・681）がある。

平瓦（687～692）（第80・81図、第53・58表、図版56・57）

端部が確認できない筒部は除外して集計し854点を数える。色調で見ると、灰色系350点、褐色系233点、赤色系221点（内43点はマンガン施釉）、陶器質50点（内4点はマンガン施釉）となる。

整形・調整　桶巻状の模骨粘土を巻きつけて整形し、乾燥させた後4つに割って作られたとされる（上原1994・石井2010）。やはり、凹面には布目痕が残り、布を継ぎ合わせた糸綴じ痕が狭端側に見られるものもある（687）。また、これも模骨の構造に由来するのか横方向の凹みが広端側に見られる（689）。桶板綴じ痕と呼ばれる横長方向の凹みは広端側に見られ、5ヶ所（687）、6ヶ所（688～690）、推定4ヶ所（691）がある。

凸面は、縦方向のナデの痕、両端側に横ナデを行うのが基本と見られる。

全長では、約23cm（687）、約25cm（691）、約26cm（688～690）がある。

役（道具）瓦（711）（第85図、第53・58表、図版59）

711は赤色系で、1面は平坦に整形され、裏面は盛り上がっており雲形であろうか。

第50表　明朝系丸瓦集計表

合計／点数			地区／層								総計
			北区			南区				不明	
色調	部位	角	I	II	IV-1	I	II	III	IV	I	
灰色	玉縁部	角1つ	8	1	1	5	72	24	3	1	115
		角2つ				1	1	4			6
		角なし					13	5		3	21
	玉縁部・端部	角1つ						1			1
		角2つ					1				1
	端部	角1つ	1	1		5	28	4		1	40
		角なし	4			3	23	13			43
灰色（ﾏﾝｶﾞﾝ釉）	玉縁部	角1つ							1		1
褐色	完形	完形				1					1
	玉縁部	角1つ	2		3	16	36	30	2	1	90
		角2つ	1				3	1			5
		角なし				2	13	3		1	19
	玉縁部・端部	角2つ・角1つ					1				1
		角2つ					2				2
	端部	角1つ	1		2	10	21	20			54
		角なし				13	12	5			30
赤色（ﾏﾝｶﾞﾝ釉）	玉縁部	角1つ	6				1			5	12
		角2つ	1								1
		角なし	8			1	1			4	14
	端部	角1つ	4							3	7
		角なし	5				1			3	9
赤色	玉縁部	角1つ	18		1		12	4			35
		角2つ	1				1				2
		角なし	5			1	3			2	11
	端部	角1つ	5				7			1	13
		角なし	4				5	1		4	14
陶器質	玉縁部	角1つ					1			1	2
		角なし				1					1
	端部	角なし					2				2
喜名系（陶器質）	玉縁部	角1つ					1	1		2	4
		角2つ				1					1
		角なし				2					2
	玉縁部・端部	角1つ・角2つ						1			1
	端部	角1つ						2			2
		角なし					2				2
喜名系（軟質褐色）	端部	角1つ				1		1			2
総計			74	2	7	63	263	120	6	32	567

第51表　明朝系丸瓦玉縁部長さ集計表

合計／点数			地区／層								合計	長さ別合計
			北区			南区				不明		
色調	玉縁部長さ	断面形態	I	II	IV-1	I	II	III	IV	I		
灰色	4cm以下	a（角形）					4				4	20
		b（斜め）	1				6	1			8	
		不明					5	2	1		8	
	4～5cm	a（角形）			1			2			3	25
		b（斜め）	2			3	7	6			18	
		d（その他）				1					1	
		不明	1				1		1		3	
	5cm以上	a（角形）					2				2	21
		b（斜め）	1				9	5		1	16	
		不明					1	2			3	
	不明	a（角形）					1	1			2	78
		b（斜め）					4				4	
		不明	3	1		2	47	15	1	3	72	
灰色（ﾏﾝｶﾞﾝ釉）	不明	不明							1		1	1
褐色	4cm以下	a（角形）						1			1	16
		b（斜め）				1	2	4			7	
		不明	1			3	4				8	
	4～5cm	a（角形）					1	2			3	27
		b（斜め）	1			5	7	6			19	
		c（丸）					1			1	2	
		不明				1	2				3	
	5cm以上	b（斜め）	1			2	3	2	1		9	13
		c（丸）					1	1			2	
		d（その他）					1				1	
		不明						1			1	
	不明	b（斜め）					2				2	62
		不明			3	7	31	17	1	1	60	
赤色	4cm以下	b（斜め）						1			1	2
		不明	1								1	
	4～5cm	a（角形）	1								1	7
		b（斜め）	1				2	1			4	
		不明				1	1				2	
	5cm以上	a（角形）					1				1	4
		b（斜め）	2					1			3	
	不明	不明	19		1		12	1		2	35	35
赤色（ﾏﾝｶﾞﾝ釉）	4cm以下	不明	1								1	1
	4～5cm	b（斜め）	1								1	1
	5cm以上	c（丸）	1			1					2	2
	不明	a（角形）					1				1	23
		不明	12				1			9	22	
陶器質	4cm以下	不明					1				1	1
	不明	b（斜め）				1					1	2
		不明								1	1	
喜名系（陶器質）	4cm以下	a（角形）					1				1	4
		b（斜め）				1		1		1	3	
	4～5cm	b（斜め）								1	1	1
	不明	不明				2		1			3	3
合計			50	1	5	31	162	74	6	20	349	349

喜名窯系瓦（693 ～ 710）（第 82 ～ 85 図、第 50 ～ 54・57 表、図版 58・59）

読谷村喜名窯系で生産されたと考えられる一群で、発掘調査で得られた資料が報告されている（上原ほか 2011）。焼成・色調は、橙色を呈する軟質のものと、赤～褐灰色を呈する陶器質のものがある。なお、瓦当の表面については、他の部位よりも色調が暗くなる傾向があり、軟質は褐色、陶器質は褐灰色となっている。また、オリーブ色が斑状に見られるものがあり、自然釉が掛ったものと思われる。胎土は、石英等の白色粒を多く含み、大きな場合は中礫サイズのものまで見られる。また、断面を見ると、石英等の混入物が溶けたのか、白色の層が帯状に見られるものも多い。

瓦当については、引き続き、石井及び上原分類で説明する。

軒丸瓦（693 ～ 698） Ｂ－２－Ⅱ（石井）・側視１型ＩＢ式（上原）の内、１種のみが出土している。

湧田古窯Ｕ（石井）・湧田ＩＢａ 04 式（上原）（693 ～ 698） 文様構成自体は、先述した 639・640 と同じであるので、同笵もしくは同型と考えてもよいと思われる。なお、その文様は全体的に鮮明であることから、同笵であれば、先に本資料が生産されたと考えられよう。ただ、右下の花弁と外縁の間に粘土の盛り上がりが見られるが（693･694･696）、先述の資料には見られないことについて、検討の必要がある。

軒平瓦（699・700） ａ－２－Ⅱ（石井）・側視１型ＩＢ・ⅢＡ・ⅢＢ式（上原）の内、下記の２種が出土している。

湧田古窯Ｒ（石井）･天界ⅢＢａ 03（上原）（700） 文様構成自体は、先述の 636 ～ 638 と同じであるので、同笵もしくは同型と考えてもよいと思われる。なお、その文様は全体的に鮮明であることから、同笵であれば、先に本資料が生産されたと考えられよう。

湧田古窯Ｔ（石井）・首淑ⅢＢａ 01（上原）（699） 先述した湧田古窯Ｓ（647）と比べると、下３つの花弁が大きくなり、葉の鋸歯は花芯の方に向けるようになり、花弁の下方が直線的なＶ字となるものである。

なお、699 は９割残存と良好であるため、平瓦部の調整も観察でき、接合部のヨコナデは不徹底で凹凸が残り、側縁もケズリで若干平滑にしているのみ、上縁は全く未調整のままである。これは、先述した湧田古窯Ｒの瓦当をもつ 672 に比べ非常に雑な調整といえ、生産地の違いが表れているものと考えたい。

丸瓦（701 ～ 704） 端部が確認できない筒部は除外して集計し 14 点を数える。焼成で見ると、軟質２点、陶器質 12 点である。

整形･調整は、先述のものと同様であるが、凹面の幅５㎜ほどの凹みが 703･704 のように端部側に見られる。玉縁はｂ形態が多く、長さは３㎝が多い。焼成のためか、全体的にゆがみが多く見られる。

全長は、玉縁のみ掛けている 703 の筒部長が 24cm で、玉縁を４㎝とすると、28cm が推定される。

701 は、釘孔を有するもので、玉縁側に見られる。702 は、玉縁に横１本線のヘラ記号を有する。

平瓦（705 ～ 710） 端部が確認できない筒部は除外して集計し 39 点を数える。焼成で見ると、軟質６点、陶器質 33 点である。

凹面に布端部が×状に交差するものが見られている（706 ～ 708）。桶板綴じ痕は、推定であるが 705・706 のように５ヶ所見られる。

705・710 のように、凸面中央部に横方向で長い１本線のヘラ記号が見られるものもある。

全長は、705 が約 24cm、707 が約 26cm を測る。狭端は、705 が 19cm を測る。

出土状況

南区Ⅲ層において、石井分類で軒丸瓦Ａ－１－Ⅰ類・Ａ－２－Ⅱ類・Ｂ－Ⅱ－２類、軒平瓦ａ－１－Ⅰ類・ａ－２－Ⅱ類、新資料である巴文と喜名窯系軒丸瓦Ｂ－Ⅱ－２類・軒平瓦ａ－２－Ⅱ類が共伴している。今後の検証が必要だが、喜名窯系と同笵と考えられる軒丸瓦の湧田古窯Ｕと軒平瓦の湧田古窯Ｒが見られており、同時性を補強するものと思われる。

第 52 表　明朝系丸瓦ヘラ記号集計表

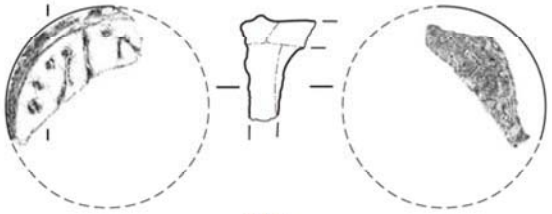
合計 / 点数		斜線				縦線			横線			交差	その他	合計
色調	部位	／	／／	／／／	＼	｜	｜｜	｜｜｜	－	＝	≡	×		
灰色	玉縁部	4	1	1	5	1			5	1		1	8	27
	玉縁部・端部								1					1
	端部									2	1			3
	筒部						1		1	2			6	10
褐色	完形												2	2
	玉縁部	3	2		4	2	1	1	8			3	6	30
	玉縁部・端部	1										1	2	4
	端部	1							2					3
	筒部	1				1			2	1			4	9
赤色	玉縁部				1				1					2
	筒部								1					1
喜名系(陶器質)	玉縁部								2					2
合計		10	3	1	10	4	2	1	23	6	1	5	28	94

第 53 表　明朝系平瓦集計表

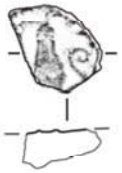
合計 / 点数			地区 / 層										合計
			北区				南区				不明		
色調	部位	角	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ-1	Ⅳ-2	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	不明	
灰色	完形	完形					1	1					2
	広端部	角１つ	3		2		11	52	39	2	3		112
		角２つ						1					1
		角なし	14				5	35	26		4		84
	広端部・狭端部	角３つ						1					1
		角１つ							1				1
	狭端部	角１つ	6		2		12	35	32		1		88
		角２つ					2		1				3
		角なし	6	1	1	2	3	27	14	2	2		58
褐色	完形	完形						2					2
	広端部	角１つ	6				15	21	10	2			54
		角２つ						1					1
		角なし	1				4	38	23	1	3		70
	広端部・狭端部	角３つ						1					1
		角１つ						1					1
	狭端部	角１つ	1				14	27	15				57
		角なし	3		1			26	12		4	1	47
陶器質	広端部	角１つ					6	2	7				15
		角なし					1	8	2				11
	広端部・狭端部	角１つ					1						1
	狭端部	角１つ		2			4	5	2			1	14
		角２つ					1	1					2
		角なし					3						3
陶器質（ﾏﾝｶﾞﾝ釉）	狭端部	角１つ						1	3				4
赤色	広端部	角１つ	12				2	12	6		7		39
		角なし	12				2	19	9		7		49
	狭端部	角１つ	7					16	4		8		35
		角２つ					1						1
		角なし	20				2	24	4		4		54
赤色（ﾏﾝｶﾞﾝ釉）	広端部	角１つ	5								3		8
		角なし	3								2		5
	広端部・狭端部	角なし						1					1
	狭端部	角１つ	1					1			5		7
		角なし	10				3	2			7		22
赤色道具瓦	―	角なし						1					1
喜名系（軟質褐色）	広端部	角１つ						1	1				2
		角２つ					1						1
		角なし					1						1
	狭端部	角１つ					1		1				2
喜名系（陶器質）	広端部	角１つ						2	5				7
		角なし	1				4	3	2				10
	広端部・狭端部	角３つ							1				1
	狭端部	角１つ						3	5				8
		角なし	2		1		3	1					7
合計			113	3	7	2	103	372	225	7	60	2	894

第 54 表　明朝系喜名窯系軒丸・軒平瓦玉集計表

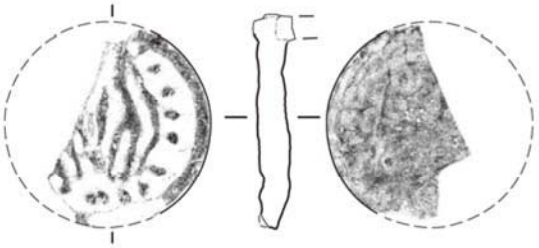
合計 / 点数					地区 / 層			合計
					南区			
種類	石井分類		上原分類	色調	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	
軒丸	B-2-Ⅱ	湧田古窯U	湧田ⅠBA04	軟質	1			1
				陶器質	2	2		4
		湧田古窯U？	湧田ⅠBA04	陶器質			1	1
		瓦当なし	瓦当なし	軟質		2		2
				陶器質	1	3	1	5
軒平	a-2-Ⅱ	湧田古窯R	天界ⅢBA03	陶器質			1	1
		湧田古窯T	首淑ⅢA01	陶器質		1		1
		瓦当なし	瓦当なし	陶器質		4		4
合計					4	12	3	19



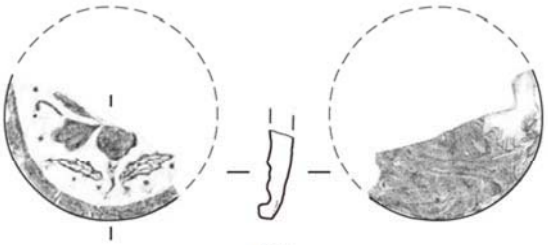
619
H-11　暗粘（Ⅲ層）



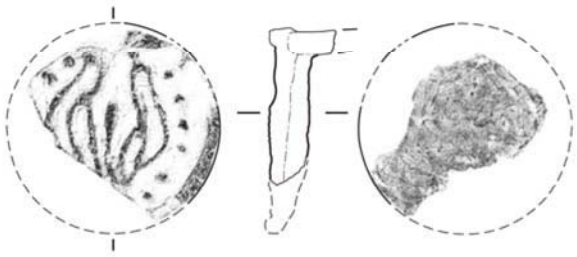
624
H-10　瓦褐（Ⅱ層）



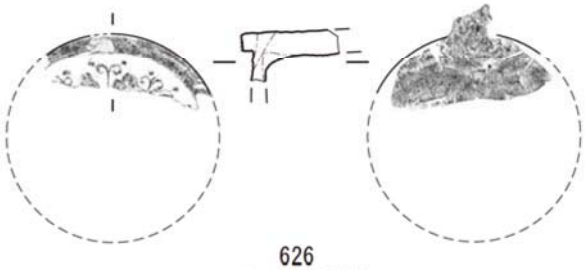
620
H-11　暗粘（Ⅲ層）



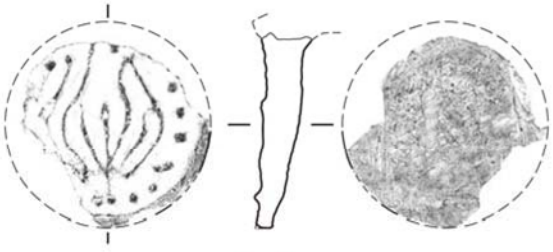
625
H-11　瓦溜（Ⅲ層）



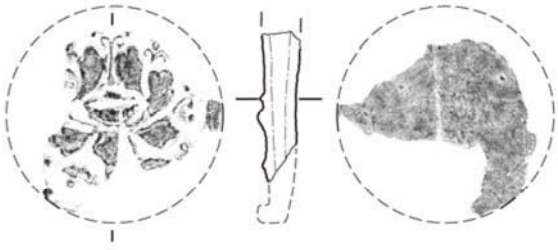
621
H-11　暗粘（Ⅲ層）



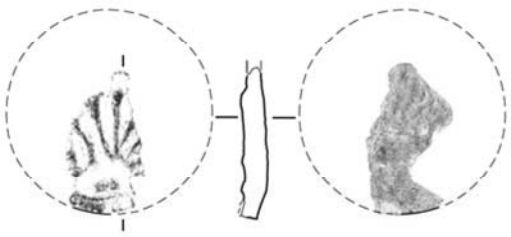
626
H-11　暗粘（Ⅲ層）



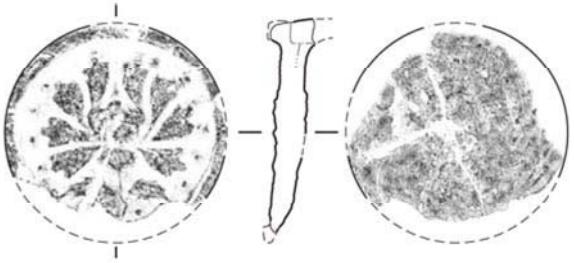
622
H-11　暗粘（Ⅲ層）



627
H-11　黄粘（Ⅲ層）

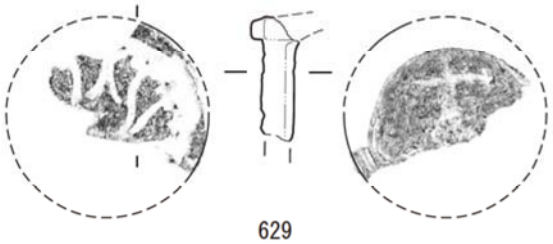


623
H-11　暗粘（Ⅲ層）

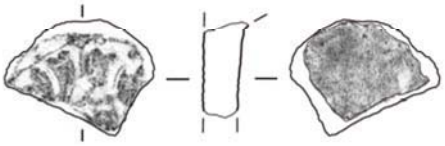


628
H-11　瓦溜（Ⅲ層）

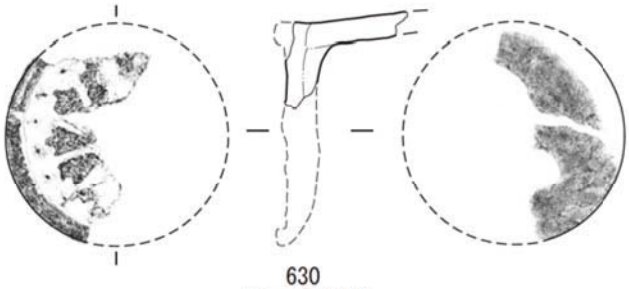
第70図　瓦7（明朝系瓦）



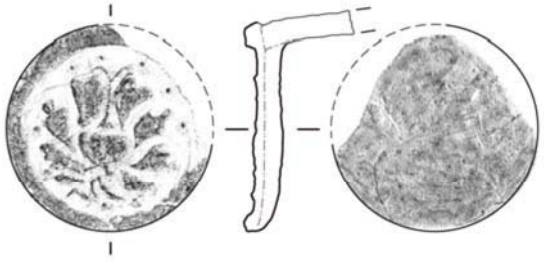
629
H-11　瓦溜（Ⅲ層）



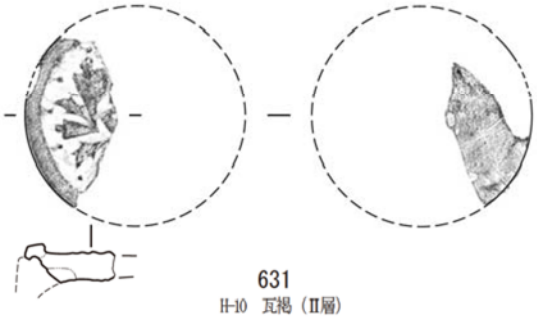
634
H-10　瓦褐（Ⅱ層）



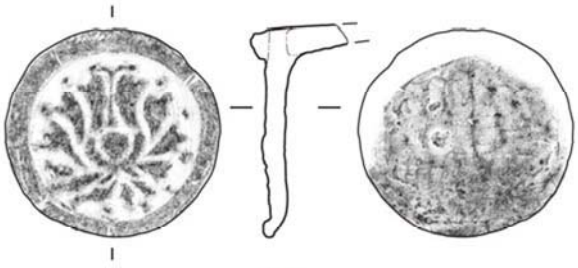
630
H-11　瓦溜（Ⅲ層）



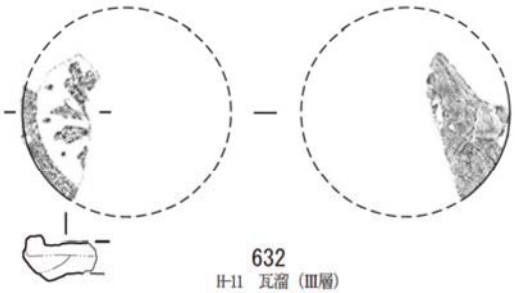
635
I-10　暗粘（Ⅲ層）



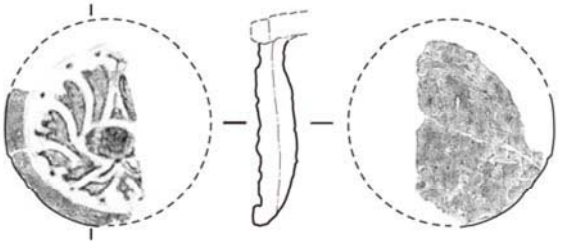
631
H-10　瓦褐（Ⅱ層）



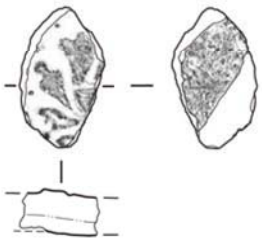
636
I-10　暗粘（Ⅲ層）



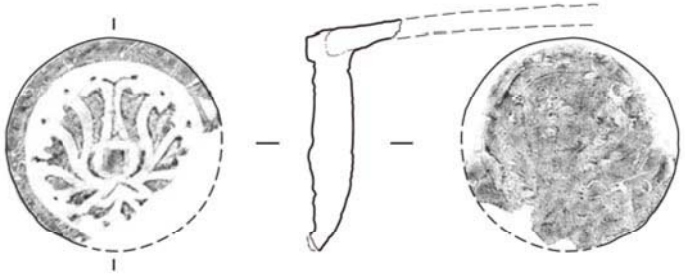
632
H-11　瓦溜（Ⅲ層）



637
H-11　カクラン（Ⅰ層）

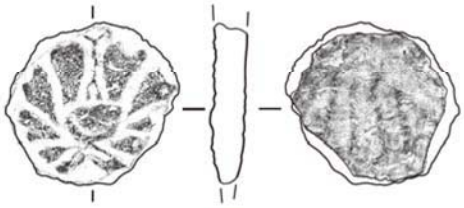


633
H-11　瓦溜（Ⅲ層）

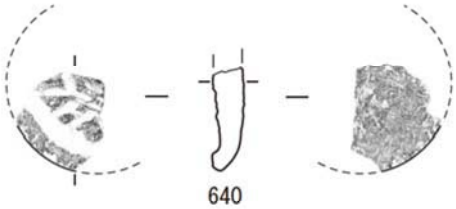


638
H-11　カクラン（Ⅰ層）

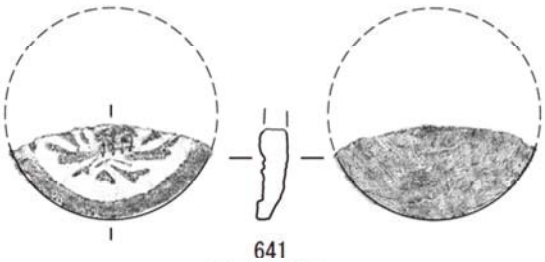
第71図　瓦8（明朝系瓦）



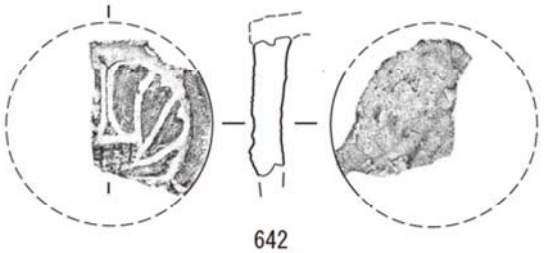
639
H-10 瓦褐（Ⅱ層）



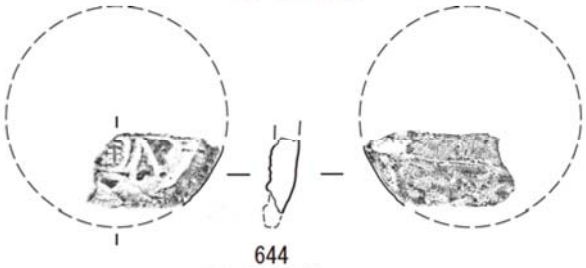
640
H-11 カクラン（Ⅰ層）



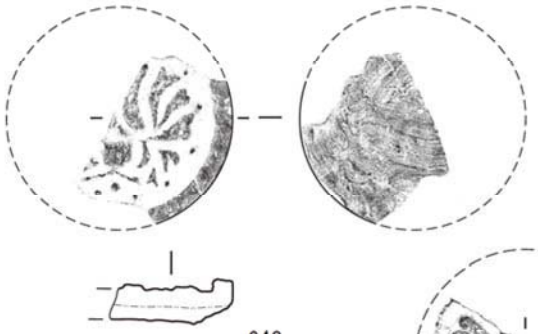
641
H-10 瓦褐（Ⅱ層）



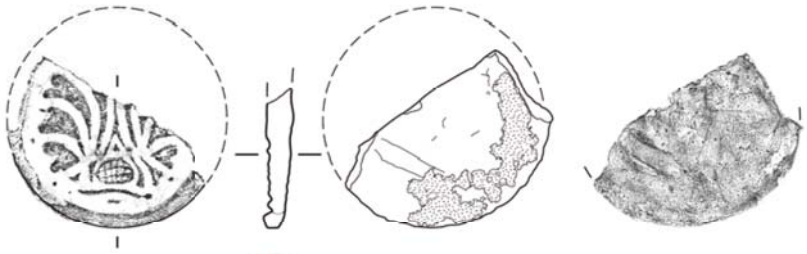
642
H-10 瓦褐（Ⅱ層）



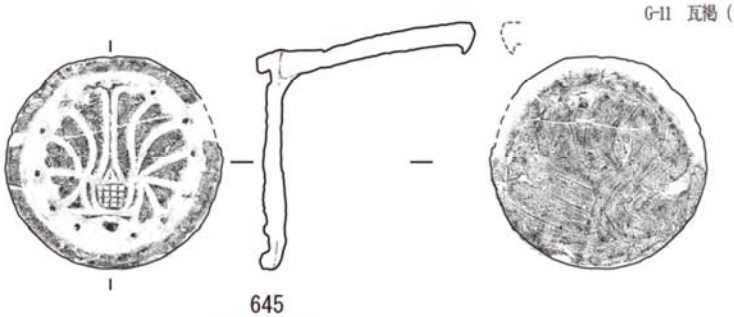
644
H-10 瓦褐（Ⅱ層）



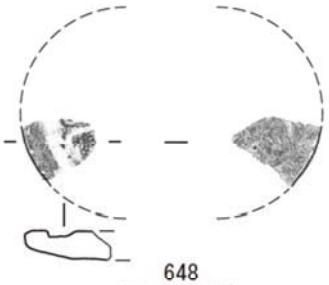
643
H-10 瓦褐（Ⅱ層）



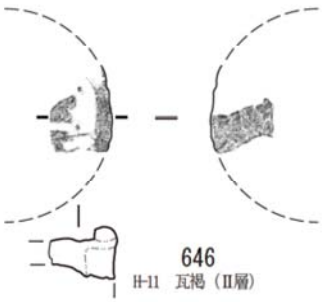
647
G-11 瓦褐（Ⅱ層）



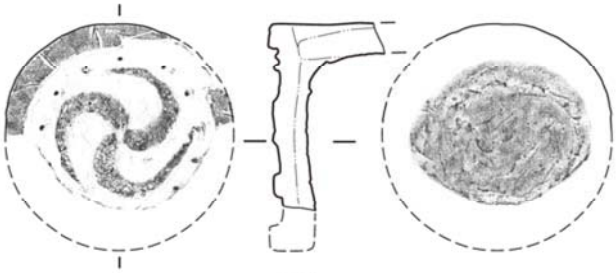
645
H-10 瓦褐（Ⅱ層）



648
I-10 瓦暗（Ⅱ層）

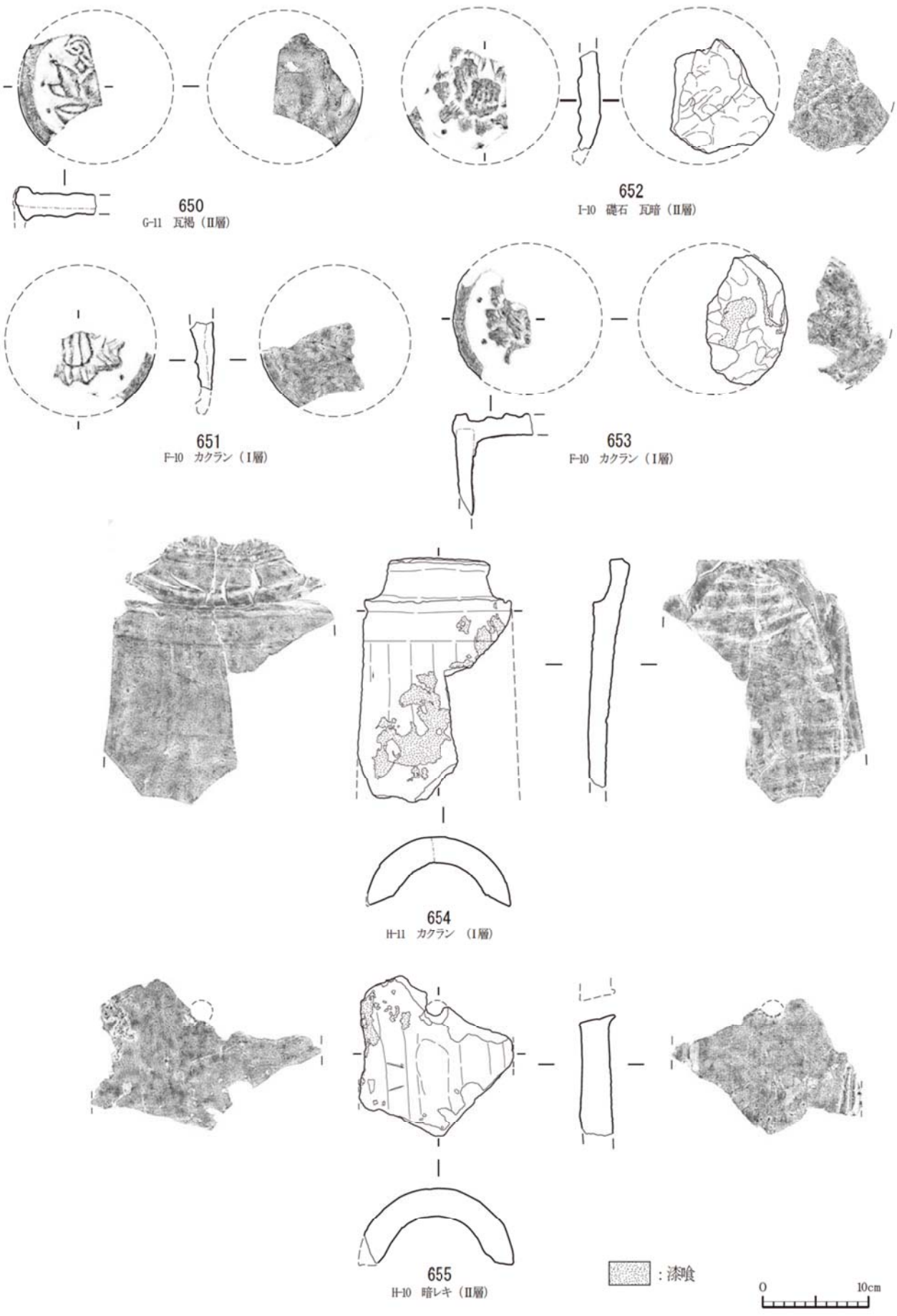


646
H-11 瓦褐（Ⅱ層）



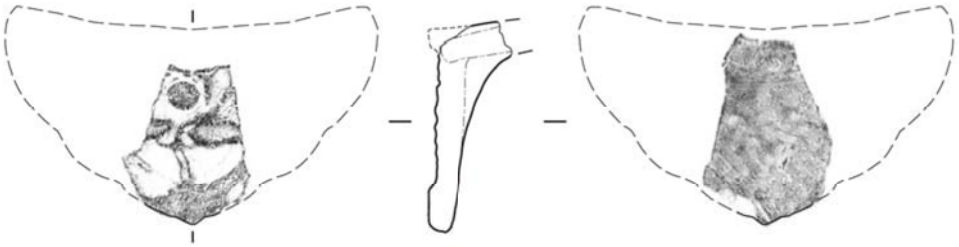
649
H-11 瓦溜（Ⅲ層）

第72図　瓦9（明朝系瓦）

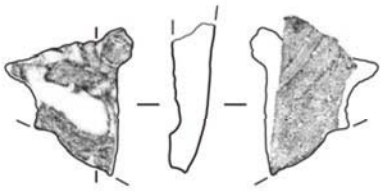


第73図　瓦10（明朝系瓦）

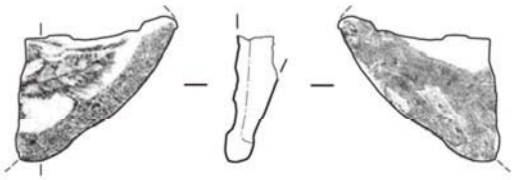
656
H-11　暗粘（Ⅲ層）



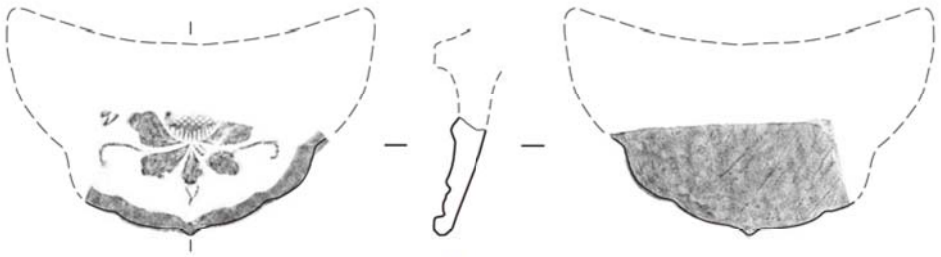
657
H-10　暗レキ（Ⅱ層）



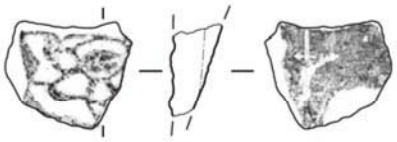
658
H-10　瓦褐（Ⅱ層）



659
H-11　瓦溜（Ⅲ層）

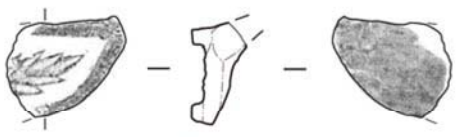


660
H-11　瓦溜（Ⅲ層）

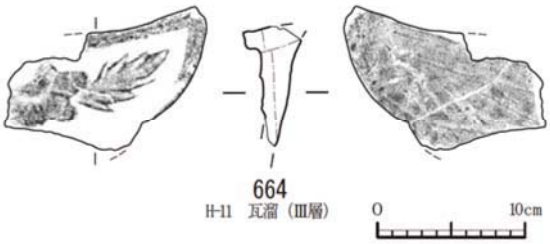


661
H-10　瓦褐（Ⅱ層）

662
H-11　瓦溜（Ⅲ層）



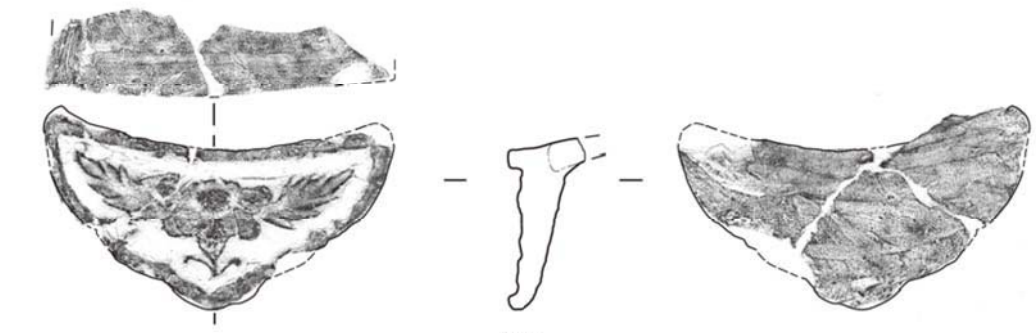
663
H-11　瓦溜（Ⅲ層）



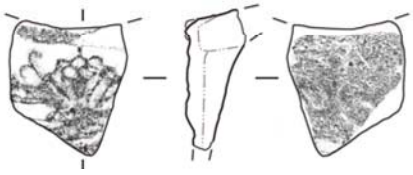
664
H-11　瓦溜（Ⅲ層）

0　10cm

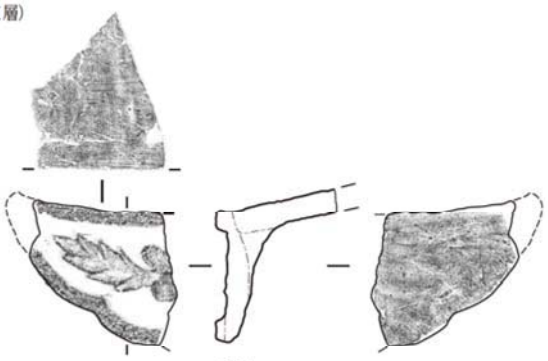
第74図　瓦11（明朝系瓦）



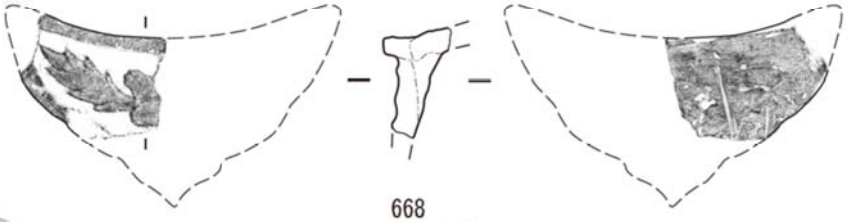
665
H-11　カクラン（Ⅰ層）



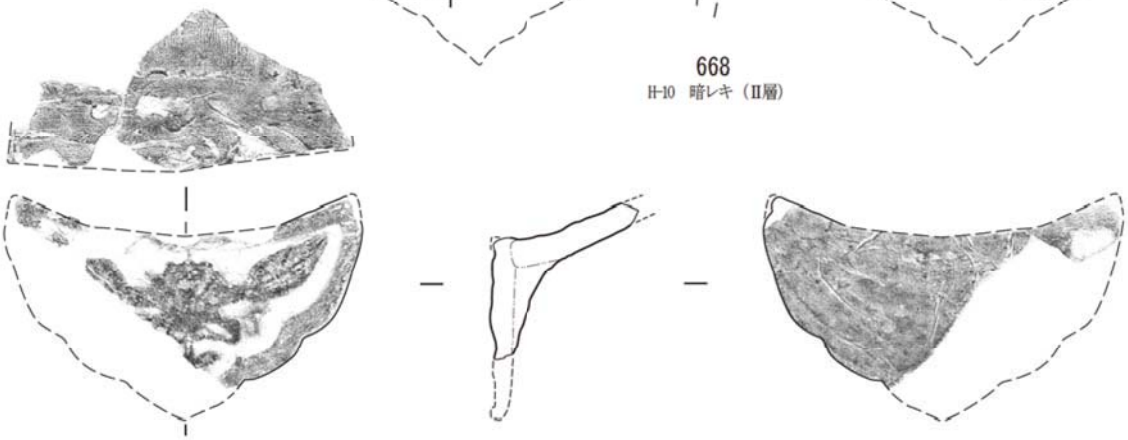
666
H-11　暗粘（Ⅲ層）



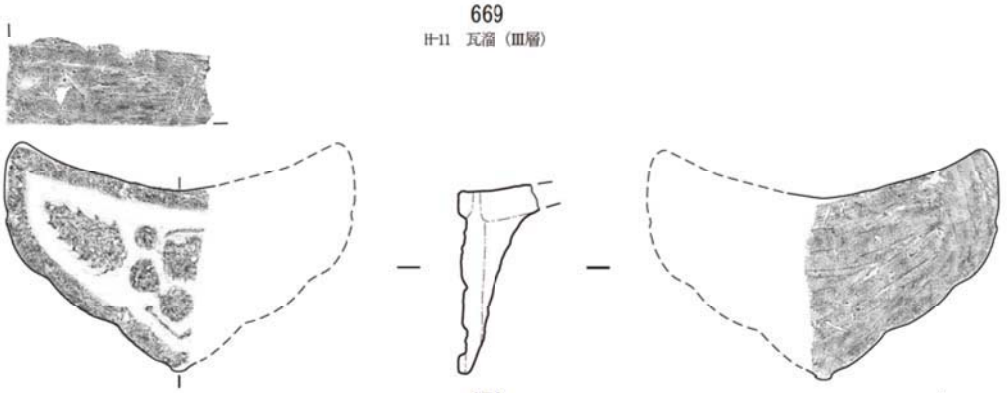
667
H-11　瓦溜（Ⅲ層）



668
H-10　暗レキ（Ⅱ層）

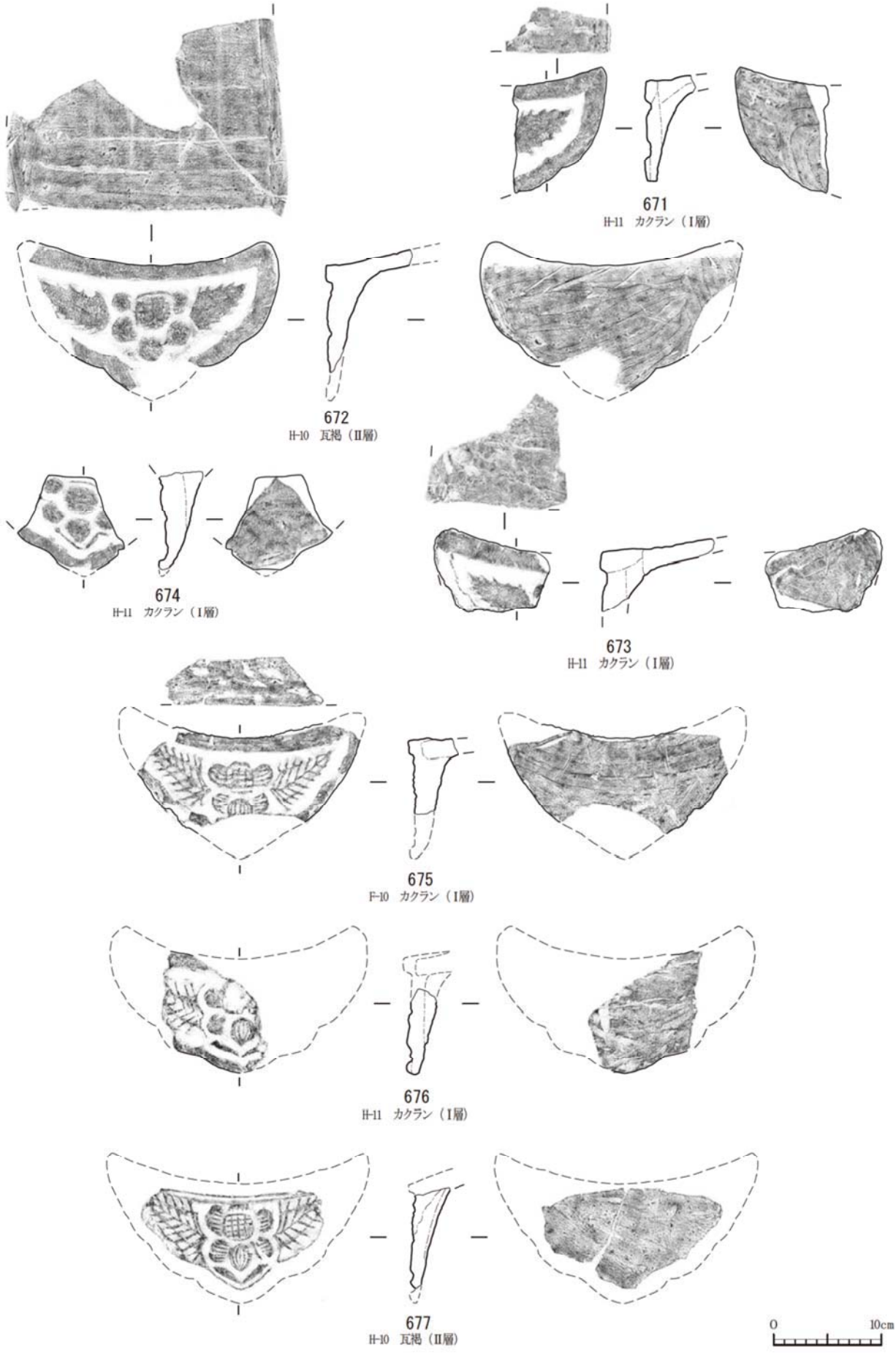


669
H-11　瓦溜（Ⅲ層）

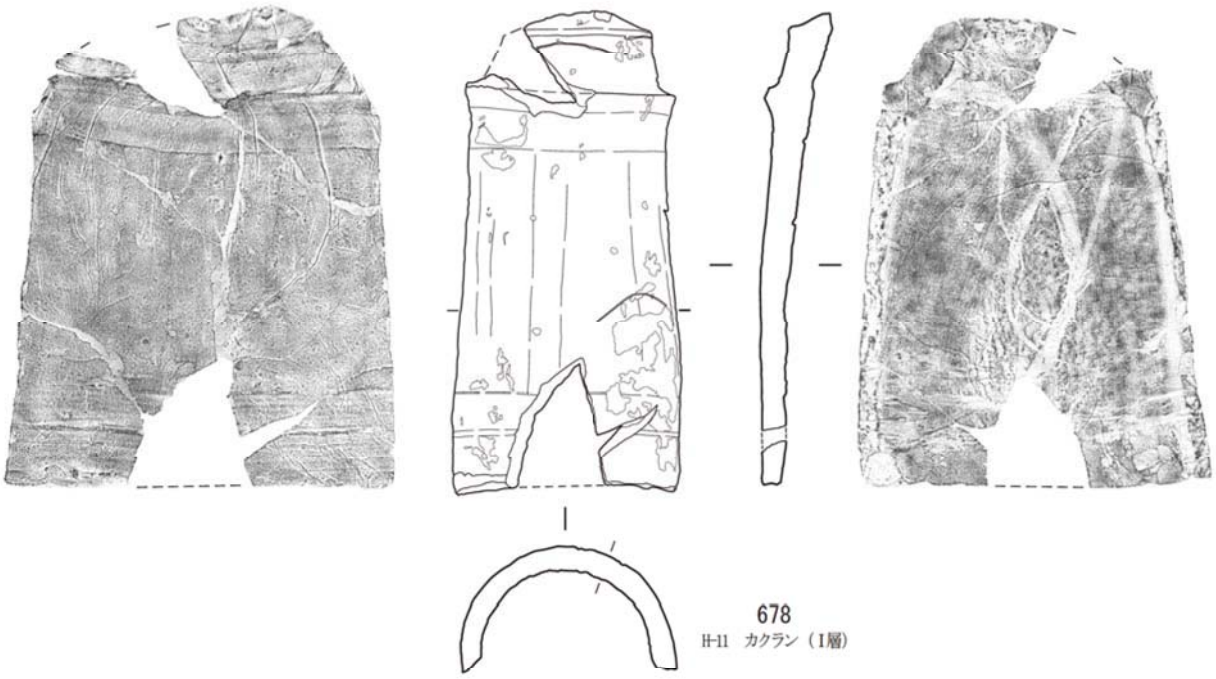


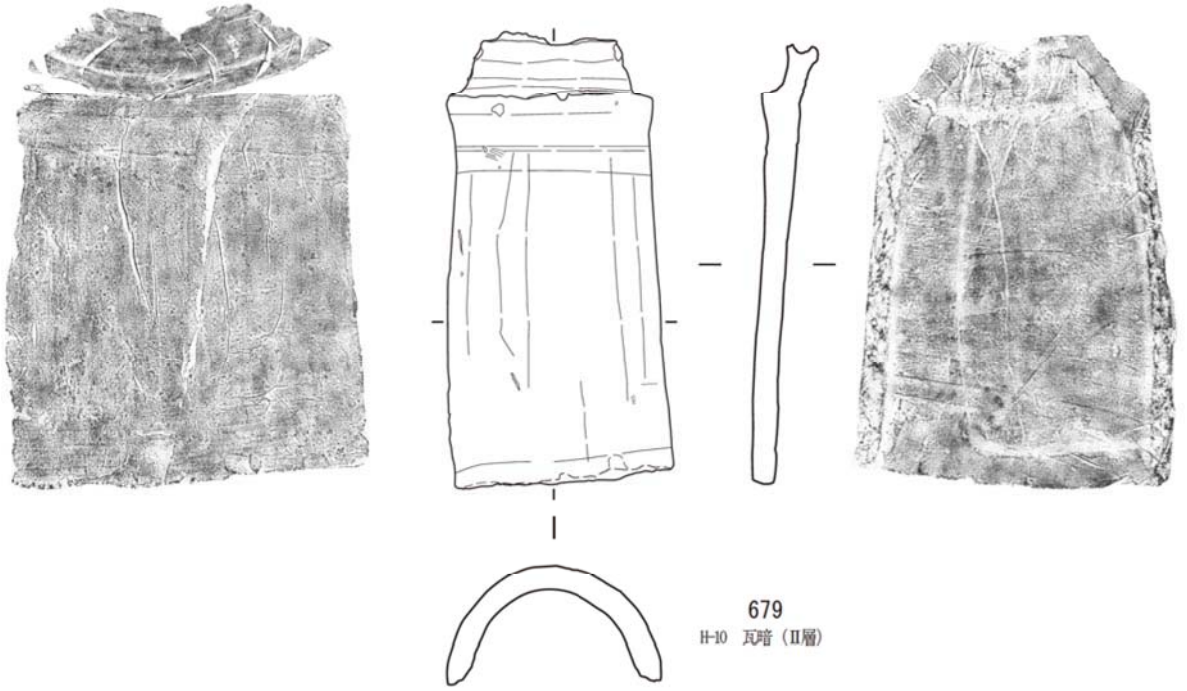
670
H-11　瓦溜（Ⅲ層）

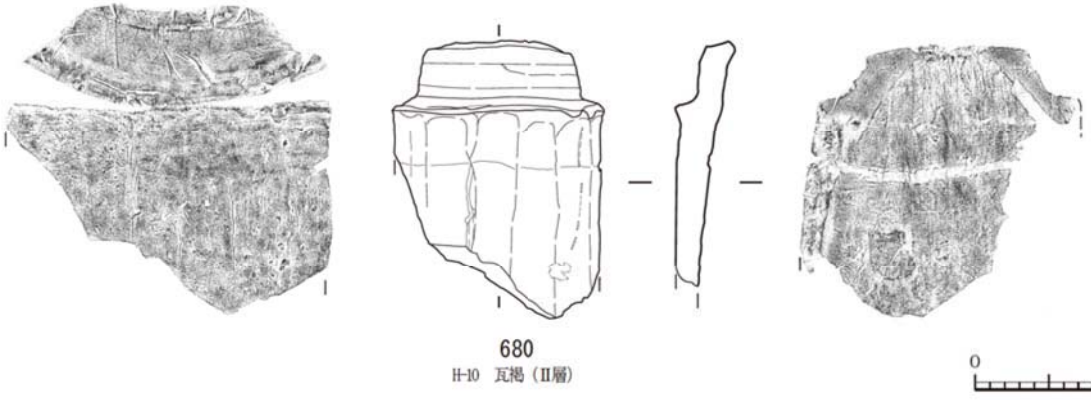
第75図　瓦12（明朝系瓦）



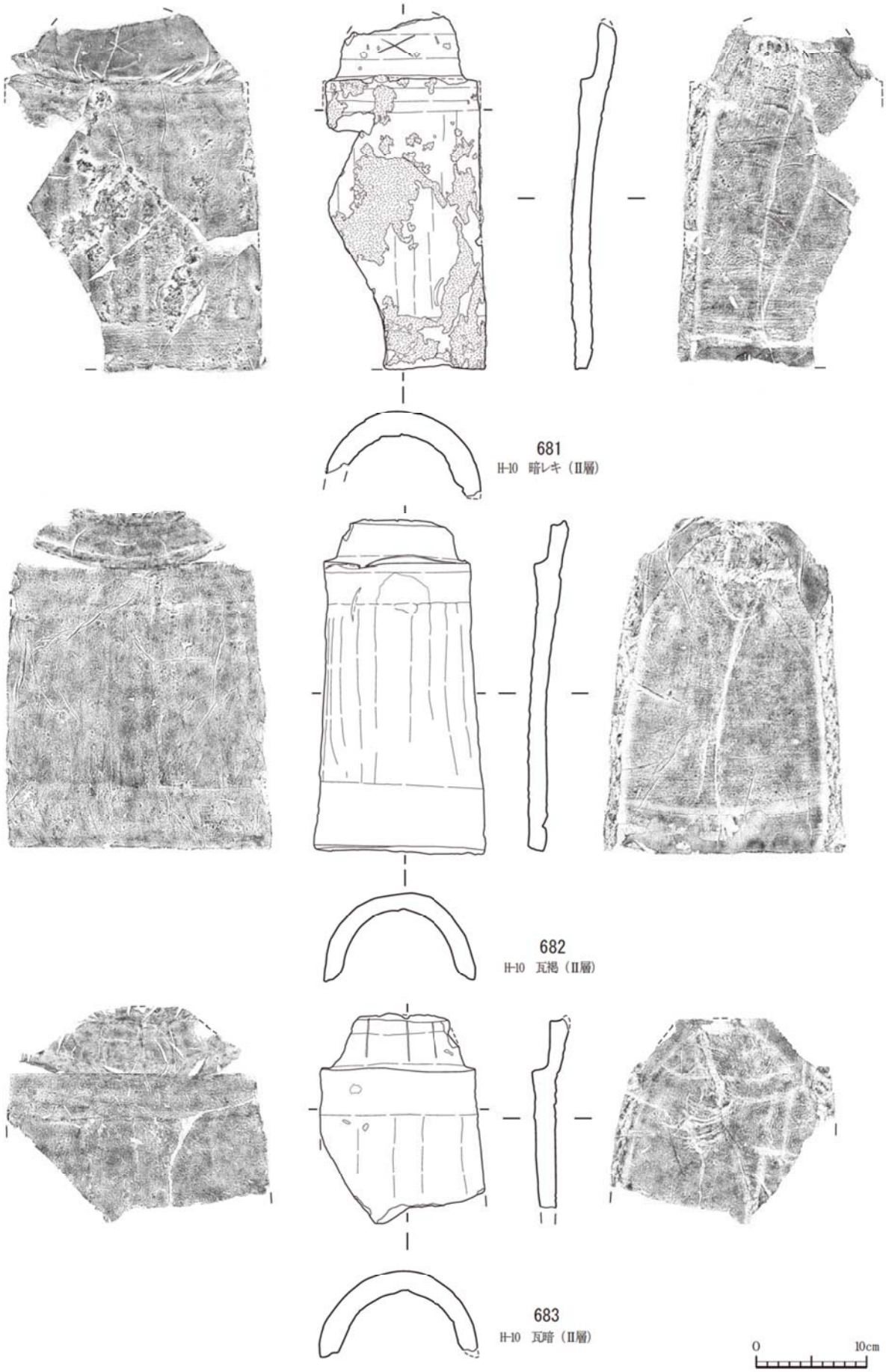
第76図　瓦13（明朝系瓦）



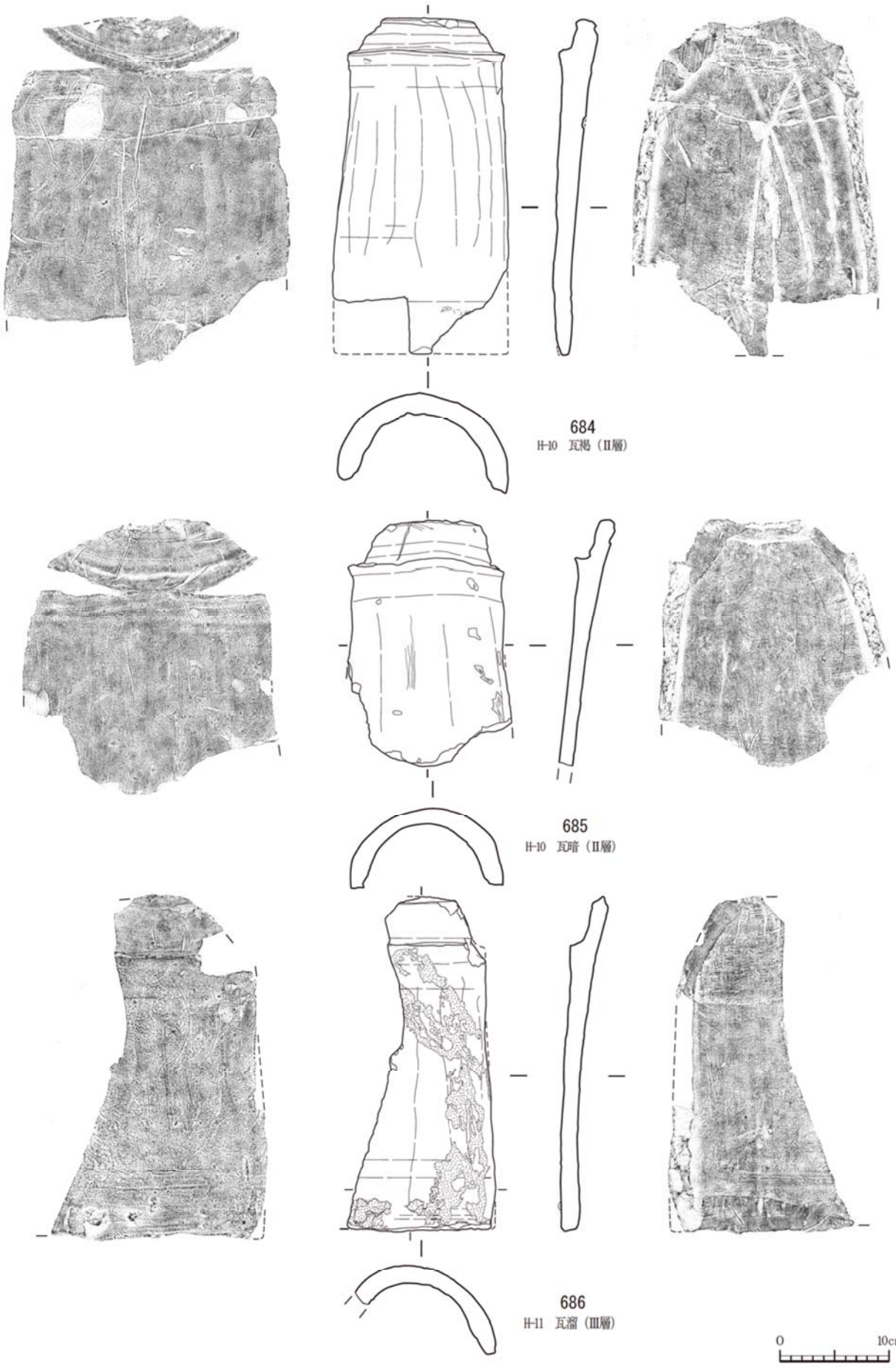




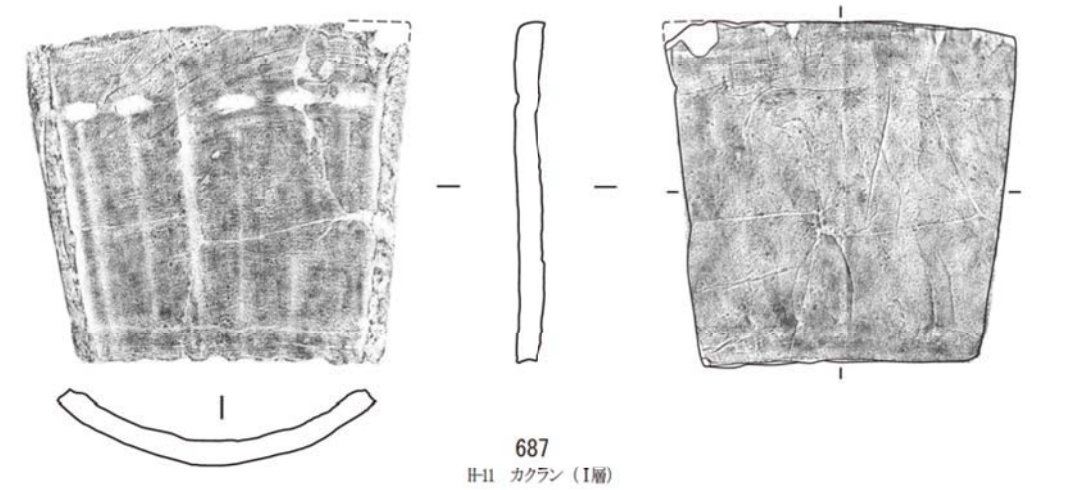
第77図　瓦14（明朝系瓦）



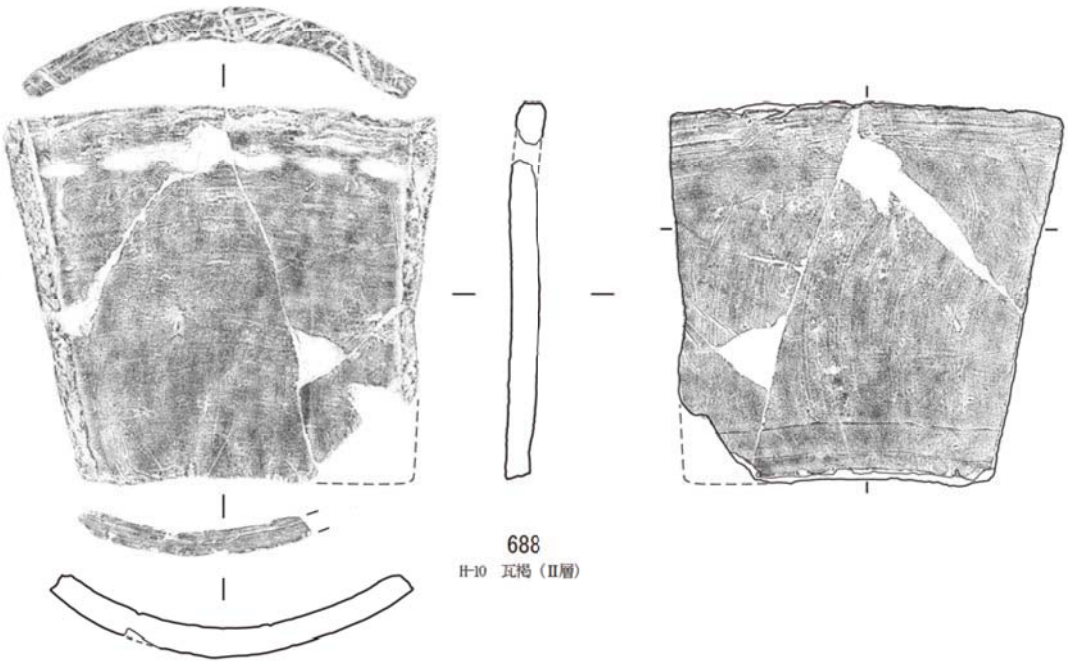
第78図　瓦15（明朝系瓦）



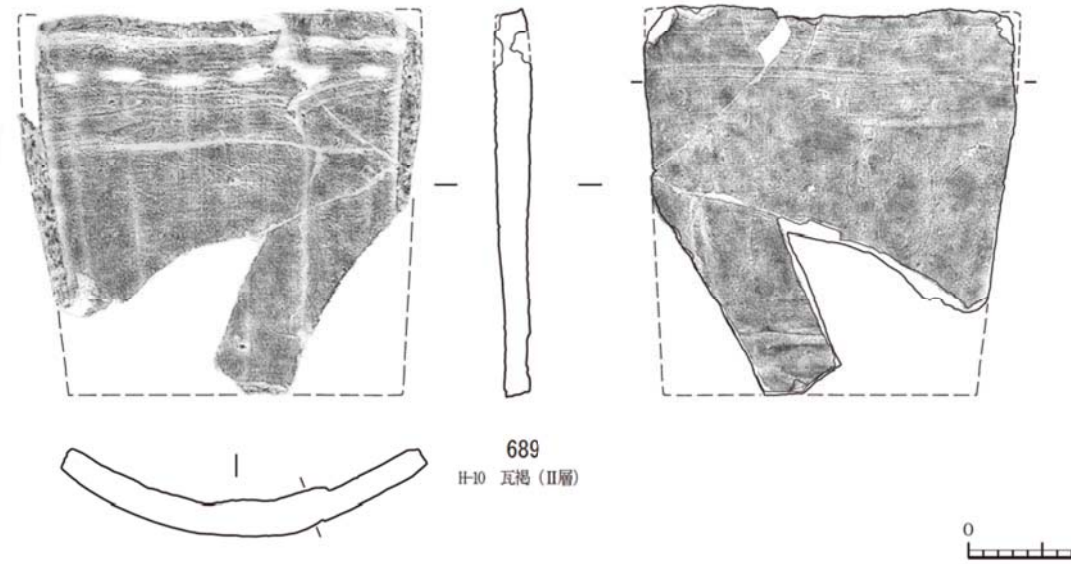
第79図　瓦16（明朝系瓦）



687
H-11　カクラン（Ⅰ層）



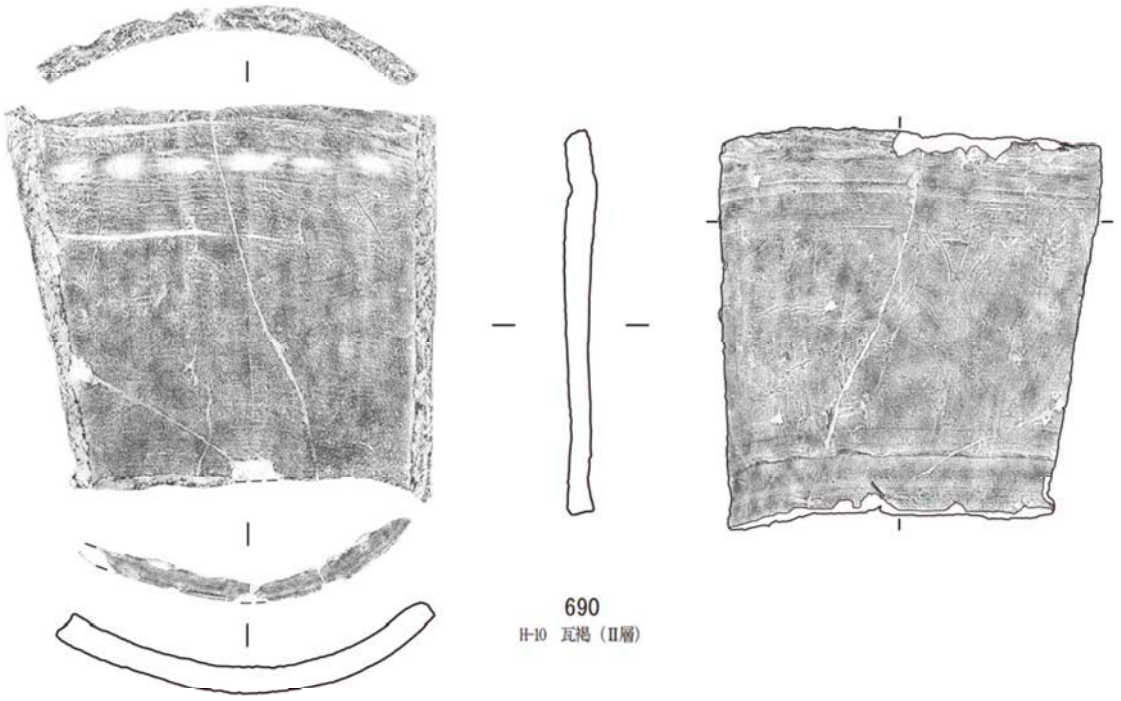
688
H-10　瓦堆（Ⅱ層）

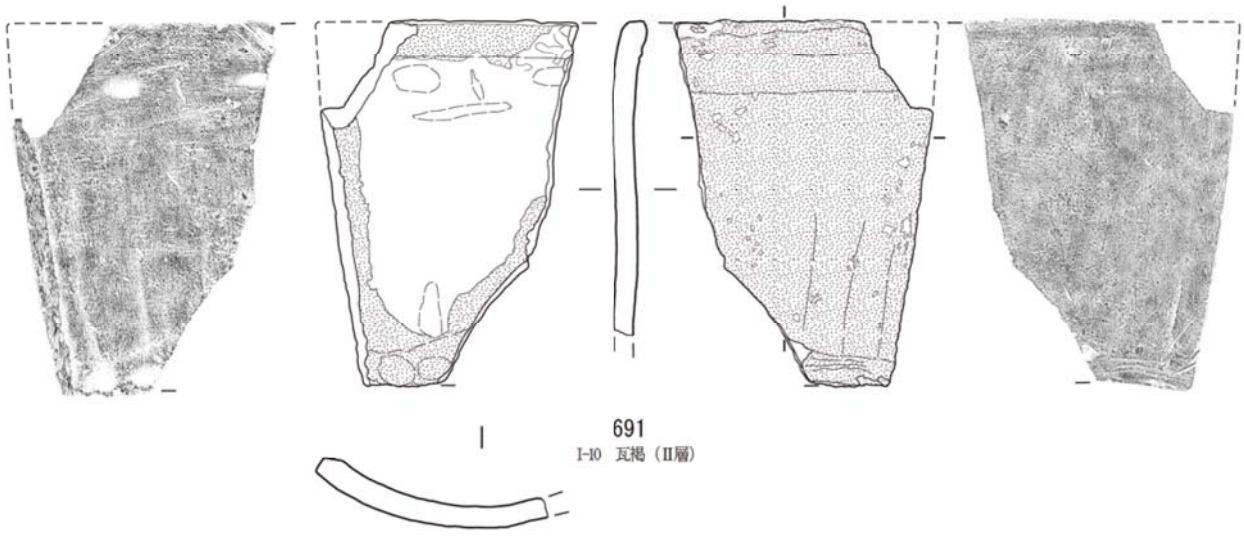


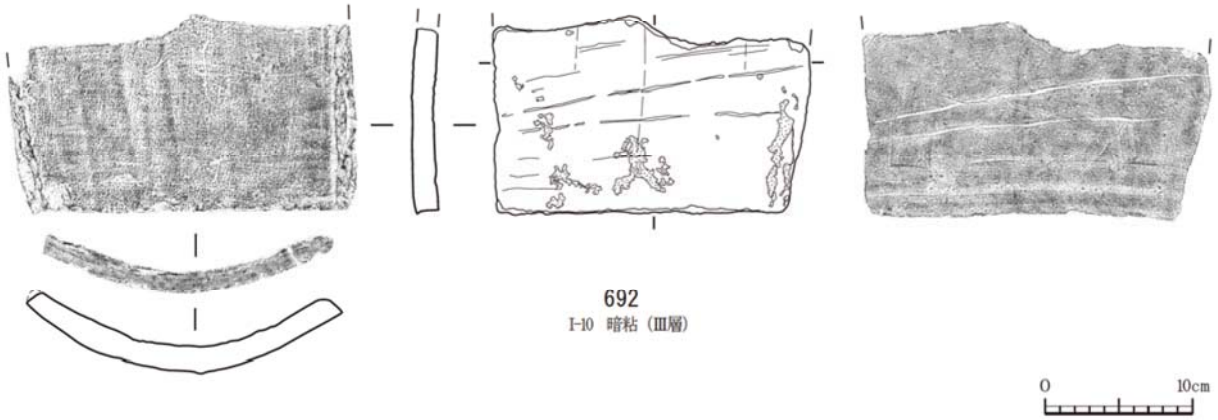
689
H-10　瓦堆（Ⅱ層）

0　10cm

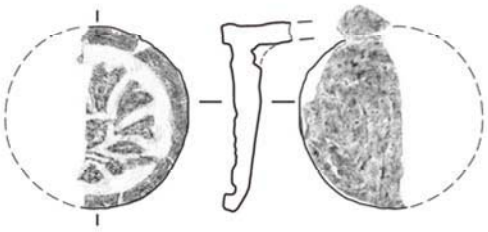
第80図　瓦17（明朝系瓦）



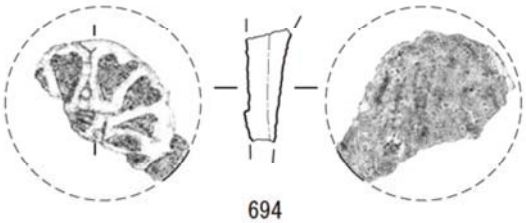




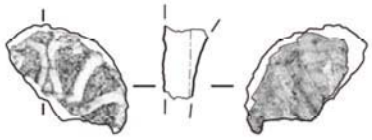
第81図　瓦18（明朝系瓦）



693
H-10　瓦溜（Ⅱ層）

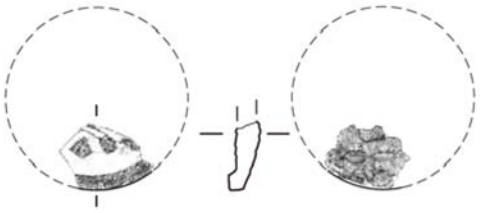


694
H-11　カクラン（Ⅰ層）

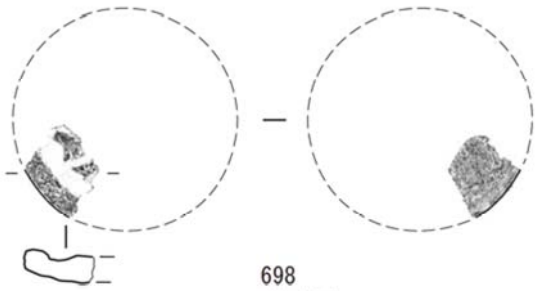


695
H-10　瓦溜（Ⅱ層）

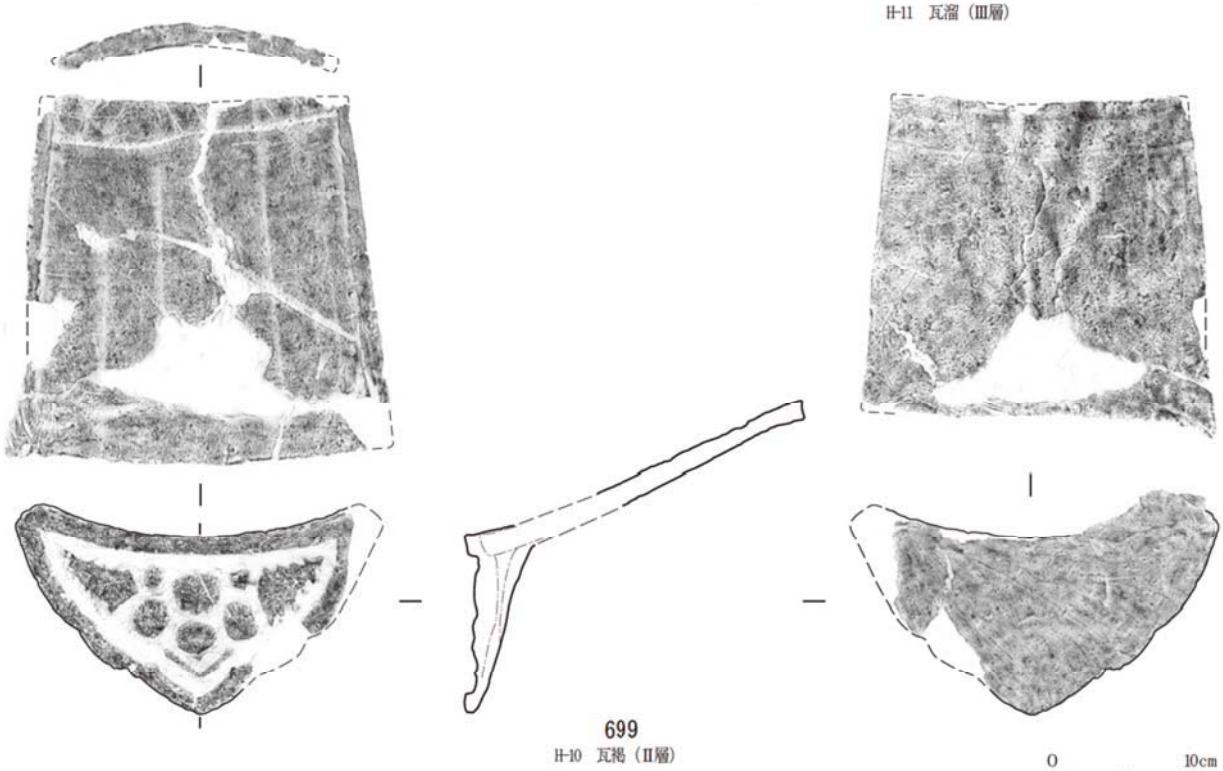
696
G-11　カクラン（Ⅰ層）



697
H-11　カクラン（Ⅰ層）



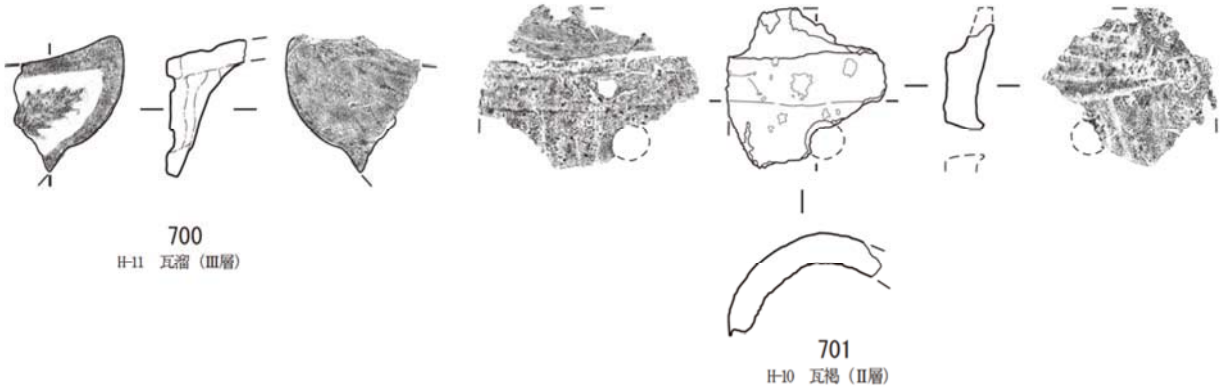
698
H-11　瓦溜（Ⅲ層）



699
H-10　瓦溜（Ⅱ層）

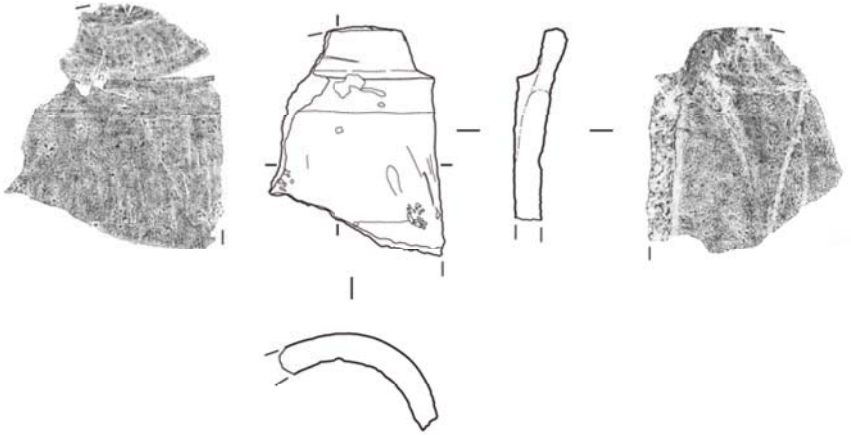
0　10cm

第82図　瓦19（明朝系瓦、喜名窯系）

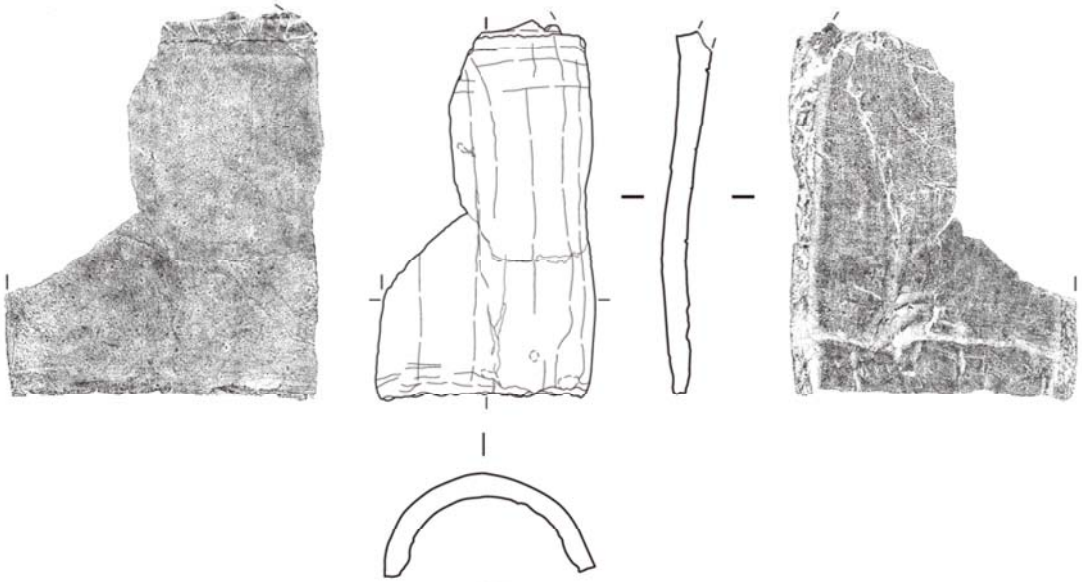


700
H-11　瓦溜（Ⅲ層）

701
H-10　瓦褐（Ⅱ層）



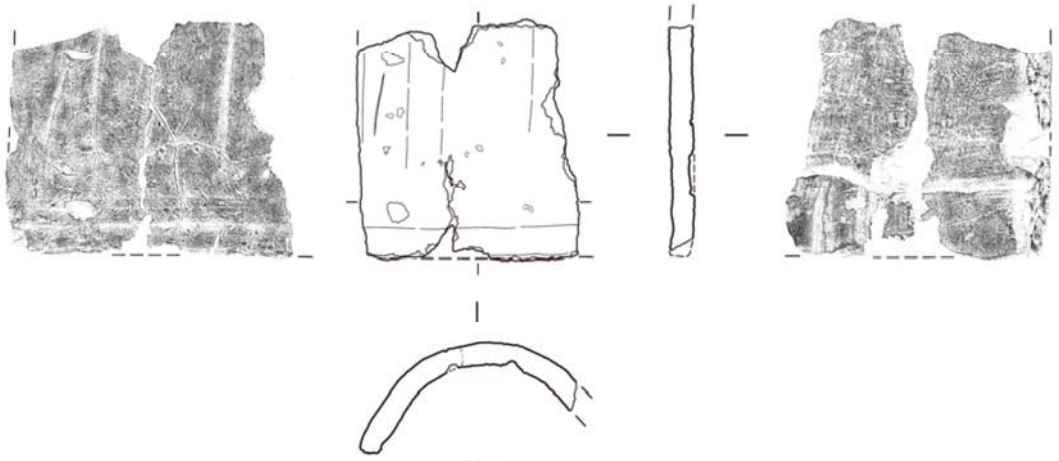
702
表土（Ⅰ層）



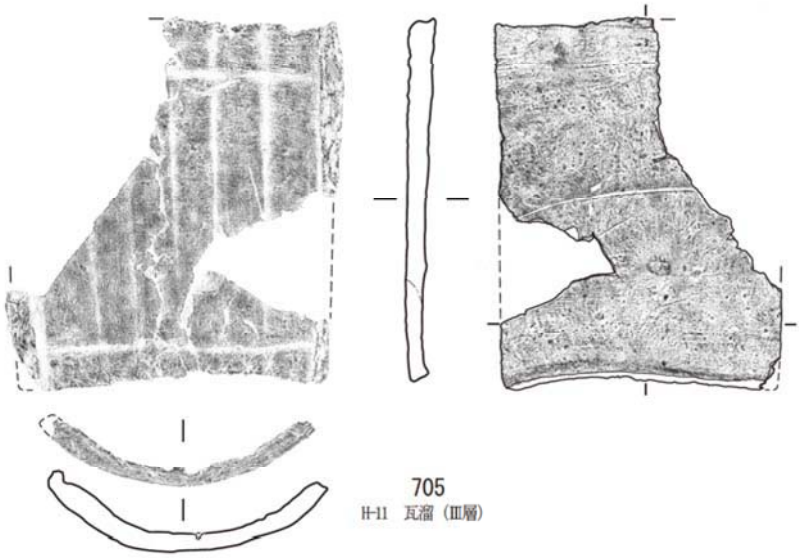
703
H-11　瓦溜　＋　I-10　暗粘（Ⅲ層）

0　10cm

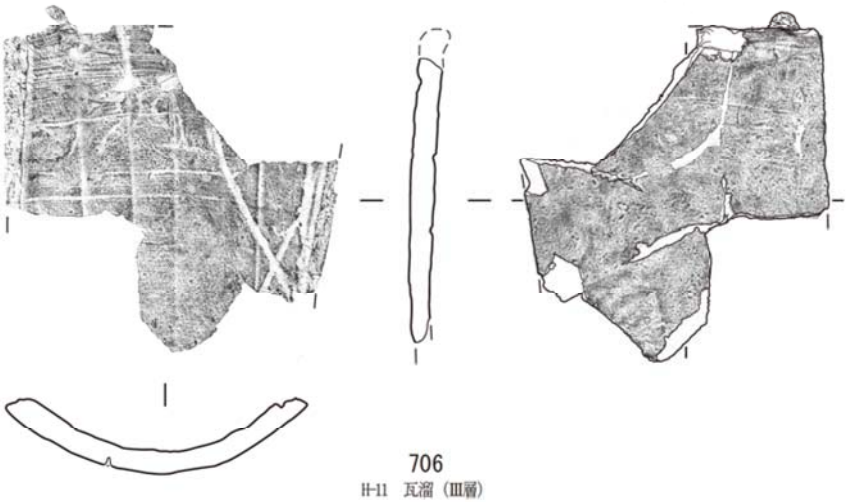
第83図　瓦20（明朝系瓦、喜名窯系）



704
H-11　カクラン（1層）

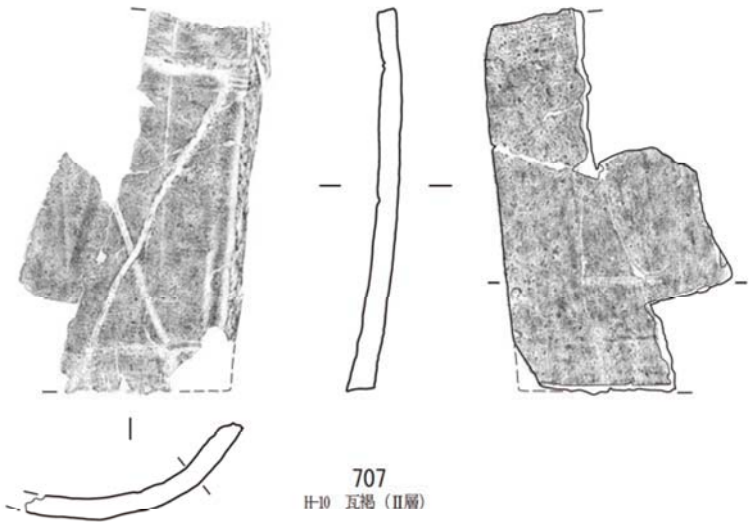


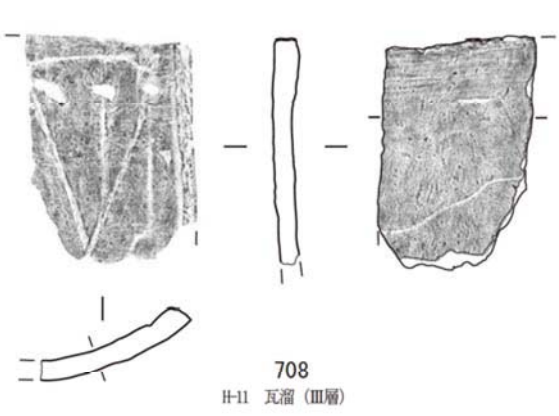
705
H-11　瓦溜（Ⅲ層）

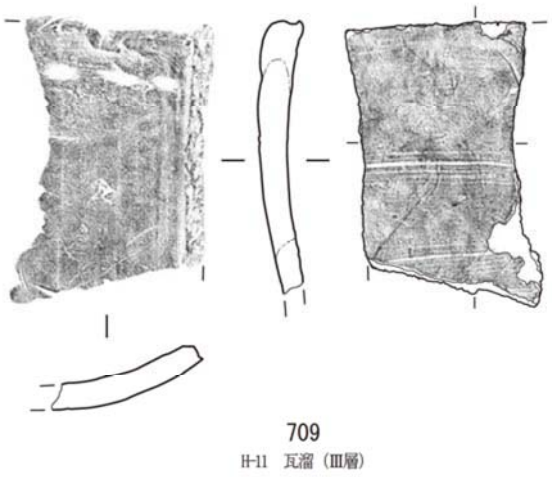


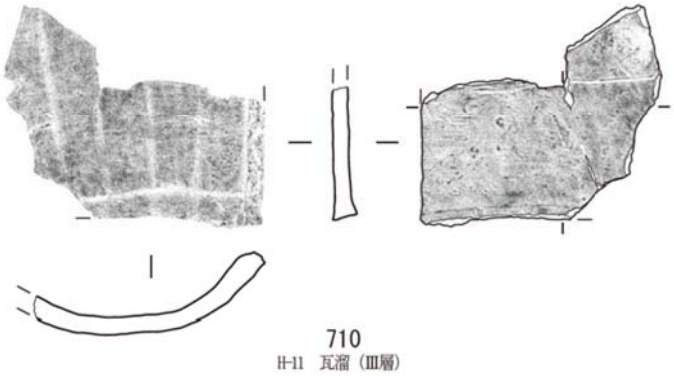
706
H-11　瓦溜（Ⅲ層）

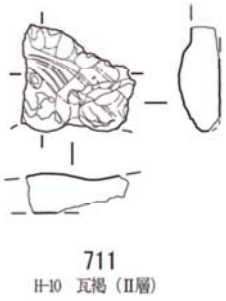
第84図　瓦21（明朝系瓦、喜名窯系）











第85図　瓦22（明朝系瓦、喜名窯系）

第55表　明朝系軒丸・軒平瓦観察表（1）

遺物No.	種類	色調	石井分類		上原分類		法量	観察事項（数字はcm）	地区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層	調査時土層
619	軒丸	灰色	A－1－Ⅰ	浦添城A	側視1型	首西ⅠAe03	(13.7)	笵バリ整形が不十分。瓦当外縁上部が低く内傾している。	南	H11	Ⅲ	暗灰黄色粘質土
620	軒丸	褐色	A－1－Ⅰ	西のアザナⅠ	側視1型	首西ⅠAe04	(14.0)	瓦当厚み2.0。瓦当裏ユビオサエ顕著。瓦当文様は小さな平行線や凹凸の笵傷目立つ。	南	H11	Ⅲ	暗灰黄色粘質土
621	軒丸	褐色	A－1－Ⅰ	西のアザナⅠ	側視1型	首西ⅠAe04	(14.4)	瓦当厚み2.5。瓦当裏指頭圧痕顕著。瓦当文様、小さな平行線の笵傷目立つ。	南	H11	Ⅲ	暗灰黄色粘質土
622	軒丸	灰色	A－1－Ⅰ	＜御内原北A＞	側視1型	＜首御北ⅠAd01＞	(14.0)	瓦当厚み3.2。瓦当文様は子房が浦添A、花弁の弁先と左半が西のアザナⅠに類しており、両者の中間タイプ。	南	H11	Ⅲ	暗灰黄色粘質土
623	軒丸	灰色	A－1－Ⅰ	西のアザナⅠ	側視1型	首西ⅠAe04	(13.6)	瓦当厚み1.8＋。瓦当文様は茎の崩れが大きい。	南	H11	Ⅲ	暗灰黄色粘質土
624	軒丸	灰色	A－1－Ⅰ	天界寺C	側視1型	首城下ⅠAb01	—	瓦当厚3.0＋。瓦当文様はやや不鮮明か。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
625	軒丸	灰色	A－2－Ⅱ	浦添城D	側視1型	湧田ⅠBa01	(14.4)	笵バリ丁寧に整形。瓦当裏丁寧なナデ。瓦当文様鮮明。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
626	軒丸	灰色	A－2－Ⅱ	浦添城D	側視1型	湧田ⅠBa01	(14.4)	瓦当厚み1.5＋。	南	H11	Ⅲ	暗灰黄色粘質土
627	軒丸	褐色	A－2－Ⅱ	浦添城D	側視1型	湧田ⅠBa01	(14.7)	瓦当厚3.0。瓦当文様は比較的鮮明だが、下方が不明瞭。	南	H11	Ⅲ	黄色粘質土
628	軒丸	褐色	A－2－Ⅱ	天界寺D	側視1型	湧田ⅠBa02	15.0	笵バリ整形。瓦当裏やや粗めのナデ。瓦当中央の文様やや不鮮明。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
629	軒丸	褐色	A－2－Ⅱ	天界寺D	側視1型	湧田ⅠBa02	(13.7)	笵バリ整形。瓦当裏やや粗めのナデ。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
630	軒丸	褐色	A－2－Ⅱ	天界寺D	側視1型	湧田ⅠBa02	(15.0)	笵バリ整形。瓦当裏やや粗めのナデ。漆喰丸瓦側端部付着。サンゴ塊混入。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
631	軒丸	褐色	A－2－Ⅱ	浦添城C	側視1型	湧田ⅠBa03	(15.0)	瓦当厚2.0＋。瓦当文様は鮮明だが、中央付近に水平方向の笵傷あり。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
632	軒丸	褐色	A－2－Ⅱ	浦添城C	側視1型	湧田ⅠBa03	(14.2)	笵バリ整形。瓦当裏指オサエ顕著。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
633	軒丸	灰色	A－2－Ⅱ	天界寺E	側視1型	湧田ⅠBa03	—	瓦当裏やや粗めのナデ。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
634	軒丸	褐色	A－2－Ⅱ	天界寺E	側視1型	湧田ⅠBa03	—	瓦当厚3.0。瓦当文様はやや不鮮明。瓦当裏はﾀﾃﾅﾃﾞ。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
635	軒丸	褐色	A－2－Ⅱ	天界寺E	側視1型	湧田ⅠBa03	(14.0)	瓦当厚み2.0。瓦当裏ユビオサエ顕著。瓦当文様は下半がやや不鮮明。漆喰は瓦当裏・筒部外面に恥部付着。	南	I10	Ⅲ	暗灰黄色粘質土
636	軒丸	赤色	B－2－Ⅱ	湧田古窯R	側視1型	首木ⅠBb01	14.5	瓦当厚み2.0。重量720ｇ。瓦当文様上半に水平方向の笵傷2ヶ所、やや不鮮明。瓦当裏ユビナデ顕著。漆喰筒部外面・瓦当裏の左側に付着。	南	I10	Ⅲ	暗灰黄色粘質土
637	軒丸	褐色	B－2－Ⅱ	湧田古窯R	側視1型	首木ⅠBb01	(14.0)	笵バリ整形。瓦当裏はﾅﾃﾞ。瓦当文様鮮明。	南	H11	Ⅰ	撹乱
638	軒丸	褐色	B－2－Ⅱ	湧田古窯R	側視1型	首木ⅠBb01	(14.5)	笵バリ整形。瓦当裏中央はﾀﾃﾅﾃﾞ。瓦当文様鮮明。瓦当周辺やや黒変。平瓦厚み1.5.	南	H11	Ⅰ	撹乱
639	軒丸	褐色	B－2－Ⅱ	湧田古窯U	側視1型	湧田ⅠBa04	—	瓦当厚2.2＋。瓦当文様は摩滅のためか不鮮明。瓦当裏はﾀﾃﾅﾃﾞ、ﾕﾋﾞｵｻｴ顕著。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
640	軒丸	褐色	B－2－Ⅱ	湧田古窯U	側視1型	湧田ⅠBa04	(12.2)	笵バリ整形。瓦当裏ﾅﾃﾞ。瓦当文様やや不鮮明。	南	H11	Ⅰ	撹乱
641	軒丸	灰色	B－2－Ⅱ	旧中城御殿A	側視1型	(近似)湧田ⅠBa04	(14.4)	瓦当厚1.5＋。瓦当文様は比較的鮮明だが、左下の花弁間に縦方向の粘土たまりがある。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
642	軒丸	褐色	B－2－Ⅱ	旧中城御殿A	側視1型	(近似)湧田ⅠBa04	(14.0)	瓦当厚2.0＋。瓦当文様は比較的鮮明だが、右側の花弁間に粘土たまりがある。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
643	軒丸	赤色	C－2－Ⅱ	北殿①	側視1型	(近似)御茶ⅠBb01	(15.4)	瓦当厚2.8。瓦当文様は比較的鮮明。瓦当裏ﾅﾅﾒﾅﾃﾞ。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
644	軒丸	灰色	B－2－Ⅱ	内間御殿B	側視1型	円覚ⅠBb02	(15.0)	瓦当厚み1.5＋。瓦当裏丁寧なナデ。下半右端に水平方向の笵傷（長1.0）。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
645	軒丸	灰色	B－2－Ⅱ	内間御殿B	側視1型	円覚ⅠBb02	14.1	瓦当厚1.8。重量1003g。瓦当文様は鮮明、下半右端の水平方向の笵傷は長さ0.8と他例より短い。瓦当裏ﾅﾅﾒﾅﾃﾞ後、部分的ﾀﾃﾅﾃﾞ。瓦当と平瓦の接合はやや粗いﾅﾃﾞ。釘孔あり。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
646	軒丸	褐色	B－2－Ⅱ	内間御殿B	側視1型	円覚ⅠBb02	(14.5)	瓦当厚2.5＋。下半右端に水平方向の笵傷あり。	南	H11	Ⅱ	瓦混褐色土
647	軒丸	褐色	B－2－Ⅱ	天界寺F	側視1型	(近似)円覚ⅠBb01	(15.0)	瓦当厚1.8＋。瓦当文様は鮮明。瓦当裏はﾅﾅﾒﾅﾃﾞ、ﾕﾋﾞｵｻｴ顕著。漆喰は瓦当裏外周に付着。	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
648	軒丸	赤色	A・B－2－Ⅱ	—	側視1型	—	(14.5)	瓦当厚1.5＋。瓦当裏面指頭圧痕顕著。	南	I10	Ⅱ	瓦混暗褐色土
649	軒丸	褐色	巴文＜新資料＞				(15.5)	瓦当文様新例か。珠文残存9、推定13個。巴文の頭部は丸めず接する。笵バリは平滑になるよう丁寧に整形。瓦当裏粗いナデ、黒変。平瓦厚み2.0。重量945g。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層

第 56 表　明朝系軒丸・軒平瓦観察表（２）　※ 654・655 は軒丸瓦だが瓦当がないので第 58 表に記載

遺物No.	種類	色調	石井分類		上原分類		法量	観察事項（数字はcm）	地区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層	調査時土層
650	軒丸	灰色	A－1－I相当か	天界寺A	側視１型	湧田ⅡA01	(14.6)	瓦当厚2.0。瓦当文様は全体的に太めの表現、不鮮明なところもある。笵バリ未整形。瓦当裏の凹凸顕著。漆喰は瓦当裏に付着。	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
651	軒丸	赤色	C－2－Ⅳ	内間御殿D	側視２型	円覚Ⅲb01	(14.5)	瓦当厚2.0＋。瓦当文様は鮮明。	北	F10	I	撹乱
652	軒丸	赤色	C－2－Ⅳ	内間御殿E	側視２型	内間Ⅲa01	(15.0)	瓦当厚1.6＋。瓦当表面・裏面下方ﾏﾝｶﾞﾝ釉。焼成硬質。瓦当裏面指頭圧痕顕著。	南	I10	Ⅱ	瓦混暗褐色土
653	軒丸	赤色	C－2－Ⅳ	内間御殿E	側視２型	内間Ⅲa01	(14.3)	瓦当厚2.5。瓦当表・裏・接合部にﾏﾝｶﾞﾝ釉。漆喰瓦当裏・筒部凸面に付着。	北	F10	I	撹乱
656	軒平	灰色	a－1－I	西のアザナB	側視１型	首西IAa02	(高12.8) (幅23.2)	瓦当厚み4.3。瓦当文様は右上縁がわずかにズレ。瓦当裏面丁寧なﾅﾅﾒﾅﾃﾞ。瓦当と平瓦の接合部は丁寧なﾅﾃﾞ（幅4.0）。	南	H11	Ⅲ	暗灰黄色粘質土
657	軒平	褐色	a－1－I	湧田古窯I	側視１型	—	(高13.2) (幅25.2)	瓦当厚4.2。瓦当文様は拓本では比較的明瞭だが、摩滅して見えにくい。瓦当裏ﾅﾅﾒﾅﾃﾞ、ﾕﾋﾞﾅﾐｴ顕著。瓦当と平瓦の接合は上部から粘土で覆う。	南	H10	Ⅱ	暗褐色礫混土
658	軒平	灰色	a－1－I	湧田古窯I	側視１型	—	—	瓦当厚み2.3＋。瓦当裏ﾅﾅﾒﾅﾃﾞ。笵ﾊﾞﾘ未整形。文様不鮮明。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
659	軒平	褐色	a－1－I	湧田古窯I？	側視１型	—	—	瓦当厚み3.0＋。瓦当笵バリ未整形。瓦当文様は不鮮明で、抉れや側縁と接する部分がある。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
660	軒平	褐色	a－2－Ⅱ	右掖門①	側視１型	首右IB01	(高13.0) (幅24.9)	瓦当厚み2.0＋。瓦当笵バリ・裏面丁寧な整形。文様も鮮明で肉厚な表現。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
661	軒平	灰色	a－2－Ⅱ	浦添城A	側視１型	首西ⅢA01	—	瓦当厚み2.7＋。瓦当文様不鮮明。瓦当裏ﾅﾅﾒﾅﾃﾞ。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
662	軒平	灰色	a－2－Ⅱ	浦添城A	側視１型	首西ⅢA01	—	瓦当厚3.5。瓦当文様やや鮮明。瓦当裏面ﾖｺﾅﾃﾞ。瓦当と平瓦の接合部はﾅﾃﾞが丁寧、やや凹面が凹む。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
663	軒平	褐色	a－2－Ⅱ	浦添城A	側視１型	首西ⅢA01	—	瓦当厚み2.5。瓦当裏面丁寧なﾅﾃﾞ、一部黒変。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
664	軒平	褐色	a－2－Ⅱ	浦添城A	側視１型	首西ⅢA01	—	瓦当厚み2.5。瓦当文様鮮明。瓦当裏面丁寧なﾅﾅﾒﾅﾃﾞ。瓦当と平瓦の接合部、凹面が凹む。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
665	軒平	褐色	a－2－Ⅱ	浦添城A	側視１型	首西ⅢA01	高10.7 幅23.5	瓦当厚3.1。平瓦厚1.5。重量848ｇ。瓦当文様やや不鮮明。瓦当裏面ﾅﾅﾒﾅﾃﾞ。瓦当と平瓦の接合部はやや凹面が凹む。	南	H11	I	撹乱
666	軒平	褐色	a－1－I相当	湧田古窯P	側視１型	首西II01	—	瓦当厚み3.8。瓦当文様は拓本では比較的明瞭だが、全体的に摩滅した印象。	南	H11	Ⅲ	暗灰黄色粘質土
667	軒平	灰色	a－2－Ⅱ	浦添城A	側視１型	首西ⅢA01	—	瓦当厚3.7。瓦当文様やや鮮明。瓦当裏面ﾖｺﾅﾃﾞ、笵バリ整形不徹底。瓦当と平瓦の接合部はﾅﾃﾞが丁寧、やや凹面が凹む。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
668	軒平	褐色	a－2－Ⅱ	浦添城A	側視１型	首西ⅢA01	(高11.3) (幅22.0)	瓦当厚3.0。瓦当文様は明瞭。瓦当裏はナナメナデ、やや凹凸あり。瓦当と平瓦の接合部は段となる、ナデ幅3.0	南	H10	Ⅱ	暗褐色礫混土
669	軒平	褐色	a－1－I相当	湧田古窯P	側視１型	首西II01	(高12.4) 幅24.0	瓦当厚4.5。瓦当文様不鮮明、側縁との間が接する部分有。瓦当裏面丁寧なﾅﾅﾒﾅﾃﾞ。平瓦部黒変。瓦当と平瓦の接合部は粗いﾅﾃﾞ（幅5.0）。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
670	軒平	褐色	a－2－Ⅱ	湧田古窯R	側視１型	天界ⅢBa03	(高12.2) (幅23.8)	瓦当厚3.5。瓦当文様はやや不鮮明、水平方向の笵傷３箇所。瓦当裏ﾖｺﾅﾃﾞ。全体的に整形は丁寧。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
671	軒平	褐色	a－2－Ⅱ	湧田古窯R	側視１型	天界ⅢBa03	—	瓦当厚3.5。瓦当裏面はﾖｺﾅﾃﾞ後、左ﾅﾅﾒﾅﾃﾞ。瓦当表面に石灰質の薄膜が部分的に見られる。	南	H11	I	撹乱
672	軒平	褐色	a－2－Ⅱ	湧田古窯R	側視１型	天界ⅢBa03	(高12.4) (幅24.0)	瓦当幅24.0、高11.2。重量1281ｇ。厚みは瓦当4.3、平瓦1.6。瓦当文様はやや不鮮明、平行線の笵傷４箇所。瓦当裏ﾖｺﾅﾃﾞ。全体的に整形は丁寧。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
673	軒平	褐色	a－2－Ⅱ	湧田古窯R	側視１型	天界ⅢBa03	—	瓦当厚4.7。平瓦厚1.3cm。瓦当文様は左側端が潰れている。瓦当の接合は、凹面側に三角形の粘土を厚く貼り付け。	南	H11	I	撹乱
674	軒平	褐色	a－2－Ⅱ	湧田古窯S	側視１型	首木ⅢBa01	—	瓦当厚3.9。瓦当文様は子房中央に平行の笵傷あり。瓦当裏は指頭圧痕が目立つ。	南	H11	I	撹乱
675	軒平	赤色（ﾏﾝｶﾞﾝ釉）	c－3－Ⅱ	天界寺C	側視１型	—	(高11.2) (幅22.3)	瓦当厚3.3。瓦当文様は鮮明だが、平行線の笵傷が中央に４ヶ所。瓦当裏は筋が残るﾖｺﾅﾃﾞ。瓦当と平瓦の接合部は粗いナデ（幅2.0）。瓦当表・裏の一部にﾏﾝｶﾞﾝ釉。	北	F10	I	撹乱
676	軒平	灰色	c－3－Ⅱ	木曳門C	側視１型	—	(高10.6) (幅23.8)	瓦当厚2.5。平瓦厚1.7。瓦当文様は全体的に鮮明だが、やや潰れている所あり。瓦当裏面のナデは粗い。	南	H11	I	撹乱
677	軒平	灰色	b－3－Ⅱ	仮称１ ＜淑順門西A＞	側視１型	ⅢB式	(高11.1) (幅24.4)	瓦当厚み3.0。瓦当文様鮮明・肉厚、下半左に平行の笵傷（長0.5）。瓦当裏ﾅﾅﾒﾅﾃﾞ。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土

第 57 表　明朝系喜名窯系瓦観察表

遺物No.	種類	部位	石井分類		上原分類		焼成	観察事項（数字はcm）	地区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層	調査時土層
693	軒丸	瓦当	B－2－Ⅱ	湧田古窯U	側視1型	湧田ⅠBa04	陶器質	瓦当径12.8、厚み3.5。瓦当側縁部分的に面取り。瓦当裏ﾀﾃﾅﾃﾞ。	南	I 10	Ⅱ	瓦混暗褐色土
694	軒丸	瓦当	B－2－Ⅱ	湧田古窯U	側視1型	湧田ⅠBa04	軟質	瓦当径（13.2）、厚み2.2。瓦当裏中央ややﾃﾞ寧なﾅﾅﾒﾅﾃﾞ。瓦当表面ｵﾘｰﾌﾞ色の自然釉付着。	南	H11	I	撹乱
695	軒丸	瓦当	B－2－Ⅱ	湧田古窯U	側視1型	湧田ⅠBa04	陶器質	瓦当厚3.0。瓦当裏ﾀﾃﾅﾃﾞ。瓦当文様は比較的鮮明だが、雄しべ軸付近に水平の笵傷あり。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
696	軒丸	瓦当	B－2－Ⅱ	湧田古窯U	側視1型	湧田ⅠBa04	陶器質	瓦当径（14.2）、厚み2.5。瓦当裏やや丁寧なナデ。	南	H11	I	撹乱
697	軒丸	瓦当	B－2－Ⅱ	湧田古窯U	側視1型	湧田ⅠBa04	陶器質	瓦当径（12.5）、厚み1.6＋。瓦当裏やや丁寧なナデ。	南	H11	I	撹乱
698	軒丸	瓦当	B－2－Ⅱ	湧田古窯U？	側視1型	湧田ⅠBa04	陶器質	瓦当径（15.0）、厚み1.9＋。瓦当裏やや丁寧なナデ。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり
699	軒平	瓦当	a－2－Ⅱ	湧田古窯T	側視1型	首淑Ⅲa01	陶器質	全長24.3、広端幅23.5、狭端幅19.5、狭端厚1.5、瓦当高12.0・幅（24.9）・厚3.5、重量1804g。瓦当文様比較的鮮明。瓦当裏ﾅﾅﾒﾅﾃﾞ。凹面の接合部のヨコナデは粗く、側縁をケズリで平坦にしているが、上縁は未調整。凹面広端の桶板圧痕（幅3.0）、狭端は布目糸痕あり。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
700	軒平	瓦当	a－2－Ⅱ	湧田古窯R	側視1型	天界ⅢBa03	陶器質	瓦当厚3.6。瓦当裏ﾅﾅﾒﾅﾃﾞ。平瓦凹面に桶板圧痕（幅2.0）3ヶ所。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり
701	丸瓦	玉縁部	－	－	－	－	陶器質	玉縁a、長3.3、厚1.5。釘孔あり（径2.5）。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
702	丸瓦	玉縁部	－	－	－	－	陶器質	玉縁a、長3.3、厚1.5。玉縁部に横方向のﾍﾗ記号「―」あり。凹面、側端に部分的に漆喰残る。	不明	不明	I	表土
703	丸瓦	玉縁部・端部	－	－	－	－	陶器質	残存長24.7、端部厚み0.8。狭端面取りﾅﾃﾞ幅3.5。	南	H11+I 10	Ⅲ	瓦だまり＋暗灰黄色粘質土
704	丸瓦	端部	－	－	－	－	軟質	端部厚み1.5。狭端面取り幅4.5。器胎の間隙が多い。	南	H11	I	撹乱
705	平瓦	広端部・狭端部	－	－	－	－	陶器質	全長23.8、狭端幅19.0。狭端丁寧なﾅﾃﾞ。凹面狭端側に布目糸痕、広端側に桶板圧痕間は3.0、推定5箇所。筒部凸面にヘラ記号「－」あり。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり
706	平瓦	広端部	－	－	－	－	陶器質	端部厚み1.8。広端面不整形、焼成不良なのか付着もしくは突出物あり。凹面布両端が側端側に交差状に残る。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり
707	平瓦	広端部	－	－	－	－	陶器質	全長26.2、厚みは狭端1.6、広端1.2。凹面狭端側に布目糸痕、広端側に桶板圧痕間は2.0、凹面布両端が側端側に交差状に残る。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
708	平瓦	広端部	－	－	－	－	陶器質	端部厚み1.5。筒部凸面に浅いﾍﾗ圧痕？広端面は不整形。凹面布両端が側端側に交差状に残る。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり
709	平瓦	広端部	－	－	－	－	軟質	厚みは端部2.5、筒部1.8。広端面は不整形。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり
710	平瓦	狭端部	－	－	－	－	陶器質	端部厚み1.5。筒部凸面にヘラ記号「－」あり。広端面は丁寧なﾅﾃﾞ、ﾍﾗ圧痕？凹面に広端側に布目糸痕。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり

④塼（712 ～ 723）（第 86 ～ 88 図、第 59・61・62 表、図版 60・61）

塼は総破片数 1058 点出土している。上原静の分類（2011）を参考にして、形態により大きく４つに分けた。なお、ヘラ記号があるものは、65 点見られ、１本線のものが多い（第 62 表）。

方形（712 ～ 714）　灰色系 58 点、赤色系 82 点が出土している。長さは、一辺 23 ～ 25cm である。ヘラ記号は、下面に横線１本に見られる（713）。

三角形（720・721）、灰色系 49 点、赤色系 38 点が出土している。ヘラ記号は、三角形のもの（720）、十字のもの（721）があり、どちらも長辺に側面に見られる。

長方形（718）　灰色系２点が出土している。短辺を除いた４辺全てに漆喰が付着。

噛み合わせ式（722・723）　灰色系 17 点、赤色系１点が出土している。

722 は下面にＬ状突起を有するタイプで上原分類Ⅳ式Ａ類である。723 は、蓋状のもので上原分類Ⅲ式Ａ類である。

その他、破片が小さく形態は確定できないが、ヘラ記号などの特徴がある資料について図化した。

715 は、漆喰が上面に凹状に付着している。716 は、側面一方に「×」字状のヘラ記号あり。717 は、下面にコビキ痕なのか凹線条痕、側面には「K」字状のヘラ記号あり。719 は、丸囲いされた「大」字印がある。

第 58 表　明朝系平・丸・役瓦観察表　※ 654・655 は軒丸瓦だが瓦当がないので本表に記載

遺物No.	種類	部位	色調	観察事項	地区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層	調査時土層
654	軒丸瓦	玉縁部	褐色	玉縁ａ、長4.0．厚み1.5．筒部厚み1.4。筒端部が面取り。石灰質が膜状に筒部凸面に付着。	南	H11	Ⅰ	撹乱
655	軒丸瓦	筒部	灰色	筒部厚3.5。釘孔径2.4。漆喰は凸面左側、凹面中央に付着。	南	H10	Ⅱ	暗褐色礫混土
678	丸瓦	完形	褐色	全長32.3、幅15.6。玉縁ｂ、長さ5.7。端部厚み1.2。狭端面取りﾅﾃﾞ幅3.5．重量1710g。玉縁部にヘラ記号「－」あり。凹面に布両端が残る。石灰質が膜状に筒部凸面に付着。	南	H11	Ⅰ	撹乱
679	丸瓦	玉縁部・端部	褐色	全長30.3、全高8.0。広端幅15.0、厚1.5、重量1710g。玉縁ｂ、長3.3、幅9.4。下端面取り幅2.5～4.0。	南	H10	Ⅱ	瓦混暗褐色土
680	丸瓦	玉縁部	褐色	玉縁ｂ、長4.7、上端幅9.2、下端幅11.2、厚2.0。凸面のﾀﾃｹｽﾞﾘ（幅3.0）明瞭。凹面上部に横方向の圧痕あり。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
681	丸瓦	玉縁部・端部	褐色	全長32.1、筒上端幅13.5。玉縁ｂ、長5.5、幅9.5。重量1580g。玉縁部にヘラ記号「×」あり。漆喰筒部全面付着。凹面縦方向の布綴じ痕、下端に布目端痕あり。下端面取り幅1.5。	南	H10	Ⅱ	暗褐色礫混土
682	丸瓦	玉縁部・端部	褐色	全長30.1、厚み1.5、玉縁ｂ（長4.0、上端幅9.0、下端幅11.2）、筒部（上端幅13.4、下端幅15.5）、重量1730g。凹面下端面取幅1.5。サンゴ塊混入。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
683	丸瓦	玉縁部	褐色	玉縁ｂ、長5.0、幅14.2、厚1.7。玉縁部に縦方向にヘラ記号「｜｜｜」あり。	南	H10	Ⅱ	瓦混暗褐色土
684	丸瓦	玉縁部・端部	灰色	全長30.9、玉縁ａ（長3.1、上端幅8.5、下端幅12.1）、筒部上端幅14.4・厚3.2、下端厚1.2）、重量1.9kg。凸面上部は丁寧なﾖｺﾅﾃﾞ。凹面に布目の両端あり、下端面取幅3.0。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
685	丸瓦	玉縁部	灰色	玉縁ａ、長3.5、幅14.4、厚1.4。玉縁部に縦方向にヘラ記号「｜」あり。	南	H10	Ⅱ	瓦混暗褐色土
686	丸瓦	玉縁部	灰色	全長30.7。玉縁ｂ、長4.7。端部厚み1.5ｃｍ。狭端面取り幅1.5．玉縁部にヘラ記号「－」あり。漆喰凸面狭端中央、筒部一部に付着。	南	H11	Ⅲ	瓦だまり層
687	平瓦	完形	灰色	全長23.2、広端（幅23.5・厚1.7・高6.0）、狭端（幅18.5・厚1.2・高4.5）。重量1370ｇ。凹面広端の桶板圧痕（幅1.5）は推定６ヶ所（1ヶ所ﾅﾃﾞｸｼ）。狭端の布目糸痕２条。	南	H11	Ⅰ	撹乱
688	平瓦	広端部・狭端部	褐色	全長26.0、幅は広端26.5、狭端推定21.0、厚み1.7。重量1820kg。凹面広端の桶板圧痕（幅2.5）で６ヶ所。胎土に瓦小片混入。広端面は不整形で、ヘラ圧痕多数。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
689	平瓦	広端部	褐色	全長26.3、広端幅24.5、狭端幅21.5、広端厚2.0、狭端厚1.6．凹面広端の桶板圧痕（幅2.0）６ヶ所。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
690	平瓦	完形	褐色	全長26.2、幅は広端25.8、狭端22.0、厚み1.7。重量1780g。凹面広端の桶板圧痕（幅2.5）で６ヶ所。広端面は不整形。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
691	平瓦	広端部・狭端部	褐色	全長24.7、厚みは広端1.8、狭端1.3。凹面広端の桶板圧痕（幅6.5）推定４ヶ所、広端面取りﾅﾃﾞ（幅3.5）。漆喰は凹面、凸面四周端部に付着。	南	I 10	Ⅱ	瓦混褐色土
692	平瓦	狭端部	灰色	狭端幅21.0。凹面の布目痕粗い（0.2）。凸面狭端側丁寧なナデ（幅3.5）、不明線条あり。漆喰右端付着。	南	I 10	Ⅲ	暗灰黄色粘質土
711	役瓦（道具瓦）	—	赤色	最大厚2.5。凸面はﾅﾃﾞ、ﾕﾋﾞｵｻｴ。もう１面は平滑。雲形？	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土

⑤漆喰（724 ～ 734）（第 89・90 図、第 60 表、図版 62・63）

漆喰は 155 点出土しており、その大半が南区Ｈ 11 のⅢ層瓦溜から近世瓦と共に出土している。これらの漆喰は、瓦もしくは塼が付着していたと思われる痕跡が見られるものである。

この内、732 のみは断面が半円状を呈するもので、凹面には突帯が見られる破片で、丸瓦を通常に重ねた時の連結部を覆ったものと思われる。

それ以外は、どのような用途で瓦に漆喰が付着していたのかは不明であるが、瓦の付着痕面の裏が平滑に整形されているので、何らかの構造物の一部であったことは確かと思われる。特徴が類するものにまとめて、説明する。

平均的な厚さが４～５ｃｍで、付着痕面の裏が平滑に仕上げられたものは、丸瓦と平瓦と付着痕が見られる（724・725・727・730・731・733）。通常の瓦葺きではなく、瓦で何らかの構造物を作り、その上に漆喰を覆ったものと思われる。厚さが２～３ｃｍとやや薄いが、同様の特徴をもっているものもある（729・731）。

726 は厚さが２～６ｃｍのもので、丸瓦と塼が付着していたものと思われる。

728 は明確な瓦の付着痕は見られるが、厚さが５ｃｍ前後で、凸状に盛り上がった平滑な面があり、側面は弧状に整形されている。これらの特徴は、上記のものと類した印象がある。

734 は１ｃｍ前後の厚さで、付着面には突帯が見られその左右に平瓦の側面を差し込んだような痕があり、裏面は水平に平滑である。この特徴は、他のものとはやや異なった印象を受ける。

第 59 表　塼観察表

図版No.	平面形	分類など	観察事項（数字はcm）	地区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層	調査時層名
712	正方形	灰色系（褐色）	上面長（長短23.5）、下面長（長短23.0）、厚み23.5、2,960g。漆喰か石灰質膜わずかに上面、測面１方のみ付着。下面１辺端部に面取り有。側面全体的に雑な整形。	北	F10	I	撹乱
713	正方形	灰色系	上面長25.8、下面長25.0、厚み5.6、3,020ｇ。発色良好だが、中央赤褐色。下面にヘラ記号「＋」。	南	G11	II	瓦混褐色土
714	正方形	灰色系（褐色）	上面長25.0、下面長24.3、厚み4.1、2,220ｇ。下面に幅0.5の凹線状痕（コビキ？）が垂直方向で一部残る。	南	I10	II	瓦混褐色土
715	不明	灰色系	厚み4.6、1,330ｇ。上面に漆喰が厚さ0.8～1.8cmで凹状に付着。下面は摩滅が顕著。	南	I10	II	瓦混暗褐色土
716	不明	灰色系（褐色）	厚み3.6、1,180ｇ。調整が比較的丁寧なため上下面の差が分からない。側面にヘラ記号「×」。	南	I10	III	暗灰黄色粘質土
717	不明	灰色系	厚み4.4、800ｇ。下面は幅0.5の凹線状痕（コビキ？）が垂直方向であり。側面にヘラ記号４本線の「K」字状。	北	F10	I	撹乱
718	長方形	灰色系	上面長（長24.9－短11.5）、下面長（長24.5－短11.0）、厚み4.1、1,950ｇ。側面長短２辺を除き、４面に漆喰が全体的に付着。	南	I9	II	暗褐色礫混土
719	不明	赤色系	厚み4.5、290ｇ。上面にヘラ記号、丸囲いの「大」字あり。	南	H10	II	瓦混暗褐色土
720	三角形	灰色系（褐色）	推定長辺長36.0、短辺長25.0、厚み4.1、2,010ｇ。長辺側面にヘラ記号「 」あり。	北	F10	I	撹乱
721	三角形	灰色系	厚み3.8、1,100ｇ。長辺の立ち上がりが60°。上面と側面上半に石灰質の薄膜が付着。長辺側面にヘラ記号「＋」あり。	南	I10	II	瓦混暗褐色土
722	かみ合わせ式	灰色系	厚み3.0、突起部厚み4.1、790ｇ。側面に段、下面にL字状突起を有する。（上原分類Ⅳ式Ａ類）。	北	F11南	IV-1	褐色土
723	かみ合わせ式	灰色系	厚み4.7、下面段部厚み5.7、1,550ｇ。蓋状。（上原分類Ⅲ式Ａ類）。	南	H11	III	オリーブ褐色礫層（瓦だまり）

第 60 表　漆喰観察表

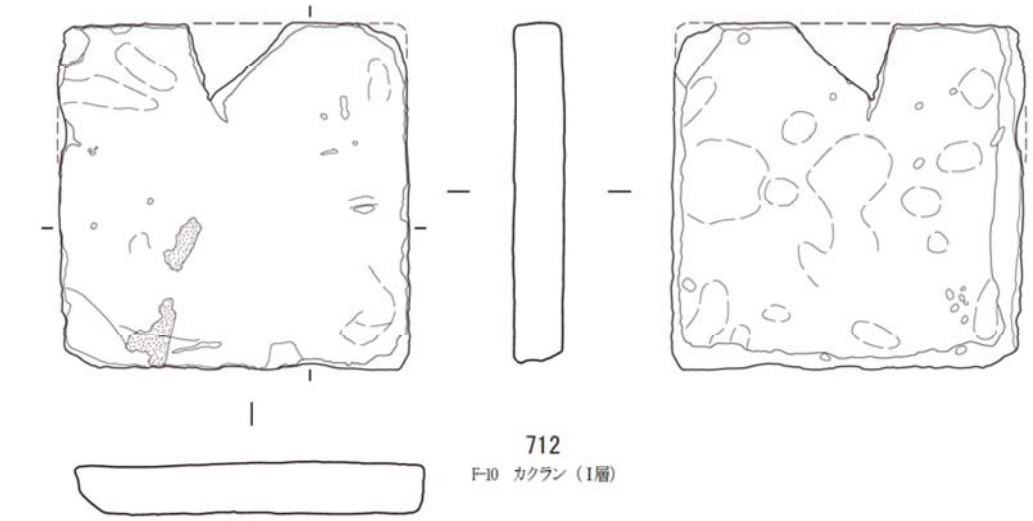
図版No.	重量（g）	厚さ（cm）	観察事項	地区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層	調査時層名
724	4,000	7.8	上面には左半に丸瓦１、右半におそらく平瓦４つが付着の痕跡あり。下面は、わずかに凸状で、平滑に整形。	南	H11	III	瓦だまり層
725	5,000	8.6	上面は中央部と左半、右端に丸瓦が３つ、右半に平瓦２つ、不明瓦が２つの普茶ウコン有。下面はわずかに凸状で、平滑に整形。	南	H11	III	瓦だまり層
726	460	6.5	サンゴ塊・焼土（瓦？）片を含む。塼・丸瓦の玉縁部の付着痕が見られる。	南	H11	III	瓦だまり層
727	1,060	6.6	上面には左半におそらく丸瓦が２つ、右半に平瓦の付着痕あり。下面はわずかに凸状で、平滑に整形。	南	H11	III	瓦だまり層
728	1,510	5.5	左面は凸状に整形され、下面は未整形。側面はコーナー状に整形されているところもある。	南	H11	III	瓦だまり層
729	450	3.6	上面には左半に平瓦、右半に扇状？の付着痕あり。下面は全体的に波打つが、平滑に整形。	南	H11	III	瓦だまり層
730	2,190	7.0	上面には平瓦が付着しており、丸瓦と、不明瓦の付着痕もあり。下面は凸状で、平滑に整形。	南	H11	III	瓦だまり層
731	710	3.2	上面にはおそらく平瓦４つの付着痕あり。下面は、やや粗く仕上げられている。	南	H11	III	瓦だまり層
732	120	2.1	丸瓦間の上面を覆った漆喰と考えられる。	南	H11	III	瓦だまり層
733	200	4.0	上面には平瓦がわずかに付着。３面にやや平滑な面があるが、付着痕等は不明。	南	H11	III	瓦だまり層
734	120	3.4	サンゴ塊含む。上面は、平瓦を垂直に立てような痕跡が２つあり。下面は丁寧に平坦に整形。	南	H11	III	瓦だまり層

第 61 表　塼集計表

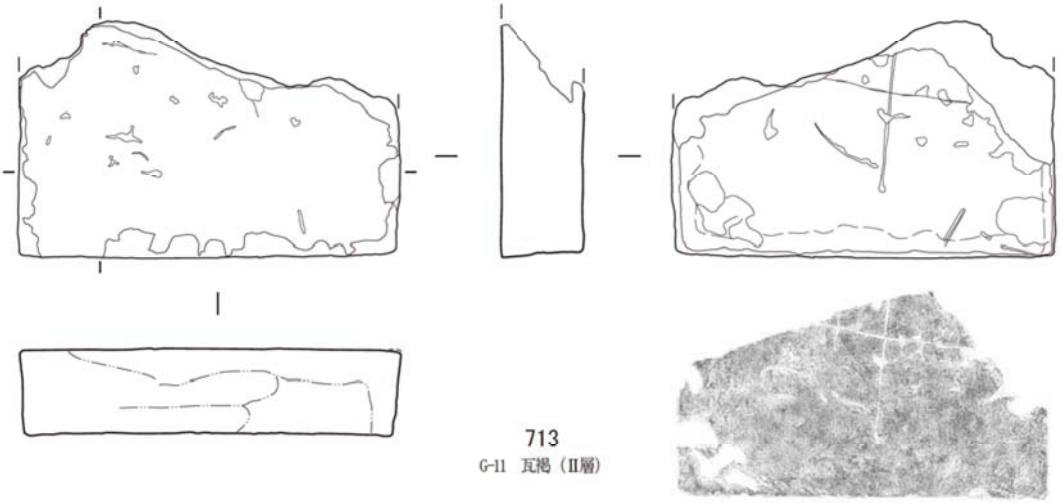
合計 / 点数						地区 / 層												小計	個体計算	個体数計
						北区					南区				不明		総計			
色調	形状	厚さcm	被熱	漆喰	角	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ-1	Ⅳ-3	Ⅳ-3'	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	不明				
灰色系	三角形	5～6	無	無	1							1					1		0	
		3～4	無	無	1	14					15	10	1		1		41		13	
					2	2									1		3	49	1	16
					3	2											2		2	
					無	2											2		—	
	正方形	5～6	無	無	1	3		1				11					15		3	
					2							1					1		0	
					無						1						1		—	
		3～4	無	有	無										1		1		—	
				無	1	11					2	6	1	1	6		29	58	7	10
					2							2					2		0	
					4	1											1		0	
					無								1		7		8		—	
	組み合わせ式	5～6	無	無	1						1	3	2				6		6	
					無							1					1		—	
		3～4	無	無	1							5					5	17	5	12
					無			1				3					4		—	
		不明	無	無	1								1				1		1	
	長方形	3～4	無	有	4							1					1	2	1	1
				無	無								1				1		—	
	不明	5～6	無	有	無							1					1		—	
				無	1						3	12	4	1			20		—	
					無			1			6	17	2				26		—	
			有	無	1	1											1		—	
		5～6	無	無	1							1					1	494	—	—
		3～4	無	有	無							1					1		—	
				無	1	21	1		1		7	44	12			2	86		—	
					無	41	1	1	2	1	41	244	20		3	3	357		—	
		不明	無	無	無										1		1		—	
赤色系	三角形	3～4	無	無	1	27											27		9	
					2	4						1					5	38	1	12
					3							1			1		2		2	
					無	1									3		4		—	
	正方形	5～6	無	無	1							1					1		0	
		3～4	無	有	1						1				1		2		0	
					無										1		1		—	
				無	1	42						6			13		61	82	15	16
					2							2				3	5		1	
					無										10		10		—	
		不明	無	無	1										2		2		—	
	組み合わせ式	3～4	無	無	無								1				1	1	—	—
	不明	5～6	無	無	1							1					1		—	
					無							4					4		—	
		5～6	無	無	1							2					2		—	
		3～4	無	有	無	4									2		6	317	—	
				無	1	67					4	17					88		—	—
					無	100		3			23	75	6		6	1	214		—	
			有	無	1	1											1		—	
		不明	無	無	無										1		1		—	
合計						344	2	7	3	1	104	474	52	2	60	9	1058	1058		67

第 62 表　塼ヘラ記号集計表

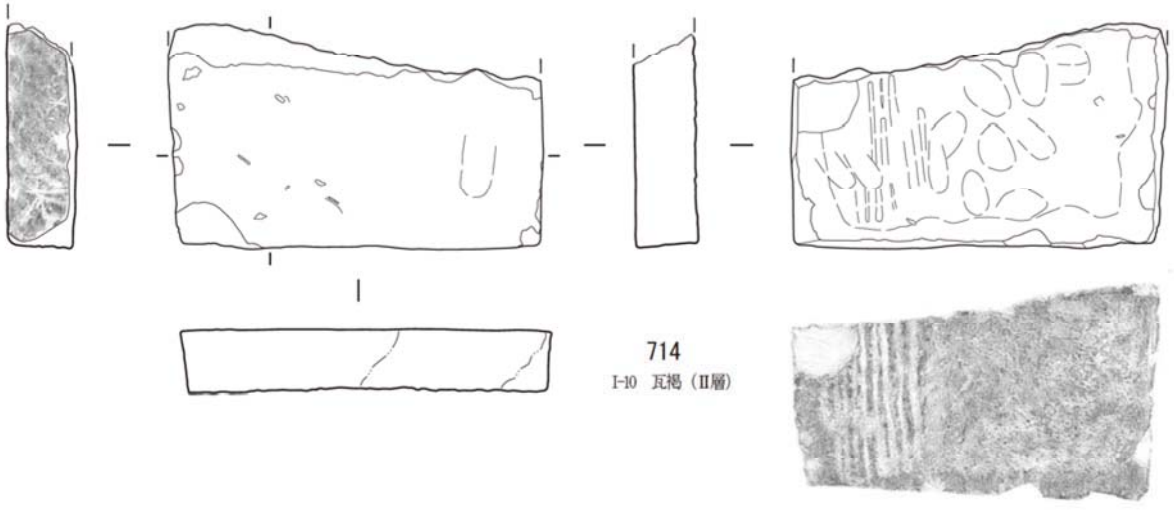
合計 / 点数			一本線				二本線					三本線	大（円圏）	その他	合計
色調	形状	位置	―	／	｜	他	／／	＋	＝	X	他				
灰色系	三角形	側面	1				1	1	2					1	6
	正方形	側面	2		1	1			1	1		3			9
		裏						1							1
	不明	表	1									1			2
		側面	9	1		1	1		3		2	3			20
赤色系	三角形	側面				1	1			1					3
		二側面									2				2
	正方形	表									1	1			2
		側面	4		2					1					7
		二側面	1								1				2
	不明	表											1	2	3
		側面		2		1	1			1	1	1			7
		側面と裏									1				1
合計			18	3	3	4	4	2	6	4	8	9	1	3	65



712
F-10 カクラン（I層）



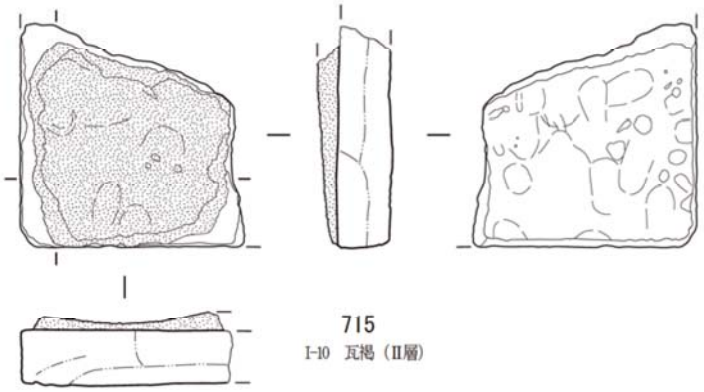
713
G-11 瓦堆（II層）



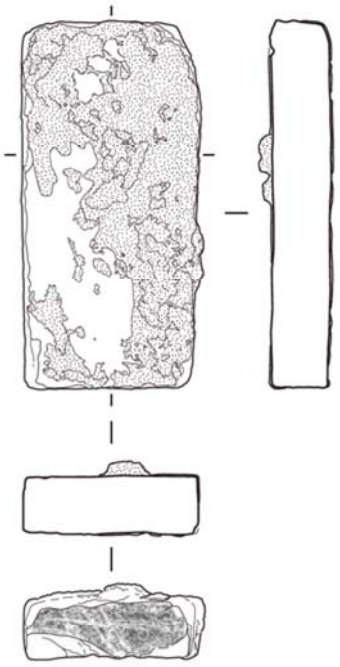
714
I-10 瓦堆（II層）

0 10cm

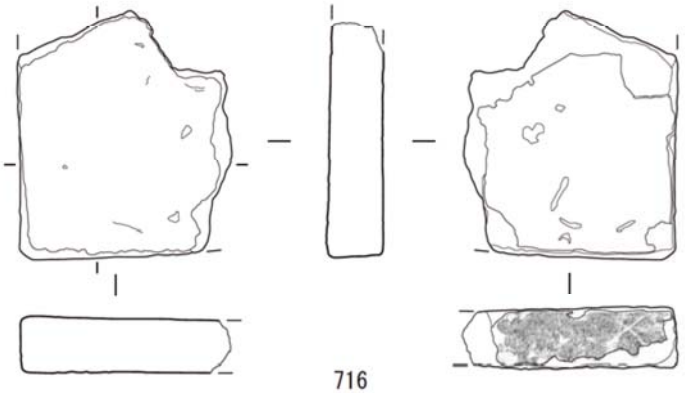
第86図　塼１



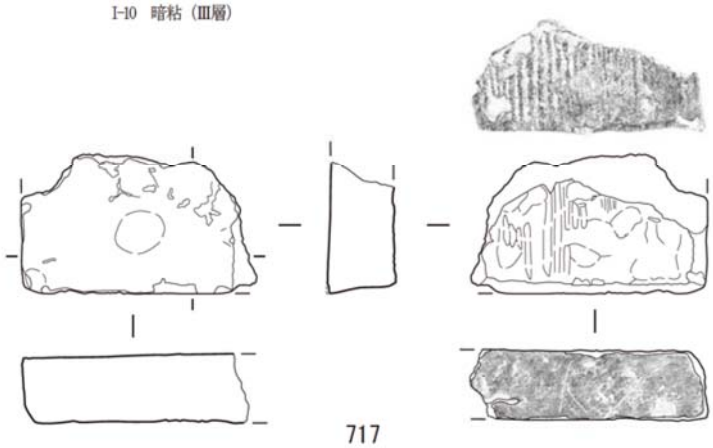
715
I-10　瓦褐（Ⅱ層）



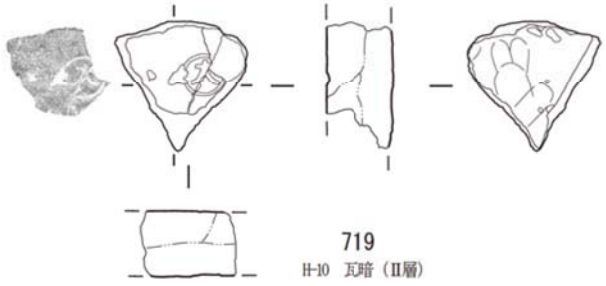
718
I-9　暗レキ（Ⅱ層）



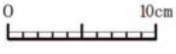
716
I-10　暗粘（Ⅲ層）



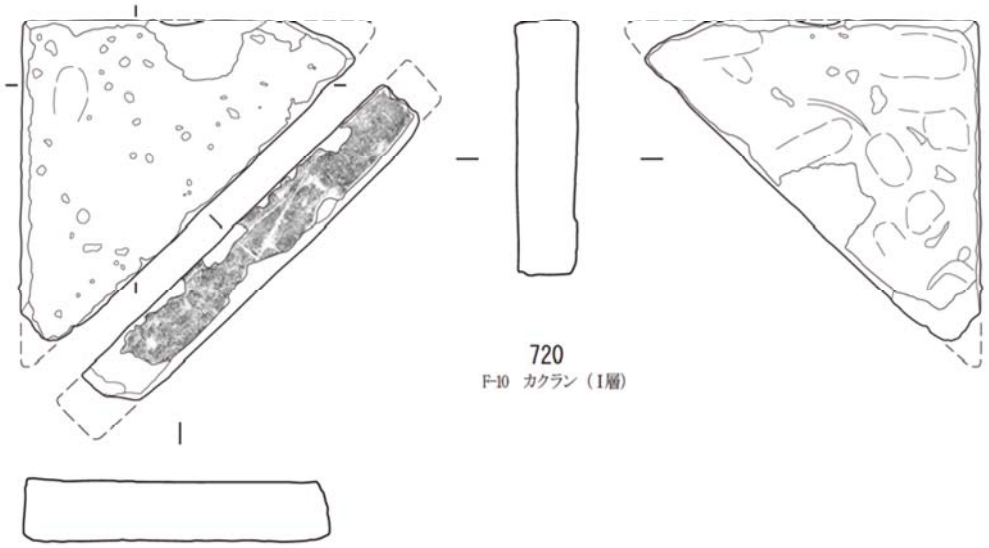
717
F-10　カクラン（Ⅰ層）



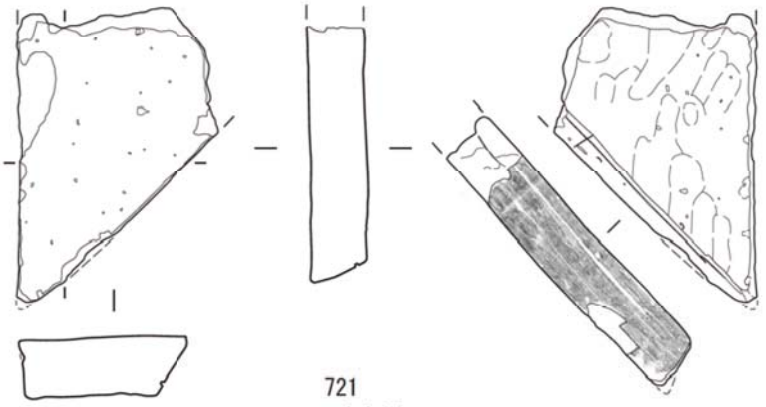
719
H-10　瓦暗（Ⅱ層）



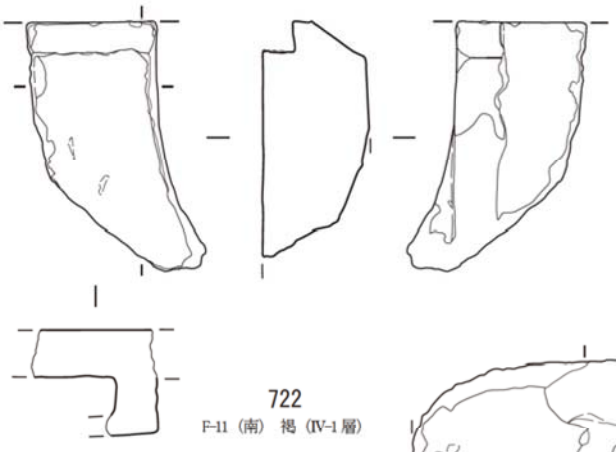
第87図　塼２



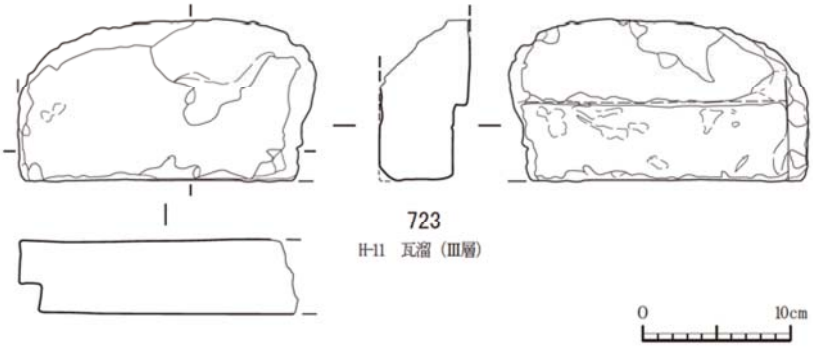
720
F-10　カクラン（Ⅰ層）



721
I-10　瓦暗（Ⅱ層）

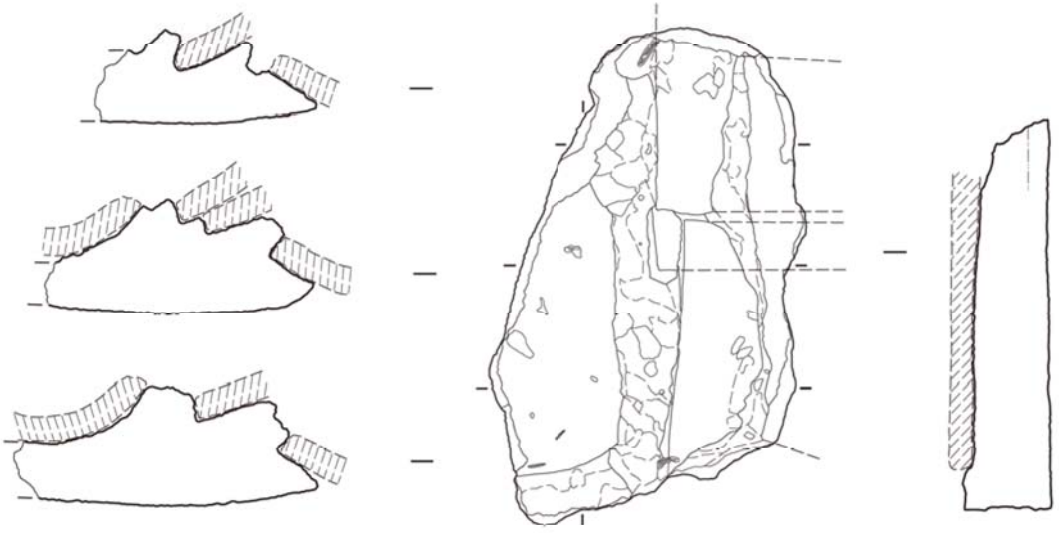


722
F-11（南）　褐（Ⅳ-1 層）

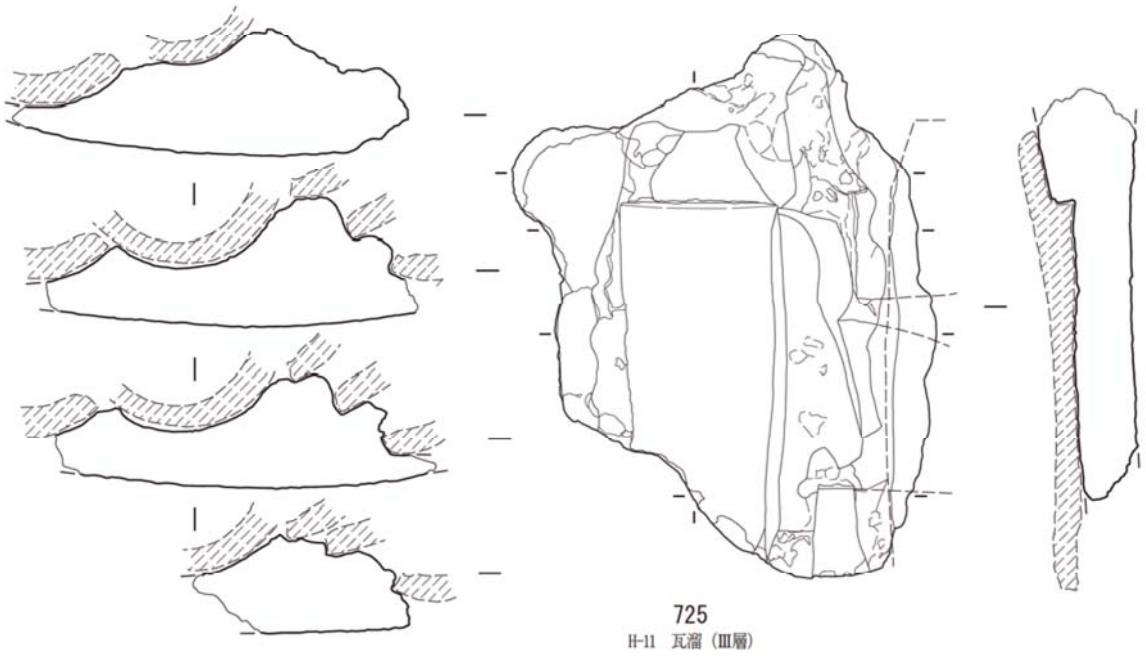


723
H-11　瓦溜（Ⅲ層）

第88図　壕３

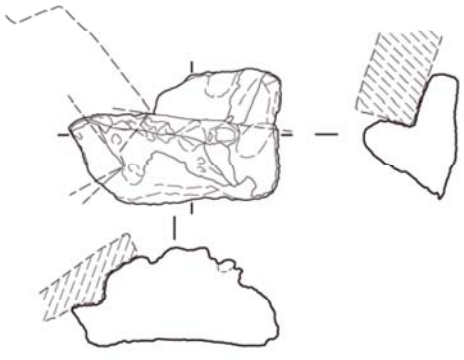


724
H-11　瓦溜（Ⅲ層）

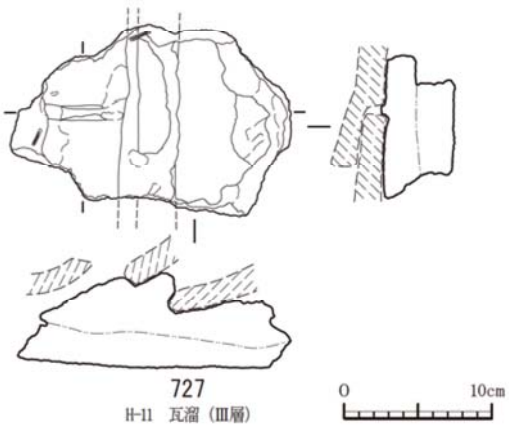


725
H-11　瓦溜（Ⅲ層）

：付着していた瓦の想定位置



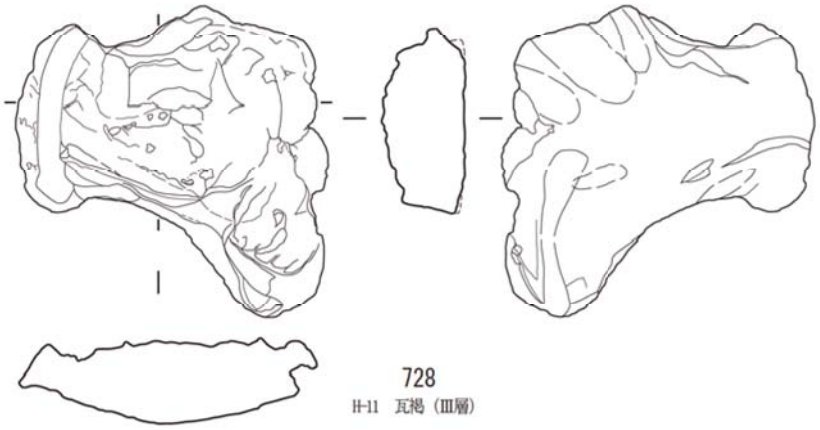
726
H-11　瓦溜（Ⅲ層）



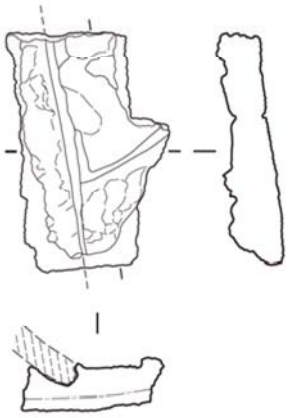
727
H-11　瓦溜（Ⅲ層）

0　10cm

第89図　漆喰１

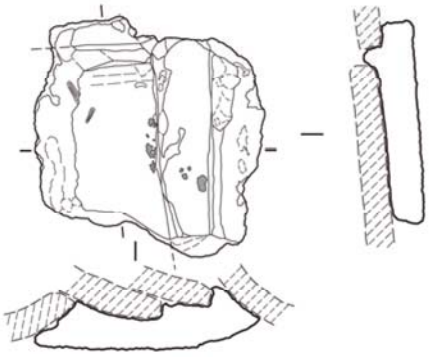


728
H-11　瓦褐（Ⅲ層）

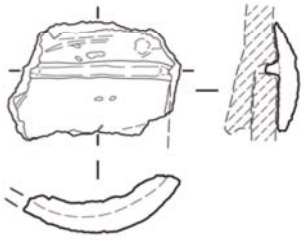


729
H-11　瓦褐（Ⅲ層）

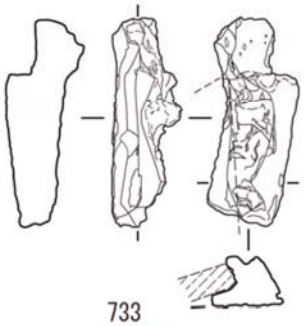
730
H-11　瓦褐（Ⅲ層）



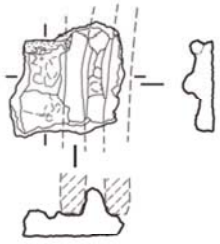
731
H-11　瓦褐（Ⅲ層）



732
H-11　瓦褐（Ⅲ層）



733
H-11　瓦褐（Ⅲ層）



734
H-11　瓦褐（Ⅲ層）

第90図　漆喰２

第 63 表　円盤状製品観察表

図版No.	素材	縦	横	厚	重量(g)	地区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層	調査時土層
		(mm)							
735	中国産褐釉陶器	5.1	5.6	1.1	42.5	北	F10	Ⅰ	撹乱
736	中国産褐釉陶器	2.3	2.4	0.7	6.4	北	F11	Ⅳ-1	黄褐色土
737	中国産褐釉陶器	2.1	1.8	0.7	4.0	北	F11	Ⅳ-1	黄褐色土
738	中国産褐釉陶器	2.7	2.5	0.8	7.9	南	I10	Ⅱ	瓦混暗褐色土
739	中国産褐釉陶器	2.8	3.0	0.8	10.5	北	E11	Ⅱ？	上面覆土
740	中国産褐釉陶器	1.9	2.0	0.8	4.9	北	F11南	Ⅳ-1	褐色土
741	中国産褐釉陶器	2.5	2.5	0.7	6.8	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
742	中国産褐釉陶器	3.4	2.9	0.8	13.1	南	H11	Ⅰ	撹乱
743	中国産褐釉陶器	3.5	3.2	0.8	12.6	南	H11	Ⅰ	撹乱
744	中国産褐釉陶器	3.3	3.5	0.6	11.2	南	I10	Ⅲ	オリーブ褐色土
745	中国産褐釉陶器	2.5	2.9	0.5	6.1	南	H10	Ⅲ	オリーブ褐色土
746	中国産褐釉陶器	2.0	1.7	0.9	4.1	南	I 10	Ⅲ	オリーブ褐色土
747	中国産褐釉陶器	2.4	2.5	0.8	7.1	不明	不明	Ⅰ	表土
748	タイ産褐釉陶器	3.4	2.9	0.9	13.2	南	H10	Ⅲ	オリーブ褐色土
749	タイ産褐釉陶器	3.4	4.0	1.0	20.5	南	G11	Ⅰ	石積裏込
750	タイ産褐釉陶器	3.8	3.7	1.3	25.2	南	H11	Ⅰ	撹乱
751	タイ産褐釉陶器	3.4	3.3	0.9	15.6	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
752	タイ産褐釉陶器	3.3	3.6	0.8	14.7	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
753	タイ産褐釉陶器	4.2	4.9	0.9	26.2	南	H10	Ⅳ	黄褐色土
754	沖縄産施釉陶器	1.3	1.5	0.5	1.4	北	F10	Ⅰ	撹乱
755	沖縄産無釉陶器	5.8	4.4	1.3	46.8	北	F10	Ⅰ	撹乱
756	沖縄産無釉陶器	2.9	3.3	1.0	15.7	北	F10	Ⅰ	撹乱
757	沖縄産無釉陶器	3.7	4.1	1.2	31.7	北	E10	Ⅰ	撹乱
758	沖縄産無釉陶器	3.7	4.0	0.8	17.5	南	G11	Ⅰ	撹乱
759	沖縄産無釉陶器	4.3	4.2	1.0	22.3	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
760	沖縄産無釉陶器	3.2	3.1	1.0	15.0	南	H10	Ⅱ	暗褐色礫混土
761	沖縄産無釉陶器	3.1	3.0	0.9	12.8	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
762	大和系平瓦（灰色）	6.2	6.1	2.2	96.9	北	F11北	Ⅳ-3	黒褐色土（下層）
763	近世丸瓦（褐色）	5.8	5.9	1.9	83.4	北	E10	Ⅰ	撹乱
764	近世瓦（灰色）	4.1	4.1	1.5	27.5	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
765	近世瓦（赤色）	3.9	6.9	2.1	63.2	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土

第 64 表　玉類観察表

図版No.	色調	最大径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量（g）	観察事項	地区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層	調査時土層
766	黄緑色	2.5	1.1	1.4	0.01＞	完形	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
767	水色	2.1	2.1	0.8	0.01＞	完形	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
768	水色	1.9	3.2	1.5	0.64※	被熱のためか13個溶着。※重量は合計。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
769	水色	1.8	2.8	1.4	0.14※	被熱のためか4個溶着。※重量は合計。	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
770	水色	2.5	1.1	1.7	0.01＞	一部欠損	北	F11北	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
771	水色	2.4	1.2	1.4	0.01＞	完形。	北	F10	Ⅳ-3'	黒褐色土（下層2）
772	白色	6.9	4.9	3.7	0.25	完形	北	F11北	Ⅳ-4	暗褐色土（下層）
773	水色	3.2	1.8	1.6	0.01＞	一部欠損	北	F11南	Ⅳ-2	黒褐色土（上層）
774	緑色	4.0	2.8	1.4	0.09	完形	南	I 9	Ⅰ	石積裏込
775	水色	2.8	1.2	1.3	0.01＞	完形	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
776	水色	2.9	1.5	1.3	0.01＞	完形	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
777	水色	3.5	2.7	1.3	0.02	完形。一端いびつ。	南	G11	Ⅱ	瓦混褐色土
778	緑色	－	－	－	0.01＞	破片	南	H10	Ⅱ	瓦混暗褐色土
779	緑色	4.2	2.6	1.8	0.08	完形	南	H10	Ⅱ	瓦混暗褐色土
780	緑色	3.7	2.8	1.9	0.06	完形	南	H10	Ⅱ	瓦混暗褐色土
781	緑色	3.1	2.1	2.0	0.01＞	半欠	南	H10	Ⅱ	瓦混暗褐色土
782	緑色	4.0	3.8	1.8	0.08	完形。一端いびつ。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
783	水色	4.7	3.0	2.0	0.07	完形。両端いびつ。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
784	緑色	3.3	1.7	2.4	0.01	半欠	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
785	水色	3.7	3.0	1.7	0.05	完形。スプリング状に巻き上がる。	南	H10	Ⅱ	瓦混褐色土
786	水色	4.3	2.5	1.9	0.03	半欠	南	H10	Ⅳ	黄褐色土
787	青緑色	－	－	－	0.01＞	破片	南	H10	Ⅳ	黄褐色土
788	白色	2.8	2.0	0.4	0.03※	２個溶着。※重量は合計	南	I 10	Ⅳ	黒褐色土
789	水色	2.8	2.1	1.6	0.01＞	一部欠損	不明	不明	Ⅰ	表土

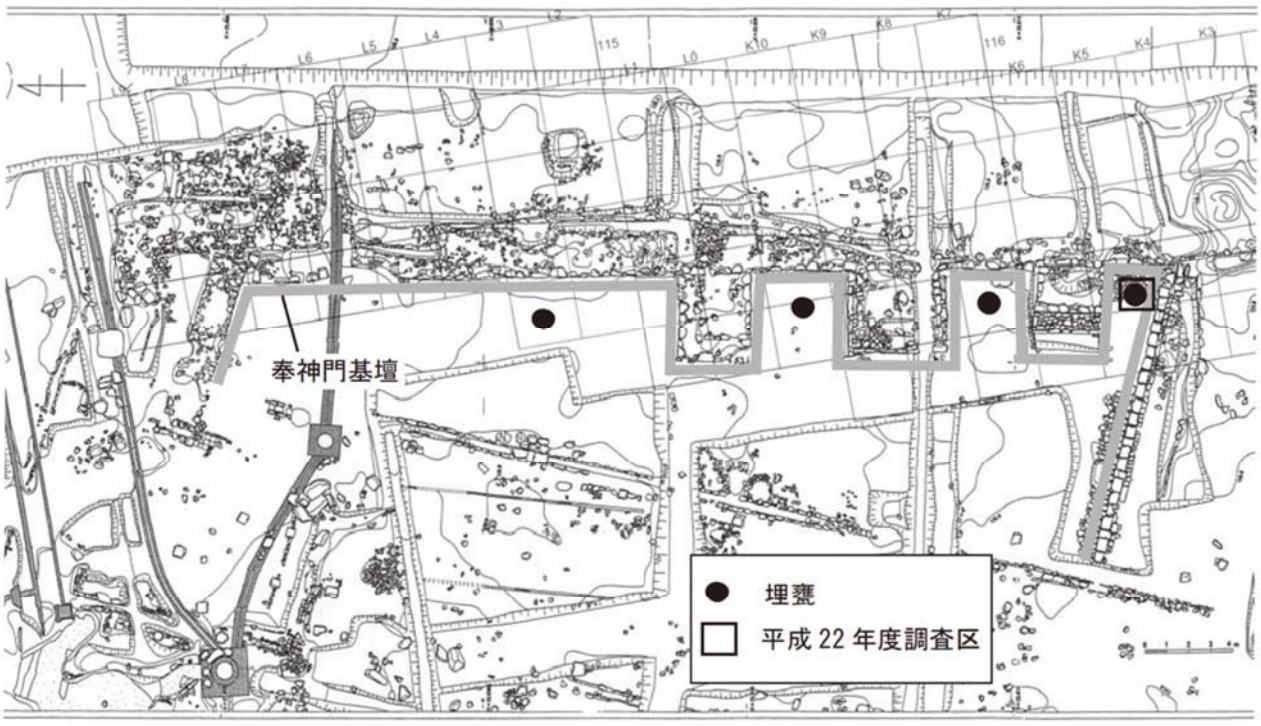
第４章　　奉神門埋甕地区　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

第２章でも触れたように、既往の奉神門周辺の発掘調査により、その基壇と西端に取り付く階段が確認されている（県教委 1998 ｂ）。この階段は４～５ｍの間隔を空け、南北方向に３基確認されており、３つある門の開口部へ繋がる位置にある。また、階段を下りた下之御庭といわれる場所では、部分的ではあるが石敷、階段の各両端に埋甕がその下半が残された状況で検出されており、全部で４基確認された（第 91 図）。この調査では、埋甕は検出時点で調査終了しており、甕内の埋土は掘削しておらず、甕の形状、遺構の構造、構築時期などについては把握されなかった。そこで、今回はこの埋甕遺構そのものを現地の復元するために、４基のうち一番南側のものについて遺構確認調査を実施することになったのである。

今回の調査は、埋甕１基のみ、最小限必要な範囲について調査することになった。そこで、前回調査の平面図を基に、復元された石敷を取り外し、その下層の造成土・保護砂を掘削し、前回で確認されていた埋甕を検出することになった（図版 69 －１～４）。これらの作業は、当然一般公開されている場所でもあり、仮囲いを設置した中で、全て人力で行うこととなった。その結果、最終的には 1.8 ｍ四方の調査区を設定することで、埋甕を検出できた。

遺構は埋甕とその東半には石敷が検出され、前回調査の平面図と対照させ、改変を受けていない状況であることを確認した（第 92 図）。その後は、第１章第３節で触れたように、甕内の埋土を半裁して掘り下げ、甕が埋まっている状況、その時期を確認するために、石畳が確認されず堆積土が露出していた西半についても、甕の底部付近まで掘削した。その後、甕内の埋土を完掘し、記録作業を行った後、破片で出土した上半部分の接合・復元を行うために、甕は最終的に取り上げることとした。



第 91 図　昭和 63 年度調査　奉神門地区平面図

第２節　層序・遺構（第 93 図、図版 67 ～ 71）

先述したが、前回既に検出された遺構を再度調査することになったので、埋甕及び石敷の上面には、埋め戻された保護砂と造成土が堆積していた。調査区の東半は石畳、中央部には埋甕、西半には堆積土が見られた。

層序　遺構検出面までは、造成土として０層とし、埋甕内を１～４層、埋甕外の堆積土を５～８層とした。甕外つまり調査区西半の堆積土については掘削途中であり、地山は検出できていない。

埋甕内の堆積土には、サンゴ礫がどの層にも多く混入しており、周辺にはサンゴ礫が多く見られたと考えられる。遺物の出土状況でみると、１層には埋甕自体の破片が多く見られ、この遺構が甕上半が破壊された状況で廃絶したことが想定される。２～４層には埋甕以外の沖縄産陶器が少数出土しており、まだ甕が破壊される以前の堆積の可能性もある。また、土色も暗灰黄～オリーブ褐色で、腐食が進む１層よりも、若干水の影響を受けた色調のように見えた。

埋甕外の堆積土は、掘削途中であるが、５～８層が相当するが、特に甕を据えるために土坑を掘ったり、礫を敷き詰めたりするような状況は、調査区内では確認できなかった。ただ、５～７層は甕の胴部に接するように堆積し、サンゴ礫が混入していることで共通性が見られる。一方、８層は埋甕底部より下に堆積しており、埋甕より古い堆積と考えられる。前者の５～７層については、甕を据える際の埋土の可能性が高い。

石敷　埋甕の東半に見られ、一辺 20 ～ 30cm で、厚さ５cm の扁平な石灰岩礫を敷き詰めている。埋甕の周辺の礫を見ると、甕を意識して同心円状に配するように見られ、埋甕と同時に敷かれたものと考えられる。

この石敷であるが、今回調査の埋甕の西半だけでなく、その他の埋甕周辺にも見られなかったようである。首里城廃絶後から明治 45（1912）年に首里尋常高等小学校が落成移転されるまでに撮影されたとされる古写真には、埋甕と共に石敷が写っているように見える（写真 39）。

埋甕　埋甕であるが、現状では石敷より胴部下半 45cm ほど埋まった状況にあり、甕自体の高さから考えると、

第 92 図　今回調査対象埋甕　昭和 63 年度調査平面図

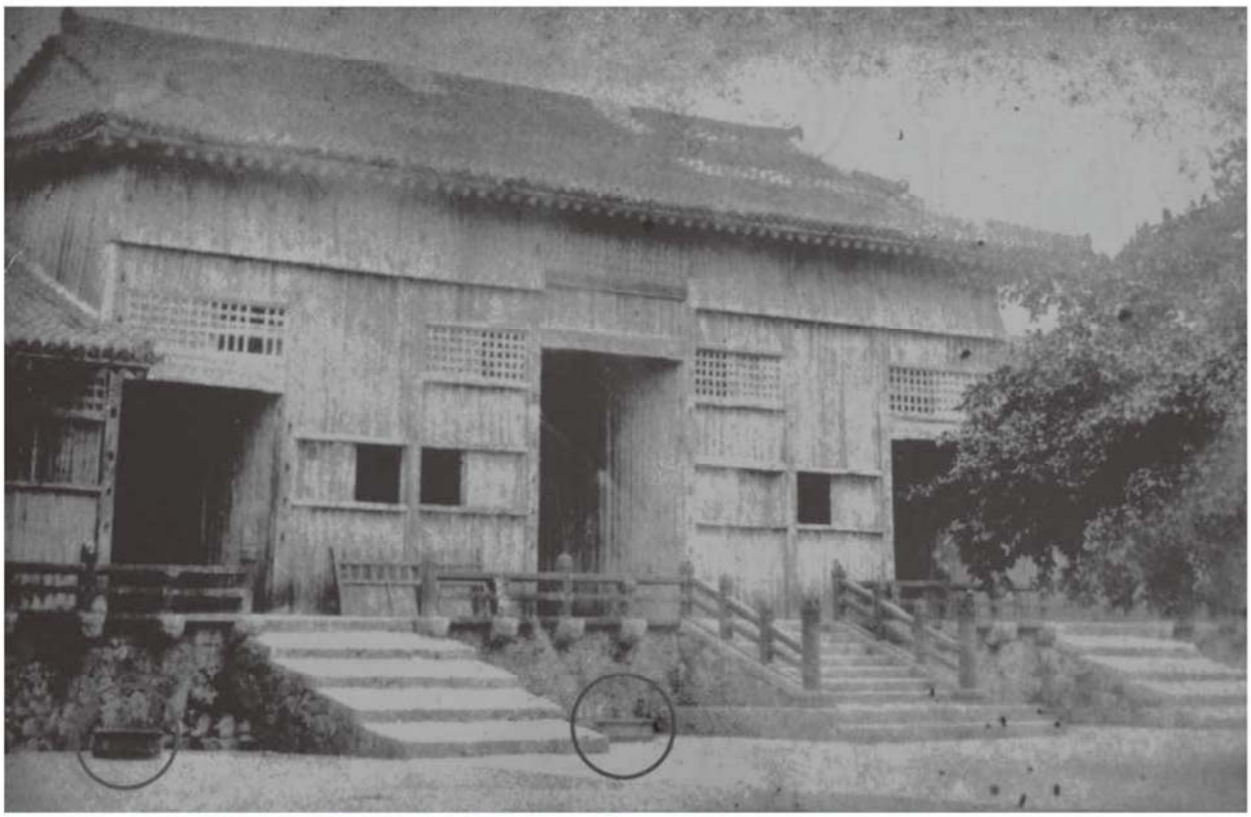


写真 39　明治期の奉神門前（国営沖縄記念公園首里城地区案内板）　※囲いは埋甕

その上半の約 40cm の部分が外に出ていた状況が考えられる。

下層遺構　この埋甕より古い遺構として、今回の調査で確認された遺構として、調査区北西にある東西方向に続くと思われる石積である。一辺 30cm ほどの切石で積まれているようである。その段数については掘削途中のため、全く不明である。

第３節　遺物（第 94 ～ 96 図、図版 72）

奉神門埋甕地区からは、中国産陶磁器（青磁・白磁・青花・褐釉陶器）、タイ産褐釉陶器、ベトナム産陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産陶器、近代磁器、銭貨、ガラス玉、石製品、近世瓦、塼が出土している。埋甕である沖縄産陶器以外は、小片が大半であった。以下、図化・写真撮影を行った遺物について、説明する。なお、出土点数については集計表にまとめた（第 65 表）。また、遺物の詳細は観察表にまとめた（第 66 表）。

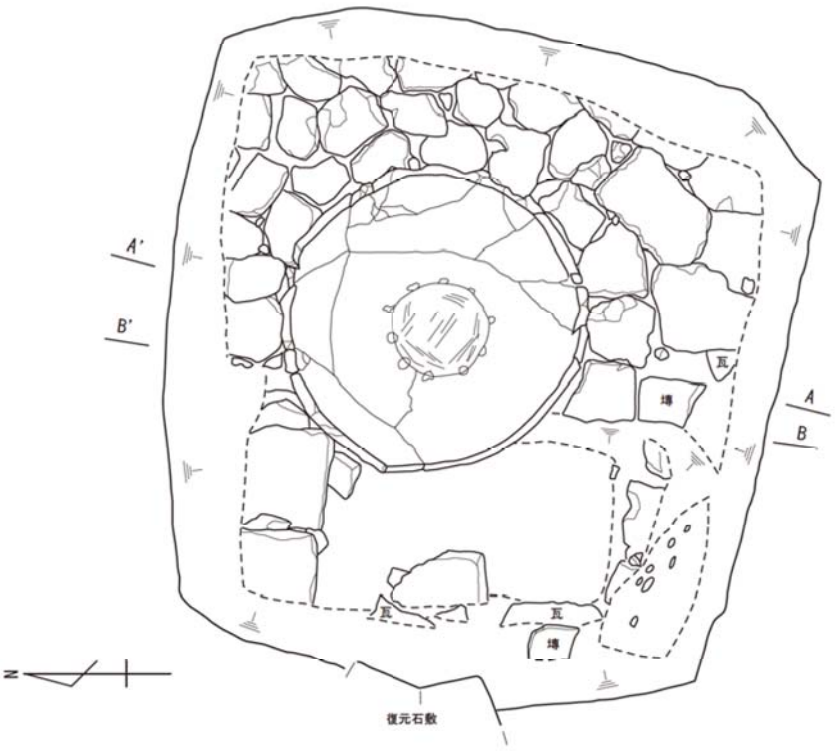
１は、埋甕である沖縄産無釉陶器の甕である。法量は、口径 97.0cm、底径 29.0cm、高さ 84.5cm、胴部最大径 96.0cm。上半が４割残存、下半が完形で、部分的に石膏を入れて約８割が残存している状態で、60.5kg、推定すると 75kg となる。色調は、外面は上伴が橙色と発色が良く、下半と内面は赤褐色とやや暗い。

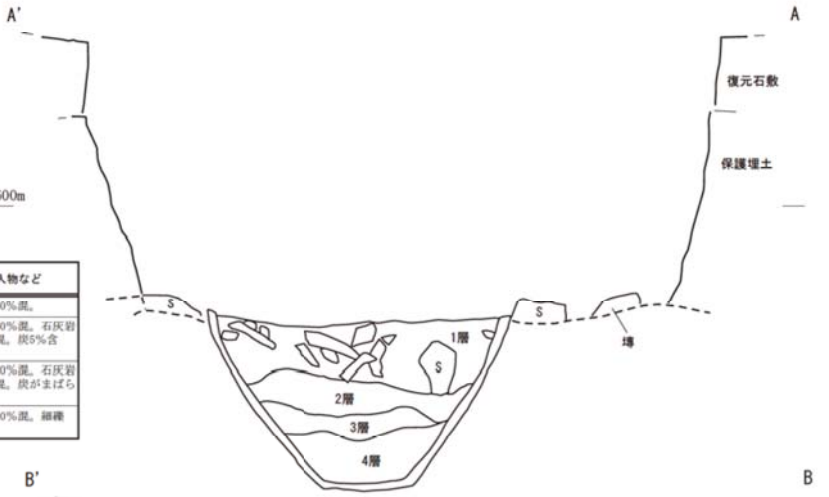
その器形は、鍔縁口縁で、胴部はその頸部がわずかにくびれ、上方に膨らみ、そのまま直炎的に底部に至る形態である。外面上半に５条部分的に６条の沈線、その下方に推定４ヶ所の直径 5.8 ㎝、厚 1.0 ㎝の円文、さらに幅 4.8 ㎝、厚 0.8 ㎝のカマボコ状突帯をもつ。胴部内面にはロクロ目が顕著に残り、見込みは一定方向のナデを施している。

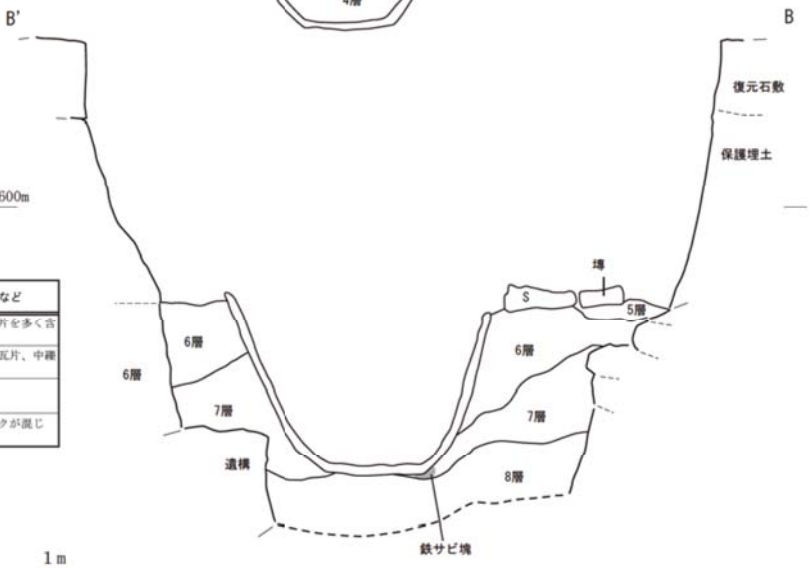
また、見込みに 10 ヶ所の焼成前の穿孔あり、焼成後に漆喰で充填している。この穿孔は、焼成時に内部まで火回りを良くするための工夫であろうか。穿孔部の漆喰は７ヶ所は残存しているが、２ヶ所はそれが外れている痕があり、１ヶ所はその痕跡もないように見える。

２は中国産青花碗、清代の福建・広東産。甕外６層出土。

３は中国産白磁小碗、清代の徳化窯系。甕外６・７層出土。







埋甕内土色表

No	土色		土質	混入物など
1	2.5YR 3/2	黒褐色	シルト	サンゴ礫60%混。
2	2.5YR 4/2	暗灰黄色	シルト	サンゴ礫50%混。石灰岩細礫20%混。炭5%含む。
3	2.5YR 4/3	オリーブ褐色	シルト	サンゴ礫20%混。石灰岩細礫30%混。炭がまばらに入る。
4	2.5YR 4/2～4/3	暗灰黄色～オリーブ褐色	シルト	サンゴ礫40%混。細礫20%混。

埋甕外土色表

No	土色		土質	混入物など
5	7.5YR 4/4	褐色	シルト	細礫やサンゴ片を多く含む。
6	2.5YR 4/2	暗灰黄色	シルト	細サンゴ混。瓦片、中礫を含む。
7	2.5YR 4/3	オリーブ褐色	シルト	細サンゴ混。
8	10YR 4/4～4/3	鈍い黄褐色～褐色	シルト～細砂	シルトブロックが混じる。

第 93 図　奉神門埋甕地区平面・断面図

第 65 表　奉神門埋甕地区出土遺物集計表

合計 / 点数			層序								総計
			甕内					甕外			
種類	器形・分類	部位	1層	2層	3層	4層	不明	6層	7層	6・7層	
中国産青磁	碗	口							1		1
		胴								1	1
	盤	口					1				1
中国産白磁	小碗	口					1			1	2
	皿	口						1			1
中国産青花	碗	口								1	1
		底						1		1	2
		胴	1				1			1	3
	小碗	口								1	1
	皿	底					1				1
		胴					1		1		2
中国産褐釉陶器	大鉢？	胴						8	3	4	15
	壷	胴					1	3		1	5
ベトナム産陶磁器	器種不明	胴								1	1
本土産陶磁器	碗	口～底								1	1
	小碗	口								1	1
沖縄産施釉陶器	碗	口					4	2		3	9
		底					1				1
		胴				1	13	9		2	25
	小碗	底								2	2
	蓋	—		1						1	2
	急須	口	1								1
		注口								1	1
		胴								1	1
沖縄産無釉陶器	甕	口～底	1								1
	擂鉢	胴					1				1
	壷	胴	3		1			3			7
	鍋	耳						2			2
		胴			1	1		1			3
陶質土器	碗	胴				1					1
	火炉	胴								1	1
	器種不明	胴				2	3	5		2	12
銭貨	乾隆通寶	—								1	1
	新寛永	—			1						1
	寛永鉄銭	—					4			1	5
	無文銭	—					1				1
ガラス玉	—	—								1	1
石製品	—	—						1		1	2
高麗系平瓦	—	広端部							2		2
近世軒丸瓦	灰色	不明						1			1
近世軒平瓦	褐色	木曳門B								1	1
		不明								1	1
近世丸瓦	灰色	玉縁部								1	1
	赤色	玉縁部							1	4	5
		端部	1							2	3
近世平瓦	灰色	広端部						1			1
		狭端部	1				1	1		2	5
	褐色	広端部						1			1
		狭端部						1			1
	赤色	広端部					1		1	1	3
		狭端部		2	1	1		2		2	8
塼	—	—	5					8		2	15
総計			13	3	4	6	35	51	9	47	168

4は本土産陶器碗、京系のものである。甕外６・７層出土。

5は近代磁器碗、印判手。甕外６・７層出土。

6は沖縄産施釉陶器急須の身。甕内１層出土。

7も沖縄産施釉陶器急須の身。甕外６・７層出土。

8は沖縄産施釉陶器急須の蓋。甕外７層出土。

9は寛永通寶である。甕内３層出土。

10は裏面のパスパ文字から清銭であることは確かで、表面は銭文が不明瞭であるがおそらく乾隆通寶（初鋳1736年）と思われる。甕外６・７層出土。

11は石製品、勾欄の一部と思われる。甕外６層出土。

12は石製品、持ち送り石である。甕外６・７層出土。

13～17は、鉄銭である。甕内は４点、甕外は１点出土している。鉄サビで覆われているが、現在知られている鉄銭は寛永通寶鉄一文銭（初鋳1739年）のみである。

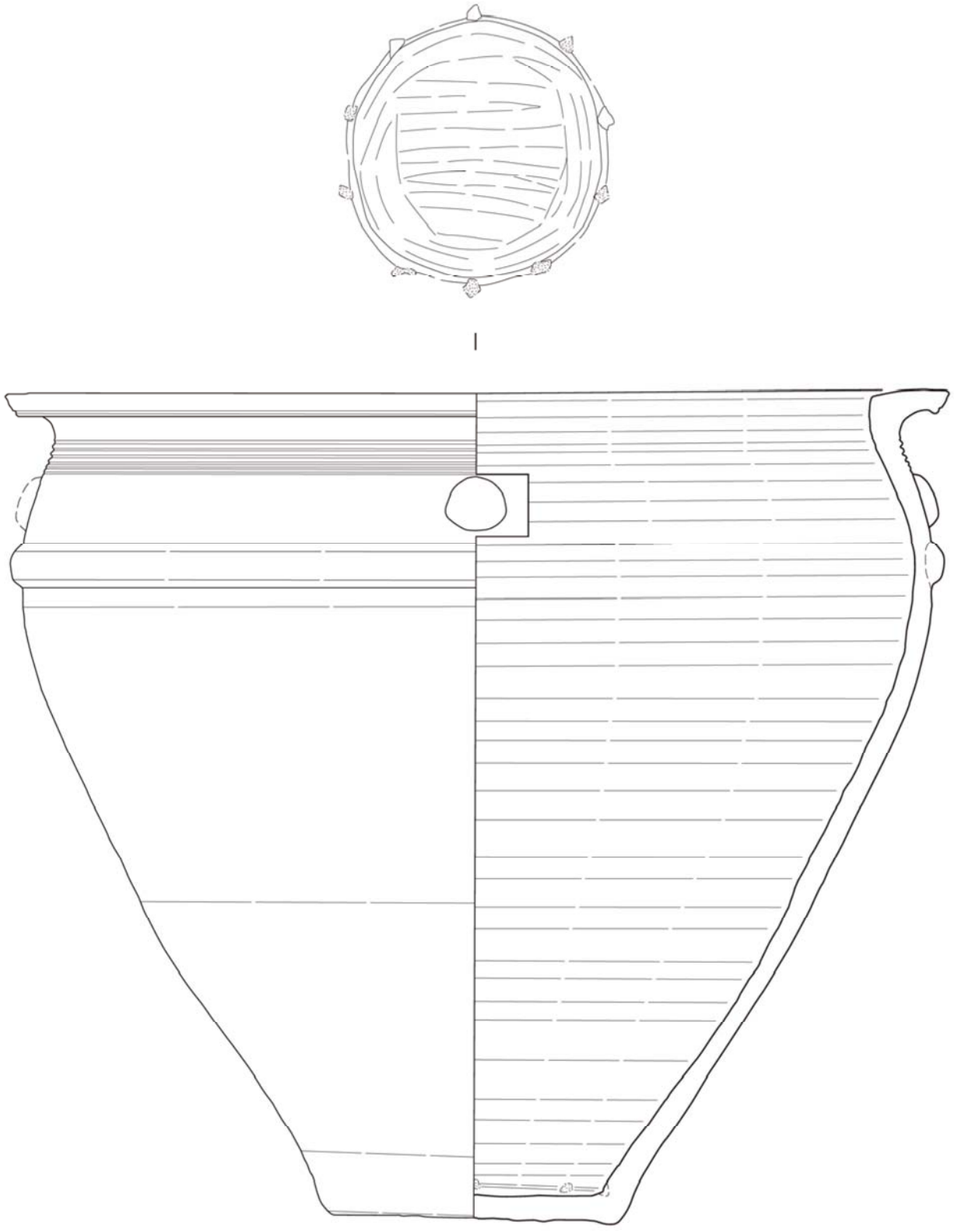
図化していないが、近世瓦の軒平瓦ｃ－３－Ⅱ木曳門Ｂ（石井分類）が甕外６・７層より出土している。

これらの遺物の多くは、甕外部の６・７層から出土している。この層の遺物の主体的な年代は、陶磁器が17～18世紀代のものが多く、銭貨は18世紀中頃である。ただ１点ではあるが、近代磁器（５）も出土しているが、調査面積が狭いこともあり、混入と考えたい。

一方、甕内の埋土１層には埋甕上部の破片が多く出土しており、埋甕が埋められた時期のものと思われる。その他は、中国産青花や沖縄産陶器や瓦等が数点出土しているのみで意識的なものとも思われない。また、甕内には鉄銭が出土しているが、残念ながら詳細な層位が不明のため、いつの時期に入れられたかは明確に出来なかった。ただ、銭貨を投げ入れるもしく風習があったかは言えないが、銭貨がこの埋甕周辺に見られるような状況であったことは考えられよう。

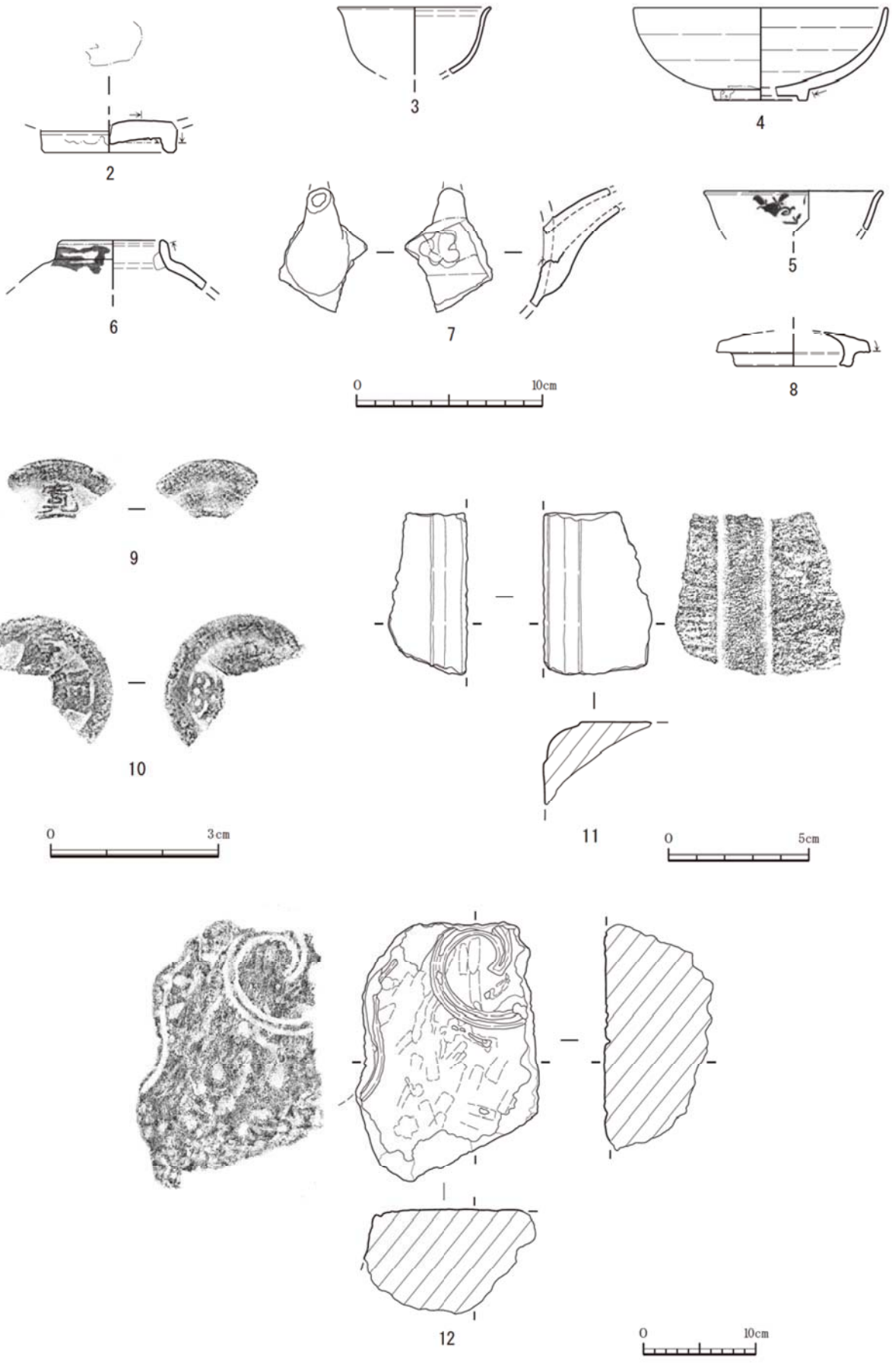
第66表　奉神門埋甕地区出土遺物観察表

遺物No.	種類	器形	分類など	口径	底径	器高（厚さ）	観察事項（数字はcm）	出土層序
1	沖縄産無釉陶器	甕	A	97.0	29.0	84.5	上半が４割残存、下半が完形。鍔縁口縁。胴部の最大径96.0。外面上半に５条部分的に６条の沈線、推定４ヶ所の直径5.8・厚1.0の円文、幅4.8・厚0.8のカマボコ状突帯。見込みに10ヶ所の焼成前の穿孔あり、焼成後に漆喰で充填。	埋甕本体＋甕内１層
2	中国産青花	碗	清（福建）	－	6.9	－	底部。見込み蛇の目釉剥ぎ。外面高台途中までと外底に施釉。	甕外６層
3	中国産白磁	小碗	清（徳化）	8.2	－	－	乳白色。ガラス質。硬質。口縁端反。	甕外６・７層
4	本土産陶器	碗	京系	13.4	5.0	4.9	外底無釉。釉調緑白色。胎土は灰白色で精良。半球型。	甕外６・７層
5	近代磁器	碗	印判	8.4	－	－	釉調は青白色。口縁端部圏線あり。	甕外６・７層
6	沖縄産施釉陶器	急須（身）	A	5.4	－	－	頸部無釉、外面は白色、内面は透明釉。胎土黄白色。呉須は青色。鉄片付着。	甕内１層
7	沖縄産施釉陶器	急須（身）	A	－	－	－	黒褐釉。胎土灰色。注口部。	甕外６・７層
8	沖縄産施釉陶器	急須（蓋）	A	8.2	6.0	－	透明な緑釉。胎土白色。	甕内２層
9	銭貨	寛「永通寶」		－	－	－	非常に薄く、0.1以下。	甕内３層
10	銭貨	乾「隆」通「寶」		2.74	－	－	裏面にあり。孔径0.54。0.8g。	甕外６・７層
11	石製品	勾欄の一部か？		5.8+	3.9+	2.9+	何らかの角部分で、コーナー部に段あり。砂岩（ニービヌフニ）製。	甕外６層
12	石製品	持ち送り石		20.2+	16.3+	8.5+	左上半のコーナー部分あり。彫り込みにより唐草風の文様。石灰岩製。	甕外６・７層
13	銭貨	鉄銭（寛永通寶か？）		－	－	－	2.2g。孔は方形。厚さ0.1。外縁部あり。	甕内
14	銭貨	鉄銭（寛永通寶か？）		2.43	－	－	2.3g。孔は方形、径0.54。厚さ0.14。外縁部あり。	甕内
15	銭貨	鉄銭（寛永通寶か？）		－	－	－	3.4g。孔は方形、径4.8。厚さ0.25。外縁部あり。	甕内
16	銭貨	鉄銭（寛永通寶か？）		－	－	－	2.4g。孔は方形。厚さ0.18。外縁部あり。	甕内
17	銭貨	鉄銭（寛永通寶か？）		－	－	－	1.8g。孔は方形。厚さ0.18。外縁部あり。	甕外６・７層



第94図　奉神門埋甕地区　埋甕（1）

第95図　奉神門埋甕地区　埋甕（2）



第96図　奉神門埋甕地区　出土遺物

第５章　自然遺物の報告・分析

第１節　自然遺物のサンプリング方法

平成 22 年度の首里城跡淑順門西地区において、堆積状況を確認するために掘削した北区Ｅ・Ｆ 10 トレンチ、Ｆ 11 北・南トレンチでは、これまで首里城跡の調査では報告が少なかった炭化種子をはじめ、多くの微細な自然遺物が含まれることが現場調査時で判明した。そのため、土自体を土嚢袋に入れて、現場事務所周辺でフルイを用いた水洗作業を行うことにより、通常の遺物取り上げでは困難な微細遺物も採取することとした。ただ、サンプルとした土量も記録しておくべきであるが、不注意のためその記録は正確には取っていなかった。そこで、作業時の記憶と残っていた土嚢袋の数から推定のものを算出した（第 67 表）。今後は注意したい。

水洗作業は、土を容量 14 １前後のバケツに入れ水につけかき混ぜながら溶かし、そこから浮いてくる炭化種子や微細な貝類･骨などを網目 0.１㎜程度の網で掬った。その後、65 ㍑の大型バケツにフルイ目が５㎜、2.５㎜、１㎜の３つのものを上から順に重ねて、先ほどのバケツに入った土を入れて、ホースで水を流しながら土を洗い落とすことで、それぞれのフルイに自然遺物が残された（写真 40）。これらを乾燥させ、出土グリッド・土層ごとにユニパック等に収納した。また、各サンプルは、今後の検証用にいくつか保管している。このようにして得られた貝類遺体、脊椎動物遺体、炭化種子について、後節で詳細に報告を戴いた。

第 67 表　淑順門西地区における土壌水洗を行ったサンプル量

層序	調査時土層名	グリッド	土嚢数	合計（㍑）
Ⅳ－２層	黒褐色土（上層）	Ｆ－11北・南	72	720
Ⅳ－３層	黒褐色土（下層）	Ｅ－10、Ｆ－11北・南	18	180
Ⅳ－３’層	黒褐色土（下層２）	Ｅ・Ｆ－10	23	230
Ⅳ－４層	暗褐色土下層	Ｆ－11北	5	50
Ⅳ－４層	暗褐色土下層２	Ｆ－11北	5	50
Ⅳ－５層	褐色粘質土	Ｆ－10	1	10

※土嚢袋１袋を10㍑と推定

写真 40　土壌水洗状況

第２節　首里城跡淑順門西地区および奉神門埋甕地区の発掘調査で得られた貝類遺体

黒住耐二（千葉県立中央博物館）

首里城では、長年にわたる発掘調査が行われており、貝類遺体も詳細に検討・報告されている（大城，1988；山本，2007；羽方・仲座，2007；黒住，2010a；金城ら，2010 等）。出土貝類遺体のまとめは、今後の課題であるが、アラスジケマン・カンギク等の内湾域・河口干潟の小形種が優占すること、ヤコウガイの多いこと（上原，1989；金城，2007 等）、サラサバテイラ・大形シャコガイ類の少ないこと等を指摘することができる。

一方で、これまでの発掘調査の多くは、遺構面を破壊しないことが発掘の条件であったため、ある程度の時間幅の存在する資料が多かった。今回、淑順門西地区の発掘調査において、13 世紀後半から 16 世紀前半の未撹乱層から貝類遺体が得られた。年代的に興味深い淑順門西地区および奉神門埋甕地区から得られた貝類遺体を検討する機会を与えて頂いたので、ここに報告したい。

貝類遺体の内容と方法

今回対象としたのは、本遺跡の調査によって現地で採集された（ピックアップ法：現場資料）貝類遺体を対象として、土壌サンプルから抽出されたものは含まれていない。貝類遺体は、グリッドの層ごとに分類されていた。報告者は、抽出されていたほぼ全ての種の同定確認・再同定を行った。資料は、完形・殻頂部・破片等に区別し、グリッド／層ごとに集計して頂いた。この集計を元に、解析を行った。

なお、それぞれの調査における層序に関しては、第４・５章を参照願いたいが、淑順門西地区において、北区では戦後以降の造成土（Ⅰ層）とグスク時代の堆積層が見られ、後者は詳細に分層され（Ⅳ－１～５層）、南区ではグスク時代のもの（Ⅳ層）として一括して取り上げられる一方、近世（Ⅲ層）、近世～近代（Ⅱ層）、戦後以降の造成土（Ⅰ層）までサンプリングされている。また本地区の考古年代の決定された各層は、必ずしも貝類遺体廃棄層のみではなく、各層の出土数に大きな相違の存在することにも注意が必要である。

結果および考察

１．淑順門西地区

淑順門地区では多くの貝類遺体が得られ、その詳細を巻貝類等は第 69 表に、二枚貝類は第 70 表に示した。表１・２をまとめ、グリッド／層ごとの最少個体数（MNI）とした（第 68 表）。表３では出土グリッドが不明なものは除いた。ただ、ヤコウガイ等では、破片は多いものの、完形はなく、殻頂等の最小個体算出部位も稀であったために、その出土数は過小評価になっていると思われる。以降の解析は、この第 68 表に基づいている。

１）種組成と生息場所類型組成

海産貝類の種組成を第 97 図に示した。この図では、陸産貝類・化石等の種（Ⅵ）および明らかに食用とならない小形種（ムカデガイ科・ホウシュノタマ・フトコロガイ・ノシガイ・アワムシロ）は除いた。また最下層である 13 世紀後半から　14 世紀のⅣ－５層からは、僅かにマガキガイ１個体のみの出土であったので（第 68 表）、第 97 図には示していない。

造成のための礫層である 14 世紀後半のⅣ－４層での出土個体数は少なかったものの、カンギクが約 20%と最も多く、クワノミカニモリ・アラスジケマンと 10%以上で続いていた。14 世紀末～ 15 世紀前半のⅣ－３／３´層（炭化物層）でも貝類は多くなかったものの、Ⅳ－４層と同様な種が優占しており、イワカニモリやリュウキュウウミニナも目立っていた。約 4700 個体を確認した 15 世紀中頃のⅣ－２層ではカンギク・クワノミカニモリの割合が増加し、さらにイワカニモリも 10%以上となり、他の層位と異なっていた。北区のグスク時代では、Ⅳ－１層でマガキガイの割合が増加していたこと等があるが、グスク時代を通しては、14 世紀後半から 16 世紀前半まで種組成に大きくは変化していないと考えた。北区のグスク時代全体としては、出土量が極めて多かったⅣ－２層の割合と同様になっている。下部のⅣ－４層やⅣ－３／３´層の少数の貝類遺体は、廃

棄の極めて多いⅣ－２層からの落ち込みや混入の可能性も想定されるが、Ⅳ－２層と種組成が異なっていたこと、いずれも食料残滓廃棄層ではないことおよび各層で出土陶磁器の組成が相違することから、出土した貝類遺体の混入は少なく各層に帰属するものと考えた。

一方、南区のグスク時代では、北区と組成が異なり、アラスジケマンが全体の 70%を占める程、優占しており、他のものは少なかった。南区では、近世および近世・近代の貝類遺体も確認されており、優占種はアラスジケマン・カンギク等であるが、マガキガイの割合が近世で高くなっていた。これらの層位では造成等でグスク期の遺体を含んでいることも考えられるが、撹乱層のⅠ層でも優占種に大きな変化は認められず、グスク期から近代まで、およそ類似した貝類組成を示していると考えられる。

貝類の生息場所類型組成には陸産貝類を含めて表し（第 98 図）、Ⅳ－４層で陸産貝類の割合が高かったが、北地区のグスク時代の各層は近似した組成となっていた。イソハマグリやクワノミカニモリの含まれるサンゴ礁域の岸側潮間帯（Ⅰ－０/ １）が 30%程度、サンゴ礁のイノー内（Ⅰ－２:マガキガイの生息場所)・干瀬（Ⅰ－３：チョウセンサザエの生息場所)・礁斜面（Ⅰ－４：ヤコウガイの生息場所）はⅣ－１層で 20%を超えていたが、他では 10%程度と少なく、カンギクの得られる内湾域（Ⅱ）が最も多く 30-50%、アラスジケマンの生息する河口干潟域（Ⅲ）は 20%前後であった。

南区ではアラスジケマンが優占することにより、河口干潟のものの割合が最も多く、内湾域は 20%程度と減少し、サンゴ礁域のものが 1/3 程度となっていた。

２）首里城での淑順門西地区出土貝類遺体の特徴

沖縄本島各地のグスクの発掘調査から、出土貝類は貝塚時代後期のサンゴ礁域の中・大形貝類から、グスク時代には内湾域のカンギクや河口干潟－マングローブ域のアラスジケマンの中・小形種が優占する組成に劇的に変化することが知られている（例えば安里， 1974；比嘉， 1983；黒住， 2011 等)。今回の淑順門西地区の種組成（第 97 図）もカンギク･アラスジケマンが優占する組成であり、他のグスクと大きくは相違しなかった。北区では、グスク時代になると増加することが知られているクワノミカニモリ・イワカニモリ・リュウキュウウミニナ等の塔型巻貝（黒住・金城， 1988；古島， 2001）の割合が比較的高いのに対し、南区ではアラスジケマンが大半を占めることが認められた。両区の相違は、廃棄の場としての意味が異なっていた可能性が高いように思われる。南区にアラスジケマンが多かったということは、今帰仁城跡における城外東斜面（16 世紀～17 世紀初頭）にアラスジケマンが極めて多く廃棄されていたという状況（黒住， 1991）と類似した現象なのかもしれない。

また、本遺跡は首里城という王府でありながら、前述のように内湾性の中・小形種が優占し、他のグスクと基本的に相違は認められない。この結果は、これまでの首里城の各地区の結果でも同様である（大城， 1988；山本，2007；羽方・仲座，2007；黒住，2010a；金城ら，2010 等)。つまり、日常的に食用として利用される貝類は、カンギク・アラスジケマン・カニモリ類であり、マガキガイ・サラサバテイラ・シャコガイ類等の中・大形種はかなり少ない（第 68 表)。ただ、ヤコウガイは、破片として、ある程度出土している（第 69 表)。ヤコウガイを除く中･大形種の少ないことは､以前にも議論したが（黒住，2010a)､冊封使に対するものを含め“宴会の残滓”としての貝類遺体が本地区でも確認できておらず、中・大形貝類と中・小形種では、日常的にも殻の廃棄／城外への持ち出しによる相違も存在していた可能性も高い。首里城内の各地区の発掘調査結果を比較することにより、この問題も明らかになっていくものと思われ、また同時期の首里城以外の地域での貝類遺体との比較も今後の課題である。

今回、北区で 14 世紀後半から 16 世紀前半にかけての連続的な堆積層からの貝類遺体を検討できた訳であるが、前述のように、下部のⅣ－４層で陸産貝類の割合が高い他は、大きな変化が認められなかったと考えている（第 97・98 図)。グスクにおける貝類遺体の組成変化として、今帰仁城跡では 13 世紀末ではサンゴ礁のマガキガイが多い組成から 14 世紀と 15 世紀にアラスジケマンが増加するというものに変わっていくことを報告した（黒住， 1991)。一方、勝連城跡では、貝塚後期後半にアラスジケマンとカンギクがそれぞれ約 25%であったものが 13 世紀と 14 世紀にアラスジケマンが 40%を超え、カンギクも 25-35%に増加し、15 世紀には前種が 65%、後種が 20%と、アラスジケマンの連続した増加の顕著な組成変化が認められている（赤嶺・黒住，2011)。勝連城跡においては、今帰仁城跡のようなサンゴ礁域の種の減少は僅かに認められるものの、遺跡

第 68 表　淑順門西地区出土貝類遺体の最小個体数

地区		北区				南区																		
グリッド		E-10	E-11	F-10	F-11	G-9	G-10	G-11	H-10	H-11	I-9	G-9	G-10	G-11	H-9	H-10	H-11	I-9	I-10	H-10	H-11	I-10	H-9
和名/生息場所/層名		Ⅰ				Ⅰ						Ⅱ								Ⅲ			Ⅳ
イシダタミアマオブネ	Ⅰ-0-a																						
ゴマフニナ	Ⅰ-0-a																						
ヒザラガイの一種	Ⅰ-1-a																						
クワノミカニモリ	Ⅰ-1-a			1						1	4		2	1	2	7		4		2		2	23
ハナビラダカラ	Ⅰ-1-a										4									1			
キイロダカラ	Ⅰ-1-a																						
ノシガイ	Ⅰ-1-a																						
マダライモ	Ⅰ-1-a																						
サヤガタイモ	Ⅰ-1-a																						
ハナワイモ	Ⅰ-1-a										1												
エガイ	Ⅰ-1-a								1	1													
リュウキュウヒバリ	Ⅰ-1-a														1	2							4
ミドリアオリ	Ⅰ-1-a															1						1	8
オハグロガキ	Ⅰ-1-a																						
カヤノミカニモリ	Ⅰ-1-b																						
ウネレイシダマシ	Ⅰ-1-b																						
イモフデガイ	Ⅰ-1-b																						
イソハマグリ	Ⅰ-2-c				2											2	1						1
リュウキュウナミノコ	Ⅰ-1-c																						
ニシキウズ	Ⅰ-2-a															1					1	2	
コシタカササゲエ	Ⅰ-2-a										2												
ヘビカイ類	Ⅰ-2-a																						
ガンセキボラ	Ⅰ-2-a															1							
コオニコブシ	Ⅰ-2-a																						
イトマキボラ	Ⅰ-2-a				1												1			1			
ヤセイモ	Ⅰ-2-a																						
キヌカツギイモ	Ⅰ-2-a																						
メンガイ類	Ⅰ-2-a										1												
アラヌノメガイ	Ⅰ-2-b																						
オニノツノガイ	Ⅰ-2-c												1			1			1				
マガキガイ	Ⅰ-2-c			2	2		2	3	2	3	1	1		5		8		5	1		3	10	2
クモガイ	Ⅰ-2-c																						
アワムシロ	Ⅰ-2-c																						
ヒレジャコ	Ⅰ-2-c												1			1	1						
サメザラ	Ⅰ-2-c																						
ツタノハ	Ⅰ-3-a																						1
チョウセンササエ	Ⅰ-3-a			1	1		1	3	1	1	1			2	1	6	2	2	2	1	8		2
アツキクスズメ	Ⅰ-3-a																						
ムカデガイ科	Ⅰ-3-a																						
ハナマルユキ	Ⅰ-3-a												1			2						1	
ソノレイシ	Ⅰ-3-a																						
シラガザル	Ⅰ-3-a																						
ギンタカハマ	Ⅰ-4-a																						
サラサバテイ	Ⅰ-4-a	1			1					1				2		1						2	
ヤコウガイ	Ⅰ-4-a	1	1	1	1	1		1		4	1		1	8		1	2	1	1	1	3	2	1
ホラガイ	Ⅰ-4-a																				1		
コイワニシ	Ⅱ-1-a										1												
オハグロガキモドキ	Ⅱ-1-a														1								
オキナワイシダタミ	Ⅱ-1-b															2							1
カンギク	Ⅱ-1-b			1			1		1	3	6	1	8		7	4	1	2		7		1	30
マルアマオブネ	Ⅱ-1-b															1							1
アマオブネガイ	Ⅱ-1-b																						
イワ(ウミニナ)カニモリ	Ⅱ-1-b										2		2			3	1	1		4		2	15
リュウキュウウミニナ	Ⅱ-1-c						1									2							
ホウシュノタマ	Ⅱ-1-c																						
シマベッコウバイ	Ⅱ-1-c															1							
マスオガイ	Ⅱ-1-c																						
リュウキュウマスオ	Ⅱ-1-c				1																		
ホソスジイナミガイ	Ⅱ-1-c			1								1				4						2	7
イオウハマグリ	Ⅱ-1-c															2							
ヒメアサリ	Ⅱ-1-c								1		1					2	1			1		2	3
スダレハマグリ	Ⅱ-1-c																						
シュモクアオリ	Ⅱ-2-a															1							
ノコギリガキ	Ⅱ-2-a																						
クロミノエガイ	Ⅱ-2-b																						
リュウキュウサルボオ	Ⅱ-2-c																					1	
ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c						1				1				2	10	1	4		1			18
リュウキュウザル	Ⅱ-2-c																						
カワラガイ	Ⅱ-2-c																	1					
リュウキュウシラトリ	Ⅰ-2-a																						
トュドュマリハマグリ	Ⅱ-2-c				1										1								1
ハマグリ類似種	Ⅱ-2-c			1	1		1			1		1	1		3	5			1		1	1	7
ヌノメガイ	Ⅱ-2-c				1						2								1			1	4
ユウカゲハマグリ	Ⅱ-2-c																						
オイノカガミ	Ⅱ-2-c																						
フトコロガイ	Ⅱ-2-d																						
シレナシジミ	Ⅲ-0-c										1					1							3
フトヘナタリ(イトカケ-型)	Ⅲ-0-d																						
マングローブアマガイ	Ⅲ-1-b																						
ヘナタリ	Ⅲ-1-c																						
カワアイ	Ⅲ-1-c																						
シマ(ミナミマ)ガキ？	Ⅲ-1-c																						1
アラスジケマンガイ	Ⅲ-1-c			2	2	4	5		9	18	38	9			45	142	10	57	3	13	3	17	383
ダテオキシジミ	Ⅲ-1-c										3					3		1				1	1
カワニナ	Ⅳ-5･6																						
オキナワヤマタニシ	Ⅴ-8		2				1			2	1										1	1	
ツヤギセルガイ	Ⅴ-8															14			2	2	1	4	1
シュリマイマイ	Ⅴ-8																						
バンダナマイマイ	Ⅴ-8															2							
ジャノメダカラ	Ⅵ-11																						
カシパン類	Ⅵ-12																						
イタヤガイ類	Ⅵ-12																						
ヒナキンチャク類	Ⅵ-12						1																
ヒナノヒオウギ類	Ⅵ-12									1													
ヤマトシジミ？	Ⅵ																						
タマキガイ科の一種	Ⅵ																						
フタオビザル	Ⅵ																						
キンギョ	Ⅵ																						
タカラガイ科の一種																							
合計		2	3	10	14	5	14	7	15	36	71	13	17	18	63	233	21	78	12	34	22	53	518

地区		南区			北区																				合計
グリッド		H-10	I-9	I-10	F-11	F-11南	F-11北	F-11	F-11南	F-11北	F-10	F-11	F-11南	F-11北	E-10	F-10	F-11	F-11南	F-11北	F-11北	F-11	E-10	
和名/生息場所/層名		Ⅳ			Ⅳ-1			Ⅳ-2			Ⅳ-3				Ⅳ-3'					Ⅳ-4		Ⅳ-5	
イシダタミアマオブネ	Ⅰ-0-a								1															1
ゴマフニナ	Ⅰ-0-a							9	1	9				1					2					22
ヒザラガイの一種	Ⅰ-1-a								2															2
クワノミカニモリ	Ⅰ-1-a	2	3			12		36	1149	70	1		1	13		1		1	3	6				1347
ハナビラダカラ	Ⅰ-1-a								3	1				1	1	1		1		1				14
キイロダカラ	Ⅰ-1-a															1								1
ノシガイ	Ⅰ-1-a								1															1
マダライモ	Ⅰ-1-a								2	1														3
サヤガタイモ	Ⅰ-1-a													1										1
ハナワイモ	Ⅰ-1-a																							1
エガイ	Ⅰ-1-a																							2
リュウキュウヒバリ	Ⅰ-1-a							1	2															10
ミドリアオリ	Ⅰ-1-a			3					7	1														21
オハグロガキ	Ⅰ-1-a								1															1
カヤノミカニモリ	Ⅰ-1-b								57	6														63
ウネレイシダマシ	Ⅰ-1-b								4															4
イモフデガイ	Ⅰ-1-b			1																				1
イソハマグリ	Ⅰ-1-c				1	3		4	92	14					1			1						122
リュウキュウナミノコ	Ⅰ-1-c								4	1														5
ニシキウズ	Ⅰ-2-a	1		2	1	2		1	18	2			2	1						1				35
コシタカサザエ	Ⅰ-2-a																							2
ヘビカイ類	Ⅰ-2-a			1																				1
ガンセキボラ	Ⅰ-2-a																							1
コオニコブシ	Ⅰ-2-a								1	1														2
イトマキボラ	Ⅰ-2-a					1																		4
ヤセイモ	Ⅰ-2-a								2															2
キヌカツギイモ	Ⅰ-2-a								1															1
メンガイ類	Ⅰ-2-a																							1
アラヌノメガイ	Ⅰ-2-b								1	1														2
オニノツノガイ	Ⅰ-2-c			1	1				7				1							2	1			16
マガキガイ	Ⅰ-2-c			3	3	17			117	10		1	1							1		1		204
クモガイ	Ⅰ-2-c								1															1
アワムシロ	Ⅰ-2-c								1															1
ヒレジャコ	Ⅰ-2-c				1																			4
サメザラ	Ⅰ-2-c							1																1
ツタノハ	Ⅰ-3-a																							1
チョウセンサザエ	Ⅰ-3-a		1	1	6	1	1		6	1			1			1								54
アツキクスズメ	Ⅰ-3-a							1	21	3														25
ムカデガイ類	Ⅰ-3-a								15															15
ハナマルユキ	Ⅰ-3-a				1	1			1															7
ツノレイシ	Ⅰ-3-a								1											1				2
シラガザル	Ⅰ-3-a								1															1
ギンタカハマ	Ⅰ-4-a				1	2			1															4
サラサバテイ	Ⅰ-4-a			1	13	1			10															33
ヤコウガイ	Ⅰ-4-a	1	1	5	1	1	1	1	1	1				1		1								47
ホラガイ	Ⅰ-4-a																							1
コイワニシ	Ⅱ-1-a								1															2
オハグロガキモドキ	Ⅱ-1-a																							1
オキナワイシダタミ	Ⅱ-1-b								4	1														8
カンギク	Ⅱ-1-b	3	10		7	11	1	24	947	82	1	1		12	1			1	3	7				1184
マルアマオブネ	Ⅱ-1-b							2	5	4														13
アマオブネガイ	Ⅱ-1-b					1				1														2
イワ(クミニナ)カニモリ	Ⅱ-1-b		1		3	11		15	583	99				3			1							746
リュウキュウウミニナ	Ⅱ-1-c				1	1		13	244	24			1	5						1				293
ホウシュノタマ	Ⅱ-1-c								3															3
シマベッコウバイ	Ⅱ-1-c	1				2		2	47	5														58
マスオガイ	Ⅱ-1-c								1										1					2
リュウキュウマスオ	Ⅱ-1-c								4	2										1				8
ホソスジイナミガイ	Ⅱ-1-c		1	1	1	2			24	2				1										47
イオウハマグリ	Ⅱ-1-c								4	1														7
ヒメアサリ	Ⅱ-1-c			1					1															13
スダレハマグリ	Ⅱ-1-c	1				1			2															4
シュモクアオリ	Ⅱ-2-a																							1
ノコギリガキ	Ⅱ-2-a			1																				1
クロミノエガイ	Ⅱ-2-b								2															2
リュウキュウサルボオ	Ⅱ-2-c					1																		2
ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	1	1	2		1			24	4			1	1					1					74
リュウキュウザル	Ⅱ-2-c																			1				1
カワラガイ	Ⅱ-2-c																							1
リュウキュウシラトリ	Ⅱ-2-c														1					1				2
トュドュマリハマグリ	Ⅱ-2-c				2	1	1		3															10
ハマグリ類似種	Ⅱ-2-c	2	1	1	8	2	1		16	4			1	1					1	1				63
ヌノメガイ	Ⅱ-2-c			1	2	1			8	1				1					1	1				25
ユウカゲハマグリ	Ⅱ-2-c								1															1
オイノカガミ	Ⅱ-2-c								1															1
フトコロガイ	Ⅱ-2-d							1		1														2
シレナシジミ	Ⅲ-0-c		1																					6
フトヘナタリ(イトカケ-型)	Ⅲ-0-d								1															1
マングローブアマガイ	Ⅲ-1-b				1	1			26															28
ヘナタリ	Ⅲ-1-c									1														1
カワアイ	Ⅲ-1-c				1																			1
シマ(ミナミマ)ガキ?	Ⅲ-1-c																							1
アラスジケマンガイ	Ⅲ-1-c	11	58	38	15	18	3	12	689	91	1		3	10	3	1	2	2	5	5				1727
ダテオキシジミ	Ⅲ-1-c		1						2															12
カワニナ	Ⅳ-5・6							1	8															9
オキナワヤマタニシ	Ⅴ-8							3	7	3										11				32
ツヤギセルガイ	Ⅴ-8			1			1	1	3	4				3						1	2			40
シュリマイマイ	Ⅴ-8												1	1										2
パンダナマイマイ	Ⅴ-8																							2
ジャノメダカラ	Ⅵ-11				1																			1
カシパン類	Ⅵ-12							1																1
イタヤガイ類	Ⅵ-12							1																1
ヒナキンチャク類	Ⅵ-12			1																				2
ヒナノヒオウギ類	Ⅵ-12																							1
ヤマトシジミ?	Ⅵ								1	1														2
タマキガイ科の一種	Ⅵ				1																			1
フタオビザル	Ⅵ								1															1
キンギョ	Ⅵ																							0
タカラガイ科の一種					1																			1
合計		23	79	65	73	95	9	130	4195	453	3	2	13	56	7	6	3	6	17	42	3	1		6540

の立地場所に起因するが、全体に占めるサンゴ礁域のものの割合が極めて小さく、勝連グスク周辺における採集場所の変化とは捉えられない。

今回の北区における14世紀後半から16世紀前半の出土貝類組成に大きな変化が認められなかったということは、今帰仁と勝連の２つのグスクとの比較からも、首里城では食用としての貝類の種選択が決定し、その供給体制もほぼ確立していた、と結論付けられよう。14世紀後半から15世紀前半の貝類遺体の組成は、建造物の様式には言及できないが、権力者の居住域としての首里城が確実に成立したと考えられる15世紀中頃（Ⅳ－２層）と同様であったと理解できよう。ある種単純な結果ではあるが、支配者層への食物供給を行う漁撈集団や首里城への搬入過程の実態が、他の考古学資料や文献史学からほとんど明らかにできていない現状において、このことは、研究の方向を含め意義あるものだと考えている。

また、廃棄の場としての立地・性格によるものであろうが、本地区では、“おはじき様の遊具”を想定している小形のタマガイ類やタカラガイ類（黒住，1993：しかし立証はできていない）、あるいはヤタテガイ類の出土はピックアップ資料と言うこともあり、極めて少なかった。明瞭ではないが、これらの種は御内原地区のシーリ遺構内のピックアップ資料中にも少数ではあるが、今回よりははるかに高い割合で得られている（黒住，2010b、第109表）。また、これまでと同様に、食用とはならない琉球列島以外から持ち込まれた種や美麗種等は、本地区でも確認できなかった。

２．奉神門埋甕地区

この地区では、門の両側に設置されていた大形の甕の内部と周辺から貝類遺体が得られている。その出土数は少ないものの（39種）、首里城内の空間利用／景観を考える場合には、興味深い資料と言えよう。得られた貝類遺体の出土状況を甕内外およびそれぞれの層位でまとめた（第71表）。

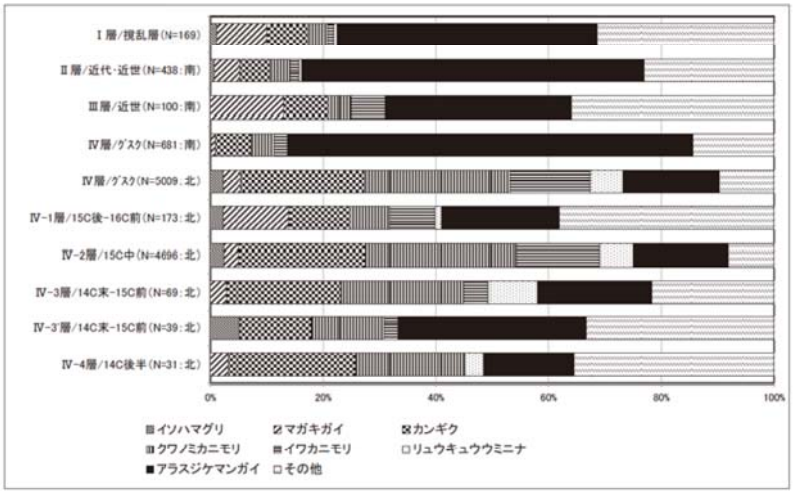
その結果、甕周辺からは食用貝類のみが少数認められ（第71表：最上部の囲み）、陸産貝類も得られていない。一方で、甕の内部からは下部を中心に比較的多くの陸産貝類や小形の種が抽出されている。そして、甕内の小形種では、イトカケツクシやネジヒダカワニナのような食用とは考えられない種も存在していた。

これらのことから、下記の状況が考えられる。

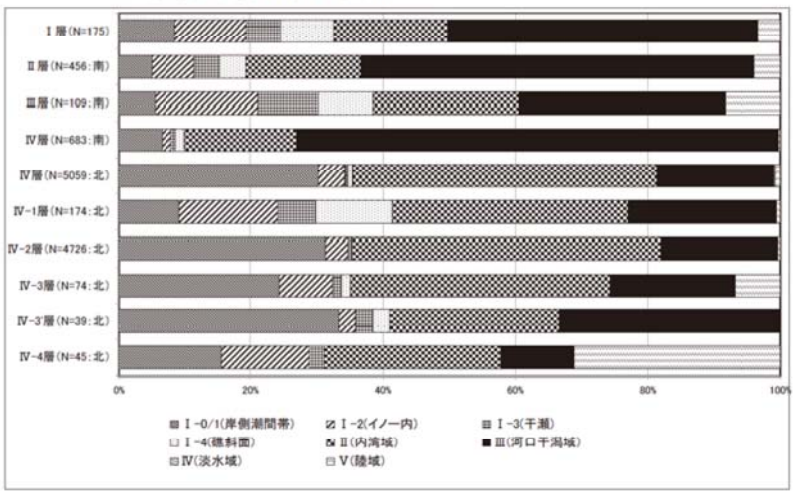
（ア）甕周辺の食用貝類遺体の密度は低く、当然廃棄の場所ではないものの、小規模な造成等により城内の食用貝類遺体を含む土壌が動いていることが分かる。

（イ）また陸産貝類が見られなかったことから、６・７層は開けた空間であり、清掃等が行われていた可能性も想定される。

第97図　淑順門西地区における食用貝類遺体の種組成変化



第98図　淑順門西地区における食用貝類遺体の生息場所類型組成変化



第 69 表　淑順門西地区出土巻貝類等の出土詳細

番号	科名	種名	学名	生息場所	出土詳細（地区・グリッド・層位別 N）
1	クサズリガイ科	ヒザラガイの一種	Acanthopleura sp. cf. gemmata	Ⅰ-1-a	[illegible]
2	ツタノハ科	ツタノハ	Scutellastra flexuosa	Ⅰ-0-a	[illegible]
3	ニシキウズ科	ニシキウズ	Trochus maculatus	Ⅰ-0-a	[illegible]
4	ニシキウズ科	ギンタカハマ	Tectus pyramis	Ⅰ-4-a	[illegible]
5	ニシキウズ科	サラサバテイ	Tectus niloticus	Ⅰ-4-a	[illegible]
6	ニシキウズ科	オキナワイシダタミ	Monodonta labio	Ⅱ-1-b	[illegible]
7	リュウテン科	ヤコウガイ	Turbo (Lunatica) marmoratus	Ⅰ-4-a	[illegible]
8	リュウテン科	ヤコウガイのフタ	T. (L.) marmoratus (operculum)	Ⅰ-4-a	[illegible]
9	リュウテン科	チョウセンサザエ	Turbo (Marmarostoma) argyrostomus	Ⅰ-0-a	[illegible]
10	リュウテン科	チョウセンサザエのフタ	T. (M.) argyrostomus (operculum)	Ⅰ-0-a	[illegible]
11	リュウテン科	コシダカサザエ	Turbo (Marmarostoma) stenogyrus	Ⅰ-0-a	[illegible]
12	リュウテン科	カンギク	Lunella moniliformis	Ⅱ-1-b	[illegible]
13	リュウテン科	カンギクのフタ	Lunella moniliformis (operculum)	Ⅱ-1-b	[illegible]
14	アマオブネ科	イシダタミアマオブネ	Nerita (Ritena) helicinoides	Ⅰ-0-a	[illegible]
15	アマオブネ科	マングローブアマガイ	Nerita (Ritena) undulata	Ⅲ-1-b	[illegible]
16	アマオブネ科	マルアマオブネ	Nerita (Theliostyla) squamulata	Ⅱ-1-b	[illegible]
17	アマオブネ科	アマオブネガイ	Nerita (Theliostyla) albicilla	Ⅱ-1-b	[illegible]
18	オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Cerithium nodulosum	Ⅰ-0-a	[illegible]
19	オニノツノガイ科	カヤノミカニモリ	Clypeomorus bifasciata	Ⅰ-1-b	[illegible]
20	オニノツノガイ科	イワカニカニモリ	Clypeomorus batillariaeformis	Ⅱ-1-b	[illegible]
21	オニノツノガイ科	クワノミカニモリ	Clypeomorus chemnitziana	Ⅰ-1-a	[illegible]
22	ゴマフニナ科	ゴマフニナ	Planaxis sulcatus	Ⅰ-0-a	[illegible]
23	ウミニナ科	リュウキュウウミニナ	Batillaria flectosiphonata	Ⅱ-1-c	[illegible]
24	フトヘナタリ科	フトヘナタリ([illegible]型)	Cerithidea (Cerithidea) rhizophorarum	Ⅲ-0-d	[illegible]
25	フトヘナタリ科	ヘナタリ	Cerithidea (Cerithideopsilla) cingulata	Ⅲ-1-c	[illegible]
26	フトヘナタリ科	カワアイ	Cerithidea (Cerithideopsilla) djadjariensis	Ⅲ-1-c	[illegible]
27	スイショウガイ科	マガキガイ	Strombus (Conomurex) luhuanus	Ⅰ-0-c	[illegible]
28	スイショウガイ科	クモガイ	Lambis lambis	Ⅰ-0-c	[illegible]
29	スズメガイ科	アツキクスズメ	Hipponix acuta	Ⅰ-0-a	[illegible]
30	ムカデガイ科	ヘビガイ類	Serpulorbis? sp.	Ⅰ-0-a	[illegible]
31	ムカデガイ科	ムカデガイ科	Vermetidae gen. et sp.	Ⅰ-0-a	[illegible]
32	タカラガイ科	タカラガイ科の一種	Cypraea sp.		[illegible]
33	タカラガイ科	ジャノメダカラ	Cypraea (Lyncina) argus	Ⅰ-4-a/[illegible]	[illegible]
34	タカラガイ科	ハナビラダカラ	Cypraea (Erosaria) annulus	Ⅰ-1-a	[illegible]
35	タカラガイ科	キイロダカラ	Cypraea (Erosaria) moneta	Ⅰ-1-a	[illegible]
36	タカラガイ科	ハナマルユキ	Cypraea (Erosaria) caputserpentis	Ⅰ-0-a	[illegible]
37	タマガイ科	ホウシュノタマ	Natica gualteriana	Ⅱ-1-c	[illegible]
38	フジツガイ科	ホラガイ	Charonia tritonis	Ⅰ-4-a	[illegible]
39	アッキガイ科	ガンセキボラ	Chicoreus (Triplex) brunneus	Ⅰ-4-a	[illegible]
40	アッキガイ科	ウネレイシダマシ	Drupa margariticola	Ⅰ-1-b	[illegible]
41	アッキガイ科	ツノレイシ	Menathais tuberosa	Ⅰ-0-a	[illegible]
42	アッキガイ科	コイワニシ	Thais (Semiricinula) squamosa	Ⅱ-1-a	[illegible]
43	オニコブシ科	コオニコブシ	Vasum turbinellum	Ⅰ-0-a	[illegible]
44	フトコロガイ科	フトコロガイ	Euplica scripta	Ⅱ-0-d	[illegible]
45	オリイレヨフバイ科	アラムシロ	Niotha albescens	Ⅰ-0-c	[illegible]
46	エゾバイ科	ノシガイ	Engina mendicaria	Ⅰ-1-a	[illegible]
47	エゾバイ科	シマベッコウバイ	Japeuthria cingulata	Ⅱ-1-c	[illegible]
48	イトマキボラ科	イトマキボラ	Pleuroploca trapezium trapezium	Ⅰ-0-a	[illegible]
49	フデガイ科	イモフデガイ	Pterygia dactylus	Ⅰ-1-b	[illegible]
50	イモガイ科	マダライモ	Conus (Virroconus) ebraeus	Ⅰ-1-a	[illegible]
51	イモガイ科	サヤガタイモ	Conus (Virroconus) miliaris	Ⅰ-1-a	[illegible]
52	イモガイ科	ハナワイモ	Conus (Virroconus) sponsalis	Ⅰ-1-a	[illegible]
53	イモガイ科	ヤセイモ	Conus (Rhizoconus) emaciatus	Ⅰ-0-a	[illegible]
54	イモガイ科	キヌカツギイモ	Conus (Virgiconus) flavidus	Ⅰ-0-a	[illegible]
55	カワニナ科	カワニナ	Semisulcospira libertina	Ⅳ-0-d	[illegible]
56	ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	Cyclophorus turgidus turgidus	Ⅴ-6	[illegible]
57	キセルガイ科	ツヤギセルガイ	Luchuphaedusa praeclara	Ⅴ-6	[illegible]
58	ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	Satsuma (Satsuma) mercatoria mercatoria	Ⅴ-6	[illegible]
59	オナジマイマイ科	パンダナマイマイ	Bradybaena circulus	Ⅴ-6	[illegible]
60	カシパン科	カシパン類	Peronella? sp.	Ⅵ-12	[illegible]
				合計	[illegible]

Nは最少個体数，　詳細　a:成貝（完形で、大形幼貝を含む），b:体層，dL:背面欠，dp:背面部のみ，f:破片，il:内唇，ol:外唇，u:殻頂.

第 70 表　淑順門西地区出土二枚貝の出土詳細

番号	科名	種名	学名	生息場所	北区 E-10 Ⅳ-3'	F-10 Ⅰ	F-10 Ⅳ-3	F-10 Ⅳ-3'	F-11 Ⅰ	F-11 Ⅳ-1	F-11 Ⅳ-2	F-11 Ⅳ-3'	F-11(南) Ⅳ-1	F-11(南) Ⅳ-2	F-11(南) Ⅳ-3	F-11(南) Ⅳ-3'	F-11(南) 不明	F-11(北) Ⅳ-1	F-11(北) Ⅳ-2	F-11(北) Ⅳ-3	F-11(北) Ⅳ-3'	F-11(北) Ⅳ-4
1	フネガイ科	エガイ	Barbatia (Abarbatia) lima	Ⅰ-1-a																		
2	フネガイ科	クロミノエガイ	Barbatia (Ustularca) cruciata	Ⅱ-2-b										2 0/2a								
3	フネガイ科	リュウキュウサルボオ	Anadara antiquata	Ⅱ-2-c									1 0/1a									
4	タマキガイ科	タマキガイ科の一種	Glycymerididae gen. et sp.	Ⅵ						1 0/1u												
5	イガイ科	リュウキュウヒバリガイ	Modiolus auriculatus	Ⅰ-1-a							1 1f			2 2a/2a,21f								
6	ウグイスガイ科	ミドリアオリ	Pinctada maculata	Ⅰ-1-a										7 1a,6u/4u					1 0/1a			
7	シュモクアオリ科	シュモクアオリ	Isognomon isognomum	Ⅱ-2-a																		
8	イタヤガイ科	イタヤガイ類	Pecten sp. cf. albicans	Ⅵ-12							1 1f											
9	イタヤガイ科	ヒナキンチャク類	Decatopecten sp. cf. plicus	Ⅵ-12																		
10	イタヤガイ科	ヒナノヒオウギ類	Mimachlamys sp. cf. pelseneeri	Ⅵ-12																		
11	ウミギク科	メンガイ類	Spondylus sp.	Ⅰ-2-a																		
13	イタボガキ科	シマ(ナ?)ガキ？	Crassostrea bilineata?	Ⅲ-1-c																		
14	イタボガキ科	オハグロガキ	Saccostrea mordax	Ⅰ-1-a										1 1f								
12	イタボガキ科	オハグロガキモドキ	Saccostrea circumsuta	Ⅱ-1-a																		
15	イタボガキ科	ノコギリガキ	Dendostrea crenulifera	Ⅱ-2-a																		
16	ツキガイ科	ウラキツキガイ	Codakia paytenorum	Ⅱ-2-c									1 1a/1a	24 17a,7u/17a,1u,18f	1 1u/1a				4 3a,1a/1u,1f	1 0/1u	1 0/1a	
17	キクザル科	シラガザル	Chama asperella	Ⅰ-3-a										1 0/1a								
18	キクザル科	フタオビザル	Chama pulchella	Ⅵ										1 0/1a								
19	ザルガイ科	リュウキュウザル	Regozara flavum	Ⅱ-2-c																		1 1a/0,1f
20	ザルガイ科	カワラガイ	Fragum unedo	Ⅱ-2-c																		
21	ザルガイ科	キンギョ	Nemocardium bechei	Ⅵ																		
24	シャコガイ科	ヒレジャコ	Tridacna squamosa	Ⅰ-2-c						1 0/1u,2f												
25	チドリマスオ科	イソハマグリ	Atactodea striata	Ⅰ-1-c	1 1u/0				2 0/2a	1 0/1a	4 3a,1u/3a,3f		3 3a/0	92 69a,12u/85a,7u,30f		1 1a/0			14 10a,4u/3a,4f			
26	フジノハナガイ科	リュウキュウナミノコ	Latona faba	Ⅰ-1-c										4 2a,2u/4a					1 0/1u			
27	ニッコウガイ科	サメザラ	Scutarcopagia scobinata	Ⅰ-2-c							1 1f											
28	ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	Quidnipagus palatam	Ⅱ-2-c	1 0/1u																	1 2f
29	イソシジミ科	マスオガイ	Psammotaea elongata	Ⅱ-1-c										1 1u/0							1 1u/0	
30	イソシジミ科	リュウキュウマスオ	Asaphis violascens	Ⅱ-1-c					1 0/1u					4 3a/4u,8f					2 0/1a,1u,3f			1 0/1u
31	シジミ科	ヤマトシジミ？	Corbicula japonica?	Ⅵ										1 1a/0					1 0/1u			
43	シジミ科	シレナシジミ	Geloina erosa	Ⅲ-0-c																		
33	マルスダレガイ科	トュドゥマリハマグリ	Meretrix sp. cf. lamarckii	Ⅱ-2-c					1 1u/1u	2 2a/1u			1 1a/0	3 2a,1u/2a,1u				1 0/1a				
34	マルスダレガイ科	ハマグリ類似種	Meretrix sp. cf. lusoria	Ⅱ-2-c		1 1u/0			1 1a/0,1f	8 2a,5u/3a,5u,5f			2 0/1a,1u,2f	16 7a,9a/5a,5u,72f	1 1a/0		2 0/1a,1u	1 1u/0	4 2a,2u/2a,1u,15f	1 1a/0,1f	1 0/1u	1 0/1u,1f
35	マルスダレガイ科	アラヌノメガイ	Periglypta reticulata	Ⅰ-2-b										1 3f					1 3f			
36	マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Periglypta puerpera	Ⅱ-2-c					1 0/1a	2 1a1u/1a,2f			1 1a/0	8 4a,4u/4a,2u,26f					1 0/1u,1f	1 1f	1 1f	1 0/1a,1f
37	マルスダレガイ科	アラスジケマンガイ	Gafrarium tumidum	Ⅲ-1-c	3 2a,1u/0,4f	2 2a/1a	1 1a/0	1 0/1u	2 2a/2a	15 9a,4u/11a,4u,1f	12 5a,3u/8a,4u,24f	2 0/2a	18 13a,5u/16a	689 518a,152u/529a,160u,464f	3 1a,2u/1a,1f	2 2a/2a	3 3a/2a	3 0/2a,1u	91 78a,13u/57a,25u,126f	10 5a/9a,1u	5 4a/5a	5 4a,1u/2a,1u,4f
38	マルスダレガイ科	ホソスジイナミガイ	Gafrarium pectinatum	Ⅱ-1-c		1 1a/0				1 1a/1a			2 2a/0	24 20a,4u/18a,1u,77f					2 2a/2a	1 0/1a		
32	マルスダレガイ科	イオウハマグリ	Pitar sulfureum Pilsbry,1904	Ⅱ-1-c										4 3a/3a,1u					1 1a/0			
39	マルスダレガイ科	ユウカゲハマグリ	Pitar citrinus	Ⅱ-2-c										1 1a/0								
40	マルスダレガイ科	オイノカガミ	Bonartemis histrio	Ⅱ-2-c										1 0/1u								
41	マルスダレガイ科	ヒメアサリ	Ruditapes variegatus	Ⅱ-1-c										1 1a/0								
42	マルスダレガイ科	スダレハマグリ	Katelysia japonica	Ⅱ-1-c									1 0/1a	2 1a/1a,1u,1f								
44	マルスダレガイ科	ダテオキシジミ	Cyclina sp. cf. sinensis	Ⅲ-1-c										2 1a,1u/1a,1u,16f								
45		種属不明																				
合計					5	4	1	1	8	31	19	2	30	892	5	3	5	5	123	14	9	10

番号	科名	種名	学名	生息場所	南区 G-10 Ⅰ	G-10 Ⅱ	G-11 Ⅰ	G-11 Ⅲ	H-9 Ⅱ	H-9 Ⅳ	H-10 Ⅰ	H-10 Ⅱ	H-10 Ⅲ	H-10 Ⅳ	H-11 Ⅰ	H-11 Ⅱ	H-11 Ⅲ	I-9 Ⅰ	I-9 Ⅱ	I-9 Ⅳ	I-10 Ⅱ	I-10 Ⅲ	I-10 Ⅳ	不明 Ⅰ	不明 不明
1	フネガイ科	エガイ	Barbatia (Abarbatia) lima	Ⅰ-1-a							1 1a/0				1 0/1a										
2	フネガイ科	クロミノエガイ	Barbatia (Ustularca) cruciata	Ⅱ-2-b																					
3	フネガイ科	リュウキュウサルボオ	Anadara antiquata	Ⅰ-1																		1 1u/0			
4	タマキガイ科	タマキガイ科の一種	Glycymerididae gen. et sp.	Ⅵ																					
5	イガイ科	リュウキュウヒバリガイ	Modiolus auriculatus	Ⅰ-1-a					1 1f	4 1a,3u/3u,1f		2 2u/0													
6	ウグイスガイ科	ミドリアオリ	Pinctada maculata	Ⅰ-1-a						8 3a,5u/2a,3u		1 0/1a										1 1a/1a	3 1a/1a,2u,3f		
7	シュモクアオリ科	シュモクアオリ	Isognomon isognomum	Ⅱ-2-a								1 0/1u													
8	イタヤガイ科	イタヤガイ類	Pecten sp. cf. albicans	Ⅵ-12																					
9	イタヤガイ科	ヒナキンチャク類	Decatopecten sp. cf. plicus	Ⅵ-12			1 1f																1 1a/0		
10	イタヤガイ科	ヒナノヒオウギ類	Mimachlamys sp. cf. pelseneeri	Ⅵ-12											1 0/1a										
11	ウミギク科	メンガイ類	Spondylus sp.	Ⅰ-2-a														1 1u/0							
13	イタボガキ科	シマ(ナ?)ガキ？	Crassostrea bilineata?	Ⅲ-1-c																					
14	イタボガキ科	オハグロガキ	Saccostrea mordax	Ⅰ-1-a					1 1u/0																
12	イタボガキ科	オハグロガキモドキ	Saccostrea circumsuta	Ⅱ-1-a						1 0/1a															
15	イタボガキ科	ノコギリガキ	Dendostrea crenulifera	Ⅱ-2-a																			1 0/1a		
16	ツキガイ科	ウラキツキガイ	Codakia paytenorum	Ⅰ-4-c			1 0/1a		2 2a/1a	18 17a,1u/13a,2u		16 8a/8a,2u	1 0/1a	1 1a/0		1 C/1a		1 0/1u	4 1a,1u/2a,2u,2f	1 0/1a			2 2a/1a		1 1a/1a
17	キクザル科	シラガザル	Chama asperella	Ⅰ-3-a																					
18	キクザル科	フタオビザル	Chama pulchella	Ⅵ																					
19	ザルガイ科	リュウキュウザル	Regozara flavum	Ⅱ-2-c																					
20	ザルガイ科	カワラガイ	Fragum unedo	Ⅰ-2-a															1 1u/1a						
21	ザルガイ科	キンギョガイ	Nemocardium bechei	Ⅵ																				1 0/1a	
22	シャコガイ科	ヒレジャコ	Tridacna squamosa	Ⅱ-2-c				1 1u/0				1 2f				1 1f									
23	チドリマスオ科	イソハマグリ	Atactodea striata	Ⅰ-1-c						1 0/1a		2 1a/2a				1 C/1a									
24	フジノハナガイ科	リュウキュウナミノコ	Latona faba	Ⅰ-1-c																					
25	ニッコウガイ科	サメザラ	Scutarcopagia scobinata	Ⅰ-2-c																					
26	ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	Quidnipagus palatam	Ⅱ-2-c																					
27	イソシジミ科	マスオガイ	Psammotaea elongata	Ⅱ-1-c																					
28	イソシジミ科	リュウキュウマスオ	Asaphis violascens	Ⅱ-1-c																					
29	シジミ科	ヤマトシジミ？	Corbicula japonica?	Ⅵ																					
40	マルスダレガイ科	シレナシジミ	Geloina coaxans	Ⅰ-1-a										1 1a/0											
31	マルスダレガイ科	トュドゥマリハマグリ	Meretrix sp. cf. lamarckii	Ⅱ-2-c					1 1u/0	1 0/1a															
32	マルスダレガイ科	ハマグリ類似種	Meretrix sp. cf. lusoria	Ⅱ-2-c		1 1u/0	1 0/1u,2f	1 0/1u	3 1a/1a,2u	7 2a,5u/4a,9f		5 2a,1u/2a,3u,3f		2 0/1a,1u	1 0/1u		1 1u/1u			1 1a/1a	1 0/1u	1 0/1u,2f	1 1f	1 2f	2 0/2u
42	マルスダレガイ科	アラヌノメガイ	Periglypta reticulata	Ⅰ-2-a																					
33	マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Periglypta puerpera	Ⅱ-1-c						4 1a,1u/3a,1u,1f								2 0/2a			1 1f	1 1f	1 1u/0		
34	マルスダレガイ科	アラスジケマンガイ	Gafrarium tumidum	Ⅱ-2-c	4 3a,1u/3a	9 6a/9a	5 4a/5a,1f		45 40a,5a/2	383 359a,24u/299a,20	9 7a,2u/5a	142 108a,9u/131a,11u,3f	13 11a,2u/13a	11 7a,1u/9a,2u	18 16a/16a,2u,1f	10 6a/9a,1u,1f	3 1a,1u/1a,2u	38 35a,3u/36a,2u	51 33a,18u/37a,20u,9f	58 58a/43a,3u	3 3u/1a,1u	17 13a,4u/9a,4u,2f	38 26a,1u/38a	4 4a/0	10 8a,2u/5a,1u
35	マルスダレガイ科	ホソスジイナミガイ	Gafrarium pectinatum	Ⅲ-1-c		1 1a/0				7 3a/7a		4 0/4a								1 0/1a		2 0/2a	1 1a/1a		
30	マルスダレガイ科	イオウハマグリ	Pitar sulfureum Pilsbry,1904	Ⅱ-1-c						3 3a/2a,1f		1 1a/1a						1 1a/0		1 1a/0					
36	マルスダレガイ科	ユウカゲハマグリ	Pitar citrinus	Ⅱ-1-c								2 0/2a													
37	マルスダレガイ科	オイノカガミ	Bonartemis histrio histrio	Ⅰ-3-c																					
38	マルスダレガイ科	ヒメアサリ	Ruditapes variegatus	Ⅱ-1-c																					
39	マルスダレガイ科	スダレハマグリ	Katelysia japonica	Ⅱ-1-c						3 0/2a,1u	1 0/1a	2 2a/1u	1 0/1u			1 C/1a		1 0/1a				2 1a/1a,1u	1 0/1a		
41	マルスダレガイ科	ダテオキシジミ	Cyclina sp. cf. sinensis	Ⅲ-1-c						1 0/1a,2f		3 2a/2a,1u						3 1a/3a	1 0/1u	1 1a/0		1 1a/0,1f		1 1u/0	
43		種属不明														1 3f									
合計					4	11	8	2	53	441	11	176	15	15	21	15	4	47	63	63	5	26	49	7	13

左／右：Nは最少個体数，　詳細　a：成貝（完形で、大形幼貝を含む），b：体層，dL：背面欠，dp：背面部のみ，f：破片，il：内唇，ol：外唇，u：殻頂．

第 71 表　奉神門埋甕地区出土貝類遺体の組成

番号	科名	和名	学名	生息場所類型	甕内		甕内2層		甕内4層		甕外6・7層		甕外6層		甕外7層		合計
					N		N		N		N		N		N		
巻2	リュウテン科	ヤコウガイ	Turbo (Lunatica) marmoratus	I-4-a							1	1f	1	1u	1	1f	3
巻13	スイショウガイ科	マガキガイ	Strombus (Conomurex) luhuannns	I-2-c							1	1u	1	1a			2
二3	ツキガイ科	ヒメツキガイ	Epicodakia bella	I-2-c									1	1a/1a			1
巻18	アッキガイ科	ツノレイシ	Mancinella tuberosa	I-3-a											1	1f	1
二8	マルスダレガイ科	アラスジケマン	Gafrarium tumidum	III-1-c					1	1u/0	1	0/1u	1	1a/0,1f	1	0/1u	4
巻12	スイショウガイ科	オハグロガイ	Strombus (Canarium) urceus	II-2-c	2	2a							1	1a			3
巻19	オニコブシ科	コオニコブシ	Vasum turbinellum	I-3-a	1	1b							1	1a			2
二2	ツキガイ科	ウラキツキガイ	Codakia paytenorum	I-4-c			1	0/1a			3	3a/1a					4
巻31		陸産貝類	land snail	V	1	1a			7	7a							8
巻28	ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	Cyclophorus tufgidus turgidus	V-8	3	2a,1u			3	3a							6
巻30	ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	Satsuma (Satsuma) mercatoria	V-8					2	1a,1u							2
巻29	キセルガイ科	ツヤギセル	Luchuphaedusa praeclara	V-8					1	1a							1
巻10	ウミニナ科	リュウキュウウミニナ	Batillaria flectosiphonata	II-1-c	1	1a			10	10a							11
巻9	ゴマフニナ科	ゴマフニナ	Planaxis sulacatus	I-0-a					1	1f							1
巻1	ユキノカサ科	リュウキュウウノアシ	Patelloida sacchuarina	I-1-a					1	1u							1
巻24	イモガイ科	マダライモ	Conus (Virroconus) ebraeus	I-1-a					1	1a							1
巻21	イトマキボラ科	キイロツノマタモドキ	Peristernia ustulata luchuana	I-2-b					3	2a,1f							3
巻4	リュウテン科	カンギクのフタ	Lunella moniliformis (operculum)	II-1-b					1	1a							1
二9	マルスダレガイ科	ホソスジイナミ	Gafrarium pectinatum	II-1-c					1	0/1a							1
二7	マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Periglypta puerpera	II-2-c					1	0/1u							1
二6	マルスダレガイ科	ハマグリ類似種	Meretrix sp. cf. lusoria	II-2-c					1	1f							1
二5	イソシジミ科	リュウキュウマスオ	Asaphis violascens	II-1-c				0/1a	1	1a/0							1
巻3	リュウテン科	カンギク	Lunella moniliformis	II-1-b	1	1u,1f			2	1a,1u							3
巻5	アマオブネ科	マルアマオブネ	Nerita (Theliostyla) squamulata	II-1-b	1	1a			1	1a							2
二4	チドリマスオ科	イソハマグリ	Atactodea striata	I-1-c			1	1a									1
二1	ウミギク科	メンガイ類	Spondylus sp.	I-2-a			1	1f									1
巻8	オニノツノガイ科	クワノミカニモリ	Clypeomorus chemnitziana	I-1-b	1	2f											1
巻17	タマガイ科	ホウシュノタマ	Natica gualteriana	II-1-c	2	2a											2
巻15	タカラガイ科	ハナビラダカラ	Cypraea (Erosaria) annulus	I-1-a	1	1dL											1
巻22	フデガイ科	コシマヤタテ	Strigatella zebra	I-1-a	1	1u											1
巻25	イモガイ科	シロセイロンイモ	Conus (Virroconus) nanus	I-1-a	1	1a											1
巻6	オニノツノガイ科	カヤノミカニモリ	Clypeomorus bifasciata	I-1-b	1	1f											1
巻26	イモガイ科	キヌカツギイモ	Conus (Virgiconus) flavidus	I-2-a	1	1a											1
巻16	タカラガイ科	ハナマルユキ	Cypraea (Erosaria) caputserpentis	I-3-a	1	1il											1
巻14	ウミウサギ科	マメウサギ	Calpurnus (Procalpurnns) lacteus	I-4-a	1	1a											1
巻7	オニノツノガイ科	イワ(ウミナ)カニモリ	Clypeomorus batillariaeformis	II-1-b	1	1f											1
巻23	ミノムシガイ科	イトカケツクシ	Costellaria semifasciata	II-2-c	1	1a											1
巻30	トウガカタカワニナ科	ネジヒダカワニナ	Sermyla riqueti	III-0-c	1	1a											1
巻11	フトヘナタリ科	フトヘナタリ(イトカケ-型)	Cerithidea rhizophorarum	III-0-d	1	1b											1
巻20	オリイレヨフバイ科	カニノテムシロ	Pliarcularia bellula	III-1-c	1	1a											1
			合計		25		3		38		6		6		3		56

左／右:Nは最少個体数.　詳細 a:成貝(完形で、大形幼貝を含む), b:体層, dL:背面欠, dp:背面部のみ, f:破片, il:内唇, ol:外唇, u:殻頂.

（ウ）甕の内部では下部に陸産貝類が多く、4 層が堆積した時点では甕内に水はほとんどなく、周辺は多少植物が繁茂する景観になっていたと考えられる。

（エ）甕内の貝類には、一部に周辺土壌由来の食用貝類遺体も含まれるが、小形の非食用種も多く、これらは海岸の“砂利”に由来する可能性が高いように思われる。

（オ）ある時期、甕の周辺には海岸の砂利が敷かれており、その後に甕内に、この砂利が入れられたと考えられること等が示される。

このように奉神門における甕の埋設時期と考えられている 18 世紀頃には、甕の周辺は管理されたある程度開けた空間であったと考えられる（イ）が、一方、木立等は存在していたようである（ウ）。海岸の砂利を甕周辺に敷いていたと想定したが（オ）、これはヤマトの神社でよく見られるような白砂を意識したものかもしれない。この砂利を敷いていた時期は明確ではないが、甕は石畳が敷かれる際に埋められたと考えられており、石畳以前には砂利敷きであった可能性も考えられよう。

小面積の発掘ではあるが、今回の結果は、詳細な貝類遺体のサンプリングによって地点の景観が復元できる可能性を示せたものと思っている。

謝辞：興味深い資料の検討の機会を与えて頂いた沖縄県埋蔵文化財調査センターの瀬戸哲也氏および労力のかかる貝類遺体の分類・集計をして頂いた同センターの方々にお礼申し上げたい。本報告の一部には、科学研究費（21101005）を用いた。

引用文献

赤嶺信哉・黒住耐二．2011．勝連半島に遺跡出土貝類遺存体の状況．In 宮城伸一・仲村 毅（編），勝連城跡，四の曲輪北区発掘調査報告書，うるま市文化財調査報告書，(14)：201-215.

安里 進．1974．沖縄における原始共同体の解体過程（試論）－沖縄本島南部・久米島を中心として－．沖縄歴史研究，(11)：65-83.

古島久子．2001．島添大里グスク出土の貝類．In 大里城跡（2），大里村文化財調査報告書，(4)：103-108, pl.

79-80.
羽方　誠・仲座久宜（編）. 2007. 首里城跡, 黄金御殿地区発掘調査報告書, 沖縄県立埋蔵文化財発掘調査報告書, (45): 1-275.
比嘉春美. 1983. 貝類遺存体. In 大城 慧（編）, 我謝遺跡, 西原町文化財調査報告書, (5): 185-189.
金城亀信. 2007. 貝類遺存体. In 金城亀信・伊藝由希（編）, 真珠道跡, 首里城跡真珠道跡地区発掘調査報告書（Ⅱ）, 沖縄県立埋蔵文化財発掘調査報告書, (42): 73-75, 104.
金城亀信・伊集ゆきの・瑞慶覧尚美・赤嶺雅子・又吉純子（編）. 2010. 首里城跡, 京の内発掘調査報告書（Ⅱ）, 沖縄県立埋蔵文化財発掘調査報告書, (49): 1-355, 13 pls.
黒住耐二. 1991. 貝類遺存体. In 金武正紀ら（編）, 今帰仁城跡発掘調査報告書II, 今帰仁村文化財調査報告書, (14): 340-351.
黒住耐二. 1993. 貝類遺存体. In 中村 慎（編）, 玉代勢原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (13): 287-293.
黒住耐二. 2010a. 貝類遺体. In 仲座久宜（編）, 首里城跡, 御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）, 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書, (54): 440-451.
黒住耐二. 2010b. 貝類遺体（シーリ遺構内）. In 仲座久宜（編）, 首里城跡, 御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）, 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書, (54): 472-476.
黒住耐二. 2011. 琉球先史時代人とサンゴ礁資源：貝類を中心として. In 高宮広土・伊藤慎二（編）, 先史・原始時代の琉球列島～ヒトと景観～, pp. 87-107. 六一書房.
黒住耐二・金城亀信. 1988. 豊見城村の長嶺, 保栄茂および平良グスク試掘調査により出土した貝類. In 金城亀信(編), 豊見城村の遺跡, 豊見城村文化財調査報告書, (3): 137-155.
大城聖子. 1988. 貝殻. In 当真嗣一・上原　静（編）. 首里城跡. 歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査, 沖縄県文化財調査報告書, (88): 111, 121-128.
上原　静. 1989. 首里城跡出土の貝殻. 月刊考古学ジャーナル, (311): 5-8.
山本正昭（編）. 2007. 首里城跡, 御内原西地区発掘調査報告書, 沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書, (44): 1-212, 4 pls.

第 72 表　貝類の生息場所類型

生息場所類型

大区分		底質等	
Ⅰ	外洋－サンゴ礁域	a	岩礁
Ⅱ	内湾－転石域	b	転石
Ⅲ	河口干潟－マングローブ域	c	砂/泥
Ⅳ	淡水域	d	河川礫底
Ⅴ	陸域	f	植物上
Ⅵ	その他		

小区分			
0	潮間帯上部	5	止水
	Ⅰ－0　ノッチ	6	流水
	Ⅲ－0　マングローブ	7	林内
1	潮間帯中・下部	8	林内・林縁部
2	亜潮間帯上縁部	9	林縁部
	Ⅰ－2　イノー内	10	海浜部
3	干瀬	11	打ち上げ物
4	礁斜面	12	化石

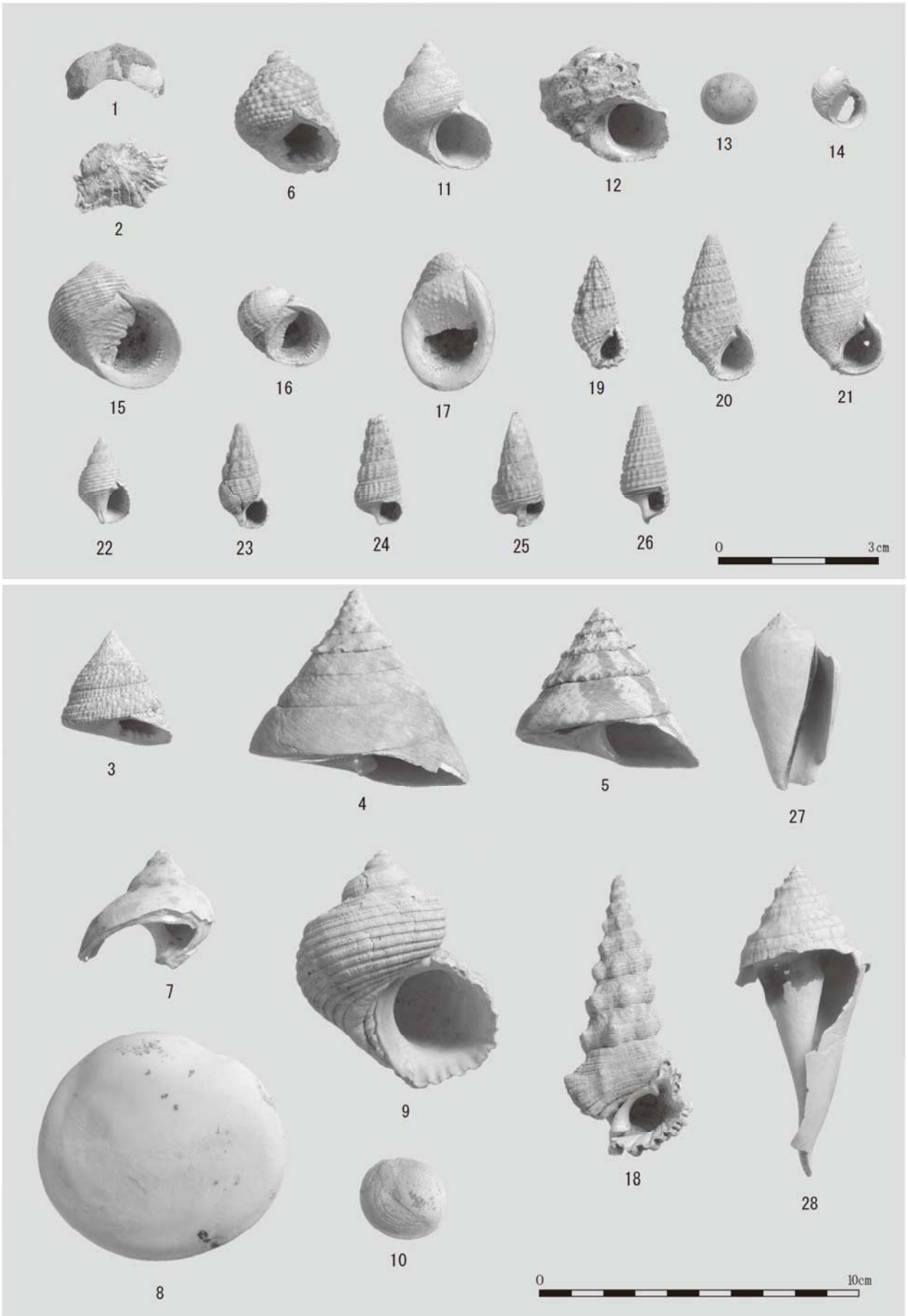


写真 41　淑順門西地区　貝類遺体 1　巻貝（番号は第 69 表と一致）

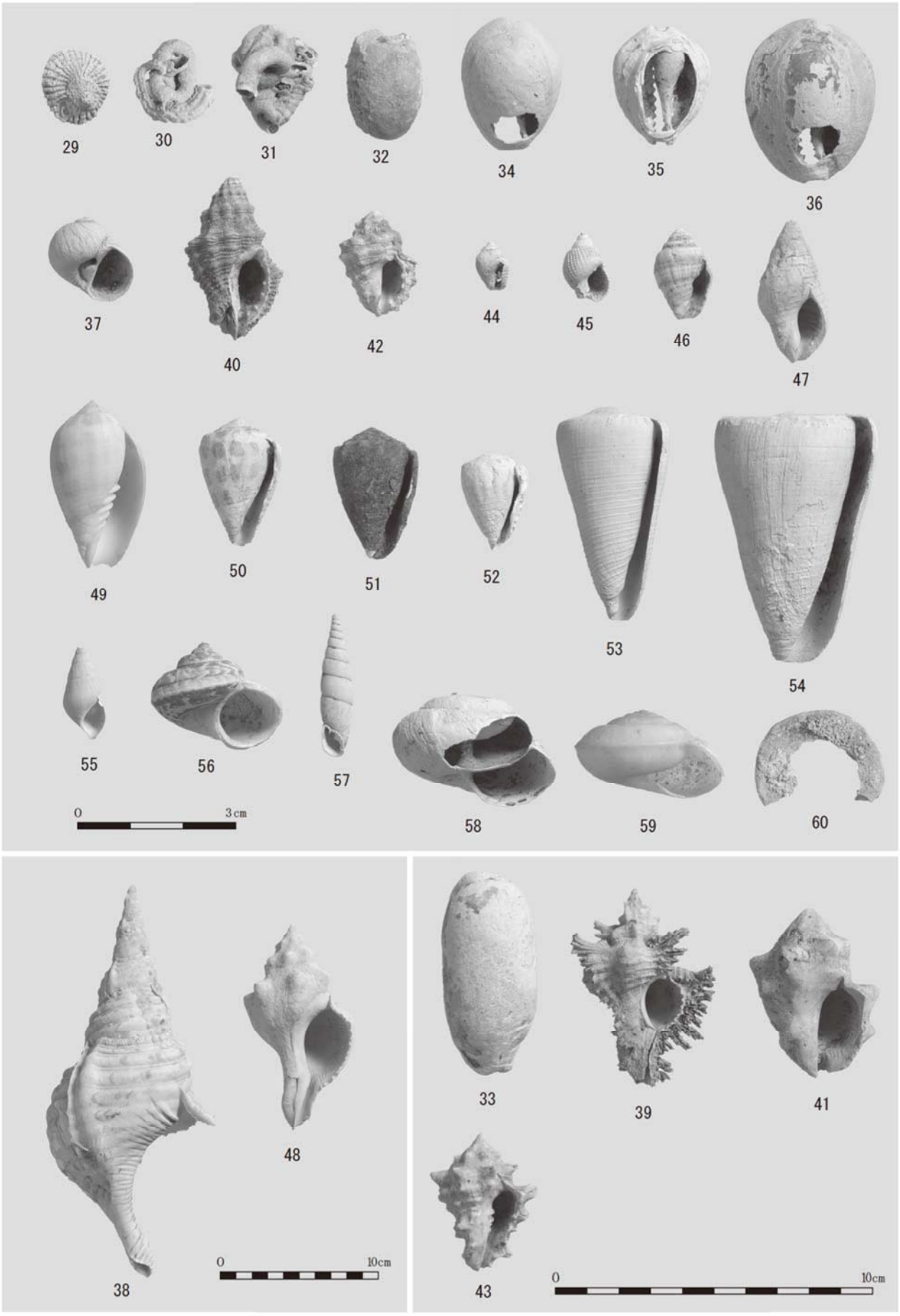


写真 42　淑順門西地区　貝類遺体 2　巻貝（番号は第 69 表と一致）

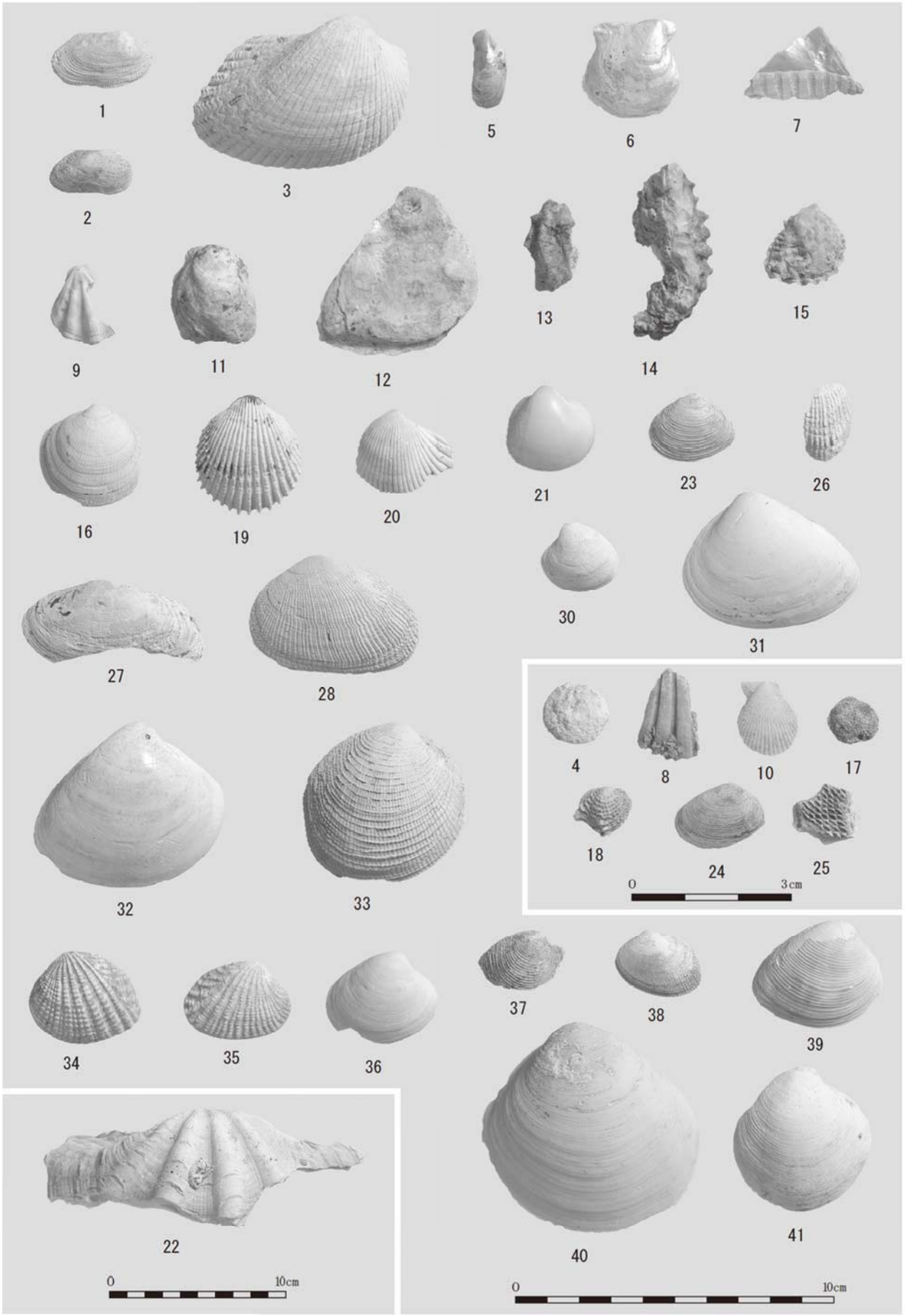


写真 43　淑順門西地区　貝類遺体 3　二枚貝（番号は第 70 表と一致）

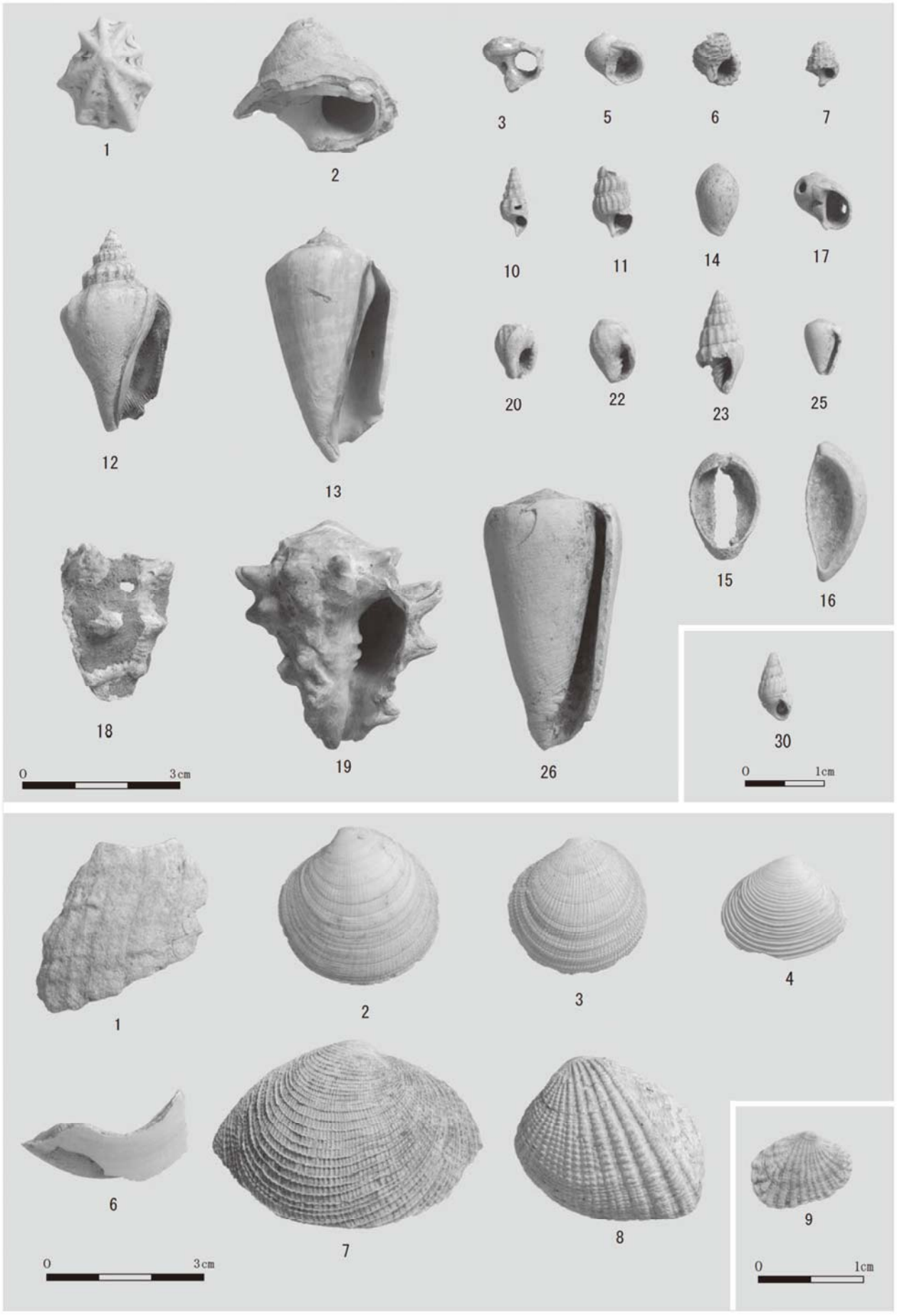


写真 44　奉神門埋甕地区　出土貝類遺体　上：巻貝　下：二枚貝　（番号は第 71 表と一致）

第３節　首里城跡淑順門西地区から出土した脊椎動物遺体

樋泉岳二（早稲田大学）

はじめに

平成 22 年度に沖縄県立埋蔵文化財センターによって実施された首里城淑順門西地区の発掘調査では多数の脊椎動物遺体（骨類）が採集された．ここではその分析結果について記載し，本地区における脊椎動物遺体群の特徴について考察する．とくに城壁下の堆積層（グスク時代＝ 13 世紀後半～ 16 世紀）から出土した骨類は，首里城成立期における城内での動物資源利用の様相を示す資料として重要である．

１．分析資料と分析方法

(1) 分析資料

調査区の位置は淑順門の西側で，淑順門から正門に向かって伸びる城壁の一角である．調査区は大きく北区（E-10 ～ 11，F-10 ～ 11 の各グリッド．F-11 グリッドは F-11 北と F-11 南に区分されている）と南区（G-9 ～ 11，H-9 ～ 11，I-9 ～ 10 の各グリッド）に分かれる．

骨類を出土した層準と年代は，下位からⅣ層（グスク時代:13 世紀後半～ 16 世紀），Ⅲ層（近世），Ⅱ層（近世～近代），Ⅰ層（現代：琉球大学建設以後）である．これらのうち，Ⅳ層は城壁の下層に約 1.5m の厚さで堆積した土層であり，北地区では，下位からⅣ -5 層（13 世紀後半～ 14 世紀前半），Ⅳ -4 層（14 世紀後半），Ⅳ -3’層（14 世紀末～ 15 世紀前半），Ⅳ -3 層（14 世紀末～ 15 世紀前半），Ⅳ -2 層（15 世紀中葉），Ⅳ -1 層（15 世紀後半～ 16 世紀前半）に細分されている．南地区ではⅣ層の細分はなされておらず，「Ⅳ層」として一括されている．

分析資料は，その採集方法によって，「ピックアップ資料」と「水洗選別資料」）の２種類に分かれる．

ピックアップ資料:発掘現場において目視確認され，手で拾い上げられた資料である．なおⅣ -2 層，Ⅳ -3 層，Ⅳ -3’層の資料には，以下に述べる水洗選別資料の 5mm メッシュ回収資料と思われる比較的小型の骨が多数含まれていたが，他の層ではこうした小型資料はまれであった．そこで全体の資料のサイズを統一するため，上記の小型骨を含むサンプルについては，他の層のピックアップ資料の最小サイズ（約８mm 程度）を目安として，これより小型のものは除外した．

水洗選別資料:Ⅳ層の堆積物サンプルを水洗選別して回収された資料である．堆積物サンプルはⅣ -2 層（F-11 北），Ⅳ -2 層（F-11 南），Ⅳ -3 層，Ⅳ -3’層，Ⅳ -4 層（暗褐色土下層），Ⅳ -4 層（暗褐色土下層２）の計６箇所から採集され（第 73 表），5mm，2.5mm，1mm のメッシュを用いて水洗選別された．水洗後の試料のうち，2.5mm メッシュと 1mm メッシュ回収資料の中から，微小骨の分析を目的として，その一部を抽出し（サンプル

第 73 表　首里城跡淑順門西地区から採取された水洗選別用堆積物試料の一覧

層準		グリッド	地区	メッシュ	水洗後総体積 (cc)	水洗後総重量 (g)	分析試料					分析率(%)	
							試料No.	袋No.	体積(cc)	重量(g)	骨重量(g)	体積比	重量比
Ⅳ-2	黒上	F-11	北	2.5mm	6000	6000	SJW-1	620	500	600	3.3	8.3	10.0
				1mm	5500	6000		643	1000	1250	1.7	18.2	20.8
Ⅳ-2	黒上	F-11	南	2.5mm	13500	13500	SJW-2	563	1000	1000	54.5	7.4	7.4
				1mm	13500	13400		638	500	450	20.0	3.7	3.4
Ⅳ-3	黒下	F-11	北	2.5mm	6000	6000	SJW-3	549	1000	1000	27.2	16.7	16.7
				1mm	5000	5000		558	500	500	8.5	10.0	10.0
Ⅳ-3’	黒下2	F-10	-	2.5mm	3500	3600	SJW-4	551	500	400	9.4	14.3	11.1
				1mm	2500	1750		554	500	500	5.5	20.0	28.6
Ⅳ-4	暗下	F-11	北	2.5mm	500	400	SJW-5	538	500	400	5.7	100	100
				1mm	500	500		534	500	500	5.3	100	100
Ⅳ-4	暗下2	F-11	北	2.5mm	500	550	SJW-6	627	500	550	4.6	100	100
				1mm	1000	750		642	500	450	3.1	50.0	60.0
合計				-	58000	57450	-	-	7500	7600	148.8	12.9	13.2

番号 SJW-1 ～ 6．詳細は第 73 表を参照），これらの中から骨類を抽出・同定した．以上の作業のうち，サンプル採取，水洗および骨類の抽出は沖縄県立埋蔵文化財センターによって行われた．

(2) 分析方法

同定対象部位については，魚類は主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・椎骨を必須部位とし，それ以外にも分類群に応じて同定可能な部位を適宜同定対象資料とした．魚類以外については，部位の判別可能な資料を同定対象とした．ただし鳥類と哺乳類の四肢骨骨幹破片のうち，骨幹の全周を残さないものは対象外とした．同定方法は原則として現生標本との比較によった。比較に使用した標本は筆者の所蔵標本のほか，沖縄県立埋蔵文化財センターおよび国立歴史民俗博物館西本豊弘氏の所蔵表標本も参照させていただいた．

2．分析結果

同定結果を第 75 表～第 79 表（ピックアップ資料），第 81 表～第 82 表（水洗選別資料）に示す．また同定標本数（NISP）と最小個体数（MNI）による組成を第 80 表（ピックアップ資料），第 83 表～第 85 表（水洗選別資料）に示す．

(1) 脊椎動物遺体群の概要

採集資料からは，魚類，両生類，爬虫類，鳥類，哺乳類が確認された（第 74 表）．

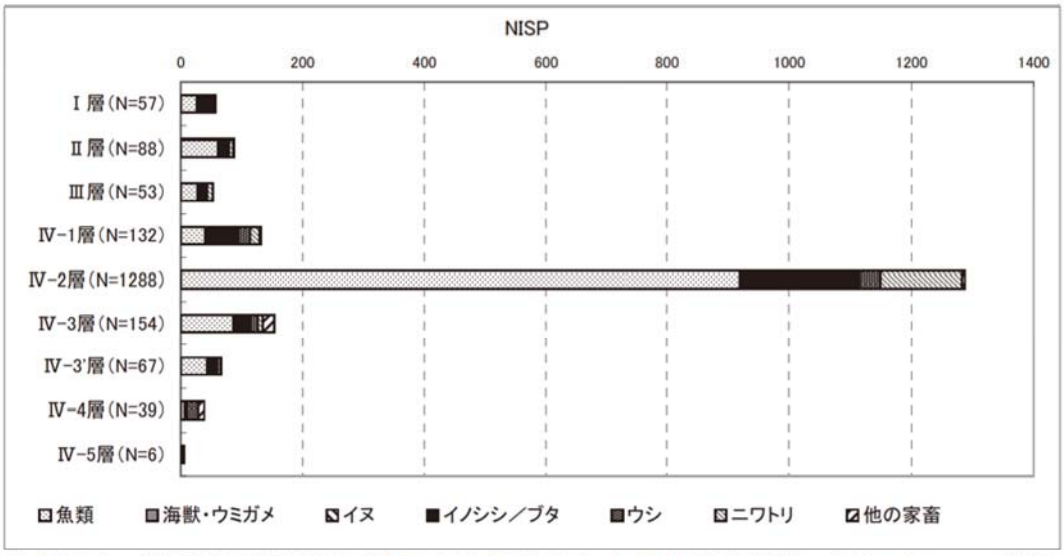
出土数：ピックアップ資料（第 99 図）では北区のⅣ -2 層（とくに F-11 南）が突出して多い．他の層準でははるかに少なく，かつ上下に向かって漸減し，最下層のⅣ -5 層ではごく少ない．またⅣ層でも南区では少ない．水洗選別資料でも，骨の包含密度（単位サンプル量当たりの検出数）でみると，Ⅳ -2 層（とくに F-11 南＝ SJW-2）が突出しており，Ⅳ -3 層（SJW-3）でもやや高密度だが，その他のサンプルでは低く，ピックアップ資料と基本的に同傾向である．以上から骨類の層位的・平面的な分布状況は，北区のⅣ -2 層～Ⅳ -3 層で多く，とくにⅣ -2 層の F-11 南付近に集中しているのに対し，北地区の他の層準や南区では骨の埋蔵量は少なかったと推定される．

第 74 表　首里城跡淑順門西地区から採集された脊椎動物遺体の種名一覧

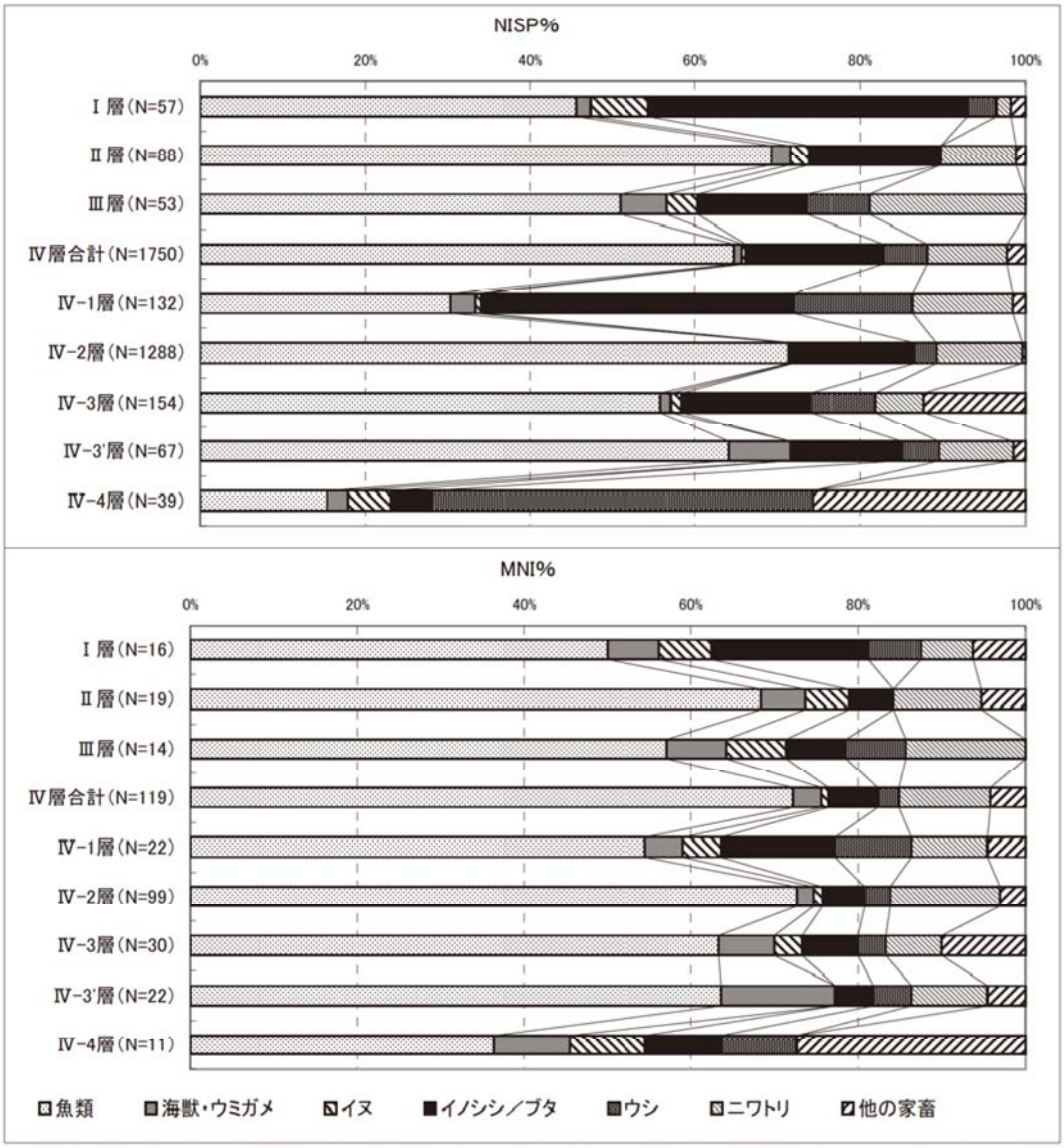
軟骨魚綱	CHONDICHTHYES
メジロザメ科	Carcharhinidae
トビエイ科	Myliobatididae
硬骨魚綱	OSTEICHTHYES
ニシン科	Clupeidae
オオウナギ	*Anguilla marmorata*
ウツボ科	Muraenidae
アナゴ科	Congridae
コイ科	Cyprinidae
ダツ科	Belonidae
サヨリ科	Hemiramphidae
トビウオ科	Exocoetidae
イットウダイ科	Holocentridae
ボラ科	Mugilidae
カマス科	Sphyraenidae
ハタ科A	Serranidae A (cf. *Epinephelus*)
ハタ科B	Serranidae B (cf. *Plectropomus*)
キス科	Sillaginidae
ギンガメアジ属	*Caranx*
アジ類(小型種)	Carangidae (small)
シイラ属	*Coryphaena*
クロサギ科	Gerreidae
ヒメジ科？	Mullidae
イスズミ科	Kyphosidae
フエダイ亜科	Lutjaninae
タカサゴ亜科？	Caesioninae ?
コショウダイ亜科	Pomadasyinae
マダイ亜科	Pagrinae
ヘダイ	*Sparus sarba*
クロダイ属	*Acanrhpagrus*
ヨコシマクロダイ	*Monotaxis grandoculis*
フエフキダイ属(アマミフエフキ型)	*Lethrinus* cf. *L.. Amamianus*
フエフキダイ属(ハマフエフキ型)	*Lethrinus* cf. *L.. nebulosus*

（右段につづく）

硬骨魚綱(つづき)	OSTEICHTHYES (cont.)
ベラ科(シロクラベラ型)	Labridae cf. "*Cherodon shoenleinii*"
ベラ科(タキベラ型)	Labridae cf. "*Bodianus perditio*"
ベラ科B	Labridae B
ベラ科(その他)	Labridae (others)
アオブダイ属	*Scarus*
ソウダガツオ属	*Auxis*
スマ	*Euthynus affinis*
タチウオ科	Trichiuridae
ニザダイ科	Acanthrinidae
アイゴ属	*Siganus*
コチ科	Platycephalidae
モンガラカワハギ科	Balistidae
両生綱	AMPHIBIA
カエル類	Salientia
爬虫綱	RRPTILIA
ヘビ類	Ophidia
アオウミガメ	*Chelonia mydas*
鳥綱	AVES
ニワトリ	*Galus galus*
哺乳綱	MAMMALIA
ジャコウネズミ	*Suncus murinus*
ネズミ亜科	Murinae
イヌ	*Canis familiaris*
ネコ	*Felis catus*
ウマ	*Equus feres*
イノシシ／ブタ	*Sus scrofa*
シカ科	Cervidae (middle)
ヤギ	*Capra hircus*
ウシ	*Bos taurus*
ジュゴン	*Dugong dugon*
イルカ類	Cetacea (Small)
クジラ類	Cetacea (large)



第 99 図　首里城跡淑順門西地区から採集された脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の層位別出土数（NISP）



第 100 図　首里城跡淑順門西地区から採集された脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の組成

※上：NISP 比，下：MNI 比

脊椎動物遺体群全体の組成:ピックアップ資料では魚類が最も多く,哺乳類（おもに家畜類),鳥類（ニワトリ）がこれに次ぐ．爬虫類は少ない．魚類はMNI比で約50～70%，NISP比では層位的な変動が大きいが，30～70%前後を占める（第100図）．ただしⅣ-4層では魚類が少なく，哺乳類が多い．水洗選別資料では，検出数が多いSJW-2（Ⅳ-2層F-11南）とSJW-3（Ⅳ-3層）では魚類が圧倒的多数を占めるが，他のサンプルでは魚類は比較的少なく，とくに下層のSJW-5・SJW-6（Ⅳ-4層）では小動物（カエル類，ヘビ類，ネズミ類）がまとまって検出されている（第83表）．以上をまとめると，(1) 全体的に魚類と哺乳類・鳥類（おもに家畜とニワトリ）が大半を占めており，個体数では魚類が卓越する．(2) ただしⅣ-4層では魚類が少なく，小動物が多い点で傾向が異なる．

(2) 魚類

①同定記載

軟骨魚綱2分類群，硬骨魚綱41分類群、合計43分類群が確認された（第74表)。以下、同定結果に注釈を要する分類群について記載する。

ニシン科：頭部骨格はいずれもニシン亜科のものであり，ミズンまたはヤマトミズン属の可能性が強い．

トビウオ科・サヨリ科：水洗選別資料から椎骨が検出された．トビウオ科とサヨリ科の腹椎は側突起や腹面の隆起線の特徴で区別されるが，判別が難しい資料も多く，これらは「トビウオ科／サヨリ科」とした．

ハタ科：前上顎骨，歯骨，前鰓蓋骨にはマハタとスジアラに近似するものがあり，前者を「ハタ科A」，後者を「ハタ科B」とした．椎骨はフエダイ科等との判別が確実でないことから「ハタ型」とした．

アジ科：カスミアジの現生標本に近似するものを暫定的にギンガメアジ属，アジ科の小型種と思われるものを「アジ科（小型種)」とした．後者はムロアジ類に近似するものが多い．

フエフキダイ科：歯骨でヨコシマクロダイ，前上顎骨・方骨・口蓋骨でフエフキダイ属が同定された．フエフキダイ属の前上顎骨にはハマフエフキに類するタイプ（「ハマフエフキ型」とした）とアマミフエフキに類するタイプ（「アマミフエフキ型」とした）がある．上記以外の部位はフエフキダイ科として一括したが，腹椎の後半～尾椎はタイ科などとの判別が難しいため「タイ型」とした．

ベラ科：咽頭骨には「シロクラベラ型」（菅原2008)，「タキベラ型」，「ベラ科B」（金子1996を一部修正．樋泉2005）およびこれら以外のタイプがみられた．椎骨については形態変異が著しく，確実な判別基準を把握できていないが，コブダイやシロクラベラの椎骨はそれぞれ特徴が比較的明確であり，前者に近似したものを「コブダイ型椎骨」，後者に近似したものを「シロクラベラ型椎骨」とした．

ブダイ科：咽頭骨・前上顎骨・歯骨はすべてアオブダイ属に同定された．

アイゴ属：水洗選別資料から幼魚の骨が多数検出された．これらの中には「スク」と思われる稚魚の骨（前頭骨を主として，前鰓蓋骨・擬鎖骨・椎骨）が多数確認された．同様の例は今帰仁城跡周辺遺跡でも確認されている（樋泉2007)．他に，ピックアップ資料からは比較的大型の個体も検出されている．

未同定真骨類：未同定真骨類のうち，Ⅳ層H-9出土の左歯骨は大型で歯がみられない（写真46-58)．同種と思われる資料は今帰仁城（樋泉ほか2009）と勝連城（菅原2011）でも確認されている．

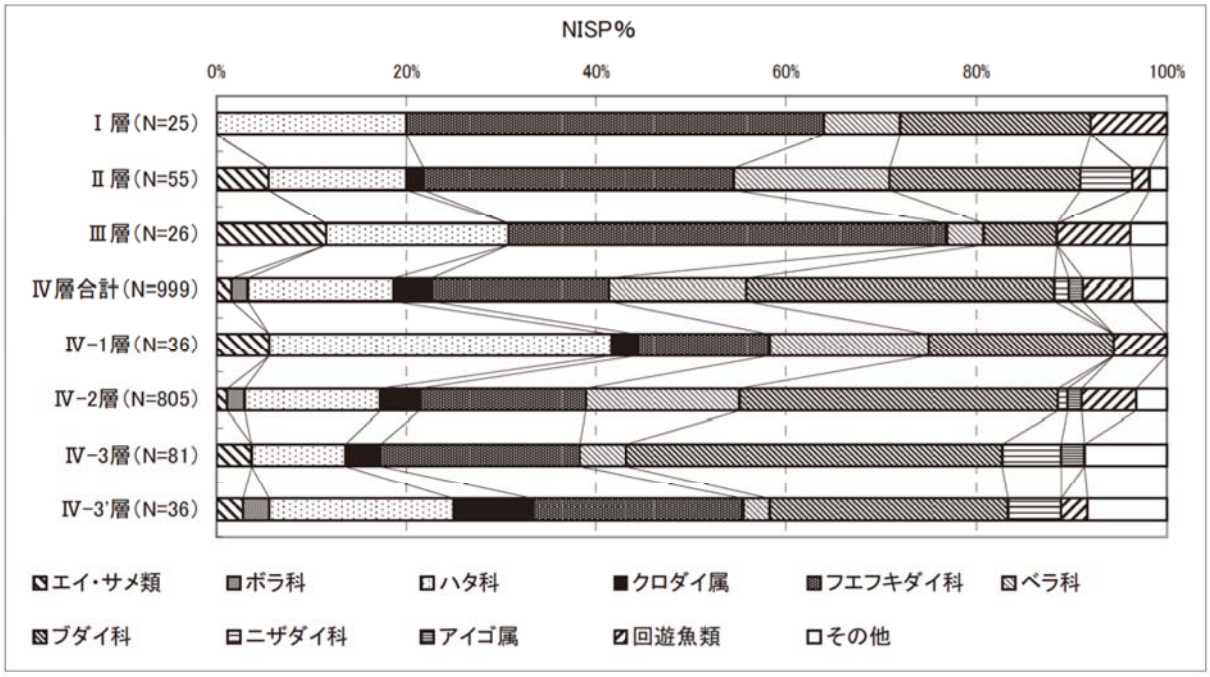
② 組成

ピックアップ資料（第101図）では，Ⅳ層～Ⅰ層を通じて，フエフキダイ科，ハタ科，ブダイ科，ベラ科，アイゴ属が多い．層位的には，Ⅳ層でブダイ科がやや多く，フエフキダイ科がやや少なく，Ⅲ層でエイ・サメ類（板鰓類）がやや多く，ベラ科・ブダイ科が少ないなど，若干の変動はあるが，明確な傾向的変化は認められない．北地区Ⅳ層内部の詳細な変化をみても，ニザダイ科はⅣ-3’～3層，ベラ科･アイゴ属はⅣ-2～1層，ハタ科はⅣ-1層で多いなどの変化はみられるが，主要種の構成は変わらない．

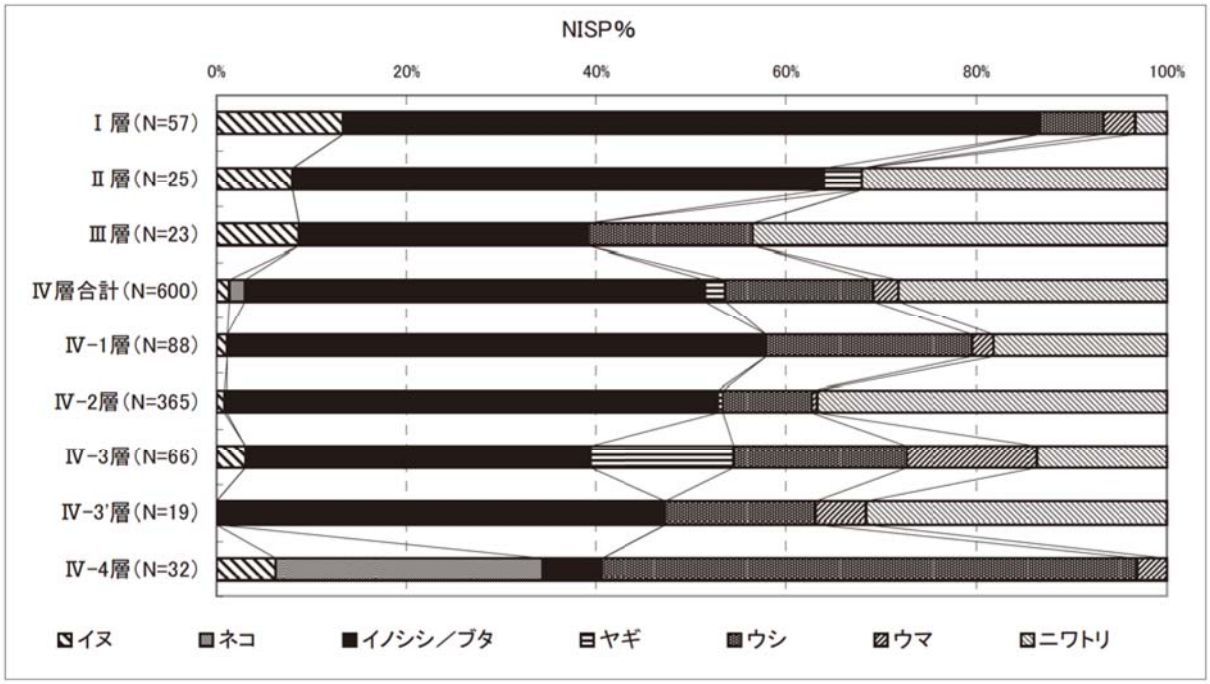
水洗選別資料が得られているのは北地区Ⅳ層のみで，その中でもまとまった資料が得られたのはSJW-2（Ⅳ-2層F-11南）とSJW-3（Ⅳ-3層）のみである．2.5mm資料（第103図）ではトビウオ科・サヨリ科，アジ類，カマス科，アイゴ属，ブダイ科，ハタ科，ボラ科，タチウオ科，ニザダイ科，クロダイ属などが多く，多様な種が混在している．1mm資料（第104図）ではアイゴ属が最も多く，他にアジ科，ニシン科，ボラ科が優占する．

2.5mm資料と1mm資料を統合して全体的な組成を求めるため，2.5mm資料と1mm資料のそれぞれについて，

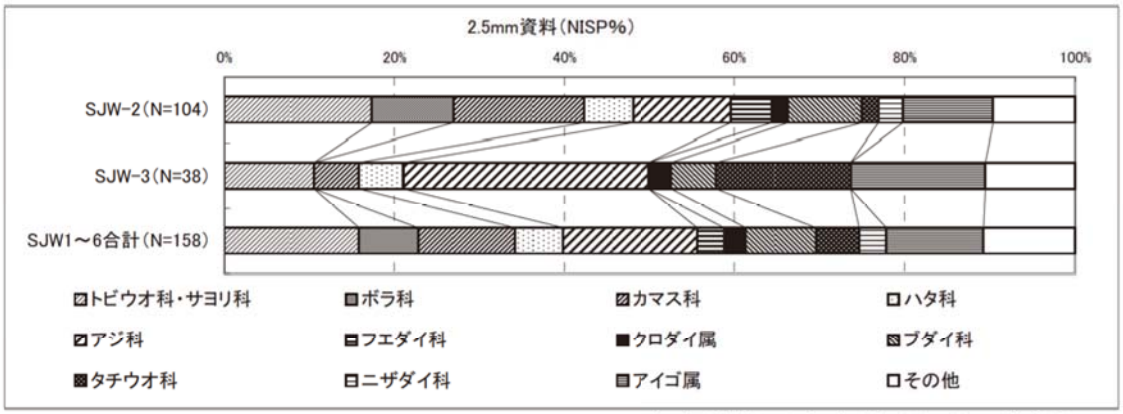
検出された資料数を分析率（サンプル総量に対する分析試料の比率．第 73 表）で除してサンプル全体の包含量を推定し，これを合算した（第 85 表）．その結果をみると，NISP（第 105 図），MNI（第 106 図）ともにアイゴ属が最も多く，アジ科，トビウオ科・サヨリ科，カマス科がこれに次ぐ．その他にもエイ・サメ類，ニシン科，ボラ科，ハタ科，ブダイ科，フエフキダイ科，クロダイ属，タチウオ科なども普通であり，多様な魚種が混在している．層位的にみると，Ⅳ-3 層（SJW-3）ではアイゴ属とともにアジ科が優占している点が特徴である．メッシュ別にみると，2.5mm 資料：1mm 資料の比率は全サンプルの合計値（NISP．未同定・保留・同定不可資料を含む）で 2487：1701（60％：40％）で，全体的に 2.5mm 資料が多いが，SJW-3 では 390：480（45％：



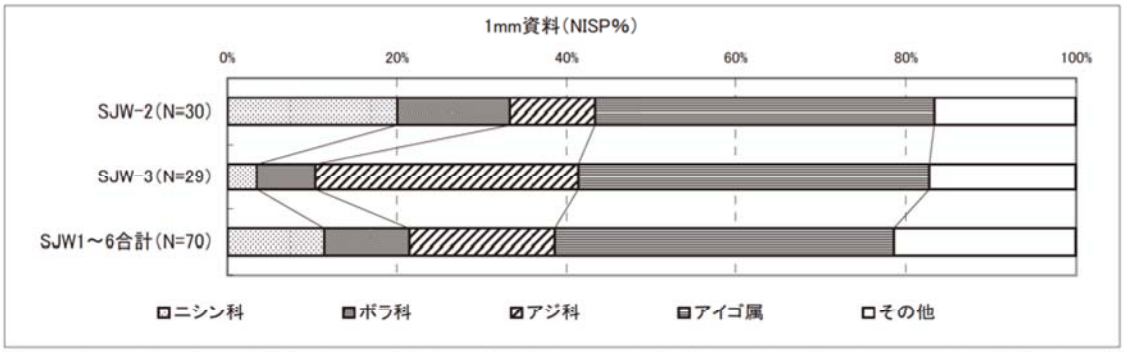
第 101 図　首里城跡淑順門西地区から採集された魚類遺体（ピックアップ資料）の組成（NISP 比）　＊回遊魚類：カマス科・アジ科・シイラ属・カツオ類



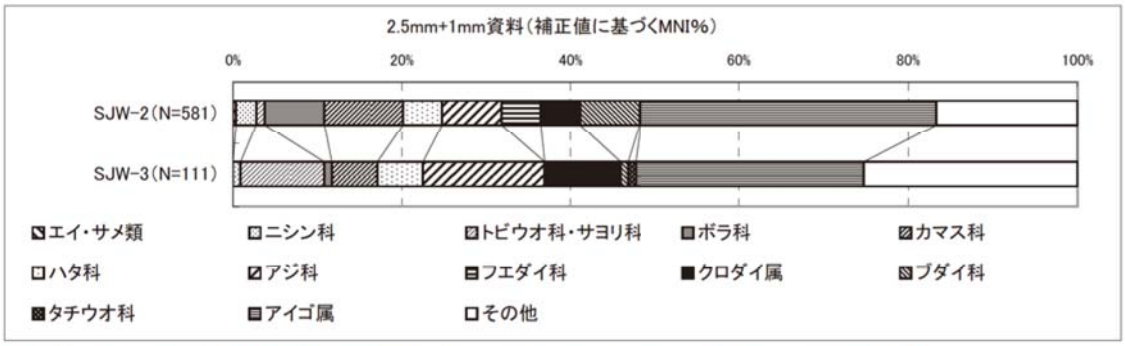
第 102 図　首里城跡淑順門西地区から採集された鳥獣類遺体（ピックアップ資料）の組成（NISP 比）



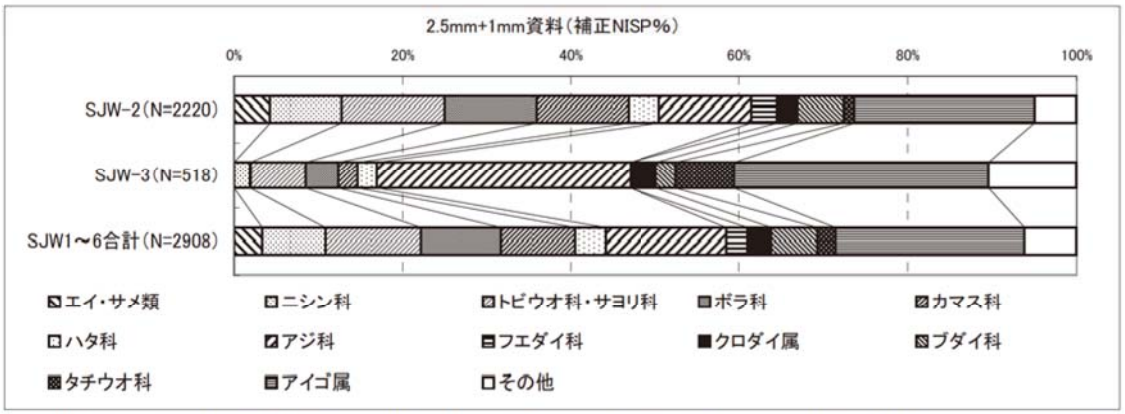
第 103 図　首里城跡淑順門西地区から採集された魚類遺体（水洗選別 2.5mm 資料）の組成（NISP 比）



第 104 図　首里城跡淑順門西地区から採集された魚類遺体（水洗選別 1 mm 資料）の組成（NISP 比）



第 105 図　首里城跡淑順門西地区から採集された魚類遺体（水洗選別 2.5mm・ 1 mm 資料）の組成（各メッシュの分析率による補正値の合計. NISP 比）



第 106 図　首里城跡淑順門西地区から採集された魚類遺体（水洗選別 2.5mm・ 1 mm 資料）の組成（各メッシュの分析率による補正値から求めた MNI 比）

55%）で逆に1mm資料が多くなっている．これは，このサンプルの1mm資料でアイゴ属・アジ科が多数検出されていること（第85表）が主な原因と思われる．またアイゴ属は全体的に1mmメッシュでの回収率が高く（合計値で192：458．30%：70%），そのサイズから「スク」に相当する稚魚が主体であると推定される．

(3) 両生類・爬虫類

両生類ではカエル類，爬虫類ではヘビ類・ウミガメ類が同定された（第74表）．ピックアップ資料（表8）ではⅣ-2層からヘビ類の椎骨70点がまとまって検出されているが，人為的に廃棄されたものか，自然遺骸かは不明である．ウミガメ類はごく少ない．水洗選別資料ではカエル類，ヘビ類が検出されている．いずれも少数だが，下層のⅣ-4層（SJW-5・6）ではややまとまって検出されている．

(4) 鳥類

種類を特定できたのはニワトリのみである（第74表）．Ⅳ-3’層以上で出土がみられ，Ⅰ層を除き，NISP比で鳥獣類中の20～40%前後を占める．成鳥が大半だが，若鳥も若干混じる．部位の偏りはとくに認められない．

(5) 哺乳類

12分類群が同定された（第74表）．以下，同定結果に注釈を要する種類について所見を記載する．

① 同定記載

ジャコウネズミ　ピックアップ資料Ⅳ-2層から上顎破片が2点検出された（写真49-23）．これらは顎骨・歯の形態および単尖歯が4本であることから，阿部ほか（1994）に従ってジャコウネズミに同定した．

ネズミ科　顎骨・臼歯はすべてネズミ亜科で，比較的小型の種である．自然の遺骸である可能性が高い．

イノシシまたはブタ　Ⅳ層出土の下顎骨には家畜種（ブタ）の可能性が考えられる資料が4点確認された（写真47-93～96）．これらの資料には，下顎体の湾曲がやや強いこと，あるいは下顎体の肥厚が認められることなど，家畜化の兆候が認められる．いずれもM2は萌出完了しており，M3は萌出中が2点，萌出完了が1点，不明1点である．また中手骨・指骨には明らかな短縮化傾向からブタと判断される資料が4点（Ⅳ層3点，Ⅰ層1点）確認された．上記以外の資料については野生種か家畜種かの判別が困難であったため「イノシシ／ブタ」とした．部位構成は全身の骨格がみられ，著しい偏りはないようである（第75表）．

シカ科　Ⅳ層から膝蓋骨と中足骨破片，Ⅰ層から頭蓋骨の後頭顆～頭蓋底破片が確認された（写真48-110～112）．いずれもシカ科の特徴をもち，ニホンジカ Cervus Nippon 程度の中型のシカである．九州以北または大陸からの搬入品と推定される．

ウシ　カットマークやスパイラルフラクチャー（写真48-120～122・124）などの解体痕が普通であることから，その多くは死後に解体・食用とされたと推定される．

ジュゴン　Ⅳ層～Ⅲ層で頭蓋骨，椎骨，肋骨，肩甲骨が確認された．頭蓋骨と椎骨が多い点が特徴である．

以上の他に，イヌ，ネコ，ヤギ，イルカ類，クジラ類が若干確認されている．

②組成

ピックアップ資料ではⅣ層～Ⅰ層を通じてイノシシ／ブタが主体であり，Ⅳ層～Ⅲ層ではウシ，Ⅲ層以上ではイヌもやや多い．ただしⅣ-4層ではイノシシ／ブタが少なく，ネズミ科，ネコ，ウシが多い．また，Ⅳ-3層ではヤギ10点（すべて同一個体の上顎臼歯），ウマ9点（このうち8点は歯）がまとまって採集されている．海獣類では，ジュゴンがⅣ-3’層～Ⅲ層で少数ながら連続的に出土している．イルカ・クジラ類はごく少ない．

水洗選別資料からの検出数は少ないが，SJW-6（Ⅳ-4層）で自然遺骸と思われるネズミ科がまとまって検出されている．

3．考察

(1) 首里城淑順門西地区の脊椎動物遺体の性格

骨の出土量は，Ⅳ-3’層付近を境としてこれより下位では少ない．なお、Ⅳ-3’層の最下部は、遺物がほとんどなかった礫層が厚く見られ、造成土と考えられている．また，組成をみても人為的な廃棄物と思われる遺体（とくに魚骨やイノシシ／ブタなどの食糧残滓）が少なく，自然遺骸と思われる小動物（カエル，ヘビ，ネズミ）が多い．これに対し，礫層より上位では人為的廃棄物が増加し，これに伴って骨の出土量も増加する．

第 75 表　首里城跡淑順門西地区から採集された脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の同定結果

分類群	部位	残存位置	I層 北 E-10-11	I層 北 F-10	I層 北 F-11・11南	I層 南 G-10-11	I層 南 H-10-11	I層 南 I-09	I層 不明	I層 合計	II層 南 G-9～11	II層 南 H-09	II層 南 H-10	II層 南 H-11	II層 南 I-09	II層 南 I-10	II層 合計	III層 南 H-10	III層 南 H-11	III層 南 I-10	III層 合計	IV-1層 北 F-11	IV-1層 北 F-11南	IV-1層 北 F-11北	合計
メジロザメ科	歯												1				1								
サメ類	歯	fr																							
サメ類	椎骨												1		1		1			3	3		2		2
トビエイ科	歯													1			1								
エイ目	楯鱗																								
オオウナギ	主上顎骨																								
ウツボ科	歯骨																								
ウツボ科	椎骨																								
アナゴ科	歯骨																								
ダツ科	歯骨																	1			1				
ダツ科	腹椎													1											
ダツ科	尾椎																								
ダツ科	椎骨																								
ノットウダイ科	前上顎骨																								
ボラ科	主鰓蓋骨																								
ボラ科	第1椎骨																								
ボラ科	腹椎																								
ボラ科	尾椎																								
ボラ科	椎骨																								
カマス科	歯骨																								
カマス科	腹椎																							1	1
ハタ科A	前上顎骨																					/ 1	2 /		0 / 3
ハタ科A	歯骨												1 /				1 / 0				1 /				1 / 0
ハタ科A	前鰓蓋骨											1 /					1 / 0								
ハタ科B	前上顎骨																								
ハタ科B	歯骨														1 /		1 / 0								
ハタ科	主上顎骨																								
ハタ科	角骨																			1 /	1 / 0	/ 1			0 / 1
ハタ科	方骨																			/ 1	0 / 1				
ハタ科	前鰓蓋骨				/ 1				0 / 1																
ハタ科	主鰓蓋骨			/ 1					0 / 1																
ハタ科	擬鎖骨											1 /					1 / 0					/ 1			0 / 1
ハタ科	第1椎骨																								
ハタ型	腹椎		2							2			1		1		2	1		1	2	3	2		5
ハタ型	尾椎		1							1				1	1		2			1	1	1		1	2
アジ科（大型種）	主上顎骨																								
アジ科（大型種）	歯骨																								
アジ科（大型種）	角骨																								
アジ科（大型種）	方骨																								
アジ科（大型種）	第1椎骨																			1	1				
アジ科（大型種）	腹椎					1				1													1		1
アジ科（大型種）	尾椎													1			1		1		1				
アジ科（大型種）	楯鱗																								
シイラ属	椎骨		1							1															
イスズミ科	前上顎骨																								
フエダイ亜科	主上顎骨																								
フエダイ亜科	前上顎骨																								
フエダイ亜科	角骨																								
フエダイ亜科	方骨																								
タカサゴ亜科？	椎骨																								
ニジョウダイ類	主上顎骨																								
ニジョウダイ類？	前上顎骨																								
マダイ亜科	歯骨																								
マダイ亜科？	方骨																								
ヘダイ	主上顎骨												/ 1				0 / 1								
ヘダイ	前上顎骨																								
ヘダイ	歯骨																								

＊残存位置の凡例：w 完存，p 近位端，m 骨幹，d 遠位端，fr 破片．(p)・(d)は未癒合の骨端のみ，(p-)・(d-)は骨端未癒合脱落，<p->・<d->は骨端のみ欠損．<>のついた値はNISPに算入していない．

第75表(つづき1)

分類群	部位	残存位置	Ⅳ-2層				Ⅳ-3層				Ⅳ-3'層				Ⅳ-4層			Ⅳ-5層	Ⅳ層					層位不明	総計
			北				北				北				北				南						
			F-11	F-11南	F-11北	合計	F-10	F-11・11南	F-11北	合計	E-10	F-10	F-11・11南北	合計	F-11	F-11北	合計	F-10	H-09	H-10	I-09	I-10	合計		
メジロザメ科	歯																								1
サメ類	歯	fr		1		1																			1
サメ類	椎骨			5	1	6	1		1	2	1			1						1			1		16
トビエイ科	歯																								1
エイ目	楯鱗			2		2			1	1															3
オオウナギ	主上顎骨										/ 1			0 / 1											0 / 1
ウツボ科	歯骨			/ 1		0 / 1																			0 / 1
ウツボ科	椎骨			2		2																			0 2 0
アナゴ科	歯骨				/ 1	0 / 1																			0 / 1
ダツ科	歯骨																								0 1 0
ダツ科	腹椎				1	1																			0 1 0
ダツ科	尾椎			1		1																			0 1 0
ダツ科	椎骨			1		1																			0 1 0
イットウダイ科	前上顎骨			1 /		1 / 0																			1 / 0
ボラ科	主鰓蓋骨		1 /	1 /		2 / 0																			2 / 0
ボラ科	第1椎骨			1		1																			1
ボラ科	腹椎			4	2	6																			6
ボラ科	尾椎			3	2	5							1	1		1	1								7
ボラ科	椎骨				1	1																			1
カマス科	歯骨		1 /			1 / 0																			1 / 0
カマス科	腹椎		2	1	1	4																			5
ハタ科A	前上顎骨			5 / 2		5 / 2			/ 2	0 / 2															5 / 7
ハタ科A	歯骨			5 / 6		5 / 6			/ 1	0 / 1															7 / 7
ハタ科A	前顎蓋骨			1 / 1		1 / 1						1 /		1 / 0											3 / 1
ハタ科B	前上顎骨			1 /		1 / 0			/ 1	0 / 1									1 / 1				1 / 1		2 / 2
ハタ科B	歯骨																								1 / 0
ハタ科	主上顎骨			3 / 1		3 / 1					1 /			1 / 0		1 /	1 / 0								5 / 1
ハタ科	角骨			1 / 1	1	1 / 2																			2 / 3
ハタ科	方骨			5 / 1		5 / 1			1 / 1	1 / 1	/ 1			0 / 1											6 / 4
ハタ科	前鰓蓋骨																								0 / 1
ハタ科	主鰓蓋骨			/ 1	2	0 / 3													1 /				1 / 0		1 / 4
ハタ科	擬鎖骨			2 / 3		2 / 3																			3 / 4
ハタ科	第1椎骨			1		1					1			1											2
ハタ型	腹椎			44	2	46		1	1	2	1			1						1	1		2		62
ハタ型	尾椎	1		25		26					2			2		1	1		1		2		3		38
アジ科(大型種)	主上顎骨			/ 2		0 / 2																			0 / 2
アジ科(大型種)	歯骨																							/ 1	0 / 1
アジ科(大型種)	角骨			/ 2		0 / 2																			0 / 2
アジ科(大型種)	方骨			2 / 1		2 / 1																			2 / 1
アジ科(大型種)	第1椎骨			1		1																			2
アジ科(大型種)	腹椎			16		16																			18
アジ科(大型種)	尾椎			6	3	9					1			1						1	1		2		14
アジ科(大型種)	楯鱗			< 1 >		< 1 >																			< 1 >
シイラ属	椎骨																								1
イスズミ科	前上顎骨		/ 1			0 / 1																			0 / 1
フエダイ亜科	主上顎骨			/ 1		0 / 1			1 /	1 / 0															1 / 1
フエダイ亜科	前上顎骨								/ 1	0 / 1															0 / 1
フエダイ亜科	角骨			1 /		1 / 0							1 /	1 / 0											2 / 0
フエダイ亜科	方骨			/ 1		0 / 1																			0 / 1
タカサゴ亜科？	椎骨			1		1																			1
コショウダイ類	主上顎骨			1 /		1 / 0																			1 / 0
コショウダイ類？	前上顎骨			1 /		1 / 0																			1 / 0
マダイ亜科	歯骨			/ 1		0 / 1																			0 / 1
マダイ亜科？	方骨			1 /		1 / 0																			1 / 0
ヘダイ	主上顎骨																								0 / 1
ヘダイ	前上顎骨			1 /		1 / 0			/ 1	0 / 1															1 / 1
ヘダイ	歯骨			/ 2		0 / 2																			0 / 2

第75表（つづき2）

分類群	部位	残存位置	Ⅰ層								Ⅱ層							Ⅲ層				Ⅳ-1層			
			北			南			不明	合計	南						合計	南			合計	北			合計
			E-10・11	F-10	F-11・11南	G-10・11	H-10・11	I-09			G-9～11	H-09	H-10	H-11	I-09	I-10		H-10	H-11	I-10		F-11	F-11南	F-11北	
クロダイ属	主上顎骨																								
クロダイ属	前上顎骨																								
クロダイ属	歯骨																								
クロダイ属	角骨												1 /				0 / 1								
クロダイ属	方骨																								
クロダイ属	口蓋骨																						1 /		1 / 0
クロダイ属	主鰓蓋骨																								
タイ型	腹椎														1		1								
タイ型	尾椎											1	3		1		5			1	1		2	2	4
タイ型	椎骨								1	1															
ヨコシマクロダイ	歯骨																								
フエフキダイ属（アマミフエフキ型）	前上顎骨																		/ 1		0 / 1				
フエフキダイ属（ハマフエフキ型）	前上顎骨							1 / 1		1 / 1			1 /				1 / 0			/ 1	0 / 1	/ 1	/ 1		0 / 2
フエフキダイ属	方骨												/ 1				0 / 1			1 / 1	1 / 1				
フエフキダイ属	口蓋骨							/ 1		0 / 1			1 /				1 / 0			/ 1	0 / 1				
フエフキダイ科	主上顎骨							1 /		1 / 0	/ 1						0 / 1		/ 1	1 /	1 / 1			/ 1	0 / 1
フエフキダイ科	前上顎骨											1 /	/ 1				1 / 1				0 / 0				
フエフキダイ科	歯骨							/ 3		0 / 3			1 /				1 / 0				0 / 0			/ 1	0 / 1
フエフキダイ科	角骨											1 /	1 / 2				2 / 2			1 /	1 / 0				
フエフキダイ科	前鰓蓋骨							2 /		2 / 0									/ 1	/ 1	0 / 2		1 /		1 / 0
フエフキダイ科	主鰓蓋骨	1 /						/ 1		1 / 1			/ 1				0 / 1		/ 1	/	0 / 1				
フエフキダイ科	第1椎骨																								
フエフキダイ科	腹椎												4		2		6	1			1				
シロクラベラ型	上咽頭骨																								
シロクラベラ型	下咽頭骨																					1	1		2
シロクラベラ型	第1椎骨																								
シロクラベラ型	腹椎												1				1								
シロクラベラ型	尾椎										1				1		2	1			1	3	1		4
タキベラ型	下咽頭骨												1				1								
ベラ科B	上咽頭骨																								
ベラ科B	下咽頭骨							1		1															
コブダイ型	腹椎																								
コブダイ型	尾椎																								
ベラ科	上咽頭骨												/ 1				0 / 1								
ベラ科	主上顎骨																								
ベラ科	前上顎骨											1 /				/ 1	1 / 1								
ベラ科	歯骨							/ 1		0 / 1															
ベラ科	前上顎／歯骨												1				1								
ベラ科	角骨											1 /					1 / 0								
ベラ科	方骨																								
アオブダイ属	上咽頭骨																								
アオブダイ属	下咽頭骨					1				1															
ブダイ科	主上顎骨																								
ブダイ科	前上顎骨																								
ブダイ科	歯骨			/ 1						0 / 1			1 / 1		/ 1		1 / 2					1 /			1 / 0
ブダイ科	角骨																					1 /			1 / 0
ブダイ科	方骨																								
ブダイ科	主鰓蓋骨																								
ブダイ科	第1椎骨																								
ブダイ科	腹椎												2				2						1	1	2
ブダイ科	尾椎			1	2					3			5		1		6			1	1		1	2	3
ソウダガツオ属	椎骨																								
スマ	尾椎																								
カツオ／マグロ類	尾椎（尾柄部）																								
タチウオ科	前上顎骨																								
タチウオ科	方骨																								
ニザダイ科	舌顎骨												/ 1				0 / 1								
ニザダイ科	擬鎖骨																								

第75表(つづき3)

分類群	部位	残存位置	Ⅳ-2層				Ⅳ-3層				Ⅳ-3'層				Ⅳ-4層			Ⅳ-5層	Ⅳ層					層位不明	総計
			北			合計	北			合計	北			合計	北		合計	北	南				合計		
			F-11	F-11南	F-11北		F-10	F-11・11南	F-11北		E-10	F-10	F-11・11南北		F-11	F-11北		F-10	H-09	H-10	I-09	I-10			
クロダイ属	主上顎骨		1 /	/ 1		1 / 1						1 /		1 / 0											2 / 1
クロダイ属	前上顎骨		/ 1	3 / 4	1 /	4 / 5			/ 2	0 / 2															4 / 7
クロダイ属	歯骨			3 / 5	/ 4	3 / 9						1 /		1 / 0											4 / 9
クロダイ属	角骨			2 / 1		2 / 1						/ 1		0 / 1											2 / 3
クロダイ属	方骨			2 / 2		2 / 2			1 /	1 / 0															3 / 2
クロダイ属	口蓋骨			1 /		1 / 0																			2 / 0
クロダイ属	主鰓蓋骨			2 /		2 / 0																			2 / 0
タイ型	腹椎			36	4	40			1	1									1				1		43
タイ型	尾椎		1	66	7	74		1	3	4	1	5	1	7		1	1		1		2		3		99
タイ型	椎骨																								1
ヨコシマクロダイ	歯骨			1 /		1 / 0																			1 / 0
フエフキダイ属(アマミフエフキ型)	前上顎骨			/ 1	1 /	1 / 1															1 /		1 / 0		2 / 2
フエフキダイ属(ハマフエフキ型)	前上顎骨			7 / 3	/ 4	7 / 7		1 /	/ 1	1 / 1	/ 1	1 /		1 / 1					/ 3	/ 1			0 / 4		11 / 17
フエフキダイ属	方骨			7 / 6	1 /	8 / 6			1 / 2	1 / 2															10 / 10
フエフキダイ属	口蓋骨			9 / 6		9 / 6			1 / 1	1 / 1		1 / 1		1 / 1					2 /				2 / 0		14 / 10
フエフキダイ科	主上顎骨			4 / 10	/ 1	4 / 11			1 / 1	1 / 1		/ 2		0 / 2						1 /	/ 1		1 / 1		8 / 18
フエフキダイ科	前上顎骨			/ 1		0 / 1			1 /	1 / 0									1 /				1 / 0		3 / 2
フエフキダイ科	歯骨			8 / 5		8 / 5	1 /			1 / 0												/ 1	0 / 1	1 /	11 / 10
フエフキダイ科	角骨			7 / 5	1 / 1	8 / 6			1 /	1 / 0						/ 1	0 / 1		1 /				1 / 0		13 / 9
フエフキダイ科	前鰓蓋骨			2 / 6		2 / 6	2 /			2 / 0	1	1 /		2 / 0								1 /	1 / 0	/ 1	10 / 9
フエフキダイ科	主鰓蓋骨			3 / 2		3 / 2													/ 1				0 / 1		4 / 6
フエフキダイ科	第1椎骨			7		7			1	1															8
フエフキダイ科	腹椎			27	6	33			2	2												1	1		43
シロクラベラ型	上咽頭骨			3 / 3		3 / 3																			3 / 3
シロクラベラ型	下咽頭骨			2	1	3																			5
シロクラベラ型	第1椎骨			3		3																			3
シロクラベラ型	腹椎		1	25	2	28			1	1															30
シロクラベラ型	尾椎		2	44	1	47			1	1											1	1	2		57
タキベラ型	下咽頭骨																								1
ベラ科B	上咽頭骨			1 /		1 / 0																			1 / 0
ベラ科B	下咽頭骨																								1
コブダイ型	腹椎			3	3	6		1		1															7
コブダイ型	尾椎		1	2		3																			3
ベラ科	上咽頭骨			1 / 1		1 / 1																			1 / 2
ベラ科	主上顎骨		/ 1	/ 2		0 / 3																			0 / 3
ベラ科	前上顎骨			2 / 3	/ 1	2 / 4		1 /		1 / 0		1 /		1 / 0											5 / 5
ベラ科	歯骨			4 / 3	/ 1	4 / 4																			4 / 5
ベラ科	前上顎／歯骨			3	1	4																			5
ベラ科	角骨			5 / 3		5 / 3																			6 / 3
ベラ科	方骨			3 /		3 / 0														1 /			1 / 0		4 / 0
アオブダイ属	上咽頭骨		1 /	/ 2		1 / 2																			1 / 2
アオブダイ属	下咽頭骨			3	1	4			2	2		1		1											8
ブダイ科	主上顎骨			4 / 10	1 / 1	5 / 11					/ 1			0 / 1											5 / 12
ブダイ科	前上顎骨			10 / 15	1 /	11 / 15			1 / 1	1 / 1										1 /			1 / 0		13 / 16
ブダイ科	歯骨			8 / 9		8 / 9			1 / 1	1 / 1	2 /			2 / 0											13 / 13
ブダイ科	角骨		1 /	3 / 1		4 / 1			1 /	1 / 0															6 / 1
ブダイ科	方骨		3 /	3 / 1		6 / 1																			6 / 1
ブダイ科	主鰓蓋骨			1 / 2		1 / 2			1 / 1	1 / 1															2 / 4
ブダイ科	第1椎骨			6		6			1	1															7
ブダイ科	腹椎		2	64	7	73			11	11	1	2		3											91
ブダイ科	尾椎		7	87	15	109			11	11	1	1		2		1	1				3	1	4		140
ソウダガツオ	椎骨																				1		1		1
スマ	尾椎		1	4		5									Ⅳ-3層F-11北と接合										5
カツオ／マグロ類	尾椎(尾柄部)			3		3									↓										3
タチウオ科	前上顎骨			1 /		1 / 0			/ 1	0 / 1	1 /			1 / 0	+		+								2 / 1
タチウオ科	方骨				/ 1	0 / 1			1 / 1	1 / 1															1 / 2
ニザダイ科	舌顎骨																								0 / 1
ニザダイ科	擬鎖骨			/ 1		0 / 1																			0 / 1

第75表(つづき4)

分類群	部位	残存位置	Ⅰ層								Ⅱ層							Ⅲ層				Ⅳ-1層			
			北			南			不明	合計	南						合計	南			合計	北			合計
			E-10・11	F-10	F-11・11南	G-10・11	H-10・11	I-09			G-9～11	H-09	H-10	H-11	I-09	I-10		H-10	H-11	I-10		F-11	F-11南	F-11北	
ニザダイ科	腹椎												1				1								
ニザダイ科	尾椎												1				1								
ニザダイ科	楯鱗																								
アイゴ属	前頭骨																								
アイゴ属	歯骨																								
アイゴ属	舌顎骨																								
アイゴ属	腹椎																								
アイゴ属	尾椎																								
コチ科	主上顎骨																								
モンガラカワハギ科	擬鎖骨																								
モンガラカワハギ科	腹椎																								
モンガラカワハギ科	尾椎																								
真骨類(未同定)	主上顎骨																								
真骨類(未同定)	前上顎骨																								
真骨類(未同定)	歯骨																						1		0 / 1
真骨類(未同定)	角骨																								
真骨類(未同定)	方骨															/ 1	0 / 1								
真骨類(未同定)	第1椎骨																			1	1				
真骨類(未同定)	腹椎			1						1															
真骨類(保留)	前頭骨																								
真骨類(保留)	主上顎骨																								
真骨類(保留)	前鰓蓋骨？	棘																							
真骨類(保留)	第1椎骨																			1	1				
真骨類(保留)	椎骨											1	2		1		4			2	2		1		1
真骨類(同定不可)	方骨											2					2								
真骨類(同定不可)	主鰓蓋骨																								
真骨類(同定不可)	椎骨												2		1		3			1	1	2			2
真骨類(同定不可)	鱗																								
アオウミガメ	下顎骨																								
ウミガメ類	前鳥口骨																								
ウミガメ類	橈骨								/ 1	0 / 1															
ウミガメ類	大腿骨	m																							
ウミガメ類	甲板	fr																							
ヘビ類	椎骨																								
ニワトリ	頭蓋骨																								
ニワトリ	切歯骨																								
ニワトリ	複合仙骨																					2			2
ニワトリ	胸骨																								
ニワトリ	烏口骨												1 /				1 / 0								
ニワトリ	肩甲骨																					/ 1		2 /	2 / 1
ニワトリ	上腕骨	w																					1 /		1 / 0
ニワトリ	上腕骨	p																							
ニワトリ	上腕骨	p-<d->									1 /						1 / 0		/ 1		0 / 1				
ニワトリ	上腕骨	<p->																							
ニワトリ	上腕骨	<p->-d																				/ 1	/ 1		0 / 2
ニワトリ	上腕骨	m-<d->																							
ニワトリ	上腕骨	<d->											/ 1				0 / 1								
ニワトリ	上腕骨	d																							
ニワトリ	橈骨	p																							
ニワトリ	橈骨	m																							
ニワトリ	橈骨	m-d																					/ 1		0 / 1
ニワトリ	橈骨	d											1 /				1 / 0								
ニワトリ	尺骨	w																							
ニワトリ	尺骨	p																		/ 1	0 / 1			1 /	1 / 0
ニワトリ	尺骨	p-m																							
ニワトリ	尺骨	p-<d->																							
ニワトリ	尺骨	m-d																		/ 1	0 / 1				
ニワトリ	尺骨	d																							

第75表(つづき5)

分類群	部位	残存位置	Ⅳ-2層				Ⅳ-3層				Ⅳ-3'層				Ⅳ-4層			Ⅳ-5層	Ⅳ層					層位不明	総計
			北			合計	北			合計	北			合計	北		合計	北	南				合計		
			F-11	F-11南	F-11北		F-10	F-11・11南	F-11北		E-10	F-10	F-11・11南北		F-11	F-11北		F-10	H-09	H-10	I-09	I-10			
ニザダイ科	腹椎			4		4			1	1		1		1											7
ニザダイ科	尾椎		1	2		3		1	3	4	1			1											9
ニザダイ科	楯鱗			〈 2 〉	〈 1 〉	〈 3 〉			〈 1 〉	〈 1 〉		〈 1 〉		〈 1 〉											〈 5 〉
アイゴ属	前頭骨			1 / 1		1 / 1																			1 / 1
アイゴ属	歯骨								1 /	1 / 0															1 / 0
アイゴ属	舌顎骨								/ 1	0 / 1															0 / 1
アイゴ属	腹椎			4	2	6																			6
アイゴ属	尾椎			4		4														1		1			5
コチ科	主上顎骨			1 /		1 / 0																			1 / 0
モンガラカワハギ科	擬鎖骨			/ 1		0 / 1																			0 / 1
モンガラカワハギ科	腹椎								1	1															1
モンガラカワハギ科	尾椎			1		1																			1
真骨類(未同定)	主上顎骨			/ 1	1 /	1 / 1																			1 / 1
真骨類(未同定)	前上顎骨			1 /		1 / 0																			1 / 0
真骨類(未同定)	歯骨																		1 /				1 / 0		1 / 1
真骨類(未同定)	角骨										/ 1			0 / 1											0 / 1
真骨類(未同定)	方骨			/ 1		0 / 1																			0 / 2
真骨類(未同定)	第1椎骨																								1
真骨類(未同定)	腹椎				2	2			1	1						1	1								5
真骨類(保留)	前頭骨			1		1																			1
真骨類(保留)	主上顎骨			1 /		1 / 0																			1 / 0
真骨類(保留)	前鰓蓋骨？	棘		1		1																			1
真骨類(保留)	第1椎骨																								1
真骨類(保留)	椎骨		5	85	9	99			5	5	1			1		1	1	1		1			1		115
真骨類(同定不可)	方骨																								2
真骨類(同定不可)	主鰓蓋骨			2		2																			2
真骨類(同定不可)	椎骨		4	59	5	68			5	5	1	3	1	5					1				1		85
真骨類(同定不可)	鱗		〈 17 〉	〈 132 〉		〈 149 〉			〈 7 〉	〈 7 〉		〈 2 〉		〈 2 〉											〈 158 〉
アオウミガメ	下顎骨										1			1											1
ウミガメ類	前鳥口骨																							/ 1	0 / 1
ウミガメ類	橈骨																								0 / 1
ウミガメ類	大腿骨	m							1 /	1 / 0															1 / 0
ウミガメ類	甲板	fr		1		1																			1
ヘビ類	椎骨			63	7	70			1	1						1	1								72
ニワトリ	頭蓋骨		1			1																		1	2
ニワトリ	切歯骨			2		2																			2
ニワトリ	複合仙骨			9		9		1		1															12
ニワトリ	胸骨											1		1											1
ニワトリ	烏口骨			11 / 4	2 / 1	13 / 5													/ 1				0 / 1		14 / 6
ニワトリ	肩甲骨			3 / 2	/ 1	3 / 3																			5 / 4
ニワトリ	上腕骨	w																							1 / 0
ニワトリ	上腕骨	p		/ 1		0 / 1																			0 / 1
ニワトリ	上腕骨	p-〈d-〉																							1 / 1
ニワトリ	上腕骨	〈p-〉											1 /	1 / 1											1 / 0
ニワトリ	上腕骨	〈p-〉-d		/ 1		0 / 1																			0 / 3
ニワトリ	上腕骨	m-〈d-〉		1 /		1 / 0																			1 / 0
ニワトリ	上腕骨	〈d-〉		/ 4		0 / 4																			0 / 5
ニワトリ	上腕骨	d		/ 2	2 /	2 / 2																			2 / 2
ニワトリ	橈骨	p		2 / 1	/ 1	2 / 2																			2 / 2
ニワトリ	橈骨	m		1 /		1 / 0																			1 / 0
ニワトリ	橈骨	m-d																							0 / 1
ニワトリ	橈骨	d		1 / 2		1 / 2			/ 1	0 / 1															2 / 3
ニワトリ	尺骨	w		1 /		1 / 0																			1 / 0
ニワトリ	尺骨	p		3 / 4		3 / 4			/ 1	0 / 1															4 / 6
ニワトリ	尺骨	p-m		/ 1		0 / 1						/ 1		0 / 1											0 / 2
ニワトリ	尺骨	p-〈d-〉		2 /		2 / 0																			2 / 0
ニワトリ	尺骨	m-d		4 / 1		4 / 1														1 /			1 / 0		5 / 2
ニワトリ	尺骨	d		1 / 2		1 / 2			/ 1	0 / 1															1 / 3

第75表(つづき6)

分類群	部位	残存位置	Ⅰ層						不明	合計	Ⅱ層						合計	Ⅲ層			合計	Ⅳ-1層			合計
			北			南					南							南				北			
			E-10・11	F-10	F-11・11南	G-10・11	H-10・11	I-09			G-9～11	H-09	H-10	H-11	I-09	I-10		H-10	H-11	I-10		F-11	F-11南	F-11北	
ニワトリ	中手骨	w																							
ニワトリ	中手骨	p																							
ニワトリ	中手骨	m-d																							
ニワトリ	中手骨	d											/ 1				0 / 1								
ニワトリ	寛骨	臼																				/ 1			0 / 1
ニワトリ	大腿骨	w																							
ニワトリ	大腿骨	p																				⋮ /			1 / 0
ニワトリ	大腿骨	p-m																							
ニワトリ	大腿骨	<d->																							
ニワトリ	大腿骨	m-d																	1 /		1 / 0				
ニワトリ	大腿骨	d											1 /				1 / 0		/ 2		0 / 2		/ 1		0 / 1
ニワトリ	脛骨	p					/ 1			0 / 1									/ 1		0 / 1				
ニワトリ	脛骨	p-m																							
ニワトリ	脛骨	<p->																							
ニワトリ	脛骨	<p->-<d->																							
ニワトリ	脛骨	m-<d->																	1 /		1 / 0				
ニワトリ	脛骨	<d->																				⋮ /			1 / 0
ニワトリ	脛骨	d																		1 /	1 / 0				
ニワトリ	中足骨	w											/ 1				0 / 1								
ニワトリ	中足骨	p																							
ニワトリ	中足骨	p-m																							
ニワトリ	中足骨	p-<d->											/ 1				0 / 1								
ニワトリ	中足骨	<p->																	1 /		1 / 0				
ニワトリ	中足骨	<p->-m																					1 /		1 / 0
ニワトリ	中足骨	m																							
ニワトリ	中足骨	m-<d->																				⋮ /			1 / 0
ニワトリ	中足骨	<d->																							
ニワトリ	中足骨	d																							
鳥類(同定不可)	椎骨																								
鳥類(同定不可)	上腕骨	m											/ 1				0 / 1								
鳥類(同定不可)	橈骨	p																							
鳥類(同定不可)	橈骨	p-m		1						1															
鳥類(同定不可)	橈骨	m																				1			1
鳥類(同定不可)	尺骨	m														1	1								
鳥類(同定不可)	大腿骨	m											1 /				1 / 0						2		2
鳥類(同定不可)	脛骨	m	/ 1			/ 1				0 / 2			1 /				1 / 0		/ 1		0 / 1	2 /		1	2 1
鳥類(同定不可)	脛骨	<d->																							
鳥類(同定不可)	中足骨	m																				/ 2	2		2 2
鳥類(同定不可)	中足骨	dfr																							
鳥類(同定不可)	指骨												1				1								
鳥類？(同定不可)	四肢骨	m																							
ジャコウネズミ	頭蓋骨	上顎																							
ネズミ亜科	上顎骨																								
ネズミ亜科	下顎骨																								
ネズミ科	上顎I																								
ネズミ科	下顎I																								
ネズミ科	上腕骨																							/ 1	0 / 1
ネズミ科	寛骨																							1 /	1 / 0
ネズミ科	大腿骨				1 /					1 / 0															
ネズミ科	脛骨																								
イヌ	上顎I3												/ 1				0 / 1								
イヌ	下顎骨	第76表参照																					/ 1		0 / 1
イヌ	下顎M1												1 /				1 / 0								
イヌ	軸椎																								
イヌ	頸椎																		1		1				
イヌ	上腕骨	m-<d->																							
イヌ	橈骨	(p-)		1 /						1 / 0										/ 1	0 / 1				
イヌ	橈骨	m																							

第75表(つづき7)

分類群	部位	残存位置	Ⅳ-2層				Ⅳ-3層				Ⅳ-3'層				Ⅳ-4層			Ⅳ-5層	Ⅳ層					層位不明	総計
			北				北				北				北				南						
			F-11	F-11南	F-11北	合計	F-10	F-11・11南	F-11北	合計	E-10	F-10	F-11・11南北	合計	F-11	F-11北	合計	F-10	H-09	H-10	I-09	I-10	合計		
ニワトリ	中手骨	w		1 /		1 / 0																			1 / 0
ニワトリ	中手骨	p		/ 1		0 / 1																			0 / 1
ニワトリ	中手骨	m-d		1 /		1 / 0																			1 / 0
ニワトリ	中手骨	d		/ 1		0 / 1																			0 / 2
ニワトリ	寛骨	臼		2 / 1	/ 1	2 / 2		1 / 1	1 /	2 / 1															4 / 4
ニワトリ	大腿骨	w		1 / 1		1 / 1																			1 / 1
ニワトリ	大腿骨	p		/ 3	1 /	1 / 3			/ 1	0 / 1															2 / 4
ニワトリ	大腿骨	p-m		2 /	1 /	3 / 0																1 /	1 / 0		4 / 0
ニワトリ	大腿骨	〈d-〉		/	/ 1	0 / 1																			0 / 1
ニワトリ	大腿骨	m-d																							1 / 0
ニワトリ	大腿骨	d		2 / 2		2 / 2																			3 / 5
ニワトリ	脛骨	p		3 / 1		3 / 1																			3 / 3
ニワトリ	脛骨	p-m		/ 1		0 / 1																			0 / 1
ニワトリ	脛骨	〈p-〉																						/ 1	0 / 1
ニワトリ	脛骨	〈p-〉-〈d-〉		/ 1		0 / 1																			0 / 1
ニワトリ	脛骨	m-〈d-〉									1 /			1 / 0											2 / 0
ニワトリ	脛骨	〈d-〉										1 /		1 / 0											2 / 0
ニワトリ	脛骨	d	/ 1	1 / 7		1 / 8			1 /	1 / 0									/ 1			0 / 1			3 / 9
ニワトリ	中足骨	w			/ 2	0 / 2																			0 / 3
ニワトリ	中足骨	p		2 / 4		2 / 4																			2 / 4
ニワトリ	中足骨	p-m		2 /		2 / 0																			2 / 0
ニワトリ	中足骨	p-〈d-〉																							0 / 1
ニワトリ	中足骨	〈p-〉																							1 / 0
ニワトリ	中足骨	〈p-〉-m																							1 / 0
ニワトリ	中足骨	m		1 1		1 1 0						1 /		1 / 0											2 1 0
ニワトリ	中足骨	m-〈d-〉		1 /		1 / 0																			2 / 0
ニワトリ	中足骨	〈d-〉		/ 4		0 / 4																			0 / 4
ニワトリ	中足骨	d		2 / 2	2 /	4 / 2																			4 / 2
鳥類(同定不可)	椎骨		4	5	5	14																			14
鳥類(同定不可)	上腕骨	m		3	1	1 3																			1 3 1
鳥類(同定不可)	橈骨	p		1		1																			1
鳥類(同定不可)	橈骨	p-m																							1
鳥類(同定不可)	橈骨	m																							1
鳥類(同定不可)	尺骨	m		2		2																			3
鳥類(同定不可)	大腿骨	m		2		2																			1 4 0
鳥類(同定不可)	脛骨	m		3		3													1			1			3 5 3
鳥類(同定不可)	脛骨	〈d-〉		2		2			3 /	3 / 0															3 2 0
鳥類(同定不可)	中足骨	m		1		1																			0 3 2
鳥類(同定不可)	中足骨	dfr		1		1																			1
鳥類(同定不可)	指骨			16	2	18					1			1											20
鳥類?(同定不可)	四肢骨	m		20		20																			20
ジャコウネズミ	頭蓋骨	上顎		2		2																			2
ネズミ亜科	上顎骨											1 /		1 / 0											1 / 0
ネズミ亜科	下顎骨				/ 1	0 / 1					/ 1			0 / 1		1 / 2	1 / 2								1 / 4
ネズミ科	上顎I															1 /	1 / 0								1 / 0
ネズミ科	下顎I															/ 1	0 / 1								0 / 1
ネズミ科	上腕骨			1 /	1 /	2 / 0			1 /	1 / 0						1 / 1	1 / 1								4 / 2
ネズミ科	寛骨				/ 1	0 / 1			/ 1	0 / 1						1 / 1	1 / 1								2 / 3
ネズミ科	大腿骨				1 / 1	1 / 1			/ 1	0 / 1						3 / 3	3 / 3								5 / 5
ネズミ科	脛骨				1 /	1 / 0										2 /	2 / 0								3 / 0
イヌ	上顎I3																								0 / 1
イヌ	下顎骨	第76表参照		1 /		1 / 0																			1 / 1
イヌ	下顎M1																								1 / 0
イヌ	軸椎								1	1															1
イヌ	頸椎																								1
イヌ	上腕骨	m-〈d-〉													1 /		1 / 0								1 / 0
イヌ	橈骨	(p-)																							1 / 0
イヌ	橈骨	m																							0 / 1

第75表(つづき8)

分類群	部位	残存位置	Ⅰ層								Ⅱ層							Ⅲ層				Ⅳ-1層			
			北			南			不明	合計	南						合計	南			合計	北			合計
			E-10・11	F-10	F-11・11南	G-10・11	H-10・11	I-09			G-9～11	H-09	H-10	H-11	I-09	I-10		H-10	H-11	I-10		F-11	F-11南	F-11北	
イヌ	尺骨	m	1							1															
イヌ	中手骨	w																							
イヌ	寛骨(座骨)	臼																							
イヌ	大腿骨	m			/ 1					0 / 1															
イヌ	大腿骨	<d>																							
イヌ	脛骨	<p>-d																							
イヌ	踵骨						1 /			1 / 0															
ネコ	上顎骨																								
ネコ	上顎C																								
ネコ	下顎骨																								
ネコ	下顎骨	関節突起																							
ネコ	尺骨	<p>																							
ネコ	踵骨																								
ブタ	下顎骨	第78表参照																							
ブタ	第3中手骨	p					/ 1			0 / 1															
ブタ	基節骨																								
ブタ	末節骨																								
イノシシ/ブタ	涙骨																								
イノシシ/ブタ	頬骨																								
イノシシ/ブタ	前頭骨																								
イノシシ/ブタ	頭頂骨							1 /		1 / 0															
イノシシ/ブタ	側頭骨	関節結節																							
イノシシ/ブタ	後頭骨	後頭顆																				1 /	1 / 1		2 / 1
イノシシ/ブタ	後頭骨	後頭顆－頚静脈突起																							
イノシシ/ブタ	後頭骨	頚静脈突起																					1 /	1 /	2 / 0
イノシシ/ブタ	切歯骨	第77表参照											1 / 1				1 / 1								
イノシシ/ブタ	上顎骨	第77表参照																				/ 1			0 / 1
イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	第77表参照				/ 1				0 / 1			/ 1				0 / 1					1 /	1 /		2 / 0
イノシシ/ブタ	下顎骨	第78表参照	1 /					/ 1		1 / 1													1 1 2	1 /	2 1 2
イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	第78表参照	1 /		1 / 1			1 / 2		3 / 3		/ 1	/ 1				0 / 2					1 / 2	/ 1		1 / 3
イノシシ/ブタ	環椎																			1	1				
イノシシ/ブタ	軸椎																								
イノシシ/ブタ	頸椎																								
イノシシ/ブタ	頸椎	棘突起																							
イノシシ/ブタ	胸椎	棘突起																							
イノシシ/ブタ	腰椎																					1			1
イノシシ/ブタ	腰椎	棘突起																				1			1
イノシシ/ブタ	仙椎																					1			1
イノシシ/ブタ	肩甲骨	関節部											1 /				1 / 0						/ 1		0 / 1
イノシシ/ブタ	肩甲骨	関節欠																				1 /			1 / 0
イノシシ/ブタ	上腕骨	(p)																							
イノシシ/ブタ	上腕骨	(p-)-d																					1 /		1 / 0
イノシシ/ブタ	上腕骨	<p->-d																							
イノシシ/ブタ	上腕骨	m-<d>		/ 1			/ 1			0 / 2												2 /			2 / 0
イノシシ/ブタ	上腕骨	m-(d-)																	1 /		1 / 0		/ 1		0 / 1
イノシシ/ブタ	上腕骨	m-d																							
イノシシ/ブタ	上腕骨	(d-)																							
イノシシ/ブタ	上腕骨	(d)																						/ 1	0 / 1
イノシシ/ブタ	橈骨	w																							
イノシシ/ブタ	橈骨	p-m													1 /		1 / 0								
イノシシ/ブタ	橈骨	p-<d>																				1 /		1 /	2 / 0
イノシシ/ブタ	橈骨	p-(d-)																				1 /			1 / 0
イノシシ/ブタ	橈骨	(p-)-(d-)																							
イノシシ/ブタ	橈骨	m										/ 1					0 / 1								
イノシシ/ブタ	尺骨	p																				1 /			1 / 0
イノシシ/ブタ	尺骨	p-m																							
イノシシ/ブタ	尺骨	(p-)-m																				1 /			1 / 0
イノシシ/ブタ	尺骨	(p-)-(d-)																							

第75表(つづき9)

分類群	部位	残存位置	Ⅳ-2層				Ⅳ-3層				Ⅳ-3'層				Ⅳ-4層			Ⅳ-5層	Ⅳ層					層位不明	総計
			北			合計	北			合計	北			合計	北		合計	北	南				合計		
			F-11	F-11南	F-11北		F-10	F-11・11南	F-11北		E-10	F-10	F-11・11南北		F-11	F-11北		F-10	H-09	H-10	I-09	I-10			
イヌ	尺骨	m																							1
イヌ	中手骨	w														1 /	1 / 0								1 / 0
イヌ	寛骨(座骨)	臼		/ 1		0 / 1																			0 / 1
イヌ	大腿骨	m																							0 / 1
イヌ	大腿骨	<d>		1 /		1 / 0																			1 / 0
イヌ	脛骨	<p>-d							/ 1	0 / 1															0 / 1
イヌ	踵骨																								1 / 0
ネコ	上顎骨															1 /	1 / 0								1 / 0
ネコ	上顎C			1 /		1 / 0																			1 / 0
ネコ	下顎骨															2 / 1	2 / 1								2 / 1
ネコ	下顎骨	関節突起														2 / 1	2 / 1								2 / 1
ネコ	尺骨	<p>														/ 1	0 / 1								0 / 1
ネコ	踵骨															1 /	1 / 0								1 / 0
ブタ	下顎骨	第78表参照		1 / 2	1 /	2 / 2			1 /	1 / 0															3 / 2
ブタ	第3中手骨	p																							0 / 1
ブタ	基節骨															1	1								1
ブタ	末節骨																					1	1		1
イノシシ/ブタ	涙骨			/ 2	1	0 1 2																			0 1 2
イノシシ/ブタ	頬骨							1 /	/ 1	1 / 1												1 / 1	1 / 1		2 / 2
イノシシ/ブタ	前頭骨			1 /		1 / 0																			1 / 0
イノシシ/ブタ	頭頂骨																			1			1		1 1 0
イノシシ/ブタ	側頭骨	関節結節		1 / 1		1 / 1																			1 / 1
イノシシ/ブタ	後頭骨	後頭顆																							2 / 1
イノシシ/ブタ	後頭骨	後頭顆－頚静脈突起																	/ 1				0 / 1		0 / 1
イノシシ/ブタ	後頭骨	頚静脈突起																							2 / 0
イノシシ/ブタ	切歯骨	第77表参照		1 /		1 / 0		/ 1		0 / 1															2 / 2
イノシシ/ブタ	上顎骨	第77表参照		1 / 1		1 / 1		/ 1		0 / 1															1 / 3
イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	第77表参照	/ 1	6 2 4	1 /	7 2 5			/ 1	0 / 1															9 2 8
イノシシ/ブタ	下顎骨	第78表参照		3 / 2	1 /	4 / 2																			7 1 5
イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	第78表参照	1	11 2 9	2 / 5	13 3 14		/ 1	/ 2	0 / 3			/ 1	0 / 1										1 1	17 4 27
イノシシ/ブタ	環椎			4	3	7																			8
イノシシ/ブタ	軸椎			2		2																			2
イノシシ/ブタ	頸椎			6		6																			6
イノシシ/ブタ	頸椎	棘突起			1	1																			1
イノシシ/ブタ	胸椎	棘突起						1		1															1
イノシシ/ブタ	腰椎																								1
イノシシ/ブタ	腰椎	棘突起																							1
イノシシ/ブタ	仙椎			2		2					1	1		2											5
イノシシ/ブタ	肩甲骨	関節部	/ 1	5 /		5 / 1													/ 1				0 / 1		6 / 3
イノシシ/ブタ	肩甲骨	関節欠			1 /	1 / 0																			2 / 0
イノシシ/ブタ	上腕骨	(p)											/ 1	0 / 1											0 / 1
イノシシ/ブタ	上腕骨	(p-)-d																							1 / 0
イノシシ/ブタ	上腕骨	<p->-d			1 /	1 / 0																			1 / 0
イノシシ/ブタ	上腕骨	m-<d->																							2 / 2
イノシシ/ブタ	上腕骨	m-(d-)																							1 / 1
イノシシ/ブタ	上腕骨	m-d			/ 1	0 / 1																			0 / 1
イノシシ/ブタ	上腕骨	(d-)		1 /		1 / 0																			1 / 0
イノシシ/ブタ	上腕骨	(d)																							0 / 1
イノシシ/ブタ	橈骨	w		1 /		1 / 0																			1 / 0
イノシシ/ブタ	橈骨	p-m		/ 1		0 / 1														/ 1			0 / 1		1 / 2
イノシシ/ブタ	橈骨	p-<d->		/ 1		0 / 1																			2 / 1
イノシシ/ブタ	橈骨	p-(d-)						/ 1		0 / 1															1 / 1
イノシシ/ブタ	橈骨	(p-)-(d-)		1 /		1 / 0																			1 / 0
イノシシ/ブタ	橈骨	m																							0 / 1
イノシシ/ブタ	尺骨	p																							1 / 0
イノシシ/ブタ	尺骨	p-m		1 /		1 / 0																			1 / 0
イノシシ/ブタ	尺骨	(p-)-m		2 /		2 / 0																			3 / 0
イノシシ/ブタ	尺骨	(p-)-(d-)						1	/	0 / 1															0 / 1

第75表(つづき10)

分類群	部位	残存位置	Ⅰ層								Ⅱ層							Ⅲ層				Ⅳ-1層			
			北			南			不明	合計	南						合計	南			合計	北			合計
			E-10・11	F-10	F-11・11南	G-10・11	H-10・11	I-09			G-9～11	H-09	H-10	H-11	I-09	I-10		H-10	H-11	I-10		F-11	F-11南	F-11北	
イノシシ／ブタ	尺骨	(p-)-d																					1 /		1 / 0
イノシシ／ブタ	尺骨	<p->	1 /							1 / 0													1 /		
イノシシ／ブタ	尺骨	<p-)-m																					1 /		1 / 0
イノシシ／ブタ	尺骨	<p-)-<d->																							
イノシシ／ブタ	尺骨	m														/ 1	0 / 1					1 /			1 / 0
イノシシ／ブタ	尺骨	(d-)																							
イノシシ／ブタ	尺骨	d																							
イノシシ／ブタ	尺骨	(d)																							
イノシシ／ブタ	中間手根骨																								
イノシシ／ブタ	尺側手根骨																								
イノシシ／ブタ	第4手根骨			1 /						1 / 0															
イノシシ／ブタ	第2中手骨	w																						/ 1	0 / 1
イノシシ／ブタ	第2中手骨	p		/ 1						0 / 1															
イノシシ／ブタ	第2中手骨	p-(d-)																							
イノシシ／ブタ	第3中手骨	p																		/ 1	0 / 1				
イノシシ／ブタ	第3中手骨	p-(d-)																				1 /		1 /	2 / 0
イノシシ／ブタ	第4中手骨	p		1 /	1 /					2 / 0															
イノシシ／ブタ	第4中手骨	p-(d-)																							
イノシシ／ブタ	第5中手骨	p																							
イノシシ／ブタ	寛骨	臼																				/ 2			0 / 2
イノシシ／ブタ	寛骨(腸骨)	臼											/ 1				0 / 1								
イノシシ／ブタ	寛骨(恥骨)	臼																							
イノシシ／ブタ	寛骨(座骨)	臼																					1 /		1 / 0
イノシシ／ブタ	大腿骨	w																							
イノシシ／ブタ	大腿骨	(p)																							
イノシシ／ブタ	大腿骨	(p-)-d																							
イノシシ／ブタ	大腿骨	<d->																							
イノシシ／ブタ	大腿骨	(d)									1 /						1 / 0								
イノシシ／ブタ	膝蓋骨																								
イノシシ／ブタ	脛骨	(p)																							
イノシシ／ブタ	脛骨	p																		1 /	1 / 0				
イノシシ／ブタ	脛骨	(p-)-d																							
イノシシ／ブタ	脛骨	<p-)-m																							
イノシシ／ブタ	脛骨	<p-)-(d-)																							
イノシシ／ブタ	脛骨	m			/ 1					0 / 1															
イノシシ／ブタ	脛骨	m-(d-)																				/ 1		1 /	1 / 1
イノシシ／ブタ	脛骨	<d->				1 /				1 / 0															
イノシシ／ブタ	脛骨	d																1 /			1 / 0				
イノシシ／ブタ	脛骨	(d)																							
イノシシ／ブタ	腓骨	p-m																							
イノシシ／ブタ	腓骨	m	1							1															
イノシシ／ブタ	腓骨	(d)																							
イノシシ／ブタ	距骨																								
イノシシ／ブタ	踵骨																						/ 1		0 / 1
イノシシ／ブタ	第4足根骨																			/ 1	0 / 1				
イノシシ／ブタ	第2中足骨	w																						/ 1	0 / 1
イノシシ／ブタ	第2中足骨	p-(d-)																							
イノシシ／ブタ	第3中足骨	w																							
イノシシ／ブタ	第3中足骨	p						1 /		1 / 0			1 /				1 / 0					1 /			1 / 0
イノシシ／ブタ	第3中足骨	p-(d-)																					/ 1		0 / 1
イノシシ／ブタ	第4中足骨	w																				/ 1			0 / 1
イノシシ／ブタ	第4中足骨	p									1 /						1 / 0								
イノシシ／ブタ	第4中足骨	p-(d-)																							
イノシシ／ブタ	第5中足骨	w																							
イノシシ／ブタ	第5中足骨	p-(d-)																							
イノシシ／ブタ	中手／中足骨	(d-)																							
イノシシ／ブタ	中手／中足骨	d											1				1								
イノシシ／ブタ	中手／中足骨	(d)																							

第75表(つづき11)

分類群	部位	残存位置	Ⅳ-2層				Ⅳ-3層				Ⅳ-3'層				Ⅳ-4層			Ⅳ-5層	Ⅳ層					層位不明	総計
			北			合計	北			合計	北			合計	北		合計	北	南				合計		
			F-11	F-11南	F-11北		F-10	F-11・11南	F-11北		E-10	F-10	F-11・11南北		F-11	F-11北		F-10	H-09	H-10	I-09	I-10			
イノシシ/ブタ	尺骨	(p-)-d																							1 / 0
イノシシ/ブタ	尺骨	〈p-〉																							1 / 0
イノシシ/ブタ	尺骨	〈p-〉-m																	/ 1			0 / 1			1 / 1
イノシシ/ブタ	尺骨	〈p-〉-〈d-〉		/ 1		0 / 1																			0 / 1
イノシシ/ブタ	尺骨	m																							1 / 1
イノシシ/ブタ	尺骨	(d-)							1 /	1 / 0															1 / 0
イノシシ/ブタ	尺骨	d		1 /		1 / 0																			1 / 0
イノシシ/ブタ	尺骨	(d)		1		1																			1
イノシシ/ブタ	中間手根骨			/ 2		0 / 2			1 /	1 / 0		1 /		1 / 1											2 / 2
イノシシ/ブタ	尺側手根骨			1 / 1		1 / 1																			1 / 1
イノシシ/ブタ	第4手根骨			2 /	/ 1	2 / 1																			3 / 1
イノシシ/ブタ	第2中手骨	w		1 /		1 / 0																			1 / 1
イノシシ/ブタ	第2中手骨	p		1 / 1		1 / 1																			1 / 2
イノシシ/ブタ	第2中手骨	p-(d-)	/ 1			0 / 1																			0 / 1
イノシシ/ブタ	第3中手骨	p		1 /		1 / 0		/ 1		0 / 1															1 / 2
イノシシ/ブタ	第3中手骨	p-(d-)						/ 1		0 / 1															2 / 1
イノシシ/ブタ	第4中手骨	p																	1 /			1 / 0			3 / 0
イノシシ/ブタ	第4中手骨	p-(d-)																							0 / 0
イノシシ/ブタ	第5中手骨	p		1 /		1 / 0																			1 / 0
イノシシ/ブタ	寛骨	臼		1 /		1 / 0													/ 3			0 / 3			1 / 5
イノシシ/ブタ	寛骨(腸骨)	臼		1 / 1		1 / 1																			1 / 2
イノシシ/ブタ	寛骨(恥骨)	臼		1 / 1		1 / 1																			1 / 1
イノシシ/ブタ	寛骨(座骨)	臼		/ 2		0 / 2																			1 / 2
イノシシ/ブタ	大腿骨	w			1 /	1 / 0																			1 / 0
イノシシ/ブタ	大腿骨	(p)		1 /		1 / 0					/ 1			0 / 1											1 / 1
イノシシ/ブタ	大腿骨	(p-)-d		1 /		1 / 0																			1 / 0
イノシシ/ブタ	大腿骨	〈d-〉																		1 /		1 / 0			1 / 0
イノシシ/ブタ	大腿骨	(d)		3 /		3 / 0																			4 / 0
イノシシ/ブタ	膝蓋骨			1 /	/ 1	1 / 1																			1 / 1
イノシシ/ブタ	脛骨	(p)		1 / 1		1 / 1			1 /	1 / 0	1 /			1 / 1											3 / 1
イノシシ/ブタ	脛骨	p																							1 / 0
イノシシ/ブタ	脛骨	(p-)-d																				1 /	1 / 0		1 / 0
イノシシ/ブタ	脛骨	〈p-〉-m		1 /		1 / 0																			1 / 0
イノシシ/ブタ	脛骨	〈p-〉-(d-)		/ 2		0 / 2																			0 / 2
イノシシ/ブタ	脛骨	m																	1 /			1 / 0			1 / 1
イノシシ/ブタ	脛骨	m-(d-)																							1 / 1
イノシシ/ブタ	脛骨	〈d-〉																							1 / 0
イノシシ/ブタ	脛骨	d		/ 1		0 / 1																			1 / 1
イノシシ/ブタ	脛骨	(d)		/ 1		0 / 1																			0 / 1
イノシシ/ブタ	腓骨	p-m						/ 1		0 / 1															0 / 1
イノシシ/ブタ	腓骨	m																		1 /		1 / 0			1 1 0
イノシシ/ブタ	腓骨	(d)		1 /		1 / 0																			1 / 0
イノシシ/ブタ	距骨			1 /		1 / 0																			1 / 0
イノシシ/ブタ	踵骨			1 / 1		1 / 1			1 /	1 / 0	/ 1			0 / 1											2 / 3
イノシシ/ブタ	第4足根骨			1 / 1		1 / 1																			1 / 2
イノシシ/ブタ	第2中足骨	w			1 /	1 / 0										1 /	1 / 0								2 / 1
イノシシ/ブタ	第2中足骨	p-(d-)			1 /	1 / 0																			1 / 0
イノシシ/ブタ	第3中足骨	w		/ 1		0 / 1																			0 / 1
イノシシ/ブタ	第3中足骨	p		1 /		1 / 0																			4 / 0
イノシシ/ブタ	第3中足骨	p-(d-)							/ 1	0 / 1															0 / 2
イノシシ/ブタ	第4中足骨	w																							0 / 1
イノシシ/ブタ	第4中足骨	p							/ 1	0 / 1															1 / 1
イノシシ/ブタ	第4中足骨	p-(d-)		/ 1		0 / 1																			0 / 1
イノシシ/ブタ	第5中足骨	w		/ 1		0 / 1			1 / 1	1 / 1															1 / 2
イノシシ/ブタ	第5中足骨	p-(d-)		/ 1		0 / 1																			0 / 1
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	(d-)		2	1	3																			3
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	d		1	1	2																			3
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	(d)		4		4					1			1								1	1		6

第75表（つづき12）

分類群	部位	残存位置	Ⅰ層								Ⅱ層							Ⅲ層				Ⅳ-1層			
			北			南			不明	合計	南						合計	南			合計	北			合計
			E-10・11	F-10	F-11・11南	G-10・11	H-10・11	I-09			G-9～11	H-09	H-10	H-11	I-09	I-10		H-10	H-11	I-10		F-11	F-11南	F-11北	
イノシシ／ブタ	基節骨																					1	1		2
イノシシ／ブタ	中節骨																								
イノシシ／ブタ	末節骨																			1	1				
シカ	後頭骨（後頭顆）～頭蓋底				1					1															
シカ	膝蓋骨																								
シカ	中足骨	mfr																							
ヤギ	上顎P2																								
ヤギ	上顎P3																								
ヤギ	上顎P4																								
ヤギ	上顎M1																								
ヤギ	上顎M2																								
ヤギ	上顎M3																								
ヤギ	肩甲骨	関節部																							
ヤギ	肩甲骨	関節欠																							
ヤギ	大腿骨	(p)									/ 1						0 / 1								
ヤギ	基節骨	(p)																							
ウシ	頬骨																								
ウシ	前頭骨	fr																				1			1
ウシ	角芯	fr																				3			3
ウシ	側頭骨	関節結節																							
ウシ	側頭骨＋後頭骨（頸静脈突起）																								
ウシ	切歯骨																								
ウシ	上顎遊離歯	第79表参照					1 /			1 / 0												/ 1			0 / 1
ウシ	下顎骨	第79表参照			1 /					1 / 0												/ 1		/ 1	0 / 2
ウシ	下顎遊離歯	第79表参照																							
ウシ	軸椎																								
ウシ	肩甲骨	関節部																				1 /			1 / 0
ウシ	上腕骨	<d->																					1 /		1 / 0
ウシ	橈骨	p																	1 / 1		1 / 1				
ウシ	橈骨	m																							
ウシ	橈骨	<d->																	/ 1		0 / 1				
ウシ	橈側手根骨																								
ウシ	尺側手根骨																								
ウシ	手根骨																								
ウシ	中手骨	p																				1 /			1 / 0
ウシ	中手骨	p-m																							
ウシ	中手骨	(d-)																						2	2
ウシ	寛骨（座骨）	fr																							
ウシ	膝蓋骨																								
ウシ	脛骨	<p->fr																							
ウシ	脛骨	m																				1 /			1 / 0
ウシ	脛骨	(d)																							
ウシ	踵骨																								
ウシ	中足骨	m-<d->																							
ウシ	中足骨	<d->																							
ウシ	中足骨	d																				/ 1			0 / 1
ウシ	中手／中足骨	d																1			1	1		2	3
ウシ	中手／中足骨	(d)																							
ウシ	基節骨																					1		1	2
ウシ	中節骨																								
ウシ	末節骨																								
ウマ	側頭骨	関節結節																							
ウマ	下顎P2																								
ウマ	下顎M3																								
ウマ	下顎臼歯			1 /						1 / 0														/ 1	0 / 1
ウマ	切歯																						1		1
ウマ	肩甲骨																								
ウマ	大腿骨	p																							

第75表（つづき13）

分類群	部位	残存位置	Ⅳ-2層				Ⅳ-3層				Ⅳ-3'層				Ⅳ-4層			Ⅳ-5層	Ⅳ層					層位不明	総計
			北			合計	北			合計	北			合計	北		合計	北	南				合計		
			F-11	F-11南	F-11北		F-10	F-11・11南	F-11北		E-10	F-10	F-11・11南北		F-11	F-11北		F-10	H-09	H-10	I-09	I-10			
イノシシ／ブタ	基節骨		2	8	2	12			1	1															15
イノシシ／ブタ	中節骨		2	7	2	11																			11
イノシシ／ブタ	末節骨			6	2	8																			9
シカ	後頭骨（後頭顆）～頭蓋底																								1
シカ	膝蓋骨							1 /		1 / 0															1 / 0
シカ	中足骨	mfr		1		1																			1
ヤギ	上顎P2								1 / 1	1 / 1															1 / 1
ヤギ	上顎P3								1 / 1	1 / 1															1 / 1
ヤギ	上顎P4								1 / 1	1 / 1															1 / 1
ヤギ	上顎M1								1 / 1	1 / 1															1 / 1
ヤギ	上顎M2								1 /	1 / 0															1 / 0
ヤギ	上顎M3								1 /	1 / 0															1 / 0
ヤギ	肩甲骨	関節部		1 /		1 / 0																			1 / 0
ヤギ	肩甲骨	関節欠	1 /			1 / 0																			1 / 0
ヤギ	大腿骨	(p)																							0 / 1
ヤギ	基節骨	(p)																	1			1			1
ウシ	頬骨															1 /	1 / 0								1 / 0
ウシ	前頭骨	fr						1		1															2
ウシ	角芯	fr					3			3															6
ウシ	側頭骨	関節結節		/ 1		0 / 1												/ 1							0 / 2
ウシ	側頭骨＋後頭骨（頸静脈突起）																							1	1
ウシ	切歯骨															1 /	1 / 0								1 / 0
ウシ	上顎遊離歯	第79表参照			/ 2	0 / 2		/ 1		0 / 1					/ 1	/ 1	0 / 2	/ 1							1 / 7
ウシ	下顎骨	第79表参照		1 1	1 3	0 2 4			/ 1	0 / 1															1 2 7
ウシ	下顎遊離歯	第79表参照			2 / 5	2 / 5			/ 2	0 / 2		/ 1		0 / 1	1	1 1 2	1 1 3	/ 2							3 1 13
ウシ	軸椎																	1							1
ウシ	肩甲骨	関節部														1 /	1 / 0	1 /							3 / 0
ウシ	上碗骨	<d->														1 /	1 / 0								2 / 0
ウシ	橈骨	p														1 /	1 / 0							1 /	3 / 1
ウシ	橈骨	m																						/ 1	0 / 1
ウシ	橈骨	<d->										1 /		1 / 0											1 / 1
ウシ	橈側手根骨			/ 1		0 / 1																			0 / 1
ウシ	尺側手根骨			1 /		1 / 0										1 /	1 / 0								2 / 0
ウシ	手根骨			2		2																			2
ウシ	中手骨	p																							1 / 0
ウシ	中手骨	p-m		/ 1		0 / 1																			0 / 1
ウシ	中手骨	(d-)																							2
ウシ	寛骨（座骨）	fr							/ 1	0 / 1						/ 1	0 / 1								0 / 2
ウシ	膝蓋骨															/ 1	0 / 1								0 / 1
ウシ	脛骨	<p->fr																		/ 1		0 / 1			0 / 1
ウシ	脛骨	m																							1 / 0
ウシ	脛骨	(d)											/ 1	0 / 1											0 / 1
ウシ	踵骨			1 /		1 / 0																			1 / 0
ウシ	中足骨	m-<d->							1 /	1 / 0															1 / 0
ウシ	中足骨	<d->			1 /	1 / 0																			1 / 0
ウシ	中足骨	d																							0 / 1
ウシ	中手／中足骨	d			2	2																			6
ウシ	中手／中足骨	(d)							1	1															1
ウシ	基節骨			3	1	4			1	1						1	1								8
ウシ	中節骨		2			2										2	2								4
ウシ	末節骨			3		3																			3
ウマ	側頭骨	関節結節														1 /	1 / 0								1 / 0
ウマ	下顎P2				/ 1	0 / 1																			0 / 1
ウマ	下顎M3								1 /	1 / 0															1 / 0
ウマ	下顎臼歯							2 /	4 /	6 / 0															7 / 1
ウマ	切歯			1		1			1	1												1	1		4
ウマ	肩甲骨								/ 1	0 / 1															0 / 1
ウマ	大腿骨	p										/ 1		0 / 1											0 / 1

第75表(つづき14)

分類群	部位	残存位置	Ⅰ層								Ⅱ層							Ⅲ層				Ⅳ-1層			
			北			南			不明	合計	南						合計	南			合計	北			合計
			E-10・11	F-10	F-11・11南	G-10・11	H-10・11	I-09			G-9～11	H-09	H-10	H-11	I-09	I-10		H-10	H-11	I-10		F-11	F-11南	F-11北	
ウシ／ウマ	側頭骨	岩様部																							
ウシ／ウマ	舌骨																					1			1
ウシ／ウマ	頭椎	棘突起																							
ウシ／ウマ	胸椎																						1		1
ウシ／ウマ	胸椎	棘突起																					1		1
ウシ／ウマ	腰椎																			1	1				
ウシ／ウマ	腰椎	棘突起																							
ウシ／ウマ	椎骨	椎体																							
ウシ／ウマ	椎骨	椎頭板																							
ウシ／ウマ	椎骨	棘突起			1					1															
ウシ／ウマ	寛骨(腸骨)	fr																							
ウシ／ウマ	肋骨	p																				3		1	4
ウシ／ウマ	肋骨	fr				3				3			2			2	4					13	2	2	17
ジュゴン	後頭骨	後頭顆																		1	1				
ジュゴン	頭蓋底																			1	1				
ジュゴン	頭蓋骨	fr																							
ジュゴン	環椎																			1	1				
ジュゴン	頭椎																							2	2
ジュゴン	肩甲骨																					1 /			1 / 0
ジュゴン	肋骨																								
ジュゴン？	椎骨																					1			1
イルカ類	鼻骨																								
イルカ類	歯																								
イルカ類	椎骨														1		1								
クジラ類	椎骨？	fr																							
イルカ／クジラ類	頭蓋骨	fr											1				1								
哺乳類(同定不可)	側頭骨	岩様部																							
哺乳類(同定不可)	側頭骨	鼓室部																						1	1
哺乳類(同定不可)	下顎骨	下顎角											1				1								
哺乳類(同定不可)	胸椎	棘突起											1				1						1	1	2
哺乳類(同定不可)	腰椎																								
哺乳類(同定不可)	腰椎	棘突起fr																							
哺乳類(同定不可)	仙椎																								
哺乳類(同定不可)	椎骨	椎体																				1			1
哺乳類(同定不可)	椎骨	椎頭板																							
哺乳類(同定不可)	椎骨	棘突起						1		1														1	1
哺乳類(同定不可)	胸骨																								
哺乳類(同定不可)	寛骨(座骨)	fr																							
哺乳類(同定不可)	大腿骨	(p)																							
哺乳類(同定不可)	大腿骨	(p-)																							
哺乳類(同定不可)	大腿骨	〈p-〉																							
哺乳類(同定不可)	大腿骨	(d)fr																							
哺乳類(同定不可)	脛骨	(p)																							
哺乳類(同定不可)	基節骨																								
哺乳類(同定不可)	指骨																								
哺乳類(同定不可)	四肢骨	m	1					1		2			2				2		1		1	1	1		2
哺乳類(同定不可)	肋骨	p			2		1			3									1		1	3		3	6
哺乳類(同定不可)	肋骨	fr	2	1			1			4	1	2	3			1	7			3	3	26	15	12	53
鳥類／哺乳類(未同定)	四肢骨	m																							
合計			15	11	15	7	7	20	2	77	7	14	73	3	14	7	118	6	20	39	65	115	70	53	238

第75表(つづき15)

分類群	部位	残存位置	Ⅳ-2層				Ⅳ-3層				Ⅳ-3'層				Ⅳ-4層			Ⅳ-5層	Ⅳ層					層位不明	総計
			北			合計	北			合計	北			合計	北		合計	北	南				合計		
			F-11	F-11南	F-11北		F-10	F-11・11南	F-11北		E-10	F-10	F-11・11南北		F-11	F-11北		F-10	H-09	H-10	I-09	I-10			
ウシ／ウマ	側頭骨	岩様部		1		1			1	1															2
ウシ／ウマ	舌骨																								1
ウシ／ウマ	頸椎	棘突起														1	1					1	1		2
ウシ／ウマ	胸椎															1	1								2
ウシ／ウマ	胸椎	棘突起																							1
ウシ／ウマ	腰椎				1	1																			2
ウシ／ウマ	腰椎	棘突起		1		1																			1
ウシ／ウマ	椎骨	椎体		1		1																			1
ウシ／ウマ	椎骨	椎頭板							1	1															1
ウシ／ウマ	椎骨	棘突起																							1
ウシ／ウマ	寛骨(腸骨)	fr														1 /	1 / 0								1 / 0
ウシ／ウマ	肋骨	p		1	1	2		1	1	2	1		1	2		3	3		1				1		14
ウシ／ウマ	肋骨	fr		21	10	31	2	1	4	7	1	2	1	4		3	3		1			3	4		73
ジュゴン	後頭骨	後頭顆																							1
ジュゴン	頭蓋底																								1
ジュゴン	頭蓋骨	fr			1	1																			1
ジュゴン	環椎																								1
ジュゴン	頸椎																								2
ジュゴン	肩甲骨																								1 / 0
ジュゴン	肋骨										1			1											1
ジュゴン？	椎骨			1	1	2																			3
イルカ類	鼻骨															1	1								1
イルカ類	歯										1	2		3											3
イルカ類	椎骨																								1
クジラ類	椎骨？	fr						1		1															1
イルカ／クジラ類	頭蓋骨	fr																							1
哺乳類(同定不可)	側頭骨	岩様部							1	1						1	1								2
哺乳類(同定不可)	側頭骨	鼓室部																							1
哺乳類(同定不可)	下顎骨	下顎角																							1
哺乳類(同定不可)	胸椎	棘突起																							3
哺乳類(同定不可)	腰椎			1		1			1	1															2
哺乳類(同定不可)	腰椎	棘突起fr					1		2	3															3
哺乳類(同定不可)	仙椎			1		1																			1
哺乳類(同定不可)	椎骨	椎体	2	8		10	1			1									1			1			13
哺乳類(同定不可)	椎骨	椎頭板		6	9	15						1		1										2	18
哺乳類(同定不可)	椎骨	棘突起		13	6	19																			21
哺乳類(同定不可)	胸骨			1	1	2		1		1								1							4
哺乳類(同定不可)	寛骨(座骨)	fr		2		2																			2
哺乳類(同定不可)	大腿骨	(p)		2		2																			2
哺乳類(同定不可)	大腿骨	(p-)		1		1																			1
哺乳類(同定不可)	大腿骨	<p->		1		1																			1
哺乳類(同定不可)	大腿骨	(d)fr							1	1															1
哺乳類(同定不可)	脛骨	(p)																						3	3
哺乳類(同定不可)	基節骨			2		2										2	2								4
哺乳類(同定不可)	指骨															1	1								1
哺乳類(同定不可)	四肢骨	m		1		1									1		1					2	2		11
哺乳類(同定不可)	肋骨	p		20	5	25		1	2	3		1	1	2		1	1			1			1		42
哺乳類(同定不可)	肋骨	fr		107	50	157	2	6	19	27			4	4					2			8	10	2	267
鳥類／哺乳類(未同定)	四肢骨	m																				1	1		1
合計			75	1693	275	2043	13	35	182	230	35	43	15	93	4	70	74	8	33	15	14	27	89	18	3053

このように本地区における脊椎動物遺体群は，14 世紀後半頃の造成（礫層の形成）を境として，その性格が変化したと推定される．また，造成前には廃棄物などの人為的影響が比較的小さく，カエル・ヘビ・ネズミなどが多く生息する環境が存在したのに対して，造成後には廃棄物の増加に伴って，これらが生息しにくい環境に変化した可能性が考えられる．

(2) 首里城淑順門西地区の脊椎動物遺体からみた動物資源利用の特徴

上記の通り，造成層より上位の脊椎動物遺体の多くは人為的な廃棄物と推定される．したがって，その内容は首里城内での動物資源利用の様相の一端を示すものと考えられる．

遺体の大半は魚類およびイノシシ／ブタ・ニワトリ・ウシを主とする家畜・家禽類である．

魚類はⅣ -2 層を中心に出土量が多く，43 分類群以上におよぶ多様な魚種が利用されている．サイズ的にもピックアップ資料にみられる大型魚に加え，水洗選別が行われたⅣ層では小型魚も多く検出されており，様々なサイズの魚が利用されている．これらはグスク時代（15 世紀）の城内における魚食の活発さと多様さを示している．大型魚では，フエフキダイ科，ハタ科，ブダイ科，ベラ科，アイゴ属など，サンゴ礁やその周辺に生息する沿岸性種が主体である．小型魚ではアイゴ属の幼魚（スク）が最も多い．特定季節に集中的かつ大量に来遊するスクの生態からみて，これらは貯蔵品であった可能性が高く，現在の「スクガラス」と同様の塩蔵品であった可能性も考えられる．また，アジ科，トビウオ科・サヨリ科，カマス科，ニシン科（ミズン類？）といった外海域を中心に生息する回遊魚類が多いのも特徴である．

鳥獣類はイノシシ／ブタ，ニワトリおよびウシが主体である．

以上の様相は，少なくともピックアップ資料に関する限り，Ⅱ層でウシが減少するのを除けば，Ⅳ -3’ 層（14 世紀末～ 15 世紀前半）からⅡ層（近世～近代）まで大きく変化することなく継続していたと推定される．薩摩入りなどの社会変革の影響を示唆する変化は，本地点の状況をみる限り認められない．

なお，シカ科については九州以北または大陸からの搬入品と推定されるが，出土資料はいずれも断片的（頭蓋底破片，膝蓋骨，中足骨破片）であり，具体的にどのような形態で持ち込まれたかは推定困難である．

第 76 表　首里城跡淑順門西地区から採集されたイヌ下顎骨の詳細

＊残存範囲・歯種の凡例は第77表を参照．

層	地区	グリッド	出土No.	部位	左右	残存範囲・歯種
Ⅳ-1	北	F-11南	35	下顎骨	右	[M1 M2 M3x 筋突起]
Ⅳ-2	北	F-11南	37	下顎骨	左	[P3x P4 M1x M2x]

第 77 表　首里城跡淑順門西地区から採集されたイノシシ／ブタの上顎骨・遊離歯の詳細

＊[ ]は顎骨の残存範囲（記載のないものは遊離歯），×は脱落歯，( )は萌出中の歯を示す．

分類群	層	地区	グリッド	出土No.	部位	左右	残存範囲・歯種	数	備考
イノシシ／ブタ	Ⅰ	南	G-11	61	上顎遊離歯	R	C	1	メス
	Ⅱ	南	H-10	67	切歯骨	L	[I1x I2x I3x]	1	
		南	H-10	64	切歯骨	R	[I1x I2 I3x]	1	
		南	H-10	64	上顎遊離歯	R	I1	1	
	Ⅳ-1	北	F-11	24	上顎遊離歯	L	I1	1	
		北	F-11南	35	上顎遊離歯	L	I1	1	
		北	F-11	41	上顎骨	R	[m3 M1]	1	
	Ⅳ-2	北	F-11南	38	切歯骨	L	[I1x I2x I3x]	1	
		北	F-11南	38	上顎骨	L	[P1x m1 m2 m3]	1	
		北	F-11南	38	上顎遊離歯	L	I1	2	
		北	F-11南	38	上顎遊離歯	L	I3	1	
		北	F-11南	38	上顎遊離歯	L	m2	1	
		北	F-11南	38	上顎遊離歯	L	P2	1	
		北	F-11南	38	上顎遊離歯	L	P3	1	
		北	F-11北	50	上顎遊離歯	L	M2	1	
		北	F-11南	38	上顎骨	R	[P1x m1 m2x]	1	
		北	F-11南	38	上顎遊離歯	R	I1	1	
		北	F-11南	38	上顎遊離歯	R	C	1	メス
		北	F-11南	38	上顎遊離歯	R	m2	1	
		北	F-11南	38	上顎遊離歯	R	P3	1	
		北	F-11	28	上顎遊離歯	R	M1	1	
		北	F-11南	38	上顎遊離歯	?	I3	1	
		北	F-11南	38	上顎遊離歯	?	P1	1	
	Ⅳ-3	北	F-11南	36	切歯骨	R	[I1x I2x I3x]	1	
		北	F-11南	36	上顎遊離歯	R	I1	1	
		北	F-11北	48	上顎遊離歯	R	M1	1	

第 78 表　首里城跡淑順門西地区から採集されたブタおよびイノシシ／ブタの下顎骨・遊離歯の詳細

分類群	層	地区	グリッド	出土No.	部位	左右	残存範囲・歯種	数	備考	写真
ブタ	Ⅳ-2	北	F-11北	50	下顎骨	L	[M1 M2]	1		47-96
		北	F-11南	38	下顎骨	L	[I1x]	1	左右連合	47-93
						R	I1x (I2) I3x C P1x P2x P3x P4x M1x M2x (M3)]			
		北	F-11南	38	下顎骨	R	[(P3) (P4) M1 M2 (M3)x]	1		47-95
	Ⅳ-3	北	F-11北	48	下顎骨	L	[Cx P2x P3x P4x M1x M2 M3 下顎角]	1	メス	47-94
イノシシ／ブタ	Ⅰ	北	E-11	9	下顎骨	L	[M3x]	1	カットマークあり	
		北	E-11	10	下顎遊離歯	L	I2	1		
		北	F-11	29	下顎遊離歯	L	M1	1		
		南	I-09	83	下顎遊離歯	L	M2	1		
		南	I-09	83	下顎骨	R	[m3x M1]	1		
		南	I-09	83	下顎遊離歯	R	P4	1		
		北	F-11	29	下顎遊離歯	R	M1	1		
		南	I-09	83	下顎遊離歯	R	M2	1		
	Ⅱ	南	H-09	62	下顎遊離歯	R	I2	1		
		南	H-10	67	下顎遊離歯	R	C	1	メス	
	Ⅳ-1	北	F-11北	47	下顎骨	L	[Cx P2x P3x P4x M1x M2x]	1	オス	
		北	F-11南	35	下顎骨	L	下顎角	1		
		北	F-11	26	下顎遊離歯	L	I1	1		
		北	F-11南	35	下顎骨	R	[M1 M2x]	1		
		北	F-11南	35	下顎骨	R	関節突起	1		
		北	F-11	24	下顎遊離歯	R	i2	1		
		北	F-11南	35	下顎遊離歯	R	I1	1		
		北	F-11	26	下顎遊離歯	R	I3	1		
		北	F-11南	35	下顎骨	?	下顎角	1		
	Ⅳ-2	北	F-11南	38	下顎骨	L	[P4x M1x M2 (M3)x]	1		
		北	F-11南	38	下顎骨	L	下顎角	1		
		北	F-11南	38	下顎骨	L	下顎角＋関節突起	1		
		北	F-11南	38	下顎骨	L	関節突起	1		
		北	F-11北	49	下顎骨	L	関節突起	1		
		北	F-11北	50	下顎遊離歯	L	i2	1		
		北	F-11北	50	下顎遊離歯	L	I1	1		
		北	F-11南	38	下顎遊離歯	L	I2	1		
		北	F-11南	38	下顎遊離歯	L	C	1	オス	
		北	F-11南	38	下顎遊離歯	L	C	1	オス	
		北	F-11南	38	下顎遊離歯	L	m1	1		
		北	F-11南	38	下顎遊離歯	L	m3	1		
		北	F-11南	38	下顎遊離歯	L	P3	2		
		北	F-11南	38	下顎遊離歯	L	M1	2		
		北	F-11南	38	下顎遊離歯	L	M3	2		
		北	F-11南	38	下顎骨	R	[m3 M1 M2x M3x]	1		
		北	F-11南	38	下顎骨	R	[M1 M2 (M3)]	1		
		北	F-11北	50	下顎遊離歯	R	i2	1		
		北	F-11南	38	下顎遊離歯	R	I1	1		
		北	F-11北	50	下顎遊離歯	R	I2	1		
		北	F-11南	38	下顎遊離歯	R	I3	1		
		北	F-11南	38	下顎遊離歯	R	C	1	オス	
		北	F-11南	38	下顎遊離歯	R	C	1	オス	
		北	F-11南	38	下顎遊離歯	R	P2	2		
		北	F-11北	50	下顎遊離歯	R	P4	2		
		北	F-11南	38	下顎遊離歯	R	M1	2		
		北	F-11北	49	下顎遊離歯	R	M1	1		
		北	F-11南	38	下顎遊離歯	R	M2	1		
		北	F-11南	38	下顎遊離歯	?	m1	1		
		北	F-11南	38	下顎遊離歯	?	P1	1		
		北	F-11	28	下顎遊離歯	?	P2	1		
	Ⅳ-3	北	F-11南	36	下顎遊離歯	R	i2	1		
		北	F-11北	48	下顎遊離歯	R	I1	1		
		北	F-11北	48	下顎遊離歯	R	I2	1		
	Ⅳ-3'	北	F-11北	42	下顎遊離歯	R	P3	1		
	不明	不明	不明	101	下顎遊離歯	R	C	1	オス	
		北	F-11北	51	下顎遊離歯	?	M	1		

※凡例は第77表を参照

第 79 表　首里城跡淑順門西地区から採集されたウシの顎骨・遊離歯の詳細

残存範囲・歯種の凡例は第 77 表を参照

層	地区	グリッド	出土No.	部位	左右	残存範囲・歯種	数
Ⅰ	南	H-11	80	上顎遊離歯	L	M	1
Ⅳ-1	北	F-11	24	上顎遊離歯	R	M1	1
Ⅳ-2	北	F-11北	50	上顎遊離歯	R	M	2
Ⅳ-3	北	F-11南	36	上顎遊離歯	R	P4	1
Ⅳ-4	北	F-11北	43	上顎遊離歯	R	P2	1
	北	F-11	23	上顎遊離歯	R	M1orM2	1
Ⅳ-5	北	F-10	14	上顎遊離歯	R	M	1
Ⅰ	北	F-11	29	下顎骨	L	関節突起	1
Ⅳ-1	北	F-11	26	下顎骨	R	先端部	1
	北	F-11北	47	下顎骨	R	先端部	1
Ⅳ-2	北	F-11北	50	下顎遊離歯	L	M1orM2	1
	北	F-11北	50	下顎遊離歯	L	M	1
	北	F-11南	38	下顎骨	R	先端部	1
	北	F-11北	50	下顎骨	R	[M1x M2x M3x]	1
	北	F-11北	50	下顎骨	R	[P2 P3]	1
	北	F-11北	50	下顎遊離歯	R	P3	2

（右段につづく）

層	地区	グリッド	出土No.	部位	左右	残存範囲・歯種	数
Ⅳ-2	北	F-11北	50	下顎遊離歯	R	M1	1
	北	F-11北	50	下顎遊離歯	R	M2	1
	北	F-11北	50	下顎遊離歯	R	M3	1
	北	F-11北	50	下顎骨	R	下顎角	1
	北	F-11南	38	下顎骨	?	筋突起	1
	北	F-11北	50	下顎骨	?	筋突起	1
Ⅳ-3	北	F-11北	48	下顎骨	R	筋突起	1
	北	F-11北	48	下顎遊離歯	R	I	1
	北	F-11北	48	下顎遊離歯	R	i	1
Ⅳ-3'	北	F-10	16	下顎遊離歯	R	I	1
Ⅳ-4	北	F-11北	44	下顎遊離歯	L	P4	1
	北	F-11	23	下顎遊離歯	R	P3	1
	北	F-11北	43	下顎遊離歯	R	P4	1
	北	F-11北	43	下顎遊離歯	R	M1	1
	北	F-11北	44	下顎遊離歯		I	1
Ⅳ-5	北	F-10	14	下顎遊離歯	R	M1	1
	北	F-10	14	下顎遊離歯	R	M3	1

第 80 表　首里城跡淑順門西地区から採集された脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の組成

＊Ⅳ層の最小個体数の合計値は，Ⅳ-1層～Ⅳ-5層および詳細な所属層準が不明なⅣ層資料を含めたⅣ層全資料の合計値に基づいて算出した．

分類群	同定標本数(NISP)													最小個体数(MNI)									
				Ⅳ層													Ⅳ層						
	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ-1層	Ⅳ-2層	Ⅳ-3層	Ⅳ-3'層	Ⅳ-4層	Ⅳ-5層	Ⅳ層	合計	不明	総計	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ-1層	Ⅳ-2層	Ⅳ-3層	Ⅳ-3'層	Ⅳ-4層	Ⅳ-5層	Ⅳ層合計＊
メジロザメ科		1											1		1	–	–	–	–	–			–
サメ類		1	3	2	7	2	1			1	13		17		–	1	1	1	1	1			1
トビエイ科		1											1		1			–	–				–
エイ目					2	1					3		3		–			1	1				1
オオウナギ							1				1		1							1			1
ウツボ科					3						3		3					1					1
アナゴ科					1						1		1					1					1
ダツ科			1		3						3		4			1		1					1
イットウダイ科					1						1		1					1					1
ボラ科					15		1	1			17		17					2		1	1		2
カマス科				1	5						6		6				1	1					1
ハタ科A		2		4	20	3	1				28		30		1		3	6	2	1			7
ハタ科B		1			1	1				2	4		5		1			1	1				2
ハタ科	2	1	2	2	22	2	3	1		1	31		36	1	–	1	–	–	–	–	1		〈6〉
ハタ型	3	4	3	7	72	2	3	1		5	90		100	–	–	–	–	–	–	–	–		–
アジ科(大型種)	1	1	2	1	33	0	1			2	37	1	42	1	1	1	1	2		1			2
シイラ属	1												1	1									0
イスズミ科					1						1		1					1					1
フエダイ科					3	2	1				6		6					1	1	1			2
タカサゴ亜科？					1						1		1					1					1
コショウダイ類					2						2		2					1					1
マダイ亜科					2						2		2					1					1
ヘダイ		1			3	1					4		5		1			2	1				2
クロダイ属		1		1	33	3	3				40		41		1		1	9	2	1			9
タイ型	1	6	1	4	114	5	7	1		4	135		143	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ヨコシマクロダイ					1						1		1					1					1
フエフキダイ属(アマミフエフキ型)			1		2					1	3		4			1		〈1〉					2
フエフキダイ属(ハマフエフキ型)	2	1	1	2	14	2	2			4	24		28	〈1〉	〈1〉	1	2	〈7〉	〈1〉	〈1〉			15
フエフキダイ属	1	2	3		29	5	2			2	38		44	–	–	–	–	–	2	–	–		〈13〉
フエフキダイ科	8	15	7	3	96	10	4	1		8	122	2	154	3	2	–	–	11	–	2	1		〈16〉
ベラ科(シロクラベラ型)				2	9						11		11				2	〈3〉					5
ベラ科(タキベラ型)		1											1		1								0
ベラ科B	1				1						1		2	1				〈1〉					1
ベラ科(シロクラベラ型椎骨)		3	1	4	78	2				2	86		90	–	–	1	–	–	1				–
ベラ科(コブダイ型椎骨)					9	1					10		10	–	–	–	–	–	1				–
ベラ科	1	5			34	1	1			1	37		43	–	–	–	–	5	–	1			〈5〉
アオブダイ属	1				7	2	1				10		11	1			–	〈4〉	2	〈1〉			〈7〉
ブダイ科	4	11	2	7	262	30	8	1		5	313		330	–	2	1	1	15	–	2	1		16
ソウダガツオ属										1	1		1										1
スマ					5						5		5					1					1
カツオ／マグロ類					3						3		3					–					–
タチウオ科					2	3	1				6		6					1	1	1			2
ニザダイ科		3			8	5	2				15		18		1			1	1	1			1
アイゴ属					12	2				1	15		15					1	1				1
コチ科					1						1		1					1					1
モンガラカワハギ科					2	1					3		3					1	1				1
真骨類未同定	1	1	1	1	6	1	1	1		1	11		14	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
真骨類保留		4	3	1	102	5	1	1	1	1	112		119	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
真骨類同定不可		5	1	2	70	5	5			1	83		89	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ウミガメ類	1				1	1	1				3	1	5	1				1	1	1			1
ヘビ類					70	1		1			72		72					1	1		1		1
ニワトリ	1	8	10	16	134	9	6			4	169	2	190	1	2	2	2	13	2	2			13
鳥類同定不可	3	5	1	10	68	3	1			1	83		92	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ジャコウネズミ					2						2		2					2					2
ネズミ亜科	1			2	7	3	2	17			31		32	1			1	2	1	1	3		5
イヌ	4	2	2	1	3	2		2			8		16	1	1	1	1	1	1		1		1
ネコ					1			9			10		10					1			2		2
ブタ	1				4	1		1		1	7		8	1				〈2〉	〈1〉		〈1〉		〈3〉
イノシシ／ブタ	21	14	7	50	185	23	9	1		16	284	2	328	2	1	1	3	5	2	1	1		7
シカ	1				1	1					2		3	1				1	1				1
ヤギ		1			2	10				1	13		14		1			1	1				1
ウシ	2		4	19	34	12	3	16	6	1	93	3	102	1		1	2	3	1	1	1	1	3
ウマ	1			2	2	9	1	1		1	16		17	1			1	1	2	1	1		2
ウシ／ウマ	4	4	1	24	37	11	6	9		6	93		102	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ジュゴン			3	4	3		1				8		11			1	1	1		1			1
イルカ類		1					3	1			4		5		1					1	1		1
クジラ類						1					1		1						1				1
イルカ／クジラ類		1											1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
哺乳類同定不可	10	11	5	66	239	38	7	6	1	14	371	7	404	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
鳥類／哺乳類保留										1	1		1	–									1
合計	77	118	65	238	1890	222	90	74	8	89	2611	18	2889	18	19	14	23	105	33	23	15	1	129

第 81 表　首里城跡淑順門西地区における水洗選別試料（2.5mm メッシュ）検出骨の同定結果

＊〈 〉のついた値はNISPに算入していない．

種類	部位	SJW-1	SJW-2	SJW-3	SJW-4	SJW-5	SJW-6	合計
サメ類	歯		2					2
エイ目	歯		1					1
ニシン科	主鰓蓋骨		1 /					1 / 0
ニシン科	尾椎		1		2			3
ウナギ属	椎骨			1				1
ウツボ科	椎骨			1				1
コイ科	歯骨		/ 1					0 / 1
サヨリ科	腹椎		1	1				2
トビウオ科	腹椎		4	2	1			7
トビウオ科	尾椎		5	1	1			7
トビウオ科/サヨリ科	腹椎	1	8					9
ボラ科	舌顎骨		1 /					1 / 0
ボラ科	主鰓蓋骨		1 /					1 / 0
ボラ科	腹椎		6					6
ボラ科	尾椎	1	2					3
カマス科	主上顎骨		2 / 1	1 /				3 / 1
カマス科	角骨		1 /					1 / 0
カマス科	方骨		1 /					1 / 0
カマス科	口蓋骨		/ 1					0 / 1
カマス科	腹椎		4	1				5
カマス科？	尾椎		6					6
ハタ科A	前鰓蓋骨		/ 2					0 / 2
ハタ科	角骨	1 /		1 /				2 / 0
ハタ科	主鰓蓋骨		1 /					1 / 0
ハタ科	擬鎖骨		/ 1					0 / 1
ハタ型	腹椎		1					1
ハタ型	尾椎		1	1				2
キス科	歯骨		1 /					1 / 0
ギンガメアジ属	前上顎骨		/ 1					0 / 1
ギンガメアジ属？	主鰓蓋骨		1 /					1 / 0
アジ科(小型種)	主上顎骨		1 /	1 /				2 / 0
アジ科(小型種)	前上顎骨		/ 1					0 / 1
アジ科(小型種)	歯骨		1 /					1 / 0
アジ科(小型種)	角骨		1 /		1 /			2 / 0
アジ科	主鰓蓋骨			/ 1				0 / 1
アジ科	腹椎	1	4	3				8
アジ科	尾椎		1	5				6
アジ科	尾部棒状骨		1					1
アジ科	楯鱗	〈 1 〉						〈 1 〉
アジ科？	角骨			1 /				1 / 0
クロサギ科	角骨		/ 1					0 / 1
ヒメジ科？	第1椎骨		1	1				2
フエダイ科	主上顎骨		1 /					1 / 0
フエダイ科	歯骨		1 / 1					1 / 1
フエダイ科	方骨		2 /					2 / 0
クロダイ属	主上顎骨	/ 1						0 / 1
クロダイ属	前上顎骨		1 /					1 / 0
クロダイ属	角骨		/ 1	1 /				1 / 1
タイ科？	第1椎骨	1						1
フエフキダイ科	前上顎骨		/ 1					0 / 1

（右段につづく）

種類	部位	SJW-1	SJW-2	SJW-3	SJW-4	SJW-5	SJW-6	合計
タイ型	歯			〈 2 〉				〈 2 〉
タイ型	腹椎			1				1
タイ型	尾椎			2				2
ベラ科？	方骨			/ 1				0 / 1
ブダイ科	角骨		/ 2					0 / 2
ブダイ科	方骨		3 /					3 / 0
ブダイ科	腹椎	1		1				2
ブダイ科	尾椎	1	4	1				6
タチウオ科	腹椎			2				2
タチウオ科	尾椎		2	4				6
ニザダイ科	歯骨		/ 2					0 / 2
ニザダイ科	主鰓蓋骨					1 /		1 / 0
ニザダイ科	腹椎		1					1
ニザダイ科	尾椎					1		1
アイゴ属	前頭骨		1 / 1	/ 1				1 / 2
アイゴ属	舌顎骨		/ 1					0 / 1
アイゴ属	主鰓蓋骨			1 /				1 / 0
アイゴ属	第1椎骨		1					1
アイゴ属	腹椎		5	3	1			9
アイゴ属	尾椎		2	1				3
アイゴ属/ニザダイ科	擬鎖骨		1 /					1 / 0
モンガラカワハギ科	角骨				/ 1			/ 1
真骨類(未同定)	腹椎		1					1
真骨類(保留)	歯骨			/ 1				0 / 1
真骨類(保留)	角骨		/ 1					0 / 1
真骨類(保留)	舌顎骨			1 /				1 / 0
真骨類(保留)	前鰓蓋骨			1 /				1 / 0
真骨類(保留)	主鰓蓋骨		5					5
真骨類(保留)	第1椎骨		3					3
真骨類(保留)	椎骨		16	13	1			30
真骨類(保留)	鱗	〈 5 〉	〈 29 〉	〈 15 〉	〈 2 〉		〈 1 〉	〈 52 〉
真骨類(同定不可)	主鰓蓋骨		1					1
真骨類(同定不可)	椎骨	2	9	8	1		1	21
ヘビ類	椎骨	1	15	1	2	1	14	34
ニワトリ？	歯骨		1					1
ニワトリ？	橈骨(d-)		/ 1					0 / 1
鳥類(同定不可)	指骨		4		2			6
ネズミ亜科	上顎骨						1 /	1 / 0
ネズミ科	上顎I				/ 1			0 / 1
ネズミ科	上腕骨(p)		1 /					1 / 0
イノシシ	下顎i2		/ 1					0 / 1
イノシシ	前臼歯4	1	1					2
小型哺乳類(保留)	腰椎			1				1
小型哺乳類(保留)	上腕骨				1			1
小型哺乳類(保留)	尺骨						/ 1	/ 1
小型哺乳類(保留)	大腿骨				1			1
小型哺乳類(保留)	踵骨						1 /	1 /
小型哺乳類(同定不可)	大腿骨頭			1				1
小型哺乳類(同定不可)	基節骨				1			1
小型哺乳類(同定不可)	椎骨		2			1	5	8
合計		18	196	85	19	4	24	346

謝辞：調査分析に際しては，沖縄県立埋蔵文化財センター瀬戸哲也氏に全面的なご教示・ご助力を賜った．国立歴史民俗博物館西本豊弘氏には現生標本を参照させていただいた．厚く御礼申し上げる．

参考文献

阿部　永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明 1994『日本の哺乳類』東海大学出版会

金子浩昌 1996「平敷屋トウバル遺跡出土の動物遺体（軟体動物を除く）」『平敷屋トウバル遺跡』沖縄県文化財調査報告書第 125 集 沖縄県教育委員会

菅原広史 2008「津堅島キガ浜貝塚出土脊椎動物遺体の再分析」南島考古 27

菅原広史 2011「勝連城跡四の曲輪から出土した脊椎動物遺体のピックアップ資料」『勝連城跡－四の曲輪北区発掘調査報告書－』うるま市教育委員会

樋泉岳二 2005「津堅貝塚から出土した脊椎動物遺体群」『津堅貝塚－中城湾港（アギ浜地区）港湾改修事業に伴う緊急発掘調査報告書－』勝連町教育委員会

樋泉岳二 2007「今帰仁城跡周辺遺跡出土の脊椎動物遺体群－Ⅲ区 b・東 7 区・シニグンニー」『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ』今帰仁村教育委員会

樋泉岳二・名島弥生・菅原広史 2009「今帰仁城主郭東斜面から出土した脊椎動物遺体」『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅳ』今帰仁村教育委員会

第 82 表　首里城跡淑順門西地区における水洗選別試料（1㎜ メッシュ）検出骨の同定結果

*魚歯・鱗は一部の分類群を除き分析対象外とした.

種類	部位	SJW-1	SJW-2	SJW-3	SJW-4	SJW-5	SJW-6	合計
エイ目	歯		1					1
エイ目？	楯鱗		1					1
板鰓類	椎骨						1	1
ニシン科	主上顎骨	/ 1						0 / 1
ニシン科	腹椎		1	1				2
ニシン科	尾椎		5					5
コイ科	方骨			/ 1				0 / 1
コイ科	腹椎	1						1
サヨリ科？	方骨			1 /				1 / 0
サヨリ科	腹椎		1					1
ボラ科	舌顎骨		1 /					1 / 0
ボラ科	主鰓蓋骨		/ 1					0 / 1
ボラ科	腹椎			1				1
ボラ科	尾椎		2	1			1	4
カマス科	主上顎骨		1 /					1 / 0
ハタ型	腹椎						1	1
アジ科(小型種)	主上顎骨			1 /				1 / 0
アジ科(小型種)	方骨			/ 1				0 / 1
アジ科	主上顎骨			/ 1				0 / 1
アジ科	前上顎骨			1 /				1 / 0
アジ科	角骨		/ 1					0 / 1
アジ科	第1椎骨		1	1				2
アジ科	腹椎			2				2
アジ科	尾椎			2				2
アジ科	尾部棒状骨		1					1
アジ科	楯鱗		〈 4 〉	〈 4 〉				〈 8 〉
フエダイ科	第1椎骨	1						〈 1 〉
クロダイ属	口蓋骨		1 /	1 /				2 / 0
タイ型	尾椎	1						1
ベラ科	上咽頭骨			1 /				1 / 0
ベラ科	前上顎骨			/ 1				0 / 1
タチウオ科	歯		〈 3 〉					〈 3 〉
カマス科／タチウオ科	歯		〈 1 〉					〈 1 〉
アイゴ属	前頭骨		7 / 1	3 /	1 / 1			11 / 2
アイゴ属	前上顎/歯骨			1				1
アイゴ属	方骨		/ 1					0 / 1
アイゴ属	前鰓蓋骨			1 / 1				1 / 1
アイゴ属	主鰓蓋骨			/ 1				0 / 1
アイゴ属	擬鎖骨			/ 1				0 / 1
アイゴ属	尾椎		3	4			2	9
真骨類(未同定)	主上顎骨				/ 1			0 / 1
真骨類(未同定)	方骨		/ 1					0 / 1
真骨類(未同定)	第1椎骨			1				1
真骨類(保留)	方骨		1 /					1 / 0
真骨類(保留)	椎骨		7	13			4	24
真骨類(同定不可)	椎骨	1	4	5			1	11
カエル類	上腕骨						1	1
カエル類	橈尺骨						2	2
カエル類	四肢骨	2						2
カエル類	椎骨						1	1
ヘビ類	椎骨	2				3	5	10
両生／爬虫類(保留)	椎骨				1		2	3
ネズミ亜科	臼歯						3	3
ネズミ科	上顎切歯						1 /	1 / 0
ネズミ科	下顎切歯		1 /		1			2
食肉目	切歯	1						1
小型哺乳類(未同定)	犬歯						1	1
小型哺乳類(保留)	後頭顆						1	1
小型哺乳類(保留)	肩甲骨		1 /					1 / 0
小型哺乳類(保留)	橈骨p						1	1
小型哺乳類(保留)	尺骨p						1	1
合計		10	53	52	5	3	29	152

第 83 表　首里城跡淑順門西地区における水洗選別試料検出骨の組成（NISP）

＊2.5mm・1mm各資料のNISP値をそれぞれの試料の分析率（体積比）で除して全体量に換算した値.

NISP																					
試料No.	SJW-1			SJW-2			SJW-3			SJW-4			SJW-5			SJW-6			合計		
メッシュ(mm)	2.5	1	合計	2.5	1	合計	2.5	1	合計	2.5	1	合計	2.5	1	合計	2.5	1	合計	2.5	1	合計
補正前のNISP合計	12	10	22	167	45	212	68	48	116	17	5	22	4	3	7	23	29	52	251	140	391
分析率(体積比%)	8.3	18.2	－	7.4	3.7	－	16.7	10.0	－	14.3	20.0	－	100	100	－	100	50.0	－	－	－	－
サメ類				27		27													27	0	27
エイ目				14	54	68													14	54	68
板鰓類																	2	2	0	2	2
ニシン科		5	5	27	162	189		10	10	14		14							41	177	218
ウナギ属							6		6										6	0	6
ウツボ科							6		6										6	0	6
コイ科		5	5	14		14		10	10										14	15	29
サヨリ科				14	27	41	6	10	16										20	37	57
トビウオ科				122		122	18		18	14		14							154	0	154
トビウオ科/サヨリ科	12		12	108		108													120	0	120
ボラ科	12		12	135	108	243		20	20								2	2	147	130	277
カマス科				216	27	243	12		12										228	27	255
ハタ科A				27		27													27	0	27
ハタ科	12		12	27		27	6		6										45	0	45
ハタ型				27		27	6		6								2	2	33	2	35
キス科				14		14													14	0	14
ギンガメアジ属				27		27													27	0	27
アジ類(小型種)				54		54	6	20	26	7		7							67	20	87
アジ科	12		12	81	81	162	60	70	130										153	151	304
クロサギ科				14		14													14	0	14
ヒメジ科？				14		14	6		6										20	0	20
フエダイ科		5	5	68		68													68	5	73
クロダイ属	12		12	27	27	54	6	10	16										45	37	82
タイ科？	12		12																12	0	12
タイ型		5	5				18		18										18	5	23
フエフキダイ科				14		14													14	0	14
ベラ科							6	20	26										6	20	26
ブダイ科	24		24	122		122	12		12										158	0	158
タチウオ科				27		27	36		36										63	0	63
ニザダイ科				41		41							2		2				43	0	43
アイゴ属				149	324	473	36	120	156	7	10	17					4	4	192	458	650
アイゴ属/ニザダイ科				14		14													14	0	14
モンガラカワハギ科										7		7							7	0	7
真骨類(未同定)				14	27	41		10	10		5	5							14	42	56
真骨類(保留)				338	216	554	96	130	226	7		7					8	8	441	354	795
真骨類(同定不可)	24	5	29	135	108	243	48	50	98	7		7				1	2	3	215	165	380
カエル類		11	11														8	8	0	19	19
ヘビ類	12	11	23	203		203	6		6	14		14	1	3	4	14	10	24	250	24	274
両生／爬虫類(保留)											5	5					4	4	0	9	9
ニワトリ？				27		27													27	0	27
鳥類(同定不可)				54		54				14		14							68	0	68
ネズミ科				14	27	41				7	5	12				1	8	9	22	40	62
食肉目		5	5																0	5	5
イノシシ	12		12	27		27													39	0	39
小型哺乳類(未同定)																	2	2	0	2	2
小型哺乳類(保留)					27	27	6		6	14		14				2	6	8	22	33	55
小型哺乳類(同定不可)				27		27	6		6	7		7	1		1	5		5	46	0	46
合計	144	52	196	2263	1215	3478	408	480	888	119	25	144	4	3	7	23	58	81	2961	1833	4794

第 84 表　首里城跡淑順門西地区の水洗選別試料検出骨の組成（NISP．分析率による補正値）

*魚歯・鱗は一部の分類群を除きNISPに算入していない．

種類	NISP													
	SJW-1		SJW-2		SJW-3		SJW-4		SJW-5		SJW-6		合計	
	2.5mm	1mm	2.5mm	1mm	2.5mm	1mm	2.5mm	1mm	2.5mm	1mm	2.5mm	1mm	2.5mm	1mm
サメ類			2										2	
エイ目			1	2									1	2
板鰓類												1		1
ニシン科		1	2	6		1	2						4	8
ウナギ属					1								1	
ウツボ科					1								1	
コイ科		1	1			1							1	2
サヨリ科			1	1	1	1							2	2
トビウオ科			9		3		2						14	
トビウオ科/サヨリ科	1		8										9	
ボラ科	1		10	4		2						1	11	7
カマス科			16	1	2								18	1
ハタ科A			2										2	
ハタ科	1		2		1								4	
ハタ型			2		1							1	3	1
キス科			1										1	
ギンガメアジ属			2										2	
アジ類(小型種)			4		1	2	1						6	2
アジ科	1		6	3	10	7							17	10
クロサギ科			1										1	
ヒメジ科？			1		1								2	
フエダイ科		1	5										5	1
クロダイ属	1		2	1	1	1							4	2
タイ科？	1												1	
タイ型		1			3								3	1
フエフキダイ科			1										1	
ベラ科					1	2							1	2
ブダイ科	2		9		2								13	
タチウオ科			2		6								8	
ニザダイ科			3						2				5	
アイゴ属			11	12	6	12	1	2				2	18	28
アイゴ属/ニザダイ科			1										1	
モンガラカワハギ科							1						1	
真骨類未同定			1	1		1		1					1	3
真骨類保留			25	8	16	13	1					4	42	25
真骨類同定不可	2	1	10	4	8	5	1				1	1	22	11
カエル類		2										4		6
ヘビ類	1	2	15		1		2		1	3	14	5	34	10
両生／爬虫類保留								1				2		3
ニワトリ？			2										2	
鳥類同定不可			4				2						6	
ネズミ科			1	1			1	1			1	4	3	6
食肉目		1												1
イノシシ	1		2										3	
小型哺乳類未同定												1		1
小型哺乳類保留				1	1		2				2	3	5	4
小型哺乳類同定不可			2		1		1		1		5		10	
合計	12	10	167	45	68	48	17	5	4	3	23	29	291	140

第 85 表　首里城跡淑順門西地区の水洗選別試料検出魚骨の組成（MNI．分析率による補正値）

＊SJW-2・SJW-3以外は資料数が少ないため除外した．

＊2.5mmと1mm資料の出土数を各試料の分析率で補正し，これらを合算した値に基づいてMNを1算出した．

＊サヨリ科は1個体当たりの腹椎数=40，トビウオ科は1個体当たりの尾椎数=17としてMNIを算出した．

種類	SJW-2	SJW-3
サメ類	1	0
エイ目	1	0
ニシン科	14	1
ウナギ属	0	1
ウツボ科	0	1
コイ科	14	10
サヨリ科	2	10
トビウオ科	4	1
ボラ科	41	1

（右段につづく）

種類	SJW-2	SJW-3
カマス科	54	6
ハタ科A	27	〈0〉
ハタ科	〈14〉	6
キス科	14	0
ギンガメアジ属	〈14〉	0
アジ類(小型種)	〈14〉	16
アジ科	41	〈10〉
クロサギ科	14	0
ヒメジ科？	14	6

（右段につづく）

種類	SJW-2	SJW-3
フエダイ科	27	0
クロダイ属	27	10
フエフキダイ科	14	0
ベラ科	0	10
ブダイ科	41	1
タチウオ科	1	1
ニザダイ科	27	0
アイゴ属	203	30
合計	581	111

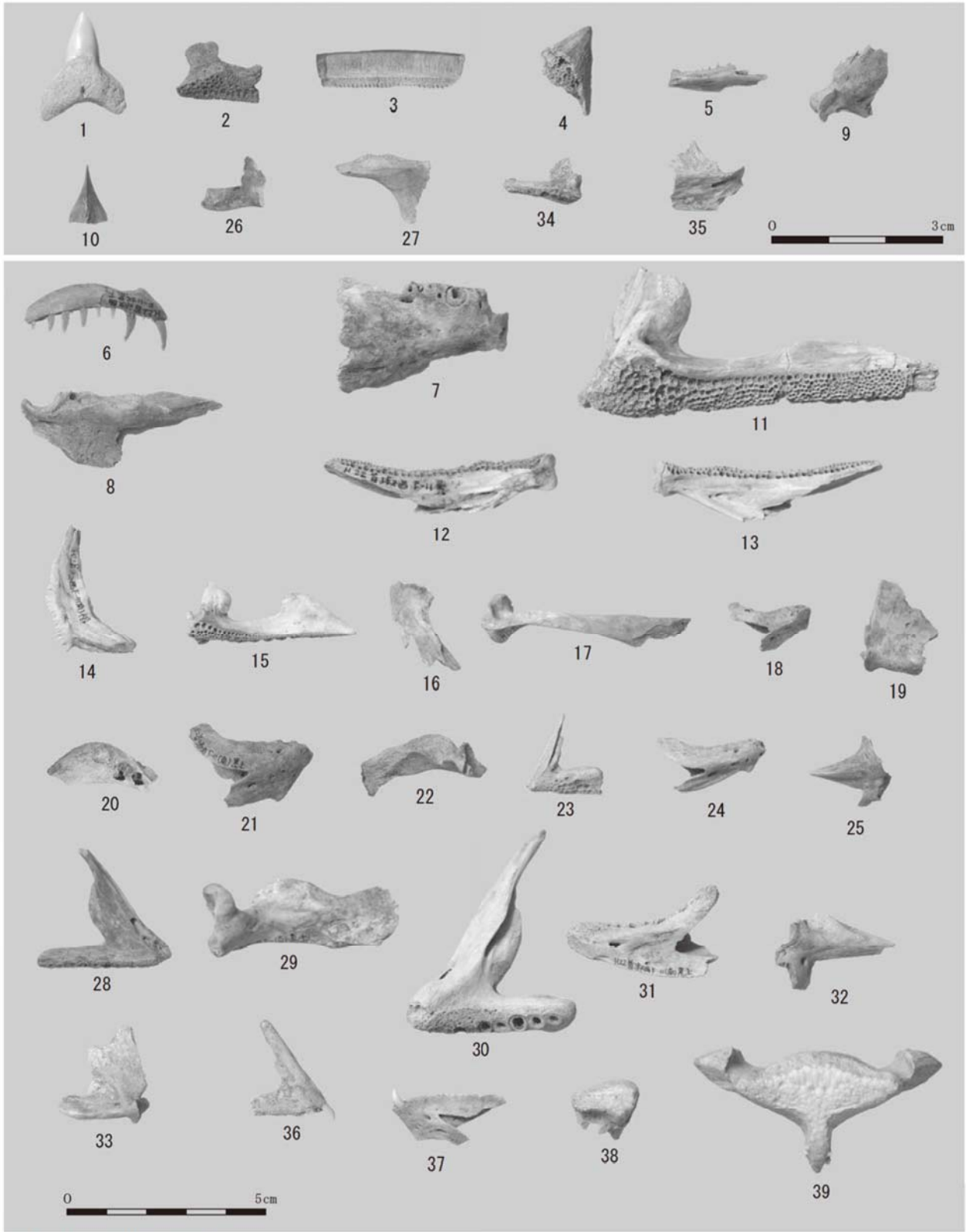


写真 45　脊椎動物遺体 1

メジロザメ科　1. 歯　**オオウナギ** 2. 右 主上顎骨　**トビエイ科** 3. 歯　**ボラ科** 4. 左 主鰓蓋骨　**カマス科** 5. 左 歯骨
タチウオ科 6. 右 前上顎骨 **アジ科（大型種）？**　7. 右 歯骨（カットマーク あり）　**アジ科（大型種）** 8. 右 角骨
9. 左 方骨　**アジ** 10. 稜鱗　**ハタ科 A** 11. 右 前上顎骨　12. 左 歯骨　13. 右 歯骨　14. 右 前鰓蓋骨　**ハタ科 B**
15. 右 前上顎骨 16. 左 前鰓蓋骨 **ハタ科** 17. 左 主上顎骨　**マダイ 亜科**　18. 右 歯骨　**マダイ 亜科？**　19. 左 方骨
タイ科 ヘダイ 20. 右 主上顎骨 21. 右 歯骨　**クロダイ** 22. 左 主上顎骨　23. 右 前上顎骨　24. 右 歯骨　25. 左 角骨
26. 右 方骨　27. 左 口蓋　**フエフキダイ科 アマミフエフキ** 28. 左 前上顎骨　**フエフキダイ科** 29. 右 主上顎骨
フエフキダイ科 ハマフエフキ　30. 右 前上顎骨　31. 右 歯骨　**フエフキダイ** 32. 右 角骨 **ハマフエフキ**　33. 右 方骨
フエダイ科　34. 右 前上顎骨　**フエダイ** 35. 左 角骨　**ベラ科 カンムリベラ** 36. 右 前上顎骨　37. 左 歯骨
ベラ科 シロクラベラ　38. 右 上咽頭骨　39. 下咽頭骨

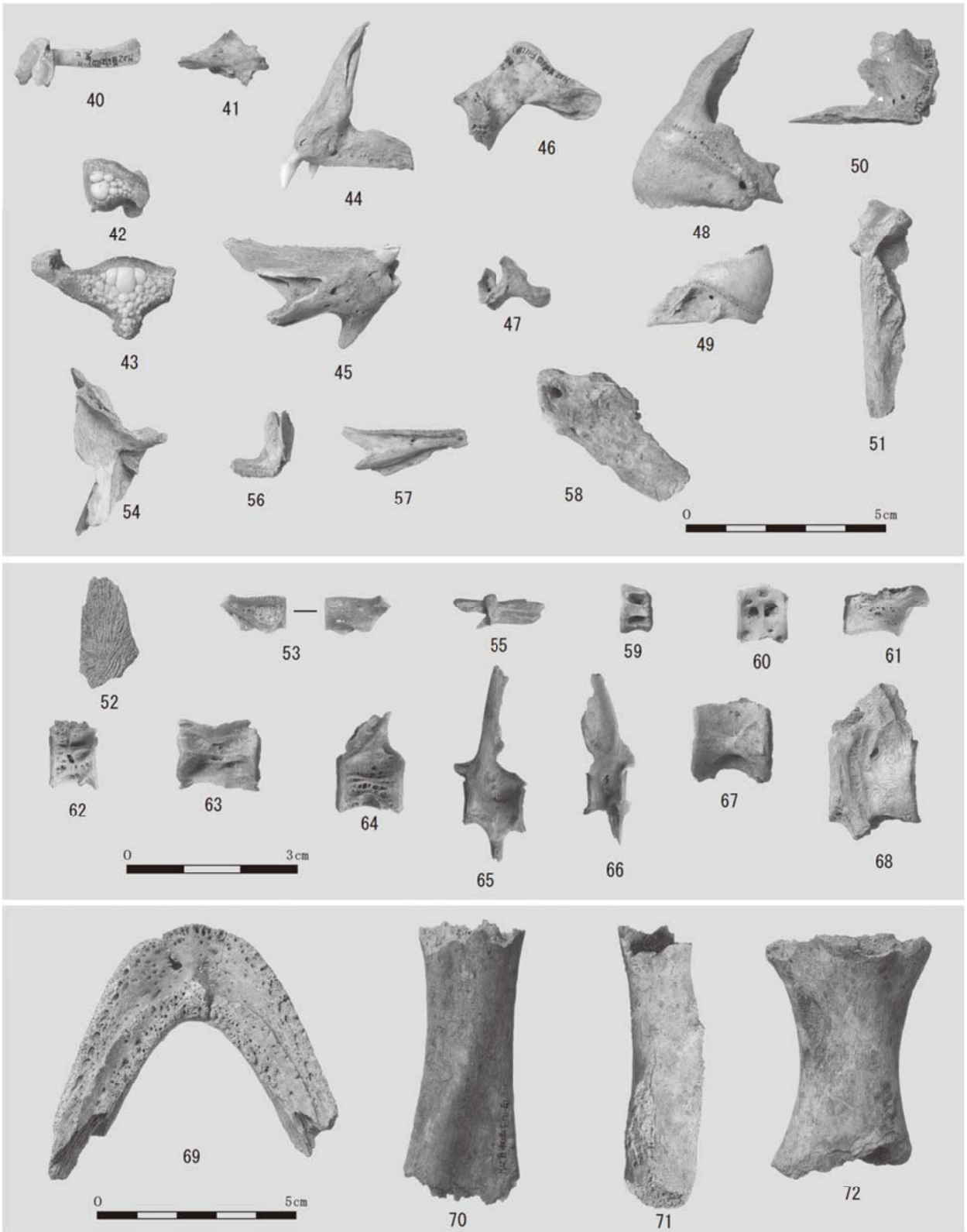


写真 46　脊椎動物遺体 2

ベラ科　40. 右　主上顎骨　41. 左　角骨　**ベラ科B**　42. 左　上咽頭骨　43. 下咽頭骨 **ベラ科**　44. 右　前上顎骨　45. 右　歯骨
ブダイ科　46. 右　主上顎骨 47. 左　主上顎骨　**アオブダイ属**　48.　左　前上顎骨 49. 右　歯骨
ブダイ科　50. 左　方骨　**ニザダイ科**　51. 右　舌顎骨　**アイゴ属**　52. 右　前頭骨　53. 左　歯骨
モンガラカワハギ科　54. 右　擬鎖骨　**コチ科**　55. 左　主上顎骨　**未同定真骨類**　56. 左　前上顎骨　57. 右　歯骨
58. 左　歯骨　**サメ類**　59. 椎骨　**ウツボ科**　60. 椎骨　**ボラ科**　61. 第1椎骨　**ダツ科**　62. 尾椎
アジ科（大型種）　63. 尾椎　64. 腹椎　**ニザダイ科**　65. 尾椎　66. 腹椎　**スマ**　67. 尾椎
モンガラカワハギ科　68. 椎骨　**アオウミガメ**　69. 下顎骨　**ウミガメ類**　70. 右　前烏口骨　71. 右　橈骨　72. 左　大腿骨

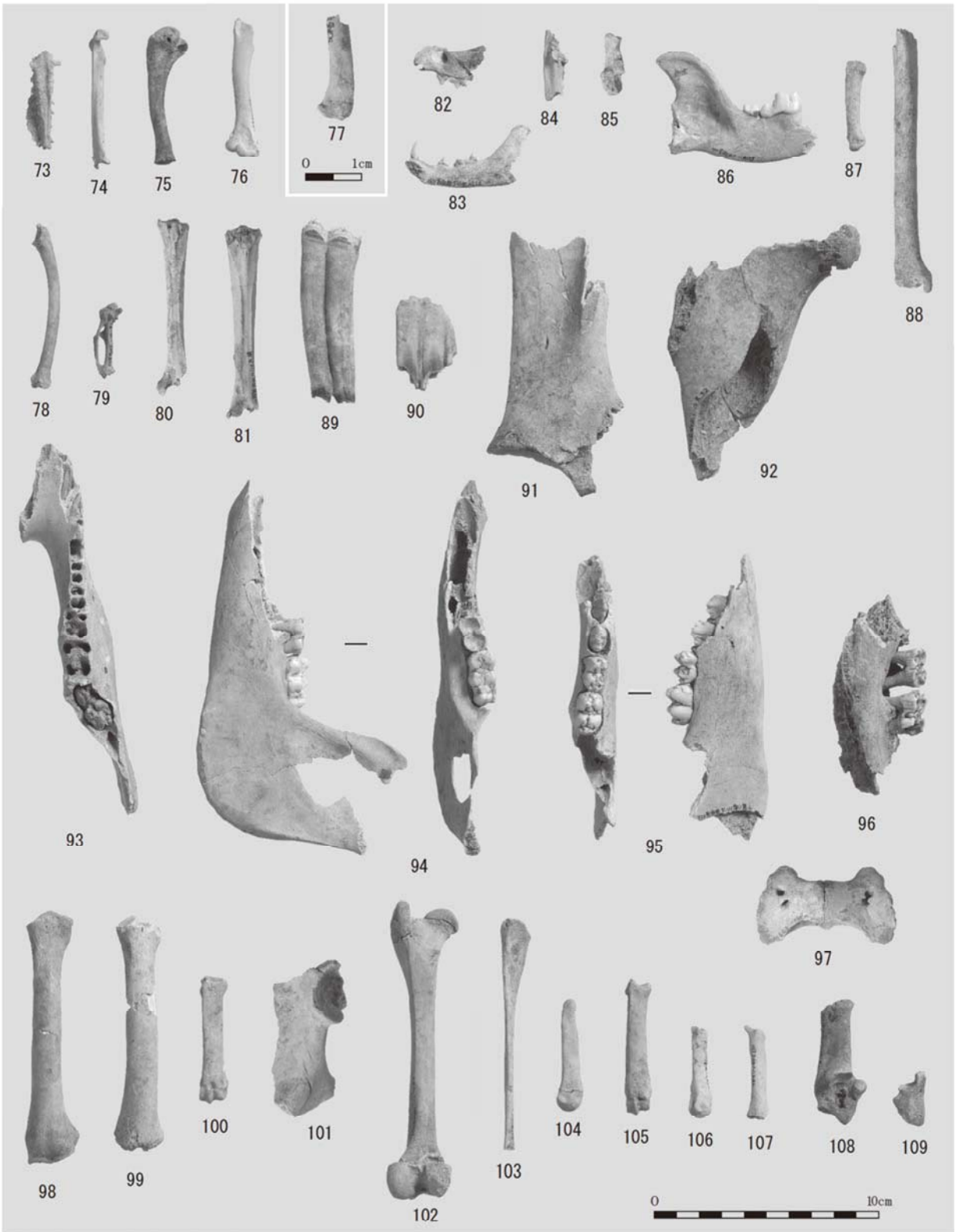


写真 47　脊椎動物遺体 3

ニワトリ　73. 複合仙骨　74. 右　鳥口骨　75. 左　上腕骨　76. 右　上腕骨　77 . 左　橈骨　78. 左　尺骨
79. 左　中手骨　80. 右 中足骨　81. 右 中足骨　**ネコ**　82. 左　上顎骨　83. 右 下顎骨　84. 右　尺骨　85. 左　踵骨
イヌ　86. 右　下顎骨　87. 左　第５中手骨　88. 右　脛骨　**ウマ**　89. 左　下顎臼歯　90. 左　下顎 M_3
91. 右　肩甲骨　92. 右　大腿骨　**ブタ**　93. 左　下顎骨　94. 左　下顎骨（メス）　95. 右　下顎骨　96. 左　下顎骨
イノシシ / ブタ　97. 環椎　98. 左　橈骨　99. 左　橈骨　100. 左　第４中手骨
101. 右　寛骨（カットマークあり）　102. 左　大腿骨　103. 右　腓骨　104. 左　第２中足骨　105. 右　第３中足骨
106. 右　第５中足骨　107. 右　第５中足骨　108. 左　踵骨　**ブタ**　109. 未節骨

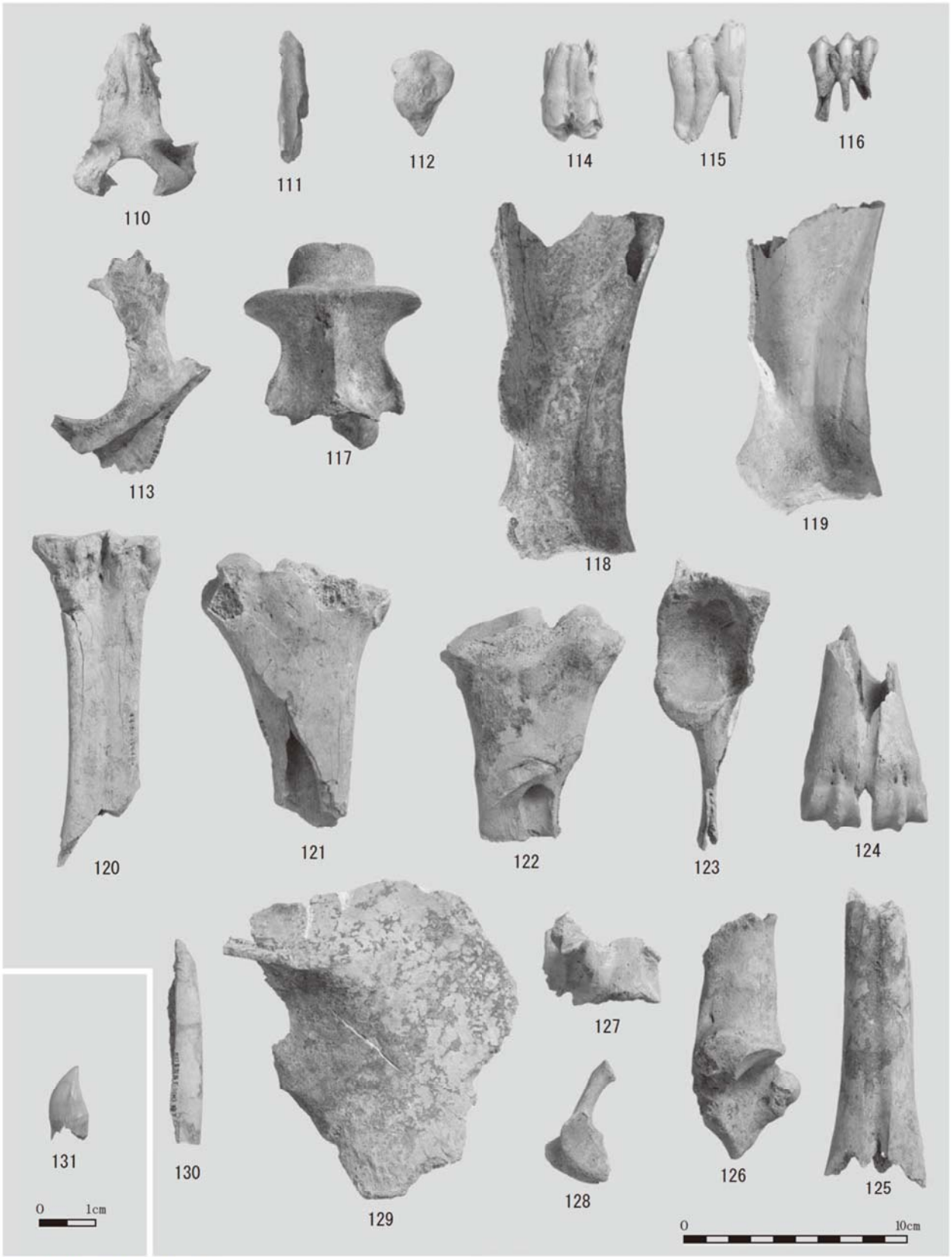


写真 48　脊椎動物遺体 4

シカ科　110. 後頭骨（後頭顆～頭蓋底）　111. 中足骨　112. 左　膝蓋骨　**ウシ**　113. 左　頬骨
114. 左　上顎 M^{1or2}　115. 右　下顎 M_3　116. 右　下顎 m_3　117. 軸椎　118. 左　肩甲骨
119. 左　肩甲骨（カットマークあり）120. 右　中手骨　121. 右橈骨　122. 左　橈骨（カットマークあり）
123. 右　寛骨　124. 右　中足骨　125. 左　中足骨　126. 左　踵骨
ジュゴン　127. 頭蓋底　128. 環椎　129. 左　肩甲骨　**イルカ類**　130. 鼻骨　131. 歯

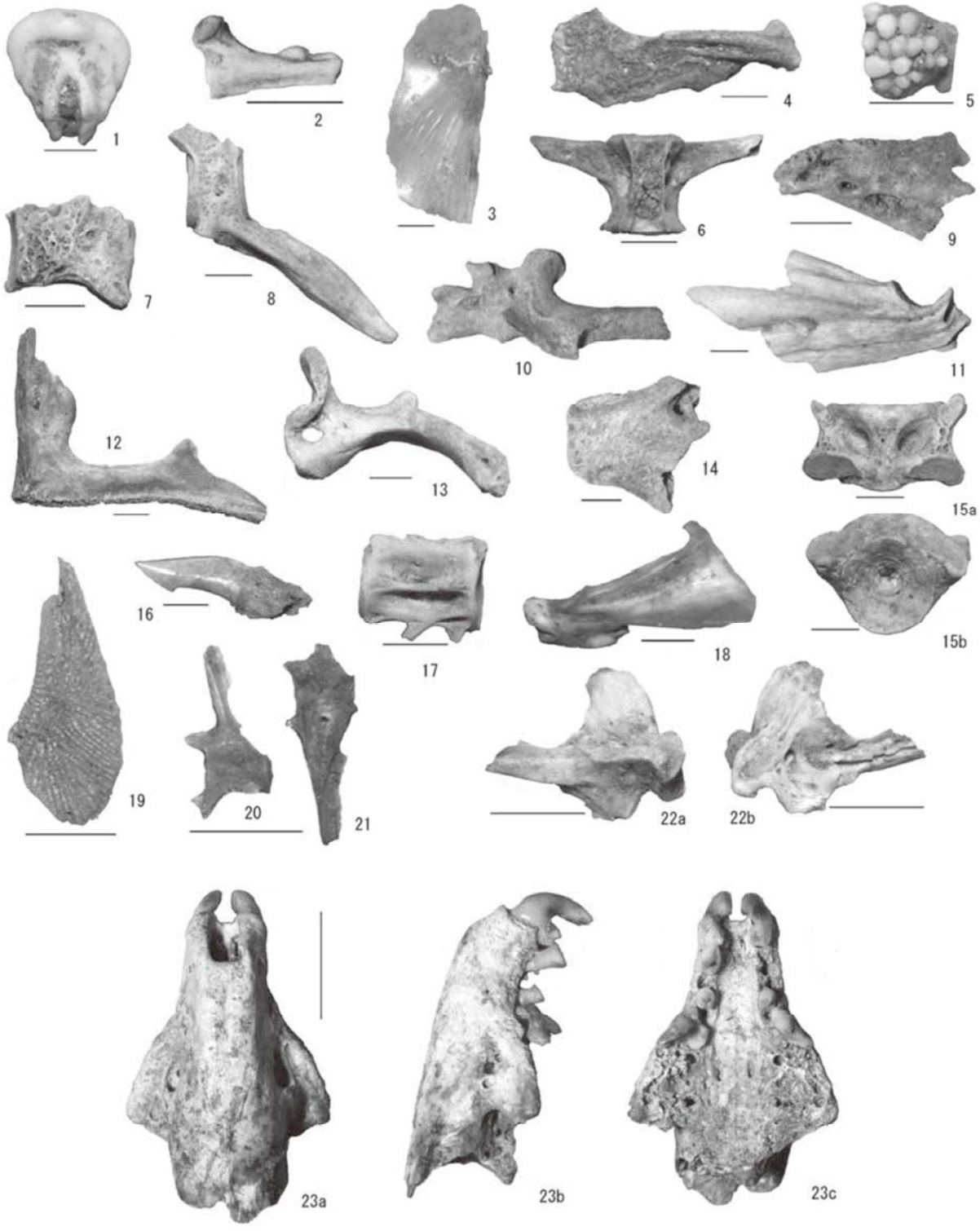


写真 49　脊椎動物遺体 5

1 エイ目歯，　2 ニシン科主上顎骨 R，　3 ニシン科主鰓蓋骨 L，　4 コイ科歯骨 R，　5 ベラ科上咽頭骨 L，6 サヨリ科腹椎，　7 トビウオ科腹椎，　8 トビウオ科尾椎，　9 キス科歯骨 L，10 カマス科主上顎骨 L，　11 カマス科角骨 L，　12 アジ科（大型種）前上顎骨 R，　13 アジ科（小型種）主上顎骨 R，14 アジ科（小型種）歯骨 L，15 ヒメジ科？ 第 1 椎骨，16 タチウオ科 歯，17 タチウオ科尾椎，　18 クロサギ科 角骨 R，19 アイゴ属 前頭骨 L，20・21 アイゴ属尾椎，22 真骨類未同定 方骨 R，23 ジャコウネズミ頭蓋骨　　スケールバーは 2mm　（23 のみ 5mm）

第４節　首里城跡淑順門西地区から出土した植物遺体と放射性炭素十四年代測定

高宮広土（札幌大学）・千田寛之（札幌大学古食性分析室）

遺跡調査の概要

a：遺跡の所在　沖縄県那覇市首里当蔵町
b：遺跡名称　首里城跡淑順門西地区
c：調査機関　沖縄県立埋蔵文化財センター
d：調査担当者　瀬戸哲也
e：発掘調査期間　平成 22 年９月１日～平成 23 年２月 25 日
f：文化　グスク文化
g：遺跡の相対年代　13 世紀後半～ 15 世紀中葉
h：遺跡の炭素十四年代　BP640 ± 20 ～ BP505 ± 20（較正年代 AD1289 ～ AD1441）　本章第５節参照

１）バックグラウンド

本発掘調査の主な目的は淑順門西地区から正殿に延びる城壁を確認することであった。その結果、戦前まで存在した城壁およびその下層に 13 世紀後半～ 15 世紀中葉に堆積した土層が検出された。この土層はⅣ－５層＜褐色粘質土＞（13 世紀後半）、Ⅳ－４層＜暗褐色土下層＞（14 世紀後半頃）、Ⅳ－ ３´ 層＜黒褐色土下層２＞（14 世紀末～ 15 世紀前半）、Ⅳ－３層＜黒褐色土下層＞（14 世紀末～ 15 世紀前半）、およびⅣ－２層＜黒褐色土上層＞（15 世紀中葉）にさらに細分された（瀬戸 2012 私信）。

瀬戸により、これら各層より植物遺体回収のために土壌がサンプリングされた。土壌サンプルは現場で全てバケツに移し、水につけ、炭化物を含む浮游物を 0.1 ㍉程度の網で掬ったという。回収された浮游物から炭化植物種子同定を実施することとなった。その結果、少なくとも 12 分類群の炭化種子を検出し、その合計は同定不可能を含め 39,561（粒／片）であった。以下に検出された炭化種子について報告する。

２）検出された炭化種子（第 86・92 表、第 107・108 図）

イネ *Oryza sativa* L.

イネ穎果（第 107 図写真１）が 2,474（粒）、その破片が 7,165（片）の合計 9,639（粒 / 片）が検出された。検出されたイネ穎果の総重量は 17g で、計測可能な種子（100 粒）の平均サイズ（長さ×幅×厚さ：以下同様）は 4㎜ × 2.2㎜ × 1.2㎜ である（第 87 表）。また、イネ穎果と思われるが保存状態が悪く断定できない種子 79（片）をイネ？とした。さらに籾片計 1,152（片）および小穂軸（第 107 図写真２）が計 118（片）確認された。

コムギ *Triticom aestivum* L.

コムギ穎果（第 107 図写真３）完形 582（粒）、破片 208（片）の合計 790（粒 / 片）回収された。コムギ穎果の総重量は 3.41g で、計測可能な種子（63 粒）の平均サイズは 3.3㎜ × 2.1㎜ × 1.8㎜ である（第 88 表）。また、コムギの穂軸（第 107 図写真４）111（片）も得られている。

オオムギ *Hordeum vulgare* L.

オオムギ穎果（第 107 図写真５）が 292（粒）、その破片が 166（片）の合計 458（粒 / 片）が検出された。オオムギ穎果の総重量は 2.11g で、計測可能な種子（23 粒）の平均サイズは 4.7㎜ × 2.1㎜ × 1.5㎜ である（第 89 表）。また、オオムギの穂軸と思われるものが１片回収されている。

ムギ類およびムギ類穂軸

保存状態が悪いためコムギあるいはオオムギに分類困難な炭化種子計 411（片）をムギ類とした。総重量は計 0.9g であった。また、コムギあるいはオオムギの穂軸が計 46（片）検出されている。この 46 片をムギ類穂

※サイズの単位はすべてミリメートル

写真1 イネ
(4.6 × 2.9 × 1.7)

写真2 イネ小穂軸
(2.4 × 1.1)

写真3 コムギ
(3.4 × 2.4 × 2.2)

写真4 コムギ穂軸
(4.2 × 1.8)

写真5 オオムギ
(5.6 × 2.5 × 1.9)

写真6 アワ
(1.2 × 1.2 × 1)

写真7 キビ
(1.7 × 1.8 × 1.4)

写真8 マメ科
腹面　側面
(5 × 3 × 2.9)

写真9 マメ科
へそ部分
(2.4 × 1.2)

写真10 タデ科
正面　上面
(1.6 × 1.2 × 1.2)

写真11 オトギリソウ科
(1.4 × 0.6 × 0.5)

写真12 キク科
(2.2 × 1.1 × 1.2)

写真13 イネ科
(1.4 × 0.5 × 0.3)

写真14 カヤツリグサ科
タイプA
(2.2 × 1.5 × 0.8)

写真15 カヤツリグサ科
タイプB
(1.4 × 0.2 × 0.5)

第 107 図　首里城跡淑順門西地区出土の植物遺体 1

※サイズの単位はすべてミリメートル

写真16 不明種子A
(2.3 × 2.2 × 2.2)

写真17 不明種子B
(2 × 2.4 × 1.2)

写真18 不明種子C
正面　　上面
(2.2 × 2.4 × 2)

写真19 不明種子D
(1.2 × 1.8 × 1.1)

写真20 不明種子E
(5.5 × 2.6 × 2.2)

第 108 図　首里城跡淑順門西地区出土の植物遺体 2

軸とした。

アワ　*Setaria italica* (L.)Beauv.

アワ穎果（第 107 図写真 6）が 12,100（粒）、その破片が 2,482（片）の合計 14,582（粒 / 片）出土した。アワ穎果の総重量は 5.72g であった。計測可能な種子（100 粒）の平均サイズは 1.3㎜ × 1.1㎜ × 0.9㎜ である（第 90 表）。ただし、検出されたアワで計測可能な種子は約 12,000 粒あり、バリエーションもみられた。ここに報告するサイズは、「典型的」なアワと理解して頂きたい。その他のアワのサイズ等については将来報告したい。また、アワ穎果と思われるが破損等により断定できなかった種子をアワ？として計 167（片）を分類した。この他にアワの内外穎が計 600（片）出土している。

キビ　*Panicum miliaceum* L.

キビ穎果（第 107 図写真 7）を計 24（粒 / 片）確認した。キビ穎果の総重量は 0.03g で、計測可能な種子（2 粒）の平均サイズは 1.7㎜ × 1.5㎜ × 1.2㎜ である（第 91 表）。また、キビ穎果と思われるが保存状態が悪く断定できない種子 8（粒）をキビ？とし、をこのカテゴリーに含めた。

ミレット

アワやキビまたはその仲間だと思われるが、さらなる分類が不可能であった炭化種子計 65（粒／片）を、ミレットとした。また、特徴が乏しいためミレットに含めてよいのか判断できなかった種子をミレット？とし、計 11（片）を分類した。

マメ科　Fabaceae

マメ科（第107図写真８）の種子が17（粒）とその破片が28（片）の合計45（粒／片）を確認した。回収されたマメ科種子は形態的特徴からおそらくダイズ属だと思われるが、破損や変形をしているものが殆どのためダイズ属とはせずにマメ科とした。しかし、1（片）のみではあるがダイズ属の臍部分（第107図写真９）が出土していることから、回収された炭化種子はダイズと考えてよいのかもしれない。なお、この他にマメ科の破片と思われるが激しく破損しているため断定できなかった計11（片）をマメ科？とした。

堅果類？

堅果類の子葉と思われるが断定に至らなかった種子を堅果類？と分類し、計４（片）をこのカテゴリーに含めた。また、堅果類の外皮と思われる植物遺体計６（片）堅果皮？とした。

タデ科　Polygonaceae

タデ科痩果(第107図写真10)が計２(粒)出土している。痩果の形状は断面が三角形状の広卵形を成している。

オトギリソウ科　Clusiaceae

オトギリソウ科（第107図写真11）の種子が計２（粒）検出された。種子は線状楕円形を成しており、種皮には縦方向の明瞭な隆線が３～４本存在する。

キク科　Asteraceae

キク科（第107図写真12）の痩果がLF548より１（粒）出土した。痩果の形状は狭卵状鈍菱形を成している。片側は直線状だがもう一方はやや湾曲している。

イネ科　Poaceae

イネ科の穎果（第107図写真13）を計６（粒）確認した。穎果の形状は線状楕円形で粒長の約３分の１を占める胚が存在する。

カヤツリグサ科　Cyperaceae

・タイプA(第107図写真14):LF No.535より１(粒)、LF No.555より１(粒)、LF No.647より１(粒)の合計３(粒)検出した。痩果は縦にやや細長い卵形を成しており、側面観は片側凸レンズ状である。痩果表面の中央部分がやや隆起している。
・タイプB（第107図写真15）：LF No.535より３（粒）、LF No.555より１（粒）の合計４（粒）出土した。痩果は広卵形を成しており側面観は片側凸レンズ状である。タイプAに比べ全体的にやや丸みを帯びている。痩果表面の中央部分がやや隆起している。

不明種子

・不明種子A（第108図写真16）：LF No.179より１（粒）検出された。形状は広皮針形を成しており、表面には浅い波状隆線が確認できる。
・不明種子B（第108図写真17）：LF No.561より１（片）出土している。破片のため元の形状は不明であるが、おそらく円形状であったと推察される。種皮は浅く微細な凹点によって構成された編目模様で覆われている。
・不明種子C（第108図写真18）：LF No.646より１（粒）回収された。種子の形状は断面が三角形状の円形をしており、基部には胚らしきものが確認できる。
・不明種子D（第108図写真19）：LF No.646より１（片）確認した。種子が破片であることに加え、加熱による変形のため同定が困難であった。種皮表面には明瞭な凹点によって構成された編目模様が存在する。また、基部には円形の窪みが確認できる。
・不明種子E（第108図写真20）：LF No.654より１（粒）出土した。形状は線状楕円形を成している。内部は

第86表　首里城跡淑順門西地区出土の植物遺体

LF No.	陶磁器の年代	層序	遺物取上げ時土層名	グリッド	イネ		イネ小穂軸	モミ	イネ？	コムギ		オオムギ		ムギ類	コムギ穂軸	オオムギ穂軸（？）	ムギ類穂軸	アワ		アワ内外穎	アワ？	キビ	キビ？	ミレット	ミレット？	マメ科		マメ科？	堅果類？	堅果皮？	タデ科	オトギリソウ科	キク科	イネ科	カヤツリグサ科	不明種子	同定不可能	合計
					粒	片	片	片	片	粒	片	粒	片	片	片	片	片	粒	片	片	片	粒/片	粒/片	粒/片	片	粒	片	片	片	粒	粒	粒	粒	粒	粒/片	片	粒/片
561	13th後～14th初	Ⅳ－5層	褐色粘質土	F-10		2						1						3																	1	9	16
小計(粒／片)						2						1						3																	1	9	16
推計土壌サンプル量(l)																																					10
分布密度(粒／片)／l																																					1.6
主要穀類の分布密度(粒／片)／l						0.2						0.1						0.3																			
539	14th後	Ⅳ－4層	暗褐色土下層	F-11北側	20	43	12	550	2	6	3	1		5	1			260	89	119	4	1		1												180	1297
小計(粒／片)						63	12	550	2	6	3	1		5	1			349		119	4	1		1												180	1297
推計土壌サンプル量(l)																																					50
分布密度(粒／片)／l																																					26.0
主要穀類の分布密度(粒／片)／l						1.26						0.02						6.98																			
550	14th末～15th前	Ⅳ－3´層	黒褐色土下層2	F-10						1		1																										2
555	14th末～15th前	Ⅳ－3´層	黒褐色土下層2	F-10	174	307	7	240	15	48	19	65	48	55				948	188	187	23	4		17		3	3	2			1	1		1	2		1317	3675
646	14th末～15th前	Ⅳ－3´層	黒褐色土下層2	E-10	107	156	41	118	7	29	12	47	13	39	1		5	678	114	26	18	1		5		2	2	1						2		1	1938	3363
647	14th末～15th前	Ⅳ－3´層	黒褐色土下層2	E-10	172	244	3	33	12	68	32	60	31	41	5		3	1354	336	44	46	8		16		7	9	2				1		2	1	1	2234	4765
650	14th末～15th前	Ⅳ－3´層	黒褐色土下層2	E-10	12	1				4		3		4													2										26
654	14th末～15th前	Ⅳ－3´層	黒褐色土下層2	E-10	52	16			1	13		7	4	11												2	6		1						1	25	139
小計(粒／片)						1241	51	391	35	226		279		150	6		8	3618		257	87	13		38		36		5	1		1	2		5	3	3	5514	11970
推計土壌サンプル量(l)																																					230
分布密度(粒／片)／l																																					52.0
主要穀類の分布密度(粒／片)／l						5.40						1.21						15.73				0.06															
546	14th末～15th前	Ⅳ－3層	黒褐色土下層	F-11	4						1		1															1								1	8
548	14th末～15th前	Ⅳ－3層	黒褐色土下層	F-11	1325	5198	7	31	17	291	79	66	36	179	70	1	24	5844	1080	18	18	3	?	2		1		3		4			1			2244	16549
630	14th末～15th前	Ⅳ－3層	黒褐色土下層	F-11北側	1																																1
小計(粒／片)						6528	7	31	17	371		103		179	70	1	24	6924		18	18	3	?	2		1		3	1	4			1			2245	16558
推計土壌サンプル量(l)																																					180
分布密度(粒／片)／l																																					92.0
主要穀類の分布密度(粒／片)／l						36.27						0.57						38.47				0.02															
179	15th中	Ⅳ－2層	黒褐色土上層貝混	F-11南側	28	33			6	21	3	2	1	3				23	10		1		1			1	5	1	1						1	51	192
535	15th中	Ⅳ－2層	黒褐色土上層	F-11北側	578	1165	48	180	19	101	59	39	32	74	34		14	2990	665	206	57	7		24	11	1	1	1	1	2	1			1	4		3210	9525
563	15th中	Ⅳ－2層	上層貝混	F-11南側																							1									1	2
632	15th中	Ⅳ－2層	黒褐色土上層	F-11	1																																1
小計(粒／片)						1805	48	180	25	184		74		77	34		14	3688		206	58	7	1	24	11	8		3	2	2	1		1	4	1	3262	9720
推計土壌サンプル量(l)																																					720
分布密度(粒／片)／l																																					13.5
主要穀類の分布密度(粒／片)／l						2.51				0.26		0.10						5.12				0.01															
合　計(粒／片)						9639	118	1152	79	787	3	458	0	411	111	1	46	14582		600	167	24	8	64	11	45		11	4	6	2	2	1	6	7	5	11210	39561

空洞になっており、中に粒長の半分以下のサイズの小さな種子らしきものが1個存在する。おそらく外側の部分は外皮のようなもので、内部に種子が存在しているのだろう。

同定不可能

微細な破片や保存状態が極めて悪いなどの理由で同定不可能だった計11,210（片）をこのカテゴリーに含めた。

3）まとめ

まず、お断りせねばならない点であるが、今回回収された炭化種子は短期間で分析するにはあまりにも量が多かった。平成24年4月からほぼ毎日、年末年始も元旦以外分析に集中した結果、全て同定することはできた。しかし、LF548は3～4割程カウントおよび計量することができなかった。今回の報告にはこの分は含まれていない。LF548はおそらく第86・92表に示した結果の倍以上の炭化種子が含まれている。この未報告の部分であるが、検出された植物遺体は他のサンプルと同様な炭化種子が検出され、その割合もアワが最も多く、イネがそれに次いでいた。つまり、新たな分類群は含まれていなかった。さらに、検出された炭化種子のパターンも以下に述べる他のサンプルと同様なものであった。それゆえ、未報告部分によって今回の分析結果が大きく左右されることはないと思われる。

その未報告の部分をのぞき、計39,561（粒/片）の炭化種子が回収された。同定された植物遺体では、アワが最も多く、14,582（粒/片）であった。アワに続き、イネ9,639（粒/片）、コムギ790（粒/片）、オオムギ458（粒/片）の順であった。これら4種の穀類で同定された炭化種子の約90%をしめ、籾や穂軸等を含めるとこれらの割合は約98%となる。

各層からの土壌サンプル量は、瀬戸によると土嚢一袋のサンプル量を約101とし、Ⅳ－5層＜褐色粘質土＞（約101）、Ⅳ－4層＜暗褐色土下層＞（約501）、Ⅳ－3´層＜黒褐色土下層2＞（約2801）、Ⅳ－3層＜黒褐色土下層＞（約1801）およびⅣ－2層＜黒褐色土上層＞（約7201）と推計されている。この推計をもとにすると植物遺体の分布密度はそれぞれ1.6（粒／片）／1、26.0（粒／片）／1、52.0（粒／片）／1、および92.0（粒／片）／1、13.5（粒／片）／1となる（第86表）。

13世紀後半の層からは16（粒／片）のみしか回収されていないが、14世紀以降の層からは多量の炭化種子（主に栽培植物）が検出されている。検出数からみると、各層においてアワが主でイネがそれに続く。黒褐色土下層において、アワとイネの検出数および分布密度が最接近するが、その他の層ではアワが主要にもみえる（第86表）。しかしながら、アワのサイズを考慮するとおそらくイネが同等あるいはそれ以上に重要であったと思われる。興味深いことに淑順門西地区出土の主要穀類の総重量は、イネが17gに対してアワは5.72gであった。各層においても、イネの検出重量はアワの2倍から3倍であった（第92表）。それゆえ、実際にはイネの方がより多く食されていたのではないであろうか。注意すべき点として、琉球列島における通常のフローテーションでは0.45㍉を最小のフルイサイズとしているが、今回0.1㍉程のメッシュにより土壌処理がなされた点である。それ故、アワが多量に回収されたと考えられる。

淑順門西地区の土壌サンプルからは、13世紀後半から15世紀中ごろまで大きな食性の変化は認められない。ただし、13世紀後半と14世紀以降を比較すると後者以降からは検出量が激増している。これは首里城（淑順門西地区）の利用度を示唆しているのであろう。第93表に今回検出された主要穀類の検出数と重量による割合を示す。

紙数の都合上、上記の簡単な報告のみとするが、今回イネの破片が多かったことやムギの穂軸（特にコムギ）が他の遺跡と比較すると多出したこと、アワのサイズにバリエーションがあったこと等、気にかかる点もあったことを記しておきたい。

最後に上記したように今回はフローテーション処理の方法が他の遺跡と異なっているため、淑順門西地区と他のグスク遺跡出土の植物遺体を単純には比較できない。今後は統一したシステムでの実施が望ましい。しかしながら、瀬戸の試みがなければ今回のような成果は得られなかったであろう。つまり、肉眼によるピックア

ップ、フルイあるいはウォーターセパレーションでは、これほどの炭化種子を回収することは不可能であったであろう。大型グスクを含め、グスク時代における栽培植物利用もようやくみえてきつつある（千田・高宮2012）。しかし、大型グスクに関しては、広大な面積から点的なサンプリングを実施し、植物遺体を回収している。大型グスクにおける植物利用を理解するためには、数カ所からのサンプリングが今後必要であろう。

謝辞：このような機会を与えてくださった沖縄県立埋蔵文化財センターの瀬戸哲也氏に心より感謝申し上げます。なお、本研究の一部は文部科学省科研費（課題番号　21101225）の助成を受けて行なった。

参考文献

千田寛之・高宮広土　2012「グスク時代の植物食利用」平成24年度第二回琉球環境文化史研究会発表資料

第87表　イネのサイズ（100粒）

LF No.	高さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	LF No.	高さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
179	4.5	2.7	1.5	539	4.6	2.9	1.7
〃	4.3	2.5	1.5	548	3.7	1.8	1.2
〃	4.6	2.9	1.6	〃	4.7	2.6	1.2
535	4.1	2.5	1.4	〃	4.3	2.4	1.2
〃	3.8	1.8	1.2	〃	4.6	2.6	1.9
〃	4.2	2.4	1.2	〃	4.6	2.3	1.3
〃	3.9	2.2	1	〃	3.5	1.9	1.1
〃	4.2	2.2	1.4	〃	3.7	2.1	1
〃	3.8	1.7	1.2	〃	3.4	2	1
〃	3.9	1.8	0.9	555	3.9	2.4	2
〃	4.5	2.3	1.2	〃	4.4	2.4	1.8
〃	3.6	2.2	0.8	〃	3.7	1.7	1.1
〃	4.1	2.7	1.4	〃	3.5	2.1	1.2
〃	3	1.7	0.9	〃	4.7	2.6	1.5
〃	2.9	1.7	0.8	〃	4.4	2.9	1.6
〃	3.5	1.7	0.9	〃	3.8	2.1	1
〃	4.1	2.5	1.4	〃	4.4	2.4	1.7
〃	4	2.1	1.3	〃	3.7	1.7	0.7
〃	3.3	1.8	1	〃	4.5	2.2	1.3
〃	4.8	2.5	1	〃	3.1	1.2	0.6
〃	4	2.7	1.3	〃	4.6	2.5	1.7
〃	3.9	1.9	1.1	〃	4.5	2.5	1.5
〃	3.2	1.6	0.7	〃	3.8	1.7	0.7
〃	4.1	2	1	〃	4	2	0.9
〃	4.5	2.5	1.5	〃	4.3	2.4	1.4
〃	3.6	1.3	0.8	〃	4.5	3.7	1.6
〃	3.4	1.8	1.4	〃	3.6	1.7	0.9
〃	3.3	2.1	1	〃	3.9	1.5	0.6
〃	3.5	1.9	1.1	〃	3.8	1.2	0.4
〃	4.3	1.8	1.2	〃	4.4	2.3	1.6
〃	3.4	2	1.1	646	4.2	2	1.1
〃	3.3	1.7	1	〃	4.3	3.6	1.5
〃	3.6	2	1.2	647	3.6	2.1	1.2
〃	3.6	1.9	1.1	〃	4.5	2.6	1.4
〃	4.4	2.5	1.3	〃	4.7	2.7	1.6
〃	4.2	2.1	1.2	〃	4.7	2.6	1.6
〃	4	1.9	1.1	〃	4.3	2.3	1.4
〃	4.8	2.5	1.3	〃	4	2	1.2
〃	3.3	1.8	1	〃	3.5	1.6	0.7
〃	3.7	1.6	1.2	〃	3.9	2.3	1.2
〃	3.9	1.5	1.2	〃	3.8	2.1	1
〃	4	2.5	1.4	〃	3.4	1.8	0.8
〃	3.6	1.9	1.2	〃	4.3	2.3	1.6
〃	3.9	1.7	1.1	〃	3.6	1.6	0.8
〃	4.3	2.3	1.5	650	4.5	2.5	1.5
〃	3.5	1.6	0.9	〃	4	2.6	1.5
〃	4.2	2.5	1.4	654	4	2.5	1.4
〃	4.2	2.5	1.7	〃	4.9	2.7	2.5
〃	3.7	2.1	1.3	〃	4.5	2.5	1.5
〃	3.3	1.5	0.5	平均	4	2.2	1.2
〃	4.1	1.9	0.8				

第88表　コムギのサイズ（63粒）

LF No.	高さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	LF No.	高さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
535	3.2	2.2	2	548	3.3	2.8	1.5
〃	3	2	1.7	〃	3.4	2.1	1.7
〃	3.2	2.2	1.7	〃	3.1	2.1	1.6
〃	3.6	2.3	1.9	〃	3	2.4	2.1
〃	3.7	1.9	1.5	〃	3.1	2.4	2.1
〃	3.4	1.9	1.7	〃	3	1.8	1.6
〃	3.9	2	1.6	〃	3.3	2.1	1.8
〃	3.1	2.1	1.9	〃	3	1.6	1.4
〃	2.9	2	1.8	〃	3.2	1.7	1.5
〃	3.8	1.9	1.2	〃	3.1	1.7	1.4
〃	3.4	2	1.7	〃	3	1.5	1.5
〃	3.8	1.6	1.4	〃	2.8	1.8	1.6
〃	3.4	2.4	2.2	〃	2.8	2	1.6
〃	2.7	2.5	1.9	555	3.6	1.9	1.5
〃	3.4	1.9	1.8	〃	3.7	2.5	2
〃	3.1	2.1	1.8	〃	3.7	2.3	1.7
〃	3.2	2	1.8	〃	3.2	2.5	2.2
〃	3.1	1.4	1.1	〃	3.4	2.3	1.7
〃	3.3	2.1	1.8	647	3.5	2.7	2.2
〃	3.3	2	1.5	〃	3.5	2.7	2.4
〃	3.6	1.6	1.3	〃	3.7	2.4	2.1
〃	3.6	2.1	1.5	〃	3.7	2.2	2.7
548	2.6	1.3	1.2	〃	3.7	2.9	2.4
〃	3	1.7	1.5	〃	3.3	2.4	1.9
〃	3.5	2.1	1.7	〃	3	1.9	1.4
〃	3.1	1.6	1.3	〃	2.9	1.8	1.7
〃	3.7	2.2	2	646	3.2	2.1	1.6
〃	3.8	2.6	2	654	4.2	2.4	1.8
〃	3.1	2.3	2	〃	3.4	2.5	2
〃	3.1	2.1	1.8	〃	3.2	2.1	1.7
〃	3.4	2.2	1.9	〃	4.1	2.6	2.1
〃	3.5	2.3	2	平均	3.3	2.1	1.8

第89表　オオムギのサイズ（23粒）

LF No.	高さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
535	3.6	1.8	1.1
〃	4.8	2	1.4
〃	3.7	2	1.2
〃	4.3	2	1.4
〃	5	2	1.2
〃	3.8	1.6	0.9
〃	4.4	1.8	1.2
548	5	2.2	1.5
〃	4.3	1.8	1.3
555	4.8	2.5	1.8
〃	5	2.4	1.8
〃	5.8	2.4	1.7
〃	5.1	2.4	1.6
〃	5.6	2.5	1.9
〃	5	2.5	1.9
〃	4	1.5	1.1
646	4.5	2.1	1.4
〃	4.3	1.8	1.2
647	4.6	2.2	1.4
〃	4.6	2.1	1.6
〃	5.5	2.6	1.9
〃	5.6	2.7	2.1
654	4.4	2	1.3
平均	4.7	2.1	1.5

第 90 表　アワのサイズ（100 粒）

LF No.	高さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	LF No.	高さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
535	1.1	1	1.1	555	1.1	1	0.9
〃	1.3	1	1.1	〃	1	1	0.7
〃	1.2	1.1	1	〃	1.3	1.1	1
〃	1.2	1.1	0.9	〃	1.3	1	0.8
〃	1.2	1	1	〃	1.2	1.1	0.8
〃	1.4	1.2	1.1	561	1.4	1.1	0.9
〃	1.4	1.2	1	646	1.4	1.1	0.9
〃	1.3	1.2	1	〃	1.2	0.9	0.5
〃	1.4	1.2	1.1	〃	0.9	0.7	0.4
〃	1.3	1.1	1.1	〃	1.2	0.9	0.8
〃	1.3	1.3	1	647	1.3	1.1	0.8
〃	1.3	1	0.7	〃	1.4	1.1	1
〃	1.3	1.2	0.8	〃	1.4	1.1	0.8
〃	1.2	1.1	0.9	〃	1.5	1	1
〃	1.3	1.1	1	〃	1.3	1.1	0.9
〃	1.3	1	0.9	〃	1.3	1.3	0.8
〃	1.3	1	1.1	〃	1.1	1	0.8
〃	1.2	1.1	1	〃	1.3	1.1	1.1
〃	1.3	1	0.9	〃	1.1	1.1	0.8
〃	1.2	1.1	1	〃	1.2	1.1	0.9
〃	1.2	1.2	0.9	〃	1.1	1	0.8
〃	1.3	1.1	0.8	〃	1.2	1	0.6
〃	1.2	1	0.9	〃	1.4	1	0.9
〃	1.3	1.1	1	〃	1.1	1.1	0.7
〃	1.2	1	0.8	〃	1.4	1.2	0.9
〃	1.2	1	0.6	〃	1.3	1.1	1.1
〃	1.3	1.2	0.9	〃	1.3	1.2	1
〃	1.5	1.2	0.9	〃	1.2	1.1	0.8
〃	1	0.9	0.6	〃	1.2	1.1	0.8
539	1.5	1.1	0.6	〃	1.4	1.2	0.9
〃	1.6	1.1	0.8	〃	1.1	1.1	0.9
〃	1.5	1.1	0.9	〃	1.1	1	0.8
〃	1.7	1	0.6	〃	1.1	1.1	0.8
〃	1.3	1.2	0.9	〃	1	1	0.9
〃	1.1	1.1	0.7	〃	1.3	1.1	0.9
〃	1.3	1.1	1.1	〃	1.2	0.9	0.6
〃	1.2	1	0.7	〃	1.3	1.1	0.6
〃	1.1	1.1	0.8	〃	1.2	1.1	0.8
548	1.3	1.1	1.1	〃	1.2	1	0.6
555	1.2	1.2	1	〃	1.2	1.2	0.8
〃	1.3	1	1.1	〃	1.1	1.2	0.9
〃	1	0.9	0.7	〃	1.2	1.1	0.8
〃	1.2	1.1	0.7	〃	1.2	1.1	0.7
〃	0.9	0.8	0.5	〃	1.2	1.1	1
〃	1.2	1.1	1.1	〃	1.3	1.1	1.1
〃	1.3	1.1	1.1	〃	1.4	1.1	0.8
〃	1.3	1.1	1.2	〃	1.2	1.1	0.8
〃	1.3	1.1	0.6	〃	1.3	1.1	0.8
〃	1.4	1.2	0.7	〃	1.2	1	0.6
〃	1.3	1.1	0.8	平均	1.3	1.1	0.9
〃	1.1	1.1	0.8				

第 91 表　キビのサイズ

LF No.	高さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
535	1.7	1.8	1.4
555	1.7	1.1	1
平均	1.7	1.5	1.2

第 93 表　主要穀類の割合

	検出数（%）	重量（%）
イネ	37.21	58.30
コムギ	3.05	11.69
オオムギ	1.77	7.23
ムギ類	1.59	3.09
アワ	56.29	19.61
キビ	0.09	0.17
合計	100	100

第 92 表　首里城跡淑順門西地区出土の穀類総量

LF No.	陶磁器の年代	層序	遺物取上げ時土層名	グリッド	イネ		コムギ		オオムギ		ムギ類	アワ		キビ	合計
					粒(g)	片(g)	粒(g)	片(g)	粒(g)	片(g)	片(g)	粒(g)	片(g)	粒/片	粒/片(g)
561	13th後～14th初	Ⅳ－5層	褐色粘質土	F-10		※			※			※			※
小計(g)						※				※			※		※
539	14th後	Ⅳ－4層	暗褐色土下層	F-11北側	0.05	0.04	0.02	0.01	0.01		0.01	0.08	0.01	※	0.23
小計(g)					0.09		0.03		0.01		0.01	0.09		※	0.23
550	14th末～15th前	Ⅳ－3′層	黒褐色土下層2	F-10			0.01		0.01						0.02
555	14th末～15th前	Ⅳ－3′層	黒褐色土下層2	F-10	0.81	0.38	0.26	0.06	0.37	0.12	0.12	0.35	0.05	0.01	2.53
646	14th末～15th前	Ⅳ－3′層	黒褐色土下層2	E-10	0.56	0.21	0.14	0.04	0.25	0.03	0.09	0.27	0.03	※	1.62
647	14th末～15th前	Ⅳ－3′層	黒褐色土下層2	E-10	0.96	0.35	0.39	0.12	0.38	0.09	0.11	0.54	0.09	0.01	3.04
650	14th末～15th前	Ⅳ－3′層	黒褐色土下層2	E-10	0.09	※	0.02		0.03		0.02				0.16
654	14th末～15th前	Ⅳ－3′層	黒褐色土下層2	E-10	0.41	0.06	0.09		0.05	0.02	0.05				0.68
小計(g)					3.83		1.13		1.35		0.39	1.33		0.02	8.05
546	14th末～15th前	Ⅳ－3層	黒褐色土下層	F-11	0.02			※		※					0.02
548	14th末～15th前	Ⅳ－3層	黒褐色土下層	F-11	4.43	5.06	1.28	0.21	0.37	0.10	0.35	2.43	0.27	※	14.50
630	14th末～15th前	Ⅳ－3層	黒褐色土下層	F-11北側	※										0.00
小計(g)					9.51		1.49		0.47		0.35	2.70		※	14.52
179	15th中	Ⅳ－2層	黒褐色土上層貝混	F-11南側	0.14	0.08	0.12	0.01	0.01	※	0.01	0.01	0.01		0.39
535	15th中	Ⅳ－2層	黒褐色土上層	F-11北側	1.76	1.58	0.47	0.16	0.17	0.10	0.14	1.42	0.16	0.01	5.97
632	15th中	Ⅳ－2層	黒褐色土上層	F-11	0.01										0.01
小計(g)					3.57		0.76		0.28		0.15	1.60		0.01	6.37
総重量(g)					17.00		3.41		2.11		0.90	5.72		0.03	29.17

第５節　首里城跡淑順門西地区から出土した植物遺体の放射性炭素年代測定

米延仁志（鳴門教育大学）

１．はじめに

首里城跡淑順門西地区から出土した植物遺体の放射性炭素（^{14}C）年代測定を実施した。

２．試料と方法

試料を超音波洗浄後，常法に則り酸･アルカリ･酸処理（1.2N 塩酸，1.0N 水酸化ナトリウム）を繰り返し行い，二次汚染炭素物質を除去した。調製後、試料の ^{14}C 濃度を加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代を算出し，プログラム OxCal（Bronk Ramsey，2009）を用いて暦年代較正を行った。較正曲線には IntCal09（Reimer et al.，2009）を使用した。

３．結果と考察

第 94 表に年代測定の結果を示した。^{14}C 年代の誤差は１標準偏差幅（±１σ）で，較正後の ^{14}C 年代については±２σで示した。^{14}C 編年は層序に従って上層ほど新しい年代値を示し，当時の造成状況をよく反映している。一方，各層序の較正年代は考古学的年代観より若干古い値を示しており，今後，同じ層序で複数の試料を測定し，ベイズ推定による遺構のモデル（例えば Inomata et al.，2013）を構築することでより詳細な編年が期待できる。

謝辞：本研究の一部は文部科学省科学研究費（課題番号 21101002，21101005）により行われた。

引用文献

C Bronk Ramsey: Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 2009, 51(1), 337-360.

PJ Reimer, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, PG Blackwell, C Bronk Ramsey, CE Buck, GS Burr, RL Edwards, M Friedrich, PM Grootes, TP Guilderson, I Hajdas, TJ Heaton, AG Hogg, KA Hughen, KF Kaiser, B Kromer, FG McCormac, SW Manning, RW Reimer, D A Richards, JR Southon, S Talamo, CSM Turney, J van der Plicht, CE Weyhenmeyer: IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP, 2009, Radiocarbon 51:1111-1150.

T Inomata, D Triadan, K Aoyama, V Castillo, H Yonenoub: Early ceremonial constructions at Ceibal, Guatemala, and the origins of lowland Maya civilization. Science. 2013, 340(6131): 467-471. doi:10.1126/science.1234493.

第 94 表　首里城淑順門西地区植物遺体の放射性炭素年代

No	試料	層序	遺物の時期	^{14}C 年代 (BP)*	較正年代 (cal AD)**	測定機関コード
179	イネ	IV-2 層	15C 中葉	515±20	AD1403(95.4%)1439	PLD-23648
535	コムギ	IV-2 層	15C 中葉	530±20	AD1328(7.4%)1342 AD1395(88.0%)1434	PLD-23649
535	オオムギ	IV-2 層	15C 中葉	530±20	AD1328(7.0%)1342 AD1395(88.4%)1435	PLD-23650
539	イネ	IV-4 層	14C 後半	555±20	AD1318(41.7%)1353 AD1389(53.7%)1423	PLD-23651
546	イネ	IV-3 層	14C 末～15C 初頭	525±20	AD1330(2.9%)1339 AD1396(92.5%)1437	PLD-23652
548	コムギ	IV-3 層	14C 末～15C 初頭	505±20	AD1406(95.4%)1441	PLD-23653
548	オオムギ	IV-3 層	14C 末～15C 初頭	595±20	AD1304(71.5%)1365 AD1383(23.9%)1408	PLD-23654
555	オオムギ	IV-3'層	14C 末～15C 初頭	640±20	AD1289(38.8%)1320 AD1350(56.6%)1392	PLD-23655
654	コムギ	IV-3'層	14C 末～15C 初頭	630±20	AD1290(38.3%)1327 AD1343(57.1%)1395	PLD-23656

*誤差は１σ，**IntCal09 Reimer et al., Radiocarbon (2009)を使用，誤差は２σ

第６章　総括

第１節　淑順門西地区のまとめ

今回の調査では、淑順門西側から正殿側へ延びる内郭城壁と関連する遺構、またそれより古い遺構・遺物包含層・造成層、さらに近代の礎石建物跡などを確認した。これまでは、個別に説明してきたわけであるが、本節ではまとめとして、層序により設定した時期ごとに遺構・遺物の様相をまとめていきたい。また、第３章で述べた時期については、陶磁器等の年代観に基づいて述べてきたものであるが、その根拠を他事例や既往研究などにより説明していきたい。なお、第109図は遺構及び層序の廃絶・埋没時期を模式的にその範囲を示したもの、第110図は近接する正殿地区（県教委1992）、右掖門地区（県埋文2003）、淑順門地区（県埋文2006）の遺構平面図との合成図であるので、本章と合わせて参照いただきたい。

グスク時代　層序としては、13世紀後半～16世紀前半までの堆積であるⅣ層を確認することができた。このⅣ層は、北区のＦ11北・南トレンチ、Ｅ・Ｆ10トレンチではさらに５つの層に分けられた。また、16世紀後半の遺物は、青花明Ⅲ類などが該当し、南区Ⅰ・Ⅱ層で出土していた。

なお、第５章第５節では、14世紀後半～15世紀中葉の年代と考えているⅣ－２・３・３´・４層において出土した炭化植物遺体の放射性炭素年代を報告いただいたが、較正年代では約50～100年ほど古い値が出されている資料もある。陶磁器による年代観についても今後は更なる検証が必要である可能性もあろう。

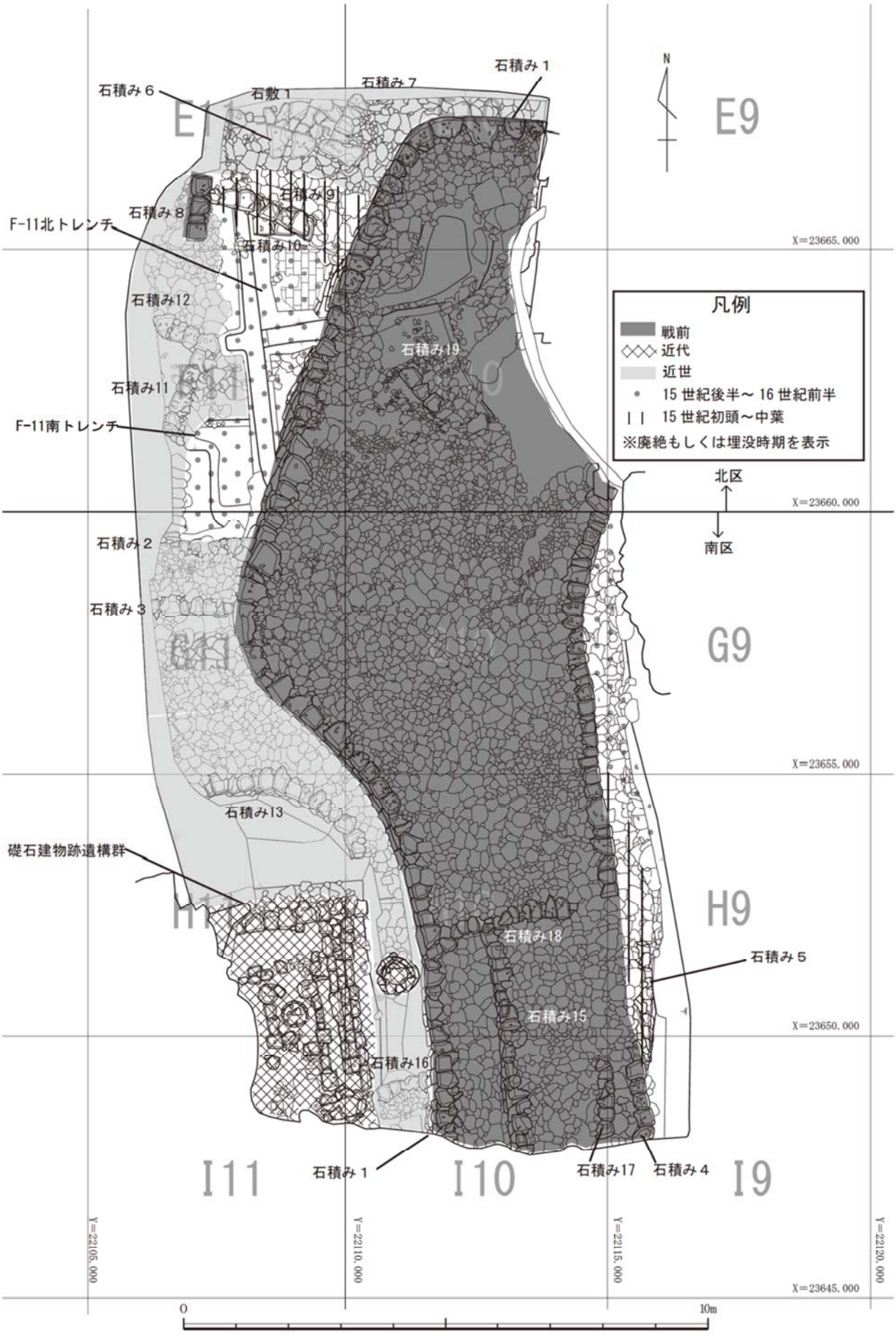
13世紀後半～14世紀前半　北区のⅣ－５層が相当する。グスク土器Ⅱ－ａ類を主体とし、青磁Ⅱ類、・褐釉陶器・ウシなどの獣骨、わずかだがイネ・アワ・オオムギが出土する遺物包含層である。グスク土器Ⅱ－ａ類は宮城・具志堅による第３様式に相当し、これらは青磁Ⅱ類、白磁Ａ（ロハゲ）、Ｃ１・２、Ｆ群（今帰仁タイプ）、カムィヤキＢ群と出土することが多く、実年代として13世紀後半～14世紀前半と考えている（瀬戸ほか2007）。この良好な事例として、今帰仁村今帰仁城跡第７・９層（今帰仁村教委1991）シイナグスク（今帰仁村教委2004・2009ｂ）が挙げられ、この時期は土器が９割以上を占めているとされる。本層は、白磁やカムィヤキが出土していないが、グスク土器の様相が類似していることから、当該年代と考えた。なお、金武正紀は、今帰仁城跡第９層において、土器が多く青磁鎬蓮弁文碗（本稿Ⅱ類）が多いことから、13世紀末とより限定した時期を提示している（金武2004・2007）。

首里城跡では、青磁Ⅱ類、グスク土器は他の遺物と混在して出土しており、右掖門地区では岩陰で埋葬人骨と共にグスク土器が確認されたこと（県埋文2003）、また御内原北地区第７層ではグスク土器だけが出土していたこと（県埋文2010）など、当該期に遡る可能性はあった。今回はその状況が更に明確となったと言えるが、依然としてまだ詳細な内容は不十分であるので、この時に既にグスクとしての防御施設の存在があったかは不明である。いずれにせよ、今帰仁城跡（今帰仁村教委1991）、浦添城跡（浦添市教委1985）、佐敷上グスク（佐敷村教委1980、南城市教委2006）などこの時期から形成されるグスクと同様にその形成が遡るものと言えよう。

なお、注目すべき遺物として、外面朱塗りのグスク土器Ⅱ－ｃ類（313）が出土しているが、その全容は不明である。

14世紀後半　北区のⅣ－４層が相当する。少量の青磁Ⅱ類、白磁Ｂ群、Ｃ２群（ビロースクタイプⅡ類）と共に、グスク土器、青磁Ⅳ類、白磁Ｃ３群、天目が出土している。遺物の出土量も増え、青磁では盤や香炉などの器形があり、その種類に多様性が見られつつある。また、ウシに加え、イノシシ／ブタ、ネズミ・ネコ・イヌなどの獣骨、わずかな魚骨、カンギク・アラスジケマンガイなどの貝類が出土しており、食糧残滓も一定量見られる。ただ、現時点では明確な遺構はなく、首里城跡の他地区でも京の内跡ＳＫ03（土坑）で青磁Ⅱ類や白磁Ｃ２群の出土が見られ同時期と考えられるが（県埋文2011）、未だにその様相は明確ではない。

年代の根拠であるが、白磁Ｃ３群（ビロースクタイプⅢ類）は、その中心年代は14世紀後半～15世紀初頭と考えられている（金武1990・2004・2010）。ただ、青磁Ⅳ類も含む今帰仁城跡第５・６層でも出土しており14世紀中頃とされている（金武2004・2006）。沖縄全体での出土傾向からでも、14世紀中葉～後半とやや古い年代にも幅があるように捉えている（瀬戸ほか2007）。また本稿では詳細には論じられないが、吉岡康暢は青磁Ⅳ類を14世紀前半の標識である新安沈船資料のものに限定するべきだとしており（吉岡ほか2011・吉岡



第109図　淑順門西地区遺構時期区分図

2012)、そのように考えると本資料の多くはそれには該当しないものと思われる。そこで、先の今帰仁城跡第５・６層の資料には白磁Ｃ２群も多く出土していることも考慮に入れて、14 世紀後半にその主体年代があると現時点では考えた。なお、首里城跡の他地区では、白磁Ｃ３群が一定量出土しているのは北殿地区の造成層が挙げられるが、後述するⅣ－３・３´層で見られる青磁Ⅳ´類など後出するものも出土している（県教委 1995)。また、青磁盤は口縁端部を上方につまみ上げたＡ類（287）が出土するようになり、このタイプの出現時期を確定できる可能性がある。

この他、このⅣ－４層からは、Ⅳ－５層からも出土した壺Ⅱ－ａ類の他、壺Ⅱ－ｂ類（302 ～ 305）がまとまって出土している（図版６－４・５)。これは、板状工具による調整がなされ、焼成が硬質で、赤色粒が含まれることから宮古地域の土器と思われるもので、これまで例が見られない。今後の事例増加を待ちたい。

14 世紀末～ 15 世紀初頭　北区のⅣ－３・３´層、石積み 10 が相当する。Ⅳ－３´層は、厚さ 50cm ほどの礫層を含んでおり造成土と考えられ、その上層のⅣ－３層は炭化物で充満した土層である。両層では、青磁Ⅴ類が若干見られるが、青磁Ⅳ・Ⅳ´類（盤はＡ類）が主体で、褐釉陶器、タイ産陶磁器、大銭・洪武通寶を中心とした銭貨が出土している。Ⅳ－３層では特に炭化物が多く、イネ・アワ・コムギ・オオムギなどが見られるが、Ⅳ－３´層でも部分的に炭化物が集中する部分がある。前者では高麗・大和系瓦も多く出土しているが、後者は量的には少ない。食糧残滓も前層までよりはさらに増加し、獣骨ではイノシシ / ブタやニワトリが主体を占めヤギも加わり、魚骨・貝類も量的に多くなっている。遺構は、Ⅳ－３´層の直上に石積み 10 が構築され、その全容は不明だが、この段階に造成がなされ、瓦をもった何らかの建物が付近にあったことは言えよう。

年代の根拠であるが、青磁Ⅳ類に加え、Ⅳ´類が出土していることに注目したい。この青磁Ⅳ´類は、いわゆる佐敷タイプ碗という玉縁口縁で見込みを釉剥ぎする一群（金武 1990）とほぼ相当するものと考えている。これも詳細には論じられないが、このタイプは近年の研究では概ね 14 世紀末～ 15 世紀初頭と考えられているように見受けられ（上田 2006、吉岡 2012)、ここでもそのように考えた。なお、これまで泉州窯系と呼ばれることが多かった磁灶窯系青磁（254）もⅣ－３´層から出土しており、年代の一端を抑えられる資料であろう。

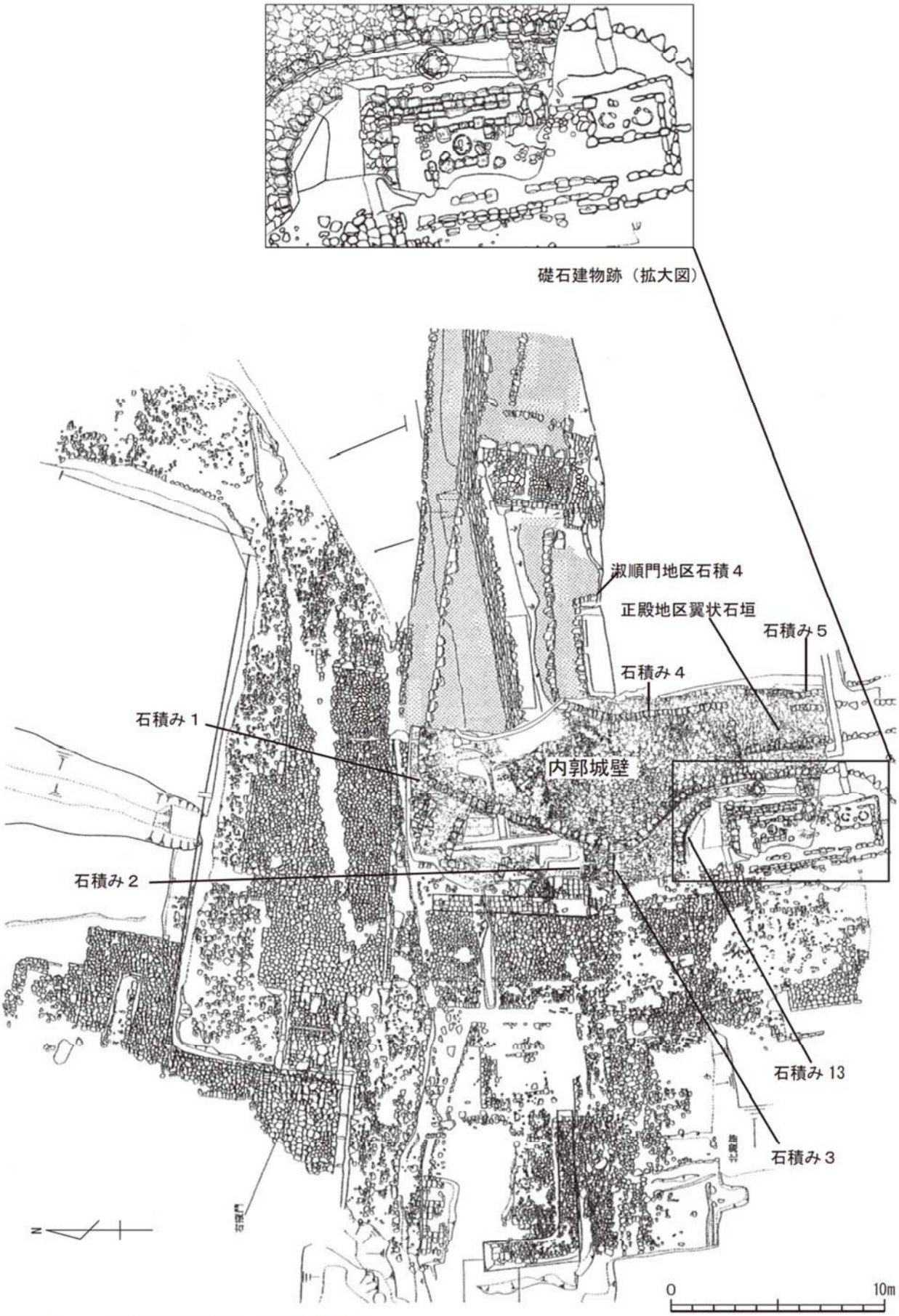
さて、首里城跡御内原北地区の第６層では、青磁Ⅳ・Ⅳ´類が主体でやはり炭化物を多く含んだ層が見られ、その様相はⅣ－３層と類似していると考える。報告者は、14 世紀後半～ 15 世紀前半の陶磁器が主体として捉えているが、15 世紀代の火災層として志魯・布里の乱の 1453 年にその一点を求めている（県埋文 2010)。ただ、後述するように 15 世紀中葉と考えられている陶磁器組成とは、青花や青磁Ⅴ－２類（雷文帯碗）などが含まれていないことから、15 世紀前半でもその初頭に近い年代が妥当ではないかと考えている（瀬戸ほか 2007)。

当該期の注目すべき遺物としては、骨製品が出土していることで、特に笄状製品（276）が見られる。これまでには南城市（旧玉城村）糸数城跡（玉城村 1991）で見られており、本州の事例とは中央に溝がない点で異なるが、時期が抑えられる点が重要と思われる。

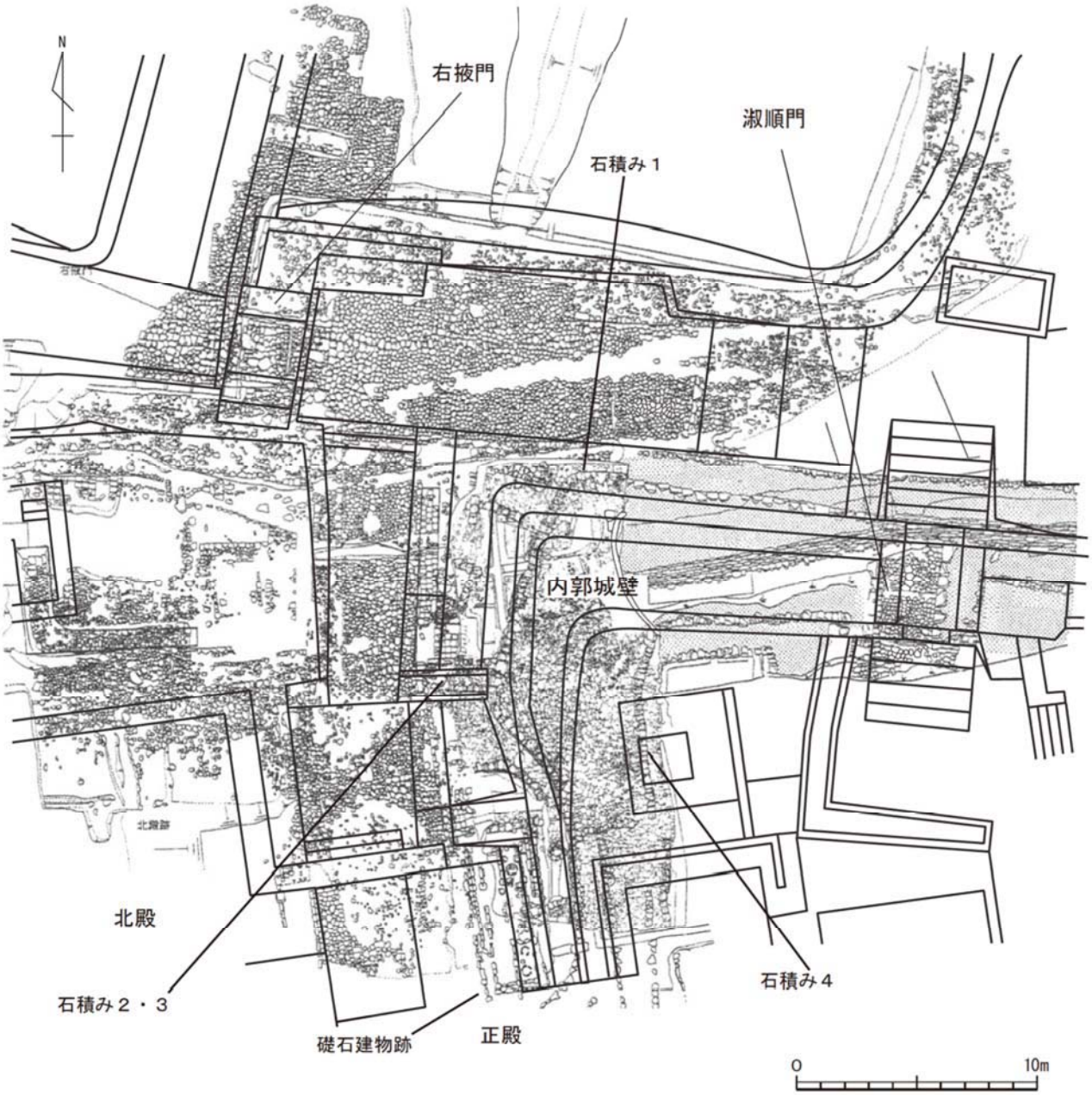
15 世紀中葉　北区のⅣ－２層・石積み９・19、南区の石積み５が相当する。Ⅳ－２層は、大量の獣魚骨、貝類を含んだ遺物包含層で、金属製品も多く見られる。陶磁器では、青磁Ⅴ－２類、青花明Ⅰ類、褐釉陶器壺５類、タイ産陶磁器が出土し、京の内跡ＳＫ 01 の出土組成と類似している（県教委 1998 ａ)。この年代観は、『明実録』の 1459 年条「本国王府失火。延焼倉庫銅銭貨物。」の記事を根拠とし、陶磁器の年代観も概ね矛盾がなく、1459（天順３、尚泰久６、長禄３）年以前の 15 世紀中葉を中心とした年代とすることが幅広く受けられている（金城 2003、亀井ほか 2002、吉岡 2011)。本資料もこの年代を裏付けられる資料と言えよう。

特徴的な陶磁器を挙げてみたい。青磁では、Ⅴ－２類碗が量的に多いが、通常の雷文ではない唐草文風が描かれるもの（97）もある。また、青磁盤ではこれまで主体であった盤Ａ類ではなく、口縁端部が肥厚したＢ類（103)、水平の鍔縁口縁のＣ類（106)、稜花口縁のＤ類（104・107）などが出土しており、多様なタイプが見られる。酒海壺蓋（108）は、外面には「禄」字銘、内面には印花が見られ、釉も発色良く非常な優品と思われる。青花碗では、外反する明Ⅰ－１類と、直口する明Ⅰ－２類が見られ、後者の見込みに水草文の間に「坯」という字が描かれたもの（116）があり、あまり類例を知らない。褐釉陶器では、肩部に「関〇」の刻印があるもの（123）も例を見ない。類例は見られないが、胎土の特徴よりタイ産と考えられるものとして、オリーブ灰色の釉がかかる肩部に４条の圏線が入る黒褐釉陶器壺（128・129)、口縁内面が幅広く肥厚する無釉平鉢（125）がある。

グスク時代において、当該期のものが最も多く出土しており、陶磁器以外にも注目すべきものがある。金属



第 110 図　淑順門西地区周辺遺構合成図

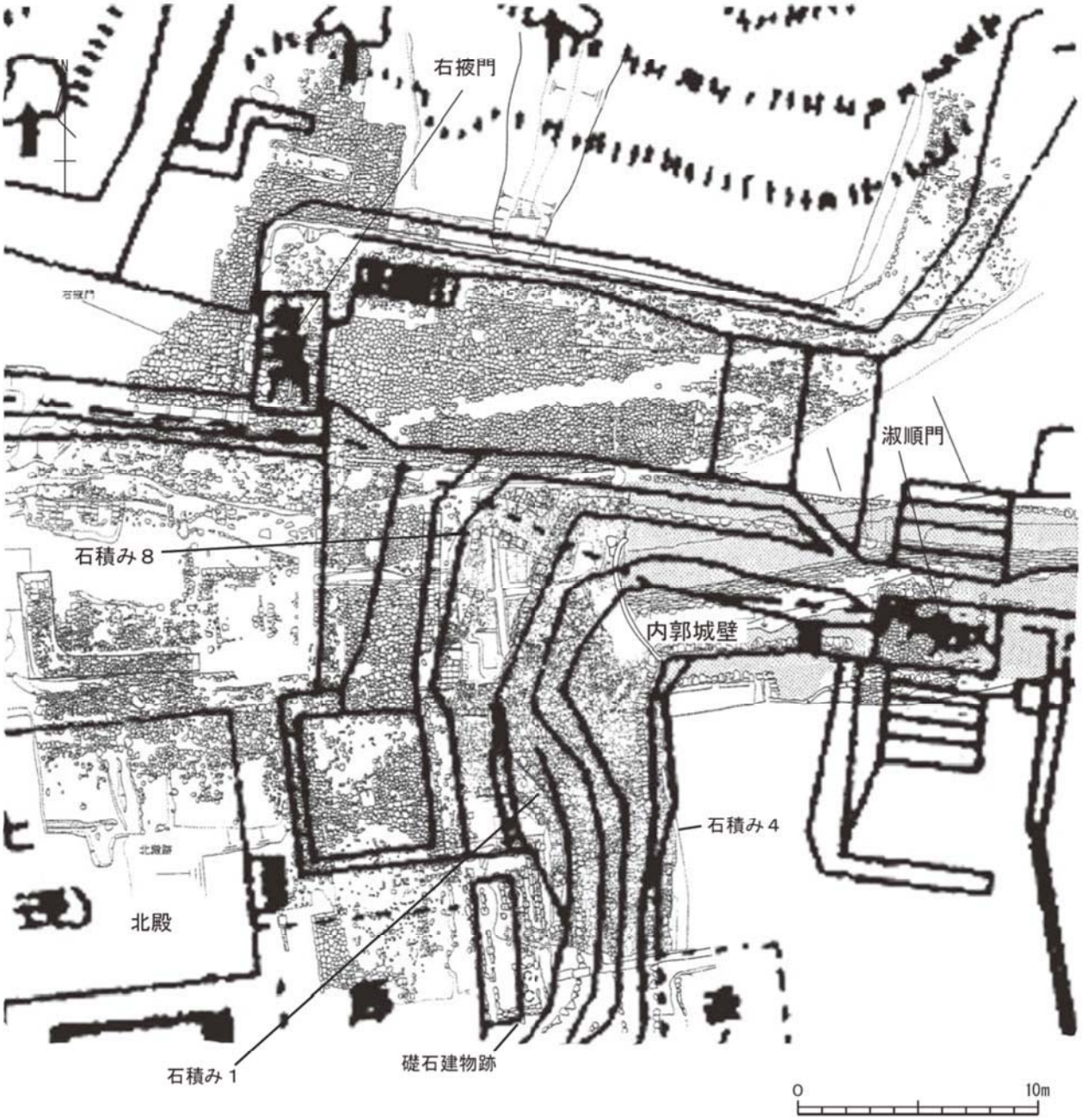


第 111 図　横内家資料平面図との重ね図

製品は、武具・甲冑類が多いが、錠前（157）・鍵（158・159）、素文八稜鏡（164・165）など多様なものがある。銭貨は、洪武通寶・永楽通寶も見られるが、北宋銭や無文銭が多い。食糧残滓は、全層までと比べると、貝類が約 30 倍、獣骨が約３倍、魚骨が約７倍と桁違いの出土量が見られる。貝類や魚骨は多様な種類が見られるのに対し、獣骨はイノシシ / ブタとニワトリに特化される傾向が見られる。炭化種子も本層でも多く見られ、やはりイネ・アワ・コムギ・オオムギなどがある。

遺構では、全容は不明だが石積み５・９、後述する内郭城壁内に見られる方向が全く異なる石積み 19 があるので、戦前まであった内郭城壁とは別の城壁があったと思われる。また、食糧残滓等が大量に出土したことから、この時期には本場所は廃棄場であった可能性が考えられる。

15 世紀後半～ 16 世紀前半　北区Ⅳ－１層、南区Ⅳ層、それに覆われる内郭城壁（石積み１・石積み４）、これと同時に造られたと考えられる翼状石垣と呼称された石積み 15・17（県教委 1992）、それに接する石積み 18 が相当する。陶磁器は、青磁Ⅵ類、青花明Ⅱ類などが出土しており、15 世紀後半～ 16 世紀前半の可能性が考えられる（瀬戸ほか 2007）。北区においては、石積み１は本層以後に部分的にそのときの基盤を布掘り状に掘り込んで根石を据える形で造られたと考えている。ただ、根石を確認したＦ 11 トレンチでは、被熱した石も



第 112 図　旧首里城図（阪谷図）との重ね図

見られ、この以前からあった石積みを改変した可能性も考えられる。また、石積み４もその根石とその東側に見られる礫群がⅣ層に覆われているので、この時期にはあったと考えている。ただ、後述するように、内郭城壁の平面プランが明治期以前と考えられている横内図（第 111 図）ではなく、昭和初期の阪谷図（第 112 図）と合致することから、その改変の時期がもっと新しいとの意見も考えられる。ただ、出土遺物の大勢からは本時期まで遡るのではないかと考えた。

近世　石積み２・３・６・７・９～13・16、石敷１が相当する。これらは先述の北区Ⅳ－１層より新しいものであるが、さらに石積み 13・16 はⅢ層に覆われている。このⅢ層は、これまでと同様にグスク時代の遺物が中心だが、宮古式土器や沖縄産初期無釉陶器と多くの瓦・漆喰が出土している。瓦は明朝系で、石井分類で軒丸瓦Ａ－１－Ⅰ類・Ａ－２－Ⅱ類・Ｂ－２－Ⅱ類、新資料である巴文、軒平瓦ａ－１－Ⅰ類・ａ－２－Ⅱ類、喜名窯系瓦が共伴している。瓦の組み合わせとしては灰褐色系より赤色系に代わる移行期直前のものとされ、同時性があるものである。ただ、陶磁器はそれほど多くなく、現時点では 17 世紀代が下限とするものであるが、厳密に限定するのには材料が少なく、大まかに近世前半とするに留めたい。また、石積み２・３は横内図（第

111 図）に見られるので、明治期以前までにあったと考えられるが、他のものは見られない。つまり、この段階の多くの石積みは近世前半のものと考えたい。なお、これらの石積みは全て内郭城壁外側である石積み１に接して作られており、その関連するものもしくは補強する役目をもったものと考えられる。

出土遺物としては、Ⅲ層より出土した金と銀の合金と考えられるもの（483）があり、銀が重要視された近世前半の資料として重要な背景をもつものである。なお、宮古第一型式土器（478・479）が出土しており、近世段階には確実に宮古の文物が首里城に搬入されていることを裏付けよう。

近代　礎石建物跡遺構群が相当する。この遺構は、過去の正殿・右掖門地区の調査で検出された遺構と合わせると、南北２間（約 1.8 m）×東西６間（約 5.4 m）のプランをもち、内部には４基の埋甕、東西には石組み溝を有する建物跡である（第 110 図）。機能としては、1879 ～ 1896 年つまり明治前半期に配置された熊本鎮台沖縄分遣隊配置図（第５図）には、厳密は内郭城壁内側に描かれるが、この位置周辺に「厠」があったとされることから、トイレ跡と考えられる。また、昭和初期の阪谷図（第 112 図）にも長方形の建物と思われるものが、この位置に描かれているので、この時期にもあった可能性が高い。

また、内郭城壁は阪谷図（第 112 図）とは、その形状・位置が合致しており、おそらく戦災に遭うまでこの状況であったと思われる。さらに、石積み８は、この内郭城壁に接する石積みで最も新しいもので、やはり阪谷図ともそのラインが一致しており、当該期のものと考えられる。

一方、先述したがこの内郭城壁は明治期以前の横内図（第 111 図）とはその方向・位置がずれている。このことから、明治期以後に改修されたという見解も出てくるのである。確かに、内郭城壁の根石を据えるときの堆積層であるⅣ－１層には近世・近代の遺物が若干含まれていた。ただ、この調査で検出した内郭城壁全体が近代に改修したとするならば、横内図に載っていた石積み２・３もこのⅣ－１層の直上に構築されることから矛盾が生じてくるのである。この検証については、復元整備が完了した現時点では困難であるが、将来の再整備がなされる際には再検討する機会が与えられることを期待したい。

第２節　奉神門埋甕地区のまとめ

今回の調査は、前回の調査で確認されていた奉神門前の階段の間に４基検出された埋甕遺構の構造・時期を明らかにするために実施した。それにより、埋甕は周辺の石敷きと共に設置されたことが分かった。また、埋甕内にはその上半の破片が見られ、それを接合・復元することにより、器高 84.5 cmを測ることが分かり、40 cm程度が外に出ていたことが想定され、それは明治期の古写真からも裏付けられた（写真 39）。

出土遺物からその年代を検討する。石敷き下の堆積層より、京系陶器碗、清代の青花碗、沖縄産施釉陶器急須、近世灰褐色及び赤色系瓦が出土しており、これらは概ね 17 ～ 18 世紀代のものである。さらに、乾隆通寶（初鋳 1736 年）、寛永通寶鉄一文銭（初鋳 1739 年）が出土していることから、18 世紀中葉という年代に絞ることができる。そして、この年代に文献史料で該当するものとして、最も新しく奉神門を改修したとされる 1754（尚穆３、乾隆 19、宝暦４）年の可能性が高いものと思われる。

さて、この埋甕が据えられた後は、どのような状況にあったのであろうか。これについては、埋甕内の堆積状況から考えてみる。埋甕内の下層（２～４層）は、土の色調から若干水の影響を受けたと思われたが、陸産貝類が多く見られたことより土が堆積しはじめている段階では滞水していた状況は難しいとされた。ただ、埋甕に全く何も入っていない状況を想定するのも困難であるので、もし水が入れられたならば、常時管理されていたことが考えられる。そうなると、防火用の天水甕という役目が考えられるが、これを確実に裏付ける情報は現時点では得られていない。今後の機会を見て、甕内の土壌分析などを試みる必要があろう。

また、埋甕内には、数cmのサンゴ礫が多く混じっており、周辺にこれらが敷かれていた可能性も考えられる。なお、非食用種の小形海産貝も見られることもそのことを裏付ける。また、埋甕内には、寛永通寶鉄一文銭が４枚出土しており、中に投げ込んだかは別として、周辺に銭貨が見られるような状況であったとは言えよう。

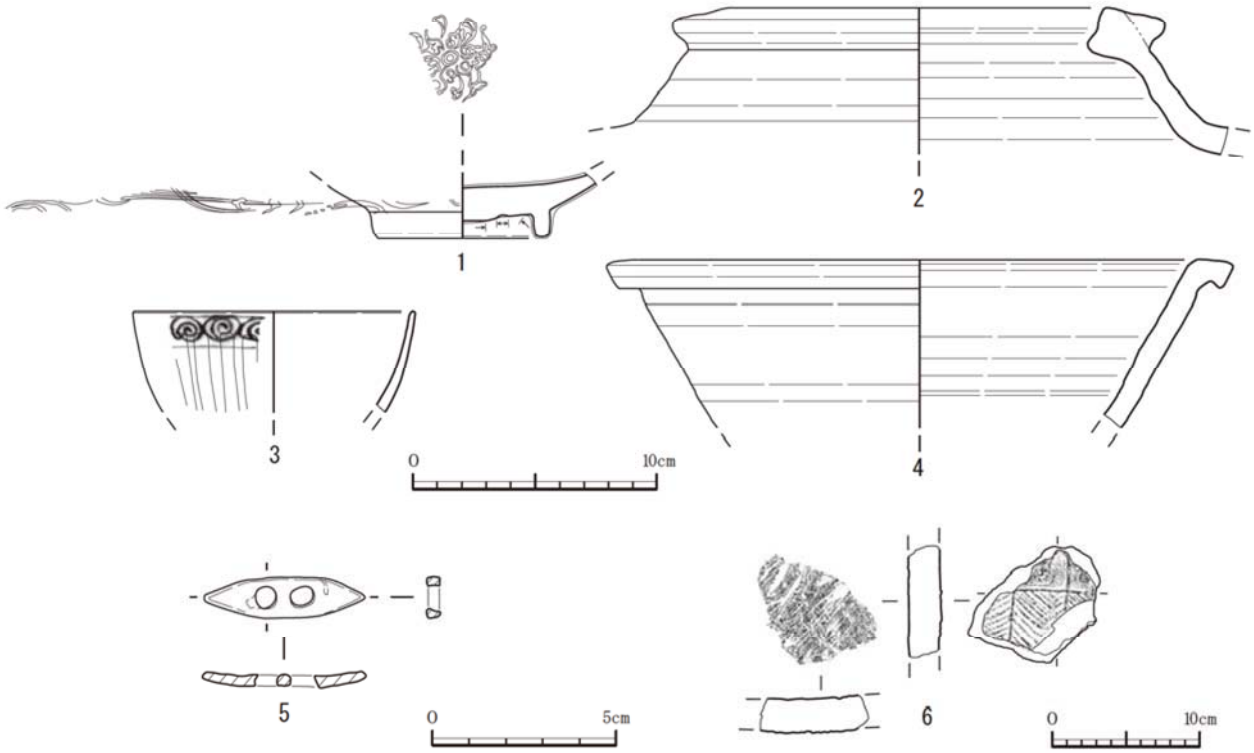
埋甕の廃絶であるが、埋甕内の上層（１層）には、埋甕上半の破片が多く見られたので、造成等による人為的な要因で削平されたものと思われる。その時期は、明治 45（1912）年３月 21 日の首里尋常高等小学校が首里城内へ校舎を落成し移転したときが最も可能性が高いと考えられる（那覇市教委 2002）。

付章　淑順門東内郭城壁石積み工事立会

平成 22 年度に国営沖縄記念公園事務所首里出張所が監督する復元整備に伴う淑順門東側において内郭城壁石積み工事が行われた。この工事範囲については、大半は平成 11 年度の御内原地区（県埋文 2010）、平成 16 年度の淑順門地区（県埋文 2006）の発掘調査が行われており、内郭城壁の面石と裏込が確認されていた。ただ、東側の約 10 ㎡については調査区の境界であったためか、その周辺では遺構が検出されたレベルより約 1 m上方に、近年の造成土ではないと思われた暗褐色礫混土が露出していた（写真 50）。そのため、首里出張所の要請により、県文化財課と当センターは遺構の有無がないかを確認するために、平成 23 年 1 月 27・28 日において立ち会いを行った。

先述した暗褐色礫混土は人力により掘削され、その作業時に立ち会った（写真 50 右）。その結果、既に周辺では遺構が検出されていたレベルまで掘削すると、琉大建設時の基礎と思われるコンクリートブロックが確認

写真 50　淑順門東内郭城壁石積み工事立会状況



第113図　淑順門東内郭城壁石積み工事立会採集遺物

された。このコンクリートブロックを除去し下層を掘削した場合は周辺の遺構に影響があると判断され、この時点で掘削が終了された。

この暗褐色礫混土からは、近現代の遺物と共に、瓦を中心に近世～グスク時代の遺物がコンテナ１箱ほど出土した。その中で、幾つか特徴的な遺物について報告する（第 113 図）。なお、出土した遺物の点数は集計表にまとめた（第 95 表）。

１は中国産青磁碗Ⅴ類。２は中国産褐釉陶器壺５類。３は本土産肥前染付碗。４は沖縄産無釉陶器鉢Ｂ類。５は青銅製品笠鋲。６は高麗系瓦羽状文１類。この詳細は、観察表にまとめた（第 96 表）。

第 95 表　淑順門東内郭城壁石積み工事立会採集遺物集計表

種類	中国産陶磁器				本土産陶磁器		沖縄産陶器						銭貨	金属製品			高麗系平瓦・灰色	近世軒丸瓦		近世丸瓦（赤色）		近世平瓦（赤色）		総計
	青磁	青花		褐釉陶器			施釉陶器					無釉陶器						灰色・内間御殿A	赤色・内間御殿A					
	碗	皿か鉢	碗	壺	蓋	碗	皿	急須	碗		不明	鉢	無文銭	青銅製品		鉄製品								
部位	底	口	胴	口	丨	口	口～底	底	口	胴	底	口		金物	銅釘	不明	筒部	瓦当	瓦当	玉縁部	端部	広端部	狭端部	
合計	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	5	1	1	1	28

第 96 表　淑順門東内郭城壁石積み工事立会採集遺物観察表

遺物No.	種類	器形	分類など	口径	底径	器高（厚さ）	観察事項（数字はcm）
1	中国産青磁	碗	Ⅴ-２・３	-	6.8	-	外底蛇の目。釉良好。外面線刻草花文。見込み印花文。
2	中国産褐釉陶器	壺	5	15.2	-	-	胎土灰白色。白色粒少量含む。釉暗オリーブ色。
3	本土産染付	碗	肥前	11.4	-	-	筒形に立ち上がり外面胴部に鎬が入る。外面口縁部に渦文（雷文の簡略化か）。1630～40年代。
4	沖縄産無釉陶器	鉢	B	23.0	-	-	外面に自然釉（器色は外面鈍黄橙色・内面明赤褐色）。胎土は明赤褐色で白色粒をわずかに含む。口縁部は外側折り曲げか。
5	青銅製品	金物	笠鋲	4.4	1.2	0.3	紡錘形でやや作りが粗い。5.9ｇ
6	高麗系瓦	平瓦（筒部）	灰色	-	-	-	厚み2.2。凸面羽状文（枠幅3.5）、「造」？、羽状文１類。凹面布目痕、コビキ痕。

参考・引用文献

新垣　力　2003「沖縄出土の清朝陶磁」『紀要沖縄埋文研究』１　沖縄県立埋蔵文化財センター

2005「沖縄における 14 世紀～ 16 世紀の中国産白磁の再整理」『紀要沖縄埋文研究』３　沖縄県立埋蔵文化財センター

石井龍太　2006 a「琉球近世瓦瓦当紋様の分類と編年試案～琉球近世瓦の研究その２～」『東京大学考古学研究室紀要』第 20 号

2006 b「琉球近世瓦の分類と編年～琉球近世瓦の研究その３～」『南島考古』第 25 号　沖縄考古学会

2007「湧田古窯の再評価－湧田古窯跡の軒丸瓦－」『南島考古』第 26 号　沖縄考古学会

2008「湧田古窯の再評価－湧田古窯跡の軒平瓦－」『南島考古』第 27 号　沖縄考古学会

2010『島瓦の考古学－琉球と瓦の物語－』新典社選書 39

上田秀雄　1982「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会

2006「龍泉ＢＹ 24 出土青磁碗と日本出土の龍泉窯系青磁碗」『前近代の東アジア海域における唐物と南蛮物

の交易とその意義』科学研究費報告書（代表小野正敏）
上原　静　1994「首里城跡西のアザナ地区出土の明朝系瓦とその推移」『南島考古』第14号　沖縄考古学会
1996「首里城跡の高麗系瓦と大和系瓦－西のアザナ地区の資料－」『紀要』第12号　沖縄県教育庁文化課
2000「沖縄諸島出土の古瓦と造瓦技術の伝播」『アジアの中の沖縄』第9回アジア史学会研究大会
2003「グスク時代」『沖縄県史　各論編2　考古』沖縄県教育委員会
2004「考古学からみた沖縄諸島の遊戯史」『グスク文化を考える』今帰仁村教育委員会・新人物往来社
2008「沖縄諸島における琉球瓦の再編年」『沖縄国際大学総合学術研究紀要』第11巻第2号　沖縄国際大学総合学術会
2010「屋瓦」『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第54集
2011「琉球の塼と煉瓦」『南島考古』第30号　沖縄考古学会
上原　静・仲宗根求・小原裕也・伊波勝美・上門大悟　2011「喜名古窯跡（瓦編）」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第35号　読谷村立歴史民俗資料館
上原　静・宮城綾乃　2007「南島考古資料録（2）グスク時代出土の鉄鏃と骨鏃」『廣友会誌』第3号　廣友会
大川　清　1962「琉球古瓦調査抄報」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会（沖縄県教育委員会1978『沖縄文化財調査報告』那覇出版社に再録）
浦添市教育委員会　1985『浦添城跡発掘調査報告書』浦添市文化財調査報告書第9集
2005『浦添ようどれⅡ　瓦溜り遺構編　－史跡浦添城跡復元整備事業に伴う発掘調査報告－』
沖縄県教育委員会　1990『阿波根古島遺跡（－那覇・糸満線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告－）』沖縄県文化財調査報告書第96集
1992『首里城跡　首里城正殿跡の遺構調査』沖縄県文化財調査報告書第107集
1995『首里城跡　南殿・北殿跡の遺構調査報告』沖縄県文化財調査報告書第120集
1998 a『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県文化財調査報告書第132集
1998 b『首里城跡　御庭跡・奉神門跡の遺構調査報告』沖縄県文化財調査報告書第133集
2008『沖縄の金工関係資料調査報告書』沖縄県史料調査シリーズ第4集　沖縄県文化財調査報告書第146集
2010『沖縄県史　各論編3　古琉球』
沖縄県立埋蔵文化財センター　2001 a『首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第1集
2001 b『天界寺跡（Ⅰ）－首里杜館地下駐車場入口親切工事に伴う緊急発掘調査－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第2集
2001 c『首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第3集
2002 a『天界寺跡（Ⅱ）－首里城公園管理新棟建設工事に伴う緊急発掘調査－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第8集
2002 b『円覚寺跡－遺構確認調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第10集
2003『首里城跡－右掖門及び周辺地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第14集
2004『首里城跡－城郭南側下地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第19集
2005 a『首里城跡－書院・鎖之間地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第28集
2005 b『首里城跡－二階殿地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第29集

2006『首里城跡－淑順門地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第33集
2007『渡地村跡－臨港道路那覇1合線整備に伴う緊急発掘調査報告－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第46集
2010『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第54集
2009『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第49集
2011『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第56集
沖縄市教育委員会　1988『越来城―個人住宅建設に伴う記録保存調査及び範囲確認調査報告書―』沖縄市文化財調査報告書第11集
小野正敏　1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第2号　日本貿易陶磁研究会
神奈川県立埋蔵文化財センター　1986『千葉地東遺跡－鎌倉県税事務所工事に伴う鎌倉市御成町所在遺跡の調査－』
亀井明徳　1983「グスク採集の輸入陶磁」『沖縄出土の中国陶磁（下）』沖縄県立博物館
亀井明徳　1993「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』第11号　上智大学
亀井明徳ほか　2002『明代前半期陶瓷器の研究－首里城京の内SK01出土品－』専修大学アジア考古学研究報告書Ⅰ
2009『元代青花白瓷研究』亜州古陶瓷学会
2010『インドネシア・トローラン遺跡発見陶瓷の研究』専修大学アジア考古学チーム
北垣聰一郎　1991「沖縄地方における伝統的石造構造物の変遷について」『橿原考古学研究所紀要考古學論攷』第15冊
金武正紀　1988「ビロースクタイプ白磁碗について」『貿易陶磁研究』第8号　日本貿易陶磁研究会
1990「沖縄の中国陶磁器」『考古学ジャーナル』No.320　ニューサイエンス社
2004「考古学からみる今帰仁城跡の歴史」『グスク文化を考える』今帰仁村教育委員会・新人物往来社
2007「今帰仁城跡と今帰仁ムラ跡の発掘調査の意義」『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ－村内遺跡発掘調査報告－』今帰仁村文化財調査報告書第24集　今帰仁村教育委員会
2010「今帰仁城跡出土の白磁研究」『坪井清足先生卒寿記念論文集－埋文行政と研究のはざまで－』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会
金城亀信　2003「首里城「京の内」跡倉庫跡出土の陶磁器について」『東洋陶磁』第32号　東洋陶磁学会
久保智康　2010『日本の美術　第533号　琉球の金工』至文堂合田芳正　1998『古代の鍵』考古学ライブラリー66　ニューサイエンス社
佐敷村教育委員会1980『佐敷グスク－佐敷グスク発掘調査報告－』
柴田圭子　2011「今帰仁城跡出土明代青花瓷の研究（1）」『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅴ』今帰仁村文化財調査報告書第29集　今帰仁村教育委員会
首里城研究グループ　1997『首里城入門　その建築と歴史』ひるぎ社
瀬戸哲也　2010「沖縄における12～16世紀の貿易陶磁－中国産陶磁を中心とした様相と組成－」『貿易陶磁研究』第30号　日本貿易陶磁研究会
瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志2007「沖縄における貿易陶磁研究－14～16世紀を中心に－」『紀要沖縄埋文研究』5　沖縄県立埋蔵文化財センター
田中克子　2003「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その三）宋・元代白磁をめぐる問題」『博多研究会誌』第11号
玉城村教育委員会　1991『糸数城跡－発掘調査報告書Ⅰ－』
知念隆博　2004「清朝銭について」『紀要沖縄埋文研究』2　沖縄県立埋蔵文化財センター
陳建中　1999『徳化民窯青花』文物出版社
当真嗣一・上原静　1987「首里城正殿跡の調査」『紀要』第4号　沖縄県教育庁文化課
當眞嗣一　1988・1990「グスクの石積について（上・下）」『文化課紀要』第5・6号　沖縄県教育庁文化課

2012『琉球グスク研究』琉球書房
永井久美男編　1994『中世の出土銭』兵庫埋蔵銭調査会
1998『近世の出土銭Ⅱ』兵庫埋蔵銭調査会
永井久美男　2002『新版　中世出土銭の分類図版』高志書院
今帰仁村教育委員会　1991『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第14集
2004『シイナグスク－範囲確認調査報告－』今帰仁村文化財調査報告書第17集
2009 a『グスク土器展～県内のグスク時代主要遺跡より～』
2009 b『シイナグスク２』今帰仁村文化財調査報告書第27集
那覇市教育委員会　1997『敷名シーマ御嶽遺跡－真地配水池建設事業に伴う緊急は靴調査報告－』那覇市文化財調査報告書第34集
1999『天界寺跡－首里城線街路改良工事事業に伴う緊急発掘調査報告－』那覇市文化財調査報告書第42集
2000『天界寺跡－首里城公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告－』那覇市文化財調査報告書第43集
2001『敷名原遺跡－敷名上間線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告－』那覇市文化財調査報告書第49集
2002『那覇市教育史　通史編』
2005『崎山御嶽遺跡－首里崎山公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－』那覇市文化財調査報告書第67集
2012『渡地村跡－臨港道路那覇１号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告－』那覇市文化財調査報告書第91集
南城市教育委員会　2006『佐敷上グスクほか範囲確認調査報告書－平成12年から平成17年度までの調査報告－』沖縄県南城市文化財調査報告書第１集
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1993『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ　北部地域北半部の調査』
広島県立歴史博物館　2005『重要文化財　広島県草戸千軒町遺跡出土品　指定目録』草戸千軒町遺跡調査研究報告７
福建博物館　1997『漳州窯－福建漳州地区明清窯址調査発掘報告之一』福建人民社
宮城弘樹・具志堅亮　2007「中世並行期における南西諸島の在地土器の様相」『廣友会誌』第３号
向井　亙　2003「タイ黒褐釉四耳壷の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.23　日本貿易陶磁研究会
2012「タイ陶磁器の編年研究」『金沢大学　文化資源学研究』第５号
森　毅　1995「十六・十七世紀における陶磁器の様相とその流通－大坂の資料を中心に－」『ヒストリア』第149号
2005「中世後期輸入陶磁器の分類と変化」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』資料集第３分冊
森田　勉　1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会
森本朝子　1993「ベトナムの貿易陶磁」『上智アジア学』第11号　上智大学アジア文化研究所
2005「博多出土の朝鮮陶磁」『高麗美術館　館報』66号
矢島律子　1998「ベトナム青花の変遷　－文様を中心に－」『東洋陶磁』第28号 東洋陶磁学会
山崎信二　2000「沖縄における瓦生産」『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報　第59冊
山岸素夫・宮崎眞澄　1997『日本甲冑の基礎知識』雄山閣
吉岡康暢　2012「14・15世紀中国陶磁編年の論点－琉球出土陶磁を中心に－」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会
吉岡康暢・門上秀叡　2011「朝鮮・東南アジアの陶磁器と茶陶・擂鉢」『琉球出土陶磁社会史研究』真陽社
尹龍二　1998『韓国陶瓷史の研究』淡交社